Freedom/Story

kuxu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆｒｅｅｄｏｍ／Ｓｔｏｒｙ

【Ｎコード】
Ｎ１９６０Ｓ

【作者名】
ｋｕｘｕ

【あらすじ】
東京の隅っこにある田舎近い下町、【東皆丘町】その町中に経っているアパート【自由荘】の大家を勤めている少年、主人公の優輝晃。
性格はやさしく、鈍感の草食男子である。
彼は7年ぶりのこの地に帰ってきた。
そんな彼を取り巻くさまざまな美少女たち。との甘く、ニヤニヤな生活。
ちょっぴりファンタジー色の王道学園ハーレムラブコメディ。

そして、いま晃たちは2年になり、ヒロイン上量、さらにはラブコメ増量！！

全ての始まりは短編【Ｐａｓｔ／Ｓｉｘｔｈ】から始まった。

合言葉は「自由に行きましょう！！」

第1話　話の始まり（前書き）

東京の下町にある東皆丘。そこのアパート―自由壮―で暮らす４人の幼馴染と主人公、優輝晃と１人の義妹は―東の丘学園―の生徒。話の始まりは短編小説のＰａｓｔ／Ｓｉｘｔｈの７年後の世界。晃が帰ってきたことから始まる。基本コメディときどきファンタジー＆バトル。

第1話　話の始まり

東京の隅っこにある下町、―東皆丘(ひがしみなおか)―その最寄り駅で一台の電車が止まった。降りてきたのは1人の少年だけで彼以外その駅には誰もいなかった。

（この感じ、久しぶりです）

その少年は歳は16歳ぐらいの白い髪、赤目、右手首には黒いリストバンドをはめており、左手首には白い石が付いている腕輪を付け、ズボンの左側にベルトを通すところに十字架のストラップが付いていた。

少年の名前は優輝晃(ゆうきあきら)。

彼は7年前までここに暮らしていたがある理由でここを離れることとなってしまった。今回もある事情でここに戻ってくることとなった。いや、今回来たのは彼の意思であった。

晃が前に住んでいたのは同じ東京の学園都市。ここは違う大都会にいた。

学園都市の生活に慣れてしまっているけれども、その前に住んでいることと、持ち前の器用さでカバーする気だ。

（まるでまったく変わっていませんね）

晃は沢山の鞄を持ち、旅行用の鞄を引きならが進んだ。

晃の気持ちはいま昔に遊んでいた幼馴染達に会えることをとても楽しみにしていた。

（みんな元気にしていますかね）

※

同じく場所は東皆丘。

そこに建っている学園、―東の丘学園(ひがしのおかがくえん)―。ここ下町でたった1つの学園である。しかしその学園は周りが下町だと忘れてしまうほどきれいで、地元でもない人のほうが沢山通っている。
今は昼休みだった。
1年1組である2人の少女が話していた。

「ねえねえゆーちゃん。お昼どこに食べる?」

赤髪でリボンを使ってショートのポニーテールの少女が話していた。
少女の名前は一之瀬(いちのせ)美紀(みき)。身長157センチ。

「う~んそうね。普通にここでいいじゃない」

もう一人の少女は髪は青色のストレートのロングで左前髪に星型のヘアピンをつけている。
名前は羽衣結衣(はごろもゆい)。身長160センチ。
そのとき教室のドアが開いた。

「やあ、昼ごはん食べに来たよ」

入ってきたのは金髪のふわふわしたロングで小柄の体系をしている少女だった。名前は優輝真(ゆうきまこと)。身長154センチ。

「右に同じく」

もう一人入ってきたのは紫色の髪でポニーテールにしている。名前は朧今宵(おぼろこよい)。身長162センチ。

「さらに右に同じく」

もう一人は金髪のすこしイケメンの男子だ。名前は水戸透（みちとおる）。身長１７５センチ。

「あんたは別に来なくていいよ」

真が透が入ってくるのを阻止しようとドアで透を挟んだ。

「痛い、痛い。おい、今宵助けてくれ」

透は今宵に助けを求めた。

「まこちゃん。もっとやってくれ」

しかし今宵は透の助けを拒否し、むしろもっとやってくれと真に頼んだ。

５人は昔からの幼馴染でアパート、―自由荘（じゆうそう）―で暮らしている人だ。

「てかなんで透が呼んでいないのにくるのよ。しかも毎日」

結衣が言った。

「うるさい。じゃあお前ら、いまここに晃がいたらどうする」

透は４人に聞いてきた。

「あきにいは私の兄だからセーフ」

と、真。

「アキ君をあんたと一緒にしないで」

と、結衣。

「アッキーがいたらそりゃもう楽しいしか言いようが無いよね」

と、美紀。

「晃はお前と違い変態じゃないだろ」

と、今宵がそれぞれ言い張った。

「俺の扱いひどくね」

透が泣きそうに言った。

「普段の行いが悪いからだ」

今宵がパンを机に置きながら言った。

「そうゆうお前らも家では俺のことは言えないじゃんかよ」

透は言い終わる前に3人からパンチを食らった。

「とっちゃん大丈夫？」

美紀は心配してくれたかのように見えたが態度はまったく心配してない。

しかし生活に問題があるのは確かだ。

この5人は東の丘学園で1学年30人しか入学できない特待生なのだ。

東の丘学園の特待生はすべて実技能力がすばらしい人なのである。

授業時間は1週間に3日の5、6時間目で行われる。また全学年合同だ。
特待生であればテストがある程度できなくっても補修には呼ばれないし、特別待遇も用意されている。しかも数少ないので学校のアイドル的存在でもある。
ちなみに全学年6クラスの（1クラス30人）である。
しかもこの5人は特待生の中でもさらに学園の有名人である。詳しい話はまた後ほど。

※

放課後。今日は全員部活が無い日なので全員で帰ろうとしていた。

「透は離れて歩いてよ」

やっぱり透の扱いはひどいものであった。それもそのはず彼のせいでもっと早く帰宅できるところを無駄に時間を取られてしまったからだ。

「まったく最低なギャル男だな」

今宵が言った。

「ギャル男じゃねえよ」

遠いところから透は叫んだ。
こんな風に透をいじりながらアパート、―自由壮―へ付いた。

「よし、ゲームだゲーム」

美紀が喜びながら言った。

「美紀今度こそ勝つからね」

格闘ゲームで美紀ｖｓ結衣。ただいま美紀全勝中。
こんなことを言っているまに真は優輝家の鍵を開けた。
ところがどっこい。なんか部屋がきれいになっていた。

「わ～きれいになっているね。まこちゃん。いつのまに掃除したの？」

美紀が不思議そうに言った。

「いや、私掃除なんかしていないよ」

真は拒否した。

「じゃあ誰がやったんだよ」

透がそう言った後、ドアが開く音がした。

「あれみんな帰ってきたのですか」

入ってきたのは白髪の冷静そうな青年だった。手にはスーパーの袋を持っていた。

「「「「「誰？」」」」」

全員ハモッた。

「お前誰だ。不法侵入者か！？」

真が指を差しながら言った。

「いま警察に連絡するぞ」

今宵がそう言ったとき、彼はさすがにやばいと思った。

「ま、まってくださいよ。僕です。優輝晃です」

――・・・・・

「「「「「へ！？」」」」」

5人とも動きが止まった。

「ほらこの腕輪が証拠です」

晃は左手首に付いている白い石の腕輪をみんなに見せた。
それをみた5人は自分の左手首についている腕輪を見た。デザインは変わっているがなにやら懐かしい感じがする。

――・・・・・

また沈黙。

「信用していませんね」

晃は目を細くして言った。

「「「「「うん」」」」」

「口をそろえて言わないで、なんか悔しい」

そう言った後晃は自分が持っていた鞄の中からあるものを出した。
出したものはそれは7年前みんなが書いてくれた色紙だった。

――!?

さすがにこれにはびっくりした。

「白の腕輪にこの色紙」
「まさか本当にアッキーなの?」

結衣と美紀が言葉を繋げた。

「はい!その呼び方も久々ですね美紀」

このとき全員の考えが一致した。

――ものすごいビフォー・アフター!!

「あ、あきにいいくらなんでも変わりすぎでしょ」
「まあ、いろいろあってこんなのになりました」
「でもこれから晃はどうするのだ」

今宵が恐る恐る聞いてみた。

「僕はこれからまたここで暮らしますよ」

晃は笑顔で言った。

「本当アキ君。うれしい」

結衣は晃に飛びついた。

「またあきにいのご飯が食べれるの？」

「ええ。そのために買い物に行って来ましたし、掃除もやっておきました」

「なんかいろいろすごくなっているなお前」

※

夜。今回は晃が作った料理をみんなで食べた。

「なんか感動だな～」

美紀が食べながら言った。

「み、美紀どうかしましたか？」

「いや～なんか久々にアッキ～の料理を食べて感動したんだよ」

「それはどうも」

「いままではみんなで作っていたが失敗もあって近所のみんなに協力してもらっていたこともあった」

今宵がしみじみに言った。

「あれ？料理作れる人はいないのですか？」

「私と美紀は作れるけど、さすがにそんなに上達しなかったよ」

結衣が説明した。

「まあ、親も帰ってくるときもあったからな。あの件いらい結構親が来ることが増えた」

透も説明した。

「まあいまは高校生なので作れるようにならなきゃだめですよ。まあこれから僕が作っていきますけど」

「うんありがとうアキ君☆」

「そういえばアッキーはこれからどうするの？」

美紀が聞いてきた。

「僕は一様東の丘学園へ行きますよ。手続きは終わっているので明日から登校できます」

「じゃあ明日一緒に行こうよ」

「ごめんなさい。僕明日だけ早く学校へ行きますので。でもそれ以降はオッケーですよ」

（もうさすがに僕が起こさなくたってみんなちゃんと起きれるでしょう）

「朝ごはんは置いていますので」

「うん」

「晃学園都市はどうだった。お前がこう変わったんだ。なにかすごいことでもあったのか」

今宵が話を変えてきた。

「そうですね。まあいろいろ技術は学んできましたよ」

「へえ～なにを学んできたの？」

結衣が聞いてきた。

「おかわり！」

同時に真がおかわりを頼んできたので晃はよそいながら答えた。

「それはお楽しみです」

えーーーーーーーーーーーー。

夜のアパートに楽しい叫びが響き渡った。

※

深夜。晃は自分の部屋のベットで横になってきた。

（さあ、明日が楽しみです）

あたらしい学校でどんな生活があるのか。晃はそれを楽しみにしながら眠りについた。

第1話おわり。続く

第1話　話の始まり（後書き）

始めましてｋｕｘｕです。
Ｆｒｅｅｄｏｍ／Ｓｔｏｒｙとうとう連載始めました。
皆さんが楽しんでくれると幸いです。
さて次回は晃が転校してくるお話です。
それではまた会いましょう。

第2話　転校初日（前書き）

あらすじ

東皆丘に7年ぶりに帰って来た主人公優輝晃。

かれはこれからどんな生活を送るのだろうか。

第2話　転校初日

朝。８時近く。アパート―自由壮―ではただいま1人を除いて熟睡中。しかももうすぐ登校時間だ。
２号室に住んでいる少女、羽衣結衣は起き出した。そして時計を見た。

――・・・

寝ぼけていたのかすこし思考能力が遅くなっている。

「あああああああああああああああああ！！」

やっと気づき始めた結衣であった。

※

朝。５人は東皆丘にあるたった1つの学園東の丘学園に走って向かっていた。

「ゆーちゃんのおかげで遅刻しないですむかもね」

美紀が走りながら言った。

「でも走らなきゃ間に合わないぞ」

透はもう息を切らしていた。

「男がもう息切れしない！！」

真は透の背中を叩いた。

「イタッ！！」

「そういえば晃はどうした？」

今宵が透を無視しながら言った。

「あきにいは早く出るっていってたからもう学園に居るよ」

「なんであいつは起こしてくれないんだよ」

「たぶんアッキーはもう私達がちゃんと起きれると思ったからじゃないの？」

美紀が人差し指を突きたてながら言った。

「ありがたいやらありがたくないのやら」

「むしろありがた迷惑」

結衣と今宵はため息をついた。

「セーフ！！」

※

5人とも遅刻しないでちゃんと学園へ付いた。

1年1組。ここは美紀と結衣のクラスだ。しかし後ろにはみしれぬ机が1つあった。

「あ、おはよー2人とも。ねぇ今日転校生が来るって知ってる。し

かも2人も」
「え?でも机は1つしかないわよ」
結衣が机に指を差した。
「それは2組のほうに1人転校生が来るわけで合計2人になるというわけさ」
クラスの男子が言った。
「じゃあアッキーが来るのは2組だという可能性もあるわけか」
美紀がボソッと言った。その言葉にみんないろんな意味でびっくりした。とくに結衣のみ違う意味で驚いていた。
(ふざけんなよ。さっそくアキ君と一緒のクラスになれると思ったのによ)
結衣裏モード発動。そんな結衣はともかく美紀の言葉でクラスのほとんどが美紀の周りに集まった。
「え!転校生と知り合いなの?」
「そうだとしたらどんなやつだよ」
美紀は自信気に言った。
「それは会ってからのお楽しみ。もしかしたら違うクラスになっちゃうかもね」
(それだけはやめてー)

結衣は心の中で叫んだ。

「おい全員席に着け」

教室の前のドアから先生が入ってきた。

「えーみんな知っていると思うが今日はこのクラスに転校生がきた。おい入って来い」

教室に入ったのは晃だった。しかし制服はこの学園とはちがう。この学園の制服は長袖のYシャツに男子は青のベスト女子は赤のベストを着ている。ネクタイは男子は青で女子は赤。簡単にいえば今は春秋服だ。

しかし晃が着ているのは白のYシャツで袖は黒の線が少し入っている。ベストは紺で赤の線が入っているやつだ。ネクタイは赤と黒のしましま。

「じゃあ前にいた場所か学校、それと自己紹介しろ」

「はい。始めまして。科学都市から来ました優輝晃といいます。みなさんこれからよろしくお願いします」

「か、科学都市！？」

クラス全員が驚いた。しかし美紀は晃をみて微笑んでおり、結衣は。

（やったーアキ君と同じクラス♪）

心の中で叫んでいた。

「じゃあ優輝の席は一番後ろだな」

「はい」

そう言った後、晃は自分の席に着いた。

「じゃあ授業始めるぞ」

※

1時間目の授業が終わったときクラスのほとんどの人が晃の席へ向かった。でも1番に話しかけてきたのは晃の前の席の美紀だった。

「とゆうわけでこれからもよろしくねアッキー」

「え、これが一之瀬さんのお知り合い？」

クラスの女子が話しかけてきた。

「そうだよいーちゃん。私の幼馴染だよ」

「へ～そうなんだ。あ、私は小方伊織(おがたいおり)よろしくね。優輝君」

「あの～1つよろしいでしょうか」

一人の女子が話しかけてきた。

「なんですか？」

「優輝君の今着ている制服ってもしかしたら私立星道高校の制服？科学都市に住んでいたって言ってたから」

「えぇえええええええええええ！！」

クラスの人とゆうか晃の周りに集まっていた人が全員驚いていた。

「それ本当？優輝君」

結衣が晃に聞いてきた。

「ええ。そうです。と、ゆうか結衣。なんだそのよそよそしい呼び方は」

「うっ！」

痛いところを言われた結衣。そこで美紀が止めを刺した。

「そうだよゆーちゃん。ゆーちゃんも同じ幼馴染なんだからさ」

「そうですよ。いつもの呼び方でいいですよ」

「えぇえええええええええええ」

またクラスの人―以下同文。

「じゃあそうするねアキ君☆」

結衣がそういったとき何人もの男子からなにやら落ちた音がした。

結衣は心で。

（やったー。とりあえず第1関門クリア！！）

顔はやさしく笑っているが心はすこし小悪魔みたいに笑っていた。

「じゃあアキ君。私が今から校内を案内するね」

そういいながら結衣は晃の腕につかまり立ってそのまま引っ張りながら教室を出た。

「いいですよ。結衣もう時間が無い」

晃はそういいながら困った顔をしていた。

（いやよ。昼休みまでまっていたらほかの子に案内させられちゃうじゃない。それがたとえ美紀だとしても断固断るわ）

結衣は心の中で強い決心をした。

小さい頃から結衣は晃に片思いをしていた。それが離れ離れでも晃のことをずっと好意を持っていた。そして今はその晃がいる。これは絶好のチャンス。性格は少し変わっていたけどやさしさは今までよりパワーアップしたみたいで逆に彼女は惚れてしまっていた。ぶっちゃけ彼女は中学から結構モテてる。しかしこのことをずっと夢だった再会をずっと待ち続けながらいろんな男の告白を断ってきた。

（こんどこそアキ君をおとしてみせるから」

結衣は心の中で魔女みたいな笑い声をした。

※

昼休み。1年1組の教室に幼馴染3人がやってきた。

「おーやっぱり晃はこのクラスか」

「おきにいお昼食べよー」

「おっす晃」

3人は晃の机に向かってきた。

「あら3人も幼馴染なの？」

伊織が美紀の隣の机で弁当を食べながら聞いてきた。

「うんそうだよ。でもアッキーとまーちゃんは兄妹だけどね」
「あ、そうかこちらも苗字が優輝だったわね。しかしすごいね優輝君。特待生5人の有名人と幼馴染なんて」
「特待生？」
晃は今が分からず聞いてみた。
「うん。特待生のことは知っているよね」
伊織は話を続けた。
「ええ。それはでも有名人て？」
「それは5人は特待生の中の特待生みたいな感じなの」
「つまりわたしら5人はエリートなのだよアッキー」
美紀は腕組をしながら鼻を高くするようにフフッンと笑った。
「自分で言うな」
「まるでわたし達はポケ〇ンの四天王みたいな存在なのさ」
美紀がまた威張りながら言った。
「言い直さないで結構。しかも一人多いですよ」
晃は静かにツッコンだ。
「ついでにわたしがチャンピョンだ」
「もういいですよ」
「そういえば優輝君は星道高校での成績はどうだったの？」

「あ、それ私も聞きたい」

伊織の言葉に結衣も反応した。

「そういえば星道高校はものすごく頭がいいとここでもすごい評判だぞ」

今宵が解説した。

それを聞いたクラスのほとんどの人が晃のほうを目を輝かせながら見ていた。

（これいわなきゃだめな空気ですよね）

晃は一回深呼吸した。そして口を開いた。

「一様いままでの大きなテストでは学年3位以内には入ってましたね」

――・・・・・・

全員絶句。

「あ、正しくは1位は数学しか取ったことがありませんね」

――1位取ったことあるのかよ！

全員心の中でツッコンだ。

「あれ？どうかした？」

「い、いや。アッキーここの編入試験どうだった？」
「簡単でした」
そういいながら晃は食べ終わった弁当箱を片づけ始めた。

※

帰り道。晃と美紀と結衣と透は一緒に帰っていた。ついでに真と今宵は部活だ。
「いや～ビックリしたよアッキーが頭よくなっていたから」
美紀が話題を出した。
「がんばったとゆうかあそこではほとんど勉強の時間が多かったですからね」
「昔は俺といい勝負だったのにいきなり抜かされた気分」
「気分じゃなくてもう負けているじゃないの」
「ひどっ」
「僕はみんなが特待生だったことに驚きでしたよ」
「へへ。すごいでしょ」
結衣はわざとらしく照れた。
「でもまあ俺にとって特待生のほうが楽だったな」
透の言葉に対して結衣はいきなり透を殴った。
（察しなさいよバカ）
「どう学校にはなじめそう？」

「大丈夫でしょ。特待生の幼馴染のおかげでその心配はなくなりました」

晃にとって幼馴染だけでいいと思っていたが特待生と一緒ならばいろんな人と出会いそう。晃はそう思っていた。

晃は楽しみですこし笑った。

第2話終わり。続く。

第2話　転校初日（後書き）

こんにちはｋｕｘｕです。
今回は物語の第2中心部の学校の話を作りました。
そして彼女達がどんな教科の特待生なのかは後日伝えたいと思います。
ではまた会いましょう。

第3話　朝（前書き）

あらすじ
晃は東の丘学園に1年1組に転校してきた。
転校初日でも美紀と結衣のおかげでいろんな人と話が出来た。
それから次の日とうとうあの人たちの朝の生活が表される。

第3話　朝

朝。7時過ぎ。優輝晃は家で朝ご飯を作っていた。
2階には真がまだ寝ている。学校は8時半までに登校すれば遅刻にはならない。しかし時計は7時10分に示そうとしている。家から学校まで徒歩15分。最低でも8時15分に出れば間に合うがそんなギリギリであまり学校には行きたくない。10分ぐらい余裕はほしい。
それから20分経ち7時半そろそろ起きたほうがいい時間帯なのに誰も起きてこない。
晃は階段に向かって叫んだ。

「おーい真。そろそろ起きなさい」

しかし返事は無かった。
そしていまだに誰もこっちには来ていない。みんな自分で朝御飯作れば問題ないのだが外にはおっさんしか見当たらない。
心配になってきた晃は美紀に電話をかけてみた。

『ふあい。もしぃもしぃ。ふぁ～』

明らかにいま起きたようにしか見えない声があった。

「おはようございます。美紀いまだに寝ていたでしょ」
『そ、その声はアッキー？』

――今頃気づいたか。

晃は呆れながら続けた。

「もう7時半過ぎです。これ以上起きないとゆうなら僕が起こしに行きますよ」
『はぁ～い今起こされたから大丈夫だよ』
「2度寝しないでくださいね」
しかしもう遅かった。
『ふぁ～ｚｚｚ』
「寝るなー！！」
しかし晃のツッコミは美紀の耳には届かなかった。
――しかたありませんね。
晃は2階に向かって叫んだ。
「真、朝ご飯出来ていますよ」
そう言ったとたん2階からなにやら音が聞こえた。2秒後真が寝間着姿で下りて来た。ご飯のこととなると行動が早いのは昔から一緒らしい。
晃は真が起きたのを確認した後家を出て隣のアパートへ向かった。
晃は合鍵を使って美紀の部屋へ入った。
「み～き～。起きなさい」
「おわっ！！アッキー。勝手に乙女の部屋に入ってくるなんて何事かね」
「布団に入りながら言わない！！」

美紀は顔は驚いていたが姿は寝間着で体は布団の中に入っていた。

「いいから起きる！」

晃は布団を取った。美紀は寝間着姿はすこし乱れていたが晃には関係なかった。

「僕の家で朝ご飯出来ていますから食べておいてくださいね。今からほかに寝ている人を起こしに行きますから」

「はーい」

晃はそう言ったあと隣の結衣の部屋へ入って行った。

結衣は布団にかぶりながら気持ちよさそうに寝ていた。すこし起こすのは可哀想だが学校に遅れるのは問題外。晃は結衣の耳元でささやいた。

「おはようございます」

「ん。なんかアキ君の声が聞こえる・・・え！？アキ君！？」

やっと気づいたらしく結衣はいきなり起き上がった。

「やっと起きましたが」

「あれ？アキ君なんでここにいるの！？」

「起こしに来ました。しかしあいからわずこの起こし方は結衣には本当に効果的ですね」

結衣の格好は第2ボタンまで開いており胸元が見えるが晃はそんなことは関係なかった。

「朝ご飯食べてきてくださいね」

そう言いつつ晃は部屋を出た。結衣の顔が赤くなっていたのは晃は気づかなかった。

※

――・・・・・

ただいま晃は2階の3号室にいるがそこには壁に余暇かっている今宵の姿があった。この姿はまるで2度寝しているらしい。晃は肩を持って揺さぶりながら言った。

「おーい。今宵朝だぞ～起きなさい」
「ん・・・あ、晃。」
「やっと起きましたか」
「なんだ晃。不法侵入か？」
「ちがう。もうこんな時間になっても起きないから起こしに来ました」
「それはごくろぅ。ｚｚｚ」
「だから寝るなー」

※

優輝家。やっと全員起こしたのでみんな朝ご飯を食べていた。ついでに透は腹を蹴ってすぐに起こすことが出来た。ある意味1番簡単に起こせた。
時間は8時10分。何とか間に合いそうだ。

「じゃあ行きましょうか」

こうして全員学校に向かった。晃はあいからわず違う学校の制服を着ている。

「そういえばみなさん。あれから7年も経つのにあいからわず朝が弱いですね」

「だからってアッキー。起こしに来ることは無いんじゃないの」

「いいえだめです。直るまで僕は起こしに行きますからね」

「俺の場合毎日腹を踏まれるわけかよ」

「起きない自分が悪い」

「今宵。2度寝した人が言っても説得力がありません」

(じゃあ毎日あんな風にアキ君に起こされるの?ある意味しあわせかも)

こんな会話をしているうちに東の丘学園へ着いた。

校門前では時間だから登校する生徒が多い。校門前に来たときさすがは特待生話しかけてくる生徒が後をたたない。しかも結衣に対しては男子も話しかけてくることは多い。

――本当に真が言ったようにアイドル的な存在なんですね結衣は。

昨日晃は真に学校のいろんなことを教えてもらった。

「おはよう羽衣さん」

「おはよう」

周りの人のあいさつにキチンと結衣は返していた。それは男子も同じだった。

「お、おはよう羽衣さん」

「うん。おはよう」

挨拶が帰ってきた男子どもの顔はなんか幸せそうな顔をしていた。
それ以外にも晃以外ほかの友達と話しながら校舎に向かって行った。

（僕も行きますか）

晃も校舎に向かった。
しかし歩いているとやっぱり制服が目立つらしく周りからひそひそ声が聞こえた。

「ねえあの人だけなんか制服が違うね」
「あの人なんか星道高校から転校してきたらしいわよ。制服もそうだし」
「へ～なんかすごいね」

こんな声が聞こえたが晃は無視していた。

「お、おはよう優輝」

急に晃に1人の生徒が話しかけてきた。彼はたしか晃と同じクラスの生徒だった。

「おはようございます。君は確か小松君でしたよね」
「お、覚えてくれたんだな。そのとおり俺の名前は小松大吾だ。大吾でいいぜよろしくな晃」
「ええ。こちらこそよろしくです」
「で、なんだ友達はできたか？」
「君が初めてですよ。友達と言ってももう幼馴染が４人もいるわけですし」
「そうかいいなぁ～羽衣さんと幼馴染なんて」

「はあ」

会話をしているうちに2人は自分のクラスへ入って行った。

「おはよう。優輝君。小松君」
「おはようございます」
「おはようアキ君」
「おはようって、結衣はさっき会ったばかりでしょうが」
「あ、おはよう小松君」
「あ、ああ。おはよう」

結衣に挨拶が出来た大吾はなんかうれしそうだった。そのあとすぐに大吾は言い張った。

「やっと羽衣さんに挨拶ができたぜ。俺なんかすごくうれしい」
「そ、それはよかったですね」
「きめた。今度からお前と一緒に教室に入る」
「好きにしてください」

晃は呆れながら自分の席に座った。そのあとすぐに美紀が話しかけてきた。

「お、アッキー今日の放課後開いている?」
「いいえ。別に」
「じゃあ早速だからみんなで町を案内しようか?久々の町を」
「へえ。いいですよ」
「俺もいいかな?」
「あ、マッツー居たんだ」

美紀が驚いた顔で言った。

「僕はいいですよ。じゃあ今日の放課後で」
「うん」
こうして転校2日目新しい友達ができ、さらに予定も埋まった。

第3話終わり。続く。

第3話　朝（後書き）

新コーナ・特別トーク

美紀「とゆうわけで今回から始まりました。特別トーク。今日はわたし、美紀が担当します。このコーナーでは本文にかかわったトークをＦｒｅｅｄｏｍ／Ｓｔｏｒｙのキャラクター2，3人が話をするコーナーです。今回はわたしだけなんで説明で終わりにします。次は誰が出てくれるのかな。お楽しみに」

第４話　町案内（前書き）

あらすじ
朝の生活がまったく変わっていないことに気づいた晃。
学校では今日の放課後、町を案内してくれる話があった。

第４話　町案内

放課後。
美紀が言い出した晃の町案内に行くには、晃、美紀、結衣、真、今宵、透と大吾に伊織が行くこととなった。

「そういえば真と今宵は部活は大丈夫ですか？」
「大丈夫。ちゃんと話はしておいた」

晃が聞くと今宵はそう言ってきた。

「私のほうは元々今日は休みだから問題は無いわ」

真も言った。ついでに真は卓球部、今宵は美術部に入っているらしい。

「じゃあ行こうか」

美紀を先頭にして一同は歩き始めた。

※

「ここは商店街だよ」
「ええ。ここはもう慣れました。買い物にもこの前行きましたし」
「おややっぱりその子は晃ちゃんだったかい」

薬局の店からある女の人が出てきた。この人は羽衣笛（はごろもふえ）つまり結衣の従姉だ。ちなみにときどき結衣の部屋で泊まりに来ることがあった。いまは実家の薬局を手伝っているらしい。

「笛おねえちゃん。大学はどうしたの？」
「ふふ。聞かないでよ結衣ちゃん」
「聞かないでって半年連絡無いから心配したのよ」
「どうかしましたか？」
晃が心配そうに聞いてきた。

「笛おねえちゃん大学受けようとして違うところで勉強していたらしいの」
「つまりここにいることはまた大学に落ちた」
今宵がサラッと言った。
あとで話を聞いたところによると今年で2回目らしい。

「そういえば今宵の親はどうしてますか？」
今宵の親は両親住み込みの仕事をしているのでめったに家には帰ってこない。

「うん。晃がいないときは時々ご飯を作ったりしてくれたからちゃんとあっている」
美紀の親はいろんな国を旅している。連絡も手紙で時々届く。結衣の親はフランスで働いている。連絡も定期的にしている。透の親は有名デザイナーとして日本中を移動しているために滅多に帰ってこない。しかいそれでも必ず全員親とは話しており晃と真以外はちゃんとした家族がいる。でも全員滅多に帰ってこないので友達であった優輝夫妻に預けさせたのだ。晃がいないときは今宵の親が大量の保存食を作ってくれたために食事には困らなかった。

「さて次は駅前だね」
美紀が言った。
「でも美紀。僕は電車でここまで来たのですから駅前の紹介はいらないと思います」
「え？なんで」
「簡単に言えば僕が前にいたところはここよりも駅は大きいですし、沢山の店が並んでいて最初は迷いそうになりました」
「か、科学都市ってすごいね」
「いえ、都会のほうでは普通のことですけどね」
「まあここは下町といっても田舎と言ってもしかたないところだからね」
「僕はそれよりもいないうちに新しくなった店とか場所などを教えてほしいですね」
晃が謝りながら言った。
「ねえ美紀ちゃん。あそこならあきにいも行ったこと無いのじゃないの」
「お、いいねまーちゃん」
※
晃達は商店街のはずれの喫茶店にきた。
「たしかにここは見たことありませんね」
「じゃあ入ってみようかアキ君」
「ええ」

晃達は中へ入って行った。

「いらっしょーい。あら美紀ちゃん達じゃないの。あらその子は誰かしら」

中に入ったら黒髪で後ろの髪を束ねている歳は２０歳ぐらいのお姉さんが出迎えてくれた。

「どうもはじめまして。優輝晃といいます」

「はじめまして。私は織由佳（しきゆうか）。由佳でいいわ。話は美紀ちゃん達から良く聞いているわよ晃君」

「はあ。で、みんなはなんて言ってましたか？」

晃は興味を持ったのか聞いてみた。

「う～ん活発的な少年だと聞いいたけど、なんか思いっきり冷静なタイプね」

「昔ならそれは合っていましたよ」

「あらそうなの」

「アキ君ここは町でも有名な喫茶店なのよ。私達も時々バイトしているの」

結衣は２人が仲良くなっているのを見ていられずに口を挟んだ。

「そうだ。晃もここでバイトしてみてはどうだ？」

今宵が聞いてきた。

「それはいいわね。晃君が良かったらすぐに採用するわよ」

「じゃあお願いします」

晃はすぐに答えをだした。晃はここで少しでも稼いで生活の足しにでもしようと考えたのだ。そう思えば今回はラッキーだったのかもしれない。

「そういえば2人はバイトしているのですか？」

晃は伊織と大吾に聞いてみた。

「俺はやっているぞ。残念ながらここじゃないけど」
「私もみんなが知らないバイトをしているわ」
「危ない系のバイトじゃありませんよね」
「うん。ちがうから」

なんかこの人大丈夫かな。晃達はそう思いながら店を出た。

「じゃあ。次は神社にいこう」
「神社？そこはたしか昔工事していた場所ですね」
「うん。アキ君が離れて2年後に修理が完成したの」
「はあ。どんな風になったのか楽しみです」
「ねえアッキー神社まで競争しよう」

美紀はいきなり提案してきた。

「ついでにみんなと」
「え、でも・・・」
「ヨーイドン」
「はや！！」

一瞬でみんな走り出してしまった。しょうがないため晃も走ることにした。

※

ただいまのトップは晃と美紀。そしてそれを追うのが2番手結衣が追っている。

「ぜったいにアキ君と一緒にゴールしてみせる」

晃と一緒に着けば一緒に居られる時間があるはず。そのためにがんばって結衣は走っていた。でもそれはいろいろ無理があるがそんなことは気にしないのが恋する乙女の根性と情熱かもしれない。てか、なんだそれ。

「はぁはぁやっと着きました」

場面は変わって、晃は美紀を簡単に抜き去り神社の入り口に着いていた。その神社は階段は少なく低い。たぶんお年寄りのことを気遣って設計されたのかそれともただの偶然なのかは誰も知らない。

「はぁはぁ」

結構長い距離を走り続けたので息が上がっている。落ち着いたところで顔を上げてみたらそこには1人の少女がいた。髪は黒のロングでさらさらな髪をしていた後ろに大きいリボンで軽く結んでいる。格好は東の丘学園に制服だ。制服の左胸についている学年バッチで同学年だと分かった。

ついでに学年を見分ける色、学年色はただいま1年は黄色、2年は赤色、3年は青色だ。学年が変わっていくとこに色も変わっていく。

晃も制服は違うが学年バッチはちゃんと本校のものを使っている。

「こ、こんにちは」

「こ、こんにちは」

晃は一様挨拶はした。そしたら彼女も挨拶を返してくれた。

（鞄を持っていることはここに住んでいる人なんですかね）

晃は悩んでもしょうがないと思い聞いてみた。

「この神社でお住まいの方ですか？」

「い、いいえ。わ、わたしはここに住んでいるおばあさんに用がありまして」

「そ、そうですか」

会話終了。

しかし彼女も決してこの場から離れようとしなかった。晃のことをずっと見ていた。１０秒ぐらい２人は見詰め合っていた。しかしこの１０秒はものすごく長く感じた。

その間。後ろからある人物が走ってきた。結衣だ。

「はぁはぁ。やっと追いついた！？」

結衣は目線を晃に向けた。が、晃は見知らぬ女の子と見詰め合っていた。ついでに晃は結衣が着いたことにまったく気づいていない。

「アッキーなにしているの？」

後ろから美紀の声が聞こえた（ついでに結衣の叫び声も）ので振り

向いていた。

「あれその子は誰？」

「は、始めまして」

「ねえ君わたし達と同じ学年らしいね。名前はなんて言うの」

美紀が晃に聞いてみた。

「知りませんよ僕だって。ごめんなさい唐突で、僕の名前は優輝晃といいます。よかったら名前教えてくれませんか？」

晃は丁寧に聞いてみた。しかし彼女は晃の名前を聞いたと単にすこし驚いた顔になった。

「優輝、晃？」

そうつぶやいたあと彼女は走り出してしまった。

「あれ！？どうかしましたか？」

しかし晃の声は届かず、彼女は脱兎のごとく走り去ってしまった。

「あ～き～く～ん。今のはだれ？」

晃は後ろに悪寒を感じたので後ろに振り向いた。しかし振り向いたとたんさっきの悪寒は消えた。

（なんですか。いまの）

このあと全員着いた後神社を少し見たとこで違うところに行くと決

めた。

※

ひと段落着いたことろでさっきの喫茶店で全員休憩していた。

「久しぶりにいろんなとこを見て廻りましたけどやっぱり科学都市とは違いますね」

「やっぱり科学都市はすごいの？」

晃の独り言に真が聞いてきた。

「ええ。やっぱり科学都市のほうが人口が多いので」

「それはそうだろう。ここは人口だけではなく特に子供が少ないところだからな」

今宵が説明した。

「たしかに。この歳になってもここに居るのは私達でも珍しいほうよ。とくにアキ君なんてわざわざ帰ってくるなんて。とくにこれは珍しいほうよ」

結衣のこの言葉は少しうれしさも入っていた。

「まあ普通みんな都会に憧れていますからね。僕みたいのはいないでしょ」

「ねえ科学都市の話教えてよ」

伊織が問いかけてきた。それ以外のみんなも聞きたいという目をしていた。これが目は口よりものを言うか。

「いいですよ。まずここで慣れている人は絶対に迷子になりそうですね」
「なんでだ」
「まあ今宵は大丈夫だと思いますが、結構迷路になっている所が多いのですよ。とくに大聖堂なんて以上ですから」
「へぇ～」

あれから1時間ぐらい話をさせられた晃であった。

※

次の日。
学校の5時間目の終わりの休み時間。特待生はただいま違うところで専門的に勉強している。一般生徒は普通に授業だ。
晃はトイレから教室に戻ろうとしたとき、ある少女と出会った。
その少女は昨日会ったあの少女だった。

「あ」
「君はたしか昨日会った女の子でしたよね。いきなり走り出してビックリしましたよ」
「本当に覚えてないのですね」

少女はボソッと言った。晃には聞こえなかった。

「なんか言いましたか」
「いいえ。なにも」

少女はあわてて言った。

「そういえば昨日名前聞き忘れてしまいました。ここで改めて自己紹介はどうですか」

晃の提案に彼女はうなずいた。

「優輝晃といいます」

「神下舞（かみしもまい）といいます」

第４話終わり。続く。

第４話　町案内（後書き）

特別トークのコーナー

美紀（以降み）「と、いうことで始まりました特別トークのコーナー」

晃（以降あ）「あ～そういえば前回から始まりましたね」

み「そうだよアッキー今回は本格的に第１回だから張り切っていこう」

あ「それはそうですけど、ハッキリ言ってなにをすればいいのでしょうか？」

み「そうだね。とりあえずアッキー爆発して♪」

あ「なんで！？」

み「話題づくりのために」

あ「しません！！」

み「まあいいや。話題のほうはこれから送ってくる感想によって変化させようか」

あ「あいまいですね」

み「と、いうわけで。感想お待ちしています」

あ「あ、ちゃんと閉めたのですかね？」

第5話　舞と結衣とゲーム？（前書き）

「君は一体」
町案内をしてもらった晃。
そこでは自分が知らない場所と新しくなった場所を知った。
そして、謎の少女と出会った。
「か、神下舞と言います」

第5話　舞と結衣とゲーム？

5時間目の終わりの休み時間。晃はある1人の少女と話をしていた。
その少女の名前は「神下舞」とゆう名だった。
2人とも改めて自己紹介をしたが会話はすぐに途切れてしまった。

「あ、あの」

晃が舞に聞いてきた。

「そういえば君はあの神社の娘とか孫なんですか？」

そう晃が聞いた。舞は冷静に答えてくれた。

「ううん。私はあの神社のお婆ちゃんと昔からの知り合いなの。久しぶりに来たから挨拶をしようと思ってきたの」
「え！？そこのお婆ちゃん風邪とかだったんですか？」

しかし舞は首を横に振った。

「ううん。違うの。私最近ここに転校してきたばかりですので」

――え！？それはつまり。

晃は思い出したように違う質問をしてみた。

「神下さんはまさか2組に僕と同じ日に転校してきた人ですか？」

舞は首を縦に振った。

そう彼女は晃が転校してきた日のもう一人の転校生だった。

（そういえば制服もみんなと違って新品でしたね」

晃は舞の制服を見ながら思った。確かに舞の制服は周りの人達とは違い、汚れが一つも無くまるで新品のようにきれいだった。いや、性格には新品なのだだが。

ついでに晃が制服を変えていないのは前の学校のあることで星道高校の制服を着ている。もちろん、ものすごく校内でも校外でも目立ってしまう。

会話が少し止まった。

でも、すこしたったあと舞は何かを喋ろうとして口を開いたが。

―キーンーコーンーカーンーコーン

チャイムが鳴ってしまった。

「そ、それじゃあまた今度」

そういって舞は2組の教室に走って入ってしまった。

（神下さん。何回言おうとしてましたですよね。なんでしょうか？）

晃はそう思いながら教室に入った。しかし廊下の曲がり角には不吉なオーラを出している結衣のことは誰も知らなかった。ちなみにほかの人は怖くって声もかけられなかった。

※

6時間目が終わり、晃は家に帰ろうとした。そうしたらいきなり結衣に呼び止められてしまった。

「アキ君一緒に帰ろう」

「いいですよ」

晃はそう言ったあと結衣と一緒に教室を出た。

下駄箱に行き、靴を履き替えた後に出口にあの少女と偶然であった。

もちろんその少女とは舞のことであった。

「あ、優輝さん」

「神下さんも今帰りですか?」

「はい」

「どうですか一緒に帰りませんか?幼馴染も一緒ですけどいいですか?」

晃は誘ってみた。ちなみに結衣は後ろで黒いオーラを放っていた。

それに気づいた舞は困りながら言った。

「わ、私は遠慮しておきます。それではまた明日」

そういいながら舞は走りながら校門に向かった。

「なんかなにか怖いものを見たような素振りでしたけど、なんか心当たりありますか?結衣」

晃は結衣のいる方向に振り向いた。しかしもう黒いオーラは出ていなかった。

「ううん。さあわからないな」

「そうですか」

そういって晃も校門へ歩き出した。

※

晃と結衣は一緒に歩いていた。今歩いているところは川のある土手近くの歩道を進んでいた。

「ねえアキ君」

「なんですか？」

結衣が話かけてきた。

「今の子とはどうゆう関係！」

もちろんあのことは舞のことを示している。さっきのやり取りで晃がとられてしまうのかと思っていた。実際聞くか聞かないかさっきまで結衣は悩んでいたが決心がついたのか聞いてみた。

「ああ。神下さんのことですね。実はあれ以外にも今日少しお話をしましたけど、まったく話題がなくすぐに話は終わりました。分かったことは僕と同じ日に転校してきたことだけですけど」

「き、きになるの」

結衣は不安そうに聞いた。

「ええ、まあ。僕は結衣達が居たおかげで学校に早くもなじめましたが、神下さんはそんな風に見えませんでしたから、すこしでも話をして、慣れてくれるとうれしいですね」

晃は微笑みながら言った。
自分の予想と外れて結衣の心はすこし豊かな気持ちになった。しかし、鈍感さが前よりもパワーアップしているみたいで結衣は心のなかで頭を抱えた。

「よ、よかった」
「なにがですか？」
「な、なんでもない。なんでもない」
「？」

思わず声に出してしまったのか思いっきり結衣は否定した。

「そういえばなんでアキ君は敬語つかっているの？」
「ああこれですか」

ごまかすために結衣は違う話題に切り替えた。

「まあ科学都市では敬語をものすごく使っていましいたから、ハッキリ言って慣れですね」
「そ、そうなの」

こんな会話をしている間に晃達は家に着いた。

「到着しましたね」

そういいながら晃は自分の家の鍵を空けた。
結衣は晃の後ろで何かを待っていた。

「どうかしましたか結衣？」

「え、あの～家に上がっちゃだめ？」
「そうですか。いいですよ」

晃がそう言ったとき結衣は心の中でガッツポーズをした。
なにせ、晃が帰ってきてから家の中で2人だけのときは無かった。
2人っきりの空間それは恋する乙女の夢の空間だった。

「開きましたよ。入っていいですよ」
「うん」

晃の呼びかけに結衣は元気よく答えた。
晃は入ったあとすぐに鞄をソファーの横に置き、キッチンへ向かった。

「今、お茶入れますね」
「うん。お構いなく」

優輝家によく出入りしている結衣はいつもどうりにソファーに腰をかける。
お茶を入れ終わった晃は鞄を持って結衣に言った。

「鞄自分の部屋に置いていきますね。すぐに戻ります」
「うん」

結衣は入れてもらったお茶を飲みながら答えた。
だがしかし、結衣の心は思いっきりパニックになっていた。ハッキリいって2人で話せる話題が無かった。いつもは美紀や今宵とかが話題を出しているため、自分はその会話に参加しているだけだ。そう結衣は思い始めた。
そう思っていると晃が2階から下りて来た。

晃はそのまんま自分のお茶をキッチンからもて来てソファーに座った。つまり結衣の隣だった。

「そういえば結衣」
「はひっ！！」

結衣はいきなり声をかけられたせいか変な声がでてしまった。

「ゆ、結衣さん」
「ご、ごめんめアキ君。それでなに？」
「今思い出したところなんですけど、いまもピアノ続けているのですか？」

結衣は昔ピアノを弾いており、ものすごく上手だった。晃としてはそのまま続けていることが望ましかった。

「うん。やっているよ。今は音楽科のなかの演奏科の授業で弾いているの」

東の丘高校の特待生は前に言ったとおり特別な授業を受けられる。科目は大きく分かれて４つあるがこれを第１科目といい、さらにその中で科目が分かれているこれを第２科目という。第１科目は音楽科から芸術科、技術科、家庭科である。第２科目は多いので今ここでは発表できません。
つまり結衣は、第１科目は音楽科で第２科目は演奏科となっているわけだ。
演奏科は基本的に楽器を扱う科目である。
そのとき、家のドアから聞いたことがある声が聞こえた。

「あれ？ゆーちゃん先に帰っていたんだ」

「あれ美紀？なんか用ですか」
美紀はそういいながらリビングに来た。
「よし、アッキー久しぶりにゲームで勝負だ」
美紀はテレビを点けながら言った。
「何のゲームですか？」
「このアクションゲームで」
「それ僕やったことありませんよ」
そういったら美紀はくすっと笑い出した。
「うん。わかっていたから言ったの」
「なんじゃそりゃ」
「はい。コントローラと説明書」
美紀はそう言いながら晃に渡した。
晃はしょうがないですね。といいながら説明書を読んだ。だが説明書を読めた時間はわずか3分のみだった。

※

「わー。また負けたー」
ゲーム勝負ただいま25戦中、晃、全勝中。
「アキ君強いね」
「やっぱりアッキー、このゲームやったことあるんじゃないの？」

「だからありませんって。ゲーム自体久しぶりですから」
晃は全力で否定した。そもそも晃が言っていることは真実である。
「はじめてやったというのならどんだけアッキー器用なの？」
「そんなこと僕に言ったって」
「あれアキ君？」
結衣が何かに気づいて晃に聞いてきた。
「なんですか？」
「あの時計。壊れていたはずだよね」
結衣はテレビの上にある時計に指を刺した。
あれは最近晃がこっちに帰ってくる日の前に壊れたものである。
「あ～あれですか。あんまり壊れていなかったので僕が修理しときましたよ」
「え！？アキ君そんなことできたの」
結衣は驚いた。昔は晃はこんなに器用ではなかったはずだ。
むしろ昔は不器用だったはずだ。料理のほうは昔から得意だったのであまり違和感は無かったわけである。
「アキ君科学都市で一体何を学んできたのやら」
「そうだね」
結衣と美紀は呆れながら言った。
「あ、もうすぐご飯の準備ですね」

「あ、本当だね」

時間はもう6時近くまで来ていた。

「それより結衣」

「うん？なに？」

晃は改めて言った。

「ゲーム弱すぎませんか」

さっきまでの会話結衣と美紀はずっとゲームの対戦をしていた。しかも結衣の全敗である。

「あ、あはははははは」

結衣は笑うしかなかった

第5話　舞と結衣とゲーム？（後書き）

特別トークのコーナー
真（以降ま）「あれ？今回私出ていない？」
今宵（以降こ）「実は言うと私も」
ま「そしてあきにいが謎の女の子と話しいるし」
こ「落ち着いてまこちゃん」
ま「しゃーーーーーー」
こ「まあ、なんかこの空気だと一段落つかないと私達の出番なさそうね」
晃「それは言わないでほしいような気がしますね」
ま「あ～き～に～い」
あ「な、なんか襲ってきたー」
こ「お～2人とも早い早い」

第6話　犬の捜索・前編（前書き）

あらすじ
結衣はゲームが下手。

第6話　犬の捜索・前編

朝。ただいま晃御一行は学校に登校していた。6人とも仲良く話していた。

「なあ、晃この写真どう思う？」
「なんですか？透」

透はそう言ったあとに晃に携帯の画面を見せた。その画面にはエロ画像が写っていた。

―バキッ！！

晃は透の頭を左手で殴った。

「朝っぱらから変なものを見せないでください」
「いってー。何だよ男のお前なら分かってくれると思ったのに」

透が頭を抱えながら言った。

「何のことですか！！」
「なんだ、なんだ。あ、エッチな画像」

今宵が会話に参加してくるのと同時に透の携帯の画像を見た。

「今宵。携帯ごと画像処分してくれますか？」
「それならお安い御用だ」

今宵は携帯を壊そうとして構えた。

「やめろ。てかお前。発想が怖いよ」

透が携帯を守るように抱えた。

「朝から変なものを見せられた罰だと思えば全てがおわりますよ♪」

晃はにこやかに笑っていっているが、言動と頭の後ろに付いている怒りマークで怒っている事がわかる。

「うんそうだね。違う意味で全て終わっちゃうね」

透が必死にツッコンだ。

「お前は女の体に興味は無いんだな」

今宵が晃に聞いてきた。

「ええ。どうでもいいことですから」

この言動で晃が鈍感の男だと分からないものは居ない。

「やっぱり鈍感差もパワーアップしている」

結衣がボソッと言った。

「何か言いましたか結衣」

「ううん。なんでもないよ」

少し聞こえたらしく結衣は両手を振って否定した。

――やあ！！

―バキッ！！

――ギャーア。いきなり携帯を落とすな！！

あっちではいろいろと格闘していた。
叫び声でなにが起こったのかはすぐに分かった。

※

学校の校門前。今日も幼馴染達は沢山の生徒に囲まれていた。みんな楽しそうに話している。晃にはいつもどうり校舎に向かおうとした。しかしそのとき、誰かに後ろで呼び止められた。

「そこのお前！！ちょっと止まれ！！」
「なんですか？」

晃が後ろを向いたらそこには黒髪のポニーテールで眼鏡をつけた少女が居た。ついでに腕には風紀委員と書いた腕章が付けられていた。

「お前。何で着てる制服は違うのだ。ちゃんと指定された制服を着用しろ」
「ああ。そんなことですか」

晃は安心したように言った。なんにもしてない自分がいきなり風紀委員に呼ばれたので晃は少し驚いていた。

「なんだ。とはなんだ。いいから早く制服を着ろ！！」

「残念ながらこの制服を今着ている理由はちゃんとありますし、ちゃんと両学校長に話はつけています」

そう言って晃は鞄の中に入っているファイルの中にある紙を1枚取り出し、風紀委員に見せた。

「これが証拠です。なんか文句がありますか？」

ついでに晃が言ったことは本当のことである。この書類も本物である。

「クッ」

風紀委員の少女が悔しそうな声で言った。
それとは対照的に晃は余裕の顔で居る。
女は悔しそうにどこか行ってしまった。

「なんだったんでしょうね。あの人は」

なんか安心したのか晃は一歩後ろに下がった。そのとき、背中に誰かとぶつかった。
それに気づいた晃は急いで振り向いて誤った。

「あ、ごめんなさい。よく見ていなかったもので」
「い、いいえ。て、あ！」
「あれ？神下さん？」

ぶつかった少女は昨日話をした少女、神下舞だった。

「あの、こちらこそごめんなさい」

舞は頭を下げた。

「いいですよ。僕の不注意ですので。どうですか教室まで一緒に歩きませんか？」

「は、はい」

晃と舞は一緒に校舎に向かった。しかし彼らにはほとんど会話が無かった。

「そういえば神下さんはどこに住んでいるのですか？」

晃がとっさに思いついた話題を口にした。

「ええ。私は土手の向こう側にある方向に家があります」

「じゃあ、僕の家と近いかもしれませんね」

晃が驚いたように言った。

「そ、そんなのですかついでに言うと駅前の商店街の近くにありますけど」

「じゃあ本当に近いですよ。僕、アパートの大家をやっています」

「え！？」

舞は何かを知ったかのように驚いていた。こんな顔を始めてみた晃も少しビックリしている。

「どうかしましたか？神下さん」

「い、いいえ。優輝さんはえらいですね」

「そうでもありませんよ」

晃は少し笑った。そうしたら舞もつられて笑ってくれた。彼女の笑った顔も始めてみる。やっぱり美人ということが分かる。

「じゃあ私2組ですので」
「ええ。また」
「はい」

そう言って舞は自分の教室に入って言った。

「お、アッキー。私達より早く教室に行ってたんじゃなかったの？」

教室に入ると美紀が晃に話しかけてきた。

「ええ。そのつもりでしたけどすこし用ができて」
「用というのはあの2組の転校生と話すことかしら」

結衣がいつの間にかに晃の後ろに立っていた。

「ああ。そのことはたまたまあったので」

晃が平然と答えたその言葉には嘘はない。
その会話を聞きつけた大吾がこっちに来た。

「お前、もうあの子と仲良くなっているのかよ」
「え、それは神下さんのことですか？」
「そうだよ。あの子ものすごく美人じゃん」
「あははは」

何かに燃えている大吾に晃は呆れながら笑った。

後ろには黒いオーラが出ている結衣がいたが晃はそのことを気づいていない。

「ゆうちゃん。裏モードが出ているよ」

美紀が指摘したが結衣はそのことに気づいていない。ついでに裏モードとは結衣がご機嫌が斜めになったときに発生するモードで、晃以外ほとんど気づいている。「かわいいものには棘がある」という言葉はもしかしたら結衣のためにある言葉かもしれない。

「ど、どうかしましたか？結衣」

なにかに気づいた晃が結衣に話しかけてきた。

「ううん。なんでもないよ」

さっきの裏モードとは裏腹に結衣はにっこりと笑顔になった。どうやら裏モードのことは彼女本人も知られてはほしくないみたいだ。

※

昼休み。全員お昼ご飯を食べ仲良く話をしていた。

「そういえば、晃と真ちゃんの弁当の中身は一緒だけど、誰が作っているんだ」

「僕ですけど」

「優輝君は料理上手なのね」

伊織が感心しながら言った。

たしかに晃の料理は主婦も真っ青になるほどの上手だ。

「おーい。優輝君。お客様よ」

いきなり呼ばれた晃は呼ばれた方向に振り向いた。そこには舞の姿があった。

「神下さん？どうかしましたか？」

晃は歩きながら聞いた。

「うん。ちょっとお願いがあって。お願いできるの今は優輝君しかいなくって」

舞は困った顔で言った。その顔に何かを感じたのか、晃はこう言った。

「教室に入っていいですよ。相談事聞きますよ」

「は、はい」

舞は教室に入った。

※

晃は舞の話を聞いた。

「それで、その犬を捕まえてほしいと」

「ええ」

話を聞いたところあそこの神社のおばあちゃんのペットの小型犬が

どこかに行ってしまったらしい。もう3日も居ないらしい。

「わかりました。今日の放課後。捜索してみましょう」
「は、はい」
「チョーと待った」

晃達の会話に大吾が割り込んできた。
後ろには幼馴染ズも居た。

「その捜索俺たちにも手伝いさせてくれ」

大吾が腰に手を当てながら言った。どうやらちょっとでもいい格好で言いたかったらしい。

「そうですか。みんなありがとうございます」

晃は笑顔でお礼を言った。

「それで、まーちゃん。犬の特徴は？」
「え、ええ」

美紀がいきなりニックネームで言ってきたので舞は少し手間取った。

「絵を描いてきたのでそれを見てほしいのですけど」

舞は1枚の紙を取り出した。
そこには意味不明の物体が描いてあった。

――・・・・・・・・・

沈黙。

「えーと。神下さんこれは何かな?僕が考えたモンスターかな?」

大吾が言った。そしたら舞は少し涙目になった。

「ごめんなさい。私絵苦手で」

「え、あ、その」

「大吾がまーちゃんを泣かしたー」

美紀が冷やかしに言った。実際舞は泣いてはいない。

「今宵。スケッチブック貸してください」

晃は今宵にお願いした。

「はい。これ」

今宵は晃にスケッチブックを渡した。晃はページをめくった。そこにはものすごくホラーで絵かがれていた犬の絵があった。でも実際絵はうまい。

「何ですか今宵これは。いや、うまいですけど」

晃が今宵にその絵を見せた。

「これはさっきの会話を書いて私なりに書いてみた」

「は、はあ」

晃がそういいながらシャーペンを持った。

「神下さん。その犬の特徴を言ってください」
「えーと。まずダックスフントで、色は普通の色で、あ、そうそう。額には稲妻にみたいな傷があるわ」
「ハリー・〇ッターみたいなかんじか？」
透が面白半分で言った。
「うん。そんな感じ」
「少しは否定して下さい」
晃は無言で描き出した。
わずか2分で絵は出来上がった。
「これでどうですか？」
晃はみんなに描いた絵を見せた。そこにはものすごく上手な絵があった。
「アッキーすごくうまいね」
「アキ君。絵を描くの得意だっけ？」
ほかにも関心の声が上がった。
「そ、そうですかね。と、とりあえずこの絵をコピーしますので放課後それぞれ散らばって探し回りましょう」
「そうだね」
晃の提案に全員賛成した。

「じゃあ私がアキ君と一緒に行くね」
結衣が手を上げて言った。
「そのまえに、神下さんが優先すべきだと思いますよ。勝手に僕達が決めると彼女が気まずくなってしまいますから」
「と、いうわけで。神下さんは誰と行きたい？」
晃の言葉を聴いて今宵が聞いてきた。
「じゃあ、優輝君でお願いします」
「分かりました」
それから簡単に2人組みのペアが完成した。

第6話　犬の捜索・前編（後書き）

特別トークのコーナ

透「特別トークのコーナ」

晃「携帯いじりながら言うな」

透「だってやること無いんだもの」

晃「それだったらありますよ。例えばここに透の恥ずかしいことが書かれている紙があったらどうします。まあ実際あるわけですけど」

透「ちょっ、お前それをどこで」

晃「今宵から貰いました」

透「いいからそれを返せ」

晃「なになに、透の携帯のエロ画像の数は」

透「わー。やめろ！てか、何であいつ知っているんだ」

晃「〇〇枚って、正直・・・引きました」

透「てか、リアルに逃げているし、それはうそだし。あ、あいつ本当に信じてやがる。おいまてーーー」

第7話　犬の捜索・後編（前書き）

前回のあらすじ

晃は鈍感差がパワーアップした。（テロリン♪）

第7話　犬の捜索・後編

放課後。
晃は廊下で舞を待ち合わせをしていた。ついでに舞は特待生ではない。
教室を見るとちょうどＨＲが終わったらしい。
数秒後、舞が教室からでてきた。

「あ、優輝君」
「どうも神下さん」

晃と舞は一緒に歩いている。もちろん犬探しで今回待ち合わせていた。

「さてと僕達はどこを探しますか？」
「神社の近くはどう？」
「そうですね。そうしましょうか」

晃と舞は神社をとりあえず目指しながら歩いた。
会話は無い。２人とも無言のままだ。晃は特に話すことは無いがなんか気まずい気分だ。
逆に舞は頭の中でパニックになっていた。

（どうしよう。どうしよう。優輝君なんで喋んないのかな？やっぱり私迷惑なのかな。と、とりあえずなんか話さなきゃ）

そう舞は自分でいいいきかせた。

「ゆ、優輝君」

「なんですか？」
「優輝君はなんで違う制服着ているの？」

本日2度目の同じ質問だ。しかし晃は舞が困りながらだした質問だとわかり答えた。

「これはあるちょっとした用事で着なきゃいけないのですよ。まあ両学校長に認められているので心配はありませんよ」
「そ、そうなの」

会話終了。しかしそんなことはさせないみたいな意気よいで晃は舞に質問した。

「神下さんはもう友達で来ましたか？」
「え」

この質問は以外だったらしく舞は聞き返してきた。

「あ、友達。今は一人も居ない」
「・・・え」

晃は予想していたのだがやっぱりそうだった。昼休み。晃は2組の教室を見たが誰1人も舞に話駆けてくる人は居なかった。
それどころか自分から壁を作っている感じだった。

「それじゃあ僕が最初の友達ですね」
「え！？」

舞がまた聞き返してきた。その目はさっきと違いなにかを見つめる目だった。

「だめですか僕では」
「う、ううん。ちょっとビックリしただけ」
「そうですか」
「ほ、本当に友達になってくれるの？」
「僕はお願いされるからもう友達だと思われていましたけど」
「え」

晃が平然と答えた。
舞はこの後何も聞いてこなかった。
しかし表情はさっき見たく暗くはない。むしろうれしい気持ちでいっぱいになっていそうな表情だった。
その表情を見たとき晃もうれしい気持ちになれた。

※

神社の前に来た。ここの近くで犬が見つかれがいいのだが。

「とりあえず探しますか」
「うん」

晃と舞は同時に探し出した。
草むらの中を中心に探したのだがまったく見つからなかった。

「小型犬ですので猫みたいに相当は難しいくはないはずですけどね」
「はい。屋根の上とは違うと思いますけど」

いくらなんでも動物の捜索は結構無理がある。

「その犬にはＧＢＳはついていないのですか？」

「聞いたところそんな話は聞いていません」
「そうですか」

晃は一回手を止めて考え事を始めた。
そうしたらある以外に大切なことを聞くのを忘れていた。

「神下さん。その犬の大好物は？」
「確か鶏肉だと聞きました」

そう言われたときに晃は携帯を取り出した。
晃の携帯は科学都市でも最新の中のもっとも最新機である。というがたった1個しかない機種でもある。
携帯の画面がディスプレイのデジタル式になっている。もっともこの機体はある人から引き継いだものとなっている。
機種番号―００－ＳＡＲＡＯ《ダブルオー－ソラオール》と言うらしい。元は一番最初に作られたものの復刻版らしい。だが機能性はほかの機種と違いものすごくハイレベルである。
名前は携帯ではなく携帯電話が進化したものでギアと名ずけられた。

晃は電話で結衣に電話かかけた。
なぜ結衣となのかは、あのあとものすごく電話をくれと言われ続けたのでいまはちょうど良かった。

『な、なに？アキ君』
「あ、結衣今から商店街のほうへ行ってくれますか？」
『な、なにかあるの？』

結衣はあまり状況を理解してはいない。

「肉屋さんに片っ端から写真を見せてください。もしかしたら目撃

者がいるかも」
『わ、分かった』
そう言われた後晃は電話を切りギアを締まった。
「私達はどうするの？」
「僕らはも商店街へ向かいましょう」
「は、はい」
晃達は商店街へ向かった。
※
その頃商店街では。
「それでアキ君言われたままに商店街に来たけど」
「肉屋さんにこの絵を見せてわかるのかな」
結衣は今宵とペアになっている。
ついでにほかは、美紀と伊織ペアと透と大吾ペアになっている。
「一様、美紀たちにもこのことを伝えたんでしょ」
「うん。そうだけど」
あの晃の電話から結衣は美紀に電話をかけ、晃に言われたことを伝えた。
美紀もあとから商店街へ来るらしい。
「とりあえず。晃に言われたことをやるのが一番効率いいな」

そう言って今宵は肉屋さんに向かった。

「おう!!今宵ちゃんと結衣ちゃんじゃねえか」

肉屋さんのおじさんが言った。

ここ東皆丘では住んでいる15歳以上の子供はほとんどいない。
みんなこの歳になると都会に行きたかる人もいる。これは前回にも話したことだ。
さらに言うと結衣達はあの子供だけが暮らしている自由荘に住んでいることは東皆丘ではほとんどの人が知っている。つまり、彼女達は町の有名人でもあるわけだ。
だが晃が帰ってきたことはほとんどの人が知らない。理由は簡単だ。
まのビフォーアフターでは誰もが気づかない。

「おじさん。この犬見ませんでしたか?」

結衣が聞いてみた。

「このハリー・〇ッター見たいな傷の犬です」
「ああ、この犬なら見たことあるぞ」
「本当ですか!!」

結衣達はやっとまともの情報が知れてうれしがっている。

「と、ゆうか今家の中に居るぞ」

おじさんがそう言ったとき2人ともこけた。
情報どころか居場所を簡単に見つけてしまった。

「どうした2人とも」

おじさんがのん気に言った。

「なはは。何でもありません☆」

「まさかこんなに早く見つかるなんて思わなかった」

2人は起き上がりながらつぶやいた。

※

晃達は結衣からの電話で犬が見つかったと知った。

そのために商店街へ向かっていたがUターンして神社に戻ろうとしていた。

ついでにこの話を聞いた晃も聞いた途端にこけた。

「本当に見つかるとは思いませんでした」

「そ、そうですね」

クスクスと舞は笑った。

あれから晃はいろいろと舞と話していた。話していくうちに彼女はどんどん笑顔になっていった。

「優輝君」

「ん？」

「ありがとうございました」

舞がお礼を言ってきた。

「僕は何もしていません。お礼はみんなにってください」

「そうじゃなくって、私の友達になってくれる話」
「え？それがどうかしましたか？」
晃は話の意味が分からなかった。
「なんでもありません」
そう言って舞は話を終わらせた。
茜色の夕日が彼女の赤い頬を隠していた。
「どうかしましたか？神下さん？」
――ビック！！
いきなりは話掛けられて舞は驚いた。
「な、なんでもないですよ。晃君」
舞はテンパリながら言った。
「そうですか。ん？晃君？神下さん僕のしたの名前初めて言いましたよね」
晃が疑問に思って言った。
舞は自分がさっき言った言葉を思い出したらしくさらにテンパッた。
「はは。いいですよ別に。これからも僕も舞と呼ばせてもらいます」
「え！？」
「友達の証です」

晃はにっこりと笑顔になって言った。
舞は逆に顔を夕日に負けないぐらいに赤くした。
というか、頭から湯気が出ていた。

「ちょ、ま、舞？どうかしましたか？」
「な、なな、なんでもありませんよ」

舞は両手を振って断った。
このとき舞はずっと顔を赤くしていた。夕日のせいで晃はそうなっているを知らなかった。
そして、それが彼女の恋の証だということも晃は分からなかった。

※

晃達は合流して犬を神社のおばあさんに引き渡した。

「ありがとうねみんな」

そういっておばあさん笑っていた。
晃達はみんなそれぞれ帰ろうとしていた。

「今回は結衣と今宵のおかげですぐに終わりましたね。動物の捜索なんて普通何日もかかりますよ」
「そ、そうなの」
「私達のおかげね」
「そういえば透達はどうしましたか？」
「「「「「「・・・あ」」」」」」

すっかり男子２人に連絡を取るのを忘れていた。
いや実際晃は透達にも連絡してといてくれと言われていた。

ついでに晃は大吾の電話番号は知らないし、透は電話にもでなかったし、メールの返信も来なくなっていた。

「なにやっているのでしょうか」

実は透の携帯の電池は切れ、しかも居る場所は神社と正反対の場所に行っていた。

3日も経っていれば遠くへ行っているはずだと透と大吾の推理は思いっきり外れていた。

第7話　犬の捜索・後編（後書き）

特別トークのコーナ

透・大吾「はぁはぁ、ぜぇぜぇ」

美紀「あ、お帰りなさい」

透「あれ？本編終わった？」

美紀「うん。もう特別トークのコーナーに入っているよ」

大吾「くそっ！間に合わなかったか」

美紀「なんかある意味間に合っているかも」

透「で、結局犬は見つかったわけか」

美紀「うん。見事に2人の正反対のほうで見つかったね」

大吾「それを言わないで」

美紀「まあ、みんな最後の最後まで忘れていたから問題は無いのじゃないの」

大吾「うるせぇ！そういえば晃はどうした」

美紀「アッキーは今回はお休みです」

透・大吾「・・・へ！？」

美紀「だからある意味間に合ったって言ったじゃない」

透・大吾「そういうことかーーーーー！！」

美紀「て、わけでまた次回☆」

第8話　天然ライフ（前書き）

前回のあらすじ
犬発見。

第8話　天然ライフ

次の日。学園の校門を抜けて晃は校舎に向かって歩いていた。
例の幼馴染ズはただいま校門前でおしゃべり中。
晃が歩いていると誰かに軽く肩を叩かれた。
振り向いて見るとそこには舞がいた。

「お、おはよう。晃君」
「おはようございます舞」

舞は何かを言いたそうにしていた。

「どうかしましたか？」
「う、ううん。なんでもなよ」

そう言って2人とも下駄箱から上履きに履き替えた。
そのまま会話が無いまま教室についた。

「じゃあ私こっちですので」

舞が不安そうに言ってきた。

「ええ。また」
「はい」

舞は最後笑顔になって教室に入って行った。
晃も隣の自分の教室へ入った。

「あ、おはよう晃君」

伊織が話しかけてきた。晃と伊織は実は隣の席同士だった。
晃は椅子に座った。

「あれ？小方さん。いままで僕のこと下の方で呼んでいませんでしたよね」
「うん。でもいいじゃない。神下さんも呼んでいるから。私のことも伊織でいいわよ」
「はあ」

そう言いながら晃は授業の準備を始めた。

「アッキー」
「わあぁ！！」

いきなり美紀がドアップで話しかけてきた。

「何ですか美紀？」

晃は落ち着けるように質問した。
美紀は顔を引いて自分の椅子に座った。

「うん。いつも思っていたのだけど。何で右腕にリストバンドしているの？」
「ああこれですか」

晃は自分の右腕のリストバンドを見た。
そしてそのリストバンドを取った。
その右手首には痛々しい傷跡があった。

「アッキーこれは」
「リストカットをしたね。なんか辛い事でもあったの？」
「してません。これは骨折したので手術の跡です」
晃はツッコミながら訂正した。
「アッキー骨折したんだ。初めて知った」
「まあそうでしょう。僕はこのせいで右腕にはほとんど力がありません」
「そうなんだ」
「なので力仕事は苦手ですね」
晃が右手首を振りながら言った。
「まあ、あんまりこの話は好きではないのでやめにしかしょうか」
「そうだね」
「別の話にしましょうか」
2人とも晃の提案に賛成した。
晃が骨折の話が嫌いなのはほとんど覚えてはいないからだ。

※

体育の授業。
東の丘学園の体育は男女別の2クラスで行う。だが時々合同でも行われるときがある。
男子は今日は校庭で行っている。体育の先生も日によって変わる。
今日の先生は無駄にマッチョの先生だった。
「お前らー今日は高飛びをやるぞ。今回は男女合同だ」

マッチョ先生が吠えながら言った。なんだこのテンションは。

「なんですかあの先生は」

「ああ。あの先生めちゃくちゃうるさいから嫌いなんだよな」

大吾が晃に言った。

「晃は高飛びはどうだよ」

「そうですね。まあぼちぼちいけますよ。棒を倒さなきゃいいわけですし」

生徒はマッチョ先生の掛け声でどんどん跳んで行った。

ついでに今日は合同の授業なので女子も一緒に高飛びをしている。

女子のほうでは美紀、結衣、伊織、舞、今宵が話し合っていた。

「高飛びか。自信ないな」

美紀が本当に自信無さ下に言った。

「それわかる」

「でも、男子は可哀想」

今宵がなぜ男子生徒が可哀想だと言ったのはマッチョ先生が失敗した生徒を叩いていた。

「最低だなあいからわずあのマッチョマンは」

美紀が怒りながら言った。

「あの人親のコネで先生になった人だからね」
伊織が言った。
「あのマッチョマン。アキ君に手を出したら殺す」
結衣が裏モードで言った。
「ゆーちゃん落ち着いて」
美紀が結衣を止めた。
その間伊織の出番が来た。
「そういえば晃君。運動神経はいいのかな?」
舞が言った。
「まいっち。アッキーのことファーストネームで呼んでいるんだ」
「ちゃんとアキ君に了解とっているの?」
「は、はい」
舞は少し怖がりながら言った。
ちなみに結衣の裏モードは終わってなかった。
「あ、晃が飛ぼうとしている」
今宵が言った。そう言ったとたん結衣は裏モードをやめ、晃に黄色い声援を送った。
「がんばってーアキ君☆」

晃は笑いながら手を振った。

「がんばってください。晃君」

続いて舞いも声援を送った。
また晃は笑顔で返してきた。
ちなみに晃の周りの男子どもは晃のことを睨んでいた。

「なんだあいつ。羽衣さんに声援を送ってもらって」
「ふざけるな。なんであの美少女転校生と仲良くなっているんだよ」
「あいつ一体なにものなんだ」

男子共のこんな声が聞こえたが晃はあははと笑うしかなかった。

結果。晃は持ち前の器用さで結構飛んだ。

「晃。お前なんかスポーツでもしていたのか？」
「いいえ。なにもしていませんよ」

晃と大吾は更衣室で話をしていた。
着替え終わった2人は更衣室を出た。ドアの近くには晃の友達女子ズがいた。
しかし、ずいぶん着替えが早い。

「まってくださったんですね」
「うん。お話したかったから」
「ねえねえ。アッキーは科学都市でもなんかスポーツでもしていたの？」

美紀は大吾と同じ質問をしてきた。

「別にしていませんよ」

「じゃあ体育の授業サボっていたの？」

「アキ君、まさか」

「体育の授業はちゃんと受けていましたよ。てかそこ、まに受けない」

晃は結衣に指を差した。

「まあ話に聞いを聞いていたら、晃はずいぶん器用になっている話ではないか」

今宵は冷静に言った。

「まあ、もの作りは得意ですけど」

「じゃあ、ゲーム機作ってくれよ」

大吾が目を光らせながら言った。

「いや、そうゆう開発的なことは出来ませんから。とういか、作っていたら自分で使っていますから」

「じゃあ今度すごいテレビ作って」

美紀が晃のツッコミを無視して言った。

「話し聞いていましたか？」

「さあ、今回の商品はこちらです」

美紀が声真似をして言った。

「どっかのテレビショッピングの社長ですか！？」
「まずこちらの材料を用意してください。そしてこちらが完成品です」
次は大吾が声真似をした。
「3分クッキングでもありません！てか、話題がそれています」
「見てください。このボディ～」
「まだ続いていたんですか！？」

※

放課後。晃は舞と話していた。
場所は学校の校庭。部活動の時間なのでテキトーに見ていた。
晃達は校庭でソフトボール部の活動を見ていた。一様、いろいろな部活を見てきた。
休んでいると晃の前にソフトボールが1個転がってきた。
「あ～ボールとってください」
晃は言われたとおりにボールを取った。
晃が言われた子にボールを投げようとしたら10個くらいソフトボールが飛んできた。
「だぁあああああ」
晃は後ろに下がって避けた。
「何ですか？これは」

「すみませーん。手が滑りました」
「すごい滑り方ですね」

晃はボールを返した跡に場所を舞をつれて移した。
ここは野球部が練習しているグラウンドらしい。
歩いていると舞が野球ボールにけつまずいた。

「きゃ！！」
「危ない」

晃はすぐに舞の体を支えこけないように固定した。
ついでに2人の顔はものすごく近かった。

「大丈夫ですか」
「は、はい」

舞の顔は赤くなっていた。しかし鈍感の晃はそれには気づいていない。
しかしたまたまそれを見た野球部員が晃に向かって怒りのボールを投げてきた。しかも、投げてきたのはほとんど1年生。

「だあああああ」

晃はまたとっさに避けた。

「なんですかデジャヴですか？」

晃はまた舞を連れて場所を移動した。

※

校門前。晃と舞はとりあえず放課後の学校見学を終えた。

（なんか途中変なことが起きましたけど）

だがここはあえて触れないことにしよう。

「舞はたしか帰り道途中近くでしたよね」

「うん」

と、言うことで一緒に帰ることにした、が。

そこにある人がやってきた。

真と結衣だった。

「私も一緒に帰る。いいよねあきにい」

「私も私も」

「え、ええ。いいですよ」

急にいわれて晃は手間取った。

実際晃とは義兄弟だし、結衣は晃のアパートへ住んでいる人なので断る理由が無い。

「ねえ、あきにい。思ったのだけど」

「なんですか？真」

「牛乳もう無くなりそうだよ」

「え！？昨日1本残っていましたよね」

晃が真が言った言葉が以外だった。

というかこんなに深刻にする話ではない。

「私朝にも牛乳飲むようにしているの。そして夜も。明日から休みだから早く買ってきて」
「明日ではだめなんですか？」
晃は冷静に言った。
「あ、そうか」
真がその手があったかと驚いた。
「アキ君、アキ君」
結衣が晃の肩をかるく叩いて合図をした。
「なんですか？」
「なんでこの子まで一緒に居るの？」
あの子のとは舞のことである。
「舞も途中まで一緒の帰り道ですよ。言ってませんでしたか」
「そうなんだ」
結衣が納得したみたいに返事をした。
「あきにい、あきにい」
真は説明しづらい歩き方していた。
「この歩き方どう思う？」
「気持ち悪い」

バッサリと晃は言った。まるで容赦が無かった。

「晃君」

次は舞が話しかけてきた。

「思ったのだけど」

舞は深刻そうに言った。

「明日。現代文あったけ？」

今回で分かったこと。舞は天然。

――知るかーーーーーーーーー。

晃は心の中で叫んだ。

第8話　天然ライフ（後書き）

特別トークのコーナ

結衣「今回の話はなんかむちゃくちゃなような気がした」

今宵「それは作者も一番気になっていたところらしいぞ」

結衣「あれ？今日の担当は私と今宵なの？私はアキ君と一緒だと聞かせれていたんだけれど」

今宵「晃ならさっき女子生徒から呼び出しを食らっていたぞ」

結衣「へ！？」

今宵「多分科学都市での質問攻めにされているのでしょう」

結衣「私、見てくる」

今宵「いや、お前が離れたら誰もトークできない。・・・あ。もう行っちゃたか。今回はここまでまた次回～」

第9話　ご挨拶（前書き）

前回のあらすじ
舞は天然

第9話　ご挨拶

土曜日。晃にとっては東の丘高校に転校してからの初めての休みだった。
実際、晃にとっては内容盛りだくさんの1週間だった。
晃は家の中で皿洗いをしていた。
時刻は10時。真は部屋に居るが午後に部活に出かけるらしい。
ちなみに家事は全部晃がやっている。正確にいうと真は不器用すぎて家事がまったくできない。
晃は皿洗いを終わらせて家を出た。
これから商店街に行って小さい頃お世話になった人たちに挨拶に行くのだ。

「美紀達に聞いたら僕のこと気づいていないて言われましたから挨拶ぐらいはいかないと」

真の昼ご飯は置いて言ったので問題は無い。
外に出たら幼馴染達がいた。

「みんな。わざわざ付いてきてくれるのですね」

晃は喜びながら言った。

「まあ、アッキーが行ったて相手にされない確立があるからね」
「まあ、否定はしません」
「私はなんかいい絵が描けそうだから着いて行く」
「今宵。目を光らせながら言わないでください」

晃達は商店街へ歩き出した。

「そういえば、アキ君。科学都市で何をやっていたの？」
「それ、前にも言いませんでした？」
「でも、学校以外にも聞きたいの」
「まあ、とりあえず、秘密にしておきます。あとあと面倒ですので」
「理由になっていないよ」

結衣が顔をふくらませながら言った。
ついでにこの前、町を案内してもらったときは時間が無いので挨拶は後回しにした。

商店街に着いたら早速肉屋さんに向かった。
ついでに結衣達はこの前、犬のことでお世話になったが晃のことは話してはいない。
理由は結衣が早く晃のところへ行きたいと言い出して犬を連れながら速攻で神社に向かったのだ。

「おお、結衣ちゃん達じゃないか。それと、最近良く来る少年じゃないか」
「どうも」

晃が挨拶をした。

「おじさんもお元気で何よりですね。7年経っているのにまったく変わっていなくってビックリしましたよ」

晃はサラッと遠まわしに言った。
簡単な説明なのでここで理解してくれるのが望ましい。

「あれ、兄ちゃん。7年前に会っていたっけ？」

どうやら気づいてはいないらしい。
晃は名前を出したほうが早いと思い唐突に言った。

「お久しぶりです。優輝晃です。この前戻ってきました」
「あ、晃って、あの晃か？」
「そうだよ。あのアッキーだよ」

美紀が晃の後ろで言った。
おじさんは相当ビックリしていた。
そして大声で言った。

「これはビックリ。一本取られた。そうだ。町長には挨拶したか？」
「あ、すっかり忘れていたわね」

結衣が思い出したように言った。
てか、遅い。

「じゃあ、町長さんに挨拶に行きますか」
「そういえば晃」

透が晃に聞いてきた。

「おまえ、誰とも科学都市にいたとき連絡してないのか」
「していません。いろいろ忙しかったもので」
「そうか」

そう言っているが美紀達も晃とは連絡を使用とはしなかった。
いや出来なかった。
理由は晃の住所が分からなかっただけだ。

もちろん。晃にも連絡が出来なかった理由はある。

「ほら、アッキーいくよ」

「え、ええ」

晃達は町長の居る所へ向かった。

※

晃達は町長が居る所まで話しながら歩いていた。

「そういえば晃。いつも思っていたのだが」

今宵が何か疑問に思いながら聞いてきた。

「お前のズボンの左側のベルトを通すところになぜアクセサリーを付けているのだ？」

「ああ、これですか」

晃は十字架のデザインのアクセサリーを今宵に見せた。だが、あくまでのズボンからは外さなかった。

「これは、ある理由がありますけど、秘密事項なのでいいません」

「もしかして、お前ドラキュラに呪われて無理やりそれをつけているのか？」

今宵がわざとらしく言った。

「どう見たらそう思えるのですか？」

「はいは～い。実はとあるイノ○ンスだったりして」

美紀が会話に入ってきた。

「僕はディ○レのエク○シストではありません」

じつは晃はこの漫画が好きだったりする。

「じゃあ、何かの武器？」

「そうそう。これをもって発動！！とか言って剣に変化するんだよねって、違いますから」

晃、無理やりの乗りツッコミ。

「そしてこれがその武器の形」

今宵はスケッチブックに書いてある絵を見せた。

「描かなくって結構です。それに何ですかこの汚れは」

晃は今宵が描いた絵の剣に指を差して聞いた。

「これは血だ！！」

今宵はイキイキした表情で拳を握った。

「もうすでに人を刺し済み！？」

「いいや、これは殺し済みだ！！」

今宵は自信気に言い張った。

「もっとだめです」

晃の声が空までに響き渡った。
ついでにあちらではまた透がエロ画像を結衣に見せたらしくボッコボコにされていた。
ついでにだれも可哀想だと思わない。はっきり言って自業自得である。

※

晃達は町長の家に付いた。
町長の家は商店街の近くの一軒家だ。晃達とは本当におじいちゃんみたいに感じ取れたいい人だ。
ついでになぜか透のみボロボロだった。
理由は言うまでも無い。

「やあ、美紀ちゃん達ではないか。どうした?」
「お久しぶりです。町長さん。覚えていますか?優輝晃です」

晃は唐突に名乗った。
それを聞いた町長は驚いた顔になった。

「本当に晃君か?」
「はい」

そう言って町長は晃の手を握ってきた。

「あの時以来だな。本当に元気で何よりだ。さあさあ、家に入って来ておくれ」

町長に言われて晃達は家の中に入った。
ついでに町長はもう65過ぎらしいがまだまだ元気らしい。

「そうだ。ついでに紹介しとこう」

そう言って町長は2階に向かって声をかけた。

「おーい。舞。すこし来なさい。紹介したい人がいるから」

――え!?舞!?

なんか聞いたことのある名前だった。
まさか本人だとは全員だとは思わなかったが。
来たのはそのご本人だった。

「なに?おじいちゃん。あれ?晃君?」
「どうも舞」

晃と舞はお互い挨拶をした。

「あれ?もう知り合いだったか?しかも、もう名前で呼び合っているじゃないか」
「お、おじいちゃん!!」
「あれ?て、ことは町長の苗字って神下?」

結衣が気づいたのか聞いてみた。
だがそうゆうことだった。
舞の祖父で東皆丘の町長である神下弦(かみしもげん)とはこの人のことだ。
実際、この人の本名はほとんどの人が知らないでいる。

「まあそういうことだ。晃、舞のことよろしくな！！」
「はい？」

晃には今の言葉の意味は分からなかったようだ。

「ちょ、おじいちゃん」

逆に舞は今の言葉の意味が理解できたらしく顔を赤くして否定した。
しかし、この仕草が結衣が恋のライバルだと感じた。

「しかし、舞。ここだと結構フレンドリーに喋るのですね。学校でもそうしてもらえたらいいですのに」

晃が舞にとどめの一言を言った。
舞はさらに顔を赤くして、階段を駆け上がって行った。

「ど、どうしたのですか？舞は」

晃にはまったく理解が出来なかった。鈍感の証拠だ。
結衣にとって晃の鈍感さが今だけ助かったと思っていた。

「まあ。これからよろしくな」

弦が晃に言った。ついでに弦は今のやり取りを楽しんでいた。

「はい。こちらこそ」

晃と弦は握手をした。
晃達が神下家を出た後、舞に散々言われたのは言うまでも無い。

第9話　ご挨拶（後書き）

晃「キャラクターが増えたのでこれからはキャラ設定を載せたいと思います」

美紀「決してネタがなくなったわけではありません」

優輝晃（ゆうきあきら）
クラス学年：1年1組
年齢　16歳　性別：男　第一人称「僕」
身長：171　誕生日：4月2日
髪：白髪で、肩に後ろ髪が当たるまで伸びている。赤目
ジョブ：秀才ド器用主人公。幼馴染カラーは白
好きなもの：フライドポテト、読書
嫌いなもの：変態（オカマの類）、レバー肉
記：アパート「自由荘」の大家でもあり、みんなの親的の存在。
7年前、科学都市に行ってしまったが、今回帰って来た。
制服のみ彼は星道高校の制服を着用している。
それと、Yシャツの上には紺と赤い線が入ったベストを着ている。
右手首には黒のリストバンドを着けており、左手首には白い石がついた腕輪をつけている。
なんでも器用にこなすため、何でもできると周りから思い込まれている。
運動は普通だが、器用なため、何でもやることが出来る。
恋愛には非常に鈍感でもある。
実は誰にも話していない秘密がある。
同じ作者が書く「ＲＡＩＦ」の主人公と似ている。

第１０話　絵書き大会（前書き）

前回のあらすじ
今宵の絵は少しグロイ（うまいけど）

第１０話　絵書き大会

神下家をあとにした晃達は次はどこにいくのか迷っていた。
一様、ほとんどの人と挨拶をしたのでぶっちゃけてやることがなくなったのだ。
晃達は公園でお互い意見を出していた。

「じゃあ、やっぱり俺の友達の家へいこうぜ」
「「「「却下」」」」

透の考えは全員に全否定されていた。
なんでーと言いながら透は後ろに下がった。

「やっぱり、駅前に行きましょうか」

次は晃が提案した。

「アキ君。ここの駅前って何にも無いじゃない」
「あ、そうでしたよね」

晃の提案もドブに落ちた。

「そうだ。みんなで写生大会をしよう」

今宵がいきなり言い出した。

「たしかにいいかもしれませんね。でもそれなら明日のほうがいいのじゃありませんか」
「う～む。たしかにそうだな」

「じゃあ、決まりだね」
美紀がいきなり立った。
「明日、友達も読んで写生大会をしよう。今日はその準備で時間をつぶそうよ」
美紀が提案してきた。
「たしかに、それなら明日の予定も決まりましたね」
「優勝者はアッキーの手作りのスペシャルお菓子を食べられるのはどう？審査員は今宵ちゃんで」
「「ちょっとまて」」
晃と今宵の声がハモッた。
まあ、聞きたいことは大体分かる。
「それってつまり。僕らは参加できないわけですか」
「うん」
あっさり。美紀はなにも疑わないで言った。
「てか、僕が料理をするのは決定事項ですか？」
「ついでに拒否権はないからね」
「なんで？」
晃は全力で否定中。
「だって、そのほうがみんなやる気上がるのじゃないの。しかも２人とも絵が上手いのは分かっているから勝負にならないよ」

美紀の意見はごもっともだった。
今宵は美術の特待生なのでそれぐらいの絵のレベルは持ち合わせている。最近はふざけた絵しか描いていないが、それさえなければ相当なレベルだ。これでは勝負にならない。
晃は前回ものすごく上手い絵を披露したからこれまた勝負にならない。
しかも結衣は晃の作ったお菓子が独り占めできると思ったのか結衣の後ろには炎が燃えていた。なんか怖い。

と、いうことで明日は写生大会をすることになった。
各自、友達と連絡しあった。
場所は「自由荘」の近くだ。

※

次の日。
こうしてさまざまな人が来て写生大会が始まった。
晃と今宵は審査員なので描いてはいない。
メンバーは美紀、結衣、透の幼馴染と真に舞や大吾に伊織が来ていた。
簡単に言えばいつものメンバーになる。
みんな沈黙で絵を描いていた。
こうして時間が経ち、晃達の審査が始まった。

※

まずは透の絵。

「透まずさっさと帰れ」

いきなり今宵は毒を吐いた。
しかし晃にも言いたい気分はわかる。
透が写生したのは自分の服の柄だった。

「透。せめてこれ以外のものを書きましょうよ」

晃は呆れながら言った。

「透～失格」

今宵がスケッチブックを透の顔にスパーキング！！した。

※

次は舞。

「まあ、分かっていたのですけどね」

晃は何を言えば分からなかった。それぐらい絵が下手だった。
しかし、彼女の性格からしてはっきり下手といえば傷ついてしまうし、遠まわしに言っても同じことになってしまう。

「え～と。とりあえず」
「あれなので失格」

しかし舞は自分の絵のレベルを知っていたのか別に落ち込んではいなかった。
さっきの晃の悩みは一体。

※

お次は真。

「たしかに上手いといっていいかもしれませんか。卓球のラケットはありですか？」

あまりにも簡単すぎるので悩んでいた。

「まあ、上手いからいいのではないか？」

今宵が言ってきた。

「まあ、そうですね」

それを聞いた真はうれしそうに笑った。

※

次はこの大会の提案者の美紀だ。

2人とも美紀の絵を見たとたん目を疑った。

ついでに美紀は自信満々な顔をしている。

しかし、美紀のスケッチブックには変な生き物しか書いていなかった。

「美紀。夢の中の生き物は受け付けていませんよ」

晃が言った。

それを聞いた美紀は驚きながら言った。

「なにを、これはちゃんとした生き物だ」
「美紀。いいから寝てこれば」

今宵がそう言った。
完璧にこれが現実の生き物だと思えない。まだ、舞のほうが上手いほうだ。

「僕が考えたモンスターみたいな絵でよくこの企画を提案してきましたね」

晃が呆れながら言った。

「むう。この猫は自信あったのに」
「「猫！！！」」

2人とも意外な真実に大声を出してしまった。

「なんで猫の顔がこんなに長いのですか？」
「ああ。たまたまこうなった」
「逆にすごい才能ですよ。どこに行っても使えないだろうが」

晃はツッコミ続けた。

※

次は大吾。

「大吾さん。これは一体誰ですか？」

晃は大吾を呼んだ。

「おお、これは結構自信作だぞ」
「そうですか。でも描くなら」
「描くなら」
晃は一回ためた。
「現実にいる人を描きましょうよ」
大吾が描いたのはなんと2次元美少女だった。
「え？だめなの？」
「ダメ！！」
「妄想を写生してどうするのですか」
全否定だった。

※

次は伊織。
絵はそこそこ上手かった。
「「・・・・・」」
だが、コメントがしにくかった。
とりあえず2人とも良くかけましたと、言っただけだった。
こう考えてみれば下手なほうがコメントがしやすかったりする。
これはいい例かもしれない。

※

最後に結衣の絵だ。

「確認する前に結衣」

「なに？」

「その大量の紙はなんですか？」

結衣の後ろには丸められている紙が大量にあった。

「こ、これは、なんでもないの」

結衣は笑って誤魔化した。

本当は、優勝するために使った失敗した紙の山である。

しかしこんなこと晃の前で言えるわけが無かった。

そして、問題の絵は結果、伊織と同じレベルであった。

※

こうして、結果。真が優勝してこの写生大会は終わった。

だが、とある人たちは。

「アッキー。これはどう？」

美紀がまた、同じような絵を晃に見せてきた。

「こ、これも猫ですか？」

「違うよ。これはマングースだよ」

「マングース！？」

驚きの事実に晃は隠せなかった。

「え、絵はさっきとまったく変わらないのですが」

そう、絵のほうはまったく変わらない。

というか、違いを探すほうが難しいほうだった。

「美紀はもう美術をやらないほうがいいかもしれないな」

「うるさーい」

美紀は透を殴った。

「美紀ってやっぱりすごい才能持ってますね。どこで使うか分かりませんけど」

「それは言えるな」

晃と今宵は美紀の絵を見ながらため息をついた。

第１０話　絵書き大会（後書き）

優輝真（ゆうきまこと）
クラス学年：１年４組。技術科の体育学科特待生
年齢：１５　性別：女　第一人称「私」
身長：１５４　胸ランクＡ　誕生日：３月３０日
髪：金髪のふわふわロング。目の色は水色
ジョブ：素直になれない義妹。幼馴染カラーは黄色
好きなもの：ご飯、卓球
嫌いなもの：勉強
記：晃の義妹。晃には懐いており、時々素直になれないときがあるが、晃には好意を持っている。部活に卓球部に入っているが、人数は５人のだけだという。だが、運動神経はいいので東の丘学園卓球部エースとも言われている。
中学の頃も部長を務め、その実力を買われて今に至る。
外見が幼くかわいいので、同姓に良く好かれている。
勉強はものすごくやる気が無い。
晃のことを「あきにい」と呼んでいる。

第１１話　スーパー空き巣事件・前編（前書き）

前回のあらすじ
美紀も絵が下手。

第11話　スーパー空き巣事件・前編

東皆丘の商店街の夜。そこで事件が起こった。
扉が閉まっているはずのスーパーの中から物事が聞こえた。
そこには誰も知らない人影もあった。

―ゴソゴソ。

姿は黒い服を着ており、マスクとでっかい帽子を深くかぶっていた。
泥棒するときの格好と見ても良いほど怪しい。

「クソッここにもねえ」

男はつぶやいた。
その瞬間、明るいライトが男を照らした。

「誰だい！！」

店長と言えるおばちゃんが男に向かって言い放った。

（チッ、退散だな）

男はスーパーの窓ガラスを割り、外に逃げて行った。
外には誰もおらず、男はすぐに逃げることができた。

（絶対にここにあるはずだ。俺は絶対に探しだす）

男はそのまま逃げた。

※

朝。東の丘学園では夜のことで話題が持ち上がっていた。
晃は昨日電話が来たのでこのことはもう知っている。
舞も町長の孫娘なのでこの情報を生徒の中で一番早く知った。
実は晃に知らせたのは舞だったりする。

「思ったとおりにこの話題で持ちきりね」
「そうですね。美紀達に聞いたことによるとこんな事件が起こったのは珍しいと言ってました」
「うん。私もおじいちゃんに聞いた」
舞はうなずいた。

「でもなんでこの町を襲ったのかな」

晃の隣の席の伊織が話しに入ってきた。

「どうゆうことですか小方さん」
「伊織でいいわ。そうね。この町は大体地味だからよ」

伊織は親指を突きたてながら言った。
たしかにもう田舎と言っても過言ではないほどの下町である東皆丘。
そんなところなのにわざわざ泥棒してくる人はまず珍しい。

「なんか事件の匂いするわね」
「伊織さーん。もう事件は起こってますからね」
「でも、私達では何にも出来ないのじゃないの」

結衣が諦めモードで言った。

しかし、晃はそう思っていなかった。

「でも、興味本意ではないのなら犯人は東皆丘にいると思いますよ」

「どうゆうこと晃君」

晃の言葉に疑問を感じた舞が聞いてきた。

「簡単ですよ。なにかあるからこの町にいるというわけです」

「つまり、役目を果たすまで犯人はこの町に居続けると言うわけね」

舞が晃の言葉が理解できたようだ。

※

昼休み。

伊織が問答無用で言い放った。

「よし、みんなで犯人を捕まえよう」

しかしみんなの反応は。

「いっ」

「やっ」

「デスッ（死）」

真、透、今宵の順番で断った。

ほかのメンバーも断ってしまったが、晃は。

「いいですね。僕も協力しますよ」

「じゃあ、私も」

晃のほかに舞も了解してくれた。

「おお、さすが転校生2人組み。君の未来派明るいぜ」

「なに言っているのですかこの人は」

テンションが上がると正確が変わってしまう伊織。

このことは誰もが知っていることで未だに謎に秘められている。本人合わせて。

「いいのアキ君」

結衣が心配になってきたのか聞いてきた。

「この町になにか不思議なことがある。それは一番僕たちが体験しています。もしその人がそのことを知っていたら止めなければいけません」

「なんで？」

「この町にはこのままでいてほしいからです」

今の言葉で結衣は晃がどうしたいのかを理解した。

「じゃあ、放課後、集合でいいですね」

ついでに真、今宵は部活で、美紀はバイトで行かないようだ。

「いっ」

「いっ」

「デスッ」

透、大吾、伊織の順番で返事をした。

「さっきからなんですかそれは！？」

晃のツッコミが響き渡った。

※

晃達は放課後に集まり、くじ引きでメンバーを決めた。

晃、結衣ペア。伊織、舞ペア。男性ペア。

一部割愛させてもらったがこのペアに分かれて捜索を開始した。

晃、結衣ペア。

彼らは商店街の聞き込みの調査であった。

「結構情報が集まりましたが本当に必要な情報がありませんね」

「そうね」

商店街の聞き込み調査はまず、被害を受けたスーパーの店長に聞いてみた。

話によると、なんか不謹慎な音が聞こえたので見てみれば、厚着をした全身黒でマスクを付け、でっかい黒の帽子を深くかぶっていて。捕まえようとしたら窓ガラスを割って逃げて行った。のことだった。これでは情報があやふやなので、スーパーの近くの人たちにも聞いたところによると、ほとんどさっきの話とかぶるっていた。

そのことでこの話は本当だと分かった。

しかし、これしか情報は無かった。

ちなみに何でこのことを教えてくれたのかは2人がこの町の顔なじみなので怪しがられずに教えてくれた。

「しかし、これじゃあ、捜索もできません。犯人は必ず違う格好でこの町を歩いているはずです」
「聞き込み調査は微妙ね」
晃と結衣はため息をついた。

※

同時刻。男子ペ（以下割愛）はテキトーに歩いていた。
彼らはほとんど巻き込まれたのでやる気すらも見えなかった。
「なあ、大吾。これからどうする？」
「透はなにしたい」
いつのまにか下の方で呼び合う中にもなっていた。
「とりあえず、どっかはいらねえか？」
「そうだな」
「（以下割愛）」
本当に2人はやる気が無く同じ言葉を何度でも使いそうだった。

※

伊織、舞ペアは、学校の周辺を彷徨っていた。
「ここは実が隠れさす居場所だかね」
伊織たちがいるのは学園近くの裏山に来ていた。

近くには小学校もある。

「けど、ここに来るのは久しぶりだね」

「私もそうです」

舞は言った。

「あれ、神下さんは前、ここに来たの？」

「ええ。以前小学生のとき住んでいましたけど、とある理由で引っ越してしまいました。と、言っても転校したのは小１の頃でしたけど」

「なんか晃君と似ているんだね。彼も前ここに住んでいたんですってね」

「ええ。知ってます」

こんな会話をしているのに伊織の手はまったく休んではいない。

伊織の探し方に疑問を持ったのか、舞は言ってみた。

「あの、小動物では無いので草の中を探しても見つからないと思いますよ」

「やっぱりそうだよよね・・・」

いきなり伊織の言葉が消えた。

舞が伊織のほうを振り向くと、伊織は草むらに指を差していた。

顔を見ればものすごく驚いた顔をしていた。

舞は伊織に言われたとおりに草むらを見た。

そしたら舞も驚いた。

理由は簡単。

変なおじさんがそこで寝ていた。

「なにこのおじさん？」
「私に言われても分からないわよ」
「とりあえず離れましょう」
「了解」

舞の提案により2人はおじさんの下から離れた。
舞は速攻に晃に電話をした。

『は。舞ですか。どうかしましたか』
「晃君。変なおじさんを発見したよ」
『変なおじさん？〇村ではなくて』
「それでは無い人」
『分かりました。すぐに向かいます』

舞は電話を切った。
しかし、伊織がもう一度見直したときにはおじさんの姿は無かった。

「どうゆうこと」
「さあ」
「これは報告するしかないわね」
「晃君に予定変更をさせてもらいます」

舞はまた晃に電話をした。

※

晃達は喫茶店「Ｐｏｉｎｔ」へ集まっていた。
美紀ががんばってバイトをしていた。

「そうですか。ありがとうございます」

舞い立ちの話を晃達は聞いた。

「で、そこの2人は収入ゼロですか」

男子2人を全員みた。

「僕らのほうも役に立てそうな情報がありませんね。今説明したのが全てです」

「これだと、怪しいのはあのおじさんだよね」

舞は指をさした。そこにはある一人のおじさんがいた。

「そうですか。あの人ですかって、え!?」

晃以外にも全員驚いていた。

第１１話　スーパー空き巣事件・前編（後書き）

一之瀬美紀（いちのせみき）
クラス学年：１年１組。音楽科の声音学科特待生。
年齢　１６歳　性別：女　第一人称「わたし」
身長：１５７　胸ランクＢ　誕生日：５月５日
髪：赤髪の少し短めのツインテール。目の色は青
ジョブ：お調子者の幼馴染の第１ムードメーカー。幼馴染カラーは赤
好きなもの：人、クッキー、歌
嫌いなもの：勉強、歌が嫌いな人
記：晃が会った最初の幼馴染。
お調子者だが、彼女を嫌っている人はほとんどおらず、大人気。
「自由荘」の１号室に住んでいる。
小柄だが、力は男子にも勝るほどの力持ち。（多分幼馴染の仲では１番）
晃のことは「アッキー」と呼んでおり、そのほかにもたくさんの人をあだ名で呼んでいる。（本人の了承は受けてはいない）
歌が大好きで暇ありゃ自分のオリジナルの歌を歌っている。実力は確かなもので音楽科の声音学科の特待生。
勉強は苦手。

第１２話　スーパー空き巣事件・後編（前書き）

前回のあらすじ
男子共は割愛（乙）

第12話　スーパー空き巣事件・後編

全員驚いていた。
さっき舞と伊織の話によればこのおじさんがさっき山にいた人だということを。

「なんか、すごい偶然ですね」

晃が呆れながら言った。

「どうするのアキ君」

結衣が聞いてきた。

「どうすると言われましても。このまま様子を見るしかなさそうですね」

晃の提案に全員賛成した。
なんにしろあの人が犯人とは決まってはいない。確実な証拠を見つけなければいけない。
晃はすぐに美紀を呼んだ。

「なにアッキー」

「美紀、あのおじさんを少し仕事をしながられもいいので見張っててくれませんか？僕らも何名かここに残しますがやっぱり保険として」

「うん。分かった」

美紀はそう言って仕事に戻った。

晃はまたみんなに話しをし始めた。

「一様、僕と結衣はもうちょっと話を聞きたいと思っていますので席を離れます。そうそう。舞も一緒にきてください」

「うん」

そう言って3人とも「Ｐｏｉｎｔ」を出た。

※

晃達が来たのは舞の家でもあり、町長の家でもある神下家に来ていた。

「ほうほう。昨日の夜の事件のことを何か知っていたら聞きたいとな」

「はい。お願いします」

「おじいちゃん。お願い」

「お願いします」

3人とも頭を下げた。

しかし、舞のおじいちゃん、弦は笑って言い出した。

「ハッハッハ。残念ながらわしが知っていることは多分晃君たちが知っていることと同じじゃ」

「「「へ！？」」」

「わしもそのぐらいしか情報が来ていないと言うわけじゃよ」

「そ、そうですか。お邪魔しました」

「ごめんな。力になれなくて。そうだ舞。すこし来なさい」

「はい」

舞は弦に呼ばれた。
晃達は家の外で待っていたが舞からのメールで先に帰っていていっていたのでそのまま喫茶店へ戻った。
だが、そのあともおじさんの動きはまったく無かった。
そのまま1日が過ぎた。

※

「今日もいくぞ！！」

伊織が晃に向かって言い出した。
晃は一回ため息をついた。

「きょ、今日もですか？たしかにまともな情報が来ていないので探索するしか方法はありませんが」

昨日の収穫は裏山のおじさんのみだった。
これだけじゃ笑いすらも取れない。

「実は、あのおじさんはカモフラージュで実はぴちぴちのおにいさんだったりして」
「それだとむしろ簡単に予測はできますね」
「でもだったら楽しそうだよね」

美紀が話しに入ってきた。

「実はあのおじさんの正体はあの有名なル〇ン3世だったりして」
「美紀、それはありえません。しかもそれはアニメキャラです」
「あははは」

美紀は笑ってごまかした。

「じゃあ、実は幽霊で死んだのに未練が残っていたり」
「そうゆう冗談はほっといて」

晃が話題を切り替えようとした。

「ほっとかないで～あなた～」
「へんなこと言わないでください」

晃はキッパリとツッコンだ。

「まあ、とりあえずあの裏山に行くしかなさそうね」

結衣がころあいかと思いながら話しかけてきた。
たしかに、あのおじさんの正体を知るには裏山に行くのは当然のことだろう。

「じゃあ、行きますか」

※

て、わけで放課後。
真と今宵は今日も部活でいない。
舞たちを先頭にして晃達は昨日おじさんのいたところに向かった。
結果。

「・・・いませんね」

裏山に来たのはいいが、例のおじさんは昨日舞たちが見たところに

はいなかった。

「あれ～昨日はここにいたはずなのに」

「まさか。本当にル○ン3世だったのか！！」

今日はバイトは結衣が当番らしく、かわりに美紀が来ていた。

「いや、これだけでは判断できないね」

伊織が言った。

「いや、ル○ンはいませんから。それを前提にしないでください。とりあえず探しますよ。

さっき決めたグループで探しあいましょう」

「じゃあ、私は裏山の外の周りを探すわね。行くわよ美紀ちゃん」

「アイアイさーいーたん」

そう言って伊織と美紀は走って行った。なんか楽しんでいるのは気のせいだと思いたい。

（多分気のせいではないな）

晃は心の中でツッコンだ。

『晃は以心ツッコミを覚えた』

「じゃあ、俺達は商店街のほうへ行くぜ」

透が言った。

しかし、またこの男子チームになるとは誰も思っていなかった。

透と大吾は・・・以下割愛。
歩いて行った。

さて、残ったのは晃と舞。
この2人は裏山の中を探すことにした。

「とりあえず進みましょうか舞」
「うん」

舞は微笑みながら返事をした。
しかーし。現実は甘くは無い。
いくら探しても人の気配すらも見つからなかった。

「やっぱり、どこか行ってしまったのかしら」
「そうかもしれませんね」

晃達が諦めようとしていたが、そのとき、誰かの声が聞こえた。

※

「はあぁぁぁぁぁ」

ある一人の美少女が卓球のラケットを振っていた。
真だ。

「まこたん。なんか最近調子いいわね。先週から連勝続きね」

上級生と思えられる女子生徒が真に話しかけてきた。

「そ、そうでもありませんよ。あと、その呼び方やめてください」

ついでに、この卓球部では真の呼び方はいくつかはある。
だが、真には大きな迷惑である。

「やっぱり、お兄ちゃんに帰ってきてからかしらね。調子がいいのは」

―ブーーーー。

真は飲んでいたスポーツドリンクを吐き出しそうになった。
だが、もう噴出してはいる。

「このスポーツドリンクもお兄ちゃんのお手製なのよね。一回飲んだけどものすごく美味かったわ」
「か、勝手に飲まないでくださいよ」

真が否定した。
だが、実際真が今飲んでいるのは晃特製のスポーツドリンクであるのは確かだ。
栄養素も高いし、スポーツをした後には格別である上に、なによりものすごくおいしい。

「はいはい。お兄ちゃんの作った飲み物は自分のものだと言いたいのね」

真の顔がどんどん赤くなっていく。

「あ、あきにいはた、ただの兄ですので」
「でも、いいおにいちゃんなのよね。こんどここに連れてきてよ」
「え、遠慮します」

真は飲みながら断った。
自分のこんな姿は見られたくない。そう真は思っている。
兄妹といってもあくまで義理。だが、こんなやさしい晃に真は昔から好意を向けている。
義兄妹なのは誰にも話してはいない。もちろん晃も話してはいない。
久しぶりに会った晃は変わっていたがやさしさはものすごく上がっていて、真も話すときはどきどきしてしまう。

「帰ったらお話でもしよう」

真は心の中で笑った。

※

ただいまその真の兄、晃は草むらに隠れながら誰かの話を聞いていた。

「たっく。どこにも無いじゃねえかどうゆうことだ」

その人は昨日のおじさんと同じ格好をしていたが顔はまったく違った。
もっと若く３０代ぐらいの人だった。
その人はただいま電話をしていた。

（やっぱりあの人が犯人でしたか）

晃は心の中で決め付けた。
その後、晃は舞に何かを言い出した。

「え!?大丈夫なの晃君は」
舞は小さな声で言った。
「大丈夫です。では、頼みますね」
「う、うん」
そう言って舞はどこかに行った。
「ち、大切な情報はつかめていないのに俺をここまで連れ出すなよ。たっく。ここは居心地ものすごく悪いんだよ」
男はものすごく怒鳴っていた。
そのとき、あっちのほうで舞が走り出した。
―ガサガサ
草の音で舞の居場所を知られてしまった。
「誰だ!!」
男は振り向いた。
その瞬間だった。
「はい。もう終わりですよ」
晃は後ろで男に言った。
しかも、右手には銃を持っていた。
その銃を男の頭に当てていた。

「動かないでくださいよ。これは本物ですよ」
「き、貴様は誰だ」
「あなたに名乗る名はありません」
「誰だ貴様。そいつを離せ」

近くから仲間と言える男が現れた。

「そいつを離せ。じゃないと撃つぞ」

男は晃に銃を向けた。

「おじさん。それ銃刀法違反ですよ」
「お前が言うな」

確かにその通りだが。

「残念。僕は許可を取っていますから」
「いいから離せ」
「大丈夫ですよ。殺す気はありませんから」
「なにを」

その瞬間男が銃を持つ手を緩めたことを晃は見逃さなかった。

「呼び出し（コール）」

晃がそう行った瞬間。
左手から銃が現た。それを持った後その銃の引き金を引いた。
音は出なかった。
弾が当たったのは男が銃を持っていたところだった。
男は銃を持つ手を離した。

このときのタイムは1秒もかからなかった。まさに一瞬の出来事だった。

「だ、だれだ貴様は」

男は聞いてきた。

「星道高校結成団「団殺者（ディスター）」の一員。名は優輝晃。異名は「自由（フリーダム）」！！」

――！！

その瞬間2人の男達の顔色が変わった。

その顔はものすごく真っ青だった。

「貴様が、あの「自由者（フリーダム）」なのか」

「はい♪」

「「ま、参りましたーーーーー」」

男達はどけざをした。

「そ、そこまでしますか？」

晃はため息をした。

「あ、晃君」

舞が草むらから現れた。

「すみません舞。心配かけさせてしまって」

「そ、それはいいのだけど。今の話」
「みんなに話さなければ話しますよ」
「う、うん」
舞はうなずいた。

第１２話　スーパー空き巣事件・後編（後書き）

羽衣結衣（はごろもゆい）
クラス学年：１年１組　音楽科の演奏学科特待生
年齢：１５歳　性別：女　第一人称「私」
身長：１５８　胸ランクＣ　誕生日：２月９日
髪：水色のロングで左側に髪留めをしている。紫色の目
ジョブ：裏表あり学園のアイドル幼馴染。幼馴染カラーは青
好きなもの：ケーキ、ピアノ
嫌いなもの：お化け、ゴーヤ
記：晃の第２幼馴染。
晃には小さい頃から片思いしている。だが、未だに告白はしていない。
優しい性格だが、晃のこととなると、裏モードが発動する。このモードは自分の恋路が邪魔されたり、晃によって来る女のみに発動する。幼馴染の中で晃のみこのモードのことは知らない。
顔、スタイル、性格もいいので、男子にとっては学園のアイドルというべき存在。
沢山の男子から告白を受けているものの、本命は晃なので全てにおいて断っている。
ただいま料理を勉強中。勉強はそこそこ苦手。
晃のことを「アキ君」と呼んでいる。

第１３話　団殺者―ディスター―（前書き）

前回のあらすじ
犯人逮捕

第１３話　団殺者（ディスター）

東皆丘をさがわせた犯人２人は縄に縛られていた。
晃と舞は手ごろな岩に座り話していた。

「晃君。今のは一体なに？」
「簡単に言えば僕はさっき言ったことは本当のことです」

晃は一呼吸してからまた話した。

「星道高校結成団「団殺者（ディスター）」というのは名の通り科学都市にある学校星道高校の中で作られたまあ、簡単に言えば警察の学生バージョンと言ってもいいでしょう。ただし、警察とは違うのはどんな武器も持ち込みを許可されているのです」

晃は自分の手を見つめながら言った。

「それってもう国には許可取っているの？」
「それはもちろんそうですよ。だとしたら僕は引き受けませんから。そして「団殺者（ディスター）はそいつが悪人であれば殺戮許可も与えられています」

そのことを聞いた舞の顔はものすごく驚いていた。

「じゃあ、晃君も人を殺したの？」
「僕は殺していませんよ。ほかのメンバーも殺したと言う情報は一切入ってません」
「あれ？そういえばメンバーて何人いるの？」
「僕を入れて５人です」

意外と少なかった。それはそうだ。ものすごい実力の人でしたこんなオファーは来ない。

「そうなの。でも良かった。それで、晃君の「自由者（フリーダム）」はどんな意味なの」

舞がまた聞いてきた。

「そこは俺らが説明しよう」

つかまっている男が一人話しに入ってきた。

「まあ、自分で説明するよりいいでしょ」

「おうよ。こいつの異名の「自由者（フリーダム）」と言うのはその名の通り根本的に自由なやつだからだ」

話を聞いた舞は少し意味の分からない顔をしていた。

「そうだな、簡単に言えば突然現れてそれで、自分のやることを全て終わらせたらすぐにどこか行ってしまう。さらにその戦略は相手の思いもしない作戦を得意とする。それで「自由者（フリーダム）」と言われることとなっている」

男は説明を終えた。

その後、晃が口を開いた。

「まあ、メンバーに全員にある程度異名をもっています。偶然僕が貰った異名も同じでした」

「それはすごいね」

「あとの説明はこの人たちに聞かれるとやばいので後にしましょうか。とりあえず警察に渡しましょうか」
「うん」
そう言って2人は立ち上がった。
犯人はやめてーと言っていたが晃はお構いなく犯人を引きずっていた。

※

警察に渡した後、晃と舞はさっきの話の続きをしていた。
「そして、僕のさっきの力のことを舞は聞きたいのですよね」
舞はうなずいた。
「そうですね。「呼び出し(コール)」は僕がもっている超能力ではありません」
「え？じゃあ、なんなの」
「この力はこれのおかげで出来ているのです」
晃はズボンの左側にあるベルトを通すところに1つのストラップをみせた。形は十字架で中心には丸く、そして赤く輝いていた。
「このストラップを身につけているときに「呼び出し(コール)」は使えます。これは百個まで登録したものを電子化して、このストラップに入っているです。それで僕は自由にものの取り出しか可能になります。でも、４０キロ以上のものは電子化できません」
晃はストラップを触りながら説明した。

「これで僕が言えることは全て話しました。何か質問は」
晃は舞に聞いた。
「じゃあ、晃君。あなたはまた、こんなことをして行く気なの？」
「まあ、この町の周りで起きることは何とかしたいと思います。なにせ自分達がお世話になっているところなんですから」
「それでね。私も協力できないかな？」
「はい！？」
舞の意外な言葉に晃は聞き返した。
「私もね。変な力があるの。それでね。今のみたいなことだったら晃君に協力できると思うのだけど」
晃は一回ため息をついた。
「後悔しても知りませんよ」
「う、うん」
晃は舞の協力に応じたのであった。
※
次の日。
晃達は普通に登校してきた。
晃が普通に校舎へ向かっていた。
「アキ君♪」

結衣がいきなり晃の腕に飛びついてきた。

「ゆ、結衣。どうかしましたか？」

いきなり飛びついてきたので晃は驚いていた。

「アキ君。一緒に教室に行こう」

「まあ、いいですけど。なんで腕を組んでいるのですか？」

「いいじゃんこれぐらい」

「まあ、そのとおりですけど」

晃は気にしないで歩き出した。

結衣は晃と一緒にいてものすごくうれしそうな顔をしている。

だが、それはいいのだが、周りの生徒特に男子はこのことを良く思っていなかった。

「誰だよあいつ。あの羽衣さんと腕組しやがって」

「あの制服。例の転校生だぜ」

「チクショー。俺も羽衣さんとあんな風に登校したい」

結衣はその男子の言葉を聴いてもすぐごくうれしそうだった。

晃は顔を引きずっていた。

下駄箱に着くと晃のところに何かしらの手紙が入っていた。

「手紙ですか」

「どうしたのアキ君。あ！！」

結衣はなにか察知したらしく驚いていた。

「アキ君それら、ら、ら、ラブレ」
「とりあえず中身を確認しましょうか」
結衣が言い終わる前に晃は平然と封筒の中身を確認した。
鈍感男、優輝晃は躊躇なく中の手紙を見た。

「こ、これは」
「どうしたの!!」
「字が読みにくい!!」
結衣は晃の言葉を聞いて転んだ。

「まずアキ君はそこからなんだね」
「字が読めなければ手紙も読めませんからね」
「それはそうだけど」
結衣は自分の無駄に緊張したと悔しがっていた。

「しかもこれ果たし状ですね」
「何で分かるの?」
「これ筆ペンで書かれていますので」
結衣は再度転んだ。

「教室に入ってからゆっくり解読しましょうか」
「解読って一体」
晃と結衣は教室に入った。
晃は机に着いたとき早速さっきの手紙の解読を始めた。

結衣は机に鞄を置いた後、すぐに晃の元に行った。

「う～ん。なになに放課後にこの時間に来てください？」
「や、やっぱりこれラブレターなのじゃないの！！」

結衣がショックを受けたように言った。
まあ、自分が好意を持っている人にラブレターを貰うのはいやだ。

「あ、アキ君。絶対に行っちゃだめだからね」
「そうはいってもこの人に迷惑なのじゃないですか」

晃は正論を言った。

「どうしたのアッキーにゆーちゃん」
「あ、美紀」
「これみてよ美紀」

結衣は晃が持っている手紙を見せた。

「ん？果たし状？」
「なんでそうなるの」
「やっぱりそうですよね」

晃は納得した。

「も、もういいわよ」

そう言って結衣は自分の席に戻った。

「「？」」

晃と美紀はどうしたのかまったく分からなかった。

第１３話　団殺者―ディスター―（後書き）

朧今宵（おぼろこよい）

クラス学年：１年２組　芸術家の美術学科特待生。

年齢：１５歳　性別：女　第一人称「私」

身長：１６２　胸ランクＤ　誕生日：１月１１日

髪：紫の髪でポニーテールにしている。黄目。

ジョブ：男勝りなお絵かき幼馴染。幼馴染カラーは緑

好きなもの：煮物、絵

嫌いなもの：犬、怪談

記：晃の３人目の幼馴染。

すこし男勝で学校では無口。大和撫子みたいな美貌の持ち主だが、男子には近寄りがたいらしい。女子生徒には人気で特に中学生にはものすごい人気を誇っている。

幼馴染の中では晃に次ぐ常識人で透を良く鞭打っている。

最近、晃のことが気になっているらしい。

絵はものすごく上手く晃とも互角の絵の実力者である。

特待生でもあり、美術部にも所属している。勉強はまあまあ。

第１４話　み、見られていた！？（前書き）

前回のあらすじ
タイトルの意味がここにありました。

第１４話　み、見られていた！？

放課後。
手紙（果たし状と思われるもの）に書いてあった場所に着いた。
場所は校舎の屋上であった。
そこには焦げ栗色の髪色で短髪の少女がいた。

「きたか、優輝晃」
「まあ」

少女の問いにあいまいに晃は返事した。

「ならば！！」

その少女はいきなり振り返った。
右前髪に髪留めをしていた。見た目は結構かわいい女の子だった。

「勝負だ！！優輝晃！！」
「はい？」

晃は話がかみ合っていないのか聞き返した。

「あれ？お前優輝晃だよな」
「は、はい」
「じゃあ、果たし状を読んだはずだ。勝負しろって書いてな」

晃はその少女が書いたと思われる手紙を出した。

「やっぱりこれ果たし状だったのですね」

晃は呆れながら言った。

「なんだ、その呆れたみたいな口ぶりは」

少女は両腕を振って怒ったことをアピールしている。

「いいですか。あなたには聞きたいことが３つあります」

「な、なんだ」

「一つ！これは本当に果たし状ですか？」

晃は手紙を突き出しながら言った。

「そうだ！！」

「二つ！！なぜ僕なのですか？」

晃は自分を指差した。

「見たんだよ。昨日、大の大人を捕まえているところを」

「へ！？昨日」

晃は昨日のことを思い出していた。

思い出した瞬間、晃の顔は真っ青になった。

――見られてたぁーーーー！！！

完璧なる失態である。

「とりあえず三つ目いいですか？」

「おう！！」

「せめて筆ペンの練習はしてください！！！」

晃は少女が書いた手紙を見せ付けた。

しかし、彼女の反応は。

「あ、間違えた」

「へ！？」

「それは失敗したやつだ」

―ダアァァ！！

晃はズッコケた。

そして自分に呆れたのであった。

なぜ、あんなのを解読してしまったのか。

「あった！これが本物だ」

晃は渡されたものを呼んだ。だが。

「これ、どこが変わっているのですか？」

そう、手紙の中身つまり字の下手さは変わっていなかった。

「なにお！ちゃんと見ろ」

「ん？」

晃は少女が指を差したところを見た。

「名前が書いてある」

―ダアァ

晃は再度こけた。

「それだけですか！！！」

「うん」

なんか、少女のペースに巻き込まれている晃であった。

「で、あなたはこの手紙によると名前は源泉（みなもといずみ）さんでいいのですよね」

「おう。そうだ」

「この決闘はお断りさせていただきます」

晃は丁寧に断った。

「な、何でだ」

「僕にはあなたと戦う理由がありません」

「そうだとしたら力ずくで戦わせてやる！！」

そう言って泉はうしろのから棒を2本取り出して、繋げた後、電子を利用してて長くさせた。

「電脳式の棒！！」

なぜ彼女が持っているのかはまず考えないことにした。

なぜならその泉が襲ってきたからだ。

「はあぁぁぁぁぁ！！！今こそ正々堂々と勝負！！」

「もうこの時点で正々堂々ではありませんから！！」

晃は泉の棒術から避けながらツッコンだ。

「む、やるなお前」
「いいからやめなさい！！」
「やだ！！」
「子供か！！」

泉は子供だと思われるほどの無邪気さで襲い掛かってきた。
晃はただ泉に攻撃を避けていた。

「仕方ありませんね」

晃は何かを思いついたのか避けるのをやめて、体制を低くした。

「チャーンス」

泉は大降りで棒を振る落としてきた。
しかし、それが晃の狙いだった。
晃は即座に左手で棒をつかみ、右手は手刀で泉の手をなぎ払った。
そうすることで、泉から棒を奪うことが成功した。

「は、これでもう終わりです」
「こ、こら返せ～」
「返しますから猛攻撃しないでくださいよ」
「わ、分かったから」

晃は泉に棒を返した。

「何でいきなりこんなことしてきたのでしょうか」
「お、面白そうだった」

「・・・はい？」

晃は聞き返した。

「だから、面白そうだと思ったんだ」

「それで」

「決めた」

「だから、何を」

だが、晃はいやな予感しかしなかった。

「これからお前と手を組んでやる」

「・・・はい？」

2度同じ反応した晃だった。

「それはどうゆうことですか？」

「聞いたところにお前は学生警察なんだろ」

――そこまで聞かれていのですか！！

「それにあたしも協力したい。と、いうわけさ」

晃はこの娘の性格が分かったのか静かにため息をついた。

「断っても駄目なんですよね」

「決定事項だ」

「早い！！」

晃はもう一回ため息をついた。

「分かりました。あなたにも協力させてもらいます」
「オーイエー」
「何ですかその返事は」
「あたし独自のものだから気にしないでいいぞアキ!!」
「アキって僕のことを言ってるのですか?」

晃は自分を指差した。

「そうだ!!だからアキもあたしのことも好きに呼んでいいぞ」
「単純に泉と言わせてもらいます」

晃は呆れながら言った。

「それじゃあアキ!!あたしはもう帰るからバイバイ!!」

そう言って泉は屋上を出て行った。

「無邪気な子ですね」

晃もそのまま屋上を出た。

※

晃が校門前に来ると真が誰かを待つように校門の前に立っていた。

「どうかしましたか真」
「あ、あきにい」

真はいきなり話しかけられてビックリしたのか声が裏返っていた。

手には部活動具を持っていた。部活の帰りだと予想する。

「今日は早いですね」

晃はなんでここにいるかは聞かず別の話題を出した。

「うん、今日はたまたま」
「誰か待っていたのですか？」
「ううん。あ、あきにいを待っていた」
「え？僕を？」

真は無言でうなずいた。

「そうですか。じゃあ、一緒に帰りましょうか」
「うん」

晃に言われて真は笑顔になった。
多分久しぶりに見た真の笑顔だった。
真は話に聞いたところによると、この学園のマスコットみたいになっているらしい。
なにせ、朝校門に集まるのは男子よりも女子のほうが断然多い。
その人に聞いたら「もう、人形みたいでかわいい」と言っていた。
晃はそんなことを思い出していた。

「どうしたのあきにい」
「なんでもありませんよ」

2人は仲良く話し合いながら帰って行った。

第１４話　み、見られていた！？（後書き）

水戸透（みととおる）
クラス学年：１年４組　家庭科の衣服学科特待生
年齢：１５歳　性別：男　第一人称「俺」
身長：１７５　誕生日：１１月２２日
髪：金髪。目の色は緑
ジョブ：女子大好きハーレム幼馴染。幼馴染カラーは茶色
好きなもの：服、トマト
嫌いなもの：むさくるしい男、唐辛子
記：晃の第４幼馴染。
晃とは違い女子にものすごく興味があり、顔もイケメンなので、嫌う女子はいない。
だが、むさくるしい男子とは話すらもしようとは思っていないが、幼馴染の晃と、意外と興味が一緒だった大吾とは仲が良いい。
女子にも平気にエロ画像を見せようとする。そのたびに晃、結衣、今宵にはいつも殴られている。
服のデザイナーに将来はなりたいため、がんばって勉強中。だが、それ以外の勉強はだめだめ。

第１５話　第２ムードメーカ（前書き）

前回のあらすじ
お茶目な少女誕生

第15話　第2ムードメーカ

4時間目の授業が終わり、生徒は昼休みに入っていた。
晃たちも昼ごはんを食べようとしていた。
ただいま、購買に行った幼馴染と大吾を待っていた。

「おなか減ったよー」
「あ、来ましたか」

美紀を先頭に購買に行っていた人たちが帰ってきた。
ついでに晃、真、舞に伊織は弁当を持ってきている。

「早く食べようぜ」

透が言った。

「机の準備はできましたよ」

9人はあらかじめ決めていた場所に座った。

「やっぱり弁当はいいな～」
「立ったら美紀自分で作れよ」

美紀のつぶやきに透がツッコンだ。

「そうできたならもう作っているはずですよ」
「なはは。情けないもので」
「だったら晃が私たちの分を作ってくれよ」

今宵が晃に言った。

「僕的にそれは無理です。いったい何時に起きればいいのですか」
「でもアッキーの弁当食べて見たいな」
「そういわれても」

美紀がおいしそうに晃の弁当を見た。
そう見ていたら、美紀は何か思いついたようだ。

「そうだ、アッキー私のおかずと交換しようよ」
「美紀のは購買のやつですけどいいですよ。はい」

晃は卵焼きを箸につまんだ。

「いただき！！」

美紀は晃が箸につまんだ卵焼きを口を近づけて食べた。

「あーーー」

結衣、真、舞は叫んだ。

「こら美紀！！お行儀悪いですよ」
「「「そっちじゃないでしょ！！」」」

――？

晃は首をかしげた。

「だってお皿がないからしょうがないじゃない」

「あ、そういえばそうですね」
晃は美紀の言葉に納得した。
「だらかそうじゃないでしょ」
結衣は晃にツッコンだ。
晃は違う意味で納得したらしく、
「なんだ、結衣もなんか交換してほしいのですか？」
「え！？いいの」
結衣はさっきと違う反応を見せた。
「じゃあ、はい」
晃は次はシューマイを箸につまみ結衣に差し出した。
結衣は緊張しながらそれを食べた。
箸から口を離した結衣の顔はものすごく赤かった。
ちなみにここは教室なので、生徒がいないはずがなく、さらには結衣に好意を持っている男子どもは行いを時々ちらみしている人もいる。
そんな中、こんなことをしてしまったので、男子共は怒りと嫉妬の炎が背中に燃えていた。
中にはハンカチをくわえて悔しそうに泣いている人もいる。
逆に結衣はものすごく満足していた。
「じゃあ、アキ君。私のパンあげるね」
そう言って、結衣はパンを晃に近づけた。

「あ、いいですよ。僕は自分で持って食べるので」
「いや！！面倒だからこのまま食べて」
結衣はめちゃくちゃな理由をつけた。
晃はしょうがないですねといいつつ、口をパンに近づけた。
ついでに結衣が晃に差し出したパンは結衣がさっき食べていたパンで、しかも食べかけの部分であった。
何も気にしていない晃は普通に食べた。
（やった！！）
結衣はものすごくうれしそうな顔をしていた。
「どうかしたのですかね結衣は」
ちなみに大吾は今でも机をひっくり返そうなっていたが我慢している。
男どもは・・・以下略。
「あ、あきにい。私も」
真も負けじと言うままに晃に言ってきた。
「でも、真は僕と同じ中身なので交換する意味はありませんよね」
しかし、ものすごい正論で真の動きは止まってしまった。
ついでに舞は言い出せなかった。
―ガラッ！！

いきなり教室のドアが力強く開いた。

「アキー居る～」

泉だった。

晃は感づいたのか黙っていた。

「優輝君お客さんよ」

クラスの女子が晃を呼んだ。

「お、いたなアキ」

「何しにきたのですか泉」

「あれ、アッキー知り合い？」

美紀が聞いてきた。

「源泉だ。よろしく」

「あ、アキ君いつのまにこのこと仲良くなっていたの？」

「あきにい！！」

泉が自己紹介をした後すぐに結衣と真は晃に聞いてきた。

「い。いろいろ事情がありまして」

「そうだぞ。なんだってあたしはアキのあいぼ・・・むぐぐ」

晃は泉が言い終わる前に口を塞ぎ、舞にこっちきてのジャスチャーをした後、教室を出た。舞も一緒に行った。

「いいですか、泉。僕のあのことを知っている人は君と舞だけなのですから秘密にしておいてください」

晃は泉に言った。

「あ、そうなんだ。で、その子がそうなんだね」

「はいよろしくです。源さん」

舞は笑顔で挨拶をした。

「泉でいいよ。よろしく舞」

「はい。泉さん」

「それで、泉はどうかしましたのか？」

晃は話題を変えた。

「うん。昼ごはん一緒に食べようと思って」

「そうですか。じゃあ教室の戻りましょうか」

「おう！！」

3人は教室の戻った。

それはいいのだが、晃のみ、男子どもに捕まった。

「み、みなさん。どうかしましたか？」

「ちゃっと、聞かせてくれるかな優輝君」

その男子生徒の目はやばかった。

「なんでお前ばかりモテんだよ」

「な、なんのことですか？」

「いいからこい！！」

晃はさすがにすごい量の男子生徒には勝てず、そのままどこかに連れて行かれた。
ちなみにその中には大吾もいた。

「あ、アキ君？」

そのことに気づいた結衣だったが、もう遅い。

「あらあら、どこかに行っちゃたね～アッキー」

※

男子の拷問から逃げ延びた晃はひとまず休憩を取っていた。
そうしたら、一人の女性に声をかけられた。

「あの～、優輝晃さんですよね」

晃はその女子生徒を見た。バッチは赤色なので、2年生だと思われる。

「そうですけど、なにかようですか？」
「はい、実は頼みごとがありまして」
「はあ」
「良かったらちょっと着いて来てくれませんか？」

女子生徒は目を光られて期待のある眼で晃を見つめた。
こんな眼をされては晃も断れない。

「分かりました。で、どこに行くのですか？」
「2年の教室までちょっと」
「はあ」

どうやら、今日は長い一日になりそうだ。
晃はそう感じた。

※

そんなことで晃は先輩に連れられて2年生の教室へやってきた。が・・・

「ねえ、あの子じゃないの？科学都市から転校してきたという噂の子じゃないの」
「そうよ。だってあれ星道高校の制服だし」

廊下を歩いていたら2年生の女子のひそひそ話しが聞こえてくる。
しかし、どれだけ星道高校有名なのかこれで少しは分かった。

「さあ、入って」
「は、はい」

晃は先輩につられて教室に入った。
ちなみにこの先輩の名前は「佐藤亜麻（さとうあま）」と言うらしい。さっき教えてもらった。

「失礼しますね。佐藤先輩」
「みんなー連れてきたよー」

亜麻が言ったほうには2年の女子生徒が何人かいた。

それには晃も驚いた。

「で、それで何がしたいのですか？佐藤先輩」

「亜麻でいいよ」

「それでは、亜麻先輩。改めてなにをすればいいのですか？」

「うん実はね」

亜麻は深刻そうに言った。

「除き魔を捕まえてほしいの」

「・・・はい？」

晃は首をかしげた。

第１５話　第２ムードメーカ（後書き）

神下舞（かみしもまい）
クラス学年：１年２組
年齢：１５歳　性別：女　第一人称「私」
身長：１５９　胸ランクＣ　誕生日：１１月１１日
髪：黒髪でのロングで後ろ髪をリボンで軽く結んでいる
ジョブ：おとしやか癒し系美少女
好きなもの：ドーナツ、動物
嫌いなもの：男（晃は例外）お絵かき
記：晃と同じ日に転校してきた少女。
非常におとしやかで多少のことでは怒らない。
実は東皆丘の町長の孫娘である。
晃には好意を持っている。そのため、男子で晃のみ彼女と話すことが出来る。
簡単に言えば男性恐怖症でもあるかもしれない。（身内も例外）
晃の秘密を知ったのでこれから協力していきたいと思っている。
運動は苦手だが、頭は良い。
ほかに霊感が強いらしい。絵は壊滅的。悪いほうで

第１６話　覗き魔（前書き）

前回のあらすじ
ハンカチ加えて悔しいポーズ

第16話　覗き魔

その日の放課後。
晃は舞と泉を呼びかけた。
帰り道、泉も近くらしいので一緒に帰りながら用件を伝えている。
晃は途中弁当を食べ損なったのでコンビニから食べ歩きしている。
ちなみに残った弁当は真が消化させた。

「で、つまりその覗き魔を捕まえるのを了承したの？」
「ええ。それで、2人にも早速手伝ってほしいのですけど、いいですか？」
「さすが、アキ！！早くも面白そうになってきた！！」
「私もいいよ晃君」

2人とも了承してくれた。

「ではでは、もうちょっと詳しいこと説明してほしいッス」
「はい」

晃は説明を始めた。

※

で、2年生の教室に無理やり連れて来られた晃はとりあえず話を聞くことにした。

「それで、詳しいこと聞かせてください」

晃は真剣に言った。

「うん。私達は女子バスケ部の部員なんだけど。あ、ついでに私は部長ね」

女子バスケ部は去年作られた部活で部員はただいま2年生しか居ない。
成績は結構良く、女子達も人気が高い人が多い。

「その女子バスケ部がなぜに、覗き魔を捕まえてほしいと。あ、もしかして、着替え中に覗き魔がでたんですか？」

そこの女子全員うなずいた。

「で、そこでこの前、東皆丘商店街に現れた不審者を捕まえた晃君に犯人を捕まえてほしいの。ほら、もうすぐ秋の大会の予選が始まるから、こんな感じじゃあ練習がやりにくいの」

亜麻は両手をくっつけて晃にお願いした。

「分かりました。そんな事情なら仕方ありませんね。何とかしてみましょう」
「ほんと？ありがとー晃君」
「グエェ」

亜麻は晃に飛びついた。反動で、晃の首は絞まっている。だが、ほかに見ている男子は亜麻に抱きしめられてうらやましがっている。

「あ、亜麻さん。く、苦しいです」
「ご、ごめん」

そのとき、昼休みの終わりのチャイムがなった。

――あっ！！

「あ、チャイム鳴っちゃたね」
「そ、そうですね。では僕は教室に戻りますね」
「うん。ありがとう晃君」

こうして、晃は弁当を食べれなかった。

※

「な～るほど。事情は分かったよ」
「ついでに弁当が食べられなかった理由も」
「それは気にしないでください」

これが、晃の説明を聞いた後の感想。

「で、アキ。結局私達は何をすればいいの？」
「そうですね。時間もありませんし、明日までには決着を付けたいと思っています」
「でもどうやって？」
「いい作戦を思いつきました」

なになにと、泉と舞は聞いてきた。

「おとり作戦です」
「「・・・」」

いきなり2人は無言になった。

こんなときのおとり役といえば。

「まさか私達がやるの？」

舞が聞いてきた。

「はい。だからお願いしたんですよ」

「まあ、それは分かるけど」

「結局あたし達は何をすればいいの？」

泉が問いかけてきた。

「単純に女子バスケ部の部室で着替てください。ちなみに使用の許可はもう取っています」

「まあ、やっぱりそうなるよね」

「一番早い方法と言えばそうだけど」

舞と泉はすこし迷っている。

「ついでに覗きと言うことは男子と言うわけですよ」

その言葉に2人とも気がついた。

「覗きは女の敵！！」

「い、泉？」

「晃君！！私もやる」

「ま、舞？」

とりあえず、この作戦を実行することになった。

※

次の日の放課後。
今日は元々女子バスケ部の活動日である。
部員達は今日は少し遅めに練習を終わらせると言ってくれた。
部活の部室は専用の棟があり、女子は2階、男子は1階となっている。
女子バスケ部の部室の近くにはおおきな木が一本生えている。
その木に一番近くの草むらから黒いもじゃもじゃのものが見えた。

「まだ来ないようね」
「なにやっているのですか、泉！！」

そこには黒いアフロをかぶった泉と呆れている晃がいた。

「なにって、これはカモフラージュさ」
「カモフラージュになっていませんし、第一、泉はおとり役でしょ」
「いや～こっちのほうが面白そうなので」

泉はアフロの頭をかきながら言った。

「それはいいですから、はやく舞のところへ言ってください。あの人だけじゃ心配ですので」
「うん分かった」

泉はアフロを取って、部室に向かった。

「本当に分かっているのですかね」
「ねえアキ」

いきなり泉が切り返してきた。

「これかぶる？」

泉はアフロを持ちながら聞いてきた。

「かぶりません！！」

※

晃は詳しい作戦はあらかじめ説明していた。
晃は悟られないように隠れながら見張っていた。
そのとき、怪しい男子生徒２人が木に近づいてきた。
一人は木に登り始めた。その動きには迷いは無かった。

「おい、今日もいい光景を拝めそうだ」
「でも今入るのは１年の２人だぜ」
「いいじゃねえか。２人とも顔かわいいし。長い髪の子は胸がでかいし」
「ちゃんと写真撮ってくれよ」
「ああ。分かっている」

そう言いながら男は木に登っている。

（今です！！）

晃は草むらから飛び出して、地上にいる１人を捕まえた。

「な、何だ、貴様は」
「観念してくださいね。除き常習犯！！」

晃は縄を「呼び出し（コール）」した。
そのままその男を縛り上げた。

そして、同時に上のほうでは、

「おい！！どうした」

そう言って一回眼を離したのが悪かった。
そこには棒を持った、泉がいた。

「食らえ！！女の敵！！」

泉は思いっきり棒で男の頭を叩いた。
男は反動で手を離し、木から落ちて行った。
もちろん下には晃がいる。
そのまま捕獲した。

※

次の日。
3人は2年の教室にいた。

「いや～ありがとう。おかげでこっちも改めて練習に集中できるよ」

亜麻は喜びながら言った。

「それは良かったですね」
「よかったら、いつか、練習でも見てきてね」
「うん。見てみたい」

泉は張り切って言った。

「それでは僕たちは戻りましょうか」

「「うん」」

ちなみに、その男子は謹慎の処罰を食らった。

第１６話　覗き魔（後書き）

源泉（みなもといずみ）

クラス学年：１年３組

年齢：１６歳　性別：女　第一人称「あたし」

身長：１６０　胸ランクＢ　誕生日：６月２５日

髪：栗色のショートカット。右前髪に髪留めをしている。

ジョブ：好奇心盛りだくさん第２ムードメーカー

好きなもの：運動、ゲーム

嫌いなもの：炭酸、お化け

記：晃の自称相棒。

お調子者で美紀に続くムードメーカーである。

勉強は苦手だが、テスト前日は全部一夜漬け。

逆に運動は大得意。晃達の中では動く担当。

棒術に自信があり、持っている棒も電脳式の棒を使用している。

ゲームは美紀に全勝できるほどの実力を持っている。

炭酸はなんかトラウマがあるみたいで飲めない。

第17話　風紀委員（前書き）

前回のあらすじ
アフロ！！

第17話　風紀委員

晃は放課後、ある人に呼び出された。
風紀委員と書かれた腕章をつけている。
彼女にはあったことがある。そのときは制服のことを聞かせれた。

「なんですか？あなたは」
「ほほう。結構な口の利き方だな」

その女子生徒は上から目線の口ぶりで言った。

「聞いているのはこっちです。名前はなんですか？」
「私は鬻木刑（とどろきけい）だ。憶えとけばか者」

鬻木は物凄く上から目線だった。

「ついでに1年3組だ」
「僕と同学年ですか。で、僕に何のようですか？」

晃は改めて聞いた。
ＨＲの終わり後、教室でいきなり、同じ腕章をつけた男に呼び出された。それで、今に至る。

「貴様、このまえ女子バスケ部の更衣室を覗いたみたいじゃないか」
「あなたは何を言っているのですか？」

晃は呆れながら言った。

「なに？」

「その情報間違っていませんか」
「ふ、そんな言い訳しても逃れると思うなよ」
「はい？」

晃の目は少し真剣になった。

「どうゆうことですか？」

そう言ったらさっき晃を呼んだ男子生徒が言ってきた。

「お前。口の利き方を間違えるな。この方は風紀委員第３班の班長なんだぞ」
「第３班？風紀委員てそんなに多いのですか？」
「おっとそれ以上喋るな。時間の無駄だ」

鷺木は言い張った。

「あなたは何を言いたいのですか？僕は何もしていません。むしろその覗き犯を捕まえましたよ」
「ふっなんてでたらめを」
「うそは言ってませんよ」
「服装違反者のことなんて信じられるか」

鷺木は指を差した。
晃はおもいっきり呆れていた。

「あなたは人の話し聞いていませんね」
「だまれ。あのことは嘘だろ」

（この人、自分勝手ですね）

晃は少し怒りがみなぎってきたが、今は自分のことなので耐えることが出来ている。
そのときだった。
一人の風紀委員がこっちに来た。

「すみません。覗き犯が見つかりました」
「なに!?そうか今すぐ行くぞ。そこお前。もう何もするんじゃないぞ」

(なに言っているのですかこの人は)

しかし、2日後の朝。この人が言った意味が分かった。

※

晃と舞と泉は掲示板に張られていた学園新聞を見ていた。
内容は、「風紀委員。女子バスケ部の除き犯確保」だった。

「これ、捕まえたのあたし達よね」
「ええ」
「なんで、あんたらが捕まえていることになるんじゃーーーーーー」

泉は壁を叩いた。
だが、痛かったらしく痛みの物凄く耐えていた。

「でも、私たちのことは何にも乗ってないね」
「ええ。そういえば僕たちが捕まえたときはバスケ部の人たちに身柄を渡しましたよね」

「ねえ、ここのコメントに深刻な調査の結果捕まえることができました。って書いてある」

復活した泉が指を差した。

「思いっきり嘘書いているんじゃないですか」

「やっぱり、風紀委員に任せるのはまずかったわね」

亜麻がいきなり現れた。

「あ、亜麻先輩。いきなり出てこないでくださいよ」

晃はツッコンだ。

でも、いまの言葉には少し疑問を感じ取っていた。

「どうゆうことですか亜麻先輩」

「この学園の風紀委員は昔から乱暴で変といわれているのよ」

亜麻が指をつきたてながら言った。

「詳しいこと教えてくださいよ」

「つまり、ここの風紀委員は意外と風紀を守っていないでいないのよ」

「ああ、そういう意味ですか」

「どうゆうことですか？」

舞が意味が分かっていないようなので聞いてきた。

「つまり、風紀委員と名を利用しているだけという意味です」

「どういう意味」

舞は分かったみたいだが未だに泉は分かっていない様子だ。

「見方チームのメンバーの皮をかぶった敵チームのメンバー」

晃は泉に分かりやすい方法で言った。

「フッ。ひどいいいざまだな」

後ろには驫木の姿があった。

「本当のことを言っているだけですよ」

「大体嘘は言っていない。ちゃんと調査はした」

晃はある意味思い出した。

「まさかこの前のあのことですか」

「そうだ」

驫木は自慢そうに言った。

「そういえば亜麻先輩。何で1年生の階に来ているのですか」

「無視するな」

「ああ、それはね」

「おい！貴様も聞け！！」

驫木は竹刀を出し始めた。

そして、亜麻に振りかぶってきた。

晃はその竹刀をとっさにしないを握った。

「鷺木さん。この人は先輩ですよ」
「そんなの関係ない。私は風紀委員だ」
「やっぱり、そうじゃないですか」
「き、貴様」

晃の目は怒りにあふれていた。
鷺木は竹刀を引き、そのままどこかに行った。

「どうやら、このことは本当みたいですね」
「見方チームのメンバーの皮をかぶった敵チームのメンバーのこと？」
「ええ」

晃は手を払った。

「それで、亜麻先輩。改めて話をどうぞ」
「ああ、実はこのことなんだけど」

亜麻は新聞を叩いた。

「私はねあの人に文句を言ってきたんだけどもう遅いみたいね」
「やっぱりこんなことは知られてほしくありませんよね」

舞が同感した。

「それはそうですよね。気持ちがいいことだとは思いませんよ」
「それだけ、じゃあね。そしてありがとう」

そう言って亜麻は階段を下って行った。

※

その日の放課後。
晃は校内を歩き回っていた。
舞と泉は今回は一緒にはいない。
2階の特別教室の棟からなにやら音が聞こえた。

「きゃ、きゃあ!!」

晃は驚いてその部屋を開けて入った。

「だ、大丈夫ですか」

そこには女子生徒が地面に座り込んでいた。
前にはこぼれたお茶があった。

「え、ええ」
「ど、どうしたのですか?」
「すみませんね。手が少ししびれていたもので」

その人はおとしやかに話しかけた。
髪は銀色のロングでスカートまで伸びており、カチューシャをつけていた。

「大丈夫ですか?僕がやりましょうか」
「だ、大丈夫です。他校の人には迷惑はかけられません」
「僕一応、ここの生徒ですよ」
「へ!?」

※

晃とその女子生徒は落ち着いてお茶を飲んでいた。

「ありがとうございます。お茶物凄くおいしいですよ」

その人はにこやかに笑った。バッチを見てみると2年生のようだ。
晃は落ち着いたのか、ここがどうゆう場所なのか思い出した。
ここは、生徒会室である。

「改めてありがとうございます。この学園の生徒会長を勤めさせてもらっている。柊静音（ひいらぎしずね）といいます。以後お見知りおきを」

そしてこの人は生徒会長であった。
聞く話だと、2年生で生徒会長なんてすごいことらしい。
いままでの会長はみな3年生ばっかりだったらしいが彼女のみ2年生で勤めている。

「ご丁寧にどうも。僕は優輝晃といいます」
「優輝晃君。では、アキ君ですね。私のことは静音と呼んでください」
「はい。静音先輩」
「先輩も要りません」

優実はかわいくだめというジェスチャーをした。

「よろくしくお願いします。静音さん」
「そこで、アキ君。お願いがあります」

なんか今日もトラブルに巻き込まそうな感じであった。

第１７話　風紀委員（後書き）

小方伊織（おがたいおり）

クラス学年：１年１組

年齢　１６歳　性別：女　第一人称「わたし」

身長：１５９　胸ランクＣ　誕生日：５月２０日

ジョブ：学級委員長権高テンション娘

好きなもの：おもいろいこと

嫌いなもの：不良

記：晃のクラスの学級委員長。

面白いことがすきで、そのことでテンションが上がると、美紀と同じぐらい性格が変わる。

普段はおとなしく秀才。

運動も出来るまさに、文武両道といえる人。

ちなみに食べ物はみんな好き。

第１８話　生徒会会長補佐（前書き）

前回のあらすじ
生徒会長あらわる

第１８話　生徒会会長補佐

晃は生徒会長のお願いがどんなのなのか予想が出なかった。

「生徒会の補佐会員になってもらえませんでしょうか？」

「ほ、補佐会員？」

晃は聞きなおした。

「はい。生徒会を生徒からの協力者をお願いできるのですけど、それに私の担当でお願いできませんか？」

「そ、それって会長の仕事の手伝いをすることですよね。そんな重要な役割、僕が担当してもいいのですか？」

「まったくよくない！！」

ドアの音と共に、女性の大声が聞こえた。

「静音が良くても私はよくないぞ」

「あ、あなたは？」

「生徒会副委員長！！荒井鈴（あらいすず）でだ！！」

副委員長こと鈴は髪は黒で、静音と正反対のショートヘアーの人だった。

背もなんだか高く男見たいな人だった。

「大体静音。何でこいつがお前の補佐会員に指名されるのだ！！」

鈴は晃を指差した。

晃はなんだかぼろく言われてなんだがいやな気持ちだったが、理由

は聞きたかった。

「それはですね。入れてくれたお茶がおいしかったからですよ」

―ダアァ！！

鈴と晃は同時にコケた。

「お、おまえは！！」

「そ、それだけですか！！」

そして同時にツッコンだ。

なんだか2人は息が合うようだった。

「あらあら、2人とも息ピッタリのようですね」

静音は笑いながら言った。

「アキ君は家で家事でもしているのですか？」

「ええ。一様」

静音にいきなり質問されたが晃は冷静に答えた。

「だからって、それだけで話を進めるな」

鈴が言っている事は正しい。

会長補佐といえば副会長と方をなれべてもいいほどの地位だ。

「もちろん。それだけではありません」

静音は言った。

「じゃあ、なんだ」

「実は私の弟が彼のお知り合いなのですよ」

そう、静音には弟がいた。

「へ、翔太の知り合い」

「も、もしかして」

静音は気づいてくれたのが分かったみたいにニコッと笑った。

「翔太のお姉さんて、そういば同じ柊という苗字でしたね彼も」

「しょ、翔太を知っているのか？」

鈴は驚きながら聞いてきた。

「知り合いどころか、科学都市での親友ですよ。って静音さん。僕のこと知っていましたね」

晃は疑いの目で静音を見た。

「あらあら、気づかれちゃいましたか。そこまでは気づかなくって良かったのに」

笑っている静音と裏腹に鈴は驚いている顔をしていた。

「で、翔太にお願いされたのですよ。親友をお願いすると」

「もう一つのＰＳはなんでしたか」

晃は感づいたように言った。

「補佐委員にしてこき使っても可」

「・・・なるほど」

晃は諦めたような顔色になった。

「それで、鈴はどうですか」

静音は鈴に聞いた。

「ま、まあいいだろう。私も許可する」

「ありがとうございます」

晃はため息をついた。

※

帰り。鈴は部活動具を取りに一回部室に戻ったらしく、今は晃と静音の2人っきりだった。

晃は何か思い出したらしく、静音に聞いた。

「そういえば、僕と翔太の例のこと知っているんですか」

もし知らなかったときのために隠しながら聞いた。

「実はＢＬの仲だということですか」

「違います」

静音の悪ふざけの言葉に晃は速攻で否定した。

「わかっています。「団殺者（ディスター）」のことですよね。知っていますよ。自由者（フリーダム）さん」

静音は笑いながら言った。

「どうやら、ほかの人にはきちんと秘密にしてくれているようですね」

晃は一息ついた。

「そういえば、静音さんはこっちのほうで道はあっているのでしょうか」

歩きながら晃は聞いた。

「あっています。私は東皆丘の人ですから」

「あ、そうでしたか」

静音はまたクスッと笑った。

「アキ君は優しいのですね」

「へ！？」

「翔太が言っていた通りの人ですね」

「・・・？」

晃には言っている意味は分からなかった。

「まあ、これから、会長補佐としてがんばってくださいね」

「はい」

※

家に帰った後、晃は真に生徒会のことを聞いた。

「え!?生徒会のこと?どうしたのいきなり」

「ほら、この前思ったのですけど、生徒会はどうなんですかねと思いまして」

晃は自分が会長補佐会員になったことは伏せていた。

「確か生徒会は風紀委員よりもやわらかいと聞いた」

真は説明してくれた。

「あれ?普通は逆なんでは」

「まあ、風紀委員があんなんだからこっちとしては楽なのよね」

「でも、今の風紀委員は生徒会と同じ権力を握っているとか聞きました」

そう、なぜか、風紀委員には生徒会と同じ権力を持っているらしい。聞いたところ、学園長の息子が今の風紀委員の顧問をしているらしく、その先生は物凄く自分勝手で学園長を脅して、同じ権力にさせたようだ。

「なんて自分勝手なんでしょうか」

「でもそんなことして意味はあるの」

真が逆に聞いてきた。

晃は説明した。

「自分が顧問をしている委員会、部活がえらくなれば、その上の地位の顧問は株が上がります。企画を通すときとか顧問に了承を貰わなければいけないみたいな」

真はテレビを見ながら聞いた。

面白そうな話みたいに感じたらしく、真剣に話を聞いていた。

「つまり、権力さえ握れば上の地位である顧問はほとんどなんで出来てしまうのです。ある程度は」

晃は説明を終えた。

「つまり、第2の生徒会みたいなもん？」

「そうとも言えますね。複雑ですけど」

ふ～んと真は言った。

「て、それよりも、生徒会のこと教えてくれませんか？」

「それならわたしが教えて進ぜよう」

美紀がいきなり庭のドアから来た。

「お引き取りください」

晃は美紀をドアに戻そうとした。

「な、何で～なんか面白そうだったから」

「なんか美紀が来ると話が変なほうに脱線しそうなんですけど」

晃は今までの体験を生かして言った。

「説明してあげる。生徒会はね」

「無視ですか」

「簡単に言えば生徒の中で偉い人だよ」

「真、さっきの続きお願いします」

晃は諦めて真の話のみを聞こうとした。

「おいまて！！」

「生徒会はいまは女子のみで結成されているはずだよ。そうそう、補佐のほうもまだ一人も決まっていないらしいよ」

真は容赦なく説明を終えた。

「まこちゃん。わたしの出番プリ～ズ」

美紀は叫んだ。

――あれ、じゃあ今補佐を入れて男子は僕一人ですか。

驚愕の事実を知ってしまった晃であった。

この後、美紀を部屋まで帰すのに時間がかかったことは言うまでもない。

第１８話　生徒会会長補佐（後書き）

小松大吾（こまつだいご）

クラス学年：１年１組

年齢　１６歳　性別：男　第一人称「俺」

身長：１８１　誕生日：１０月３日

ジョブ：第３ムードメーカー＆バカ専用機

好きなもの：女、パソコン、オタク用品

嫌いなもの：不良、生真面目なやつ（男のみ）

記：女が大好きなオタクヤロー。

本命は結衣らしいが、周りの女の子をナンパしているときが多い。

そのたびに透以外の人に殴られている。

意外と透と中がいい。

第１９話　生徒会役員（前書き）

前回のあらすじ
生徒会長爆弾

第19話　生徒会役員

次の日
晃はメールで静音に呼ばれて生徒会室の前まで来ていた。

（一体なんでしょうか）

晃はそう思い生徒会室に入った。

晃が入ったとき、クラッカーが2、3個鳴った。
クラッカーの中のものが晃の頭についた。
晃は何が起こったのか分け分からなかった。

「コラ、静音。やっぱりこうなっちゃたじゃん」

鈴が静音に言った。
どうやら鈴が晃がこんな反応をすることを予想していたらしい。

「あ、あの～これは一体」

われに返った晃は生徒会室を見通した。
そこには昨日にはいなかった3人が座っていた。

「静音さんの性格から考えるともしかしたらこれは」
「はい！アキ君の思ったとおりだよ。これは君の歓迎会だよ！！」

（やっぱりー！！）

晃の予想は当たった。

「別にいいですのに、僕は大体補佐ですのでこんなことしなくても」
「だめだよアキ君」
静音は晃に指差した。
「アキ君には生徒会でたった一人の男子として働いてもらうからほかの子の補佐もやれるように一回あったほうがいいかなと思ってさ」
「は、はあ」
「て、わけでみんな自己紹介をして！！」
静音は言った。
一人目は黒髪の長髪で左右を髪留めしている眼鏡をかけた少女だった。
「生徒会書紀、瓜生琴美（うりゅうことみ）、２年５組」
そっけない感じで言ってきた。
次は黒髪のポニーテールの１年の女子だった。
「１年６組、生徒会会計、波木（なみき）ささらです。よろしくお願いしますね」
この人はなんだか静音と同じで違うように見えた。
最後に赤茶色のショートヘアーで、後ろ髪をまとめていた。１年生だ。

「はいは～い！！１年３組！！生徒会庶務！！福本泰子（ふくもとたいこ）だよ！！！。今後ともヨロシク～！！」

元気良く挨拶をしてくれた。

「さて、そしてアキ君！！自己紹介どうぞ」

静音に言われて晃は自己紹介をした。

「今回会長補佐になりました。１年１組、優輝晃です」

晃は頭を下げた。

そのことを聞いた泰子は食いついてきた。

「君って確かこの前来た転校生だよね。制服が違うし」

「じゃあ、本当にあの星道高校から来た人なんですね」

その言葉に続いてささらも晃に聞いた。

「ええまあそうです」

晃は言った。

「おやおや、もう仲良くなってくれましたのね。みんな悪い子じゃないので仲良くなってくださいね」

「は、はい」

晃は答えた。

「一様、私を中心に補佐してくれる形で、私の用事がなかったらア

キ君を使ってもかまいませんよ」
「え!?それはもう決定事項ですか?」
晃は不安になり聞いた。
「ええ。反論は認めません」
バッサリと静音は言った。
「じゃあ、これからよろしくね。僕のことは泰子でいいからね。よろしくアッキー」
「私のこともささらでかまいませんお。よろしくね晃さん」
「は、はあ」
こうして、晃の生徒会雑務の生活が始まった。
※
休み時間。晃は美紀に呼ばれた。
「ねえねえアッキー。思ったんだけどアッキーは部活は入らないの?」
前の席から机に頬をつけて聞いてきた。
「僕はですね~」
晃は少し思い出した。
それは自分に学校内の自由な時間があるのか。
結果・・・家に帰るまで自分の時間がないことに気づいた。

いや、正確には学校内は生徒会の補佐や、事件の解決（あるときのみ）

あれから静音に頼まれて、なにか学校内の事件が起こった時、風紀委員よりなるべう早く解決してほしいらしい。
晃が「団殺者（ディスター）」のメンバーと知りつつ静音は晃に頼んできた。
理由はこれ以上あまり風紀委員に自由な権利を渡したらよくないらしい。

まあ、考えては見るもののそれは正しい判断だと思い、晃は了承した。

そして、家に帰るものの家の中には腹ペコ大魔王の真が家にいるため、早く家事をしなければならない。
結果、彼にはほとんど時間がなかった。

「やめときます。部活をやってしまったら腹ペコ大魔王がうるさいですから」
「あははは。やっぱりそう」
「そういえば晃君と真ちゃんて、同じ歳なのに兄妹なのね」

伊織が話しかけてきた。
隣の席なのでさっきまでの話を聞いていたらしい。

「まあ、一様義兄妹なので」

晃は爆弾を口にした。

「え!?そうなの？知らなかった」
「え!?真から聞いたんじゃあないのですか？それとも誰かが言っ

たかと思いました」

晃は知らなかったことに驚いていた。
もちろん、伊織は晃と違うことに対して驚いていた。
こっちの話を聞いていたクラスにいた人も伊織と同じ理由で驚いていた。

「だ、だめだよ晃君。血のつながっていないうら若き男女屋根の下2人っきりなんて」

ついでに伊織は晃には親がいないことは言っておいた。

「まあ、いいのじゃないの、私なんか近くのアパートに住んでいることだし」
「ど、どうゆうこと？」
「私や、ゆーちゃんもこよちゃんもとーちんはアッキーが大家のアパートに済ませてもらっているんだよ」

美紀も爆弾をはいた。

「あれ？美紀そのことも伝えていなかったんですか？」

晃はまた違うことで驚いていた。

「え、ど、どうゆうこと」

伊織は改めて聞いてきた。
なんだかこんがらがっている様に見えた。

「こうゆことだよ。ね、ゆーちゃん」

美紀は近くにいた結衣に言った。

「う、うん。そうよね。アキ君にはいっつもお世話になっているわ」

結衣はテレながら言った。

結衣もこのことが恥ずかしかったようだった。

「まあ、真は本当に小さい頃からそうですので何か問題が？」

「まあ、幼稚園からのだからね」

美紀は捕捉した。

「まあ、アパートのことは僕は朝からおこｓｓｓｓｓ」

晃はいきなり結衣に口をふさがれた。

このことだけは結衣はなんとかしても言わせたくないらしい。

男子は晃を羨ましそうに見ていた。

晃は結衣の手をやさしく叩いて言わないと合図した。

「プハァ、でも今は何も正確に支障はないので何の問題もありません」

晃はバッサリと言った、

このとき、クラス中の誰もかが、晃のことを超鈍感だと分かった。

※

放課後、晃は一人で帰ろうとしていたが偶然、静音と鈴にあった。

「てか、なんかこれ偶然ではないような気がします」

晃は言った。

「私もそう思う。というか静音、今日は商店街に行くのじゃないのか？」

鈴も晃の言葉に同感らしく、静音に聞いてみた。

「ええ、そうですよ。だからアキ君も一緒にと思いまして」

「は、はあ」

「まあいいだろう。聞いてみれば君も地元の人だと聞いたぞ」

鈴は晃に言った。

「ええそうですよ」

「それではレッツゴーです♪」

静音が愉快に手を上げた。

※

商店街に着いた。

静音は家の買い物をしたかったらしい。晃もついでに買い物をした。

「そういえばアキ君は家事していると言ってましたね」

静音は思い出しながら言った。

「ええ、親がいないので僕が家事をするしかないのですよ」
「そうなのか」
「あ、そういえば、ここに私の先輩がここの近くで店番しているのですよ。一緒に行きましょう」
静音が話題を変えた。
「そうなのですか、その人の名前はなんていうのですか？」
「うん。笛と言う人ですよ」
――ふ、笛さん！？
晃はこの名前は聞いたことがあった。
（も、もしかして）
静音は薬局にいた。
（やっぱり、ここの笛さんでしたか。て、あれ？）
しかし、そこにいたのは笛ではなかった。
「あ、アキ君！？」
そこにいたのは幼馴染で、羽衣笛の従妹の羽衣結衣だった。
「ゆ、結衣！？なんでここに？」
「私は頼まれて店番していたの、アキ君はその様子だと買い物？」

結衣は笛に頼まれて変わりに店番をしていたらしい。
ついでにこのときは店は大繁盛していたらしく、今はやっと落ち着いたところらしい。

「ええ、まあ、そんなところです」
「あ、アキ君。この方とお知り合いですか？」

静音が後ろから声をかけてきた。
結衣はそのとき、どす黒い気持ちがあふれてきた。

結衣も知っているようにこの人は生徒会長で結衣と肩を並べられるほど人気を誇っている。
そのことは結衣にとっては今は関係ない。関係あるのはなぜ、その人と晃が一緒に居ることなのだ。
しかも、「アキ君」と、自分しか呼んでいない呼び名を取られた気分だった。

「あ、紹介します。彼女は僕の幼馴染の羽衣結衣です。笛さんの従妹ですよ」

晃は結衣のことを静音と鈴に紹介した。

「ああ、羽衣のことは前から知っている。学園のアイドルと言われているのだろう」

鈴が言った。

「え、結衣って学園のアイドルとか言われていたのですか」

晃は今始めて知ったらしい。

「どうも、柊生徒会長さん」
「どうも」
結衣のどす黒い炎は晃には見えなかった。

第１９話　生徒会役員（後書き）

柊静音（ひいらぎしずね）

クラス学年：２年３組

年齢　１７歳　性別：女　第一人称「私」

身長：１６５　胸ランクＤ　誕生日：４月１７日

髪：銀髪で、ふわふわロングでカチューシャをしている、赤目

ジョブ：やさしくお茶目な生徒会長

好きなもの：お茶、かわいいもの

嫌いなもの：友達を悪く言う人、球技

記：東の丘学園生徒会会長

普段から落ち着いておりやさしい性格。だが、時々悪ふざけもする。

生徒会の仕事では集中力をよく切らしがち。

頭はいいが運動は平均。

晃のことを気に入っており、彼のことを「アキ君」と言い、生徒会

会長補佐に指名した。

晃の秘密も知っている。

この性格で生徒会長のために学園中の人に信頼されているアイドル

的な存在でもある。

第２０話　男子と弁当（前書き）

前回のあらすじ
生徒会は女だらけ

第２０話　男子と弁当

晃は結衣に生徒会のことを全て話した。

「へえ～どうりで仲が言い訳ね」

これが結衣の感想だった。

「ええ。そうなのですよ」

静音はニコニコと笑っていた。

「それよりも、お前達が幼馴染だったとはな。これは私も驚いた」
「え！？結衣のこと知っていたのですか」
「さっきも言ったとおり、結衣さんのことを知らない人はいないほうが珍しいほうですよ」

静音が説明した。
鈍感王の晃はへえ～と言って返した。

「じゃあ、これからはアキ君も忙しそうね」

今の結衣の言葉にはなんだか刺があった。

「そうなのですよ。あ、店に来たついでになんか買っときましょうか」

そう言って晃は薬があるとこを見に行った。

「と、言うわけで、しばらくアキ君を借りますよ」
「なんかあいつがものみたいな言い方だな」
鈴が静音の言い方にツッコンだ。
しかし、そんなことはどうでもよく、結衣と静音には火花が散っていた。
「はい、これをください結衣」
晃が緊張の空間に入り込んできた。
買い物籠には何個か商品が入っていた。
「アキ君はや！！」
結衣は速めに帰って来た晃に驚いていた。
声には出していないが静音と鈴も驚いていたいていた。
会計が終わった後、晃達は帰ろうとしていた。
「結衣、お仕事がんばってくださいね。デザートでも作っておきますよ」
店を出る前に晃がこう言ったので、結衣のやる気が物凄く上がった。
※
学園の昼休み、晃達はいつもどうり、みんなで昼ごはんを食べようとしていた。
あいからわず周りの人（特に男子）は羨ましそうに見ていた。

「アッキー!!今日の弁当の中身はなに?」
「美紀、今から開けますからそんな眼で見ないでください」
晃は美紀の顔を弁当から離した。
「あとそこ、横取りのスタンバイしないでください」
泉が箸を持って晃の弁当を狙っていた。
そのときだった、例の爆弾が来たのは。
「あ、せ、生徒会長」
1人の男子の声が聞こえてみんな振り向いた。
ただ一人を除いて。
「あ、副会長も一緒よ~」
どうやら、鈴も一緒らしい。
声はどんどん、教室から近くなってきた。
そのまま、教室に爆弾が入ってきた。
「お邪魔しますね」
やっぱり静音だった。
「あ、柊会長だ。1年の教室に来るなんて珍しいわね」
「お、俺会長に挨拶しようかな」

静音は1組の生徒に手を振って挨拶をした。
ちなみに晃はちゃっかり姿を隠そうとした。
だが、静音のことを甘く見ていた。
「あ、アキ君いましたね」
あっさり見つかった。
クラス中えーーーーーという声に響き渡った。
「あ、アッキー生徒会長とお知り合いだったの?」
「てか、あきにいのことアキ君って呼んでいた」
美紀と真が言った。
結衣にたいしては晃が見ていないうちに裏モードに入っており、ぶつぶつと何かを言っていた。
こわいのでここは触れないようにしよう。
ついでに男子の怖い視線には晃も気づいた。
「もう、アキ君たらなんでそんなところにいるのですか?」
静音がしゃがみながら言った。
「ほほう、晃はこの人とどういう関係なんだ」
今宵の言葉にみんな激しくうなずいた。

「え～と、簡単に言いますと」
「アキ君は私の愛人ですよ」
―ピキッ！！
そこらじゅうからこんな音が聞こえた。
なんだかみんなが怖かった。
「と、静音さん。皆さん嘘ですよ。お気を確かに」
「はい、冗談です」
静音もふざけながらでも訂正してくれた。
「そ、そうなんだ」
「あきにい、だったらどういう関係？」
「アキ、しっかり聞かせてね」
「晃君、嘘は言わないでね」
「晃、安心しろ、死体はちゃんと埋めるからな」
「なんか一人怖いといってませんでしたか！！」
晃はツッコンだ。
そして、改めて説明した。
だが、説明しだしたのは静音だった。
「アキ君は今回から生徒会会長補佐になってくれました。て、ことは私のことですけどね」
静音がお茶目に言った。
「え、そうなのアキ！！」

さすがの泉も驚いていた。

「なんか成り行きでそうなりました」
「だったらアッキーも、お偉いさんになるの」

美紀が意味の分からないことを言った。

「多分違うと」
「そうなんだもぐもぐ」
「あ！！真、僕の弁当食べましたね！！」

晃は気づいて真に言った。
真は口を即座にふさいだ。

「ギクッ！！」
「ギクッ？いまギクッって言いましたね」

晃が的この方へ行こうとしたらいきなり肩を誰かにつかまれた。

「話を聞こうか晃」

そこにはすごい顔をした大吾がいた。

「だ、大吾さん」

晃はそのまま男子の軍勢に連れて行かれた。

拷問が終わったのは昼休みの終わりごろで、また弁当を食べれなかった晃であった。

第２０話　男子と弁当（後書き）

荒井鈴（あらいすず）
クラス学年：２年４組
年齢　１７歳　性別：女　第一人称「私」
身長：１７１　胸ランクＡ　誕生日：６月７日
ジョブ：ツンデレ会副会長
好きなもの：どら焼き
嫌いなもの：でれでれしている男
記：静音の親友で、小学校からいつも一緒にいる。
性格はいつもツンツンしており、晃をキツイ目で見ているが彼のことは認めているらしい。
翔太に好意を持っている。
頭よりも運動神経がよく、生徒会の中でゆういつの運動系である。
頭も結構いい。

第２１話　調理実習（前書き）

前回のあらすじ
男子の嫉妬は怖い

第２１話　調理実習

今日は家庭科の調理実習の日だった。
班は出席番号順だが、晃の場合転向してきたので自動的に一番最後になる。
ちなみにその班には晃の知り合いはいなかった。

「今日は皆さんで栗ご飯に野菜炒め、さらにスイートポテトを作ってもらいます」

はーいと、クラス中の生徒が言った。

ちなみに調理実習は普通は男が苦手とするものであった。
そのことは透も大吾も同じだった。

「俺、料理なんかできねえよ。大吾は？」
「俺も、包丁ぐらいしか触ったことしかない」
「包丁触っただけって、君は一体なにをしたのですか？」

怖いので想像するのはやめましょう。

だが、晃はそれ以外のことも心配だった。
それは美紀と結衣だった。

最近は時々、料理の手伝いもしてくれるし、最近は自分で料理も始めたと言うらしい。
そして最近は晃の家に来てわざわざ食べにも来なくなった。
高校生としての言い表しだった。
晃はせめてそう思いたかった。

班はみんなバラバラになっていった。

料理が出来ない男共ズは邪魔にならない程度にサポートに廻るぞと熱心に言っていた。

その中には透と大吾もいた。

「いくぞ～」

「おーーー」

（一体あれは何をしたいのですかね）

晃は呆れながら思った。

こうして、調理自習が始まった。

実は今回で調理実習はこの学年ははじめてだったりするらしい。

「なのにこの量はなんですかね」

いくら3つ作るのは結構しんどい事だ。特に初心者は。

（なんか、変なことでもなければいいのですが）

しかし、晃のその願いは約5分で消え去った。

―ガシャーン！！

どこかで皿が割れた音がした。

――いくらなんでも早すぎませんか！！

晃は料理をしながら思った。

「ちょおっとーそこ邪魔だから」
「ご、ごめん」
「ほらそこ、やり方違う！！」

どこもかしこも男子は女子に怒られていた。

そして透も。

「ちょ、栗の殻って物凄くむきずらいな」
「透君はやくしてよ」

もちろん大吾も。

「え？これってどうすればいいの？」
「さっき話したでしょうが！！」

こんなことで役立たずの男子は調理室の隅っこ待機になってしまった。
てか、もう全員と言っても過言ではない。
そんな中、１人の男子が女子の信頼を戻しつつあった。

そう、晃だ。

「あ、そこのコショウ取ってください」

晃はサポートどころか、その逆だった。

どの班よりもどんどん料理が出来上がりつつあった。
てか、一人で進行をしていた。
だが、さすがに女子をほっとくわけには行かないのでちょくちょく指示をしていた。
野菜炒めをいためる音とにおいが物凄く食欲を増幅させた。
晃は楽しそうに料理をしていた。
それを見ていた女子はこう言っていた。
「優輝君。邪魔どころかみんなを仕切っている」
「か、科学都市でも調理実習していたのかな？」
「いや～これはそんなレベルどころじゃないでしょ」
「そんなことよりも」
「「「「ほかの男子よりも何倍もマシ」」」」
その言葉が男子に止めを刺してしまった。
そして時間が過ぎ、とうとうお食事タイムに入った。
いろんな作品があったが、そのなかでも、第６班の出来はすごかった。
第６班はほとんどが晃が料理をしたもので見ただけで食欲をすすられる。
みんなが晃が作った料理が気になっていた。
同じ班が食べるところをみんな見ていた。

「う、うまい！！」
「う、うますぎる！！なにこれ！！」
「優輝君一体なにをしたの」
その後みんなが食べたいと食べたいと騒ぎ始めた。

※

昼休み、クラスの中の女子がほとんど不貞寝してしまっている。
理由は簡単。
晃の料理を食べてしまい、プライドがズタズタにされたものがほとんどだった。
「アッキー本気で料理作っちゃたのね」
「ええ。そうですけどなにか？」
「アキ君そろそろ自分を分かろうよ」
美紀と結衣は大きなため息をついた。
「アキ君の料理、そんなにおいしいのですか」
いきなり生徒会長の静音が現れた。
「し、静音さん？どうかしましたか？」
晃は聞いてみた。
「それがですね。晃君の料理の噂が2年の教室でも広まっているの

ですよ」
「たださえ、科学都市から来ただけでも有名になってしまうのにこれ以上伝説を作ってしまってどうする」
今宵が晃に言った。
「僕は別に普通にしていますが」
晃は何も気づいてはいないようだ。
「あきにいはこれ以上は何もしないほうがいいかもね」
真がサラッとひどいことを言った。
「それって貶しているのですか？それとも褒めているのですか？」
「微妙なところね」
全員がうんうんと言った。
「そういえば晃君」
舞が話題を切り替えてきた。
「何ですか舞？」
「思ったのだけど、泉さんが今日は珍しくいないようだけど」
そういえば今日は泉の姿が見当たらない。
そんなとき、教室のドアが思いっきり開いた。
そこには泉がいた。

「アキ！！それに舞ちょっと来てよ」
晃と舞は泉に腕を引かれて教室を出た。
「ど、どうしたのですか？」
あわてている泉を見て晃は聞いてみた。
「これがあわててられないよ。これを見て」
晃と舞が見にしたのは、さっき張り出したばかりの校内新聞だった。
内容は謎の盗難事件だった。
そこには、晃の写真が張っており、この人が怪しいですと書いてあった。
「な、なんですかこれは！！」
「ひ、ひどい」
「そ、そうなんだよ」
晃は新聞を最後までよく読んだ。
「これは、風紀委員の発行したようですね」
「「風紀委員！？」」
2人は聞いてきた。
「どうやら、僕をどうしても悪役にしたいみたいですよ。ついでに僕は何もやってませんよ」

晃は説明した。

「だいたい、人権を無視してこんなことをしているのに先生はなにも動いていないのはやっぱり風紀委員のでっかい権力ですかね」

晃は悔しそうになった。

「2人とも、僕についてくるなら覚悟していたほうがいいですよ」

2人は首をかしげた。

「もしかしたら、風紀委員と口論になるかもしれません」

そういって晃は歩き出した。

「どこに行くのアキ」

「静音さんのところに行って風紀委員の情報を聞いてきます」

そう言って2人もついてきた。

「私は大丈夫」

「そんなことしたらなんのために協力すると言ったんだろうね」

「ありがとう2人とも」

第２１話　調理実習（後書き）

波木ささら《なみきささら》
クラス学年：１年６組
年齢：１５歳　性別：女　第一人称「私」
身長：１７２　胸ランクＣ　誕生日：１２月６日
ジョブ：お嬢様生徒会会計
好きなもの：本、刺身
嫌いなもの：お化け
記：物静かな性格で、なんだか静音と似ている。
家は大金持ちで生徒会の予算は彼女が出している。

第２２話　第一回ＶＳ風紀委員（前書き）

前回のあらすじ
風紀委員と戦うこととなりました。

第２２話　第一回ＶＳ風紀委員

生徒会室に静音を呼んだ。

「なんですかアキ君？」

「静音さん。風紀委員のことを教えてもらいたいのですけど」

晃は単刀直入に聞いた。

いきなりだったのに静音は冷静だった。

「やっぱり、そうしますか」

「静音さんもあの新聞を読んだのですね」

「はい。でも私はあなたを信じますので安心してください。風紀委員のことですよね」

静音は笑いながら言った。

「ええ、それも、表の顔ではなく。なるべく裏のほうを知っていたら教えてほしいです」

晃の目は真剣そのものだった。

「ええ分かりました」

※

夜。晃は自分の部屋にいた。

そして、静音に教えてもらったことを思い出していた。

風紀委員はその名のだけの暴力集団。
静音はそうあっさりと言っていた。

風紀委員は得件で武器の持込が自由になっているらしい。

どんなにやさしい事件だって、武器を持ち、相手を有無言わさず怪我をさせる。
そして、ものがってな推理でその人の学校生活を終わらせたらしい。

しかもこれはそう昔ではなく、今の3年生が1年生のときにこのことは始まった。

そのせいで風紀委員の信頼は0に近い。

生徒会は頭で考え活動する知能派だったら、風紀委員は頭より手が先に出る戦闘派。

頭がいい人はほとんど生徒会に行ったらしい。
ただ、先生にも風紀委員は問題があった。
それは前に説明したとおりだった。

さらに最近では思い込みが激しくなったらしく、一度事件の加害者、被害者関係なく巻き込み最悪その人を強制犯人し、暴力で有無も言わせないらしい。

なんでこんなに事件を解決させたいのはただ単に自分達の正義と権力と見せ付けたいだけらしい。（静音談）

こう考えてみてみると本当に酷いことをしていることが分かった。

晃は何とかしないとこれ以上エスカレートさせないために考えていた。

（やっぱり、力には力ですかね）

しかし、その考えは頭を振りかき消した。

（だめです。それでは何の解決にもなりません。だったら！！）

――彼らにはない頭脳戦に持ち込みましょうか。

晃はパソコンを付けて考えたことをまとめ始めた。

「あきにい。おなか減った～」

真が部屋に入ってきた。

いきなりだったので晃は椅子から滑り落ちた。

「あ、あきにい。大丈夫？」

「ええ。そうですか。もうこの時間ですか。今から準備しますね」

「うん」

真の許しを貰い、晃は下に降りてきた。

そこには見たことがある顔があった。

「なにやっているのですか今宵」

「お、晃。待っていたぞ」

「あれ？こよちゃんどうしたの」

顔の持ち主は今宵だった。

真の反応からして真が連れてきたわけではないらしい。

「なにいっているのまこちゃん。そっちが入れてきたんでしょ」

「ああ、そういうことですか」

どうやら真は腹が減りすぎて記憶が少しおかしくなっていた。

しかし大丈夫。食べれば直る。てか、なんなんだその体は。

「で、なんのようですか？」

「うん。実は料理を教えてほしいんだ」

今宵の口から意外な言葉が出てきた。

「と、突然ですね」

今宵はうなずいた。どうやら自覚しているらしい。

「実際。自分で作ってきたんだけど、食べてみて」

と、いいながら今宵が出したのは一見普通の肉じゃがだった。が、晃にはその料理からは怪しげなオーラが出ていた。

「あ、これおいしそう。これ私が食べてみたい」

「あ、まこ」

―パクッ！！

晃が言い終わる前に真は食べた、食べてしまった。

その瞬間。真はいきなり歩き出し、普通にテーブルの椅子に座った。

いや、これは普通ではなくきちんと座っていた。
いつもなら早くしろとうるさいのに。これを食べたとたんいきなり行儀がよくなった。

「これは重症ですね」
「だろ、だから教えてほしいのだ」

どうやら今宵は自分の料理の腕は認めているらしい。悪い意味で。

「分かりました。いきなり本番は無理そうなのでとりあえず僕の手伝いから始めましょうか」
「イエッサー」

今宵は腕を上げて合図をした。

結局、今宵は今回は晃の手伝いだけで済んだ。

今回の報告書
料理の被害者・・・・・・優輝晃
料理の負傷者・・・・・・優輝真。

※

晃は今日の放課後に風紀委員と対決をしようとしていた。
生徒会からの協力の下で作戦を行った。

「ありがとうございます。協力してくれて」
「なになに、僕も風紀委員には困っていたんだから」

泰子が言った。

「お仕置きぐらいしなければ割に合わないわね」
琴美が言った。意外とこの人は怖かった。
「怖いこと言わないでください。こっちは早く終わらせましょう」
晃、琴美、泰子の役目は周りの状況に応じて活動することで、今は生徒に風紀委員に対して情報を集めていた。
そして、舞、泉そして鈴がただいまやっていることは。
「これ、なんで男の優輝がやらないのだ」
「アキは違う大切な役目があるといっていました」
「だからって、これをもつのは聞いていないぞ」
泉と鈴が持ち運んでいたのは大きな段ボール箱だった。
このダンボールを持ち、2人は風紀委員の委員会室に来た。
「これ、風紀委員の荷物です」
鈴が言った。聞き手は風紀委員の腕章をしている1年の男子だった。
「ああ、おうこれはこちらから運ぶ、お前らはさっさと去れ！」
男子生徒は手を振りながら2人を追い払った。
すこし離れてから鈴は機嫌が悪かった。
「あんの1年坊主。こっちは2年だぞ。敬語使えよ」
「まあまあ、こうしていると風紀委員は調子に乗っているのは確か」

泉は晃にメールをうち、転送した。
1分も持たないうちに返信が帰って来た。
「早っ！！」
鈴はあまりにも返信の速さに驚いていた。
「鈴先輩。アキからの指示です」
「なんだ？」
「あたしたちは待機、いざというときに戦ってもらいます。と、書いてあります」
泉はメールの文を読んだ。
「ほお、あいつ分かっているじゃないか、私達は戦闘担当となるわけか」
鈴の怒りに炎がついた。
※
そのころさっき運ばれたダンボールは、中から誰か出てきた。
そう、舞だ。
晃の指示で舞は中で情報のやり取り、いや、この武器の情報をつかむことだ。
そして今回運ばれた場所は武器が収められている場所だった。

「これは一体」

あまりにも数に舞は驚いていた。

「これは速く対抗しなければならないようね」

こうして、生徒会全員＋αで風紀委員との戦いが始まった。

第２２話　第一回ＶＳ風紀委員（後書き）

福本泰子（ふくもとたいこ）
クラス学年：１年４組
年齢：１５歳　性別：女　第一人称「僕」
身長：１６８　胸ランクＡ　誕生日：１１月８日
ジョブ：おちゃめな生徒会庶務
好きなもの：面白いこと
嫌いなもの：機械
記：僕っ子少女。
元気な人だが、実は頭はよく、運動神経はそこそこ。
不器用で機械を使い方知らない。
晃のことを「アッキー」と呼ぶ。

第２３話　風紀委員の隠れ倉庫（前書き）

前回のあらすじ
生徒会ｖｓ風紀委員

第２３話　風紀委員の隠れ倉庫

場所は生徒会室。
晃は一回琴美と泰子を収集させた。

「とりあえずの情報はこのぐらいですね」
「うん。やっぱり風紀委員の活動は一般性とも迷惑みたいよ」

泰子が報告した。

「先生にも手を出したやつも入るみたい」

琴美も言った。

「いくら先生でも学園長には勝てませんからね」
「で、どうするの？アッキー。もう少し情報集める？」
「いいえ、これ以上は同じことだと思いますので」

晃は考えながら言った。

ただ、やっぱりこっちが不利だということは決定的である。

そのときだった。
晃のギアが鳴った。

「はい」
『やっぱり君が出たか』

（この声は！！）

「驫木さんですね。これは舞の携帯番号のはずですけど」

そう、この電話は舞の携帯から来ていた。これはつまり、舞が捕まったと予測してもいい。

『お宅の友達の神下舞がここにいるのだけどさっさと来てくれないかしら』

（完璧に罠ですね）

だが、舞をほっとくわけには行かない。

「わかりました、すぐに迎いに行きますね」

そう言って電話を切った。

どうやら作戦は失敗したように見えた。

※

場所変わって風紀委員会室。

ここは元、生徒会が使っていた場所だが、今年になって入れ替わっていた。

これも風紀委員の権力によるものだった。

場所は広く、生徒会には必要な資料がほとんどここにあるが、生徒会はいちいち取りに行かなければ行けない状況になってしまっている。

「あんたらの作戦は失敗だね。神下舞」

舞は風紀委員に縄で拘束されていた。
そこまで舞は見てはいけないものを見てしまった。

それは元は資料室だったのが武器倉庫になっていたのからだ。
木刀や木のバットや金属バット、さらには鞭までそろえていた。

「やっぱり、晃君が言ったとおりに武器を隠し持っていたわけね」
「それがどうしたのよ。もしかしてあれを見たのか」

しかし舞は何も言わなくなった。

「ちゃんといいなさい！！」

鷲木は舞にビンタをしようとした。

そのときだった。
カメラのフラッシュが見えた。

「暴力は校則違反ですよ鷲木さん」

晃がそこに立っていた。

「舞いご苦労様です」

晃はにこやかに言った。

「なにいっているのこの子が捕まったときにあなたの作戦はつぶれているのよ」

鷲木が威張りながら言った。

「僕はそうおもっていません。この作戦は捕まんなくても捕まってもどっちにしろ侵入できたところで成功しているのですから」

晃が説明した。

「なに言っているの。おい！！こいつを拘束しろ！！」

鬲木がほかの風紀委員に命令した。

しかし、この2人は晃の後ろから現れた2人によって止められた。

そう、泉と鈴だ。

泉は棒で動きを止めて、鈴は思いっきり殴った。

「こんなに速くあたしの相棒をつぶせやさせないよ」

「おまえら、骨折する覚悟はしているんだろうな」

「荒井先輩それはやめたほうがいいですよ」

鈴はどさぐさに怖いことを言った。

2人はがっちり風紀委員の2人を取り押さえた。

殴られた1人は取り押さえたというよりも気絶していた。

「さて、どこから話しましょうか」

晃が悩みながら言った。

「では、まず舞を離してもらえませんかね。これを学校中に見せたくはないでしょう」

そう言って晃は後ろに隠し持っていた真剣を見せた。
いや、正確には泉と鈴が現れたときに手を後ろにして「呼び出し（コール）」したのだ。

「これはたしか、この武器倉庫にあったものですよね。いいのですか？これは銃刀法違反ですよ」
「そ、そんなの私は知らないわよ。大体証拠はどこにあるのよ」
「あなたが今拘束している人が証拠ですよ」

「！！」

鷹木は痛いところを突かれた顔をしていた。

「あなたはこれを隠したいから舞を拘束したのですよね。残念です。もう写真も取っていますよ」

晃は写真を見せた。
そう、これが舞を送り込んだ理由だった。
何かを隠し持っているとは晃は感じていたのだが、まさか真剣があるとは思わなかった。

「さて本題に入りましょうか。お願いですけどそこの部屋、生徒会に返してもらえませんでしょうか」

晃は交渉してみた。

「なに言っているの、そうしたいなら私を倒してから言いなさいよ」
「バカ言わないでください。僕らは戦いに来たのではありません。大体こっちはあなた達とは違って喧嘩なんかしたら停学ですから」

晃はあくまでも正論で通していた。

「こっちは頭脳的に生かせて貰いますね」

そう行った後、放送の音が流れた。

『え～突然ですがここで皆さんに特に先生方は聞いてほしいことがあります』

声の主は静音だった。

『風紀委員はただいまの委員室を利用して武器を確保していました。木刀とかも用意されていました』

「こ、これは！？」

「いいましたよね。舞が侵入したとたんに僕らの作戦は成功したのですよ！！」

晃が説明した。

『先生方、これからこのことで会議を行いたいと思います。ほかにも風紀委員からのことでお話もありますので委員長と班長は来て下さい』

「貴様」

「僕らの勝ちですね」

鬲木は悔しそうに職員室に向かった。

※

次に日。
結果今回の事件で風紀委員の権力と信頼は大幅に下がってしまった。
そして、生徒会室も新たに取り戻せた。

「これもアキ君のおかげですよ。ありがとうございます」
「そんな、僕はただ風紀委員の理不尽に嫌気が指しただけですよ」

晃はそう言っているが、このことでほかの生徒がどんなにうれしいかは晃にも分かっていた。

「それでは僕は自分の教室に戻りますね」

そう言って晃は生徒会室を後にした。

歩いていると驫木と会った。

「あんた、いい根性しているじゃない」

そう言って驫木は立ち下がった。
晃には言っている意味が良く分からなかった。

あのことで風紀委員は大きな権力を失ったが結局失ったのは部屋のみで担当の先生は謹慎処分を食らっている。しかし、もどってきたらまた面倒なことが起きそうな予感がした。

どんな権力も人をいたぶるためには使ってはいけない。

ついでにあの剣は晃が「登録（インストール）」したので彼のものとなった。

しかし、晃は使う貴会は無いといいですと思っていた。

しかし、これからは風紀委員の少しはおとなしくなるだろう。

第２３話　風紀委員の隠れ倉庫（後書き）

瓜生美琴（うりゅうみこと）
クラス学年：２年１組
年齢：１６歳　性別：女　第一人称「私」
身長：１７６　胸ランクＣ　誕生日：３月１日
ジョブ：冷静生徒会書記
好きなもの：ウサギ
嫌いなもの：うるさいもの
記：口数が少ない少女。
背が高いとこをコンプレックスをいだいている。
自分が認めた人ではないと話はしないらしい。
実は意外と面白そうなことが好きだったりする。

第２４話　Ｐｏｉｎｔ：執事（前書き）

前回のあらすじ
生徒会勝利（結構何もやっていないけど）

感想お待ちしています。
話の感想やキャラクターの応援メッセージでもかまいません。
お待ちしています。

第２４話　Ｐｏｉｎｔ：執事

時は日曜日。
晃は悩んでいた。
晃はただいま喫茶店「Ｐｏｉｎｔ」でただいま真と美紀とお手伝い中。

しかーし。この日はまだ昼にはなっていないのだが、客がただいま３人と言う有様である。

「あ～の。この店１０時から開いているのにただいま１１時。客が３人しか来ていないのは冗談ですか？」

晃が美紀に聞いた。

「ううん。冗談じゃなくていつもこんな調子だよ」

――大丈夫ですか？この店。

晃は本気で心配した。

「やっほーみんな働いているかーい！！」

ずいぶん元気な「Ｐｏｉｎｔ」の店長。織由佳さんが入ってきた。
どうやら店員をほっといて買い物に行っていたらしい。

「働いてるというより。働けないのですが」

晃は呆れている口調で言った。

「美紀ちゃん。今日来た人数は何人？」
「３人だよ」
美紀は平然に言った。
「まあ、そんなぐらいでしょ」
――いいのかい！！
晃はその場でこけた。
「まあ、最初はなれないでしょ。いくらあきにいでも」
真もこのことには最初は驚いていた。
「じゃあ、客を集めるためにこれでも張っとこうかしら」
「ちょいまて！！」
晃は何かのポスターを持った由佳を止めた。
「なに晃君？」
「なんですかそのポスターは」
「ああ、これみる」
そう言って由佳はポスターを広げた。
そこにはおおきな晃の絵が描いてあり、何かを告知していた。
「なんですかこれは！！」
「なんか面白そうだと思って晃君の幼馴染ズに作ってもらったの」

「僕は許可してしていません」

晃は拒否した。

「大体なんで僕なのですか？」

「ここは最近男子しか来ないから女子を集めてみようかと思って」

「それでもなんで僕なのですか？」

晃は折れない。

「だって晃君なかなかの二枚目だから」

「答えになっていません。そしてこの「執事服で待っています」って何ですか！！」

晃はポスターに書いてある一文に指を差した。

「うん。だからハイ♪」

「準備済みですか！！」

「アッキー拒否権は無いよ」

美紀は面白そうに言った。

「拒否権無し！？」

晃は肩を落とした。

なんだかこの人たちには勝てない。そんな気がしたのだ。

「分かりました。ですが、不評だった即やめますからね」

「じゃあ、アッキーは真面目にやってそれだったらいいけど」

「いいですよ」

「逆に好評だったら続けるからね」
「いいですよ」

晃は心の中で不評になるはずだと思っていた。

１２時ごろ。
結局１２時までの客は3人のみだった。

そして、ポスターを貼ったとおりにことは実行された。
客は来た。
しかも女の子の客が。
みんな、氏名可能。執事さんセットを選んでいた。
このセットは晃が必ず料理を運ぶこととなっており、コーヒーセットなら晃が砂糖やミルクを入れてくれる特典がついていた。
ほとんどの女子はコーヒーを選んでいた。

外でもポスターを見て、来てくれる人のほうが多く。店は時間待ちとなっていた。

――なんでこうなったのですが。

ポスターの絵は今宵が描いたの本人とそっくりのために客は満足して帰ってくれている。

それはいい。

晃にとってこのままの調子で来るとやばいことになると思っていた。
しかし、手を抜くことは出来なかった。

「コーヒーお待たせしました」

晃は飛びっきりの営業スマイルで女子達の机にコーヒーを運んだ。
その席の女子はキャーといって騒いでいた。

「アッキー次はあっちに行って」
「はーい」

美紀の指示で晃は料理を受け取ってその席に行った。

「晃君がんばっているね」
「よお晃」
「晃君」
「アキはがんばりやさんだな」
「みんな連れてきたぞ晃」
「おもしろい」

そこには伊織、大吾、舞、泉、透、今宵がいた。

「人違いですね」
「おい、まてえぇぇぇぇ！！」

晃は聞かない不利をして引き返そうとしたが大吾が止めた。

「晃、何でお前がこんなことしているんだよ」
「それは今宵に聞いてください」

そう言って今宵のほうを見たら、今宵はふふっと笑っていた。なんか不気味だ。

「じゃ！！」

「「じゃ！！、じゃない！！」」

泉と伊織が止めた。

「じゅ！！」

「「それでもない！！」」

「じょ！！」

「だから違うって、なんで嫌がっているの？大盛況じゃん」

泉が聞いてきた。

「それはいいのですが、やっぱり僕なんかがやってもいいのですかね？」

「いいんじゃないの？東の丘学園の子も来ているし」

「え！？ほんとですか！！」

晃は振り向いた。

その先には制服を着た見慣れた顔があった。

「し、静音さん。それと鈴先輩」

晃が言ったとおりにそこのテーブルにはその2人がいた。

「晃君。そこの2人に注文を取りに行って」

由佳の指示で晃は静音のところに来た。

「静音さん。何でこんなところへ？」

「面白そうだったので」

「同感」

鈴も静音と同じ理由らしい。
晃は心の中でため息をついた。
それは諦めたサインでもあった。

※

夕方頃。
ようやく落ち着いたらしく、客は減ってきた。
だが、いまだに晃の人気はあった。

「いらっしゃいませ。ご注文はなんですか？」
「あ、アキ君」

その席には結衣とその友達と思える人が2人いた。

「ご注文はなんですか」
「アキ君。無視しないで」

結衣は指摘した。

「結衣まで今日は来たのですか。その2人は友達ですか？」
「う、うん」
「どうも、優輝君」
「うんうん。たしかに2枚目ではあるね」

ついでにこの2人はすぐに結衣の晃に対しての好意をすぐに分かった。

「では、ご注文は以上ですね」
晃はその席を離れた。
「あ、アキ君」
結衣は晃を呼び止めた。
「何ですか」
「な、なんでもない」
「？」

※

6時頃。
ようやくバイトが終わった。
「つ、疲れました」
「お疲れアッキー」
「あきにいは初日なのに良く働くことで」
「真。それは褒めていませんよね」
「さあね」
「ふにゃあぁぁぁ」
晃は悲しそうに言った。
「おお、これは久しぶりの高売り上げだわ」
別室で由佳が騒いでいた。

結果。晃の執事は続くこととなってしまった。

第２４話　Ｐｏｉｎｔ：執事（後書き）

鳶木刑（とどろきけい）

クラス学年：１年５組　技術科の体育学科特待生

年齢：１６歳　性別：女　第一人称「私」

身長：１７２　胸ランクＢ　誕生日：６月２７日

ジョブ：上から目線の風紀委員第３班班長

好きなもの：自分

嫌いなもの：風紀を乱すもの、自分より強いもの

記：いつも上から目線で話ている。

晃を敵視していているが、これは彼女が勝手に思っているだけで晃としては大きな迷惑である。

風紀委員としては腕はいいが、思い込みが激しい。

友人はいない。

自分勝手。

第２５話　お悩み相談（前書き）

前回のあらすじ
執事服！！

第２５話　お悩み相談

昼休み。
晃はいつものメンバーと話をしていた。

「アッキー。今度はいつバイトする？」

美紀はこの前のことが面白く感じていたのか聞いてきた。

「またあの格好をやらされるのですか？」

晃は不満そうに言った。
いや、本人は物凄く不満だった。

「だったら変わりに透がやってくださいよ」

晃は透に言った。

「だめ！！透は下心満載だから」

今宵が言った。
てか、透の扱いが醜い。

「なんか期待されているのか、面白がられているのか分かりませんね」

「あきにい。多分両方。私も同じ」

――ふにゃあぁぁぁぁぁ！！

晃は心の中で叫んだ。

「アキ君が店員だったら私毎日行くね」

結衣が張り切りながら言った。

「てか、結衣が一緒にバイトしてくださいよ。結衣ならまだましですので」

いじられることが。と付け加えた晃だが、結衣にはこの言葉は届いていなかった。

「う、うん。私でいいなら」

結衣は顔を赤くしながら言った。
晃にはその理由が分からなかった。

周りの男子共は相変わらず結衣と晃のやり取りを（晃を）睨みながら見ていた。

（何でみんな結衣にふつうに話しかけないのでしょうか）

実はまえ、結衣は晃に話しかけようとしたらほかの男子に自分が話しかけられて、2人っきりの話をするタイミングを失われた結衣は裏モードでその男子を睨みつけた。
そのことで、男子共は晃が一緒に居るときは話しかけられないのである。

晃はあいからわず、結衣の裏モードの存在を知らなかった。
違う日に教えようとした透は止められて、ボコボコにされた。（主

に精神面で）

そのときだった。

放送が流れた。声は静音本人だった。

『え～。生徒会会長補佐の1年1組のアキ君。今すぐ生徒会室へ来てください。みんな待ってますよ～。あと、おいしいお茶とお茶菓子を用意しています。必ず来てくださいね♪』

そういうだけ言って放送は終わった。

しかも内容はお茶会の誘いだった。

クラスの男子共はさらに晃を睨んだ。

みんなすでに生徒会は女子のみだと知っている。

簡単に言えば、女の子のお茶会に男子の晃1人が誘われた。

晃は教室の中のいろいろ混ざったオーラとプレッシャーを感じながら教室を出た。

この中には結衣のやきもちも混ざっていた。

※

生徒会室に来たら一人の男子生徒が座っていた。

「あ、あの～こちらの方は？」

「2年3組の五十嵐斗馬（いがらしとうま）君。野球部の部員で、あなたに話があるそうよ」

「よろしくおねがいします」

斗馬は深くおじきをした。

「いいですよ。先輩なのですからそんなことをしなくても話は聞きます」

晃はあわてて訂正させた。

「で、その様子だと、なにかの迷いごとですね」

晃はさっきの態度を分析して言った。

静音は晃の前にお茶とお菓子を置いた。

「はい。実は自分。最近スランプ中なんですよ」

「D〇スランプ見たいな？」

近くにいた泰子が言った。

「いや、違いますよ。野球ですね」

「はい」

「彼は野球部のエースと肩を並べられるほどのピッチャーなのよ」

琴美が解説してくれた。

「つまり、控えピッチャーのエースと言ってもいいのですよね」

斗馬と琴美はうなずいた。

「でも、最近。彼の成績は酷いことになっている」

晃は一枚の紙を渡された。

ちなみに個人情報なので詳しいことは教えできません。

「それで、最近。なんかありましたか？」

晃は斗馬に聞いた。

「はい。最近、テストのほうの成績が悪くって母親にあれこれ言われてストレスが溜まり、それで投球は乱れてしまいました」

斗馬は話したところによると、その後、５００円ハゲが出来て、笑った弟をボコボコにしたら、代わりに父親にボコボコにされたらしい。

「それって、つまり理由は分かっているという意味ですね」

「はい」

それで自分になにができると晃は思った。

「それで、次の大きな大会までは何とかスランプを抜け出したいのです。それで協力してほしいのです」

「ああ、そういうことですか」

話の合点がついた。

「そういうことなら手伝います」

「私達、生徒会も協力しますわ」

静音が言った。

「いいえ、今回は僕らと幼馴染達にやらせてください。彼女達意外

と野球を知っているので」
「そう。それならおねがいしますね」
静音は微笑みながら言った。
「ありがとうございます」
斗馬はまた深くおじきをした。
どうやらこの人はこうゆう人みたいだ。

※

その日の夜。
晃は幼馴染達を家に入れて、さっきの話をした。
ついでに舞と泉はすでに了承済みだ。
「では、今度の土曜日でいいですね」
「うん。アッキーが言ったとおりにその先輩を元気付ければいいんだね」
美紀が張り切りながら言った。
「私、かならずアキ君の役に立って見せるからね」
結衣も張り切っている様子だ。
「あきにい。運動のことはこの妹にお願いしたのは正解だね」
真が胸を張りながらいった。

「うむ、なんかいい絵が描けそうだ」

今宵は完全に面白がっていた。

「じゃあ、なんか買ってこないと」

透のそうだった。てか、何をさせるきだこの人!!

「と、とにかく。みんなお願いしますよ」

「「「「「おーーー」」」」」

言っている晃もなんだか不満になってきた。

第２５話　お悩み相談（後書き）

復活！！後書きトークのコーナ

美紀「なんかこのコーナも久しぶりだね」

晃「まあ、今まではキャラ紹介をしていましたから」

美紀「また増えたらやるのだよね」

晃「ええ。そうそう。これからこのコーナーにＰＶ１００００記念としてゲストが来るらしいですよ。しかもほかの作者が書いた作品のキャラです！！」

美紀「本当！？」

晃「ええ。許可も貰いましたし、いつかは本編でも会えますよ」

美紀「では、次回お楽しみ」

第２６話　治せ！！スランプ君！！（前書き）

前回のあらすじ
この面子で大丈夫か！！

美紀「大丈夫だ！！問題ない！！」

晃「僕は心配なのですが・・・」

第２６話　治せ！！スランプ君！！

土曜日。
晃達は町内会から話をしてグラウンドを貸してもらった。
ここで斗馬のスランプを治す気だ。
斗馬は野球部のユニホームを着てやる気満々だ。

手伝ってくれるメンバーは、舞に泉はもちろん。今回は幼馴染ズが手伝ってくれる。

「いいですか。いまから悪ふざけは無にしたいことろですが、おい泉！！何ですかその格好は！！」
「うん！？」

泉の格好は応援専用の野球応援グッズを身に着けていた。

「今は要らないですよ！！しかもそれ全部、阪〇タイ〇ーズのやつですよね！！」
「うん。私ファンだから！！」
「はっきり言わなくてもいいです！！。それと美紀は借りようとしないでいいです！！」

美紀はさりげなく借りようとしていた。

「いいから速く始めましょうよ」

斗馬が言って来た。

「そうですね。じゃあまずそれぞれ何かいい方法が無いか考えても

らっていましたけど、自信がある人は要ってください」

晃はみんなに言った。

隣で斗馬が不安そうな顔で見ていた。

「はい！！」

美紀が生きよいよく手を上げた。

「まず、バットをでっかいう○い棒に代えるのはどう？なんかやる気があるやつに見えない？」

「食欲旺盛の人だとしか分かりませんよ。しかもでっかいう○い棒なんてありませんし、第一ルール違反です！！」

晃がツッコンでこのアイディア（？）を却下した。

「じゃあ、これはどうだ？」

透が言ってきた。

「まずユニホームがダサいからデザインを変えるべきだ！！」

透が拳を握りながら言った。

「まったく関係ありませんよね！！てか、それは透個人の意見ですよね！！」

「はい！！」

「はい、真」

晃が真が手を上げているのを知って合図を送った。

「あきにいが超強力の特訓ギブスを作ってそれを使って特訓するの!!」

真が目を光らせながら言った。

「完璧に本人筋肉痛になりますよね!!次ィ!!」

「はい!!」

次は泉が手を上げた。

「じゃあ山に行って山篭りペンション2泊3日のお泊りはどう?」

「完全に遊ぶ気ですよねそれ!!」

「じゃあ、冬休みに行ったほうがいいのじゃないの?」

晃が却下していのをかまわず美紀が言ってきた。

「いいねそれ」

泉もそれがいいと言ってきた。

「冬休みになっても意味がありませんから!!次ィ!!」

晃が美紀と泉をツッコミで止めた。

「じゃあこれはどうだ!!」

今宵が言ってきた。

「鞭で彼の体を叩き、強制に飲食させずに２４時間特訓させるのは」

今宵がイキイキとしながら言った。

「まてまてまてまて！！」

晃は生きよいよく止めた。

「鬼ですか！？スパルタですか！？てか、今宵楽しんでいますよね！！」

今宵はにこにこ笑いながら言った。

「技術のほうは申し分ないのですよ。やっぱり精神面のほうですね」

晃が言った。

「やっぱりユニホームがダサいからやる気が出ないんだ！！」

透が言ってきた。

「それは透だけでしょうが！！」

晃は瞬殺した。

「じゃあ滝あたりの修行は！？」

美紀が言ってきた。

「確かに定番ですけど現実を見てください！！もう十月ですのでさすがに風引きますよね！！」

「はい！！」

「何ですか泉」

泉が手を上げた。

「冬休みは雪山がいいです。みんなが遊べそうなところで！！」

泉はまた山篭りを諦めていないようだ。

「その話は終わりましたし、山篭りから離れてください！！しかももう遊ぶって言ってますよね！！」

しかし、晃が玉砕した。

「あきにい。だったら冥想はどう？」

真が言ってきた。

「野球は関係ありませんよね」

「鞭もって来たぞ」

今宵が本当に鞭を持ってきた。

「こらこらこら！！なにをやる気ですか！？無駄な有限実行しないでください！！」

晃は危険なことが起こりそうなので止めた。

「泉！！借りようとしない！！」

借りようとしていた泉を晃が止めた。

「舞と結衣からは何か無いのですか？」

さっきからこのペースから入り込めない2人に聞いた。

「うん。やっぱり精神面だと難しいわね」

結衣が言ってきた。

「やっぱそうですよね。なんか原因はありますか？」

舞が斗馬に聞いた。

斗馬はこの前言ったことを全て話した。

「原因ってストレスですか？」

結衣が聞き返した。

「しかもストレスをさらに抱え込んでいますね」

結衣と舞の言葉が斗馬に刺さった。

「とりあえず、こちらは考えていますので五十嵐さんはキャッチボールでもしたらどうですか？」

晃が斗馬を救うように言った。

「そうだな」
「だったら相手はこの中でも運動が得意なやつが相手になるぜ！！」
透が張り切って言った。
もちろんそのメンバーは真、美紀、泉だった。
「別名Ｂチーム！！」
「「「だれがバカだ！！」」」
３人は透に向かって野球ボールを投げた。
もちろん当たった。透はその場で倒れた。
しかし、透が言っていることはあながち間違っていない。３人とも学業の成績はあまりよろしくは無い。
グランドでキャッチボールをしている４人を見ながら晃は考えていた。
「やっぱり、あのユニホームはダサいよな」
透が起き上がってきた。
「復活早いわね透」
結衣が言ってきた。
「てか、３回も同じことを言わなくても」
――！！

そのとき晃は何かを見た。

「分かりました。結衣！！今から言う人からあるものを持ってきてください」

晃は結衣に指示をした。

耳元で用を伝えた。

第２６話　治せ！！スランプ君！！（後書き）

後書きトークのコーナ

晃「と、言うことでゲストの皆さんです」

巧「どうも、小説「うちゅうじんですよ」の主人公の藤沢巧です」

クー「同じ作品のヒロインのクーだ」

結衣「よろしくお願いしますね」

晃「なんか本当に不思議な気分ですよね」

巧「そうだな」

結衣「なんかアキ君と真逆キャラみたいに見えるね」

クー「妾もそうおもうぞ」

巧「悲劇じゃーー」

晃「こんなことで大丈夫でしょうか」

第27話　スランプ人と変人（前書き）

前回のあらすじ
幼馴染ズ、ボケてばっかり。

第27話　スランプ人と変人

晃はみんなに声をかけた。
どうやら彼が投げられなくなった理由が分かったらしい。
結衣は晃に言われたものを持ってきた。

「分かりましたよ。五十嵐さんがスランプした理由」
「そ、それは」

みんなつばを飲んだ。

「簡単です。五十嵐さん。あなたは投げている腕を間違っていますね」
「ど、どうゆうことアッキー」

美紀が聞いてきたので晃は説明した。

「五十嵐さん。あなたはいつから右投げに変えましたか？」
「え、あ、ああ。いや、俺はずっと右で投げてきた」

斗馬は正確に伝えた。
晃は一回悩んだが、答えは出たようだ。

「質問が悪かったですね。一回左で投げたことはありますか？」

その質問は斗馬は悩んだ。

「あ、ああ。ある。一回だけ」
「やっぱりそうでしたか」

晃は確信を持てたようだ。

「五十嵐さんこれ付けてキャッチボールしてください」

晃は結衣が持ってきた袋の中を斗馬に渡した。
それは左利き用のグローブだった。

晃は結衣に頼み、この町で野球をやっており、左利きの人にグローブを貸してもらってほしいと頼んだのだ。
結衣なら、すぐにオッケーしてくれた。

「いいのかこれで」

斗馬は心配ながらも真に向かってボールを投げた。

「別にいつもどうりだね」

美紀が言った。

「ええ。でも、左でさっきと同じならいいほうですし、さっきよりもホームのバランスが整っています」

晃はそう言って斗馬のところに行った。

「次は本気で投げてください。美紀キャッチャーお願いします」

「アイアイサー！！」

美紀は敬礼した。

「い、いいのか」
「美紀は運動神経よりもまず、僕たちの中で一番力があるのですよ」
このことは晃も始めて聞いた。
「どんとこい！！」
美紀が張り切りながら言った。
「じゃあ、行きます！！」
斗馬は構えた。
ゆっくり、ゆっくり息を整えた。
そして、ボールを投げた。
見ただけでもそのボールの速さが分かった。
美紀は上手くキャッチャーミットで取ってくれた。
「どうですか？」
晃は投げ終わったときに聞いてみた。
「なんだか調子がいい」
「そうですか。あなたは一度左手で投げた。そうしたことで体が左のほうがいいと判断してしまい右で投げづらくなったわけです」
晃は説明した。
若干何名か分かっていない人もいるらしいが。
「そうか、ありがとう優輝君、いつか試合も見てきてくれ」

2人は握手を交わした。

「自由に行きましょうよ」

晃は微笑みながら言った。

※

「ご苦労様ですアキ君」

月曜日、晃は報告をしに生徒会室に来た。
静音はお茶を入れてくれた。

「では、これからの予定を言いますね」
「まだ何か？」

晃は聞いた。

「ええ。最近。学園内の壁とかが壊れているケースがありまして、それでこちら側が簡単なのものでも節約のために私達がやることになりました」

晃はいまの言葉には何かが裏があるように思った。

「それって、もしかしたらほとんど風紀委員が犯人ですよね」
「はい。学園内の破損は風紀委員が戦闘で壊したのもですし、お金はその武器代や、風紀委員に必要なものや今までの修復費でなくなりました」

静音が説明した。

「あの人たちは本当に学園内の風紀を守る気あるのでしょうか。むしろ乱しているような気がしますが」

晃は呆れすぎてものが言えなかった。

「それで、私達の生徒会は女子ばかりなので男子が何名か必要なのですか」

「分かりました。今2人にメールを送ります」

晃はギアを取り、メールを打った。

「お任せよ生徒会長」

「俺達は生徒会長の見方だ!!」

「なぶってください生徒会長」

いきなり大吾、透、そして見知らぬ人が来た。

「早!!そしてちょっと待ってくださいね」

晃は男子3人を廊下へ連れた。

「あんた誰だ!!そして変なこと今言っていましたよね!!」

「ああ、おい自己紹介しろよ」

大吾は言った。

「ああ、俺の名は沖田直助(おきたなおすけ)!!自慢ごとではないが俺はドMだ!!」

「本当に自慢ごとではありませんよね。大丈夫ですか?」

晃はなんだか心配になった。

「大丈夫だ晃。私がこの3人を担当する」

後ろから鈴が話しかけてきた。

「鈴先輩」

「さあ、お前らの担当はこの私だ。さっさと来い」

鈴は野郎3人を連れだした。

「え～俺は生徒会長がいいッス」

「晃ばっかりずりいよ」

「これはこれでいい」

「いいから来い！！殴られたいか！！」

鈴は威嚇した。

「「とんでもございません」」

「喜んで」

「「お前は喜ぶなーー」」

晃と鈴のツッコミが重なった。

あの人は危険だ。と、晃は思った。

もう登場しないと思うが。

（てか、あれを喜ぶ人はいないですよね）

晃は世界の広さに驚いた。

「もう登場しないでくださいね」

晃が心からそう思った。

作者：もう登場させません

作者も同じ気持ちだったりして。

第27話　スランプ人と変人（後書き）

後書きトークコーナ！！

結衣「と、言うことで今回は主人公の違いを見つけるわよ。まずは性格からよね」

クー「巧は変態のロリコンでオタクで家事が出来ないしバカ」

巧「お前、それは悪いところだろうが！！」

結衣「なんだか本当にアキ君と正反対だと分かるわね」

晃「でもこの性格はみんなに愛されやすいキャラですよね」

クー「それは言えるかも」

晃「大体オタクは別に悪いところだと思いませんが」

巧「まさか、おまえもオタクか！？」

結衣「ぜんぜん違います！！」

クー「それはそうだろう」

第２８話　テスト前の学力診断（前書き）

前回のあらすじ

直助「前回は僕が大活躍したぞ」

晃「あなたの出番速攻で終わりましたよね！！」

第２８話　テスト前の学力診断

晃は生徒会長の静音に呼ばれていた。

「静音さん。なんで体育着なのですか」

晃はいきなり言われて体育着に着替えさせられていた。
もちろん。静音も体育着だ。

「それはもちろん。汚れるかもしれませんからです」

静音ははっきり言った。
静音は半袖の体育着を着ていて、大きな胸が思いっきり揺れていた。
しかし、そのことは晃にとって関係なかった。

「でも僕には汚れる心配は無いと思いますよ」

そう。ただいまやっていることは蛍光灯の付けかえだった。
晃が机にのぼり、蛍光灯の交換が完了した。

「もちろん。それだけではありませんが、ただ」
「ただ」
「今はテスト期間なのでまた今度にしましょうか」
「ほんとに何のために体育着を着たのでしょうか」

静音は不思議な人だと晃は改めて知った。

「そういえば、特待生はあんまりテストの成績は響かないと聞きましたが」

「ええ。でも、あまりにも酷すぎるとさすがに例外ですね」
「そうですか」
「でも、アキ君の幼馴染の点数はやばいと思いますよ」

静音はボソッと言った。

（へ！？）

晃はいやな予感がした。

※

夜。
晩御飯が過ぎてテレビを見ている真に晃は話しかけた。
真はテレビを見ながらせんべいを食べていた。彼女曰く太りにくい体質らしい。

「真。ちょっといいですか」
「なにあきにい」
「テストの成績はどうですか？」

―バキッ！！

せんべいが力なく割れた。どうやら図星らしい。
晃もそのことを感づいた。

「真。もしかして物凄く悪い点数だと思っていませんよね」
「え、あ、いや」
「完璧に動揺していますよね」
「こ、これは、ね」

真はかわいらしく手間取っていたが晃には関係なかった。

「真、前回のテスト見せてください。怒りませんから」

そう言って真はしぶしぶ自分の部屋に戻った。

隠し通すことはできたが、あの笑顔が真には逆に怖く感じた。

真は戻ってきて前回のテストを晃に渡した。

「真。これは酷いですね」

晃はバッサリ言った。だが、本当に怒っているようには見えなかった。

「僕が教えますから今からでも勉強しましょうか」

――へ!?

真がいやな方向にことは進んでしまった。

「なんか、おもしろそうなことをしているね」

美紀がまたいきなりベランダからやってきた。

しかし、このときは美紀にとってはタイミングが悪かった。

「あ、ちょうどよかったです」

晃は美紀を誘った。

１０分後。
美紀はなぜか正座していた。

「美紀も酷いですね」
「面目ない」
「やっぱり、みんな集めて勉強会でもしましょうか」

晃が提案した。
美紀も真もみんなという単語に騙されてしまった。

「じゃあ、早速お菓子の準備を」
「しなくていいです！！」

真はあっさり作戦を見破れてしまった。

※

結果。
今宵は平均的だったが、結衣は少し低めだg、ちょっと直せばいけるほうだが。
問題の人物がもう１人増えてしまった。

「透もですか」

同じく透の正座をしていた。
ちなみに正座は晃がやれと言ったわけではない。
３人の体が小さく見えた。

「では、始めましょうか。聞きたいことはみんなで教えあいましょう」

そう言って晃は手を叩いた。

晃、今宵、結衣はシャーペンを持ったが、美紀は携帯ゲーム機を取り出した。

「美紀、それはいま関係ありませんよね」
「いやいや、これは勉強用のソフトだよ」
「勉強嫌いな人がそんなものを持っているようには見えませんが」

晃は呆れた目で美紀を見た。

「バレたか」

美紀の性格を考えればすぐに分かる。
そして、透は携帯を取り出した。

「透。それは没収」

今宵が透の携帯をとった。

「あ、その画像は」

透があせりながら言った。

「うわ、エロ画像ですね。今宵、消去してください」
「了解」

晃が冷酷な表情で言った。
透は叫んでいた。だが、結衣にうるさいといわれて殴られた。

そして真に対してはお菓子の袋を開けていた。

「真。それはダメだと言いましたよね」

晃はまた呆れた目で言った。

「いや、なんか体が求めるというのか。あのほら、その」

「理由は無いと、ただ単に反射的にあけてしまったと」

真が首を縦に振った。

「だからってこんなに持ってきているのはどうゆうことですか」

晃は真の隣にあるお菓子の袋の山を見た。

「これは明日に食べなさい！！」

晃は取り上げた。

真はかわいそうなちわわ見たいな目で晃を見たが、鈍感な晃さんには効果が無かった。

「飴でも舐めとけばいいでしょう。それなら許しますよ」

晃は飴の大きな袋を渡した。

真は喜んで受け取った。

「さて、始めましょうか」

全員何とか勉強できる体制になった。

だが、それは一瞬のみだった。

美紀が始まっていきなり冗談を言い出して空気が乱れて完全にお遊びムードになってしまい。

さらには透の携帯の画像を今宵が消去したり（一度、携帯ごと消去しようとしたが）、真が結衣と美紀と一緒に話し出してしまった。

晃のみ、ちゃんと勉強していたが、この目的はこの5人のために開いた勉強会その5人が完璧にやる気がなくなってしまっている。

晃はため息をした。

「こんなんで大丈夫でしょうか」

あきらかに大丈夫ではない。

第２８話　テスト前の学力診断（後書き）

後書きトークコーナ。

歩美「というわけで担当が替わって晃さんの性格を見てみましょう」

美紀「アッキーは頭が良いい器用キャラだよね」

晃「速攻で終わりましたね」

美紀「だって意外と地味なんだもん」

晃「意外と酷いこと言いますね」

巧「お前も大変なんだな」

歩美「まあ、たしかにこれだけ言われたら完璧に地味キャラだよね」

巧「意外と趣味が多数ありそうだからな」

美紀「いや、それが趣味といえるレベルじゃ無いんだよ。もうそれ以上」

巧「その技術俺にくれ！！」

晃「なんで！？」

第２９話　テスト後とポテート（外国人のアナウンス風で）（前書き）

前回のあらすじ
幼馴染の学力が心配になってきた晃だった。

晃「だから全員特待生ですか」

結衣「アキ君。そこで納得しないで！！」

第２９話　テスト後とポテート（外国人のアナウンス風で）

一週間が経ち、テストが終わった。

「終わった」

そして、ここにも何もかも（？）終わった人物がいた。

「み、美紀さん？」

美紀の体がまるで真っ白になっていた。
どうやらテストの手ごたえが悪いみたいだ。

「美紀はまったく。ねえアキ君。これからみんなでカラオケでも行かない？」

美紀を心配して結衣が言った。

「いいねそれ！！」
「早っ！！」

一瞬。一瞬だった。
美紀の体はいきなり色が付きだした。
まるでガ〇ダムシ〇ドのモ〇ルス〇ツ見たいだった。

「いつもこうなのよ。美紀は。早速まこちゃん達も誘いましょうか」
「はい。そうですね」

結衣と晃は一緒に歩き出した。

後ろから絶望と栄光を見ている美紀がいたがほっといている。

※

幼馴染６人が集まりカラオケに来ていた。

「ねえ、アキ君はまた科学都市にでも行くの？」

結衣が晃に聞いてきた。

「そうですね。貴会があったら行くかもしれませんね」

「そのときは私達も連れて行ってよねあきにい」

真が言ってきた。

「そうですね。それもいいでしょう」

晃は笑いながら言った。

「ほらほら、次はアッキーの歌う番だよ」

美紀がマイクを突きつけて言った。

「はいはい」

晃はマイクを受け取った。

晃は歌いだした。結果点数は９７点だった。

・・・・・

みんな無言で驚いていた。

「アキ君って喉まで器用になっているの」

「どうゆう理屈ですかそれは」

「しかし、上手すぎる。晃は今まで歌ったことはあるか？」

今宵が聞いてきた。

「ええ。まあ何度かありますよ」

晃が平然と言った。

「アッキー。わたしも負けないぞ」

美紀が張り切って言った。

ちなみに美紀の最高点数は９５点。

決して下手ではなかった。さすが、音楽科のエース特待生。

カラオケが終わり、晃達は外をうろついていた。

「こうしてみんなでこんな時間まで要るのは新鮮ですね」

時間は7時を廻っていた。

「おい、だったらこのまま外でメシ食べないか？」

透が提案してきた。

みんな喜んで了承した。

場所は近くのファミレスだった。

「フライドポテト大盛りで」

みんなそれぞれ好きなものを選んでいた中、晃は大盛りフライドポテトをさらに大盛りで頼んでいた。

「あ、アキ君。それ全部食べられる？」

結衣が聞いてきた。

「楽勝です」

晃が親指を突きたてながら言った。
その顔は余裕の笑顔だった。

「アッキーてそんなにフライドポテト好きだっけ」

「最近だけど私は知っていたよ」

真はたしかに前に晃が大量のジャガイモを大量のフライドポテトに作り、それを5分の4を晃が平らげた。
そのときはもちろん真は唖然していた。

もちろん晃はほかにも栄養があるものを頼んでいた。

「晃、鉄の胃袋伝説」

「なんの伝説ですかそれは」

晃は呆れながら言った。

「フライドポテト王に俺はなる!!みたいな?」
美紀が悪ふざけで言った。
「何ですかそれは!!しかもなりませんからね」
晃はツッコンだ。
「そして、フライドポテトを毎日沢山食べられるのだ!!」
「それはいいかも知れませんね」
晃が考え出した。
「アキ君!!ちゃんとツッコンで!!」
変わりに結衣がツッコンだ。
「あきにいはこのことになると性格が変わるみたい」
「何じゃそれは」
真と透が呆れながら言った。
「そういう真もみんなよりも頼んでいますね」
晃がさっき注文したのを思い出しながら言った。
「結衣の2倍ぐらいですかね」
「あ、アキ君は何を思い出しているの?」
結衣がこれ以上のことは止めた。

こんな会話をしつつどんどん料理が運ばれてきた。

「そういえばみんなは今回のテストはどうだった？」

今宵が言ってきた。

その言葉で３人がスプーンかフォークかナイフを落とした音がした。

「今宵、いきなりですね」

「私は前回よりも上手くできたと思うは」

結衣が言った。

「私もそうだ。それでほかの人は？」

「僕は結構出来ましたよ」

「いいな、アッキーたちは頭が良くて」

美紀が言ってきた。

「えーい。ゆーちゃん。性格以外全て変わってよ！！その頭とか胸とか身長とか！！」

「な、なに言っているのよ美紀たら！！」

美紀の言葉に結衣は否定している。

「こよちゃんもよこせー。特にその身長を」

真も今宵に迫った。

どうやら身長が高くなりたいらしい。

たしかに今宵は女子の中で一番身長が高い。

「ま、まこちゃんストップ！！」

テスト最後の日の夜はみんなで楽しく食事が出来てよかった。

晃は笑いながらそう思っていた。

第２９話　テスト後とポテート（外国人のアナウンス風で）（後書き）

後書きトークコーナ。

晃「そういえば担当者が変わりましたけど、なんか関連とかあるのですか？」

巧「こいつらは簡単に言えば運動系キャラだと分かるが、前回のペアは一体なんだ？」

晃「いや、運動系はこちらは泉だと思うのですが」

美紀「前回のペアは学校のアイドルペアだったりして」

歩美「クーちゃんは私達の学校では有名人だからね」

巧「そういえばいえるかな」

晃「あれ？僕は無視ですか」

ほかのキャラが濃すぎて地味キャラの晃は着いていけなかった。

晃「なんですか、この扱いは」

第３０話　ＴＥＳＴ・不審者（前書き）

前回のあらすじ
テストの開き直り会

第３０話　ＴＥＳＴ・不審者

「やあ、アキ」

やつれた顔で泉が晃の机にやってきた。隣には舞もいる。
ついでに今は５時間目の休み時間で特待生は誰一人もいない。

「ど、どうしたのですか泉は」

晃は心配になって聞いた。

「泉ちゃんたら、寝不足なんだった」
「どうしてですか？」
「あたしはね。この前のテストで一夜漬けで勉強したからね」

泉は晃の質問に答えた。

「なにやっているのですか泉は」

晃は呆れながら言った。

「でも、ちゃんと８０点以上取っているんだからね」
「マジですか」
「大マジです」

泉が胸を張って言った。

「晃君はどうでした？」

舞が晃に聞いてきた。

「晃君は学年トップよ」

隣にいた伊織が答えた。

「まあ、その通りですね」

「晃君すごいね」

「アキ、本当に頭がいいんだね」

「そんな頭がいいアキ君に伝言です」

どこから来たのか、そこには静音が立っていた。

「お帰りください」

しかし、晃はお引取りを願った。

「ちょっとまってよ。大切なことだから私が伝えに来ましたのに」

「どうゆうことですか？静音さん」

「詳しいことは放課後に生徒会室でも来て下さいね」

静音は小悪魔みたいに立ち去った。

※

晃は放課後、生徒会室に向かっていた。

ちなみにあのあと静音からメールが来て舞と泉も連れてくるようにと連絡があった。

「なんで、あのとき言ってくださらないのでしょうか」

「アキ、なんか言葉が変だよ」

本人は気づいていないが、体のほうは疲れが溜まっている様子だった。

晃は生徒会室のドアを開けた。

そこには静音しか居なかった。

「あれ？静音さんだけですか？」

「うん。だって私が今回きみに頼むものは団殺者（ディスター）の依頼ですもの」

――！！

「あ、だからあたし達を連れて来てと言ったんだね」

「ええ」

「いい仕事しますね社長！！」

「いいえ、うちの社員のためですから」

「そのコントはともかく、内容は何ですか？」

晃が話題を戻した。

意外と乗りがいい静音だった。

「そうですね。最近この学園の回りに変質者がいるみたいなのですよ。それで、生徒に危険があるかも知れないのであなたに頼むことにしました」

静音が言っていることは団殺者（ディスター）としての実力を測らせるものと、そして、助手の2人がどれだけ協力できるかの晃を思ってのことだった。

「分かりました。そういうことなら引き受けます。舞、泉今から作

戦を立てますよ」
「はい」
「ブラジャー」
「古い！！」

深刻な場面なのに泉のおかげでそんな感じがしなかった。

※

場所変わって学園の外。と、いうか学園の囲む壁の前にいた。

「泉、まず作戦を伝えるのでそれは取ってください」
「へ～い」

泉はかぶっていたアフロを取った。

「まず、2手に分かれましょうか。僕は右から行きますので泉と舞は左をお願いします。あと、なるべく目立たないようにしてくださいね」
「ラジャー！！」

そう言って泉と舞はアフロをかぶった。

「待て！！」
「なに？」「なんですか？」
「人に話を聞いていましたか？アフロは目立つので禁止です！！」

晃は腕を使ってバツを作った。

「気に入っていたのに」

泉がぼやいた。

「なんでそんなもの気に入るのですかね？」

晃は不思議でしょうがなかった。

※

晃は普通に歩いていた。

隠れながらだと、逆に目立ってしまうからだ。

（別に、変わったことはありませんね）

晃はそう思いながら歩いていた。

こちらは異常なかった。

※

泉と舞は草むらや電柱に隠れながら歩いていた。

道を歩いている人は何だこの人はと思っている目で見ていた。

「ねえねえ。あのおねえちゃんたちは何しているの？」

「しっ！！見てはいけません！！」

そう言って子供を引きずる親子もいた。

「ねえ泉ちゃん。なんか私達逆に目立っていない？」

舞が疑問に思ったので泉に聞いた。

てか、聞くのが遅い。

「だって、人探しはこれが定番でしょ」
「これは追跡のときのじゃないの」

舞がビシッと否定した。
泉はそうだったのかと言っているような顔になった。
漫画なら完璧に劇画になっているはずだろう。

「だったらこのアフロで」
「アフロネタはもう結構です」

後ろに振り向いたら晃がいた。

「あれ、アキはもう廻ってきたの？」

ちなみにこの学園の敷地は物凄く広い。
グダグダしているうちにもう３０分以上経っていた。

「ええ。てか、２人はまったく進んでいるように見えませんかまあ、そこは聞かないようにしましょうか」

晃はなにか感ずいたようだ。
たぶんそのことはあっている。

「晃君のほうもその様子では見つからなかったようですね」
「ええ。どうやら、僕たちが見張っていることを知られたかもしれませんよ」
「な、なんで？」

晃は気づかないのかといいそうな風にため息をした。

「そんなに目立っては誰だってそう思います」

「あ、そうか」

「だからやめようと言ったのに」

舞もため息をついた。

「でも、本当にそうだとしたら案外、近くにいるということもありえますよ」

晃は分析を始めた。

とりあえず今日は解散ということにした。

第３０話　ＴＥＳＴ・不審者（後書き）

特別トークコーナ

巧「思ったのだけども」

晃「なんですか？巧さん」

巧「なんかいテストという言葉続くんだこれ」

晃「作者いわく偶然そうなったと言ってます」

真「なんか私たちの出番がまた減りそう」

晃「それは言わないでください」

第３１話　４丁銃（前書き）

前回のあらすじ
アフロ再び

晃「まさかの２回目の登場とは・・・」

第３１話　４丁銃

次の日。
晃は悩んでいた。

「やっぱり相手がどんな人か知らないと無理がありますね」
「そうですね。いくらなんでも情報が無さ過ぎますからね」

舞も晃と一緒に悩んでいた。

「やっぱり」
「やっぱり？」

舞は聞き返した。

「また囮作戦で行くしかないようですね」
「ま、またなの！！」

隣にいた泉が言った。

「仕方がありません。このままだと解決策がありませんから」
「で、今回は誰が囮をするの？」
「舞さん冷静」

泉はなぜかさん付けになってしまった。

「今回は泉のみでお願いします」
「それで、あたしかい！！」

泉は突っ込むように言った。

「今回は相当危険ですので戦える人がなったほうがいいと思いまして」

「じゃあアキが女装すれば」

「そんなもので引っかかる人間はいないと思いますよ」

晃はあせりながら言った。

「じゃああたしもやらない」

「う、裏手にきましたね」

「どうするアキ」

泉は勝ち誇った顔で言った。

「分かりました。ですが、スカートは履きませんからね」

「ボーイッシュな女性を演じるのですね」

舞が張り切ったような声で言った。

「そこ!!わくわくしない!!」

晃にとっては今回は屈辱なことになりそうだった。

※

放課後。

一回帰った後、晃たちは昨日言った場所に来た。

変わっているといえば晃の格好そのものだった。

「け、結局こうなるのですね」

晃は前髪を髪留めで止めて、後ろ髪はそのまま下ろしている。
男子としては長い髪をしているので今回はかつらはかぶらなかった。
服は女性物を着ている。
しかもロングスカートで中にはジーパンを履いていた。
姿はまるで本物の女の子だった。
しかも、顔立ちが元々女に似ているので物凄い美少女になってしまった。
周りの男の人がちらちら見ている。

ちなみにコーディネートは静音がしてくれた。

晃はショックで何も言えなかった。

「なんか複雑な気持ちです」
「こんな美少女になるとは思わなかったね」

舞と泉もショックを受けていた。

「だったらさせないでくださいよ!!」

晃は泣きながらツッコンだ。

「で、作戦はあたしとアキが歩いて、舞は指示を送るのね」
「ええ。舞は校舎内でこれを使ってみていてください「呼び出し(コール)」。」

そう言って晃は小さい鞄を出した。

「この中に入っていますので、お願いしますね」
「は、はい」

そう言って舞は学園に入った。

「それでは行きますか、アキちゃん」
「なるべく人が少ない道のほうが引っかかりやすのでそこに行きましょう。あと、その呼び方やめてください」

晃は説明と同時にツッコンだ。
2人は歩き出した。
言ったとおりになるべく人がいない道を通っている。

「なかなかいないね」
「そうですね。やっぱり女性を狙うのはアバウトすぎますかね」

晃は考え出した。

「やっぱり、僕の格好がだめだったりして」
「いやいや、意外と僕っ子はいるもんだよ」

泉が親指を突きたてて励ました。

「心配しているのはそこではありません」

晃は呆れながら言った。
その時だった。
泉が何かを感じたらしい。

「アキちゃん気をつけて、何かいる。」

「本当ですか。あと、その呼び方やめてください」

晃は否定しつつも振り向いた。

「泉ちゃん、アキちゃん。近くに隠れている人が1人います」

舞は空中監視マシン（晃持参）でモニタリングしていた。

ついでに場所は許可をしてもらって生徒会室にいた。

「それはほんとうですか!?あと、舞もその呼び方やめてください」

意地でも否定する晃だった。

そのとき、目でもわかるように何者かの影が動いたように見えた。

「そこ!動かないでください!!「呼び出し（コール）」!!」

晃は銃を出し、そのまま撃った。

「な、なんだ!!」

男は叫んだ。

「団殺者（ディスター）です!!そこの不審者は降伏してください」

晃は叫んだ。

しかし、格好のせいで説得力があるのやら、ないのやら分からなかった。

「クソッ捕まってたまるか!!」

男は晃に見られない位置に動こうとした。

「はい、観念してね」

泉はいつの間にか男のそばまで来ていた。
泉は電子型の棒を突き出していた。

「な、いつのまに」
「歯、食いしばってね☆」

泉は思いっきり男の顔面を棒で殴った。
男の歯が一個ぐらい抜けた気がした。

「そこの人も動かないでくださいよ」

後方にも仲間と思える人がい何人かいた。
今の騒動で来たようだ。

「クソッこの尼が！！」

そう言って男は飛び出した。
全員バットを持っていた。

「一言、言っておきます」

晃は銃を構えた。

「僕は男です！！「呼(コール)び出し」！！」

晃は服を一気に脱いだ。

器用なために女性服のみ脱いで男の格好に戻した。
そして2個の銃を上に投げて、さらにまた2つ中を出した。

そして、持っている銃を撃った後、さらに空中に投げてもう2つの銃を持つことで瞬間的にまた撃った。その繰り返しを3秒間に何回かやった。

早すぎる連射に男達は動けなかった。
弾は全て男の足元か、バットに当たっていた。
全てのバットが男達の手から離れていた。

「よ、4丁拳銃!!「自由者(フリーダム)」かよ!!」

その男が放った一言で男達はビビッていた。

「あなた達、全員逮捕です」

晃は連射をやめて言い出した。

「自由に行きましょう」

晃は勝利の微笑をした。

※

場所変わって生徒会室。
男達は全て警察に引き渡した。

「あれが、アキの技?」
「ええ。まあ、技と言うよりも戦い方ですね」

「すごいね晃君」

舞と泉が晃に言った。

「あれが、君の器用さが生んだ「自由者（フリーダム）」としての証拠の戦い方ですね」

静音が喜びながら言った。

「そうか、あんな風に自由で、特別な戦い方をするからその異名なんだね」

「ええ、まあそうとも言えますね」

泉が感心しながら言った。

「ついでに銃は何個登録しているのですか？」

静音が聞いてきた。

「まあ、保険に１０個登録していますね」

晃が平然と言った。

どんな状況でも戦うために１０個持っているらしい。

「本当にすごいですね」

舞が感心しながら言った。

「さて、そろそろ帰りますか」

晃達は帰る仕度をした。

第３１話　４丁銃（後書き）

後書きトークコーナー

巧「そう思えば俺は思ったんだけどな」

晃「なんですか？」

巧「義理の妹ということは血はつながっていないんだよな」

真「そうなるけど」

巧「つまり同棲という意味だよな」

楓夏「お兄ちゃん、クーちゃんと同棲しているじゃない」

真「それにあきにいはそんなことはどうとも思っていないよ」

楓夏「思いっきり頭の上に？マークが浮かんでいるね」

巧「・・・・・・・」

これが唐変木主人公だと改めて巧は知った。

第３２話　Ｐｏｉｎｔ・メイド（前書き）

前回のあらすじ

晃、本領発揮！！

第３２話　Ｐｏｉｎｔ・メイド

今日は晃はバイトの日だった。

「晃君。今日は執事服着なくっていいから」

由佳が晃に言った。

「ほ、本当ですか！！」

晃は喜びながら言った。
逆に今日一緒に働く結衣と真は残念そうだった。

「今日はメイドを使おうと思っているの」

そう言って由佳は何着かメイド服を持ってきた。
ちなみにこの服は静音に頼んだらしい。

「そうですか。ならば僕には関係ありませんね」

晃がほっとしたような言い方で言った。

「なに言っているの。晃君も女装してメイドになるのよ」

――へ！？

晃は一気にフリーズした。
由佳はニコニコ微笑んでいた。

「それ、マジですか？」
「おおマジです」

由佳は微笑みがら言った。
背中には悪魔の羽が生えていた。

「いや～あのときの晃君が見れよかったわ」

晃は頭の中で全てのことを分析した。

つまり、由佳はあの事件のときに晃の女装姿を見ていて、そして、今回のメイド服は静音に借りた。

「そうゆうことですか！？」
「あら、分析が早いことね」

由佳が関心しながら言った。

「そして、メイクはこの人に頼むわ」

そう言ってタイミングよく店のドアが開いた。
そこに居たのは泉だ。

「さあ、アキ、観念してメイドさんになりなさい」
「あなたもですか！！」

晃は逃げようとしたが、結衣と真に道を防がれた。

「アキ君。私もメイド服姿みたい」
「あきにい。観念しな」

どうやらここには晃の見方はいないようだ。
晃は肩を落とした。

※

「いらっしゃいませ！！」

結衣が元気よく言った。
ただいま店は大繁盛中。
結衣、真、泉の美少女3人の人気は物凄かった。
しかし、その中には晃の姿は無かった。

「あれ？あきにいは」

真が言った。

「そういえば見ないわね」

結衣も少し心配した。
だが、晃はただいま店の中で隠れいた。

「こら、何しているの晃君」

しかし、由佳に見つかった。

「しょうがないわね。なら厨房を頼んだわよ。晃君」
「ちなみにこの格好は」
「代えちゃダメ」

やっぱりそうですかと言いながら晃はため息をついた。
結局厨房のほうを担当することになった。（女装姿で）
男達の目線が気になるが晃は無視していた。
「お～い店長さん。あの子を指名できないの？」
1人の太っている男が言った。
――てか、指名制！？
晃はとりあえずそこをツッコンだ。
「じゃあ、アキちゃんあの人お願いね」
由佳が言った。
どうやらもう断ることも出来ないだろうと思い、ため息をつきながらその男の元へ行った。
「なににいたします？お客様」
晃はいやいや言った。
「ヨッアキちゃん」
「僕はアキちゃんじゃありません！！」
泉の言葉についつい突っ込んでしまった晃。
やばいと思い男の下へ振り向きなおした。
「いい。僕っ子男勝り少女最高！！」

（なに言っているのですかこの人は！！てか、僕は男です！！）

晃は心の中で叫んだ。

「もっとなじってください」

「ぎゃあぁぁぁぁぁぁ！！」

晃は叫んだ。

しかし、そこらへんがかわいく見えたらしく、男たちは次々に女装晃、通称アキちゃん（命名、泉）を指名してきた。

（最悪です）

晃は心の中で後悔をした。

※

晃達のバイトの時間が終わり、晃は早くも着替えてきた。

「うん。晃君が入ってから売り上げがうなぎのぼりだね」

由佳が電卓で計算していた。

「その分僕の精神力が次々に崩壊している気がするのですが」

「あきにいは多趣味のおかげで助かる」

隣にいた真が言った。

「いや、これは趣味ではありませんが」

「とりあえずこの写真は買った」

真は一枚の写真を見た。
その写真は女装晃がバイトで勤しむ姿だった。

「真、この写真は一体？」
「あ、あきにいにはあげないからね」
「いりませんから！！」

晃は全力で否定した。

「アキ君は次は執事のほうをお願いね」
「あれ？決定ですか！？」
「じゃあ、メイドと執事どっちがいい？」
「２択ですか！？」

晃はどっと疲れが出てきた。

「完璧に皆さん楽しんでいますよね」

全員うなずいた。

「あきにい、次は執事姿でバイトしてね。私客としてくるから」
「カメラ持ち込む気満々ですか！！」

真は無言でうなずいた。
なんかバイトの日が一番疲れる。
晃はそう思った。

第３２話　Ｐｏｉｎｔ・メイド（後書き）

後書きトークコーナ

晃「次回ついに本編でのコラボが掲載されます！！」

巧「意外と長かったな」

結衣「作者がなかなか本編での話がまとまらなかったらいいわよ」

クー「そっちも大変だの」

晃「ちなみにこのトークコーナのコラボも一先ず終わりです」

「え！？」

晃「と、言うことでまた本編でどんなＳｔｏｒｙになるのでしょうかね」

巧・クー「あれ！？終わり！？」

※うちゅうじんですよ！・ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ５５２０ｑ／

作戦参謀さんよろしくお願いします！！

第３３話　うちゅうじん　／Ｓｔｏｒｙ　前編（前書き）

今回は『うちゅうじんですよ！』とのコラボの話です。
前後編あります。
作戦参謀さん本当にありがとうございました。
感謝しています。
キャラ崩れがあったらすみません。
どちらの作品も本編とは関係ありませんのでご安心を

第３３話　うちゅうじん　／Ｓｔｏｒｙ　前編

東皆丘で不思議な爆発が起きたと聞いて晃たちはそこに向かっていた。
場所は人気がない空き地だった。
実際、爆発は小さいもので、静音がたまたま見たといっていたので、泉と舞をつれてきていた。
ちなみに通った理由は猫を追いかけていたらしい。（鈴も一緒のために真実）

「分かれて捜索しましょうか」

その場所に来て晃は２人に指示をした。

「しかし、煙で何も見えませんね」

そう煙でそこは何も見なかった。

※

煙の中に何人かの人影があった。

「おい、クーこれはどうゆうことだ」

巧はクーに聞いた。

「どうやら魔力がどこかで爆発したみたいでその現象で妾たちはどこかへ飛ばされたみたい」

クーは説明した。

「そうか、それはともかくそれはほかのやつらにどう説明する」

そう。巧、クー以外に何人か、いや、「うちゅうじんですよ！」のレギェラーキャラが全員そこにいた。

「なにこれ？またお兄ちゃんの不幸？」

巧の妹、楓夏が言った。

「それならありえるかもね」

「そうなの？藤沢君」

歩美と唯が言ってきた。

「いや、ありえねえから」

「これは定番のタイムスリップなのでは」

「お、それならありえるな」

吉野と赤城が言ってきた。

「先輩。どうしてくれるのですか」

奈々が言ってきた。咲は無言でパニックになっていた。

「だから、俺のせいにするな！！」

「あ、お兄ちゃん人影があるよ」

「これは、女の子だーーー」

煙の中から確かに人影が見えた。しかも、服装的に女子だとわかった。
それに気づいた赤城が飛びついた。

「きゃあああ」

―ガスッ!!

もちろん殴られた音がした。
その音が合図だったように煙が収まってきた。

「あ、あなたたち何しているのですか？」

殴った少女は泉だった。

「おお、かわいい女の子だ!!」

見えた瞬間吉野も泉に抱きつこうとした。
完全に赤城が同じことをしたことを忘れていた。

「キャア!!変態!!」

泉はどさぐさにまぎれて言った。
だた、そのことはあっているような気がする。
全員そう思った。

―ガスッ!!

もちろん吉野は赤城の2の舞となった。

「あ、あなたはいったい誰ですか？」

唯が冷静に言った。

「え、あ、ああ。ちょっとね」

「泉どうかしましたか？なんか変態２人が棒で殴られた音がしましたよ」

「あ、アキ」

晃は泉のところへ行き、巧たちと話をすることになった。

「で、なんですかこれは？」

晃は聞いた。

「それはな、どこかの魔りょｋｋｋｋｋ」

「それが俺たちにもわからないんだよな」

巧はとっさにクーの口を押さえた。

「それよりも、私たちはこれからどうするの？」

「そうです。僕は途方にくれるなんていやですよ」

歩美と奈々が言ってきた。

「それなら僕の家へ来ますか？これも何かの縁ですし」

晃はみんなに言った。

その後、みんな了承したのは言うまでもない。

※

晃たちは「自由荘」に向かって歩いていた。
お互い自己紹介をして歩いていた。

「着きましたよ。ここが自由荘です」

晃が家のドアを開けたら真が帰ってきていた。

「あ、あきにいお帰り」
「ほほう。この子が妹キャラか」

吉野が観察しながら言った。

「妹と言っても義理だけどな、だが、それがいい」

赤城もうんうんといいながらうなずいていた。

「あきにい。この人たち怖い」
「あはははは」

晃は呆れながら言った。

「私は楓夏。同じ妹キャラだからよろしくね」
「あきにい。言っている意味が分からない」
「それはわかります。てか、かってにそこはあさらないでくらさい」

晃はいつの間にか家の中を自由に見ている人たちにツッコンだ。

「あ、洗濯機。真ちゃんの下着あるかな」

「きゃあああああ！！」

赤城が覗きながら言った。

真は赤城を当たり前のように殴った。

「ロリ、最高」

「あきにい！この人たちやっぱり怖い」

「晃君の部屋はここか」

「そこ！！勝手にあけない！！」

歩美達がいつの間にか2階に行って部屋を空けていた。

「僕は真ちゃんの部屋を」

「「やめい！！」」

優輝兄妹のダブルツッコミが炸裂した。

「アッキーなんか面白そうだからきたぞー」

「お引き取りください」

ベランダからやってきた美紀を晃は窓を閉めた。

「これ以上ややこしくしないでくださいよ」

「なに言っているんだ。コラボと聞いてわたしは急いで登場したぞ」

力では勝てず、美紀は力ずくで開けてきた。

そして、玄関から幼馴染ズが入ってきた。

※

「結局何が原因なのか分からないわけですね」
「そうなんだ。どうしたらいいと思う？」
「そんなの簡単だぞ。もう一回まりょｋｋｋｋｋｋ」
巧はクーの口をふさいだ。
「まあ、そんなことはともかく早速小説同士がコラボしているんだからちょっとしたキャラの比較を確かめてみようか」
吉野が提案してきた。
というか、次元を壊す発言は慎んでほしい。
「まず、ヒロインだけどその小説のヒロインは誰だ？」
なぜか吉野が仕切っていた。
ちなみにあっちのヒロインはもちろんクーだ。
「それが、こっちのほうのヒロインは１人に絞っていないのですよ」
そう。はっきりいえばヒロインは女子の幼馴染や、舞、泉さらには静音や伊織までがヒロインといってもいい。
「ま、妾の１人ヒロインもいいものだぞ」
クーが胸を張った。
「まあ、胸は１名ぐらいしか勝てないだろう」
巧がさらっと言った。

「「うるさい！！」」

クー、真のダブル蹴りで巧はＫＯした。

「悲劇じゃーーーーー」

「次は主人公ですね。藤沢君と優輝君ですね」

奈々は巧を無視して話を進めた。

「じゃあ、アキ君は頭はいいし、みんなに頼られるよね」

「藤沢だって、馬鹿でオタクだけどいいところあるんだからね」

結衣と歩美は言い合った。

「結衣、そんなに張り切って言うことではないような気がします」

「松木、なんか汚された気がするのだが」

「あれ、あんたも読み方ゆいなの」

歩美は聞いた。

「う、うん」

「じゃあ、いいんちょと同じ読み方だな」

「いいんちょといえばこっちも委員長キャラいるぞ」

「呼んだ？」

美紀がそういった瞬間、伊織が現れた。

「伊織、どこから来たのですか？」

「庭のところでずっとスタンバッテいました」

「美紀ですか」

「あははは」

そんな会話をしていたら唯が泣きそうになっていた。

「ど、どうしたいいんちょ」

「なんか、あの伊織ちゃんはちゃんと名前で呼んでもらっているからうらやましくなっただたよ」

たしかに、男子生徒はほとんど唯のことをいいんちょと呼んでいる。伊織は誰一人いいんちょと呼んだ人はいなかった。

「そ、それで。主人公の比較だけど」

「なんかこう見てみればアッキーてなんか地味な主人公だよね。頭はよくって器用だけどそれ以外の特徴ってないよね」

美紀はバッサリ言った。

第３３話　うちゅうじん　／Ｓｔｏｒｙ　前編（後書き）

後書きトークコーナ

晃「なんだかんだで始まりましたね、コラボ小説」

巧「ああ。なぜかあんな方向に行ってしまったけどな」

晃「作者がキャラクターが多いのでそっちのほうが面白そうと思ったのでしょう」

巧「さっそく主人公の俺とヒロインのクーが負けているけどな」

晃「結局僕が地味といわれて終わったような気がしますが。それにクーさんはあなたが勝手に負けにしたように見えますが」

巧「だってしょうがないじゃん胸に目が行っちゃうのは」

晃「さて、次回のこのコーナーは「うちゅうじんですよ！」の作者の作戦参謀さんのアンケートをとりましたのでその内容を見せたいと思います。本編も後半戦です」

※作戦参謀さん。ありがとうございました。

巧「華麗に無視された」

第３４話　うちゅうじん　／Ｓｔｏｒｙ　後編（前書き）

前回のあらすじ

結果、次元の破壊

第３４話　うちゅうじん　／Ｓｔｏｒｙ　後編

「なんか暇だな」
「そうだな」

赤城とクーはそう言ってきた。
ちなみに晃は部屋の隅っこで体育座りしていた。
さっきに美紀に地味と言う言葉に相当ダメージを受けたようだ。

「そ、そっちの主人公も大変そうね」

歩美が同情をしながら言った。

「それよりも、なんかやることはないか～」
「クーそんなことよりも早く帰る方法を見つけなきゃダメだろう」
「でもまあ、暇だったら逆に何も思いつかないんじゃないの？」

クーと巧の会話に美紀が言ってきた。

「だったらお約束の不良との喧嘩はどうだ？」
「まてぇーー！！」

吉野の提案に復活した晃がツッコンだ。

「やめてください！！こっちはもともと不良や喧嘩は無にしているのですよ！！」
「おお、アッキーが早くも復活した！！」

美紀が感心している。

「だったらアニメ名言でもみんなで言い合うことしか」
「それも無しでお願いします」

注・主人公がこうなのでオタクネタは控えています。

「俺は別にいいのだが」
「大吾は黙っていてください」
「ちなみに吉野もな」
「へ？」

※

「それで、思い当たるふしはないというわけですか」

晃は手をあごにつけて悩んだ。
ちなみに大吾と吉野は。

・餌を与えないでください・

ダンボールの中に座っていた。
この文字はダンボールに書いているものだった。
そしてみんな平然と無視していた。

（（なんかいないことにされている））

（そしてなぜ僕の眼鏡があそこに）

吉野の眼鏡はさっき吉野が座っていたところにおいてあった。
そして、フレームには吉野と書かれている紙が張ってあった。

そんなことはどうでもいいとして、咲がなにか提案してきた。

「思ったのですが、これって小説として成り立っているのでしょうか？」

本大好き文学少女に指摘された。

「まあ、だいじょうぶじゃないか」

今宵が言った。

「人数が多い中、グダグダ喋っていきなり場面が変わるのはこの小説のスタンスだよ」

真が言ってきた。

「なんか、地味だな」

巧が言ってきた。

「２６話なんてそこから動かなかったものね」

結衣も言ってきた。

「それって本当に大丈夫なの？」

「まあ、大丈夫でしょう。多分」

歩美が言ってきたことを晃が平然と答えた。

「アキ君。そういえば私、こんなのもを拾ったのですが」
静音が渡したのは何か円盤みたいなものだった。
「妾なんか見たことがあるような気がするぞ」
「でもこれは壊れていますね」
晃が眺めながら言った。
「な、直せたりしませんよね」
奈々が聞いてきた。
「多分、出来ると思います」
晃はサラッと言った。
「あきにいは地味な主人公だけど、以上と言えるほど器用だからね。それも手先だけじゃないし」
「料理も上手だしね」
「お兄ちゃんそこは見習ってよ」
「うるせー」
どさぐさにまぎれて毒をはいた楓夏だった。
「でも、楓夏ちゃんと奈々ちゃんってわたしたちと同年齢なのよね」
美紀が言った。
ちなみに晃は黙々と作業を始めた。

「そういえばそうか。だったら俺達は先輩か」
「私と鈴ちゃんは一緒ですね」
「同学年なのに」

クーは自分の胸を触ってため息をした。
どうやら静音の胸と比較しているらしい。
同学年どころか年下にも負けていることに気づいたクーはさらにため息をついた。
ちなみにそのことに気づいた巧はひっそりと笑いているが、クーには見破られたらしく殴られている。

「ちょっお前が本気で殴ったら死」
「うるさい巧!!死ね!!」
「悲劇じゃーーーーーー!!」

こんなやり取りしている2人はほっといて晃はもくもくと作業していた。

「どう、アキ君。直せる?」

結衣が聞いてきた。

「すごいですね。こんなのを直せるなんて」

唯よりそって言ってきた。
てか、結衣と唯。あ~ややこしい。

「そうですね。無理がありそうですね。なにせこの技術は科学都市でも見たことありません」

それはそうだ。その機会は地球外のものであるからして、やっぱり無理がある。

「てか、学園都市って何だ」
「それは僕が説明しよう」
「よ、吉野」

巧は晃に聞いたが吉野の声が聞こえたので吉野のほうに顔を向けてみる。
だが、そこにあったのは眼鏡だけだった。フレームには吉野と書いた紙が張ってある。

「吉野。いつのまにそんな醜い姿に」
「沢ちゃんこっちこっち！！」

声が聞こえた方向を見ていると大吾と一緒に餌を与えてはいけませんと書いてあるダンボールに入っていた。

「吉野さん。大胆な趣味ですね。大吾さんも」
「柊先輩。こんな趣味持っている人は小学生だけで十分です」
「「ちょっ酷い」」

静音と真は2人をからかっていた。

「しょうがないですね。お茶でも入れて一息つきますか。吉野さんもどうですか？」

しかし、晃が喋っている相手は吉野眼鏡だ。

「そっちもふざけるなよ！！ツッコミ役が」

「なんか面白そうだったので」

そう言って晃は台所に行ってお茶菓子とお茶を用意し始めた。

「でも、どうする。このままじゃ妾たち帰れないぞ」

クーが心配し始めた。

「そうだよ。晃さん何とかなりませんか？」

楓夏も聞いてきた。

「そうですね。もし、この機械が影響でここに来たとしたら、煙と爆発を起こせばいいのですかね」

「爆発はできたら避けてほしい」

歩美が手を振って嫌がった。

晃はまた頭をかきながら悩み始めた。

「どうします？このままじゃあ本当に帰れない」

奈々が心配し始めた。

「そうだぞ帰れないと妾がこの小説のヒロインになってしまうぞ」

「無理じゃね。胸の差で」

「胸のことは言うなー！！」

「ちゃっ2回目はまじきついって！！」

巧はそう言って机に置いてあった例の機械を手にとってクーのパン

チを防いだ。
そのときだった。
変わりに殴られた機械が起動し始めた。
そう。クーの殴ったときの巨大な（怒りの）魔力が接触し、その影響で宇宙で作られたこの機械が起動したということだ。

「おお、何が起こったのかはわかりませんが直りましたよ！！」

晃が気づき言っていた。

「マジか」
「妄知らないぞ。何が起こった」
「それは僕にもわかりませんがとりあえず帰れますよ」

そのことを聞いた全員が喜びだした。

「時間も無いからな。これでさよならだな」

巧がそう言いながら握手を求めた。

「そうですね。お互いがんばりましょう」

晃は握手をした。

そしてそのままみんな消えて行った。

「行ってしまいましたね」
「僕、忘れられてね？」

――あ。

みんな今気づいたらしい。
さっき吉野の変わりに吉野眼鏡が変わりに行ってしまった。
だが、このあと、ちゃんと転送された吉野だった。
「僕は巧さんよりも吉野さんのほうが不幸だと思いますが」
晃はボソッと言った。

第３４話　うちゅうじん　／Ｓｔｏｒｙ　後編（後書き）

晃「前回の予告通りに「うちゅうじんですよ！」の作者、作戦参謀さんのアンケートを取ってみました。さて、どんな結果となったのでしょうか」

1，好きなキャラは？
真ですかね、幼馴染が多い中の義妹キャラ。
「あきにい」と懐くあたりがいいですね！

2、この作品の設定はどう思います？
設定はわりと好きです。
日常パートもいいのですが、科学都市とは如何なるものか気になります！
そして明らかに7年前（短編）とキャラが変わっている晃が科学都市で何があったか気になりますね。そんな怪しい科学都市と晃の過去が楽しみな設定です。
しかも晃、一時期怪しい街にいて白髪に赤目って……まさかラスボスは木原く（ｒｙ
いえ、なんでもないです！
それにしても晃のハーレムさ……ちょっと自分と交代してください（心の声）！

3，好きなシーンは？
好きなシーンですか。今の所上級生と真の会話でしょうか。
真さん、デレ乙です！

4，晃と結ばれてほしいキャラは？
個人的には真がいいなと思います！

5，この作品に対して一言お願いします！！

そうですね、とりあえず……晃、このハーレム野郎ぉ～！

作戦参謀さん。本当にありがとうございました。

第３５話　文化祭準備開始（前書き）

前回のあらすじ

吉野、最後まで醜い扱い。

巧「なんで吉野ピックアップ！？」

吉野「なんだが引っかかる」

第３５話　文化祭準備開始

今日の６時間目の授業は特待生もいるのである企画のためにＨＲとなっていた。
教卓には学級委員の伊織が立っていた。
話題はもうすぐに迫ってきた、文化祭の話だった。
晃達１年１組はいまだに決まっていなかった。

「それで、企画はどうする？」

伊織がみんなに問いかけた。
東の丘学園の文化祭は基本出し物は自由で、１年も飲食店を開くことが可能である。
ただ、その分競争率が高く、より優れた企画でないと了承されない。

「やっぱり、喫茶店がいいでしょ」

大吾が言ってきた。

「しかも、女子全員メイド姿で」
「へえ、でも全員は無理だと思うわよ」

伊織は冷静に答えた。

「でも、いい企画だろ」
「まあ、時間もないし、みんなが言いと言えばいいのだけど」
「私は男子は執事服で接客するなら問題ありません」

クラスの一人の女子が名乗りをあげた。

「メイド服ならアッキーが何とかしてくれるよ。執事服も」
いきなり美紀が晃の名前を挙げた。
「そう。だったらこれで決定。いいわね」
「あれ？僕の意見は無し！？」
しかし、晃のこのツッコミは誰も聞いていなかった。

※

「はい。ありがとうございます」
放課後、晃は静音にこのことを伝えて服の調達をお願いした。
返事はイエスだった。
「じゃあ、文化祭はもう1週間も無いから早いところ、準備しよう」
伊織はみんなに伝えた。
そう文化祭までもう2週間を切っている。
みんな早いところ準備を始めた。
「で、晃君は飾り付けや創作のときにみんなを仕切ってね」
伊織は晃にいきなり頼んできた。
「え！？いきなり頼まないでくださいよ」
晃は講義したが科学都市といわれたところで断れなくなってしまっ

た。

「じゃあ、よろしくね」
「はあ」
「わ、私もがんばるからね。アキ君」

結衣が言ってきた。

「そうですか。じゃあ、僕のサポートお願いしますね」
「う、うん」

実は最初はサポートすると言う意味で言ったわけではないが、こういわれたので結衣は断れなかった。

※

文化祭まで1週間切った。
1組の喫茶店は学園から了承された。
放課後、晃はなにやらせっせと作っていた。
それも機械のものだった。意外とでかい。

「あ、アキ君。なに作っているの？」

結衣は聞いてきた。

「これはよくお店で見かけるあの機械の看板あるでしょう。それをオリジナルで作っています」
「それって1から作ったの？」
「いいえ。何日前からこれを科学都市から送ってもらいまして、今は必要なプログラムと中身の構造の整理をしているところです」

話している晃だが、その手は止まっていない。
結衣は感心したような顔で見ている。

「すみませんが結衣。この調整が終わるまで代わりにみんなに指示を送ってくれませんか？」
「あ、うん。分かった」

結衣はそう言って場所を離れた。

「こんにちは」
「あれ、まこちゃん？晃君に何か用なの？」

真が教室に入ってきた。今は伊織が対応している。
どうやら何か相談に来たらしい。

「真、どうかしたのですか」

晃は気づいたので声をかけてきた。

「あきにい。ううん。今回は伊織さんに用があるの」
「え！？私に？」

真は無言でうなずいた。
教室の周りの女子はその姿が人形みたいでかわいいと言っている。

「委員長からの伝言で４組は１組と協力し合いたいとことです」
「委員長って、ああ。花火のことね。いいわよ。で、その内容は？」

どうやら伊織は４組の委員長とかかわりがあるみたいだ。

真は渡されたと思う紙を取り出して読んだ。

「えっと、４組からは喫茶店に必要な人員を出す代わりに、１組からはアイディアと技術を貸してほしいそうとのことです」

「なるほど、たしかに１組だけでは人員は足りないこともあるでしょう。おもに部活や委員会やらで」

晃は内容に納得した。

ちなみに４組の出し物はミニゲーム系のものらしい。

「残念ながらそのやるものがいまだに決まってなくて」

真は残念そうに言った。

「でもこれって簡単に言えば晃君を貸してくれと言っているみたいなものよね」

「へ！？」

伊織の一言で晃はいやな気がしてきた。

「いいわよ。その話乗った。と言うことで晃君は今すぐに４組に行ってきて」

伊織は悩まずに一瞬にして答えを出した。

「へ！？あれ僕の意見は？」

「いいから行って」

「あきにい。はやく」

「嘘！！」

どうやら晃は今回の文化祭は忙しくなりそうだった。

※

場所変わって４組の教室前の廊下。
そこには茶色のポニテールの女子が１人が出迎えてくれた。

「あなたが優輝晃君ね。伊織から聞いているわよ。私は夏色花火（なついろはなび）。
よろしくね」

話を聞いたところ、花火は真と一緒の卓球部で伊織とは親友らしい。

「いや～まこちゃんのおかげであきにいさんを早く確保できたわ」
「はあ、あれ？夏色さん。それはどうゆうことですか？」

晃はさっきの言葉に疑問を感じた。

「花火でいいわよ。ほら、あきにいさんて科学都市から来たというからその技術がほしいクラスが沢山いるのよ。それが2年や3年も例外じゃないわ」
「はあ」
「伊織さんはいままでそんなオファーが多いってさっき言っていた」

真は晃に言った。

「なるほど、全ての状況が分かりました」

つまり、伊織は花火と親友と言うわけで晃貸し出しの件を了承したらしい。しかも条件がいいほうなのでそれも了承した。

「ちなみにあきにいさんの技術の腕はまこちゃんから良く聞いているわよ。

花火は得意げに言った。
晃はため息を漏らした。

「それで、僕は何をすればいいのでしょうか」
「うん。とりあえず何を出すか話し合いに参加して」
「へ！？」

そう言って花火は教室のドアを開けた。

「みんな～救世主様が来たわよ」

花火がそう行った後、クラスの生徒はわーと叫びだした。
なにかプレッシャーを感じた晃だった。

第３５話　文化祭準備開始（後書き）

後書きトークコーナ

晃「コラボが終わり、ついに文化祭編に突入ですね」

静音「そうですね。見てみればアキ君は大変忙しくなりそうですね」

晃「そうですね。これからもいろんなキャラが増えますしね」

静音「はい。それでは、皆様の感想や、メッセージも今までと同様楽しみに待っています」

晃「再次回からはキャラの詳しい設定を披露したいと思います。では、次回またいましょう」

第３６話　モザイク料理と準備（前書き）

前回のあらすじ

文化祭編突入！！新キャラ登場！！

第３６話　モザイク料理と準備

結果。晃は物凄く疲れながら家に帰ってきた。
入ったら真がもう帰ってきていた。

「あ、あきにい。お疲れ」

真が驚きながら言ってきた。

「真。すみません。いまご飯の用意しますね」

晃はそう言ってすぐにリビングに入った。
そこにはエプロン姿の真がいた。

「あきにいが遅かったから私が料理してみた」
「そうなのですか。どんなのですか」

晃は期待しながらテーブルを見た。
だが、その期待を打ち砕くほどの残酷な料理（？）が置いてあった。
漫画、アニメなら必ずモザイクが付いているほどである。

「さて、今ご飯作りますね」

晃は気を取り直して台所に向かった。

「あきにい。これ食べて」

真がモザイクのものをスプーンですくって笑顔で差し伸べてきた。
晃は頭の中で人生が終わりそうな音が聞こえた。

「はい。あきにいあーん♪」

真が元気よく言ってきた。
晃は断れずにその差し伸べたモザイクを食べた。食べてしまった。

結果。
晃はその晩に何回もトイレに入った。

※

次の日。晃は疲れが取れずにいた。
顔はものすごくげっそりしていた。

「あ、晃君。どうしたの？」

庵が驚きながら聞いてきた。
だが、晃からは返事はなかった。

「アッキーは愛情がたっぷり入った妹の料理を食べて生死をさまよっているところだよ」
「料理が得意な兄の妹の料理は食べるなと、いうことだね」
「それは何かの教訓ですか？」

伊織が納得したようにいったことを晃は突っ込んできた。

「これは重症だねアキ君」

結衣が心配していった。

※

放課後。
昼の弁当を食べたので晃の調子は戻っていた。
晃はみんなに指示しながら作業をしていた。

「晃君。一様、メイドと執事をやってくれる人決まったわよ」

伊織が言ってきたので晃は手を止めた。

「とりあえず、自由荘の人は決定で」
「それって、美紀に結衣それに真のことですか」
「晃君もね」
「はい！？」

晃は聞き返した。

「晃君には執事とメイドどっちもやってもらうから」
「あなたは僕を殺す気ですか？」

晃がいやな顔で言った。
伊織は気軽にうんと言ってきた。

「却下です！！執事はいいですかメイドは嫌です！！」
「じゃあ、しょうがないわね」

晃はほっとしたした顔でため息をついた。

「じゃあこの写真を売りさばくか」

伊織はファイルを取り出して中身を見した。
それは晃のメイド姿の写真（ｉｎ，Ｐｏｉｎｔ）だった。

「やめてください！！」

どうやら晃は当日も忙しくなりそうだった。

そのときだった。放送が流れてきた。

『1年1組のアキ君。今すぐ生徒会室にきてください！！女の子がお待ちですよ』

静音の声が聞こえて男子を刺激するような言い方で放送は終わった。
晃は周りの男子の怖い視線に耐えて生徒会室に来た。

「すみませんねアキ君。いきなり呼び出してしまって」

「で、なんですか静音さん」

晃は単刀直入に聞いた。

「はい。アキ君には当日はできるだけ学園の警備を手伝ってほしいのですよ」

「警備ですか」

「はい。私たち生徒会は文化祭は警備にあたるのですが、今年は女子だけですのでいろいろ危険が多いのでアキ君に申し訳ないのですが手伝ってほしいのですよ」

静音は困った顔で言った。

「わかりました。そんなことなら引き受けます」

晃はすぐに答えを出した。

「それで、はやく教室の戻りたいのですが、いいですか？」

「あ、はい。いきなり呼んですみませんでした」

静音から了承を得て晃は生徒会室を出て教室に向かった。

教室に向かっている途中、花火と真に出会った。

「あ、あきにいさん。４組の出し物は一様決まったのでその報告に来ました」

花火が笑顔でいった。

どうやらこの２人は本当に仲がいいらしい。

まるで先輩と後輩に見える。

「それで、射的をしたいのですが、晃さんにはその銃を何とか作ってほしいのですか」

「もちろん安全を第一に考えたものね」

花火と真はお願いしてきた。

「それなら僕が作らなくてお願いすれば僕が通っていた研究所から送ってもらえますよ」

晃は思い出しながら言った。

「では、お願いできます？」

「ええ。まあ」

「じゃあ、あきにいお願いね」
「ええ」

そういって晃は自分の教室に入った。

「あ、晃君。厨房のほうもお願いできる？」

帰ってきた早々伊織からお願い事が来た。

「晃君。調理実習で何人かの女子のプライドに傷つけたほどすごいんだから作ってよね」

詳しくは２１話を参照。

「わかりました。やらせてもらいます」

晃もこのことを言われたら有無もいえなかった。

第３６話　モザイク料理と準備（後書き）

夏色花火（なついろはなび）

クラス学年：１年４組

年齢：１５　性別：女　第一人称「私」

身長：１５８　胸ランクＥ　誕生日：１２月４日

髪：茶色のポニーテール

ジョブ：４組学級委員長権真お世話係

好きなもの：伊織、真

嫌いなもの：ゴキブリ

記：４組の学級委員長で伊織と親友。

真とはクラスメイトで同じ卓球部で仲がいい。

ちなみに卓球部の１年は彼女ら２人だけらしい。

やさしくお世話が好きな人で人望は厚い。

晃のことを「あきにいさん」と呼び、まるで自分の兄として接してくる。

ゴキブリは本当に苦手で見ただけで気絶する。

第３７話　文化祭初日・多忙な喫茶店（前書き）

前回のあらすじ
悪魔な食べ物を食べてしまった晃。

真「失敬な言い方」

美紀「アッキー感想がぜんぜん来ないね」

晃「まあ、しょうがなんじゃないのですか」

美紀「みんな、おらに感想を分けてくれ」

晃「感想は分けるものでは無いような気がしますが」

第37話　文化祭初日・多忙な喫茶店

文化祭当日。
この学園の文化祭は一般公開をしており、誰でも入場できるものとなっている。
しかもその出し物はレベルが高く、お金が懸かっているのもが多い。
とくに舞台発表をする特待生は大舞台といってもいいほどである。

そんなことで1年1組の教室。

「じゃあ、分担は今言ったとおりね」

開催前、伊織がみんなを仕切っていた。
みんなうなずいてそれぞれ配置についた。

※

『それでは、東の丘学園の文化祭を開催します。皆さん楽しんでくださいね』

生徒会長の静音の一言で文化祭はスタートした。

文化祭は2日に分かれており、金曜日は生徒だけで行っており、土曜日は再準備と休みで日曜日に一般公開される。
いま、生徒公開は簡単に言えばリハーサルみたいなものだった。
だが、生徒会は学園の警備はやらなく済む。
それに舞台発表のほうも休みである。

「なあ、1年1組の教室メイド喫茶だってさ」

「冥土喫茶！？」

どこかの男子がこんな会話をしている。

「冥土じゃなくってメイドな」

「わかっているって。でも本当にそうだったら。羽衣さんのメイド姿を」

「そうだ！！しかも４組と合同らしいぞ！！」

「早く行くしかねえなこれは」

そう言って男２人は１組に向かった。

※

ただいま１年１組の喫茶店は大盛況である。

理由はたくさんある。

まずは音楽科の特待生の美紀はものすごい有名人であり、４組から来た真も女子からもそして男子からもかわいがれていた。

それ以外にも伊織やさらには生徒会庶務の泰子までいる。

とどめはやはり結衣の影響が強すぎるのかほとんどの男子が彼女を目的に来ている人がほとんどだった。

さすが学校のアイドル。

しばらく時間がたったら泰子が厨房へメニューを取りに来た。

今回のシステムはメイド服のリボンにマイクが仕込んでおり（晃特性）、そのマイクに繰り返すときに言うだけでメニューが伝えられるというシステムになっている。

「ですが、泰子は生徒会の仕事やらないでいいのですか？」

「ああ、生徒会は文化祭は警備以外やることないからいい暇つぶし

だよ。僕個人で言ったら結構楽しいし」
「そうですか」

そしてさらに時間がたった。

「おーい晃君。そろそろ着替えて」

晃にとって悪魔の時間が迫ってきたようだ。
この時間は音楽科の発表のリハーサルがあり、それをかねて結衣たちの自由時間にしているが、さすがに人数が減るのはやばいので晃が女装で出ることとなった。
晃はほかにもいるんじゃないのでしょうかと言ったらそっちのほうが面白いし、ほかの子は部活があるからという1つ目は納得しない理由だったがそれならば有無がいえなかった。

「ほら、あきにい早く着替えて!!」
「真!!そんなに自分で着替えることできないでしょうか」
「わかっているって。ほら透!!あきにいをさっさと着替えさせて」

透がいきなり現れてきた。

「ほいほーい。さっさと済ませるぞ晃」
「ちょ、待ってください」

有無言わさずゴーという乗りでさっさと着替えさせられた晃だった。

「お、アキちゃん。来たね」

伊織が悪ふざけで言ってきた。
この人、面白いことが変わると性格が本当に変わる。

完璧にハイテンションモードだ。（命名美紀）

「ほら、アキお姉ちゃん早く仕事してよ」

真がばれないように言ってきた。

そして肝心の客は。

「うわ、羽衣さんいないなぁ～」

「あ、でもあの子かわいくない？」

「え！どの子？」

「あの白い髪の子。ものすごくかわいいぞ」

「あ！本当だ。いこうぜ」

そんな乗りでどんどんお客さんが増えていった。

「い、いらしゃいませ～」

ちなみに晃は声が変わるマイクを使って（声はすべて結衣の違う声でとったもので晃特性）いた。

「アキちゃん。あそこのテーブルお願いね」

「僕の仕事多くないですか？」

「仕方ないじゃないアキちゃんの指名多いから」

「指名制なのですか？」

ちなみに晃は第一人称は変えておらず、むしろかわいさがグレードアップしてしまっていた。

「ほら、アッキー早く行って！！」

「ちょ、ちょっと泰子。押さないでください」

泰子が晃の背中を押した。

※

やっと結衣たちが帰ってきたので晃の女装タイムが終わった。
だが、この時間はちょうどみんな昼ごはんの時間で晃のご飯は結衣たちが買ってきてくれた。

「次はアキ君」
「なんですか結衣」

結衣が後ろに何かを隠しながら言ってきた。

「はい、次はこれ着てね」

そう言って結衣が差し出したのは執事服だった。
晃はため息をつきながら着替え始めた。
どうやら抵抗はあきらめたようだ。

午後の時間は男子が執事服をきていた。
結衣と美紀はメイド服を着て男子生徒を集めていた。
いつもとはちがい、女子生徒が増えてきた。

「アッキー服が変わっても忙しいのは変わりないね」

最小限に早く移動している晃に対して美紀は言ってきた。

「なんで僕がこんな目に」
「アッキーはやっぱり科学都市から来た人だから人気があるんだよ」

ちなみに結衣はさっきから晃のことを愛しく見ていた。
晃はほかの人より多く人を集めているので（しかもほとんどが女子）男子は嫉妬しながら見ていた。

「あ、アキ君。私のほうにもオーダーよろしいですか？」

晃は越えかけられた方向を向くと静音が席に座っていた。
相席には鈴も一緒にいた。

「静音さんに鈴さん。いらっしゃいませ」
「どうやら繁盛しているようだな」
「ええ。おかげさまで」

晃は愛想笑いをした。

「それでは注文お願いしますね」

静音がお願いしてきた。
それから、注文を運んできた晃に静音はまた話しかけてきた。

「大繁盛のところすみませんが、明日は警備大丈夫ですか？」

どうらや明日のことを心配してくれているらしい。

「ええ。伊織にはもう伝えておきましたのでばっちりあけています」

晃は微笑みなが言った。

「それは、安心しました」

「それで、お二人はさっきまで何をなされていたのですか？」
「私たちは風紀委員に対抗して学園内の警備だ」
鈴が言ってきた。
この人がそういうと冗談に聞こえない。
「対抗しているのは冗談ですか、生徒会たるもの生徒の身と安全を考えることは大切です」
静音が訂正した。
なんで鈴はこんなに風紀委員と対立しているのか。まあ、理由はいくらでもあると思うが。
「そうですか。がんばってください。それでは僕は仕事に戻りますね」
「おお！ちゃんとするんだぞ」
「はい。がんばってください」
そう言って晃はその席を離れた
だが結局、晃は今日の文化祭は一歩も教室に出ないで終わってしまった。
※
帰り道今日は珍しく、幼馴染全員と帰っていた。
「アキ君結局教室から一歩も出なかったの！？」
「ええ。まあ明日はその分仕事が減りますが」
「そういえばあきにいは生徒会のほうも手伝うんだってね」
「ええ。学園外の警備です」

晃はそういっていたが内心はものすごく疲れていた。
明日は準備やリハーサルなので少しは休めるが晃の準備期間のことを考えたら休みには少し難しい。

「はあ」

晃はため息を漏らした。

第３７話　文化祭初日・多忙な喫茶店（後書き）

キャラ解説

優輝晃

これの名前は結構意味はあります。

苗字は優輝は勇気とかけて作り、晃はあきらめないという意味で名づけ、感じは日と光で太陽みたいな感じで決めました。

あわせると、勇気を持ったあきらめない太陽な心を持った自由な戦士と言ってもいいでしょう。

髪は白髪というのは彼の最悪な過去の運命をわたってきた証としてそうしました。

過去編はいつか載せたいと思います。

４丁銃は彼の器用さを武器にした形となりました。

銃本体もすごい能力を誇っていることで科学都市というイメージを作りました。

制服は彼のみ違う制服にしたのは彼に指名があると思ってもらえるようにそうしました。

ちなみに結構地味なキャラなので制服は目立たせたいなとそういう気持ちは少しありましたが・・・

敬語に普通の運動神経、頭がいい、器用。

この２つのイメージをあわせるとなぜか地味なキャラができてしまいました。

まあ、後悔はしていないので。

第３８話　２日目の準備（前書き）

前回のあらすじ

晃、教室一歩も出ず乙！！

晃「なんか今回の天の声の人テンションが高いですね」

美紀「何でだろう」

第３８話　２日目の準備

次の日。
日曜日に向かっての文化祭の再準備の日だ。
だが、晃の足取りは重かった。
どうやら昨日の疲れが、いや、ダメージが強いようだ。おもに女装で。

「アキ君。まだ疲れが取れていないの？」

結衣が心配したので聞いてきた。

「なんだか、疲れているよりもダメージを何かしら受けているようにしか見えないぞ」

今宵が鋭く言ってきた。
しかし、言っていることは本当のことだ。

「晃、まだ女装のこと気にしているのか」

透が笑いながら言ってきた。

「じゃあ、今度は透がやってみますか？女装」

晃の目は冗談を言っている目ではなかった。
てか、なにか光っている。なんだか怖い。

「さ、サーセン！！」

晃の殺気を感じたのか透は謝ってきた。

「でもあきにいは明日はしなくって済むんだよね」

「ええ」

「え～おもいろいのに」

美紀がそういったが晃にとっては迷惑以外何者でもなかった。

だが、美紀の性格からして悪気がないので怒れない。

「そういえば、警備ってアキ君一人でやるの？」

結衣が聞いてきた。

「いいえ。一様、舞と泉にも協力してもらいます」

そういえばあの二人の出番が最近ない。

最近は４組との交流が多かったので他のクラスとの交流がまったくなかった。

「まあ、喫茶店のほうはドンと任せろ！！」

美紀が胸張って言った。

――むしろ、心配なのですが。

そんなこと考えていた晃だが、今日は当日ではなく準備となっているわけで、晃にとってはすこしもの休息にはなるだろう。

※

1年1組。

「いや～大もうけだねこれは」

教室に着いたら伊織と他の女子生徒が会計をしていた。

こちらの文化祭食品のの売り上げはまず、食材分のもの元金をすべて売らなければならない。だが、それ以上の売り上げはクラスの設備や、学校側に寄付したり、他の団体に寄付することができる。これは委員会や部活も寄付できるのは例外ではない。これはちゃんとクラスの人と全員で話さなければならない。

「じゃあ、晃君。これぐらい生徒会に寄付するね」

伊織が1枚の紙を晃に渡した。そこには値段が書いてあった。

「晃君がいないうちに決めたんだよ。私たちのクラスは生徒会に寄付しますってね」

「い、いいのですか？」

「当たり前だよアッキー」

美紀が言ってきた。

「アキ君たちが風紀委員を止めてくれたから少しは安心して学校生活が送れるようになったのよ」

結衣も言ってきた。

「みなさん。ありがとうございます。生徒会全員喜んでくれると思います」

晃はクラスのみんなに頭を下げた。

「優輝、こんど、うまいもの作ってくれよ!!それですべてはチャラだ!!」

1人の男子生徒が言ってきた。

「あ、私も優輝君の手作りお菓子食べたい」

女子生徒の2，3人が言ってきた。

「じゃあ、明日の売り上げがよかったらアッキーに何か作ってもらおうよ」

美紀が手を上げていった。

「しょうがないですね。皆さん何が食べたいかまとめておいてくださいね」

晃は微笑みながら言った。
この短期間で晃はもう完璧にクラスに溶け込んでいた。

「それじゃあみんな明日もがんばろう」

伊織がみんなに言った。
そのときだった。教室のドアがいきよいよく開いた。

「ちょーとまったー」

そこには見たことがある風紀委員の腕章をつけた少女がいた。

しかし、確かに会ったことある少女だが、晃たちは知らん顔をした。

「あんたたちちゃんと私の話聞きなさい！！そして優輝晃、一之瀬美紀、羽衣結衣に緒方伊織！！誰だっけみたいなことしない！たしかにちょっと作者も忘れ気味だったそうだけど！！鷺木よ、鷺木刑！！！」

あーと全員思い出したようだ。

「あの、鈴さんと同じ、メインヒロインじゃなく、そして、作者が一番テキトーに作った鷺木かぁ～」

美紀はいらんことまでいって納得した。

晃はそのことを知らなかったらしく、え、そうなのですか！！と言っている。

ちなみに美紀が言ったことは実話である。ファイナルアンサー！！

「実は私たち5組も喫茶店をしていてね」

「あれ、鷺木さんて、5組だったのですか」

晃が鷺木の言葉をとめて言った。

「そういえばそうよね。実は私たちの知り合いって5組にはなぜか居ないのよね」

結衣は納得したように言った。

実際、なぜか5組には本当に晃たちとかかわった人は鷺木しか居なかった。何たる偶然！！これも実話ですのでファイナルアンサー！！

（なんか天の声の人がファイナルアンサーてうるさいような気が）

突っ込まないでください。テヘッ！

「そこで、５組は１組に宣誓布告よ！！あなたたちに売り上げ勝負を提案する！！」

あいからわず驫木は上から目線だった。

だが、伊織の答えは。

「いいわよ」

聞いて１秒で答えが出た。

「てか、もう勝っているし」

実際、１組の売り上げが高いせいで５組の売り上げは乏しかった。

だが、なんとか材料費は払えたらしい。

かくして、こうあっさりと１組と５組の勝負が始まった。

だが、もう昨日で勝負はついているとおもったが誰も口にはしなかった。

※

その日の夜。僕は机の上で銃の調整を行っていた。

そのとき、携帯から電話がかかってきた。

「あ、せんぱーい。お久しぶりです～」

その声の人は僕が知っている人だ。

名前は水瀬瑞希（みなせみずき）。中学のときの後輩です。

「水瀬ですか。何のようですか？」
「いや～久しぶりに電話したくなってきましてね」
「そうですか」
「先輩はなんか新しい学校でなにかありましたか？」
「そうですね。あした文化祭があります」
「な、なに！！」

なぜか、それを聞いた水瀬は驚いていた。
なんででしょうか。

「そ、それなら早く行ってくださいよ。それだったら行けたのに～」

む～と水瀬はなんかふくれているようだ。
だけど、そんなに行きたかったのですかね？

「ごめんなさいね。こんどなんか一般公開できることがありましたら連絡しますよ」
「あ、ありがとうございます。では、今日は忙しそうなのでここで失礼しますね」
「はい」

そう言って僕は電話を切った。
しかし、そんなに行きたかったのでしょうか。なんかかわいそうなことさせてしまったような気がしますね。

第３８話　２日目の準備（後書き）

キャラ解説

優輝真

このキャラはもちろん晃ができたあとに作ったキャラです。
主人公に幼馴染以外になにか昔に一緒にいた子をつくりたかったのですが、思いついたのがこの真でした。
そのおかげで家での会話も作れますし、なにせ、妹キャラとして登場させることができました。
学年が一緒なのは義理という意味と、登場が少なくさせないためにしました。
名前は晃はあきらめないなら、真は真実。
まあ、安易に考えたものです。バカですみませんね。
性格は晃と間逆。これは短編を書く前から決めていました。
晃事態、短編と連載のときの性格が変わることはきめていました。

第３９話　文化祭２日目・パート１（前書き）

前回のあらすじ
前回は暴走してすみませんでした。ｂｙ天の声

晃「天の声の人が謝ることなんてあるのですね」

第３９話　文化祭２日目・パート１

さて、そんなことで日曜日。
東の丘学園の文化祭一般公開の日が始まった。
晃は午前中は教室のほうで手伝っていた。

「晃。今日お前は女装しないのか？」

透は料理を運びながら言ってきた。

「しません！！」
「ほら、透。ちゃんと仕事しなさい！！今日はアキ君の分までがんばりなさいよ」

結衣が透に渇入れてきた。
透はへいへ～いといいながら席に向かった。

「アキ君。午前中まで手伝わなくてよかったのに」
「いいですよ。午後できない分手伝いますよ」

晃は微笑みながら言った。

「そ、それはいいのだけど、よかったら一緒に回らない？」

結衣が顔を赤くしながら聞いてきた。
一般公開でも生徒は回ることは許されている。
特に土曜日にフルで活動した人は晃以外にもいるわけで、その人のための考慮でもある。

「そうですね。早速なのでいきましょうか」

ちなみに晃と結衣は今の時間はただのボランティアとしていたので自由に出入りができる状態だ。

「じゃあ着替えますか」

なので、いったん別れて待ち合わせすることにした晃と結衣だった。

※

私はアキ君と待ち合わせしているところに向かっていた。
この学園は文化祭の日は私服がＯＫになっているのでこの時のためにお気に入りの服を持ってきたのだ。

「あ、結衣」

待ち合わせのところにアキ君はもうすでにいた。
格好は赤のＴシャツに黒のパーカーを着ていた。

「あ、アキ君。もう着いていたんだ」
「人を待たせるのも悪いと思いまして」

アキ君は微笑みながら言ってきた。
でも、この微笑みは誰にもする微笑で私だけにするものではなかった。
そして、私は気になるものに目線を向けた。

「ねえ。その腕輪。私たちのとなんだか形が違わない？」

そう。私が見ていたのは腕まくりで見える腕輪のことだった。
アキ君の腕輪はなぜか、石は綺麗に削られていて宝石みたいになっていた。腕につける部分から虹のような形をしている硬い布が石の上を通っていた。
私たちのはつるつるの石に別にデザインがなにもないつける部分があるだけだ。
まあ、みんなと必ず違うのは石の色で、アキ君は白で私は青だ。

「その腕輪だけ、何で形が違うの」

私は気になって聞いてみた。

「ああ、これはですね。すみません。このことはいまは誰にも伝えたくはないのですよ」

アキ君は残念そうに言った。

「な、なんで」
「すみません。その理由もだめなんです。ゆういつ伝えられることはこの石には謎が多いことだけです」

私はアキ君の答えにますます疑問を感じた。
だが、これ以上聞くと嫌われそうなのでやめた。
アキ君に嫌われることは第一に避けたい。

「結衣、どこに回りますか?あまり時間がないのでサックと行きましょう」

そう言ってアキ君は手をつないできた。
そのとき、私の胸は銃に打たれたみたいな感じがした。

それぐらい心臓の鼓動が荒い。
アキ君の顔を見ると平然な顔をしていた。
私がこんなにどきどきしているのに、この鈍感男！！

「あ、羽衣さんだ」
「あ、あの男、手をつないでやがる何様だあいつ」

通りすがっている男子生徒がみんなこんなこと言ってくる。
そのせいかアキ君は歩くのをやめた。

「すみませんね。ずっと手をつなぐのも迷惑ですよね」

そう言ってアキ君は手を離そうとしてきた。

「わ、私はだ、大丈夫だから！！」

あ～声裏がえちゃった。恥ずかしい。
アキ君はキョトンとした顔で見てくる。

「そ、そうですか」
「う、うん」

そう言ってアキ君は手をつないだまま私の横に来た。

「これならはぐれる心配はありませんね。なにせ人が多いですから迷子にはならないと思いますが、はぐれたら面倒ですからね」

アキ君が笑顔で言ってくる。
うれしいが、少しうれしくないことがある。
私とアキ君では考えていたことがまったく違ったからだ。

心配してくれるのはうれしいがもっと違う理由がよかった。

「君と手を離したくないから」。見たいな事を言ってくれたらどんなにうれしいか。

あ、だめだ。そんなこと言われたら私、倒れちゃうかも。

いままで男子の誘いを断ってきたんだから。

いや、アキ君と結ばれるまで私は他の男子と付き合う気はまったくないから。

だから、鈍感でも私の誘いを受けてくれたことは本気でうれしかった。

「あ、ここ料理部がやっているところですね。結衣、すみませんがみてきていいですか？」

アキ君がいきなり話しかけてきた。

「え！？あ、う、うん」

うひゃ～！また声裏がえちゃった。

「そうですか。ありがとうございます」

そう言って私とアキ君は料理部の発表の教室に入っていった。

「この部活の活動はいつもは料理の研究をしていますが今回は皆さんに試食してもらうこととなっています。試食の後、アンケートお願いします」

料理部の入り口にいた女子部員がそう言ってきた。
この料理部は文化祭のときはいつもの活動の結果を出すために毎年こうして売店をしているらしい。

「じゃあ、僕はこの餃子を頼みますが、結衣は何にします？」

席に座ってしばらく、アキ君が聞いてきた。

「そ、そうね。私は肉じゃがにするわ」

私はいきなり声をかけられ、びっくりしたのでとっさにメニューに書いてあった肉じゃがを頼んでしまった。

しばらく時間が経ち、料理部の女子部員が部員が料理を運んできた。
ちなみに料理部は女子しか部員がいないらしい。

「はい。これで注文以上ですね」

そう言っていた部員だがいまだに元の場所へ戻らずその場に居た。
・・・・・・てか、なんかアキ君を見ていない？

そのとき、その子がアキ君に話しかけてきた。

「あ、あの。優輝、晃さんですか？」
「ええ。そうですか。なんですか？」

いきなり声をかけられたのにアキ君は動揺せず声を返した。

「や、やっぱりそうでしたか。その、料理がとてもお上手だと聞きましたので」

「それって、うちのクラスの女子が言ったの？」
私は我慢ができず聞いてしまった。
「は、はい。確かに言ってました。男なのにむちゃくちゃ料理がうまい人がいたって」
その女子はおどおどしていたがちゃんと答えてくれた。
「それで、もしよかったら声をかけたときにお願いしたいことがあって。やっと出会えたので話しかけてきました」
「それで、そのお願いとは何ですか？」
アキ君は平然と聞いてきた。
なにかいやな予感がする。
「その、もしよかったら私に料理を教えてください！！」
やっぱり！！
私の予想はど真ん中に当たった。
「いいですよ。力になれるなら協力します」
そして、アキ君即答！！
「でも、また後日で。今は結衣と一緒に文化祭を回っている途中なので」
だが、アキ君はその後そう言ってくれた。
なんだかものすごくうれしい。

「そ、それでもいいです！！よ、よろしくお願いします！！」

そういいながらお辞儀をし、どこかへ歩いていった。

あ、何もないとことへ転んだ。お盆の上に何も無くってよかったわね。

「なんか、危なげない子でしたね」

「アキ君。本当に料理教える気？」

「ええそうですよ。今宵にも時々晩に教えているので何とかなるでしょう」

「そ、そう」

そうじゃない！！てか、今宵も料理教えてもらっていたの？どうりでなんか最近料理がうまくなったと思ったわ！！

そのあと、私はアキ君と午前中の文化祭を楽しんだが、アキ君にはちょくちょく寄ってくる女子が多く、なかなか二人だけにはなれなった。

「あ、そろそろ時間ですね」

アキ君がそう言ってきた。

そう。これから私は発表の練習があり、アキ君は警備につかなければならなかった。

「そ、そうね」

だいたい、アキ君どんだけこの少ない日で顔が広くなっているの！？

まあ、星道高校から来たということでいやでも名は広がってしまう

が、上級生でも知り合いがいるなんて思わなかったわ。

「とても楽しかったですよ。これは小さいものですがお礼です」

――え!?お礼?

そう言ってアキ君は私に何かを渡した。

・・・・・それは写真だった。

おそらく料理部にいたときのもので、私とアキ君が2ショットで笑いながら写っていた。

だが、私はこんな物撮った知らなかった。

「こ、これはいつのまに?」

「ええ。実は写真部の先輩が隠し撮りしているの見つけまして、生徒会室につれてこられたくないならいい写真を一枚くださいと言ったらこれがいいかなと思いましてもらってきました」

「そ、そうなの」

てか、じゃああの時一旦席を離していたのはこのためだったの?

「それでは、僕はこれで」

アキ君はそう言って外に出て行った。

私はうれしくってたまらなかった。

だから、アキ君のこと、もっと好きになっちゃった。

第３９話　文化祭２日目・パート１（後書き）

キャラ解説

一之瀬美紀

彼女は設定は簡単に作りました。
本当はまじめ系の子にしたかったんですが、ここはあえて逆の性格にチャレンジしてみたところ、なんと晃のツッコミが回ってきたのでこの性格でやってみました。
実際、元気系のキャラを書くのは彼女が初めてで、彼女筆頭にいろんな元気キャラができるようになりました。
髪型は元気系だからツインテールかなと思い安易な考えでそうしました。
力が男子ほどある設定は数少ない彼女の強さをイメージしました。
歌だけじゃ伝えにくいので。
実際、美紀のセリフは書くのが楽でいいです。なんだか気楽になれるかんじで。

歌の設定はテキトーにしました。
真と同じ運動系にしたらかぶってしまうことで出てきたのは歌でした。
元気な歌。ますます美紀らしくなってきた気がしました。

第４０話　文化祭2日目・パート2（前書き）

前回のあらすじ

結衣、文化祭デート。（本人曰く）

結衣「なに!?本人曰くって」

美紀「アッキーはそのつもりじゃないってことじゃないの」

第４０話　文化祭2日目・パート2

晃は学園の外に出ていた。
警備のために格好はさっきと同じ赤いＴシャツに黒のパーカで前を空けて腕まくりしており、ジーパンをはいていた。完全に動きやすい服装だ。

「残念だね。特待生の発表見れないなんて」

泉も言ってきた。
泉はなぜか１０月なのにノースリーブの服を着ていた。
だが、下半身は短パンをはいていた。寒いのじゃないかと晃は聞いたが大丈夫の一点張りだった。
隣には舞いもおり、服装は長袖のかわいい服にロングスカートだった。

「しかたありません。僕の秘密を守るために人目がつきにくい時間がいいのですよ。それにこのことを僕と違う理由で利用してくる人も居ないわけではないでしょう」

晃は説明した。

「とりあえず、舞は校門前で待機。泉は右を、僕は左側を回ってみてきます。何かあったらすぐに連絡ください」
「オッケーアキ！！」
「うんわかったよ晃君」

晃の作戦に2人とも了承した。
晃、泉はばらばらに校門の前を通りすぎた。

そして、特待生の発表の時間が来た。

※

発表者の控え室。
美紀と結衣は話し合っていた。
発表する特待生は音楽家のメンバーのみ。美術科、技術科と家庭科は別の場で発表場所が設けられている。
美紀、結衣はともにかわいいドレスを着ていた。

「アキ君。やっぱり見てきてくれないんだね」

結衣がため息をしながら言った。

「そうだね。さっそくわたしたちがドレスをきているというのに」

美紀はわざとらしく怒りながらいった。

「まあ、生徒会の用じゃ仕方ないね」
「でもアキ君。なんだか何かを隠している気がするの」

結衣が心配になりながら言った。

「まあ、アッキーはもともと科学都市に居たんだよ。隠し事ひとつふたつもってもおかしくは無いけどね」
「それはそうだけど」

まだ、結衣の心配は直らない。
美紀はやれやれと言いながら結衣の鼻をつまんだ。

「な、なにふるの？」
「こらこら、そんなこと考えているとアッキーに失礼だよ♪それにそんなこと考えて発表会を失敗させるほうがよっぽどアッキーに失礼だよ♪」
美紀が意外とまじめなことを言った。
「美紀が、まじめなことを言った」
「ん！？なんかものすごく失礼な言葉が聞こえたが」
美紀が首を傾けた。
そのしぐさに結衣は笑い出した。
「な、なにゆーちゃん！！」
「いや、なんだか美紀を見ていると馬鹿らしくなってきちゃって」
結衣は笑いながら言った。
「むむっ！！また失礼なことを」
「でもありがとう美紀あなたが言っていることは正しいわ」
「わかればいいのだよわかれば」
結衣は気持ちを切り替えた。
（そうよね。めそめそしたらアキ君に嫌われちゃうもの）
※
「アキ！！そっちは！？」

「こっちは居ませんでした！！」

晃たちは急いでいた。

晃たちが警備しているところ、２人の女子生徒の服が引き裂かれたことが起きたのだ。

時間は１０分前、晃は普通に歩いていたが、そこにある人影を見た。怪しいと思い、晃は昔から自分が持っている身体能力を使った。

晃の目は空から見たような映像を自分の目に映し出すことができる。人はこれを鷹の目（ホークアイ）と呼ぶが晃の目はそれ以上範囲が広く見えるのだ。名を『空の目（スカイアイ）』。このなはいまだに一般には知らされてはいない。

晃はその目で怪しいと思う人物を追った。

角を曲がったら、そこには服をナイフとかで引き裂かれている女子が２人居た。

２人とも下着が見えるほど服をぼろぼろにされているが晃にとっては関係ないことだ。

晃は２人に話しかけた。

「君たち、大丈夫ですか？」

「え、あ、あなたは？」

１人の少女が警戒しながら聞いてきた。

「この学園の生徒会です。危ないので一様あなたたちを学校まで連れて行きますがいいですか？」

「は、はい」

そのあとすぐに泉と合流し、舞のところへ向かった。
そして時間は戻る。
場所は校門に一番近くにある多目的室。

「大丈夫です。怪我はひとつもありません」

舞が2人の体を見てくれた。どうやら怪我は無いようだ。

「よかったです。でもこれは、切り裂き魔でしょうか」

晃は紙に書きながらさっき起こったことを分析していた。

「でも、ほかの人たちの被害は少ないですね」

舞がそういった瞬間、ドアがいきよいよくあいた。

「そんなこと無いよ。ここにも被害者が出てきたよ」

泉がもう一人の女子を連れてきた。
しかも服装はこの学校の制服だった。バッチの色は赤。つまり先輩だ。

「出てしまいましたね新たな被害者。しかもうちの制服ですか。どこで見つかりましたか？」

晃は泉に聞いた。

「うん。また学園の近くで見つかったよ。また新たな被害者を見つかるがどうかあたしまた見てくる」

そう言って泉は飛び出した。

「泉！手分けして捜索しますよ。なりべく被害を少なくさせますよ」

「合点承知！！」

晃は左、泉は右。さっきと同じルートで2人は別れた。

※

真は学園に向かって歩いていた。

どうやら買出しに出かけたらしい。制服にスーパーの袋がその証拠となっている。

（ふう。美紀ちゃんと結衣ちゃんがんばっているかな。後で見に行かなくちゃ）

彼女の仕事はこれを教室に運んだことで終了する。

早く発表が見たい真は少し早歩きになった。

そのときだった。

真が通ったあとの路地裏から腕が伸びて、真の腕と口をふさいだ。

「！？」

真は急なことで驚いて声が出なかった。いや、口はふさがれているので声は出ない。

「あたらしい鴨が出てきたか」

男はそう言ってナイフで真の制服を切った。

「ん～！！」

真の口はまだふさがれている状態だった。
それは当たり前だ。男は2人いた。

（なに、こいつら）

「おお、こいつは上玉だな」
「いいから早くしろこのロリコン！！」
「はいは～い」

そういいながら次はスカートを切ってきた。
下着が見事に見えてしまった。

「うお！！鼻血出そう」
「はやくしろこのロリコン！！」

また抑えている男は叫んだ。

「これはたまらねえ」

男はまた2回ほど制服を切っていった。
男はまた切ろうとしてきた。

―ガキィン！！

だが、3回目切ろうとしたところ誰かに止められた。
音は金属と金属がぶつかる音がした。

「間に合ってないようね」

その人物とは泉だった。

「ごめん遅れたまこちゃん」

「誰だ貴様は！！」

ナイフをもった男が聞いてきた。

「そんなの下衆に答える義理は無いから」

「おいおい、男2人に適うと思ったのか」

真を捕まえていた男は真を離してナイフを2本持った。

「おまえもなかなかの上玉だな」

男は一斉にかかってきた。

第４０話　文化祭2日目・パート2（後書き）

キャラ解説

羽衣結衣

彼女は結構早く作れたキャラです。
美紀を作った後、次は最初から晃に片思いしていて、なおかつモテている人を作ろうとしたのです。
まあ思ったどうりのキャラができましたね。
一様、幼馴染で晃以外の常識人として扱っていますが、彼女はなかなかボケませんね。
裏モードは意外と書くのが楽しかったりした。

髪型も意外と楽に考えて、なおかつ美紀と正反対なキャラができましたね。
でも、意外と彼女のことが気に入っている自分が居ますが。こんなキャラほどつかいたくなるのですよね～

名前は苗字がいち早くできたのが結衣です。
かわいく、優雅と考えたら結衣と語呂があったので羽衣にしました。
羽衣って優雅なのかとここ最近思い始めました。

第４１話　文化祭２日目・パート３（前書き）

前回のあらすじ

楽しい文化祭に事件発生！！

第４１話　文化祭２日目・パート３

「い、泉さん！？」

いきなり現れた泉に真は驚いていた。

「うひゃ～これはひどいね」

泉は真を見ながら言った。

「いいのかお嬢さん。この人数相手するのはちときついぞ」

男２人はナイフを両手に構えていた。

「やられてもしらねえからな」

男たちは泉に向かってダッシュした。

※

晃は周りを見ながら歩いていた。
いままで犯行が起こったのは路地裏似たところで人目がつきにくい場所だった。
晃はなかなか泉と合流しないので心配になってきた。
そのとき、晃が路地裏に目を向けたそこには泉と真がぼろぼろに引き裂かれた服のまま座っていた。

「泉に真！！大丈夫でですか！？」

晃は叫びながらよってきた。

「あ、あきにい」

「ごめんアキ。犯人に負けちゃった」

「負けたことはどうでもいいです。2人とも怪我はありませんか？」

晃は大きな布を2枚『呼(コール)び出し』た。

「アキ、なんだか準備がいいね」

「さっき、生徒会室に言って借りてきたのですよ。居たらなにもできないのは嫌ですから」

「あきにいありがとう」

「とりあえず安全な場所に行きましょう」

※

学園の多目的室。

「まこちゃんまで被害受けるなんて」

「しかし、勝負事で泉が負けるとは思ってもいませんでした」

「なはは面目ない」

真はジャージを着て、泉は制服に着替えた。

「もうこれは、生徒会全員呼んだほうがよいのでは」

舞の手伝いをしてきてくれたささらが言ってきた。

「いいえ、生徒会は全員女子です。どうやら男子は興味ないらしいですね」

そう。さっきから被害を受けているのは女子のみ、男子の被害はゼロ。これは完璧に女子だけを狙った犯行と見てもよい。つまり、女子しかいない生徒会を全員集めて警備しても二の舞になるだけだ。

「つまり、動きやすいのは僕だけですね。真はもう戻っていいですよ。これからは生徒会の戦いです。君はまだやることがあるでしょう」

晃は真にそう伝えた。

だが、今の言葉は本音と本当は自分の姿を隠したいだけである。だけど、真のことが心配で巻き込みたくない気持ちのほうが強かった。

「うん。わかった」

真はそれを理解したのかこの部屋を出て行った。

「それでアキ、また作戦はオトリ作戦？」

泉が聞いてきた。

「いいえ。今回はそんなことはしません。今までは学園内のことなのでそんなことができましたが、今回は格が違います。そんな危険なことはさせません」

「じゃあ、どうやって捕まえるのですか？」

舞が疑問に思い聞いてきた。

「なので、今回は真っ向勝負で行きますよ。泉、例のことやってきてくれましたか？」
「例のことってなんか小さい機械を犯人の体のどこかへつけてくること？」
「ええ。そうです」
「それなら一様やってきたよ」

泉は思い出しながら言った。

「よし、それができればこっちのものです！！」

晃はノートパソコンを『呼び出し（コール）』した。
いきなりパソコンが現れたことにささらは驚いていた。

「あ、晃さん今のは一体！？」

ささらは疑問に感じて聞いてきた。

「ちょっとした能力ですよ。まあ僕ではなくこのストラップの能力ですがね」
「ふ、不思議なことがあるのですね」

晃は即答した後、何かを調べ始めた。

「晃君。これは一体なんですか？」
「泉に渡したのは発信機です。これで居場所がわかりました。すみませんがささらはここでいてくれますか？」
「は、はい」
「じゃあ舞、泉行きますよ」
「はい！！」

「うん！！」

そう言って、晃たちは学校を出て、裏山に向かった。

※

「やっぱり、女の服を切り裂くのは楽しいな」

「ええ。特に小さい子なんかは格別です」

男2人がこんなこと言っていた。もう完璧に変体丸出しである。

特に後のセリフなんか危険なにおいがする。

「さて、準備ができたらいくか」

「そうッスね」

男たちは立ち上がった。

「どこに行くのですか？」

声が聞こえたので男たちはすごい速さで後ろを向いた。

そこにはにこやかな顔だが、思いっきり怒りマークがついている晃がいた。

「だ、誰だお前は！！」

男が聞いてきた。

「団殺者（ディスター）です！！おとなしく降伏しなさい！！」

「なんだと、そんなことで降伏なんかするかよ！！お前、あれを出せ！！」

「アイイアサ～」

1人の男は古い掛け声でなにやらボタンを押した。
そして、空からなにやら鉄の塊が飛んできた。
地面についたあと、足が8本生えてその機械が動き出した。
先端には大砲がついており、なにやら不審なマークが書いてあった。

「そのマーク『反逆者（レジスタンス）』のものですね」
「ああ、そうさ俺たちはたしかに反逆者だ！！」
「晃君。『反逆者（レジスタンス）』てなに？」

舞が聞いてきたので晃は説明した。

反逆者（レジスタンス）・・・・・それは科学都市でおける学生都市取締法を反対するものである。
学生都市取締法とは、学生が科学都市での中心の一部となり、これからの科学都市の未来のために学生は非常に貴重なものとなる。そのために学生はほぼ自由かつ、平和に暮らせるための科学都市での法律となった。
だが、学生は特別ではなく、守るための存在。そして、大人の価値も下がってはいない。

だが、特殊な能力を持った生徒は『団殺者（ディスター）』つまり、大人を裁ける学生となれる。

だが、その中でも罪がある大人しか裁けないが喧嘩などは止められる権利があるのだ。

科学都市では犯罪者は科学都市の外の犯罪者は裁けないが、『団殺者（ディスター）』は裁けるのだ。

そのことを反逆する犯罪者グループ、それが『反逆者（レジスタンス）』だ。

「でもそれってただの自己中心なだけではないか」

泉が突っ込んだ。

「ええ。科学都市ではなにも不自由はありませんし、むしろ、平和が生まれますから、不信に思うのは犯罪者だけです」

晃はあきれながら言った。

「うるさい！！もとは科学都市だって何するかわからないところじゃないか！！」

「そんなことはありません！！あそこは僕を、俺を変えてくれた場所です！！」

晃は叫んだ！！男はびびったように後ろに下がった。

「晃君。あなた一体科学都市で一体」

「俺って、アキ」

2人は晃の意外な一面を見たのか手間取っていた。

「うるせえ！！いけ！科学の最新兵器を！！」

そう言って背の高い男がメカに命令した。

メカは大砲の標準を晃に合わせた。

「そうですか。でもそのメカはいま」

晃はそのメカをびびらず見ていた。

「泣いていますよ」

「なに！！」

晃が言っている意味とは何か、次回、文化祭終了！！

第４１話　文化祭２日目・パート３（後書き）

キャラ解説

朧今宵

彼女は髪型はすぐに想像できましたが、一番悩んだのはしゃべり方です。
書いていて、あれ？男勝りってこんなしゃべり方かなと思ったこともしばしば。
実際、今でも悩んでいます。

今宵の特技はすぐに思いついて早速ならすこし棘を出そう。
そう思ってホラー系の絵をたくさんださせています。
う～ん話が回る回る。

いつか、彼女の料理の特訓の話でも書こうと思っています。

第４２話　文化祭２日目・最終パート（前書き）

前回のあらすじ

晃、犯人と直接対決！！

第４２話　文化祭２日目・最終パート

晃は男たちに言った。

「泣いているってどういうことだ」

「あなたたちはこのメカにアンドロイドシステム使いましたね」

晃は真剣に聞いた。

「ああ、名前は知らないが最新技術と聞いた」

「やっぱりそうですか」

晃は強くこぶしを強く握った。

「説明しましょう。そのアンドロイドシステムを」

晃は説明し始めた。

アンドロイドシステム

それは簡単に言えばアンドロイドシステムは人間の脳の移植であり、

それは死人の脳でも移植が可能。

そのおかげで普通の機械より、非常に分析が早く、行動が早い。

人みたいに考えることはできないが、普通の機械より、はるかに優れている。

「でも、その技術は科学都市で生み出されたものですが、いまは禁止にされています。だが、この技術が誰かが持っていって科学都市ではなくとも開発できてしまいました」

晃は説明を続けている。

「僕ら『団殺者（ディスター）』はその機械の排除が目的でも動いています。僕はこの町中心としたところが僕の排除範囲です」

晃は銃を『呼び出し（コール）』した。

「こんな愚かな技術は必要ありません！！いまは生きている人すらもわざと移植するとの情報も入ってきています」

晃は銃を上に投げた。

2丁の銃が空中を舞っている間、晃はさらに2丁、銃を『呼び出し（コール）』した。

「だから、すぐに破壊します」

晃は標準を合わせた。

「まさか、おまえ」

男は気づいたらしくへっぴり腰になっていた。

「4丁拳銃」

「まさか・・・・・・」

「・・・・・・一転集中」

「フリーダムか！！」

男は叫び、機械は射撃の準備に入った。

だが、もう遅い。

「・・・・・・連続発射（ガトリングダンス）ノ舞」

晃は銃の引き金を引いた。
一発目は威力が高めの大きな玉が相手の足元で暴発して、メカは空中に浮いた。
その隙に晃は空中に浮いていた銃をジャグリングのようにして、受け取った。
その後、さっきとは威力は低いが早い玉がメカにヒットし、また同じように何発か撃った。

晃の腕はものすごい速さで動いていた。

しかも、あたっている場所が、すべて同じ部分に当たっている。
メカの部品がどんどんはがれていった。

どんな新システムでも、あくまでもコンピュータシステム。本体の頑丈さは変わらない。

そして、晃はとどめの一発のように最後にさっきより太い弾でメカのボディを貫通した。

「か、貫通だと！！」
「いくら機械でも、同じところに撃たれてはがたがきます。アンドロイドシステムは所詮、コンピュータですから、関係ありません」

晃は射撃をやめて男たちに近づいた。

「さあ、観念してつかまってください」
「て、てめえ！！」

男がいきなり襲い掛かってきた。
晃はバックステップで避けたが、それを予知していたのか、もう一人の男が晃の後ろへ回っていた。

――やばい！！

男はナイフを振りかぶった。
だが、ナイフが当たったのは晃ではなく、泉の手に刺さっていた。

「クッ！！」

泉は膝から崩れ落ちた。

「泉！！大丈夫ですか！？」
「な、なんだこの女は！！」

男はもう一回振りかぶった。
晃はすぐにナイフに向かって銃を撃った。

弾は見事に当たり、ナイフの刃は地面に刺さった。

「呼び出し（コール）！！」

晃は手錠を呼び出して、男の手にはめた。

「あ、兄貴！！」
「あなたもそこで待っていてくださいね。一歩でも動くと頭貫通させますよ」

晃はもう一人の男に銃を突き出した。

「泉ちゃん。大丈夫!?」

怪我した泉に舞は近寄った。

「舞、これで手当てをしてください!!『呼び出し(コール)』!!」

晃は救急箱を呼び出した。

「でも、ナイフが刺さっているから、抜いたときに強烈な痛みと血が出るから、晃君。ちょっと手伝って」

「わかりました」

晃は男に手錠をはめて、気に縛り付けた。

その後、舞のところへ向かった。

「いいかな。私が合図したらナイフを抜いてください」

「わかりました」

そこで、舞は小さな横笛を取り出した。

舞は息を吸い、笛を吹き出した。

その笛の音色はとても綺麗でなぜかとっても癒される気持ちとなっていった。

舞は小さく合図をしたので、晃はナイフを手にとって、思いっきり抜いた。

「どうですか、泉」

「な、なんでだろう。痛みが無い」

「え!?」

どういうことが知らないが、晃は早めに泉の手を治療した。

「これでいいでしょう」

その言葉とともに舞は笛を吹くのをやめた。

「舞、今のは」

「私の祖先から代々引き継がれていった神下家に伝わる笛なのです」

舞は説明を始めた。

「だけど、私は昔からこの笛を吹くことができるの。この笛は聴いている人はその間、痛みを感じさせないことができるのです。私は家族の中でただ一人、この笛を吹くことが可能なの」

「そうったのですか」

「それってものすごいことなの？」

泉は晃に聞いてきた。

てか、なぜそんなことを聞くのか。

「人の痛みは神経から来るのもですが、その笛は人の神経を狂わせる力があるようですね」

晃は考えながらいった。

「まあ、むずかしいことはわからないけど、これですべて解決だね」

「自分から振っといて急に話題を戻さないでくださいよ」

「なははは！！」

「ふふっ」

「まあ、解決のなのはそのとうりですね。さあ、この人たちは警察に連絡しましたら、学園で文化祭、楽しみましょうか」
「おう！！」
「はい！！」

※

2時ごろ、事件も解決して、晃はクラスのほうを手伝っていた。
「結衣、すみません。舞台発表見ることができなくって」
晃は結衣に謝った。
「そ、そんな。いいよ。仕事でこれないのはわかっていたから」
「あ、ありがとうございます」
「なははは！！だが、安心しなよアッキー！！ちゃんと私が手を打っといた」
いきなり、美紀の声が聞こえた。
「で、だれですか？彼女は」
「わたしは完璧スルー？まあいいや、彼女は片平祥子（かたひらしょうこ）だよ。わたしの友達で、映像・写真部の部員なの」
美紀は紹介した。
「どうも、片平祥子ッス。これからよろしくッス」
「ど、どうも」
「は、はじめまして」
「ちなみにさっきの発表はあっしがちゃんと撮っておいたッス」

祥子はカメラを構えた。

「だから、美紀が自信満々で言っていたのですね」
「てか、美紀が威張れることではないよね」

2人は指摘した。

「とりあえず、お二人とも、仕事しなくっていいのでッスか?」
「「あああ!!」」

指摘された2人は仕事に急いで戻った。

こうして、この年の文化祭は終了した。
ちなみに1組と5組の喫茶店勝負はもちろん1組の圧勝だった。

ちなみにアンケートをとったところ、一番の人気メイドは結衣とアキちゃんに決まった。

「いや、僕は男ですよ」
「アッキーなら女の子でも暮らせそうだよね」
「あきにい、これからあきねえと呼んだほうがいいかな?」
「呼ばなくっていいです!!」

第４２話　文化祭２日目・最終パート（後書き）

キャラ解説

水戸透

透は結構書きやすいキャラで、想像がしやすいです。
晃は自覚の無い２枚目キャラなら、透は自覚ある、イケメンキャラですね。
ぶっちゃけ、晃ハーレムになっているので透は結構影が薄くなったりしています。
幼馴染全員が出ていなくちゃ透の出番が無いのが意外と問題ですよね。
まあ、男キャラなのでそこは比較的に少なくさせていますが、やっぱり幼馴染なので。
ちなみにＢＬ要素はありません！！

第４３話　文化祭後（前書き）

前回のあらすじ
文化祭終了！！

今宵「私出てないような気が」

晃「作者曰く出すタイミングが無かったようです」

第４３話　文化祭後

文化祭が終わり、学園は平常授業は始まっていた。
放課後、文化祭ではほとんど出番がなかった今宵は晃を探していた。
今宵は１年１組についた。
しかし、晃の姿はそこには無かった。

「あ、結衣。晃知らないか？」

結衣を見つけた今宵は教室に入って話しかけた。

「アキ君？さあ、私も知らない。なんかＨＲが終わったらもういなくなっていたの」
「そ、そうか」

今宵はため息をついた。

「どうしたの今宵？」
「ああ、晃に料理の特訓を見てもらおうと思ってな」
「そんなの」

（なんで今宵の料理の特訓をアキ君が見なくちゃいけないのよ。まったくうらやましい）

結衣は冷静に言っていたが心の中はこんなこと思っていた。
しかし、これはただうらやましがっていただけだった。

「晃ならさっき見たぞ」

大吾が話しかけてきた。どうやらこの話を聞いていたようだ。

「そんなことよりも、うまくできたら俺にもなんか作ってよ」

「失敗作品なら」

「いや、成功作品を」

「寝言は寝てから言ったほうがいい」

「ひど！！」

「そんなことよりもアキ君はどこにいるの？」

人一人有性権が違うものだ。

ただ、大吾のは本当にどうでもいいことだ。

「晃ならさっき帰ったぞ」

「そうではなくってさっき園芸部と一緒に花壇の世話していたぞ」

透が教室に入ってきて言ってきた。

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

４人とも呆れた顔になった。

「晃君。文化祭が終わっていろんな部活に引っ張り出せているみたいね。おもに文化部ばっかりだけど」

伊織が話しに入ってきた。

「でも、園芸部って、女子しか部員がいないところだよな」

「そうだけど、この前なんか手芸部にも呼ばれていたわよ」

伊織があっさり言った。

「アキ君」
「あいつどんだけ器用なんだ一体」
「文化祭で晃君の器用さを披露しちゃったしね。おかげでこっちの装飾部門と売り上げ部門が1位だったわけだから」

1年1組は晃の活躍で装飾部門と売り上げ部門が1位にあがっていた。
この学園では1年が2タイトル1位なのは異例らしい。
ほかにも舞台部門や人気部門があるが、そのすべては部活や3年生がとるものだが1年は1タイトル取る事すら珍しいのに2タイトルとは。

だが、あのあと、晃が科学都市から来た転校生と広まった瞬間、晃はいろんな部活に引っ張りだこになっている。

「まったく、あの時美紀があのこと言わなかったら」

そう、すべては美紀が言いふらしてしまったことだ。まあ、隠していたわけではないが。

※

晃は園芸部の手伝いをしていた。

「これでいいですかね」

晃はちなみに園芸は一回かじったことがあり、ほとんど上達していた。

「優輝君。本当にすごいね」
1人の女子が晃に言ってきた。
「そんなことありませんよ」
「いやいや、優輝君は本当に来てくれて助かったよ」
「そ、そうですかね」
そのとき誰かが来たらしく、部員がざわついた。
「がんばっていますね。園芸部の皆さん。それにアキ君」
その人物は静音だった。後ろには泰子もいた。
「静音さんに泰子。どうしたんですか？」
「やあアッキー。僕たちは差し入れをしてきたんだよ」
泰子が元気よく言ってきた。
たしかに静音の手には大きなバスケットを持っていた。
「家で作ったお菓子ですが、みなさんもどうぞお召し上がりください」
静音がそういったら泰子がビニールシートを敷いた。
バスケットをそこにおき、ふたを開けたらそこにはたくさんのパンがあった。
「ジャムパンですか。それではいただきますね」
晃はパンをひとつとって口に入れた。

「おいしいです！」

晃は口をふさいで言った。

「それはよかったです」

晃のその一言でほかの園芸部の部員が集まってきた。

「あ、本当においしい」

「会長の差し入れ食べられるなんて、優輝君つれてきてよかった～」

どうあやら会長の料理を食べられるのは珍しいらしい。

「まあ、生徒会では食べてない人はいないけどね。じゃあ、会長。僕もいただきます！！」

「はい、たいちゃんもどうぞ」

「はいは～い」

そういって泰子もうれしそうにパンをほうばった。

※

結衣、今宵、伊織に透と大吾は様子見に園芸部を見てきた。

そこには晃のほかに静音と泰子の姿があった。

「あ、柊先輩もいる」

結衣が言った。

「生徒会長もか、なんのようだろう」
「なんかバスケットを持っている」

今宵と伊織も言った。

「ありがとうございます。静音さん、泰子」
「いいよ。それよりも僕も手伝うよ。補助のアッキーばっかり仕事させるのはかわいそうだから」
「じゃあ、私も」
「会長はしなくっていいです!!」

泰子は行きよい良く突っ込んだ。

「な、何でですか?」
「会長意外と不器用なんですからやらないほうがいいです」

泰子は思いっきり拒否している。

「そんなことありませんよ!!私だって!!」

そう言って1歩歩いたら石にけつまずいて思いっきり転んだ。

「静音さん!?」
「会長!!だから言ったのに」

晃と泰子は静音を持ち上げた。
静音は目を回していた。
その光景に晃は吹いてしまった。

「どうしたのアッキー?」

「いいえ。静音さんもこんなことあるんだと思いまして」
「確かにそうだね」

泰子も笑った。

「わ、笑っちゃダメです～」

静音は寝言のように言ってきた。

「はいはい。すみませんね。僕は静音さんをベンチに寝かせますね」

晃はそういって静音を抱えた。
いわゆる、お姫様抱っこだ。

「あ、柊先輩。アキ君にお姫様抱っこしてもらってうらやましい！！」

その光景を見た結衣が言った。

「会長をお姫様抱っこできるなんて晃のこのやろう」

大吾は泣きながら言った。

第４３話　文化祭後（後書き）

キャラ解説

神下舞

このキャラは幼馴染と同じタイミングに考えました。
晃の秘密を知るものを作りたいと思い彼女ができました。
幼馴染と違い冷静なキャラができできたのですが、口数が少ないので時々困ることがあります

名前は意外とあっさりしました。

武器の笛は、ゆういつ運動系ではない彼女しかできない癒し系の物にしました

第４４話　マフィンと兄（前書き）

前回のあらすじ

晃引っ張りだこ。

美紀「アッキーわたし前回出てないよ～」

晃「知りませんよ（汗）」

第４４話　マフィンと兄

夜、晃は何かの準備をしていた。

「あきにい。何しているの？」

真が聞いてきた。

もう寝る時間が近いので寝巻き姿だ。

「これは明日のお楽しみです」

それだけ言った晃だった。

「私に関係ある？」

「ええ」

「それだったらいい」

そう言って真はテレビを見直した。

真は意外とテレビっ子だったりする。

「さて、準備はこれで終わりですね」

そう言って晃は冷蔵庫に入れた。

※

朝の登校前、晃は真に紙袋を渡した。

「あきにい。なにこれ？」

「昨日言っていたお楽しみです。休み時間皆さんに渡してください。僕は生徒会に用があるので」
「う、うんわかった」

真はうなずいた。

そして昼休み。

「あれ？アキ君は？」
「アッキーは生徒会に用があるって」
「な～んだそうか」

結衣は残念そうに言った。

「まあまあ、あ、まこちゃんが来た」

美紀が言ったとおりに真が教室に入ってきた。

「やあ、まこちゃん。あ、それ朝も持っていたよね」

美紀は真が持っている紙袋に指差した。

「あきにいが、お楽しみだって」

真はにこにこ笑いながら言った。

「じゃあお菓子とかかな！？」
「それは私も知らない」
「ゆーちゃん。早くお弁当食べよう～」

その頃、生徒会室。

「アキ君。何ですかこれは？」

静音は紙袋のことを聞いてきた。

「これはマフィンです。皆さんの分作ってきました」

「マフィンですか。大好きです」

「じゃあ、早速食べよう」

そう言って泰子は紙袋を開けた。

「たくさんあるので好きな分食べてくださいね」

「優輝は料理得意なのか？」

鈴が聞いてきた。

「ええ。得意とかは自分ではいえないですが」

「うん。アッキーとてもおいしいよ！！」

泰子がもう食べ初めて言ってきた。

「うん。おいしかった。もう一個」

「瓜生さんはや！！」

琴美はもう一個食べ終わって2個目に突入しようとしていた。

「あ！！それは私が食べようとしたやつだぞ！！」

「鈴さんも早！！」

「・・・・・やらん」

鈴ももう一個食べ終わっていた。
言葉で入ってないが相当うまかったらしい。
どうやら大きいやつの取り合いになっているようだ。

「ふふ。人気ですねアキ君」
「僕ではなくってマフィンだけですが。ささらはどうですか？」
「ええ。とてもおいしいですよ」

ささらはさわやかな表情でにっこりと笑った。

「ささちゃん。もう3つ食べているよ！！」
「早！！」
「い、言わないでくださいよ、泰子～」

泰子に言われて赤面でささらは言った。

「え～私の分ちゃんと残してほしいです～」

静音も負けずと食べようとしている。

「ま、また作りますから」

晃は思った。
これからはもっと量多めに作ってこよう。でなくちゃすべて食い尽くされる！！っと。

ちなみにクラスでは。

「アキ君。やっぱり料理上手よね」

結衣は満足したのか言った。

「あきにいのご飯は毎日飽きないよ」

「いいな～まこちゃん。晃君のご飯毎日食べられて」

伊織がうらやましそうに言った。

「い、いーちゃん！まさかアッキーのこと気になったり？」

美紀が言った。

「そ、そんなこと無いよ」

伊織は首を大きく横に振った。ますます怪しい。

「本当に怪しいな」

大吾の言葉で伊織の頭から湯気が出てきた。

なんだかフシューという音が聞こえる。

「あ、いたいた。まこちゃん。あれ？あきにいさんはいないの？」

花火が教室に入ってきた。

「なに？花火？」

「これ、今度の卓球部の合宿のときのことだけど、私からあきにいさんの方に話した方がいいのかなっと思って」

花火が紙一枚取り出した。

だが、その紙はいきなり誰かに取られた。

「そういうことですか。そんなこと相談しなくっても真の自由でかまいませんのに」

紙を取ったのは晃だった。

晃はすぐに内容を理解して真に言った。

「あ、あきにいさん。びっくりしましたよ」

「それよりあきにい。合宿行っていいの？」

「真が行きたいのなら拒否はしません」

真はありがとーといいながら晃に抱きついた。

「ありがとうございますあきにいさん」

「ねえねえ。なんではーちゃんはアッキーのことあきにいさって呼ぶの？」

美紀は聞いた。

結衣もそのことを聞きたくてうずうずしていた。

「私も昔、お兄さんがいまして、あきにいさんはその兄に似ているので」

「たしかに、晃はお兄さんタイプだからな。真がうらやましいよ」

今宵が納得したように言った。

「じゃあ、これからみんなでアッキーのことを兄貴と呼ぼうとしようよ！！」

「なんかの不良集団ですか！？」

「うおい、あにき～」

美紀は不良ぽく言った。

「わざとそんなふうに言わないでいいですから！！」

「しゃしゃしゃ、あにき行きましょうぜ」

今宵も悪乗りしてきた。

「なんか雰囲気変えてきましたけど、やめてください」

「私の兄さん。そんなんじゃないのに」

花火は訂正した。

「ごめんね。どうも、少年心に戻りたいときがあるもんでね」

「あなたは少年ではなく少女ですよね」

「そうともいう」

「それしか言わないのですが」

だが、花火は笑っていてそれじはそれでよかった。

第４４話　マフィンと兄（後書き）

キャラ解説

源泉

晃の協力者で癒し系の舞が出たなら次は運動系の子を出してみようと考えてできたのが彼女でした。
おかげで、シリアスになりそうなところでも笑いシーンができておかげで書きやすくなりました。なぜか、彼女の必需品がアフロになっているのは秘密で。
晃とはいいコンビになりそうな予感がします。いろんな意味で。一様彼女もメインヒロインなので。
最初は第一人称を僕にしようかなと考えましたが、３人集まったときのバランスを考えてやめました。

第４５話　闇鍋事件・前編（前書き）

前回のあらすじ

生徒会のみんな食べるのはやい！！

静音「こ、これはアキ君のマフィンがおいしいのでそんなふうになったのですよ」

晃「なんでそんなに否定するのでしょうか？」

第４５話　闇鍋事件・前編

「それで、これはこうすればいいのですよ」
「おお。なるほど」

夜、晃は今宵に料理の指導をしていた。
最近は今宵が部活がなく、晃に用事がないときは夜でもなくっても指導している。

「じゃあ、今日は実際に作って見ましょうか」
「それって晃が食べるのか？」
「いいえ。ここは真に審査してもらいます」

ちなみに晃はこのことを真に伝えている。

「む～だったらなおさら失敗できないな」
「なんかその言い方だと、僕なら多少失敗してもいいと言っているように聞こえましたが」
「そんなことはないさ！！」

今宵は強くこぶしを握った。
顔が笑っているのでますますそのように思わせる。

「それならいいのですが、まあ、がんばってください」

そう言って晃はその場から離れて今宵一人、料理を始めた。

「あきにい。大丈夫なの？」

真が晃のところへ来た。

「う～ん。審査を真に頼んで正解だったと思いました」
「な、なにそれ？」
「いえ、何でも」

晃はため息をついた。
真は首をかしげた。
実際、晃が審査だと、どんなゲテモノが作ってしまう可能性があったりする。
そう思えば晃のさっきのため息は安心のため息だったかもしれない。
てか、安心のため息ってあるのか？

※

３０分後。
今宵はまだ作っていた。
いろんなものを作っているのかえらい時間がかかっている。
晃はやな予感がした。
だが、今宵に絶対に口出ししないと約束した。

実際、この幼馴染で料理が得意なのは晃のみである。
小さいころは晃はちょっとだけだが、料理はできたが、みんなの料理の実力はよく知らなかった。
なので、晃は前、真のモザイク料理を食べてしまったわけだが・・・・。

真が言うには美樹と結衣は最近自分で料理をしているらしい。
今宵と透は冷凍食品で済ませているらしい。
なので、幼馴染全員での食事はまったくない。

透に関してはほかの女友達のところでごちになっているらしい。
まあ、みんな一様バイトはしているわけで、コンビニの弁当かは一ヶ月食べられる金はある。
実際、一番心配なのは今宵のわけで。
それは自分でもわかっているらしい。
だから、晃に料理を教えてもらっているわけだが。

だがそんなことでさらに１０分経ったわけだが。
今宵はいまだに終わらせる様子はない。

「あきにい。こよちゃん。長いね」

真が心配したらしく晃に言ってきた。

「一体何をしているのでしょうが・・・・・・」

晃も心配になってきた。
だが、さっきも言った通りに口出し・・・以下省略。

「あきにいが料理しているとき、こんなに時間がかかったことないよね」
「まあ、普通ならそうですが」

晃は苦笑いして言った。

「できたぞ！！」

今宵の声が聞こえた。
どうやら料理ができたらしい。

今宵がその料理を持ってきたかと思ったが手に持っていたのは鍋の一個だけだった。

「あの～今宵さん？これは一体？」

晃は聞いた。

「鍋だ」

今宵はあっさり言った。

「それは見てわかります！！で、鍋だけですか？作っていたのは」

「そうだ！！」

その言葉を聴いたとき、晃と真は全身の力が抜けた気がした。

「どうした、まこちゃんまで」

「こよちゃん。こんなに持間がかかってこれしかなかったら体の力は抜けるよ」

真が晃の代わりに言ってくれた。

「そうか。それはすまなかった。だが、安心しろ。私が作ったのはただの鍋ではない！！」

「ただの？」

「お金払うの？」

真が古臭いことを言った。

「いや、その古いじゃなくって」

「これはいわゆる闇鍋だ」

――闇鍋？

闇鍋とは持ち寄った材料を、暗がりの中で鍋（なべ）で煮て、何が入っているかわからないまま食べて興じるもの。別名闇汁。

以上、Ｇ○Ｏ辞書の検索結果。

「じゃあ、僕は部屋に戻りますね」

晃は逃げるように二階に上がろうとした。

だが、今宵と真につかまった。

「な、何ですか？」

晃は後ろを見た。

「いいから、ためしに晃も食べてみろ」

「あきにいも道連れ！！」

（道連れって、なに？死ぬ確立があるのですか？）

晃は心の中で突っ込んだ。

だが、これを声に出したところで、回避されることはない。

だが、出た言葉は。

「ぎゃあぁぁぁぁぁ！！」

こうして晃も強制参加となった。

「とりあえず、みんなも呼ぶからそこにいろよ」

そういって今宵は家に出て行った。

「あきにい。なんか私心配なんでけど」

「じゃあ、僕を巻き込まないでくださいよ」

晃と真はなぜか正座で座っていた。

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

今宵が帰ってくるまで2人とも無言だった。

とりあえず2人は思った。

――みんなゴメン!!

こうしてこの世で奇妙な闇鍋が始まった。

第４５話　闇鍋事件・前編（後書き）

キャラ紹介。

小方伊織

このキャラはまず委員長キャラを作りたいと思って作りました。
だけど、委員長キャラってまじめ系が多いかなと思って、それだったら思いことが起きたら性格を変えてみようと思いました。
結果。おかげでスーパー空き巣事件で晃たちがかかわることができました。
一様、彼女もメインヒロインです。

第４６話　闇鍋事件・後編（前書き）

前回のあらすじ

恐怖の闇鍋スタート。

結衣「アキ君止められなかったの？」

晃「できたらそうしています」

結衣「そ、そう（アキ君も大変ね）」

第４６話　闇鍋事件・後編

あれから、美樹たちも集まっていた。

「で、一体何するの？」

美樹が無邪気に聞いてきた。

「なにも聞いていないのですか？」

「うん。ゲームやるからって言われたから」

どうやら美樹たちは詳しいことは聞かされていないようだ。

たしかに、ゲームだといえばゲームだが、ああ、かわいそうな人たち。

「さて、じゃあ、みんな座って」

今宵がみんなに言った。

そこで結衣が感づいた。

「アキ君。これって闇鍋じゃあ」

結衣の言葉に晃はうなずいた。

「え？闇鍋って」

闇鍋とは・・・持ち寄った材料を、暗がりの中で鍋（なべ）で煮て、何が入っているかわからないまま食べて興じるもの。別名闇汁。

以上、前回続けての説明終わり！！

「確かにゲームはゲームだけど」
「俺は用があるから帰るわ」
透が逃げる用に玄関に向かった。
だが、肩をつかまれた。
「なに言っているの？逃がすわけないでしょ」
結衣が裏モードで透を止めた。
「じゃあ、命令文も用意したほうがいいのじゃないの？」
美樹が笑いながら言ってきた。
「あの～美樹さん。楽しんでいますか？」
晃は聞いた。
美樹は元気良くうん！！と言ってきた。
「とりあえず命令文の作成は禁止です。これ以上危険になってたまるですか！！」
「あきにいに賛成！！」
晃の言葉に真も賛成してきた。
「あれ？これアキ君が作ったんじゃないの？」
「違いますよ」
「じゃあ、誰が作ったんだ？」

透が聞いた。

「今宵です」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

無言。

「俺やっぱりかえっ」

「誰がさせますか！！」

晃が左で殴って止めた。

「今宵、大丈夫なの？」

「たぶん自信作！！」

「こよちゃん。本当に大丈夫なの？」

このように、どうやら４人ともあらかじめ今宵の料理の味を知っているらしい。

「だから、もう大丈夫か決めるためにいま作ったんだろ。みんな座れ」

みんな強制的に座らさせられた。

「じゃあ電気消すから透から具を取ってね」

「お、おう」

どうやら最初の被害者じゃ透に決まった。

透は鍋におたまを入れた。

（え～い、なるようになれ！！）

透はそう自分で言い聞かせて思いっきりすくった。
暗いせいで確認できないため、透は即座にそのすくったものを口に入れた。
入れてしまった。

「う！！」

透が何か叫んだ。

「ちょっと、一回電気をつけましょうよ」

その言葉に反応して真はすぐに電気をつけた。

「どう、アキ君」
「・・・・・・・・・・・これは」
「「これは？」」
「唐辛子です」
「・・・・・・・・・・・・・」

全員無言になった。

「これ、ただ単に透が苦手なものなんじゃ」

説明しよう！！
透は唐辛子が大嫌いなのだ。

でもまあ、唐辛子1本丸ごと食べれば誰だって気絶する。

「今宵、唐辛子はせめて調理してくださいよ！！てか、よくありましたね僕の家にこれが！！」

晃は今宵に言った。

たしかになぜ、唐辛子が丸ごとここにおいてあったのか。

「じゃあ、次いくぞ」

そう言って今宵は電気を消した。

「次は席的にまこちゃんね」

ただいまの席で真の出番となった。だが、こうして一周すると次は結衣、僕、美紀になってしまう。

「わ、私引くね」

そう言って真はおたまですくった物を食べた。

―バタッ！！

真が倒れる音がした。

「真！！」

晃は見えない中、真が食べたものを確認した。

ちなみに真は嫌いなものはない。

「また、調理していない唐辛子ですか！！」

「あきにい。辛い」

か細い声で真は晃に告げ、気絶した。

「アキ君。私ものすっごく怖いんだけど」

「僕もそうですよ。今宵のことですから全部唐辛子とは考えられませんし」

「アキ君、唐辛子から離れて！！」

「次はゆーちゃんだね」

美紀が言ってきた。

結衣はいわれるまま、おたまで具をすくい、それを食べた。

「！！」

「どうしたゆーちゃん！！ムンクの叫びか！？」

「これ、ゴーヤ」

声でわかるほどに結衣は涙声だった。

そのまま後ろに倒れて気絶した。

「じゃあ、次は晃と美紀だな。一緒に食べてもらうぞ」

今宵が言った。

「なんか闇鍋のルール違いませんか！？」

晃は泣きながら突っ込んだ。

晃と美紀は覚悟を決めて、具を取った。

「いただきます」

晃はのどを鳴らした。

「緊張するね」

美紀が言うと緊張もくそもなくなってしまう気がする。

2人とも同時に食べた。

「これは変な感触ですね」

晃はなかなか噛めず、いやな予感がしてそれを口から出した。

「これ、消しゴムって、食べ物をせめて入れてください！！」

晃は消しゴムをたたきつけながらツッコンだ。

「美紀はどうでしたか？」

「うん。これは普通のレバ肉だったよ」

危なかったと晃は思った。

今回の結果。

負傷者、透、結衣、真

破損物、消しゴム

第４６話　闇鍋事件・後編（後書き）

キャラ解説。

大吾を飛ばして、次は
夏色花火

花火は真の友達として、姉さんキャラがいいかなと思いましたのですが、ここはあえて、実は妹属性を持った人にしようかなと思いました。
それを表すのが一様、晃の呼び方ですが、どうだったでしょうか。

彼女はいろいろ設定を埋め尽くしてくれた人でもあります。伊織との親友の設定もそのおかげです。
いや～おかげでいろいろな設定ができあがりつつあります。ありがとう花火！！

彼女は東皆丘よりも科学都市の方面で活躍してもらおうと思っています。

第４７話　自転車で走ろう！！（前書き）

前回のあらすじ

闇鍋怖い。

今宵「結局味の方はどうだった」

晃「みんなそれどころではなかったのですよ（汗）」

第４７話　自転車で走ろう！！

今日は日曜日で、真も今宵も部活が無い。
今宵の合宿の準備もかねて、久しぶりにみんなでデパートに行くことに決まった。

「それで、なんで自転車が3台しかないのですか？」

晃は聞いた。
一番近くのデパートは電車よりも自転車のほうが早い。
理由？デパートが駅から遠いからだ。

「仕方ないよあきにい。使う人は限られていたから」

真が説明した。

「まあ、それはしょうがないでしょ。それだったら2人乗りでいきましょうか」

晃がしょうがなく言った。

「それはいいな。それで、こぎ手は誰がする？」

透が言った。

「それはもちろんまず、僕と透は男子なので決定です」
「決定かかよ！！」
「後は女子で一番力がある美紀にお願いします」

晃は無視して進めた。

「オッケーアッキー」
「俺は無視かよ!!」

最近、透の扱いがひどくなってきているように感じる今日この頃。

「で、乗るのはどうする?」

今宵が聞いてきた。透は無視で。

「そうですね。後は背の順で行きましょうか」
「背の順?」

結衣が聞いてきた。

「そうですね。まず、一番背が低い美紀は真が乗ってください」
「ちいさいゆうな!!まあ、まこちゃんよろしくね」

一回突っ込んでから美紀は気を取り直して真に言った。
切り替え早っ!!

「で、後は透は一番背が高いので今宵をお願いします」
「ゲッ!!一番重いのが来た」

透がそういった瞬間、今宵は思いっきり透の頭を殴った。

「それは女子の前でいったはいけない言葉じゃないぞ!!」
「そうよ、透サイテー」

結衣も言ってきた。
まあ、女子には言ってはいけない言葉だ。

「で、僕は結衣とですね」

晃は無視して言った。
これでもう3度ぐらい透を無視した。

「よ、よろしくねアキ君」

（やったーアキ君と二人乗り♪アキ君と二人乗り♪）

結衣は冷静に言ったが頭と心は大興奮状態だ。
頭の中では3頭身ぐらいの4人の結衣が手をつないで踊り回っている。

「ゆ、結衣。早く乗ってくれますか？」
「え、あ、うん」

準備を済ませた晃が言った。

「じゃあ、行きますか」

※

「ウォーーーわたしが一番乗りだー」
「わー美紀ちゃんはやーい」

美紀と真ペアは前進で早く進んでいる。

「あの二人はなんかペアにしないほうがいいような気がしました。
ストッパーがいない」
「あ、あはは」

晃がそれを見て心配になっていった。
結衣は何も言えず愛想笑いをした。

「こら、携帯を見ながら運転するな!!危ないだろう!!」

今宵が透に言い放っている。
言葉通り、透は携帯をいじりながら運転しているのでものすごく遅い。
てか危険。

「あの二人は逆に正解ですね」
「そ、そうね」

二人は笑えなかった。

「ねえアキ君」
「何ですか?」

結衣は晃に深刻そうに言った。

「美紀たち見えないわよ」
「あ!!」

結衣に言われて晃は気づいた。
もうそこには美紀たちの姿が見えなかった。

「なんかあっちもそっちも心配ですね。理由は違うのに」
晃は呆れながら言った。
「わわ、危ないぞ！！」
「大丈夫だって。・・・・・・多分」
「多分てなんだ、多分て」
ちなみにいま走っている場所は川原付近だ。
「おい！！いい加減携帯いじるのをやめないと、晃にエロ画像見せるぞ！！」
今宵が言った。
もちろん晃の名前を出したのは意味がある。
「ゲッ、そうしたら携帯が天に召されるじゃないか」
そう、晃はエロいものが嫌いアンド苦手。
携帯でその画像を見せたらその携帯の生存確率は０パーセント。
確実にやばい。
ちなみに大吾がこのまえ被害にあった。
おれはパソコンだったので晃が自分で修理した。
つまり、パソコンも壊したのだ。恐るべき晃の変体＆エロ物破壊騒動。
透はそのとき、一緒にいたので知っている。
てか、いつものメンバーで集まっていた。
それよりも、女子のいる中でエロ画像見せんなよ！！

透は急いで携帯をしまった。
自分は被害を受けたくは無い一身で。

「あ、あれ美紀たちじゃ」

場面変わって、結衣は見慣れた顔を発見した。

「本当ですね。どうしたのですかね」

晃は近くまで行って話しかけた。

「どうしたのですか？」
「うにゅう～アッキー疲れた」
「では結衣。いきましょうか」

晃は自転車をこぎ始めた。

「ちょっとアッキー待ってよ！！」

美紀は呼び止めた。

「いや、目的地は一緒なので別にと思いましたので」
「ううう～」
「それでは～」

晃はそう言ってこぎ始めた。

「え～い！まこちゃん！！アッキーたちになんかに負けないよね！！」

そう言って美紀は自転車にまた乗った。
真も一緒に乗った。

「うん。あきにいに負けるな美紀ちゃん！！」
「うおぉぉぉぉ！！」

美紀は行きよい良く自転車をこぎ始めた。
ちなみに透たちは。

「ほら、晃たちが見えないじゃないか」

ものすっごく遅れていました。

第４７話　自転車で走ろう！！（後書き）

キャラ解説

柊静音

彼女は設定よりも最初の登場で暴走させてしまったことを失敗したと思っています。
設定はみんなにいつもやさいしい生徒会長そのものです。
一様年上なのに結構出てきていますね。
放課後の話が多いのでどうしても生徒会の話ができやすくなっていますね。
彼女はそんなに細かい設定は無く、こんな生徒会長がいたらいいなと思いつつ作ったキャラです。
実は小悪魔てき設定があったりして。
う～ん。これからもたくさん出番が増えそうですね。

第４８話　そうだ！！コンビニじゃなくってデパートに行こう！！（前書き）

前回のあらすじ

透の扱いが段々雑になってきている。

結衣「いいんじゃないの。アキ君の正反対キャラだから」

透「ひどっ！！」

第４８話　そうだ！！コンビニじゃなくってデパートに行こう！！

晃たちはデパートに着いた。

「ついたのはいいですが、なんで来ただけで疲れている人が2人もいるのですか」

その疲れている2人、透と美紀は壁によかかっている。

「アッキーちょっとは休ませてよ」

「そうだぞ晃。俺なんか体よりも心のダメージのほうがでかいのだからな」

美紀と透は言ってきた。

「今宵、一体透に何をしたのですか？」

晃は心配になったので今宵に聞いた。

「うん？晃にはまだわからないことよ」

「ん？」

「じゃあ、教えてあげようか？」

「やめろ今宵、俺の携帯が天に召される」

「？」

晃はいまいち意味がわからなかった。

そうそう。ちなみに結衣と真はもう先に中で見ている。

「それより、晃。私がこの2人を見ているからまこちゃんたちのほ

うへ行ったらどうだ？」

今宵が言ってきた。

「そうですね。じゃあ、そうさせてもらいますね」

晃は大丈夫でしょと思い、今宵に疲れた2人を任せた。
晃はすぐに結衣と真を見つけられた。
場所は1階の鞄が売っているコーナーだった。

「一体なに見ているのですか？」

「あ、あきにい」

「アキ君。うん。ちょっといいのがあるかなと思ってみていたの」

真と結衣は晃に気づいた。

「そうですか。で、気に入ったものはありましたか？」

「アキ君。女の子はね、そんなにぽんぽん買えるものを決められないんだよ」

「そうだよあきにい。男子の決め方と一緒にしないで」

2人は晃を指摘した。

「は、はあ。なんか前にも同じことといわれたような気がします」

この言葉に2人は反応した。

「アキ君。前に誰かとここに来たの？」

「へ！？」

「あきにい。ちゃんと答えてよね」

2人は一気に聞いてきた。
なんだか怖い。
晃のことが好きな2人は他の誰かと、しかも今の発言だと女子と一緒にいたと言えるだろう。

「え、あ、いや、ここでは無く、科学都市にいたとき言われたのですよ」
「科学都市？」

真は聞いた。

「ええ。そこの同年齢の幼馴染の子に同じことといわれました」
「アキ君。幼馴染って私たち以外にいるの？」

結衣は疑いながら言った。

「いや、科学都市の幼馴染ですよ」
「なんだそうだったの」

結衣と真は安心のため息をした。
だが、その安心は一瞬で自分で消えさせた。

「て、アキ君。科学都市でも、天然ジゴロ発動しているの？」
「天然！？ジゴロ！？発動！？」

晃は結衣の言っている意味がわからなかった。
天然キャラ晃、別名フラグ立ち上げまくり野郎。
・・・・・・あ、別にうまいこと言ってませんからね。

「いや、他にも後輩の子と一緒にいましたよ」

正直な晃は女か男かをはっきり言葉で表していた。もちろん本人は気づいていない。

そして、その後輩は前に晃に電話をかけてきた、水瀬瑞希のことである。

「あきにい。どんだけ女の子と仲良くなればいいの」

「あれ?僕、女の子と一緒に言ったとは言ってませんよね。まあ事実ですが」

やっぱり晃は気づいていおなかったようだ。

「まあ、そんなことはともかく、なにを買うのですか?」

晃は話題をそらした。

「うん。私はもうちょっと小さい鞄がほしいと思っていたのよね」

「私も」

どうやら2人は同じみたいなものを探している様子だ。

「あれ?真。小さいバックならこの前もっていましたよね」

「あれ、もう穴開いていたから」

「ああ、直しておきました」

晃はあっさり言った。

「あきにい。裁縫もできるの」

「ええ。一様」

「アキ君が段々女子の能力を身につけてくる」
「なんか言いましたか結衣」
小さい声で言ったのでぎりぎり結衣の言葉は晃に届かなかった。
「お、晃たち。いたな」
今宵が晃たちを見つけたので声をかけてきた。
どうやらあのお疲れ2人はもう直ったみたいだ。
「じゃあ、次ぎ行きましょうか」
そう言って全員は2階に上がった。
※
2階は洋服が多く取り備えている。
女子にとっては最高の場所だ。
ついたとたん、晃と透は置いてけぼりになっていた。
「一秒だったな」
「ええ。どうりで聞き分けが早いと思いましたよ」
実はさっきの1階では結衣と真は何も買わなかった。
ほぼ強制で2階に上がったが、2人は文句1つも言わなかった。
「しかし、もう1時間は経ちますよね」
そう上がってからもう1時間経過している。
晃と透も服を選んだがもう終わっている。

「本当に長いな」
「透も結構長いほうだと思いますよ」

ちなみに晃は２０～３０分の中で選び終わったが、透はさっき前にやっと選び終わった。
実際、彼も女子と一緒に一瞬で衣服コーナーに溶け込んだ。

「僕は男子として、時間をかけることは尊敬に値しますよ」
「それはどうも」

※

あれからさらに1時間後、次は3階に上がった。
だが、上がったのはいいが、一瞬で晃が消えたのだ。

「アッキーずいぶん早かったね。驚きだよ」
「お前らもさっきと同じじゃねえか」

透は突っ込んだ。

「あ、あきにいいた」

真が指指したそこには晃がいろいろな商品。もとい、電子系の商品を見ていた。
そう、晃が向かったのは電子器具や機械品が置いてあるコーナーであった。

「あ、アキ君」
「あ、皆さんもきましたが」

振り向いた晃の目はすごく輝いていた。

「あ、あきにいの目が輝いてる」

真も驚いた様子だ。

※

「さて、帰りましょうか」

晃はそう言って買い物袋を自転車の籠に入れた。

「アキ君。行きと一緒の人でいいよね」

「まあ、そうですね」

結衣の質問に晃は答えた。

「晃、美紀たちはもう行ったぞ」

「早ッ！！」

晃と透は追うように自転車をこぎ始めた。

「アキ君。楽しかったね」

「ええ。今度は生徒会の皆さんと一緒に行きましょうか」

「む～鈍感」

結衣はボソッと言った。

「何ですか結衣？」

「な、なんでもないよ」
「あ、休んでいる美紀発見」
「早ッ！！」

第４８話　そうだ！！コンビニじゃなくってデパートに行こう！！（後書き）

キャラ解説

荒井鈴

彼女は静音の正反対キャラとして書きました。
一様、副会長なのでそうしたほうがいいなと思いましたので。
彼女も静音と同じく細かい設定は無く、話を進めています。
そうそう、彼女のみ、晃以外の男性に恋しているのですよ。まあ、
細かい設定は本当にこれだけですね。

第４９話　探偵まがいオア浮気調査・前編（前書き）

前回のあらすじ

そういえば、デパートに来た目的って何でしたっけ？

真「そういえばなんだっけ？」

晃「真の合宿の準備ですよ。思いっきり話題がそれていましたが」

第４９話　探偵まがいオア浮気調査・前編

休み時間。
晃は頼まれていたものを先生に渡すために職員室に来た。
だが、その先生はなんか暗かった。

「ふ、藤先生？どうかしたのですか」

藤清美（ふじきよみ）。東の丘学園の表現の教師である。夫あり。

「あ、優輝くん」

清美は晃に気づいた。

「先生。ため息してどうかしたのですか？」
「あ、ごめんね。なんでもないのよ」
「あ、せんせーそういえば最近夫の話していませんね」

美紀が清美に言ってきた。

「夫の話しですか？」

晃は意味が良くわからなかった。

「そう。先生は良く、授業の合間に夫の話をよくしてくるのだ」

清美は今年結婚したばかりでつまり新婚さんである。
だが、美紀が言った瞬間、清美はさっきよりも大きなため息をした。

「せ、先生」
「もしかして、せんせー喧嘩中？」
「違うわよ」

清美は思いっきり拒否した。

「じゃあ、まさか浮気が見つかったとか？」
「・・・・・・・・・・・・・」

――え！？

清美は晃がこのことを口にした瞬間黙った。
これはもう決定である。
鈍感主人公、晃。恋愛は鈍いがこうゆうことは感が強い。

「せんせー本気で夫の浮気見つかったの？」

美紀が確認してきた。
そのとき、清美は机にひれ伏せた。

「美紀、地雷踏みましたね」
「アッキーも」

清美はリアルで泣き出した。

「先生すみません。変なこと言ってしまって」

晃は即座に謝った。

「じゃあ、優輝くん。先生の夫の浮気の調査してきてよ」

清美は顔を向けていった。
その顔は涙と鼻水だらけだった。
晃がそれを聞いていやな顔をした瞬間、清美は晃の服に顔をつけた。
そして、

―ズズズ・・・

「わー先生、人の制服で涙拭かないでください！！てか、さりげなく鼻までかまないでください！！」

そう、清美は嫌がらせに晃の制服で涙を拭き、さらに鼻までかんできた。

「わかりました。わかりましたから」

晃はあわてて言った。

「じゃ、お願いね」

晃がどんどん探偵染みたことになってきた瞬間であった。

※

「で、そういうことなんですよ」

晃は放課後、舞と泉に事情を説明した。
ちなみに場所は誰も使っていない屋上。

「そうなんですか」

「わ、わかったよアキ、ズズズ」
舞は普通に答えたが、泉は様子がおかしかった。
「泉、風邪ですか？」
「いや、これは花粉症」
「花粉症！？この季節にですか！？」
だが、泉はいま、鼻水が思いっきりたれている。
その瞬間、思いっきりくしゃみをした。
「わー、僕の制服で鼻かまないでください」
泉は晃の制服で鼻をかんできた。
晃、本日2回目。
「ティッシュがない」
「僕持っていますから！！」
そう言って晃はポケットティッシュを泉に差し出した。
「で、晃君。私たちは何すればいいの？」
舞はころあいだと思い聞いてきた。
「ええ。一様、先生の夫の名刺をもらいましたので」
「これはまさしく尾行か見張りだね」
泉は目を輝かせながら言った。

「風邪をひいている人、目を光らせないでください。それに風邪をひいているので泉は今回はお休みです」

晃はあっさり言った。

「なんで!?あたしはアキの相棒なのに!!」
「相棒って、風邪をこじらせたらどうするのですか」
「気合だ、気合だ、気合だーーーのど根性だーーー」
「はい、なので泉はお休みです」

晃は無視していった。

「え!?無視?」
「で、晃君。本当に尾行と見張りするの?」
「そこも無視しない!!」

なんだか最近、舞も泉の扱い方を学んできたような気がする。
さて、話を戻し、晃は考え出した。
だが、どうしても見張り&尾行しか作戦が思いつかない。

「本当にどうしましょうか」
「でも本当にそれしか」
「じゃーん!!困っている人の味方、幼馴染団だ!!」

その声がいきなり聞こえてきた。
3人とも振り向いたら先にはドアを前にした。晃の幼馴染ズがまるで戦隊者みたいに並んでいた。
美紀以外みんな恥ずかしそうな顔をしていた。

「舞、なんかありませんか?」

「晃君が思いつかないなら私もお手上げ」
「ねえ。本当にあたしはお休みなの？」
3人は無視して話を進めようとした。
「無視するな！！アッキーたち！！」
美紀は珍しく突っ込んだ。
「だから美紀、言ったじゃない無視されるって」
結衣は泣きながら言った。
真は恥ずかしそうに隅っこで座っていた。
「で、なぜか恥ずかしそうなポーズで集まった人たちは何しに来たのですか？」
晃は改めて聞いた。
「わ、私もアキ君のと手伝いしようと思ったの」
「わ、私はただ、あきにいが心配じゃなくって結衣ちゃんが心配だから」
「ありがとうございます2人とも」
晃は優しく2人の頭をなでた。
「他の3人も同じ理由でいいのですよね」
3人はうなずいた。

「ちょうど良かったです。ちょうどこちらも欠勤が1人いましたので」

もちろんこの欠勤者とはただ一人。

「やっぱりあたしお休みなの！！」

泉であった。

第４９話　探偵まがいオア浮気調査・前編（後書き）

キャラ解説

生徒会・瓜生琴美、波木ささら、福本泰子

この３人はまったくと詳しい解説がないキャラです。
あ、でもささらと泰子は一様、メインヒロインなので跡付け設定が増えるかもしれません。
泰子にいたってはコラボのとき活躍してもらいましたし。一様、彼女らが晃に惚れる話を作りたいですね。あ、これネタバレかな？

生徒会の名前は一様、会長の静音（静かな音）を中心に鈴、琴、ささら、太鼓（泰子）と、楽器の名前を名づけてみました。てか、太鼓は静かな音ではないのですが名前がちょうど良く、性格があっていたのでそうしました。
楽器の名前は以前から考えていましたのでそこまではいけば結構名づけるのって簡単ですね。

第５０話　探偵まがいオア浮気調査・中編（前書き）

前回のあらすじ

晃の制服。災難。

第５０話　探偵まがいオア浮気調査・中編

とりあえず、風邪ひいた泉に代わって幼馴染ズがこの浮気調査に協力してくれるらしい。

「でも、晃、何か策でもあるのか？」

今宵が聞いてきた。

「策というよりもやっぱり見張り&尾行しか考えられませんね」

晃は考えながらいった。

「やっぱり、情報がほしいですね」

舞が残念そうに言った。

「あら、神下さん。なんかアキ君が考えていることが見えているように聞こえますが」

結衣が舞に言ってきた。

晃が近くにいるので裏モードにはなっていない。

「そうですね。僕は一様また先生に詳しい事情を聞きに行きますね」

そう言って晃は屋上を出た。

そこから、いきなり結衣の裏モードがオンになった。

「そういえば、なんか最近。神下さんは私よりもアキ君のこと良く

知っているように見えるけど」

だが、今の晃のことは結衣を含めた幼馴染ズの誰よりも舞は晃のことを知っている。
泉もそれは同じだ。

「羽衣さんは晃君のことを私よりも知らないはずがないじゃないですか」

舞は負けない声のトーンで言った。
ちなみにこの女の戦いで透の肩身は狭くなっている。

「みなさん。聞いてきましたよ」

晃が早くも帰ってきた。

「あ、アキ君。早かったね」

結衣は光の速さよりも早く裏モードをやめた。
恋する女ってやっぱり怖い。

「それで、どうだった」

透が聞いてきた。

「実際、そんなには教えてくれませんでした」
「まあ、そうだろうね」

美紀が珍しく理解した。

「ねえねえ。アキ」

泉が晃に質問してきた。

「なんですか泉。てか、早く帰りなさいよ」

「これなんかどう?アフロカモフラージュ作戦」

泉は見事に無視して作戦を伝えた。

「なんかわかりやすい作戦ですが、一様内容を教えてもらいましょうか」

晃はあきらめて泉の話を聞いた。

「みんながまずアフロをかぶって、その夫にぎりぎりまで近づくの」

泉が自信満々に言った。

だが、この作戦は致命的なものがある。

アフロがあるかないだって?そんなことではない。

「それ、絶対にばれますよね」

晃はさらっと言った。

「まあ、一様、今日から活動しようかなと思います」

「な、何時から」

真が聞いてきた。

てか、完璧に泉はスルーだ。

「一様、５時ぐらいには向こうに着きたいですね」
ちなみにいまは４時過ぎである。
「じゃあ実質、今から行かなきゃね」
結衣が気を利かせてくれた。
「そうですね。でわ早速」
「行きますか！！」
泉が晃の言葉をつなげたが。
「泉は帰って安静にしてください」
「やっぱり？」
「はい」
晃は冷静に突っ込んだ。

※

晃たちは何の策も考えないで花子の夫の会社に向かっていた。
「アキ君。そういえば、何時までいる気なの？」
結衣が聞いてきた。
「一様、１０時まで粘りたいですね」
「じゅ、１０時までって、それじゃあお腹が耐えられないよ！！」

真が腹を抱えながら言ってきた。
てか、この子はご飯が一番大事なのか。

「だから複数いるのですよ。交代で見張りを代わればいいのですよ」

「なるほどー」と全員が言ってきた。
実際、3人で活動するはずだったが、今回は人数が多いので2手に分かれることにした。

男子の晃と透は別れて、舞は事情を知っているので晃のほうへついた。
今回の人数は7人、それで3人は決まっているので。4人でのじゃんけんが始まった。
一様、勝った一人が晃の方へつくと形になっている。

「「「「最初はグー、じゃんけんポン!!」」」」

勝者は真だった。

「では、僕らが先に見張っていますから皆さんは時間まで自由でいいですよ。あ、でも全員ばらばらになってはいけませんからね」

晃がみんなに説明した。
ちなみに時間は1時間おきと決めた。

3人は近くにある草が生えた場所に隠れた。
ちなみに真の頭にはなんかもじゃもじゃしたものがあったので晃は無言で取り上げた。

「あきにい。これって小説に成り立つの?」

「次元を壊す言い方しないでください」
晃は冷静に突っ込む。
「てか、アフロ取らないでよ」
「話題を1つに絞ってください」
「たしかに絵柄は地味ね」
舞もそのことは気にしていた。
でもなぜ真はアフロを？まあ、理由はなんかわかるが。

※

「・・・・・・・・・・・あきにい暇」
あれから50分ぐらい時間が経った。
「そう言わないでください。あと10分程度ですから」
そう言ってう○い棒を真に渡した。
いわゆる餌付けだ。さすがだてに真の兄はしていない晃だった。
あれからさらに8分。
「で、晃君。どうやって交代するの？」
舞が聞いてきた。
「そうですね。そろそろここから出ましょうか」

晃はそう言ってここから脱出した。
そして待ち合わせ場所に行った。

「ご苦労様。じゃあ次は俺たちだな」
「ふにゅう～あきにいご飯」

真はお腹が減っているようだ。

「じゃあ、行くぜ！！」

透たちは歩き出した。

「まって！！」

だが、晃は止めた。

「なんだ！？」
「アフロとってください！！」

てか、なんだこのアフロネタは。

第５０話　探偵まがいオア浮気調査・中編（後書き）

続・お帰り！！後書きトークコーナ

晃「なんか本当に久しぶりですね」

真「そうだね」

晃「で、今回はなんか募集があるそうですが」

真「うん。今回はＰＶ３万&５０話目突破記念として、みなさんが考えたキャラを募集することにしました」

晃「いいのですか？キャラなんか募集して」

真「なんか作者が今頃人気投票しても誰も投票してくれない確立が高いと思っているらしくこうなったの」

晃「投げやりですね」

真「募集方法は感想からもいいですし、活動報告でもいいです。自分で使っている小説のキャラクターも大歓迎です」

晃「期間はありませんのでゆっくり考えてくださいね。もちろんそのキャラは本編で使わせてもらいます」

真「たくさんの応募お待ちしています！！ねえ、あきにい」

晃「はい！！」

第５１話　探偵まがいオア浮気調査・後編（前書き）

前回のあらすじ

どうも、今回出番がない泉で～す。ズズズ。
アキたちは先生に頼まれてズズズ、夫の浮気ちょズズズを依頼された。ズズズ
アキたちは無事、夫を捉えることができるのふぁふぁふぁーくしょん！！

晃「まず、風邪治してください！！」

第５１話　探偵まがいオア浮気調査・後編

あれからさらに2時間が経った。

場所は何とか説得できたマンションの階段で見張りを代えた。
作戦としては舞を中心とした透、結衣、今宵のチームで、マンションの外、つまり会社の近くでは晃、美紀、真チームが見張っている。

舞が詳しい動きを見て、通信機で知らされたとおりに晃たちが動くと言う作戦である。
ちなみにこのマンションの階段は晃が『団殺者（ディスター）』の権限で借りた。
もちろん幼馴染ズには秘密だ。

「なかなか動きがないわね」

望遠鏡で見ていた結衣が言った。
あれから本当に動きがない。

「調べたところでも情報はつかめねえぜ」

透がノートパソコンをいじりながら言った。
ちなみにこのパソコンは晃のもので『呼び出し（コール）』したものだった。
もちろん秘密で。

そのときだった、目標（ターゲット）に動きがあった。

「晃君。会社から目標発見しました」

『了解！！』

通信機から晃の、声が聞こえた。

※

「まってー」

美紀がその人を見つけたので一気に襲い掛かった。

「美紀ちゃん。手伝う」

横には真がいた。
運動系の幼馴染の連係プレーに藤夫は逃げ出した。

「アッキー。そっちに言ったよ」

美紀が通信機で晃に言った。

「呼び出し（コール）」

晃は頭上からいきなり現れてロープを用意した。

「逃がしはしない」

晃はまるでカウボーイみたいにロープを投げた。
だが、藤夫は鞄を盾にして避けた。

「美紀！！」
「オッケー！！」

だが、その隙に美紀が回りこんだ。真は晃に近づいた。

「ロープよりもこちらのほうがいいですね。『呼び替え（チェンジ）』！！」

晃の手からロープから一気に手錠へと代わった。

「あきにい」

「アッキーいまのは一体」

だが、晃は忘れていた。いまここには美紀と真がいることを。

（あ、忘れていました。後で説明しますか）

そのことに遅く気づいた晃だがそんなことは今はどうでも良かった。

「ひっ！！」

藤夫は逃げた。しかも美紀の方向へ。

「にがさいよ」

だが、その選択は間違っていた。

美紀は藤夫の腕をつかみ、一気に必殺技を使った。

「必殺、海老固め！！」

「必殺しちゃだめです！！」

危険なにおいがして晃は止めに入ったが時はもう遅し。

すでに決まってしまった。

だが、女子に密着されてこの技を食らうのはある意味ご褒美だ。・・・多分。

見事に藤夫は気絶した。

「・・・・・美紀」

「美紀ちゃん」

晃と真はボソッと言った。

「あはは。大丈夫。すぐに起きるから大丈夫だよ」

ちなみに美紀の力はただいま幼馴染の中、いや、男子と競えるほどの力を持つのだ。
いやはおっそろしい。

「それよりもアッキー。今のは一体」

手錠をはめている晃に美紀は聞いてきた。

「ああ。これはですね。僕の力でないのですよ」

晃はさっきの力のことを説明した。
だが、自分が『団殺者（ディスター）』ということは秘密にしたままだった。

「まあ、事情はわかったから。一様結衣ちゃんたちには説明しとくね」

「ええ。でも学校では言わないでくださいね。このこと知っているのは他は舞と泉、それに静音さんのみなんですから」

「あの、巨乳か」

真は小さい声でさらっと言った。
実際、真は静音の件を良く思っていない。

まあ、それも結衣も同じことだった。ちなみにそのことは誰も知らない。
理由は単純に晃の独占である。生徒会室にいることで晃といる時間は多くなっている。

（あきにいをあの巨乳なんかにやらないもん）

実際、胸の大きさをうらやましがっているように見える。

「うっ、ここは」
「気づきましたか藤さん」

起きた藤夫に晃は話しかけた。

「き、君たち、なにをするのですか」
「すみません。清美先生に頼まれて浮気調査のためあなたを捕獲させてもらいました」

晃は説明した。

「浮気って、僕は一切そんなことしてはいません」
「はい？」

晃は言っている意味がわからなかった。

「たしかに僕はいろんな女友達がいるけど、浮気はしたことがない。てか、する気もありません」
「はあ」

藤夫はさらっと言った。

顔の表情からしてうそは言ってはいない。

「じゃあ、帰りが遅くなっているのは？」

「ああ、僕は前に言っときましたよ。今日から仕事が忙しくなるから遅くなるからって」

「・・・・・・・・・・・・」

晃は話の内容がはっきりわかった。

結果。清美のただのマイナスな思考だった。

「てか、女友達が多いってまさに今のアッキーにそっくりだね」

「うん。あきにいに似ている」

美紀と真は遠くで話していた。

晃は普通に謝りながら手錠をはずした。

「ご迷惑をスミマセンでした。藤当麻さん」

「ああ、このことは僕が清美に話しますから安心して帰ってくださいね」

「はい」

そう言って当麻は帰っていった。

※

晃たちの帰り道、いろいろ話していた。

「先生ったら、結局自分で追い込んでいただけなのね」

結衣が納得したように言った。

「ええ。そうですね」
「だが晃。お前はいつからそんなもの手に入れていたんだ」
今宵が言っているのは晃がズボンの右のベルトを通すところにつけている十字架のストラップのことだった。
これがなくちゃ『呼び出し（コール）』や、さっき使ったものを瞬時に入れ替える、『呼び替え（チェンジ）』が使えなくなるのだ。
「これは科学都市から手に入れたものです。くわしいことは残念ながら伝えることはできませんが」
「そうか」
「なんにしろ、これで無事任務完了だな。晃」
「透は結局何もしていないけどね」
「うるせえ」
こうして無事のまま家に帰っていった。

第５１話　探偵まがいオア浮気調査・後編（後書き）

後書きトークコーナ

静音「思ったのですが」

鈴「なんだ？」

静音「さいきん琴美ちゃんの姿が見えないのですが」

鈴「ああ、作者が出るタイミングがつかめないといってきたぞ」

静音「作者も琴実ちゃんも大変ですね」

鈴「琴実は出番がないからむしろラクなんじゃ」

第５２話　復活の風紀委員顧問（前書き）

前回のあらすじ

浮気調査。成功！！……なのかな？

美紀「あれ？自信なさげ？」

晃「実際、浮気はやってなかったので」

第５２話　復活の風紀委員顧問

季節は１１月になり、東の丘学園も冬服の生徒が増えてきた。
特に、今日は寒いのでみんな見渡す限り冬服だった。
もちろん、この男も。

「アッキーは冬でもその制服なんだね」

美紀が晃の制服を見て言った。
美紀ももちろん東の丘学園の制服を着ている。
東の丘学園はブレザーで色は男子は青で黒のズボン、女子は赤で桃色のスカートだ。

「ええ。一様、前までそうでしたので」

晃は前と同様、科学都市にある私立の高校、星道高校の冬服である。
紺と、星道高校の学年色である赤の線のブレザー、しかも袖には学年色のわっかがついている。
ズボンは黒とさっきと同じ学年色の線が入っている。
見た目はまったく違う制服だ。

「アキ君の冬制服。アキ君の冬制服」

結衣が一人で小さくつぶやいていた。なんだか怖い。

「でも晃君。なんでその制服着ているの」
「それにはノーコメントでお願いします」

晃はあっさりと言った。
本当はこの制服は防弾制服である。
この制服は『団殺者（ディスター）』である晃のために作られた特注品である。
しかも、この制服なら『団殺者（ディスター）』の自任務につかう交通機関やらが請求しやすくなるし、簡単に言うならばユニホームそのものだ。

「あきにい！！」
「あきにいさん。お知らせしたいことがあるのですが」

真と花火が教室に入ってきた。

「どうしましたか？」
「実は、風紀委員の顧問の先生が復帰したそうなの」
「それは本当ですか！？」

晃は立ちはしなかったもの驚いていた。

「はい。私、朝見たのでそれで」
「それでね。またその先生が何かたくらんでいるらしいの」

真は大急ぎで言っている。

「確証は？」
「ないけど、その先生ならやりかねないから」

どんだけ信用ないんだあの人。
ちなみにこの学校の学園長の名前は三千院来斗（さんぜんいんらいと）。名前通り、頭が光っている人だ。
そして顧問の先生の名は三千院照明（さんぜんいんてるあき）。でこが光っている先生でちなみにはげではありません。と毎度のこと言っている。

学園長は大変な面倒腐りやなので、ほとんどのことを教職員や生徒会に任せている置き去り理事長だ。そのせいでハゲたとうわさされている。まあ、ハゲは事実だが。

照明はこの学園の風紀委員の顧問であり、彼のせいで暴力風紀委員ができたといわれている。だが、彼も暴力的な正確なのでまったくと言えないが当てはまっている。実は生徒が嫌いとうわさされている。

「で、その風紀委員。いや、三千院先生がなにかするとでも言うのですか？」
「うん」

今の言葉は教室中の誰もが言った言葉だ。
信用が無さすぎる。
そのとき、チャイムがなった瞬間先生が入ってきた。
伊織が号令をかけたあと先生は口を開いた。

「じゃあ、早速だが、テストするぞ～」

え～！！と教室中の生徒が叫んだ。

「うるさい！！今日こそ優輝のやつを１００点取らせないからな」

（何ですかこの人はあいからわず）

大口矢火（おおぐちやか）。この学校の教員で担当科目は日本史。
なぜか毎度、晃をライバルにしたような目で見てくる。
理由はこの先生は毎度テストでは１００点を出させたことがないら

しい。
だが、それは晃が来る前のこと。晃に１００点をこの前出されたので、それ以降この調子である。
ちなみになぜみんなが１００点を取れないのはそれぐらい悪質な問題が１問以上あるからだ。
うわさでは照明の親友とか。

「センセー前回も。テストやりましたよ～」

美紀が言った。
だが、大口はフンと、鼻から息を漏らした。
ちなみにこの先生は矢火という名前だが、立派なおっさんである。
ご注意を。

結局このあとテストをやり、そのまま普通の授業でこの時間が終わった。

「アキ君。今回のテストどうだった？」

授業が終わったのと同時に結衣が聞いてきた。

「大丈夫です」

晃は即答だった。もうすでに大口が悲しんでいる姿が目に見えていた。
そのとき、また教室のドアが開いた。

「あ、あの～優輝晃くんいる？」

その女性は髪は薄い紫のショートヘアーの美少女で、バッチの色か

らにして同学年である。

「あ、しおちゃん」

美紀が彼女を呼んだ。

「どうしたの？栞ちゃん」

結衣も彼女を呼んだ。どうやら知り合いらしい。

「あの～知り合いですか？」

晃は聞いた。

「うん。私のクラスの同級生で桜栞（さくらしおり）でつうしょうしおちゃん！！」

泉が説明してくれた。

泉と同じクラスということは3組の人か。

「はじめまして。風紀委員の桜栞です」

「優輝晃です。って、風紀委員！？」

晃は驚いていた。

「でも、まったく暴力が好きな子には見えませんよね」

そう、風紀委員とは前にも言ったとおり、暴力で権力を振り回す人たちだ。

だが、晃が言ったとおり、まったくそのようには栞は見えなかった。

「しおちゃんは風紀委員の中でゆういつ話し合いができる人なんだよ」

美紀が説明した。

「そうなのですか。で、いきなりどうしたのですか？」

晃は改めて問いだした。

「う、うん。実はさっき三千院先生と大口先生の話を聞いちゃって」

栞は説明しだした。

「その話の中に優輝くんの名があったの」

「僕のですか？」

「うん。なんかつぶすとかって」

「！！」

「つ、つぶすって！！」

結衣が大声で言った。

「私もその話聞きました」

花火と後ろについてきている真が教室に入ってきた。

「だからさっき教室に来たというわけですか」

晃は納得したように言った。

「でも、アキ君をつぶすって」
「あきにいさんをこの学園から追い出すと言うことですかね」
「でもなんであきにいが！？」

3人はテンパッていた。

「でも、晃君が来てから、風紀委員は活動がしにくくなり、そのせいで三千院先生は謹慎。大口先生は自分のプライドをズタズタにされた」

伊織が冷静に分析した。
完璧にまじめモードになっている。

「それでね。風紀委員に一斉集合がかかったの」

栞はあせりながら言った。

「て、ことは、アッキーはまた風紀委員と戦うことになるのかね」

美紀は楽しそうに言った。

「ですが、これ以上問題ごとを起こしたら三千院先生は今度は謹慎どころではすみませんよ」
「じゃあ」
「つまり、やるとしたら大きいことは起こしませんがなにかやってくることは確かでしょう」

晃は冷静に分析しながらしゃべった。

「じゃあどうするのアキ君」

結衣は心配しながら言った。

「仕方ない。最終兵器でも使いましょうか」

晃は冷静言った。

第５２話　復活の風紀委員顧問（後書き）

後書きトークコーナ

晃「そういえば、風紀委員てクラスで選ばれるのとは違うのですよね」

今宵「そうだな。風紀委員は生徒会とともに、普通の委員会とも違い、立候補制だ。しかも選挙なしの」

晃「やっぱりそうでしたか。あと、もう一ついいですか？」

今宵「なんだ？」

晃「意外と教室の話では今宵と透って出ませんよね」

今宵「だから後書きコーナでてる！！」

晃「……たくましいですね」

第５３話　ＶＳ３人の乙女（前書き）

前回のあらすじ

風紀委員復活？

晃「復活というか、顧問が戻ってきただけですよね」

真「そんなことよりもあきにいが何するのかそっちのほうを使ったほうがよかった」

第５３話　ＶＳ３人の乙女

結局、今日中、風紀委員の嫌がらせは起こんなかった。

「アキ君。一体どんなことしたの？」

「簡単なことです。風紀委員なら風紀を乱していないものを暴力は触れない。逆にしたらそっちが風紀を乱すものとなりますから」

「つまり、なにもしなかったと」

「はい」

晃は気楽に言った。

「さすが地味キャラ。無駄なことはしないね」

美紀が槍がついている言葉が晃の心に刺さった。

「それは貶していると思ってもいいのですかね？」

「いや、ほめてるよ」

なんかいやな気持ちになった晃だった。

だが、こうするのは一番賢い方法だ。

しかも、こうしないとわざと、風紀を乱す。

それはつまり、他の人にも迷惑になってしまうから晃には当分できない方法だ。

「でも、このまま何事もないほうがいいのですがね」

晃はボソッと言った。

「あ、あきにいさん。見つけました」
「ん？」
下駄箱にやってきた晃たちに花火が呼び止めてきた。
「あきにいさん。今日の放課後ひまですか？」
「ええ。まあ」
そのあと、花火はうれしそうな顔をいた。
だが、体はなんかモジモジしていた。
「だ、だったらいまからデートしませんか？」
「はい？」
「「「え～！！」」」
ちなみにえ～と言ったのは美紀、結衣。透だ。
今宵は部活でいない。
真は別の友達と遊びに行った。
「あの～言っている意味がちょっと」
「簡単に言えば私と2人でどっかに遊びに行きませんかということです」
鈍感な晃に花火は丁寧に説明した。
「ああ。そんなことなら別にかまいません」
晃はさらっと言った。
「ちょっと待って！！」

だが、結衣が呼び止めてきた。

「なんであなたとアキ君が一緒に遊びに行くのよ」

結衣は真剣な目で花火に問いかけた。

「なにも、言葉のままです。一度は私もあきにいさんと遊びに行きたいのです」

花火は丁寧に言ったが、完璧に目線は晃を見ていない。

完璧に照れている。

「じゃあ、私も行く！！」

「いやです！！」

早ッ！！

結衣の言葉に花火は一瞬で断った。

「ライバルさんと一緒に行くなんて私はいやですし、それに結衣さんは文化祭でデートしていたのじゃありませんか！！」

「うっ！！」

「それにこのことはまこちゃんにも言ってないことです。なのでそれぐらい譲れないことなの！！」

花火は真剣に言った。

そう、彼女もまた晃に恋している乙女の1人なのだ。

理由はまた後ほど。

「じゃあ、私もこれからはあなたのことライバルと見ていいのよね」

「ええ」

2人はにらみ合っている。

「では、あきにいさん。行きましょうか」

そう言って晃の右腕に腕組みをして一緒に歩き出した（強制）。

晃はまったく意味がわからない顔をしていた。

「だめ！！今日は私がアキ君と一緒に出かけるの！！」

結衣も負けじと晃の左腕に腕組をして花火とは逆方向に歩き出した。

「結衣さん今日はあきらめてくださいよ」

花火は晃の右腕を組みながら引っ張る。

「私とアキ君は幼馴染なのよ！！」

結衣も晃の左腕を引っ張る。

「あの～痛いです」

「晃さんは黙ってください！！」

「アキ君は少し黙ってて！！」

「……はい」

2人の恋の熱気に負けて晃は黙った。

だが、頭の上ではっきりと？マークが浮かび出ている。

ちなみに周りの男子どもは美少女にこんな状況をうらやましがって

いる人がちらちらみている。
そのとき、後ろから晃は誰かに引っ張りだされた。
晃にとっては救いの手だった。
「晃くん。大丈夫だった?」
だが、その人物は舞だった。
「ええ。ありがとうございます。舞」
「いいえ。では早速行きましょうか」
「へ!?」
そう言って舞は晃の手を握り、歩き出した。
「「ちょっと待ったー!!」」
もちろんそれに気づいた2人がストップコールをだした。
「舞ちゃん。アキ君は私と出かけるの!!」
「いいえ。結衣さん違います。神下さん。私とあきにいさんが一緒に出かけるのです」
結衣と花火は一瞬で舞の前に行った。
「でも、なんか言い争っているから」
こんなときはちゃっかりしている舞だった。
「でも、奪い取ってはいいといってないからね」

「そう。あきにいさんは自由に取ってはいけないのです」

まるで駅にある、自由に取ってくださいと張っているものと同様な感じに花火は言った。

「てか、僕はもの扱いですか？」

「「ちょっと黙ってて（です）」」

「は、はい」

晃はあきらめのため息を漏らした。

次は舞を入れた恋する乙女同士の言い争いが始まった。

「私がアキ君と一緒に行くの！！」

―むにゅ。

結衣の胸が晃の腕に当たった。

「いいえ。あきにいさんは私と行くのです！！」

―むにゅ。

次は花火の胸が晃の右腕に当たった。

「私も晃君と一緒に遊びに行きたいです」

―むにゅ。

とどめに舞の胸が晃の背中に当たった。

男子はものすごくうらやましそうな顔で見ていたが、晃にはどうで

も良かった。
いま、ここをどう切り抜けるのかが、いや、切り抜けれるのかと心配になっていた。

第５３話　ＶＳ３人の乙女（後書き）

後書きトークコーナ

晃「なんか、いきなりひどい目にあっているような」

大吾「なに言っている！！男からみればスンバらしいスチュエーションじゃないか」

晃「言っている意味がわからないのですが」

大吾「くそっ！！なんでこいつが主人公なんだよ！！」

伊織「大吾が主人公だったらこの小説も終わりになっちゃうよね」

大吾「うわーん！！」（泣き）

伊織「（亡き）の間違いじゃ」

晃「い、伊織？」

第５４話　図書館の少女（前書き）

前回のあらすじ

晃の取り合い。

晃「あれは痛かったです」

大吾「くそ～。うらやましい」

第５４話　図書館の少女

東の丘学園。図書館。
この学園の図書館は校舎にはなく、別館で建てられている。
もちろん、別館であるわけでものすごくでかい。
本の種類も盛りだくさん。
文学の小説やラノベ、さらには漫画までおいてある。
ＰＣも１０台ぐらいあり、席もいたるところにおいてある。
その図書館にある少女が一人いた。
背はものすごく低く、中学生どころか小学生にまで間違ってしまうほどだった。
髪は黒でショートヘアーだ。右が側に大きな丸型の髪留めをしている。
ルックスは誰でもわかるように美少女だ。

少女は本を持っていた。バッチの色からにして1年生だ。
その少女は本棚を見上げた。
そう。この本を本棚にしまいたいのだ。
少女は近くにあった台を持ってきた。それに上った。

「う～ん」

だが、あまりにも高すぎるので少女は台の上でも背伸びしている。
だが、張り切りすぎたのか落ちそうになった。
そのときだった。

「大丈夫ですか？」

晃が少女を支えながら聞いた。

「う、うん」
「これをここに戻せばいいのですね」
晃は少女が持っていた本を本棚にしまった。
「あ、ありがとう」
少女はお礼を言った。
「いいですよ。このぐらい。では僕は行きますね」
そう言って晃は場所を移動した。
（あの人、あの制服ということは）
「優輝晃さん」
少女はボソッと言った。
彼女の顔はものすごく赤かった。
これが少女の初恋であり、一目惚れだった。

※

次の日。
廊下ではたくさんの男子生徒が固まっているのを見た晃と美紀と結衣と伊織だった。
「ああ、今日はあれだったわね」

伊織が理解したように言った。

「あれって？」

晃は聞いた。

「新聞部によるこの学園の女子の付き合いたい人のランキングよ」

「はい！？」

晃はいまいち意味がわからなかった。

「つまり、女子の人気投票だね。まあ投票はしてないけど」

美紀がわかりやすく説明した。

「そうですか」

「あれ？アキ君は興味ないの？」

「ええ。まあ」

「あいからわずの鈍感ね晃君は」

伊織が苦笑した。

「でも、1位は誰でしょうか」

晃が別の興味で言った。

一様このような知識は持ったほうがいいと晃は思った。

「じゃあ、わたしが見てくるね。ついでに写メも撮ってくる」

そう言って美紀は男子のたまり場に入って行った。

う〜む。すごい根性だ美紀は。
美紀はすぐに出てきた。

「うん。うまく撮ってきたよ。はい」

美紀が携帯の画面を見せる。

「あ、結衣ちゃん。また1位ね」

伊織が言った。
ちなみに結衣は文字通り前回も1位だった。

「すごいですね。ほとんどが知り合いですね」

ちなみにランキングは1年ベスト10だ。
結衣以外にも知り合いがランクインしているがそこは作者の都合上、載せることはできません。

「じゃあ、2位の人は知らないのアッキー」
「ええ、まあ」
「藤森渚(ふじもりなぎさ)。一様この子も有名人よ」
「そうなんですか」

だが、晃たちは知らなかった。
こんな発表場所で話しているので晃に向かって嫉妬と怒りの男子の目線が向けられていたことを。
ちなみに2年のほうは静音が大差で1位になっていた。

「おーい。晃。昨日辞書を借りたから返すから一緒に来てくれ」

昼休み。透が晃に言ってきた。

「いいですよ」

晃は早くも了承した。

※

で、図書館。

透が辞書を返している間、晃はテキトーに本を見てた。

そのとき、またある少女とであった。

それでまた高いところに本をしまおうとしていた。

「僕やりますよ」

そう言って晃は少女の後ろから本を取って代わりにしまった。

「あ」

「また会いましたね」

少女はゆっくり首を縦に振った。

「あ、あの」

「なんですか？」

少女の始めて話たことを晃は無視せずに聞いた。

「ゆ、優輝晃さんですよね」

「ええ。そうですよ」

「わ、私、い、1年6組のふ、藤森渚です」

「はい。1年1組。優輝晃です。今後、お見知りおきを」

緊張しながらでも丁寧に自己紹介してきた渚に晃は丁寧に自己紹介した。

「き、昨日と今日、あ、ありがとうございます」

渚はお礼を言ってきた。

「いいですよこのぐらい。逆にお節介と思われてなくてよかったです」

「そ、そんなこ」

「おーい晃。そろそろ行くぞー」

渚は何か言ようとしたが透が話しかけてきて言葉を消された。

「ごめんなさいね。では僕は行きますね」

そう言って晃は透についていった。

(話せた!話せたよ私)

だが、渚はこれでも喜んでいた。

まったくかわいい子だった。

第５４話　図書館の少女（後書き）

後書きトークコーナ

透「て、わけでまた新しいヒロインが誕生したな」

美紀「そういえば、この小説のヒロインって何人いるの？」

透「そうだな。今回で合計１２人だ。作者曰くこれからも増えるらしい」

美紀「多いのになんでツンデレキャラがいないんだろう」

透「それも作者曰く、ツンデレキャラは良くわからないので書きにくいらしい」

美紀「それはそれは。作者が非常におとしやかなキャラが好きて言っているみたいなもんだよね。ヤンデレもいないし」

透「と、言うわけで、作者にツンデレキャラの書き方を教えてくれる人も募集しよう。、まあ、一様キャラ募集もしているわけだが」

美紀「どちらの募集もまってまーす」

第５５話　図書館の女神（前書き）

前回のあらすじ
文学系美少女登場。

晃「ちなみに後書きはその子の紹介です」

第５５話　図書館の女神

「なあ晃。この子どう思う？」
「はい？」

いきなりアイドル雑誌の１ページを見せながら質問してきた大吾に対して、晃は意味がわからない言い方をした。

「おまえ、アイドルの興味あるか？」
「ありません」

あっさり言った晃であった。

「でも、男性のアイドルなら曲ぐらいは聞いたことありますが、女性アイドルはまったくと言うほど興味ありません」

そのことが真実のように晃は細い眼で言った。

「アッキーはそんなのに本当に興味ないみたいだね」
「でもアキ君。まこちゃんてテレビっ子だよね」

美紀と結衣が話しに加わってきた。

「たしかに真はよくテレビは見ますが、僕は別につられてテレビを見ることはありませんね。時々クイズ番組を見るぐらいで」
「じゃあ、それ以外のとき、家では何してるんだ？」

大吾は再度聞いてきた。

「大抵は家事か自分の部屋でパソコンか、読書です」
「地味だな。主人公的に」
「うるさいです」

晃は痛いところを言われた。

「でもアッキー確かに部屋にたくさんの本があるね」

美紀が納得したように言った。

「そういえば読書と言えば！！」

大吾がいきなり大声で言ってきた。

「秋？」

結衣がまじめに言ってきた。

「ちっがーう！！読書と言えば図書館。図書館と言えば文学少女！！」
「それがどうかしたのですか？」

晃は呆れながらあいづちをした。

「この前、お前と図書館行ったことあるだろう。そのとき、あの学年2位の子に思いっきりかわいい目で見られてな、これはフラグが立ったと思ったわけよ」

このことを言っているのはおそらく渚のことだろう。
ちなみにこの前大吾とも図書館へ行ったのでついでだと思い、晃は

渚に会っていたのだ。

「でも、あの子うわさではなかなかしゃべらない子だと聞いたよ」

結衣が言った。

晃はなのになぜ自分だけまともに話しかけてきたのか、少し疑問に思っていた。

「まあ、いつかあの子も俺の虜にしてみせる！！」

「も、ではないような気がしますが」

「気じゃなくってそのままだから」

晃と結衣は大吾の言葉に突っ込んだ。

だが、噂すれば影というのか、いきなり教室のドアが開き、例の少女が顔を覗き込んできた。

「お、噂をすれば何とやら、あの子がいきなり俺を向かいに来てくれたぜ」

「影ですよ」

だが、もちろん彼女が来たのは大吾が目当てではない。目当てはもちろん。

「あの、優輝晃さんはいますか？」

渚がその言葉を言ったとたん、大吾は思いっきりヘッドスライリングを決めた。

「きゃあ！！」

「なにやっているのですか大吾は」

晃は2人に近づいた。

「あ、優輝さん」
「こんにちは藤森さん」

晃と渚はとりあえず挨拶を交わした。

「あの、この前言っていた本もって来ました」

そう言って渚は一冊の本を晃に差し出した。

「わざわざここまで来てくれて。ありがとうございます。また今度返しますね」

そう言って晃は本を受け取った。

「では、私はこれで、なにか読みたい本があったら言って下さいね」
「ええ」

そう言って渚は廊下へ戻った。
教室のドアが締め切ったとたん、晃は背中からものすごい冷機を感じた。

「晃、きさま〜」
「アキ君今のは一体何かな?」

大吾はゾンビのようになっていて、結衣は笑顔だが、額には怒りマークがついっていた。
これは完全に裏モードへの発動を我慢している。

女の子は笑顔のときが一番怖いとも言う。

「おまえ～いつあの子とあんなこと話す仲になっていたんだよ！！」

大吾は何ながら言ってきた。

「大吾と一緒に図書館へ行く前の日から話す仲になっていまして、そして大吾ときたときには本を貸してくれる約束をしていたのですよ」

晃はすべての事実を言った。

「と、いうことはこの前見ていたのは俺ではなく、お前か！！お前がフラグ立たせていたんだな！！」

大吾は号泣で言ってくる。

「話すか泣くかどっちかにしてください！！」

晃はそんなことよりもそのことにツッコみを入れた。

「うるさーい！！大体お前はフラグ立ちすぎなんじゃ！！いきなり美人幼馴染と一緒でしかもあんなかわいい妹がいて」

正確には義理の妹である。

「しかも、同じ日に転向してきた美女に元気な運動系美女に、女子しかいない生徒会にたった一人の男になり、生徒会長を中心に仲良くなり、みんなの心の癒しの生徒会長や貴重主といわれる僕っ子や心優しいお嬢様タイプや別クラスの美人委員長やこのクラスの委員

長まで幅広く、お前は美女と関わってきている中、お次は無口な図書委員&子供らしさの子までもがフラグを立たせやがって！！」

大吾は泣きながら伝えた。
多分漫画ならここら辺は読まなくっても結構ですのテロップが入るだろう。

「それで、結局何が言いたいのですか？」

晃は冷たい目線で言った。
もはやどうでもいいと思っている目だあれは。

「このハーレム野郎！！」

そう言って大吾は教室を出て行った。
ちなみに捨て台詞は「私となんかただのお遊びだったよね～！！」だ。
一体何がしたい。

「何ですかあの人は」

晃はそうつぶやいた。
いや、つぶやいてしまった。

「優輝く～ん」

なんか後ろからおっそろしい男子どもの声が聞こえた。
なにか危険を察した晃は教室を出て行った。

「逃げたぞ～」

「今日こそは捕まえてやる」
「いいか、縄は必ず持っていくことだ」

なぜ、普通の学生がそんなもの持っているのかはさておき、晃は完璧にピンチになった。

「1年1組、男子、総出撃～！！」

男子学級委員長が叫んだのと同時にクラスの男子も「おー」と拳を上げて叫んだ。
完璧に戦争だこれは。
いや、正確には晃の一人よがりとなるが。

晃は逃げた。
もう全力で。

（てか、僕は何もしていませんよね～）

だが、もう遅かった。
そんな装備で大丈夫か？

「こんなときにそんなこと言っている場合ではありません！！」

スンマセン。

第５５話　図書館の女神（後書き）

キャラ紹介

藤森渚（ふじもりなぎさ）
クラス学年：１年６組
年齢　１５歳　性別：女　第一人称「私」
身長：１４６　誕生日：３月２５日　胸ランクＡ
ジョブ：ちいさいがんばりや図書委員
髪：黒髪でショートカットで右側におおきい丸型の髪留めをしている
好きなもの：本、かわいいもの
嫌いなもの：お化け、ゴキブリ
記：口数が少ない図書委員の美少女。
基本誰とも話さないので友達がいない。だが、男子には非常な人気を持っているがまったく気づかない。
だが、恋愛はそんなに鈍感ではないため、自分の初恋をすぐに認めた。
一目惚れで晃に好意を持っている。
無口だが、非常に頑張り屋で何事にもチャレンジ精神を持っている。
運動はニガテでだが、本が好きなため、頭は晃の次に良い。
かわいいのもが好きで目がない。その状態は本当の小学生そのものだ。

第５６話　優輝晃を捕まえろ！！（前書き）

前回のあらすじ

晃逃亡！！

晃「てか、僕何もしてませんよね！！」

第５６話　優輝晃を捕まえろ！！

「われらの敵、優輝晃を捕まえろ！！」
『おー！！』

ただいま1年1組男子は団結中。ある一人の主人公を抜いて。
クラスの男子共が次々と教室から出て行く。

「アッキー。これは大変だね」

美紀が言った。
そのとき、教室に誰か入ってきた。

「ちょっと、なにこれは」

藤清美先生がきて驚きながら聞いてきた。

「実は、かくかくしかじかで」

小説は便利だ。

「なるほど、つまり優輝君はフラグ立たせ名人というわけね」
「なんか言い方のニュアンスがちょっと違いますが」

結衣は清美の言葉に疑問を感じた。

「じゃあ、早速だから、ここでもなんか面白いことしょうかな」

清美がにやりと笑った。

「じゃあ、これならどう?優輝君を無事に男子どもの『魔の手(デーモンハンド)』から救い出した人には今度優輝君を独占することにするのは!!」

清美はものすごく大きな声で言い放った。

「さあ、さっさとしないと優輝君つかまっちゃうよ!!」

そのとき、舞と泉それに真と花火も来た。

「それって本当ですか!?」

「あきにいのピンチは私が救う!!」

「あきにいさんを独占権。忘れないでくださいよ!!」

「わが相棒を救い出せるのはあたしだけだよ!!」

そう言って3人は教室を出て行った。

てか、何しに来た!!

恋する乙女は怖い。いろんな意味で。

てか、このことは晃は知らない。

「私も行ってくる!!」

「わ、私もだ!!」

「私も!!」

「面白そうだからわたしも行って来る!!」

4人も教室を出て行った。

清美は完全に笑っていた。

あと、書いてはいないが、静音、泰子、ささらも出陣したそうだ。

晃捕獲戦争はさらなる火がついた。

完全に清美のせいだが。

※

晃は隠れつつ、逃げていた。

（ぼくがなにしたっていうのですか！！）

晃はさっきからそのことばかりを考えていた。
まあ、簡単に言うと、晃に被害者であるが、彼に悪いところを言えば鈍感なところだろう。

（昼休みが終わるまで逃げ続けるしかなさそうですね」

ちなみに晃はただいま、図書館にいる。
本棚の目立たない隅っこで隠れているのだ。
そのとき、誰かが晃に話しかけてきた。

「ゆ、優輝さん？」

そっちの方向を見た晃。そこには渚がいた。

「あ、藤森さん」
「ど、どうかしたのですか？」

渚は驚きながら聞いてきた。
あいからわず、小学生と思える背丈だ。

「それも、いきなりクラスの男子に殺されかけましたて、理由はわからないですがそのまま逃げてきました」

「そ、そうですか。わかりました。わ、私が優輝さんをかくまいます」

渚は小さな手をギュッと握った。

「いいのですか？」

「そ、その代わりといっては何ですが」

「はい」

渚はもじもじしながら言った。

やっぱり背のせいで小学生しか見えない。制服着ていても。

「わ、私の話し相手してくれませんか？」

「いいですよ」

晃は即答した。

実際、かくまってくれるならそれだけの条件なら万々歳である。

「あ、ありがとうございます」

「いいえ。むしろお礼を言うのは僕のほうだと思いますが」

だが、これで安全地帯は整った。

※

「くっそ！！ここにもいないぞ！！」

「昼休みだから学園内に必ずいるぞ！！探せ！！」

男子は共同で晃を探していた。

それと反面。女子のほうはみんな個人で晃を探していた。

「あきにいさんどこですか～？」
「あきに～い！！」
「アキく～ん。どこ～？」

みんなそれぞれあちこち探し回っていたが、誰も図書館へは行こうとはしなかった。

「アキの相棒なら見つけられる。かんばれあたし！！」
「晃君。一体どこかな～」

人の欲望のために大捜索物となっている晃って一体。

※

あれから結構時間が経った。
晃と渚は誰もいない図書館で話していた。
話の内容は渚の要望により、科学都市の話だ。

「やっぱり。すごいのですね。科学都市って」

渚が感心したように言った。
時間はもうすぐ休み時間の終わりの5分前になる。

「そうですね。僕も最初着たときはびっくりしましたよ」

晃も笑いながら話していた。
そのときだった。
図書館のドアが力強く叩かれた。

「ここか!?優輝晃!!」

どうやら男子生徒がこっちに来たらしい。

「（やばいですね。どこか隠れましょうか?）」

「（だったらあのカウンターの中とかはどうですか?）」

「（わかりました!!）」

こうして2人はカウンターの裏で見れば一見何も見えないところに隠れた。

だが、そのときあることを晃は思った。

「（あの〜藤森さん）」

「（ひゃ、ひゃい）」

いきなり話しかけられたので小さな声で驚いていた。

「（思ったのですが、藤森さんは別に隠れなくとも良かったのではなかったのですか?）」

確かにそうだ。

だが、もう遅い。

いまでてもただ怪しまれだけだ。

ちなみに今の状態はものすごく体と体が密着している状態でいつでもキスできる状態である。

もちろん、相手のによいなどもわかってしまう。

そのことを理解してしまった渚は自分でパニックになり、顔を赤くしていた。

晃はもちろん。何も気にしてはいなかった。

ちなみに渚の頭はただいま真っ白。

緊張でしか言葉に表せないほどだ。

結果。

あの男子生徒はあきらめて帰っていった。

その同時といえるほどチャイムがなった。

晃たちもカウンターから出てくる。

「危ないところでしたね。藤森さん？」

晃はいきなり疑問形になっていた。

それもそのはず。渚はものすごくわかりやすいほど顔を赤くしていた。

そのときだった。

どこからわからないが清美がいきなり現れてきた。

「おめでとー！！藤森渚さん」

「わ！！先生どこから一体？」

「私に見つけられないものなどないのだよ優輝君」

「あなたは忍者ですか」

「それよりも藤森さん。はいこれ」

清美は渚に2枚のチケットらしきものを渡した。

「あ、あのこれは？」

「映画のチケット。これで優輝君と映画今度の日曜日にでも見にいきなよ」

そう言って清美は図書館から出て行った。

「い、いいですか？優輝さん？」

「ん？僕は別のに予定はありません」

あっさりＯＫした晃であった。

第５６話　優輝晃を捕まえろ！！（後書き）

後書きトークコーナ

美紀「そういえば、なんでこんなことしようと思ったの？」

清美「ふふふ。聞きたい？」

美紀「聞きたい！！聞きたい！！」

清美「・・・・・・あなたには人の悲しさを知っているかしら」

美紀「まさそこからなの！？」

清美「まだ聞く？」

美紀「だめな気がしてきた」（怖くなってきた）

第57話　渚と映画館に行こう（前書き）

前回のあらすじ

晃、逃げ延びの勝ち！！

結衣「まさか、図書館とは誤算だったわ」

花火「次はきっと！！」

第57話　渚と映画館に行こう

で、日にちは過ぎて、日曜日。
晃は待ち合わせ場所に向かっていた。
待ち合わせの時間まであとあと10分ある。
待たせないように、ちょっと早く来たのだ。
だが、待ち合わせの場所に着いたのはいいのだが、そこにはもうすでに渚がいた。

「ふ、藤森さん？」
「あ、ゆ、優輝さん！！」

渚はものすごく驚いていた。
実はすでに1時間前にいた渚であった。

「すみません。待たせてしまって」

晃の格好はいつもの黒のパーカとジーパンであった。

「い、いいえ。そ、そんなことありません」

渚はあわてながら手を振った。
服装は白のパーカにロングスカートであった。

（あ、優輝さんもパーカ。これってペアルック？かな）

渚は緊張しながらそう思っていた。
だが、渚の背で私服なのでますます小学生にしか見えない。
もちろん、晃は服装のことは何一つしか思っていなかった。

ただ、かわいいとだけ。

「では、少し早いですが、行きましょうか」

晃は渚の手をつないだ。

「え！？」

「人が多いですのではぐれないように手をつないでいきましょうか」

「は、はい」

渚は力強く晃の手を握った。

だが、力は弱く、晃はなんとも思っていなかった。

もちろん言ったことはすべて本心だ。

周りからは兄妹に見えるのか、それとも本当に年の差カップルに見えるのかはわからないがうらやましそうに男性は見ていた。

ちなみにこの2人は同年齢だ。

今回の目的は映画の鑑賞だ。

これは前回の話で清美にもらったものである。

理由は本当は夫と一緒に行くつもりだったのだが、いきなりの出張であきらめて、悲しみと腹いせに晃たちを利用した清美だったそうだ。

もちろん。この後、晃のごうも……聞かれたので話したそうだ。

※

「で、何の映画見ますか？僕は何でもいいですよ」

映画館に着いた私たちはどの映画を見るか相談していた。

「え～とそうですね」

私はお言葉に甘えて選ぶことにした。
だが、いまは本気で悩んでいた。
本当はこのアニメ映画を見たいのだが、たださえ背のせいで子供みたいな扱いされているのでこれ以上はやめてほしい。
なら、ここは私がもう子供ではないことを伝えるしかない。
だけど、私はどれを見れば大人、いや、同年齢に見えるのか悩んでいた。

いろいろあるがどれがいいのかな～。
早く決めないと映画が始まる時間になってしまう。

「じゃ、じゃあこれで」

私は無意識のまま指を刺した。

「はあ、デットアンドデットですか。それ最近の一番怖いといわれる映画ですね」
「へ！？」

優輝君の一言で私は自分が指差したものを見た。
見事にそのホラー映画を指差していた。

「すごいですね。藤森さん。そんなの平気なのですか」
「えっと、あの～は、はい」

わ～私のばか～！！

そのまま映画のチケットを使い私たちは上映場所に入っていった。

「ですが、以外ですね。藤森さんはこんなのニガテだと思っていましたに」

優輝さんは笑いながら言った。
どうやら見直してくれたらしい。
それは私もうれしいのだが。

（むりです！！やっぱりこれは！！）

こうして映画が始まった。

※

近くの喫茶店。
渚はものすごくぐったりしていた。

「ニガテだったら言ってくれれば変えましたのに」
「す、すみましせん」

渚はジュースを飲みながら落ち着こうとしている。
ただ、渚は上映中軽く３０回は悲鳴を上げていた。
さすがの晃も恥ずかしいと思った。

「では、これからどうします。早速なのでどこか行きましょうか」

そう言って晃は立ち上がった。

※

「あ～楽しかったです」

もう夕方ごろ、渚のご機嫌はよくなっていた。
その笑顔は小学生にも劣らないものだった。いろんな意味で。

「そういえば、藤森さんの家はどこにあるのですか？よかったら送りますよ」
「うん。私は電車で学校に通っているので」
「そうですか。では駅までご一緒させてもらいます」

晃は微笑んできた。
渚はそれを見たとたん、顔が赤いのを隠すため晃を目線から外した。

「優輝君。お願いがあるのですけど」
「ん？」
「あのですね……」

―ドーン！！

そのときだった。
空から大きな音で地面に落ちてきた。

「見つけたぞ～優輝晃！！」

ものすごいでかい機械から変なゴーグルをつけているおじさんが現れた。

「バカ博士！！何しに来たのですか？」
「お前、わしの本名は馬鹿阿保（うましかあお）という名だ！！」

そういった後、でっかい機械から人間型のロボットを出してきた。

「今日こそお前をわれらの仲間にしたる！！覚悟せい！！」

そう言って阿保はロボットに指示を出した。

ロボットはそのまま晃に突っ込んできた。

「今こそ『団殺者（ディスター）』『自由者（フリーダム）』、優輝晃を貫い受ける！！」

「ディ、団殺者（ディスター）！？」

渚は驚きながらつぶやいた。

「何回やったら気が済むのですかあなたは」

晃は両手を右腰に当てた。

「呼び出し（コール）！！」

一、一瞬だった。

一瞬で阿保のロボットは真っ二つにされた。

「あきらめてください」

晃の手には右手には鞘、左手には真剣が合った。

この刀は晃がここに帰って来る前に持っていた刀だ。

ロボットは無残にもスクラップにされた。

「クソッ！！仕方がないまた挑戦しよう！！」

そう言って阿保はまた空へ行った。

「頼むからもう来ないでくださいバカ博士！！」

晃がそう言ったら空から「馬鹿じゃ！！」という声が聞こえた。

「ゆ、優輝さん」

「すみません。藤森さん。事情は今から話します」

※

晃はすべてのことを渚に言った。

「そうでしたか」

「ですのでこのことは秘密に」

「はい！でも条件が一つあります」

渚は子供のようににかっと笑った。

「こ、これからわ、私のことをな、名前で呼んでください。渚と」

渚は顔を赤くしていった。

「え！？それでいいのですか？」

晃はあっさり認めた。

「こ、これからは私も晃さんと呼びますね」

「はい。これからもよろしくお願いいたします。渚ちゃん」

楽しい日曜日は渚にとってそして晃にとっても充実した日曜日だっ

た。

第57話　渚と映画館に行こう（後書き）

後書きトークコーナ

伊織「思ったのだけど」

渚「はい」

伊織「晃君。最後、ちゃん付けで呼んでたよね」

渚「はい。まさか子ども扱いでそうなったのでしょうか」

伊織「多分本能的にそうなっちゃたんでしょう。私だってそうなるもの」

渚「なんか理由になっていない気がしますが」

第５８話　いつか２人で…（前書き）

前回のあらすじ

へんなおじさんでた！！

晃「ちなみにあの人はバカ、アホと覚えるといいですよ」

渚「晃さん。もしかしてあの人のことニガテ？」

第５８話　いつか２人で…

「あ～次の授業めんどくさいよね」

大吾がいきなり晃に言ってきた。

「知りませんよ。そんなこと」

「だめだぞ。そんなことでは学生として終わりだぞ！！」

美紀が言ってきた。

「て、美紀もさっきの授業寝ていたわよね」

結衣が指摘する。

美紀はわかりやすく「ギック！！」といった。本当にわかりやすい。

「あ、アッキーもあるよね。授業中に寝るときだって」

「美紀、逃げたわね」

「たしかに寝たいときはありましたが、あんなに熟睡はないですよ」

晃がさっきの誰かさん。

てか、さっき美紀を思い出しながら言った。

「だから、言わないで！！」

そのときだった。

教室のドアが開いた。

「おお！！そこにいるのは図書館の天使！！」

大吾が叫んだ。
もちろんその天使は渚のことだった。

「あ、晃さん。いました」
「あ、ちょうど良かったです。渚ちゃん。このまえ借りていた本返しますよ」
「え、あ、は、はい。私は新しい本を持ってきました」

渚は持っていた本を晃に見せた。

「いつもスミマセン。てか、図書館にいれば僕がいきますのに、僕がそっちの教室に来たりとかも」
「いいのです。私が自主的に来ましたので」

渚はかわいい笑顔で言った。
周りの男子がうらやましそうに見ている。

「そうですか」

晃は渚の頭をなでる。
渚は気持ち良くしている。
そのあと、本を交換した。

「でわ、また今度です。晃さん」
「ええ。またよろしくです渚ちゃん」

渚は教室をスキップで出て行った。
そのあと、晃は背中になにか違和感を感じた。

――あれ？デジャヴ？

晃は後ろを見た。

そこにはものすごく不敵な笑みを浮かべている男子軍団がいた。

もちろん大吾もその中にいる。

「ちょっとみなさん。これ前にも見た光景ですよね！？」

だが、返事はない。ただの屍のようだ。いや、ただのゾンビのようだ。

「アキ君。いつのまに、あの子と名前で呼ぶ中になったの？しかもちゃん付けって」

横にも違和感を感じた晃はそっちも見た。見てしまった。

「ゆ、結衣さん。あと、伊織さんもなんか黒いオーラ出しているのですが」

鈍感なので晃はこれが嫉妬だということには気づいてはいない。

「とりあえず、な、何のことですか？」

……。

「有無言わさず死刑！！」

そのとき、校内放送が流れた。

『優輝、晃君。優輝晃君。いまから生徒会室に来てください。繰り

返します』

まさに天の声と言えるべき声が晃の耳に聞こえた。

「そういうことなので、僕は生徒会室に言ってきますね」

そう言って晃は教室を出た。

※

生徒会室。

「すみせんね。いきなり呼び出したりしてしまって」

「いいえ。むしろ助かりました。本当に」

晃を呼び出した天使といえるべき生徒会長の静音が晃にお茶を入れてくれた。

「それで、話とは何ですか？」

「ええ。実はですね。最近また風紀委員の活動が元に戻って、いつもよりも過激になってしまってそれで学園内が少し壊れてしまったのですよ」

静音は説明してくれた。

「それって、風紀委員がやるべきことなのでは。壊した張本人ですので」

「そうですが、風紀委員は風紀を整えるためにそんなことをやる暇はないと」

「それで、生徒会が変わりにやること。無茶いいますね。女の子に

も」

そう。ただいま生徒会は女子のみである。
ちなみに晃は会長補佐なので生徒会の一員ではない。簡単に言えば、ボランティアみたいなものだ。

「わかりました。協力しますよ」
「そうですか。では、今日の放課後、体育着でまたここに集まってくださいね」
「はい」

静音は笑顔で晃に言ってくれた。

※

教室に戻ろうとしている途中、４組の２人に出会った。

「あきにい」
「あきにいさん」

そう、真と花火だった。
ちなみに１泊２日の合宿は無事終了した。

「聞いたよ。あきにい。日曜日、女の子と出かけたって」

真が言った。
今思えば、真はなんか登場が久しぶりな感じがした。
そしていま真が言っていることはもちろん。

「ああ、渚ちゃんのことですか。先生から映画のチケットをもらっ

たので一緒に見に来たのですよ」

「そ、それで、他に何を?」

花火が思いっきり聞いてきた。

「他はショピングぐらいですかね。もともと映画の鑑賞が目的だったので」

「そ、そうなのですか」

「あきにいが鈍感でよかったと今思ったよ」

花火と真は安心の息を吐いた。

「じゃあ、今度は私と出かけましょうか。2人っきりで」

花火が腕を組んできた。

もちろん。胸は当たっている。

「ええ。別にいいですが」

「だめ!!あきにいは今度私と一緒に出かけるの。家族だし」

真も腕を組んできた。

「む~だったらなおさら私に譲ってよ」

「僕は物ですか」

花火の言葉に晃は呆れながら言った。

「だめ!!私と行くの!!」

「私と!!」

「だったら3人で行きませんか？」
「「だめ！！」」
「すみません」

2人は息が合った突っ込みで晃を黙らせた。
本当に鈍感な兄でよかったのか真よ。

第５８話　いつか２人で…（後書き）

後書きトークコーナ

晃「今回の話は前のと似ている感じがしますが」

美紀「まあ、作者もそれが狙いだしいよ」

晃「僕の命、助かりますかね？」

美紀「ウオ！！ネガティブだねアッキー」

晃「今度はそうなんないようにしたいですね」

第５９話　放課後の修理（前書き）

前回のあらすじ

結局、合宿のシーンなし！！

真「なんか複雑な気持ち」

花火「でも、出番が減ってなくてよかった」

第５９話　放課後の修理

と、言うわけで放課後。
晃はジャージ姿で生徒会室に向かった。

「うわあ」

生徒会室に来たのはいいが、ジャージ姿の男子生徒が生徒会室の前へ来ていた。
そして、ドアを開ける。

「静音さんいますか？」
「きゃあ！！」

だが、そこには着替えている静音がいた。

「ちょ、あんた何しているの！！」

もうジャージに着替えている鈴が前を隠した。
ちなみに静音は。

「あ、アキ君かじゃあいいや」

なんてこといっている。

「いや、ただ普通に入っただけですが」

晃は何事もなかったように言った。

「いいから出て行って」
「いいですが。別に着替えなんて気にしませんよ」
晃は平然に答える。
眼でそのことが本当のことだと鈴もわかっていた。
「気にしないなら私は別にいいですよ」
静音が下はズボンをはいていたが、上はブラのままだった。
「あんたもなんて格好しているの！！」
鈴は静音に指摘した。
「静音さん。なんかお茶でも入れましょうか？」
「じゃあ、少しだけ」
「こら2人とも！！何へ以前と会話しているの！？」
しかも晃のほうは普通にお茶を入れだした。
そのとき、静音は着替えを再開した。
「晃。あんた女性の着替えというか体に興味ないの？」
「ん？どういう意味でしょうか？」
「女の体見てなんか思わないの！？」
鈴は強く聞いてきた。
「まあ、実際、下着なら科学都市でいた幼馴染のをみてなれていますし、しかも水着と露出変わらないのですから」

晃は鈴にできたお茶を渡しながら言った。

「あんた。ほんと何者？」

「あ、それよりも静音さん」

「それよりもって、本当に興味ないんかい」

鈴が小声で突っ込んだ。

静音は着替え終わったので晃の声に応じた。

「何でしょうか」

「あの廊下にいる男子生徒は何ですか？」

「ああ、あいつらね」

そう言って鈴は教室のドアを開けた。

そのとき同時に男子生徒の声が聞こえた。

「ひ、柊さん。お、お手伝いとは何ですか？」

「俺たち何でもやりますよ！！」

「もちろん靴をなめるのもかまいはしません！！」

「いや、かまってください！！」

晃はついつい突っ込んでしまった。

「静音さん。これは一体」

晃は静音に近づきながら聞いた。

「はい、アキ君と同じ、今回の活動でお願いした人たちです」

「まあ、私が全員呼んだわけだよだがな」

鈴が言った。

「なんだか危険な匂いがしますが……」

晃は呆れながら言った。

「うお～俺は今日こそ柊会長とムハムハな時間作るぞ～」

「僕はまず、あの人を誘ったのは失敗だったような気がしますが鈴さん」

晃は大吾を指刺しながら言った。

「まあ、晃、お前ばっかりいいことさせるかよ」

透が近づきながら言った。

「でも、ここに来ている時点で完全に説得力がありませんが」

「やっぱりこいつらは失敗だったか？いや、人数はこれで十分だ」

そう言って鈴は男子生徒の戦闘へと立った。

「おい！！今回のお前らの指導するのはこの私だ！！黙ってついて来いよ！！」

軍人と言っても違和感がないほど、鈴の言葉は重かった。

だが、男子生徒はそれを感じていないのか、「ふざけんな～」「静音ちゃんといさせろ～」とか言っている。

「黙れ！！」

『イエス！！サー！！』

「私は女だ！！」

そんな中、ある男、て言うか大吾が手を上げた。

「じゃあ、晃はどうなるんだ！！」

「アキ君は私のお気に入りなので私の補佐をお願いします」

静音が微笑みながら言った。

「て、ことで静音は晃と2人で活動させる」

鈴が捕捉した。

この後、男子はまた文句を言うが、さっきと同じパターンなので割愛させる。

※

そんなことであの騒動は鈴の一言で終わり、ただいま晃は静音と2人で活動していた。

「まずはここから直しましょうか」

静音の担当場所は体育館の通路部分である。

特に外からの壊れているのが多いので中庭から出ている。

「じゃあアキ君はそこで次の準備をしてくださいね」

静音は板とトンカチを持ち、釘うちの体制である。

「あの～静音さん。大丈夫ですか？」

「はい！！やったことありませんが大丈夫です！！」
「いや、なんかものすごく心配なのでここは僕に任せてください！！」

そう言って晃は静音が持っているトンカチを持った。

「あ、アキ君こそ大丈夫なのですか？」
「僕はこうゆうの得意ですから大丈夫です。まったく問題はありません」

そう言って晃は釘うちを始めた。
静音は感心しながら見ていた。

※

「大体終わりましたね」
「はい。そうですね……痛ッ！！」
「だ、大丈夫ですか？」

晃がいきなり痛み出したので静音がそばに行く。
指からは血が出ていた。

「これぐらい大丈夫ですよって、何してるんですか？」

静音はいきなりその怪我してる晃の指を口でくわえた。

「治療しているのです」
「まあ、確かに怪我したら口にくわえますが、他人のは聞いたことありませんね」
「そ、そうですか」

「でも、ありがとうございます」
晃は微笑みながらお礼を言った。
「はい、どういたしまして」
静音も微笑み返した。
「じゃあ、絆創膏、貼りますね」
そう言って静音は晃の指に絆創膏を張った。
だが、一向に手を話そうとしなかった。
「暖かいです。アキ君の手」
「そ、そうですか？」
「ええとても」
こうして今日の放課後が終わった。

第５９話　放課後の修理（後書き）

後書きトークコーナ

鈴「こらー！！静音。私がいない間、何している」

静音「治療ですよ。怪我させてしまったので」

鈴「それはそうだが」

晃「なんか、変でしたか？」

鈴「お前は鈍感になったら意外とアホだな」

晃「？？」

第６０話　や☆き☆い☆も（前書き）

前回のあらすじ

会長、なぜに生徒会室で着替えるの？

静音「それはただ単に安全だからですよ」

鈴「お前はどれだけあいつを信頼しているんだか」

第６０話　や☆き☆い☆も

昼休み、泉が教室に入ってきた。

「アキいる～」
「なんですか泉」

晃は返事をした。

「今日芋持ってきたから校庭で焼き芋したいんだけど」
「それと僕は何の関係が？」
「アキは生徒会でしょ」

泉は晃を指差した。

「正確には補佐ですが」
「それでね、会長にやってもいいか聞きに言ってほしいの」
「はあ」

ちなみに今日は紅葉がきれいでもう秋だと思わせる。
落ち葉も多くなっているので最高の焼き芋日よりだろう。

「わかりました。聞いてみます」

※

昼休み。
静音に使える許可が下りたのでみんなで中庭に出た。

「い～も、い～も♪」

泉が楽しそうに歌っている。

「い～も、い～も。早く焼けないかな～♪」

美紀も一緒に歌っている。

「楽しそうですね。２人とも」

舞が晃のそばへ寄り添ってきた。

「そうですね。そのテンションが悪い方向へ行かなければいいのですが」

舞いも晃に同情して「あははは」と愛想笑いをした。

ちなみにただいま芋を焼いている最中。

落ち葉は泉、美紀、真が光のごとくの速さで集めてくれた。

真はただいまいまにもよだれが出ような顔になっていた。

食事になったらもうただの食いしん坊である。

「まこちゃん。いいぞその顔！！」

ちなみに今宵はそんな顔をしている真の顔を模写していた。

真はまったく気にしていないのか、それともただ見えていないのかはわからない。

まあ、晃は後者のほうだと思っている。

泉と美紀はもう完全に犬のまてっ状態である。

なんか尻尾まで見えます。

「もう我慢できないアキいい？」
「だめです！！」
「わたしはもう行くぞ！！」
「こら！！」

晃は2人の頭をしっかりつかんでこれ以上進ませないようにしている。

「「きゃんきゃんきゃん！！」」
「本当に犬かあなたたちは！！」

だが2人はまだあきらめていない。

「舞！！この2人の動きを止めてください！！」
「は、はい！！」

この2人だったらいまこの火に手を入れることもないわけではない！！

「結衣！！まこちゃんを抑えてくれ！！」
「う、うん」

あそこにも犬がもう一匹。
結衣はしっかり真を捕まえていた。
今宵はいまだに模写を続けている。

「てか、それやめればいいのじゃありませんか！？」
「なんか面白いからとめられない」

今宵は模写を続けている。

「アキ君。そろそろ」

結衣が晃を呼んだ。

「そうですね」

そう言って晃は取っ手を持って、火だるまの中へ突っ込んだ。
その中にある芋を取り出した。
数は全員分ある。

「ちょうどいいぐらいですね」

晃は出来上がりを見て言った。

「「「じゃあいただきます！！」」」

食いしん坊3美女が芋に食いついた。
火から取り出してもまだ熱い状態なのに平然と触っている。

「すごいですね。人間って」
「アキ君。私も同感」
「あれも描こう」
「今宵。いい加減にしてください」

※

芋は食べごろになり、みんなで食べていた。

「あきにいもらい！！」

真が晃が食べていた芋をかじった。

「あ！！真のがまだありますよね！！」

「あきにいと間接キスしちゃった」

完全に暴走モードになっている。

実は真は食事中はものすごく性格が変わる。

いつもはこんなことはしない。

「だけど、こんな風になるのは初めてですね」

「みんなで食べるとこうなるのよいつも」

結衣が晃の隣で言った。

「そうなんですか」

晃はそういいながらさっき食べられた芋を食べた。

「いや～おいしかった」

食べ終わった泉が言った。

そのときだった。

「あんたたちなにやっているの？」

風紀委員の鬲木が叫んできた。

「あ、鬲木さん。お久しぶりです」

「そんなことはどうでもいい。お前えらそこで何をしていると言ったのだ」
「焼き芋だけど何か？」
美紀が平然と答える。
「ここでは焼き芋はしてはならん！！」
「静音さんにちゃんと許可をもらいましたよ」
「だれだ！！静音って！！」
みんな一斉に転んだ。
まあ、当たり前だが。
「生徒会長ですよ生徒会長」
「ああ、あの胸爆弾か」
なんちゅうあだ名をつけてるんだ。晃は言いそうになった。
「て、ことでそういうわけですから」
「でも、風紀委員に関係ない！！」
鬣木の言葉に晃は反応した。
「関係ありますよ。同じ学園ですし、生徒会のほうが上の地位に立っていますから」
「あんなただの非力の女どもに上の地位なんていらん！！」
晃はさすがにその言葉には怒りだした。
「そんなことは一番どうでもいいのですよ。どこでもかしこでも暴

力で解決している風紀委員よりは最高ですよ！！何十倍も！！」
「……ッグ！！」
「大体、この前だって風紀委員が壊した校舎を生徒会が直したってことお忘れではないでしょうか」
晃の正論に鷺木は言葉が出なかった。
「覚えてらっしゃいよ！！」
そう言って鷺木はこの場所から離れた。

第６０話　や☆き☆い☆も（後書き）

後書きトークコーナ

真「……」

泉「まこちゃんどうしたの？」

晃「なんかあんなところ見られて恥ずかしかったらしいですよ」

泉「何だ、そんなことか」

晃「泉も完全に犬かしていましたしね」

泉「そうそう。気にしていたらこの先生きてられないよ」

真「そういう問題じゃない！！バカあきにい」

晃「それは泉と美紀が特別なだけですし、でもなぜにいま僕がおこられたのですか！？」

第６１話　シマシマスポーツ（前書き）

前回のあらすじ

完全犬化

泉「四字熟語みたい」

晃「いや、違いますから！！」

第61話　シマシマスポーツ

晃は帰り道、買い物に行こうとしていた。
そのときだった。
ある店が目に留まった。

「シマシマスポーツ？スポーツ用品店ですかね」

晃はボソッと言った。

（でもなぜだろう。なんか知り合いの店の予感がします）

晃がそう思ったときだった。

「あら、晃ちゃんじゃない」

一人のおばさんが話しかけてきた。
晃はやっぱりと思った顔で返事をした。

「お久しぶりです。縞島さん」

※

縞島敦子（しまじまあつこ）。
この店の奥さんだ。
だが、晃と大きくかかわりを持つ人はこの人の夫だ。

「本当に久しぶりだね。どう？ここの暮らしは慣れた？」
「まあ、もともと住んでいた場所ですけど」

「ああ、そういえば言っていたわね。いま夫を呼ぶからそこでお茶でも飲んでいてね」

晃は店の奥の部屋につれてこられた。

「おお！！久しぶりだな晃」

「はい。お久しぶりです闘士さん」

この人は縞島闘士（しまじまとうし）。

敦子さんの夫だ。

付け加えて説明するなら、この人たちは科学都市での知り合いだ。

「しかし、どうしたんですか？連絡もなしにいきなりこっちに来て店を立ち上げて」

晃は詳しい説明を望んだ。

「ああ、俺たちはここではお前のサポーターとしてきたんだ」

「サポーターですか？」

晃は聞き返した。

「ええ。それでね。ここは東皆丘での【団殺者（ディスター）】の拠点と使ってほしいの」

「簡単に説明すれば、支部みたいなものだ。店はそのカモフラージュだ。商売したいとも思っているがな」

がははははと闘士は笑った。

「ありがとうございます。わざわざそんなことまでしてくれて」

晃は頭を下げた。

「まあな、まあ実際、この要望はうちの愛娘がお願いしたことでだな」

「愛娘って吹雪ちゃんのことですか？」

そう晃が言ったとき、玄関から声が聞こえた。

「あらあら、噂すれば影ね」

敦子がくすくすわらいながら言った。

「お母さん！！お客さん来ているの？」

ドアを開けてきたのはランドセルを背負っている小さな女の子だ。

「……て、お兄ちゃん！？」

「お久しぶりです吹雪ちゃん」

縞島吹雪（しまじまふぶき）この店の１人娘である。

ただいま小学５年生である。身長は渚と変らない。

吹雪は晃を見たとたん、猫のように抱きついてきた。

「わーい！！お兄ちゃんだ。お兄ちゃんのにおいがする」

吹雪は抱きつきながら言った。

「あの～せっかく会ったのですが、そろそろ僕も行かなければなりません」

「どうして？」
「買い物がありますし、今日のご飯作らなければなりません」
「それだったら家で食べればいいよ。ねえお母さん」
吹雪は敦子に言った。
「ええ。もちろんいいわよ」
「ありがとうございます。でも、真がいますので」
晃は申し訳ないように言った。
「ああ、妹さんがいるんだっけ？」
「ええ。真が文句を言われないうちに早く作らなければなりませんので」
「そう、だったらしょうがないわね」
晃は立ち上がった。
その姿を吹雪は不機嫌そうに見ている。
「ではまた、暇があるうちに来ますね」
「おうよ！、こっちはいつでもいいからな」
「はい。ではこれで」
そう言って晃は歩き出した。
「あ、そういえば、彼のサポーターの話してなかったわね」
敦子が思い出したように言った。
「そういえば、あいつの独断のサポーターもいるときいたな」

「ええ。しかも2人とも同年齢の女の子なのよね」
「がははは。あの歳でなんつーうらやましいやつだ」
「お父さん！！」

吹雪の叫びで闘士は笑うのをやめる。

「お母さん。お兄ちゃんて彼女いるって言ってた？」
「いいえ聞いてないわよ」
「むう、だめだよお兄ちゃん。私がお兄ちゃんのお嫁さんになるんだからね」

吹雪がほっぺをふくらましながら言った。

※

次の日。
晃は今日の朝ごはんの準備をしていた。

「おはようあきにい」
「おはよう真。ご飯もう少しでできますよ」

珍しく、真がこの時間に起きてくれた。

「うん。ん？」

真が何かを見つけたらしき声を出した。

「どうかしましたか……うわぁ」

晃もいやな声を上げた。

そこには見知らぬ。いや、知っているもの、ダンボールがあった。
そこからは大きく顔が見えるほどの穴が開いてあった。

「名にやっているのですか吹雪ちゃん」

晃は庭のドアを開けて突っ込んだ。

「な、何のことでしょう」
「もう遅いですよ。その大穴が開いている時点で。顔見えますし」

晃は呆れながら言った。

「む～お兄ちゃんのバカ」
「なんか言いましたか？」
「それよりもあきにい。鍋は大丈夫？」

真が晃に警告した。

「へ……あ！！」

晃はあわてて鍋の火を消そうとしたが、もう遅かった。
おかげで朝ごはんは遅れて、弁当は無しになった。

「お兄ちゃんのドジ」
「で、君は一体なにをしているのですか？」

晃はあわてながらも的確に聞いた。

「え・・・っと何だっけ？」

晃は長いため息をついた。

第61話　シマシマスポーツ（後書き）

後書きトークコーナ

伊織「ここで本当の小学生キャラ出たね」

渚「なんで私を見るのですか？」

伊織「いや、なんていうか、かわいそうだなと思って」

渚「なんかバカにされている気がします」

晃「でも作者曰く、渚はメインヒロインですが吹雪ちゃんは違いますよ」

渚「ホッ」

伊織「これは一体何のため息？」

第62話　食堂

「大吾。一緒に購買部に行きませんか？」

昼休み。珍しく晃は大吾に話しかけてきた。

「お、今日は弁当忘れたのか？」

「はい。朝からいろいろありまして」

朝、吹雪が優輝家に入ってきて、鍋は焦がしてしまったりしていたので弁当を作る時間がなかったのだ。

「ついでなので購買部のほうに行こうかと」

「ああ。だったら食堂へ行こうぜ。そっちのほうがいいだろう」

「あ、だったらお願いします」

晃は喜んでお願いした。

「じゃあ、俺の分、お前が払えよ」

「結衣、一緒に食堂行きませんか？」

晃は無視して行いを誘った。

もちろん結衣は喜びながらこっちに向かってきた。

ちなみに美紀も行きたいと言うことで一緒に行くことになった。

教室を出ると、真と花火に出くわした。

「あ、やっぱりあきにいも食堂に行くの？」

「ええ」

「じゃあ、私たちとも行きませんか？」
こうして真、花火も同行することになった。

※

食堂へついた。
この学園は食堂は別館にあり、そこは食堂専用の建物となっている。
中は広く、配るところも3面はある。
3面ともメニューは一緒だが、日替わりセットもあり、時々しか出ないメニューもある。
もちろん席も尋常ではない数がある。

ちなみに購買部は、こちらは本校舎と入り口はつながっているが、中はまるでコンビにのようだった。実際、コンビニとはまるっきり似ているの。
ここはずっと開いている。

「アキ君は何食べる？」
「いいえ。まだ決めていません。初めてですし」

晃はメニュー見ながら悩んでいる。
メニューは壁にでかでかと張られているの。

「なんかお勧めはありますか？」

晃の一言で女子どもは反応した。

「じゃあアッキー。この焼肉定食はどう？」
「アキ君。この日替わりセットははどう？」

「あきにい。ここのラーメンはおいしいよ」
「あきにいさん。一緒にサンドウィッチでも食べましょう」
女子の同行者が一気に晃に言ってきた。
「俺も悩んでいるから、オススメなんかあるかな」
……。
大吾も晃の真似をしたが、だーれも言ってくれる人はいなかった。
大吾は一瞬で石になった。
「そうですね。そんないいわれてはさらに悩みますね」
晃がそんなこと言ったとき、後ろから誰か晃の制服を引っ張ってきた。
「晃さん。オムライスなんてどうですか?良かったら一緒に買いますが」
その人は渚だった。
渚はちなみにもう食券を買う出番なので、晃は好機だと思った。
「それじゃあお願いしますね。渚ちゃん」
「はい」
渚は笑顔で答えてくれた。
「「「「あーーーーー!!!!」」」」

そのことに気づいた４人は一斉に声を上げた。

「じゃあ、買いに行きますね」

渚は笑顔で食券を買った。
もちろん晃は金を払った。

「ムムム」
「やるわね。藤森さん」
「あきにいのバカ」
「藤森さん以外と抜け目ないですね」

４人は相当面食らっていた。

「で、なんで真はいま僕を攻めたのでしょうか」

晃はそんなどうでもいいことを考えていた。

※

結果。
渚もみんなと一緒に座ること名になった。
周りの男子はうらやましそうにこちらを見ている。
なぜか、大吾は得意げな顔をしていたが、女子の５人は大吾のことはどうでもよかった。

「藤森さん。このまえアキ君と一緒に映画見にいったってね」
「はい。それがどうかしたんですか？」
「いいえ。なんでも」

渚の小学生みたいな笑顔に結衣はそっぽ向いた。

「あきにいさん。このサンドウィッチおいしいですよ。一口どうですか？」

そんなことしている間に花火が抜け駆けをしようとする。

「え、いいのですか？」

「はい」

花火は笑顔で答えた。

「「「「ダメーーーー！！！！」」」」

次は渚を含めた４人が止めに入った。

そのあと、次に次に私から私からと言ってくる。

「じゃあ、俺にくれよ」

大吾は空気読めない発言をしてきた。

「「「「「黙って！！！！！」」」」」

「スミマセン」

だが一斉に断られてしまった。

その威圧に大吾は静かに謝罪した。

ちなみにさっきまで見ていた男子は今は怒りの炎を燃やしていた。

「ちょっと邪魔しないでくれる！！」

「アッキーこの肉おいしいぞ！！」
「晃さん。どうぞ」
「藤森さんは一緒のメニューだから意味ないでしょ。あきにい。これ食べてよ」
「あきにいさん。はい、あーん」

結衣、美紀、渚、真、花火の順で晃に箸やスプーンをささげてくる。
晃はいかにも困っている顔をしていた。
だが、なぜか断れない気がしている晃であった。
大吾は一人でちまちまと食べている。

「あの～昼休みの時間考えていますか」

晃は回避しようと言葉を述べた。

「「「「「いいから食べて！！！！！」」」」」
「は、はい」

晃も5人の威圧で押されてしまっている。

結果。
晃は自分の分を食べ終わるのに相当な時間がかかったらしい。
あのあと、大吾は泣きながら教室に戻っていった。

第６２話　食堂（後書き）

前回のあらすじ

科学都市の見方参った。

晃「でも、なんで縞島さんが来たのですかね」

敦子「まだ鈍感さは抜けていないようね」

吹雪「私がんばる」

晃「うん。何を？」

後書きトークコーナー

真「この小説相当進んできたのにやっと食堂と購買部の説明でたね」

花火「仕方ありませんよ。なにせ、主人公のあきにいさんが弁当派だったので」

真「弁当もいいけど、たまには食堂もいいね」

花火「はい、次はあきにいさんと２人で行きたいです」

真「抜け駆けはずるい！！」

第６３話　科学都市でのつぶやき（前書き）

前回のあらすじ

やっと食堂登場。

今回の話は、科学都市での晃の幼馴染の話です。
いつものキャラは出ませんが、いつか出てくる科学都市での新キャラを見届けてください。

第63話　科学都市でのつぶやき

科学都市。
その中の1つの都市、【星の集まる場所（オールスター）】。
さらにその中の一つの学園の町、【星大（せいだい）】。
そしてその中にも超名門校、【私立星道高校（しりつせいどうこうこう）】があった。

ただいま6時間目の授業が終わった。

「ふわぁ～」

授業が終わったところであくびをしている少女が一人。
髪は髪は黒で、左右を軽く結んでいるロングストレートヘアーだ。
彼女の名は白河柚子（しらかわゆず）。ただいま星道高校の1年生だ。

「お姉ちゃんいる？」

そのとき、彼女の教室にもう一人の少女が入ってきた。
髪はすこし紫かかった黒で、柚子よりは短いストレートヘアーだ。

「どうしたの百合？」

彼女の名は白河百合（しらかわゆり）。
彼女も同じくこの高校の1年生だ。
百合が柚子のことをお姉ちゃんと言うのは彼女らは双子だからだ。

「うん。一緒に帰ろうと思って」
「そう。じゃあ行こうか」

「うん」

そう言って柚子は腰を上げた。

※

「あ、柚子先輩、百合先輩！！」

帰り道、ある少女2人が彼女らを呼び止めた。
髪は桃色のショートで後ろを結んでいる。
ポニーテールの長さは首までの届かない程度の長さだ。
名前は水瀬瑞希（みなせみずき）。
ちなみに彼女の名はこれで2回目の紹介である。
もう一人は河本暦（こうもとこよみ）。
髪は黒の右側にしたポニーテールである。

「今帰りですか？私も一緒に行ってもいいですか？」
「うん。いいわよ」

瑞希の質問に百合が笑顔で答えた。
瑞希と暦も並んで帰ることになった。

「そういえば、そっちの今週文化祭ですよね。準備はどうですか？」

瑞希が話しかけた。

「そうね。順調と言えば順調かしら」
「うん。そうだね」

2人は答えた。

「文化祭と言えば、アキ君。文化祭どうだったかな」

ここである少年が話題に上がった。

「そうね。まああいつのことだからいつもの器用さで何とかしているんじゃないの？」

「そうですね。先輩たち、私が電話するまで気づかなかったんですから」

瑞希は悔しそうに言った。

「瑞希ちゃん。本当に悔しがってたみたいね。優輝先輩に会えないから」

「ちょっと、こよちゃん！！」

「だって、瑞希ちゃんの敬語も優輝先輩の遺伝でしょ」

「遺伝じゃなくって……なんていうか……その……写っちゃった？」

瑞希はごまかそうと思っていった。

「違うでしょ」

柚子が言ってきた。

「あんたは晃に憧れてその口調になったのでしょうが」

「あわわわ。本当のこと言わないでほしいです！！」

瑞希はあわてて柚子の口を塞ごうとした。

「でも、本当に残念ね。あっちのほうへ私たちから行けないなんて」

百合が残念そうに言った。

「まあ、あんたも晃に会いたいのでしょ。瑞希と同じ理由で」

柚子がその言葉を口にしたとき、百合はりんごのように顔を赤くした。

「そ、そそそそそ」

「あ、百合先輩がバクッた」

暦が急いでいった。

「あんた本当にこのことに対して体制がないのから。これで本当に晃と再会したら爆発しちゃうんじゃないの」

柚子が冗談半分で言った。

「そ、そんなことないよ!!」

「いや〜百合先輩ならありえますよ」

瑞希も冗談半分で言った。

「も〜」

「ねえ。瑞希ちゃん。優輝先輩から文化祭後にメール来たんじゃないの？」

暦が思い出しながら言った。

「あ、本当だった」

瑞希は思い出したように言った。

「ちょっと、瑞希。あんた一人でなに隠していたの」

柚子の冗談が次は瑞希に矛先を変えた。

「そうだよ、ずるいよ瑞希ちゃん」

百合が手を組んでいった。

「いや～2日前のことだし、本気で忘れていました」

実はこの話は晃が文化祭を終えた日のすぐ後の月曜日である。

「でも、先輩。本当に大変でしたよ」

「へ？何が？」

柚子が聞き返してきた。

「女装無理やりやらされて、その後は執事で、そのあと、【団殺者（ディスター）】の仕事だったみたいなのですよ」

「じょ、女装って。ふふふ」

柚子は完璧に笑いをこらえていた。

「でも、優輝先輩。なんか女装似合いそうな顔しているよね」

暦が言った。

「でも、あそこでも【団殺者（ディスター）】の仕事あるんだね。アキ君本当に大変そう」

百合が残念そうに言った。

「でも、あんたらは晃の執事姿見たかったんでしょ。残念ね」

「ソ、ソンナコトナイデスヨ」

「ソ、ソウダヨオネエチャン」

2人とも見事に動揺していた。
セリフで完全にわかる。

「でも、本当にまた会えるといいわね」

柚子が言った。

「また会えるよ。お姉ちゃん。アキ君そう言っていたもん」

百合が柚子に言った。

「それもそうよね。でもあんたたち、会ったとき、あいつに彼女ができていたらどうする？」

柚子がにやりと笑いながら言った。

「い、言わないでよ～それは本当に冗談じゃ済まされないよ」

「大丈夫です。先輩はバカみたいに鈍感ですから、先輩なら鈍感王の称号もってもおかしくはありませんから」

「それもそうね」

こうして、４人は楽しく談笑した。
これはある日、思い出す主人公の第二の故郷の今の姿である。

第６３話　科学都市でのつぶやき（後書き）

後書きトークコーナ

晃「本編では一切しゃべらなかったのでここで話しましょうか」

美紀「オーイエー！！」

真「あきにい。今度の話からちょっとまじめになるって本当？」

結衣「その言い方だと、いままでまじめにやっていなかったように聞こえるわね」

今宵「とにかく、まあ、少しはバトルが増えるってわけだろう。多分」

晃「僕に言われたって意味はありませんよ。僕が書いているわけではないのですから」

美紀「でもこの小説のタイトルの意味ってどうゆう意味か知っている？」

真「ううん。知らない」

結衣「Ｆｒｅｅｄｏｍ／Ｓｔｏｒｙ、フリーダム、ストーリ。フリーダム＝異名」

今宵「フリーダムの異名を持つ晃。つまり晃のお話みたいなだ」

晃「まあ、作者曰くそうですね」

美紀「つまり、次の話はアッキーが知っていてもおかしくはない！！」

晃「いや、おかしいですから！！」

透「あれ？俺のセリフは？」

結衣「あ、透いたの？」

真「でも、いてもいなくっても同じ」

晃「本当に扱いが雑になっていますね」

第６４話　いきなりの爆弾事件（前書き）

前回のあらすじ

初！！科学都市のみのお話。

晃「今回からは普通に戻しますよ」

第６４話　いきなりの爆弾事件

あり一人の男は車の中にいた。
車はものすごく黒くデカイ。

「ついに見つけたぞ、優輝晃」

男は晃の名前を出した。

「お前が最初の墓場に行く【団殺者（ディスター）】だ」

男は不適に笑った。

※

東の丘学園。
１年１組。

「アッキー。今日はどこか行くの？」

美紀は晃に話しかけてきた。

「て、美紀は確か補修があるのでは？」
「い、言っちゃダメだよアッキー」

美紀があせりながら言った。

「はいはい。わかりましたので行ったほうがいいですよ」

晃は美紀の背中を押した。

「じゃあ、一之瀬、行こうぜ」

同じく補修の大吾は美紀に言ってきた。

「アッキーがいいのに」

そういった瞬間、大吾は何かショックを受けた顔になった。

「はいはい。帰ったらゲームの相手しますから」

「はい、言ってきます！！」

ゲンキンな人ですね～と晃は思ったが声には出さなかった。

美紀はご機嫌になりながら教室を出た。

なぜか大吾は豆鉄砲を打たれた顔になっていた。

鳩かあいつは。

「アキ、帰ろう」

入れ替わるように泉が教室に入ってきた。

後ろには舞の姿もあった。

「はい。いいですよ」

晃は鞄を持った。

※

「晃君。最近は【団殺者（ディスター）】の仕事ないのですね」

舞は晃に聞いてきた。

「まあ、そうですね」

実際、そう簡単に【団殺者（ディスター）】の仕事は入るわけではない。

「アキ、それじゃあつまんないよ」

泉が晃に駄々こねてきた。

「そういわれても、町が平和なのですから、もうそれでいいのですよ」

晃は気楽に言った。

たしかに、仕事がない、イコール、平和と見てもいい。

いや、それが正しい。

「平和が一番ですよ。何も無いことが大切です」

「確かにその通りです」

舞も晃の意見に賛成した。

「あ、あそこ何か落ちている」

「聞いていませんね」

落し物を拾いに言った泉に対して呆れた晃だった。

そのあと、泉のあとを付いて行った。

「で、何を見つけたのですか？」

「うん。これ」

泉は晃に拾った機械を見せた。
そのとき、晃は何かに反応した。

「危ないです！！泉！！」

晃は即座に拳銃を【呼び出し（コール）】した。
そのあと、泉が持っているものに目掛けて引き金を引いた。
弾はみごとに機械に当たり、吹っ飛んでいった。

その一瞬だった。

機械が爆発した。
幸い、何もない場所なので何も起こらなかった。

「あ、アキ。今のは！？」

泉は晃に聞いた。

「なぜ、あれがなんなところに？」
「晃君。どうかしたのですか？」

舞が晃に聞いた。
その時、晃は血相を真剣にして言った。

「2人とも、あれは科学都市で作られた爆弾です！！」
「「え！？」」

2人は一斉に驚いた。

「ば、爆弾って!?」
「なぜ、そんなものがここに!?」

泉と舞は晃に聞いた。

「僕もそのことはわかりません。ですが」

晃は完全に真剣だった。

「ここ以外にもあの爆弾があると考えてもいいでしょう!!」
「うそ!!」
「あんなのがまだ!?」

泉と舞はさすがに驚いていた。
確かに、こんな何も無いところに爆弾を一つ置いているわけではない。
だとしたら、危険なことになる。

「急いで探しますよ!!」
「はい!!」
「おっしゃーきた!!」

3人は走り出した。

※

『ば、爆弾!?』
「ええ。そうです」

晃は闘士に連絡を入れた。内容はさっきの爆弾のことだ。

『お前は今何している？』

「もちろん。爆弾の捜索です。まだ何個があると考えてもいいでしょう」

晃は走りながら丁寧に話を進める。

「手遅れにはならないように、ご協力お願いします！！」

『言われなくともわかってらあ』

闘士が元気良く言った。

「ありがとうございます。ではます、さきに科学都市の情報のほうをお願いいたします。僕らは爆弾探しに行きます」

そう言って晃は電話を切った。

「晃君」

「アキ」

「２人とも、いいですか、人の肌に触ったら、１０秒で爆発するように設計されています。分けて探しましょう。集合場所はここです！！」

晃は２人を信じて指示を出した。

「わかりました！！」

「うん！！」

「では、急ぎましょう。手遅れになったら最悪です」

3人は同時にうなずいて、3手に分かれた。

第６４話　いきなりの爆弾事件（後書き）

後書きトークコーナ

美紀「アッキーにどうやって挑もうかな」

大吾「そういやお前ゲームは強いのか？」

美紀「アッキー以外全員勝てる！！」

大吾「晃には負けてるんだな」

美紀「だってアッキー。ものすごく器用だから」

大吾「起用は関係ないだろ」

美紀「ありえないコンボしてくるもん」

大吾「あいつ、どこまで起用なんだ？」

第６５話　泉の奮闘（前書き）

前回のあらすじ。

とうとう長編に型のストーリに！！

晃「持ちますかね」

真「なにが？」

晃「このペースです」

第６５話　泉の奮闘

晃は走り回った。
なるべく、爆弾が爆発させないために。

「ありました！！」

水辺の近くに爆弾があったのを見て、晃は拳銃を【呼び出し（コール）】した。
晃は一瞬で爆弾の心臓と言えるのもを撃った。

「これで、３個目ですね」

さっきわかったことだが、この爆弾には中心に起動するためのもの、いわゆる心臓が仕組まれている。ここを壊せば爆発はしない。安易なシステムだ。

「しかし、このままだと、埒が明きませんね」

実際、爆弾は何個あるか知らない。
舞、泉にもこのことを伝えたが、何個あるなんてさすがにわからない。

『アキ。あたし今、裏山にいるのだけど、なんか怪しい人たちを見つけた』

通信機から泉の声が聞こえてきた。

「それは本当ですか！？」

※

「うん。しかも、大きな荷物なんて運んでいるからさらに卑しい」

泉は晃に言い渡した。

泉はただいまその男たちに見えない距離で話している。

ちなみに泉は結構目がいい。

『わかりました。このことは僕から舞に伝えます。僕もそこに行きますので引き続き調査をお願いします』

「了解!!」

そう言ってから泉は通信を切った。

とりあえず、今は気づかれないことが先決。

泉はそう自分の心に言い聞かせた。

男たちの行動は見るからに怪しい。

しかも、持っているものがさっきの爆弾と似ているものばかりだからだ。

これは完全にこの人たちが犯人だと見てもいい。

そう思ったそのときだった。

「おい!!誰かいるぞ!!」

その中の一人の男性が叫んだ。

やばいと泉は思ったが、だが男が叫んでいる方向と泉がいる方向はまったく違う。

どうしたのだろうと泉は見た。

しかし、それはあまりにもよろしくない状況でもあった。

「と、透。あんた男でしょ。何とかしなさいよ」

これは、結衣の声だった。

「何にもできねえよ」

「本当に男なのかこいつは」

透と今宵もそうだった。

隣にはさらに美紀と真、伊織や花火もいる。あ、ついでに大吾も。

どうやら彼らが捕まってしまったそうだ。

（こ、これはやばい……よね）

泉は迷った。

ここで飛び込んで助けに行くか、晃たちが来るのを待つか。

だが、この考えは泉にとって不要だった。

（友達を助けないで、何がアキの相棒だ！！）

泉は飛び出した。

「この人たちを離しな！！」

泉は威勢よく言った。

「なんだこの餓鬼は？」

「いや、女だろう。しかも極上の美少女」

男たちは泉の登場に驚いていた。

「いいね。いいね。俺、こんな活発な女の子好きだよ」
「だまれよこのロリコン」

男たちは楽しく談笑していた。
まるで泉をバカにしている。

「お兄ちゃんと今から遊ばない？」
「おいおい、小学生じゃねえぞ」
「……そうよ」

―バキッ！！

泉がそういった瞬間、鈍い音が聞こえた。
一番泉の近くにいた男が倒れだした。

「あたしを、馬鹿にしないで」

泉は棒を振るった。

「このアマ」
「この町の初めての友達、仲間に手を出さないで！！」

泉の言葉に美紀たちは驚いていた。

※

源泉は中学3からの転校生である。
親の仕事の都合上転向してきたのはいいが、問題は彼女の格好である。
制服は前の学校のものを着ていた。そのため、友達はおろか、毎日

男子からも女子からもいじめを食らっていた。
そのため友人は中学からはいなかった。
彼女の性格は自分を元気付けるためにこの性格になっていた。

しかし、この学園に来て彼女のいじめはなくなったが、友だとはいなかった。
そんなときの、１０月に晃が転向してきて、泉は驚いた。

「なんで、あの人はあんな制服着ているのだろうと」

だが、泉は彼といつの間にか友達になりたいと思っていた。
そして、彼を追っていたあの日、彼の秘密を知ってしまった。

※

―バキッ！！

鈍い音が聞こえた。

「なかなかやるね～」

泉は奮闘していた。
何発は殴られていたが、男たちは何人か倒れていた。

「だが、これで終わりだ」

何人かの男たちが泉の近くに行った。
しかもさっきとはありえない数である。
泉は攻撃が間に合わず、殴られて、捕らえられた。

「このまま俺らのおもちゃになってくれないかな！！」

そういったまま一人の男が泉を殴った。

「これで終わりだ」

意識が飛びかけた泉に最後の一撃を殴ろうとしたとき、後ろから爆発音が聞こえた。

振り向いてみると、おおきな親爆弾が壊れていた。

「あなたたちはなに僕の友達を、泉を殴っているのですか？」

そこのは刀を持った晃がいた。

「泉ちゃん」

隣には舞もいた。

「あなたたちは許せません！！」

晃は剣を【呼び替え（チェンジ）】し、銃に切り替えた。

「【呼び出し（コール）】、４丁拳銃！！」

晃は2個の銃を低く上に投げた。

「並べ！！【線に並ぶ銃（ライン・ロン・ピストル）】！！」

晃は４つの拳銃を横にしながら撃ち放った。

男たちは次々に倒れていった。

「大丈夫ですよ。死にはしませんから。気絶してください」

そういいながら泉の近くに行った。

「あ、アキ」

「泉、良くがんばりましたね」

そう言って晃は泉を抱いた。

「安心してください。君はもう一人ではないので」

「う、うん」

泉は泣きながら返事をした。

「いや～すごいな。さすがは【団殺者(ディスター)】」

一人の男が出てきながら言って来た。

「あなたは？」

「俺か、俺は邪魔な存在。つまり【団殺者(ディスター)】の【自由者(フリーダム)】を殺す男」

その男の首には流れ星の形をしたネックレスをつけていた。

「九条拓海(くじょうたくうみ)科学都市の犯罪組織【班羅堕威栖(パラダイス)】リーダーだ」

第６５話　泉の奮闘（後書き）

後書きトークコーナ

美紀「早くもボスキャラ出てきた！！」

晃「今回の話はなんと今回出てきた九条拓海を考えてくれたのは作戦参謀さんです。本当にありがとうございます」

泉「しかも今回はその人のおかげでこの話が作れたとか」

晃「ええ。おかげですべて話しにつなげられそうで助かりました。作戦参謀さん本当に感謝しています！！」

美紀「これからどうなるのかな？」

泉「みきポンは完全につかまっているけど」

＊作戦参謀さん。九条拓海のキャラ投稿本当にありがとうございました！！

第６６話　不思議な能力と戦い（前書き）

前回のあらすじ

新キャラ登場！！

晃「なんか同じ匂いがします」

結衣「何のこと？」

晃「いいえ。なんでも」

第６６話　不思議な能力と戦い

「【班羅堕威栖（パラダイス）】。ですか？」

晃は聞き返した。

「晃君。知っているの？」

舞が言ってきた。

「いえ、まったく」

だが、晃はあっさり知らないと断言した。

「きさま～まあいい」

拓海は改めて言い直した。

「勝負だ。【自由者（フリーダム）】、優輝晃。お前が【団殺者（ディスター）】の死人の一人目だ」

拓海の言葉に翻弄されずにいた晃だが、その言葉で銃を強く持った。

「ふむ、右肩を撃つ抜くか」

「！！」

晃が銃を撃った瞬間、拓海はそういいながら避けた。

晃は驚いた顔をしていた。

「なんだよ。なぜ分かったという顔しているな」
拓海は笑いながら言った。
「いくぜ！！」
そういいながら持っていた剣をさやかな抜いた。
「死にな！！【自由者（フリーダム）】！！」
「クッ！！」
晃も刀を【呼び出し（コール）】した。
「バックステップでのカウンター」
「！！」
拓海が言ったとおり、晃は後ろに一旦下がった。
避けた後、さらに剣を振ったが、分かっていたのか簡単に避けられた。
「予言。いや、予知能力ですか？」
晃は理解したように言った。
「ああ。そうだ。俺はいまお前の行動が面白いほど良く分かる」
拓海は剣を使って手遊びしながら言った。
「分かったところで、そろそろ死んでもらうぜ！！」

拓海の空気が変わった。

「クソ野郎、早く愉快に死にやがれ！！」

拓海はダッシュしてきた。

拓海の攻撃は晃の攻撃をさせないようにきているために晃は反撃ができないでいる。

「そろそろおしまいだ！！」

そう言ってさらに予知したのか、晃の防御をすり抜けた。

――！！

拓海の剣が晃の体を切った。

「アッキー！！」

「アキ君！！」

「あきにい！！」

「晃！！」

「晃君！！」

「ア、アキ！！」

みんなが晃の名前を呼んだ。

「ち、器用なやつだ。急所をはずしやがった」

だが、晃の体からは血が流れてきている。

「残念ですね。こっちは器用が武器なのですから」

晃は辛そうに言った。

「だが、その傷ではもう動けまい。終わりだ！！」

拓海は晃の近くに来た。

――やばい！！

「クソ野郎、早く愉快に死にやがれ！！」

拓海がそう言ったときだった。

晃の体、いや、左腕に付けている腕輪が白く光りだした。

「な！！」

「これは！！」

その時、みんな第2の光を見つけた。

第2の光は美紀の腕輪から赤い光が輝いている。

「美紀？」

「アッキー。これは一体」

その時、晃の光っている腕から赤い炎が燃え上がった。

「な、なんだ貴様それは！！」

初めての光景にみんな驚いていた。

だが、晃のみ驚いていなかった。

「そうですか。これが赤の色宝石の力、力と燃やしを与える力！！」

そういいながら晃は右手と左手を音が出るようにあわせた。

「行きますよ。美紀」

右手に炎が移り、それを確認した後、刀を持ち直した。

刀にもその時、炎が燃え移った。

「行きますよ。九条さん！！」

晃はダッシュした。

「いいだろう。この三下！！」

拓海もダッシュした。

「予知されているなら考えはただ一つ」

晃は刀を強く持った。

「それ以上の力でねじ伏せればいい！！」

拓海との差が離れている中、晃は思いっきり刀を振った。

そのとき、刀の炎が、拓海に向かって噴出した。

「な、何だと！！」

たしかに、これだと予知されていても意味が無い。

「自由に燃え移れ！！」
「チッ！！」

拓海は急いでその場から離れた。
そのとき、同時にヘリコプターが頭上へ飛んできた。
はしごが落ちてきて、拓海はそれに捕まった。

「勝負はまだ始まったばかりだ！！次は殺す。明日を待ってろ！！」

そういいながら拓海は消えた。

※

みんなの縄は解け、一斉に晃に集まった。

「アッキー。これは一体」

美紀は晃に聞いてきた。

「これが、石の、色宝石の力です。この色宝石は僕の白色宝石を中心に力を与えてくれるものです。その力は色によって異なります。美紀の赤色宝石は炎の力と言うわけです」
「そうなんだ」

そう美紀が理解したとき、美紀は足から崩れ落ちた。

「あれ、なんか」
「美紀、どうしたの？」

結衣があわてていった。

「お腹減った」
『はい！？』
美紀の意外な言葉にみんな驚いていた。

第６６話　不思議な能力と戦い（後書き）

後書きトークコーナ

美紀「とうとうわたしたちがつけている石の力が分かったわね」

結衣「でも石によってて私にも同じ力があるのかしら」

真「でも、その前にこの事件はいまだに解決していない！！」

今宵「まだ【班羅堕（パラダイス）威栖】の戦いがある」

晃「次回、事件もついに本格的になります！！それに新たな事実！！」

透「美紀は一体どうなるって、俺のセリフと出番これだけ？一様俺もあそこにいたよね」

透以外の一同「……あ」

第67話　色宝石（前書き）

前回のあらすじ

晃、謎の意志の力発動！！

美紀「ふきゅー」

透「こいつ、意外と思い」

―バッキ！！

透「すんませんでした」

第67話　色宝石

優輝家。
美紀は倒れ方と思えば、晃が作った料理を食べまくっている。
ちなみにここまでは透が連れてきた。

晃の傷は舞の笛の能力で痛みは無く、治療も済んでいる。
どうやら舞が使いのこせば直す力も出てくるみたいだ。

【団殺者（ディスター）】のことはすべて話した。
みんな極秘と言ったら納得してくれた。
何発か、晃は真の愛の鉄拳を食らったが。

「で、その色宝石の力の代償って」

今宵が呆れながら言った。

「ええ。色宝石の本来の力を使いますと、その分体力と腹が減るのですよ。どんどん使っていけば威力も時間も長く使用できますが、この能力は自らの発動はできないのですよ。しかも、今見ていただいたように力の発動も予知能力を持っていましたが相手を倒せないほどですし、時間も一瞬でした」

晃は色宝石の説明をした。
簡単にいえばこの能力は完全にもろ刃の剣と言ってもいいのである。

「アキ君。私たちも発動ができるのよね」

結衣が自分の青色宝石を見ながら言った。

「ええ。ですがやっぱり発動は時によって違います。今分かっているのは本人同士が近くにいることだけです」

その時、何名かあることを感じた。

「あきにい。この能力初めて使ったんじゃないの？」

真が怪しいものを見る目で言った。

「ええ。ここで使ったのは初めてですよ」

晃は平然と答えた。

「って、ことは科学都市で使ったことあるの？」

次は結衣が言ってきた。

「ええ。まあ」

「じゃあ、色宝石って私たち以外に持っているの！？」

真が行きよい良く聞いてくる。

「ええ。そうですよ」

その言葉を言ったとき、３名ぐらい肩を落とした。

そのままこの時間は美紀と泉と透の飯の取り合いの音しかしなかった。

※

この日の放課後。
まだまだ事件は始まったばかり。
そして昨日。【団殺者（ディスター）】に関わるものだと知ったので、サポートしてもらうためにみんなシマシマスポーツに集まっていた。

「ただいまー」

吹雪が帰ってきた。

吹雪は何か感じ取ったのか、速攻で今に入ってきた。

「お兄ちゃんいらっしゃい」

行きよい良くドアを開けたのはいいが、晃以外にたくさんの人がいてびっくりした。
いや、正確にはこんなに女の人が集まっていることに驚いているのだ。

「あ、吹雪ちゃん。お帰りなさい」

晃は平然と声をかけた。
真はまるで猛獣に威嚇するような顔になっている。

「な、なんで私とおにいちゃんのラブラブになる空間にこんなに女の人が集まっているの！？」

その言葉に反応した真が立ち上がった。

「あきにいは残念ながらあんた何にかに興味ないの。だか少し黙っ

ていて」
「む～真おねいちゃんだって妹しか見られていないじゃん」
う～と二人ににらみ合っている中、晃はパソコンで調べ物をしていた。
「おまえの十字架って本当に役に立つな」
闘士が感心したように言った。
「ありがとうございます。しかし、本当にここは電波の通りがいいですね。おかげで早くやつことができます」
そう言って晃は制服の袖を捲くった。
そのあと、猛スピードでキーボードを撃ち始めた。
画面はまるでスキップしたように早く文字が打たれていく。
晃は集中しているのか、ぶつぶつ言いながらキーボードを打ち続いている。
そしてあれから１０分。
「ハッキング成功です！！」
晃は手を叩きながらみんなに告げた。
「お、さすが早いな晃」
「さすが私の夫さん」
そう言いながら吹雪は晃に抱きついたが真に引き下がれる。

「だれがあきにいが夫だって!?」
「なに?嫉妬ですか?大人げない」
「妄想癖があるよりいいのよ!!」
この2人のいがみ合いは続きそうだった。
「で、なんて書いています、晃君」
舞が晃にさりげなく近づいて聞いてきた。
「見事に成功です。作戦の個とモロに書いています」
晃は闘士に頼んでいたディスプレイに画面を映し出した。
「どうやら本当に僕だけを殺すことが目的ですね。詳しいことはやっぱり書いていませんが、やはり九条さんがリーダーだということも本当らしいです」
晃はハッキングしたのは【班羅堕(パラダイス)威栖の情報網だ。
「僕をおびき出すだけに相当なことをしそうですね」
「どうするの?アッキー?」
「まず、彼らが次に現れる情報をつかみたいですね。出ないとこの町が被害にあってしまいます」
晃は真剣な眼で言った。
「僕一人のことで、人が傷つくなんていやです!!」

晃はそのことをボソッと言ったが、みんなにはその言葉は届いていた。
みんな晃の優しさは感じているからだ。
「次で、終わりにします。そして、なんでこんなことしたのか聞き出します」
そう言って晃はパソコンを見た後、固まった。
「で、アキわかったの?次はどこに来るって」
「最悪です」
晃はいやな顔で言った。
「どうしたのアキ君?」
「次に彼らが来る場所は」
晃のこの言葉で誰もがつばを飲んだ。
「東の丘学園の校庭」
『!!』
みんなこの言葉に驚いていた。
「これ以上。巻き込むわけには行きません!!」
晃はパソコンを閉じた。
「どうやら僕の自由に戦わせないつもりでしょう」

晃は強く拳を握った。

「ですが、そんなことはさせません！！」

※

「明日はあいつをぶっ殺す！」

拓海はとある場所で剣を振るっていた。

「あいつにどんな力があるかしらねえが、あの場所ならあいつはうまく動けないはずだ！！」

拓海は高笑いした。

「アノ～サッキカラヒトリゴトウルサイネ」

黒人の男が拓海に言った。

「ああ。すまん」

「コレカラキオツケテヨネ」

そういって男は消えた。

「あいつ男だよな！！てか、誰！？」

お前知らねーのか！！

第67話　色宝石（後書き）

後書きトークコーナ

晃「とうとう、色宝石の一つの謎が解明しましたね」

泉「てか、石のことなんて忘れている人もいるのじゃ」

晃「言わないでください！！作者も僕も気になっているのですから」

舞「でも、本当にここまでくるの長かったよね」

泉「一様コメディだからね。この小説」

晃「まあ、ちゃんとここまでたどり着けたので良しとしましょうよ」

第68話　ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｃｒｏｓ－？（前書き）

前回のあらすじ

果たして晃に手はあるのか！？

第68話　ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｃｒｏｓ－？

次の日。
晃たちは普通に登校したが、晃と舞、それに泉は登校した後すぐに静音の教室に向かった。

「どうしたのですか？アキ君」

静音の言葉にクラスの男子共が嫉妬の目を晃に向ける。
しかし、今の晃にはそんなことを気にしている場合ではない。

「静音さん。大切な話があります。今すぐです」

晃は詳しいことは言わずに静音に言った。

「分かりました。それでは生徒会室に行きましょう」

そう言って４人とも生徒会室に向かった。

※

生徒会室。
静音は何も聞かずに晃の話しを聞いた。
ただ、驚いた表情はいくら静音でも隠せなかった。

「そんな、ことがありましたか」
「ええ。一様、手はありますが、もし本当にここが戦場となってしまうときは、生徒の人をお願いします」

晃は頭を下げた。
だが、静音は微笑みながら「頭を上げてください」といってくれた。
「そういえばアキ、先生はアキが【団殺者（ディスター）】ってこと知っているの？」
泉が毎度気にしていた質問を言ってきた。
舞も同じ気持ちだったらしくうなずいている。
「知っているのは学園長のみですが、学園長は先生の説得は任せてくれと言われましたので問題はありません」
晃は決心したように言った。
そのときだった。
晃は何かの存在を感づいたらしく、腰についている十字架のストラップを握った。
「晃君？」
「アキ？」
「アキ君？」
3人ともどうかしたのか聞いてきた。
「静音さん。来ました！！」
――！！
全員驚きが隠せなかった。
※

時刻はまだ生徒が全員登校登校したのを狙った感じで九条拓海はやってきた。
しかも、乗っているのが砲台つきの車に乗っていた。

「でてこい!!【自由者(フリーダム)】!!」

拓海は怒鳴ってきた。
生徒はほとんどの人が驚きとおびえだった。

―バン!!

一瞬だった。
一瞬で車のタイヤが狙い打たれた。

「僕はここにいますよ」

晃は銃を構えながら出てきた。

「でてきたな【自由者(フリーダム)】。ここでお前を殺す!!」
「僕は死にませんよ。まだやることがありますから」

晃と拓海はにらみ合った。
そのあと、拓海は剣を取り出した。

「今日はこの前みたいにはならねえぞ。ここではお前は戦えにくい」
「そうでしょうね。ですが、僕は全力であなたに立ち向かいます」

晃もそういいつつ、刀を【呼び出し(コール)】した。
その瞬間、二人は退治した。

2人の刀と剣が交じり合った。
そして、同時に1歩後ろに下がり、大勢を整えだした。

「アッキー！！」

校舎から美紀が、いや、幼馴染が全員、出てきた。

「邪魔だ、この女どもが！！」

拓海は叫んだ。

「みなさん、下がってください！！」

晃は急ぎ急ぎで拓海に向かった。
だが、その動きは読まれていた。

「忘れたか？俺は予言能力を持っているんだぜ」
「くっ！！」
「アッキー！！」

そのとき、晃と美紀の腕輪が光りだした。

「これって」

結衣が思い出したように言った。

「きたか、その力」

晃の手と刀が炎に包まれた。
晃は懇親の一撃で刀を持っている左手を振った。

実際、いままで晃は左手で刀を振り回していた。

「はあぁぁぁぁ！！」

「チッ！！」

晃の攻撃を拓海は避ける。

――！！

そのとき、晃はなにか違和感を感じた。

「もう一発！！」

晃は再度刀を振るった。

だが、次はさっきより簡単に避けられた。

美紀の体力が限界に来たのか、晃の手の炎を消えた。

「タイムアップだな」

そう言いながら拓海は近づいてきた。

「そうは行きませんよ！！」

晃は負けじと刀を振ったがどれも避けられる。

ここで拓海の本気が出た。

攻撃をする予想ができるのなら、避ける予想もまた拓海は予想できる。

……つまり。

拓海の攻撃が晃の体を切り裂いた。

晃は体全身に痛みを感じた。
だが、晃も負けてはいないと、体制を崩さずに反撃したが、逆に反撃されてしまった。
次の攻撃は右腕でガードした。
だが、痛みは消えない。

「あきにい！！」

そのとき、真が晃をかばって拓海にタックルをした。

「ま、真！！」

晃は急いで真のところへ向かいだした。

「邪魔だ、この尼！！」

拓海は手で真を降り叩いた。

「あきにい。負けないで」

倒れながら真は言った。
そのとき、真の左手が、腕輪が黄色に輝きだした。
同時に晃の腕輪も光りだした。

「まさか、真も」

晃は痛みを忘れ、真剣な目になった。

「ありがとうございます。真！！」

晃の手が電気を帯び始めた。
刀を持っているため、刀にも電気が出てる。

「自由に痺れろ!!」

晃は横に刀を構えた。

「雷斬波!!」

雷の剣波が拓海を狙う。
だが、予想さえていたのか、避けられた。

「残念だな!!」
「いいえ、狙い通りです」
「なに!!」
「僕が狙ったのはあなたではありません」

そのとき、拓海の流れ星のネックレスのひもが電気をおびて切れだした。

「貴様!!」
「僕が狙ったのは、そのネックレスです!!」

第68話　ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｃｒｏｓ－？（後書き）

後書きトークコーナ

舞「ついに最終決戦が始まりましたね」

泉「はたして、あたしたちに楽しい未来は来るのか！！」

晃「そこまでの大事ですかね？」

舞「晃君はもっと自分の存在価値を認めてください」

泉「アキがいないとたのしい学校生活は困難だ！！」

晃「そういわれるとなんだかうれしいですね。そういえば、次回、重大発表です！！」

第69話　ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｃｒｏｓ－？（前書き）

前回のあらすじ

真の腕輪、新たな力発動！！

第69話　ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｃｒｏｓ－？

晃の剣波が拓海ネックレスを落とした。

「なぜ、俺の能力の正体がこのネックレスだとわかった」

「僕も、同じみたいなものをつけているのですね。ひとつに言うなら勘です」

晃の刀から電気が消えていった。

どうやらタイムアップのようだ。

「ですが、これで終わらせます！！」

晃は息を吐いた。

「【呼び代え（チャンジ）】＆【呼び出し（コール）】！！」

左手で持っていた刀は粒子かし、代わりに銃が出てきた。

右手には銃が出てきた。

「さらに【呼び出し（コール）】！！」

持っていた銃を高く上げた、そのあと、また両手に銃が出てきた。

「４丁拳銃、一転集中、連続発射ノ舞（ガトリングダンス）！！」

次々に連射してくる弾が拓海を襲った。

拓海はその場で倒れた。

「あ、あきにい」
「勝ちましたよ。真のおかげです」
晃は笑顔で真に知らせた。
安心した真も微笑み返す。
「なぜだ、なぜお前はその深手でも動ける」
たしかにいまの晃はものすごい深手だ。
「ですが、僕はここでは倒れない理由がたくさんあるのですよ」
晃は拓海に近づきながら言った。
「僕はみんなとこのまま一緒にいたいのでしょ。ただ。それだけです」
そのまま拓海に手を差し伸べた。
「君にこの気持ちがわかってもらえるとうれしいです！！」
笑顔で言った。
拓海がその手を握ろうとしたとき、後ろから声が聞こえた。
「おい、九条！！【自由者（フリーダム）】を倒せ！！」
大柄な男が拓海に言い放った。
「すみませんが勝負は終わりました。ここから引き取ってください！！」

晃は講義した。

「そんなものは関係ない！！お前が死ねばすぐに終わる、こいつがやらないのなら俺の手で殺すまで」

そういって男は指を鳴らした。

そのあと、何対かの人間ロボットが出てきた。

「いけ、わが僕よ！！」

その言葉を合図にロボたちは晃たちに襲ってきた。

そのとき、拓海は立ち上がった。

「ち、しょうがねえな」

「なぜ、起き上がってきたのですか？」

晃は不思議そうに聞いた。

「俺はこいつに頼みごとがあってこの依頼を受けた。だが、今は気が変わった。俺はこいつから奪ってやる！！俺の大切なものを」

「そうですか」

そういって晃は拓海にさっきのネックレスを渡した。

「じゃあ、いきますか」

「ああ」

晃は刀を【呼び出し（コール）】した。

「くそ野郎、早く愉快に死にやがれ！！」
「【強化の腕輪（ドーピング・バンド）】、発動！！」

晃はそう言って右手で刀を持ち直した。

「「はぁぁぁぁぁぁ！！」」

2人は同時にダッシュした。

ロボットの攻撃に晃たちは怯えず、怯まずに攻撃をしていく。
それがいくら体が傷ついてもだ。
学園からは無言が続く。

拓海は数ある敵の中から近くの敵のみの攻撃を読みつつ、攻撃していく、ただ、近くの敵のみなので風致にあってしまったが、近くにいた敵の攻撃を受け止め、反撃に利用した。

晃はもはや根性のみで戦っている状態である。
肉を切って骨を絶つ。
今の晃はまさにその戦い方である。
今は刀の鞘までも利用している。

だが、さすがには2人は人間。
さすがにこの数には参る。
2人の体力は限界寸前だ。

「はあはあ」
「ぜえぜえ」

この瞬間を狙ったみたいに男は笑った。

「今だ！！この餓鬼どもを殺せ！！」

もうだめだと思ったとき、奇跡は起きた。

晃たちに襲ってきたロボットが空から飛んできた何かによって破壊された。

「なっ！！」

男は驚いたように言った。

「俺の親友を簡単に殺させないぜＭｒ・大崎！！」

学園の門の上に一人の男が立っていた。

「翔太！！待っていました！！」

「翔ちゃん！？」

晃と、校舎の中にいた静音が叫んだ。

彼の名は柊翔太。

苗字の通り、静音の弟であり、晃の親友。

「待たせたな、親友」

翔太は降りて、晃に近づきながら言った。

「信じていましたよ、親友」

２人は手をつないで晃は立ち上がった。

「翔太。状況は？」
「ああ、簡単にこんなのは読める。晃、お前は大崎を頼む。俺はこのロボット軍団を相手する」
翔太は腰についていたウェストポーチから針を取り出した。
「貴様、まさか【魔法使い（マジシャン）】か！？」
「お、その異名久しぶりに聞いたな」
翔太はそう言いながら針を投げつけた。
「いけ！！晃！！」
「はい！！」
2人は完全に信用しきっていた。
ロボ軍団も動こうとしたとき、翔太は口を開いた。
「おっと、そこから5歩動いたら危ないぜ」
翔太は忠告したように言った。
だが、所詮はロボット、話を聞くはずが無い。
5歩動いたとき、ロボの体がどんどん裂けられていく。
「だから言ったのに。忠告は聞くことだな」
翔太は呆れながら言った。
「き、貴様！！」

大崎が大声を叫びながら大きな刀を取り出した。

「あなたは許されないことをしました。人の気持ちを利用するなんて許せません」

晃は力強く言った。

だが、体力は本当にやばくもうフラフラだ。

「黙れ!!この餓鬼が!!」

その時、晃の足がバランスを崩した。

「晃君!!」

近くに見ていた舞は叫んだ。

が、そのときだった。

舞の髪紐が銀色に光りだした!!

第69話　ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｃｒｏｓ－？（後書き）

後書きトークコーナ

晃「前回おしゃった通り、今回は重大発表です！！」

泰子「なんだろなんだろ♪」

晃「ＰＶ５万突破記念として人気投票を開催いたします！！」

ささら「ようやくここまで来ましたね」

静音「ルールは、まず、一人３人の投票が可能となります。投票制限は今まで出てきたコラボ以外のキャラクターのすべてです！！もちろん１位のキャラには特典があります！！」

晃「投票方法は感想でも、活動報告でも構いません。締め切りは７月２４日までです。たくさんの投票待っています！！」

第70話　ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｃｒｏｓ－？（前書き）

前回のあらすじ

舞の謎の光とは一体。

第70話　ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｃｒｏｓ－？

この光はたしかに色宝石の光だ。
だが、たしか色宝石は腕輪にあるもの、なのになぜ彼女の髪紐に色宝石があるのだろうか。
だが、こんなこと考えている余裕は晃には無かった。

「いくぞ、これが俺の最終傑作の凧阿修羅だ！！」

大崎の背中から大きな板が出てきた。
そしてその板から8本の腕見たいのが出てきた。

「お前らはここで死に俺の僕になる。そして一生俺にしたがえ、生きる希望をなくさせてやる」

大崎の言葉は晃にグサッと刺さった。

「生きる希望ですか」

晃は刀を握っている右手を強く握った。

「ふざけないでください！！」

晃は大声で言った。

「生きる希望。それをあなたが奪う理由、意味が無い！！」

晃は左腕を強く振った。

「人はみな生きる希望。それを持って生きている。それをなくすことは、誰でも、神でもなくす権利などありません!!」

晃の言葉は強く、そして気持ちがこもっていた。

「知るか、俺はここの王になる。それだけ!!」

「あなたにその権利などありません!!」

「黙れ餓鬼が!!」

大崎は8本の足を晃に向かわせた。

「人の希望は道そのもの、あなたにはその道を塞ぐことは許されません!!」

晃は左手でも刀を持った。

銀色の光が刀を包みだし、やがて風になった。

「死ね餓鬼が!!」

「自由に吹け!!」

風が晃の周りを包み込んだ。

そして、晃は力を振り絞って刀を振った。

晃を襲っていた8本の足が見る見る破壊されていく。

刀を振り切った後、足は完全に破壊されていた。

「なっ!!」

大崎は驚きながらつぶやいた。

晃の腕輪の光は消えて、風はやんだが、晃はまた足を踏み込んでいる。

「貴様、いつか覚えておけ、いつかお前を殺しに来る！！」
「それは別にいいですよ」
大崎も刀を持って対抗してくる。
晃の言葉には確かな怒りがあった。
「ですが、みんなを巻き込むとしたら、次は」
思いっきり晃は刀を振り上げた。
「あなたを切ります！！」
晃は思いっきりダッシュした。
しかし、力の差なのか、それとも刀の長さなのか、いかにも大崎の方が先に攻撃できる。
体力の無い晃には今は頭を使っている余裕がない。
「【自由者（フリーダム）】、右に避けろ！！」
そのとき、拓海の声が聞こえた。
言われた取りに晃は右に大崎の刀を避けた。
「はあああ！！」
晃は刀の刃が無いところで思いっきり大崎の顔面を叩いた。
身ね打ちというやつだ。
大崎はそのまま倒れていった。
晃は勝ったのを確かめた後、仲間がいる方向に手を上げた。

「勝利です！！」

晃の手には勝利のピースが作られていた。
そのあと、別のロボットが退散命令を出したのか、次々にロボたちが退散して言った。
大崎も一緒に車に乗せられてどこかへ言った。

「ふう」

晃が息を漏らした後、後ろに翔太ではない気配を感じた。

「九条さん」

晃は誰かわかっているようにそう言いながら後ろを向いた。
たしかにそこには九条拓海の姿があった。

「借りができたな、【自由者（フリーダム）】」

拓海はお礼を言った。

「別にいいですよ。仮なんて関係ありませんし。それに僕の名は優輝晃です」

晃はそういった後、微笑んだ。
拓海も釣られて微笑んだ。

「俺は、間違っていたな。守りたいものがあるなら自分の力で守るか」

拓海は「へへ」と笑った。

「俺は【班羅堕威栖（パラダイス）】を降りる。そして、大崎から守るものを取り戻す」

拓海は晃に宣言した。

「失礼ですが君が守りたいものは何ですか？」

晃は申し訳なく聞いたが、実際彼の守るものは一体何なのか聞きたいのだ。

「女だ。俺の大切な」

「手伝いましょうか？」

「いや、いい。これぐらい、俺一人で守る」

「そうですか」

お互い、認め合ったとき、聞き覚えがある声が聞こえた。

『これで終わりだと思うな！！いけ、わがロボ軍団！！』

大崎の声だった。

言ったとおり、たくさんのロボがこちらに向かってくる。

この状況はまったくもってやばい。

晃、拓海はもうボロボロで戦う体力が残っていない。

晃にいたっては、もう3回も色宝石の力を使っている。

攻め手が翔太ではやばい。

そのときだった、まだこちらに近づいていないロボが次々に破壊されていく。

良く見たら、木の上に誰かがいた。

「晃、翔太。大丈夫？」

一人の女子がそこにはいた。

「「希！！」」

晃と翔太は声をそろえた。

彼女の名前は加納希（かのうのぞみ）。翔太の幼馴染で、彼女もまた【団殺者（ディスター）】だ。

「もう、翔太。先に行かないでよ、このバカ！！」

希は手に持っている大きな輪を回しながらふてくされている。

「ゴメン、ゴメン。今度埋め合わせする」

「それなら、いいけど」

手を合わせて謝る勝田を見た後、希は木から下りる。

「さて、失礼ながら、【自由者（フリーダム）】の挨拶を後にして」

「ここは俺らが相手するぜ」

翔太は両手で針を持って、希は片手ずつ大きな輪を持っている。

２人は同時に走り出した。

だが、いくら２人でもこの人数は無理がありすぎる。

晃は無理を承知して、助太刀に行こうとするが、やめた。

逆にいい方法が思う出したのだ。

「２人とも耐えてくださいよ。結衣、泉。付いてきてください！！」

晃はそう言って校舎の中に入った。
結衣と泉も言われたとおり、付いていった。

「どうするの？アキ君？」
「屋上へ行きます！！」

晃たちは階段を駆け上がった。
手遅れになる前にもうダッシュで。

「はあはあ。ここでいいでしょう」

晃の体力はもう本当にぎりぎりだ。

「結衣、泉。僕の体。支えておいてください」
「どうするのアキ？」
「ここから狙い打ちます。あの司令塔を」

晃は車を指差した。

「分かった」
「無理しないでね。アキ君」

泉、結衣の言葉に晃はうなずいた。

「では行きます！！パワーメータ９０パーセント！！」

晃は銃を【呼び出し（コール）】した。
晃は支えられながらでも引き金を引いた。
狙いはヒット。ロボの動きが次々に止まっていった。

「やったね。アキ」

泉がそう言ったとき、晃は返事が無かった。

「あ、アキ君」

晃はすうすうと寝息を立てていた。

第70話　ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｃｒｏｓ－？（後書き）

後書きトークコーナ

美紀「人気投票、ただいま開催中。て、ことでここでアピールタイム！！」

真「ここで何とかしても1位にならなきゃ、あきにいの恋路がうまくいかない！！」

結衣「ライバルが多い中、私もがんばるわよ」

今宵「まあ、一人3人までなので選択の余地は結構ある」

透「まあ、ヒロインが多い小説だからな。結構投票がくれば、大接戦になるかもな」

美紀「作者的には接戦よりも、投票が来るのか心配だって」

結衣「たしかに、感想0件だよね。今のところ」

真「なんか、心配事がリアルのほうで多いね。この小説は」

今宵「実際この方法は保険とか」

第71話　ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｃｒｏｓ－？（前書き）

前回のあらすじ

ついに決着！！

第71話　ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｃｒｏｓ－？

――声が聞こえる。

なぜか聞いたことがある声が晃の耳に届いた。
晃は何かを感じたのか、急いで眼を開けた。

「あ、起きた晃君」

白衣を着た美人の先生がそこに立っていた。
だが晃は一瞬で布団にもぐりなおした。

「あん。何で隠れる……の！！」

女性教師は一気に晃のもぐった布団を剥ぎ取った。

「ほら、晃君。おきなさい」
「な、何でここに瑞実（みずみ）さんがいるのですか！？」

上半身裸に包帯やシップ状態の晃が突っ込んだ。
何を隠そう。彼女、水瀬瑞実（みなせみずみ）もまた科学都市の人である。
晃も何度か世話になったことがある。そのことが天国か地獄とさまざまに。

「うん。晃君の世話をしにきたの」
「帰ってください」

ばっさりと晃は言った。
ちなみに苗字のとおり、瑞希の姉でもある。

年齢は２４。

「ひどいよ～晃君」
「そういって抱きつこうとしないでください！！」

ちなみに大の晃大好きっ子でもある。
てか、この年になって大好きっ子って。
晃はキスをしてくる瑞実を一身の思い出とめていた。
そのとき、保健室のドアが開いた。

「アッキー、起きた～」
「アキ君。傷はもう大丈夫？」
「あきにい。心配したよ」
「晃。いい加減起きろ」
「でないと俺が踏み起こすぞ」
「晃君。まだ傷が痛みなら癒しましょうか？」
「アキ、ご飯食べにいこ」

全員が言葉を言い終わらずに止まった。
ちなみに晃の状態はいまだにキスしてくる瑞実を止めている状態だ。
ベットの上で。

『きゃーーーーー』

全員叫んだ。水実を抜いて。

「あらあら。保健室はお静かに」
「その前にあなたはどいてください！！」

晃はいろんなものをこめて突っ込んだ。

※

「で、私がここに来たわけよ」

頭の痛みを抑えながら瑞実は説明した。
どうたら瑞実は晃の保護サポートをするためにここに来たらしい。
一様彼女はナースとしてもと病院で働いていた。今回のためだけに仕事をやめてきたらしい。
ちなみに瑞実が頭を抱えているのは晃がお仕置きに叩いたからだ。
だが、このことは、瑞希にむしろお願いされている。（本当のお願いは暴走したら叩いて止めてほしいこと）。
晃も最初は手間取っていたが時間が経つに連れて慣れてきたからだ。

「そういえば、九条さんは？」

晃が周りを見回しながら言った。

「あいつは帰ったよ。お前に例を言ってな」

近くにいた翔太が伝えてくれた。

「本当にあんたは無茶するね」

希が呆れながら言った。

「怒られたな晃」
「あんたもよ、バカ」

その後3人同時に笑った。

「さて、俺らも行くわ。晃」
「うん」
「そうですか」

そう言って翔太は立ち上がった。

「あら、お二人仲良く旅に行くのかしら？ラブラブね」
「ち、違いますから、私はこいつとそんな関係じゃないから」
「そ、そうだぞ。こいつはた、ただの幼馴染だからな！！」

瑞実の言葉に2人とも一斉に講義した。
その言葉に瑞実は「フーン」バレバレだか分かっていない不利をした。
ちなみに晃は本当に意味は分かっていない。

「それで、僕はどれぐらいで傷は治りますかね」

晃は瑞実に聞いた。

「そうね。一週間かしら。私とキスしたら明日には直るわよ」
「一週間待ちます」

晃は即答した。もちろん瑞実は残念そうにしている。

「まあ。今日の分の授業は取り戻しますか」

そう言って晃は制服を持ってベットを降りた。

「え！？もう行くの？」

「舞のおかげで傷の痛みはありませんからね。大丈夫です」
実際、晃はこの場から早く出たいと思っている。

※

「お、優輝。傷はもう大丈夫か？」
教室に入ってきたとき、クラスの人が話しかけてきた。
実はこの学校の生徒はあんな戦闘は見ていない。
ガラスに細工をしており、この学校のある人物以外は晃は不良を正当防衛で戦っていたシーンだった。
「ええ。大丈夫です」
晃もそのことを知っているので対応が早かった。
「あ、晃さん」
渚が話しかけてきた。
「どうしましたか渚ちゃん」
「えっと、その、切られたところは大丈夫……モガモガ」
いやな気がした晃は渚の口を塞ぎながら教室を出て行った。
そのまんま、普段生徒が通らないところへつれてきた。
「いいですか。皆さんにはあの戦闘は別のものになっていたので僕が【団殺者（ディスター）】と言うことは誰も知りません」

晃は渚に説明した。

「ディスターって、なんですか？あきにいさん」

後ろから不吉な声が聞こえた。

「は、花火さん？」

「はい」

ニコニコしながら花火は言った。

「あの、これはですね」

「知っていますよ」

花火は晃の言葉を聴かずに言い放った。

しかし、この言葉にはいかにもおかしい。

「し、知ってるって、一体」

「私のお兄さん、ミズヒキから聞きましたので」

花火の言葉は確かに疑うものだが、晃はすぐに理解した。

「やっぱりミズヒキさんの肉親でしたか」

「はい。兄がお世話になっています」

花火は一礼した。

「でも、この前、兄に憧れているって言ってませんでしたか？」

「私が行っているのはあんな筋肉バカではありません」

花火は思いっきり言った。

かくして、とりあえずは事件は終わった。
また明日から晃たちに楽しい日常が戻ってくる。

第71話　ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｃｒｏｓ－？（後書き）

後書きトークコーナ

舞「人気投票、まだまだ開催中です」

泉「どうかあたしに清き一票をお願いします」

晃「なに、ダンボールに入っていっているのですか？泉は」

泉「なにって、選挙に決まっているじゃん」

舞「泉ちゃん、それは違う」

晃「てか、皆さんには見えませんよ」

泉「あ、そうだった」

舞「どうか、清き一票をお願いします」

泉「あ、さりげなくやっている」

晃「みんなはヒロインですので投票がくれば入るほうだと思いますよ。僕とは違って」

第７２話　一難さってまた一難（予定）（前書き）

前回のあらすじ

はずの長編、無事に完結。

晃「今回からまた普通のお話です！！」

第７２話　一難さってまた一難（予定）

あのトラブルが終わり、一週間後。
晃は傷は完全に治った。（一部かっがりしていたが）

昼休み。
美紀がソラに話しかけて来た。

「アッキー昼ごはん食べようぜ～」

ご機嫌が良く、ノリノリに話しかけてくる。

「すみません美紀。僕ちょっと静音さんに呼ばれましたので生徒会室に行ってきます。大事な話があるようなので」

そう言って晃は教室を出て行った。

「アキ君。もう行っちゃたの？」

購買部から帰ってきた結衣が美紀に聞いた。

「うん。生徒会室だって」
「むむ、またあきにいはあのおっぱいお化けに連れ去られたの！？」

真も教室に入ってきて言った。

「まこちゃん」
「それ、言って悲しくない」
「……うん」

3人同時に自分の胸を見た。
そのたと、同時にため息をした。

「ど、どうした!?」

遅れて教室に入ってきた今宵が暗くなっている3人に驚いている。

「3人とも、胸が無いからって落ち込んでいるの」
「伊織には言われたくないわ」

結衣がぼそりといった。
その言葉は伊織にはもちろん聞こえているわけで。
そういうことで伊織も見事に落ち込んだりして。

「……」

今宵は自分の胸を見た後、声をかけられないのでそのまま席に座り、パンを食べ始めた。

※

晃は生徒会室に来た。

「こんにちは静音さん」

ドアを開けながら晃は挨拶した。

「あ、アキ君。来てくださいましたね」

静音が笑顔で答えてくれた。

「怪我はもう大丈夫ですか？」

「ええ。何とか」

静音は笑顔でお茶を入れている。

「そういえば、翔太とは話しましたか？」

「ええ。翔ちゃん、元気でよかったです」

お茶を飲みながら静音は答えた。

「あの～そろそろ本題いいですか？」

「ええ」

晃は今のが本題でないのかよと思ったがそこはあえて突っ込まなかった。

「実は今度の日曜日。近くのプールからお願いがありまして」

「お願いですか？」

静音はうなずいた。

「それで、その内容が温水プールの試験らしいのですが、よかったら使ってくれと頼まれまして」

「それで、僕となんの関係が？」

鈍感な晃に静音はにっこり笑いながら言った。

「アキ君たちにその試験に招待したいのですよ。日ごろの疲れを一緒に取ろうと思って」
「ああ、そういうことですか。それなら分かりました」
晃はわかったとたん笑顔にそう答えた。
「生徒会も全員来ますから、アキ君の友達全員でも構いませんよ」
「分かりました」

※

晃は生徒会室を出て、教室に向かった。
「あ、アキ兄さん」
花火とばったり出会った。
「あ、花火。ちょうどよかったです。実は一緒に行ってほしいところというか、お願いというか」
晃はあやふやに言った。
「デートのお誘いですか？」
花火は眼を光らせて言った。
「はは。デートとは違いますが」
「違うのですか」
分かりやすく花火は落ち込んだ。

「ですが、みんなと一緒に温水プールに行こうかと、日曜日」
「行きます、行きます！！４０度熱があっても絶ッッ対に行きます」
落ち込んだ姿はどこへと思うほどに花火は思いっきり表情が変わった。
晃は少し驚いている。
「いや、４０度はさすがに休んでくださいよ。でもまあ、そう伝えておきます。楽しみにしますね」
晃は静かに突っ込んだ。
「はい！！私のおニューの水着でトキメキさせますよ！！」
「ははは」と愛想笑いしながら晃は教室に向かった。
だが、花火は本気の本気だった。
教室に入った後、晃は幼馴染ズと舞、泉、伊織にさっきの説明をした。
ちなみにさきまで落ち込んでいた人数が増えていることはまた別のお話。
話が終わった後、全員一斉に行くと断言してきた。
「そうですか。それでは静音さんに伝えておきますね」
そう言って晃は教室を出ようとした。
「あれ？アキ君、またどこかへ行くの？」

結衣が聞いてきた。

「ええ。最後にやはり渚ちゃんにも伝えておいたほうがいいでしょ、仲間はずれなんてかわいそうですし」

そう言って晃はまた教室を後にした。

※

中庭にある図書館へやってきた晃。

本当は携帯でもいいが、図書室は携帯使用禁止なので連絡ができないし、放課後までに伝えてほしいと言われた。

「渚ちゃん、ちょっといいですか？」

「あ、晃さん」

いきなり現れた晃に渚は驚いていたが、さすがにここで大声は出さなかった。

晃につられてそのまんま図書館の外へ出た。

「お、温泉プールですか」

説明した後、渚は納得したように言った。

「ええ。用事が無ければ渚ちゃんもどうですか？」

「は、はい！！必ず行きます！！５０度熱が出ても行きます！！」

なんかさっき聞いた台詞を渚は言った。

「いや、５０度は病院行きなさい」

晃はまたもや静かに突っ込んだ。

「では、槍が降っても」

「うん。誰も外出られませんね」

安易なボケに晃は冷静に突っ込んでいく。

「では、１００」

「それ、生きてますか？」

まあ、とりあえず、何とか全員誘い出すことができた。

あ、ちなみに書かれていないが大吾も一緒に行くことになっている。

第72話　一難さってまた一難（予定）（後書き）

後書きトークコーナ

まだまだ人気投票続いてます！！

大吾「次回は水着の話だ～！！」

晃「テンション上がってますね。誘われシーン無かった言うのに」

大吾「うるさいうるさい！！いいの、次回水着さえ見れでは！！」

晃「これ、小説ですよね」

大吾「……」

晃「図星ですか」

鈴「呆れた」

晃（最後の最後でこの人出てきましたね）

鈴「人気投票ただいま開催中！！」

晃「……宣伝。すでに一番上にありますよ」

鈴「あ！！」

晃「しかも次回は別の話とか」

大吾「うそーん！！」

第７３話　ここに来ての感想（前書き）

前回のあらすじ

温水プール前日。

しかし、今回は別に人のおはなし。
温水プールは次回に持込だ！！

第73話　ここに来ての感想

俺、柊翔太は優輝晃の親友だ。
え？恥ずかしくないのかってか？
そんな関係ない。俺がそう思っているのは事実だ。
てか、幼馴染だけどな、なんかそういったほうが友情感があっていいじゃん。

そして、俺はただいま、その幼馴染権、親友のいま住んでいる町、東皆丘に来た。

用件は晃の関わる事件の援助だ。
実際、聞いたのは昨日。
超特急で希を呼び、ここまで来た。
ついでに学校のほうには連絡は入れてもらっている。
実際、俺がしているわけではないのでよくは分からない。
だが、補習は必ず入る。
それは確かだ。

「あ、翔太。これからどうする？」

希が俺に話しかけてきた。
彼女は俺の幼馴染。そして、俺がひそかに恋している女だ。
この気持ちはいまだに伝えていない。

「そうだな。じゃあ、静ねえに挨拶でも行くか。一様姉弟だしな」

実際、何年もの付き合いなので、普通にしゃべれる。
だが、彼女の気持ちは分からない。

あそこでは晃が異様にモテテいたが、希はそんな風には見えない。
だが、晃にはときどき優しいのは確かだ。
でもまあ、あいつはあれでも一度、記憶喪失になっていたからな。

俺はそう言いながら地図を頼りに生徒会室に来た。
あの静ねえが生徒会長と聞いたときには髪の毛が桂みたいに吹っ飛んでいくようにびっくりした。

まあ、あのやさしい静ねえにはたしかに似合ってはいるが、残念なことにあいつは天然だ。

俺は一回ノックした。

「はい！！」

静ねえの声が聞こえた。
俺はそのまんまドアを開けた。

「おっす、静ねえ。挨拶に来たぞ」
「こ、こんにちは。はじめまして柊先輩」

俺の後ろにいた希も静ねえに挨拶をした。

「はい、はじめまして。翔ちゃんからは話は聞いているわよ。あと、別に名前で呼んでも構わないですよ」
「は、はい」

そんなに緊張するなよ。俺の姉なんだしよ。
ちなにみ希のことは電話やメールで教えている。

だが、もちろん好意のことは一切伝えていない。

「それでね。やっぱり希ちゃんは翔ちゃんの恋人かしら？」
「し、静ねえ。ち、違うって！！」
「ここ、恋人ではありませんわ！！」

俺は一気に否定した。
たしかに希と恋人になれたらさすがにうれしい。
希はなぜか真っ赤に顔を染めながら否定した。
爆弾かこいつは。
しかもなんか言葉が変だ。

「ねえ。翔ちゃん。アキ君の容態はどうだった」

静ねえはいきなり晃の話をしてきた。
よっぽどあいつのことが心配なんだな。

「ああ、大丈夫だ。てか、心配なら保険室に行けばいいのに」
「だめです、いくら生徒会長でも、男の子が病気のときに襲うなんて」
「誰もそんなことは言ってはいない」

俺は誤ったことを言っている静ねえに否定した。
てか、もしかして静ねえ。あいつのことが好きなのか？

「もしかして、静音さんは晃のこと好きなのですか？」

希が躊躇なく質問してきた。
てか、そのことは心の中で思っておけよ！！
俺だって我慢していたんだからさ。

「分からないの。その気持ちが良く」

静ねえはあいからわずの天然だった。
てか、もしも晃と静ねえが結婚したら、俺はあいつの兄になるのか？
そんな近い年下はいやだ。
しかも、俺のほうが誕生日遅いし。

「静ねえ。そういえば、他の生徒会のメンバーはどうした？」

俺は話を変えた。
この話は俺がきつくなるだけだ。
精神的に。

「はい。今は校内を巡回中です」
「あれ？静ねえは行かないのか？」

俺は心配になり聞いた。

「私がやると、見落としが増えるからっていいと言われました」

どうやら本当に天然は治っていないようだ。
てか、静ねえに天然抜いたら何が残る？
あ、胸か。

「じゃあ、俺たちはそろそろ晃に挨拶して帰るわ。またな静ねえ」
「はい。翔ちゃんも元気で」

俺は手を上げて答えた。

※

晃の別れの挨拶が終わり、私のこと、加納希は翔太とともに、待ち合わせ場所に向かっていた。
待ち合わせ場所とは、そこでは【団殺者（ディスター）】専用の車があるの。
まあ、私にとってはこの2人っきりの時間が大切だったりする。

大体こいつもニブチンなのよ。
いい加減私の気持ちに気づいてもいいじゃない。
そ、その、好きだとか。

あ～なんか自分で思ってて恥ずかしい。
と、とりあえずは何か話さなきゃ。

「しかし、驚いたな」
「へ！？何が？」

あ～いきなり話されて声が裏がえちゃった。
なんか恥ずかしい。

「ああ、あいつにあんなに幼馴染がいたということだ」
「あ、ああ。そのことね」

あ～本当にびっくりした。
いきなり話しかけないでよね。
あ、でも私自分で話しかけようとしていたのよね。
なんか変。

「しかし、その幼馴染でも色宝石を持っていたんだな」
「うん。しかも、そっちのほうが先だとか」

そう、色宝石のことも全て晃から聞いた。

それよりも、私が一番気にしたことは。それは。

あの学園の中で気になった人。

もしかしてあの時間のみで好きになった人とはいるかも知れない。

それが私が一番今気にしていること。

「お、迎えだな。ずいぶんと早かったな」

「そ、そうね」

「もうちょっと遅くっても良かったかな」

「ん？なんか言った？」

「いいや、なんでも」

翔太はそう言って顔を別方向にそらした。

本当に何がしたいのやら。

第７３話　ここに来ての感想（後書き）

後書きトークコーナ

美紀「あれ？またわたしたちが出ない話だね」

結衣「てか、今回の後書きコーナもアキ君なしでやるとか」

泉「そうなの？じゃあ、それでがんばるしかないね」

真「でも、話題が無い」

今宵「人気投票がまだある」

美紀「でも、人気投票でそこまで広げられる？」

泉「あ、そうだ。それならみんなでしりとりしようよ」

結衣「い、いいのかな？」

美紀「じゃあわたしから！！りんご！！」

真「ごり押し」

泉「シーラカンス」

今宵「スクーター」

結衣「なんか、アキ君がいないと後書きコーナーが回らない」

舞「基本、突っ込みは晃君一人でやってましたから」

第７４話　温水プール・前編（前書き）

前回のあらすじ

副主人公の気持ち。

晃「あ、翔太って副主人公だったのですね」

第７４話　温水プール・前編

日曜日。
時刻は１１時。
静音が言っていた、プールへとやってきた。
意外と外見はでかく、見るからに室内プールだ。
幼馴染ズは待ち合わせの場所に来ていた。
だが、そこには晃の姿はなかった。

「あ、みんな、おはよう」
「おはようございます」
「おっす」

伊織と花火と大吾が来た。
この伊織と大吾は、実は家が近所らしい。

「おはようございますみなさん」
「おっはよ～」

舞と泉が元気良く挨拶しながらこっちに来た。

「あれ？晃君は？」
「本当ですね。あきにいさんの姿がありませんね」

伊織と花火が不思議そうに言った。

「アッキーなら、一人迎えに行った」
「迎えにですか」
「ああ、一度も行ったこと無いらしいし、友達も近所にはいないか

らって代わりに晃が行った」

透が舞の質問に答えた。

「あ、皆さんもう集まったのですね」

晃の声が聞こえたからみんな注目した。

そしたらそこには一緒に手をつないでいる晃と渚がいた。

「あ、アキ君。これは一体!?」

「あきにい。もしかしてロリコン」

結衣と真が急につめて聞いてきた。

「私、そんなに小さいの?」

渚が悲しそうにつぶやいた。

「うん?どうかしましたか?」

鈍感王の晃がみんなが驚いている理由がまったく分かっていなかった。

「あきにいさんなんで手をつないでいるのですか?」

「そうです晃君」

花火と舞も晃に言ってきた。

「え?ああ。それははぐれないようにするためですよ。日曜日ですし、人が多いので迷わないようにと」

晃は純粋&鈍感な答えを言った。
ちなみに渚は分かっているが少し悲しそうな顔になっている。
みんなその答えを聞いて安心して息を吐いた。
晃もそのことも意味がわからなかった。

「あ、みなさん来ましたね」

静音が生徒会の面子をそろえながら言った。
ちなみに泰子のみ眠そうな顔になっている。

「それでは行きますか。代わりにご案内いたします」

静音の言葉でみんな中に入っていった。

「ふに～アッキ～」

眠そうな顔になっている泰子がいきなり晃に抱きついてきた。

「ちょっと泰子。歩きにくいです」
「む～女の子に抱きつかれているのにそんなこと言わなくたっていいじゃない」

泰子は顔をふくらましながら言った。

「はいはい。あなたはこっちですよ」

ささらが引っ付いてきている泰子をはずして更衣室に向かう。

「それではアキ君。男子更衣室はあっちですので」

「ええ分かりました」
静音が何事もなかったように言った。

※

「プールきたぁぁぁぁ！！」
大吾がプールサイドに入ったとたん、大声で言った。

「元気ですね。大吾」
晃は呆れながら言った。
ちなみに格好は大吾はブリーフ型の水着、なんだかダサイ。
晃はトランクス型の水着だが、上半身にはパーカーとTシャツを着ている。
腕輪とリストバンドもそのままだ。

「お、晃、泳ぐ気無いな。その姿は」
トランクス型の水着を着ている透が言った。

「ちょっとですね。プールや海はニガテなんですよ」
ただ、今回は人のお願いと言うことで断ることができなかった晃であった。
それに、だましていたことのお詫びでもある。
晃がニガテなことを言ったら、大吾がいきなり大声を出して笑った。

「ぎゃはははは。あんなやつと戦っていたやつがプールがニガテってぎゃはははは！！」

その時、大吾の耳元に何かがものすごく早さで通った。
見てみるとそこには銃を持っている晃がいた。

「スミマセン。ですが、次ぎ言ったら首を貫通させますよ☆」

晃は悪魔と言うべきの笑顔で言った。

「す、スンマセン」

大吾は凍りつきながら謝った。
晃はその後、銃をしまった。

「ごめ～ん。遅れた～」

美紀の声が聞こえたとたん、大吾はすぐに声が聞こえるところに目を向けた。
見てみるとそこにはきれいな水着姿の女子たちが並んでいた。
しかもみんなビキニだ。

「そう、アキ君？似合っている？」
「ええ。とても似合っていますよ」
「うん。ありがとう」

結衣の質問に晃は笑顔で答えた。
その笑顔には邪心も嘘も無かった。

「あきにい。私は？」

「あきにいさん私もどうですか？」
真と花火も晃に迫ってきた。
「ええ。きれいですよ」
晃は即答した。
「あ、あきにい」
「そ、そんなきれいなんて」
真と花火は一瞬で顔が赤くなった。
「ど、どうですか？晃君」
舞が恐る恐る言ってきた。
ちなみに舞はワンピースの水着だ。
「ええ。とても似合ってますよ」
晃――以下同文。
そのあと、渚が隠れながら出てきた。
「あれ？渚ちゃん。どうしましたか？」
「え、っと。その」
おびえながら渚は自分の水着姿を見せた。
その格好は、まさにスク水だ。

「ガハッ！！」
「何で！？」

それを見たとたん、大吾は一気に鼻血を出した。
もちろん晃はすぐに突っ込む。

「スミマセン。遅れました」

最後に生徒会の面子が出てきた。
そして震えている静音の胸を見た大吾はもちろん。

「ガハッ！！」
「だからなんで！？」

こうして波乱？のプールが始まった。

第７４話　温水プール・前編（後書き）

後書きトークコーナ

人気投票開催中！！

大吾「とうとう今日はプールだ！！」

鈴「あんたは一番連れてきたくない人物だけどな」

大吾「なに言っている！！残念ながら俺は巨乳好きではない」

鈴「いや、聞いていないし」

大吾「俺は巨乳、貧乳、美乳。全てを受け入れる心がある」

鈴「誰かこいつ止めて！！」

静音「本当にアキ君がいないと回りませんね」

第７５話　温水プール・後編（前書き）

前回のあらすじ

大吾は貧血で明日を生きれるのか。

晃「いや、知りませんよ」

第７５話　温水プール・後編

鼻血を出して気絶した大吾はほっといて、静音たちはプールに入った。

「あはっ！！気持ちいいね」

結衣が入りながら言った。

「温泉とは違い、泳げるからな」

鈴が元気よく言った。

「あれ？あきにいさんは入らないのですか？そんな格好をして」

「え、ええ。まあ」

花火の質問に晃は曖昧に答えた。

何かを察知したように花火はにやりと笑った。

「もし泳げないのなら、私が泳ぎを教えましょうか？」

プールから出てきて花火が晃に言ってきた。

「え、え～と。そういうのではなくて」

「遠慮はいりませんので、さっ早く！！」

そう言って花火は晃が来ていたパーカーとＴシャツを強制に脱がせた。

「あ、あきにいさん。いい体してますね。えい！！」

そう言って花火は行きよい良く後ろから晃に飛びついた。
場所はパールサイドでしかも一番プールに近いところ。
行きよい良く飛びついたので2人ともプールに入っていった。

「あはははは。作戦大成功です。あきにいさんどうですか」

だが、返事はない。

「あ、あきにいさん？」

花火がもう一度声をかけたら晃が上がってきた。
だが、返事はない。ただの屍のようだ。

「って、本当に屍になってます！！」

花火が言った通り、晃はプールに浮いてそのまま動かない。
おそらく気絶している。

窒息する前に花火は晃をプールサイドに戻した。
あまり重くない晃はうまく上がれた。

「あ、あきにい。どうしたの！？」

その光景を見た真がこっちに向かってきた。

「あはははは。なんか気絶したっぽい」
「あ、あきにい」
「おきろ～アキー！！」

泉がいきなり晃の腹を蹴った。
だが、その荒療治が成功したのか、晃は水を出しながら気を取り直した。

「がっは、がっは!!」
「お、復活した」

荒療治をした本人の泉が感心していた。

「た、助かりました」
「その、あきにいさん。ごめんなさい」

花火は頭を下げて謝った。

「そんな。いいですよ。知らなかったわけですし」

晃は手を振って花火を許した。
それを聞いたとたん、花火は顔色を明るくして、晃に飛びついた。

「ありがとうございます!!あきにいさん!!」
「あ、花火ずるい!!私も!!」
「あ、いいな。じゃああたしも!!」

そう言って花火に続いて真、泉もくっついてきた。

「ちょっと、2人とも!!」

晃は手間取りながら言った。

「3人とも、何しているの？」

黒いオーラ感じたのか、4人とも後ろに振り向いた。
そうすると、後ろにいたのはにこやかに笑っている結衣だった。
晃は気づいていないが、くっきりと怒りマークが結衣の額にあった。

「ちょっと、3人とも来て」

そう言って結衣はそのままスルーした。
だが、プールに入った瞬間、結衣は裏モードは発動した。

（ううん、ずるい！！ずるい！！私だってアキ君にくっつきたいのに！！）

そのあと、海坊主みたいに時々頭の少しを出して3人を驚かせた。
恋する乙女の嫉妬は怖い。

「晃。お前、本気で泳がないのか？」

3人がいなくなったとき、今宵が晃に話しかけてきた。

「ええ。まあ」
「そうか。それは良かった。ではこれを」

そう言って今宵は晃に何かを渡した。

「なに？これ？」

晃に渡されたものはスケッチブックと筆箱だった。

「なに、簡単だ。私の変わりにこのプールのスケッチをしてほしいのだ」
「ああ、そういうことですか。分かりました」
そう言って晃は筆箱の中身をあさりだした。
「引き受けてくれるのか？」
「ええ。まあここにいても暇ですのでちょうど良かったです」
そう言って晃はスケッチを始めた。
「そうか。できばえを楽しみにしているぞ」
「ええ。がんばります」
そう言って今宵もプールに入った。

※

こうして2時間ぐらいたった。
復活した大吾が次々に写真を取っていく。
「おお！！これはいいアングル！！」
「ちょっと、どこ撮っているの！？」
泰子のお尻を取ろうとした大吾だが、見事に後ろ蹴りを食らった。
「そ～れ！！」
そして、ここではビーチボールをしていた。

「会長さん。行きます！！」
舞が静音にパスをした。
「はい！！」
静音もみごとにパスを返した。
しかし、ジャンプして返したため、豊満な胸が見事に揺れている。
「ゴハッ！！」
大吾がそれを見て鼻血を出した。
「何で！？」
その光景を見ていた晃が突っ込んだ。
「晃さん。これいりますか？」
渚が晃にジュースを一本差し出してきた。
「あ、ありがとうございます。渚ちゃん」
「あ、あの、となりいいですか？」
遠慮ぎみに聞いてきた渚に対して晃は優しく微笑みながら「いいですよ」と言った。
「あの～晃さん」
「なんですか渚ちゃん」

渚が何か話しかけようとしているんで晃は真剣に聞こうとした。

「いいえ。何でもありません」

渚は首を振ってそういった。

「ゴハス！！」

渚の姿がかわいかったのか、大吾はまた鼻血を出した。

「だから何で！？」

第７５話　温水プール・後編（後書き）

後書きトークコーナ

人気投票ただいま開催中！！
詳しくは活動報告で。

大吾「じゃあ、これで後書きは終わりで」

晃「いや、ダメですから！！」

大吾「だってどうせ男子キャラに投票なんて来ないぜ」

晃「そう落ち込まないでくださいよ」

透「いや、晃。それはお前にも言えるんだぜ」

晃「ええ。知ってますが」

大吾「お前……」

晃「うん？」

透「心強いな」

結衣「アキ君がいるから話が回っている！！」

第７６話　温水プールのその後（前書き）

前回のあらすじ

まさかの同じ終わり方！！

晃「なんかやな予感がします」

第76話　温水プールのその後

あれからさらに2時間たった。
プールはお開きにして男子軍は外で女子軍を待っていた。

「死ぬかと思った」
「輸血してる人がなに言っているのですか」

あれから大吾は3回ぐらい鼻血を噴射。しかも結構な量で。
そのため今は血を輸血中。

「おまえもう帰れ」

透が呆れながら言った。

「お待たせしました」

静音を先頭に女子軍が戻ってきた。

「晃。絵のでき前はどうだ?」
「絵って?」

今宵の言葉に結衣が聞き返す。

「実は僕、ずっと見ているのも暇でしたのでスケッチをしていたのですよ」

晃は書いたようなジャスチャーをしながらいった。

「で、どうだった」
「まあ、なかなかなものだと僕は思いますよ」
そう言って晃はスケッチブックを見せた。
そこには楽しくプールで遊んでいる女子軍の絵があった。
みんなその綺麗さに一瞬声を失った。

※

あれからみんなでどこに行くか決めながら歩いていた。
「そういえば、もうすぐクリスマスですね」
静音が話題を出してきた。
「お前らのほうはもう出し物決まったのか？」
「出し物ですか？」
鈴の言葉に晃は疑問を持った。
「おいおい、生徒会たるもの、そのことは知っておけよ」
呆れながら鈴は言った。
だが、実際、晃はほとんど何も知らずにここへ転向してきた。
学園でのクリスマスパーティなんてめずらしい行事を知るはずもない。
「東の丘学園では毎年、１２月２４日にクリスマスーパーティ、まあ名前はそんなんですが、中身はほとんど文化祭とは変わりがありません」

ささらが説明した。

「と、なりますと、僕たちのクラスって」

「うん。まだ何も決まってないわね」

伊織がさらっと言った。

「まあ、文化祭と違って、1日しかないし、呼べるのは学生が招待した人のみよ」

伊織が続けて説明した。

「でね。生徒一人に一人しか招待できないの。だからそんなに大きくなくっていいの。実際僕もその後の後夜祭の方が楽しみだから」

泰子がわくわくしながら言った。

「そうですか。残念です。もし良かったら科学都市の僕の友人招待したかったです」

晃はがっかりしながら言った。

「あ、アキ君。それなら私の招待券使わない？」

結衣が晃に言ってきた。

「え！？いいのですか！！」

「うん。私の友達全員同じ学園だしね」

目を輝かせている晃に結衣は遠慮なく言った。

「私は翔ちゃんに渡すのでそこも心配ありません」

「うん。わたしも別に使うことはないからね」

美紀も笑顔で言った。

そのあと、幼馴染全員、晃に招待券を譲ると言ってくれた。

「そういえば、1組のほうはまだ見たいですが、4組はどうですか？」

ささらは話題を切り替え、聞いてきた。

「なははは。それがこっちもまだ」

泰子が頭をかきながら言った。

「でも、ちょうどいいのでここで1，4組のアイディアでも決めましょうか」

花火が提案してきた。

「あたしは3組だけどいいよ」

「私も構いません」

泉と舞は言った。

「じゃあ、喫茶店は！？」

美紀が挙手しながら言った。

「却下です！！この前やりましたし、また女装はいやです！！」

晃が速攻で断った。

「まあ、普通そうよね」

伊織が言った。

「じゃあ、お化け屋敷は？」

結衣が提案してきた。

「まあ。ここにいるだけで怖い大吾がいるからね。いろんな意味で」

「どういう意味だよ！！」

伊織の言葉に大吾は突っ込んだ。

「否定できないところがすごいですね」

「晃！！そこは否定して」

大吾が悲しそうに言った。

「じゃあ、俺は水着喫茶と言うのはどうだ？女子は全員水着で」

『却下！！』

「はい」

全員に突っ込まれたので大吾は小さくなった。

「じゃあ、４組はとりあえずお化け屋敷で」
真が花火に言った。
「まあ、それでいいわね。とりあえずは」
「じゃあ、１組はどうする？」
４組が決まったのであせりながら伊織は言った。
「じゃあもうとりあえずエロイのやろぜ！！」
「うん。とりあえず一回来世まで死んだほうがいいですよ」
晃がにっこりしながら大吾に言った。
ただ、その笑顔はものすごく怖い。
多分、そのことに気づいていなかったら、大吾の輸血パックは全部なくなるだろう。
「あの～また喫茶店でスミマセンが、ケーキを販売したらどうですか？」
渚が提案してきた。
ちなみにさっきまで渚と舞は２人で何か相談していたらしい。
「販売ですか？」
「はい。紅茶とケーキなら結構な人の人気が出ると思います」
舞が説明した。
「僕はいいと思いますが、伊織は？」
「うんいいじゃない。また喫茶店みたいになってしまうけど、それ

なら別に燕尾服やメイド服はいらないわね」

伊織が納得してくれた。
舞と渚は微笑みだした。
こうして日曜日は楽しく（一人死線を見かけた人はいるが）終わった。

「ガハッ！！」
「何を想像した！！」

皆さんで考えてみてください。

第７６話　温水プールのその後（後書き）

後書きトークコーナ

ただいま人気投票開催中。投票待ってます！！

泉「あれ！？本編終わった？」

晃「一体何を考えていたのですか？」

泉「それはね。ジャーン！！こういうのはどう」

舞「泉ちゃん。うまく見れない」

泉「え？ちゃんと見える方向でしょ？」

晃「そういう意味ではなくって」

舞「問題は絵」

泉「ぅ！！」

第77話　クリスマス前の期末テスト（前書き）

前回のあらすじ

2度あることは3度ある。

晃「あれは無理に3度目にした気がありますが」

気にしないでください！！

第77話　クリスマス前の期末テスト

次の日。
朝のＨＲでクリスマスパーティの出し物が決まった。
もちろん決まったのはケーキと紅茶店に決まった。

「アッキーのケーキ楽しみだな～」

美紀が楽しそうに言った。

「え!?僕が作るのは決定ですか?」

晃は驚きながら言った。

「アキ君が作らなければ誰が作るの?」

結衣も言ってきた。

「なんかそう言われるとなんかプレッシャーがすごいですね」
「で、その前にみんなは期末テストは大丈夫なの?」

『……』

一気にみんな無言になった。

「てか、忘れていたみたいに見えますよね」
「うん。１００パーそうね」

晃と伊織は固まっている人たちに向かってため息をした。

※

休み時間。
昼食を取り終わったところで、いつものメンバーを集めてテスト対策をするようになった。

一様教えるのは晃、伊織、舞、花火、今宵、渚となっている。
あと、静音と鈴、さらにはささらと泰子まできてる。

「はい！！俺に提案がある！！」

大吾がいきなり手を上げてきた。

「なんですか大吾！！」
「できたら俺には柊先輩と朧の巨乳コンビでの眼鏡つきで手取り足取教えてほしいです！！」

冷たい風が吹いた気がした。

「鈴さん、大吾のことは頼みました」
「よし、任された！！」

そう言って鈴は大吾を別の机に引っ張った。
泰子も鈴に呼ばれて一緒に教えることにした。

「こんな貧乳コンビはいやだ～」
「「誰が貧乳だ！！」」

大吾は早速2人の怒りを買った。

「それで、次に下心付きの考えを持っている人はいませんよね」
晃は笑顔でみんなに言った。
みんなありませんと言うように首を横に振った。
「あの～本当に私も参加していいのでしょうか」
渚が遠慮がちに聞いてきた。
ちなみに渚の成績は前回の中間テストで晃には適わなかったが、2位に上り詰めている。
晃は渚の肩を抱いた。
「渚ちゃんの力が必要だからこそ呼んだのですよ。自分をそんなに過小評価しないでください」
そう渚にやさしく伝えた。
渚はその言葉を聞いたら落ち着いたらしく、うなずいた。
「では、早速行きますか」
こうして何名かの死線を彷徨う戦いが始まった。
※
昼休みの終わりのチャイムがなった。
教わるほうの人たちはもう疲れきっている。
「み、みなさん。お疲れ様です」

机に伸びている全員に晃は声をかけた。
だが、結衣、真、透はまだマシなほうである。
美紀と泉なんか魂が抜けかけている。
「ちょ、2人とも大丈夫ですか？」
晃は美紀と泉に声をかけた。
「あ、三途の川が見える。渡っていいのかな？」
泉が魂ごとそう言った。
「泉、ダメです！！その川は渡っては！！」
「あ、死んだおじいちゃんが見える。今行くね」
次は美紀がこうつぶやいた。
「美紀、まだおじいさん死んでいませんよね。早く起きてください」
晃は美紀の方をぶんぶん振った。
「おうおうおう」
「おうおうおうではありません！！」
ちなみに美紀のおじいちゃんはマジで生きてます。
「ねえ、あきにいさん。あれ！！」
花火は晃の肩を叩きあれを見てと指を刺した。

そこにはいかにも、いや、完全に魂を抜かれている大吾の姿が。
ちなみに何個かたんこぶもできている。

「ふう。いい仕事した」

鈴は少し血が付いているはりせんを持ちながら言った。

「鈴さん？それは一体？」

晃は心配になって聞いた。

「ああこれ、お仕置き道具。ちなみに血はさっき付いたものだから安心して」

鈴が笑いながら言った。

「いや、安心できませんよ」

しかし、魂抜かれるだけで済んだなと晃はある意味感心した。
こうして何とか？これを４日ぐらい続けたあと、期末試験当日になった。

※

「ブツブツ」

大吾が真剣に何かを暗記していた。

「す、すごく気合入ってますね」

晃が言った。

「晃。お前は三途の川の中心って知ってるか？」

「よく、今生きてますね」

晃は関心と呆れが入った言葉で言った。

そしてテストの時間が終わった。

「どうだったの？大吾」

「美紀はどうでしたか？」

晃は美紀に聞いた。

「もう、無理」

晃は声を出さずに顔を引きずっていた。

「で、大吾はどうでしたか？」

「俺は自身あるぜ！！」

大吾はかっこつけながら言った。

「で、ちゃんと名前書いたの？なんか心配だけど」

「……」

「「え！？」」

いきなり無言になった大吾に察した晃たちだった。

こうして問題の期末テストは終わった。

いろんな意味で。

第77話　クリスマス前の期末テスト（後書き）

後書きトークコーナ

ただいま人気投票開催中

ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｉＩ２Ｎｗ７ｐ

伊織「で、どうだった？テストは？」

大吾「名前の部分、ずれていて、名前がアレクサンドロス大王になっていた」

伊織、笑いながら「ドンマイ、アレクサンドロス大王君」

大吾「俺はどこかの観察処分者かよ！！」

伊織「ちなみに学年は？」

大吾「……８４５年」

伊織「ぎゃはははは！！」

第７８話　恋を呼ぶウイルス（前書き）

前回のあらすじ

まさかのテスト前で魂が抜ける。

第７８話　恋を呼ぶウイルス

季節は冬。
そして１２月。
今年最後の月である。

寒くなってきたので、コートを着てくる生徒も増え来た。

「うう。寒くなってきたね。あきにい」

コートを着ながら真が言った。
幼馴染全員コートを着ている。

「そうですね。やっぱりもう冬ですからね」

そういう晃もコートを着用している。

教室に入ると、伊織が話しかけてきた。

「やあ晃くんたち。やっぱりもう時代は冬だね」

伊織はのんきにそういった。

「そうですね。これからは鍋料理がおいしくなりますね。いろんな鍋調べといたほうがいいですね」
「晃くん。主夫モード入っているよ」
「なんですか。そのモードは」

晃が呆れながら言った。

伊織は冗談と言いながら笑っている。
そのとき、教室のドアが開いた。

「あ、晃さん。います？」

ささらがそう言いながら教室に入ってきた。

「どうしたのですか？ささらさん」
「それがですね」

とりあえず、晃はささらに付いていった。

「これ、見てください」

ささらは大きな車を見せてきた。
黒塗りでリムジンだ。
ささらが大金持ちだと言うことがわかる。

「この車がどうかしたのですか？」
「それが、なかのコンピュータがおかしいのですよ」
「コンピュータですか？」

ささらに言われて晃は車の中に入った。

「ああ。これですか」

晃は見ながら言った。
だが、晃の顔色がいきなり変わった。

「これは、伝染系のコンピュータウイルスですね」

晃はわかったらしく、説明した。

「ウイルスですか？」

「はい。これだと感染源を見つけないと直らないですね」

晃はお手上げですねと言いながら説明した。

そのあと、晃はＵＳＢを出した。

差し込んだら１分ぐらいで取り出した。

「どうするのですか？」

「これを使って感染源を見つけます」

そう言って晃は校舎に向かった。

ささらも同時に追いかける。

「どこに行くのですか？」

「教室です。そこでＰＣを使わせてもらいます」

「なんで教室？」

「電波が通りやすいからです」

１年１組の教室は４階にある。

高いところのほうが電波は通りやすい。

たださえこの東皆丘は電波が通りやすい。

晃はロッカーを空けた。

手を中に入れて、ＰＣを【呼び出し（コール）】した。

他の人にはこのことは言っていない。

こうして誤魔化すしか方法がない。

晃は【呼び出し（コール）】したあと、教室に入った。
ささらも同時に入る。

「あれ？アキ君。どうしたの？」
「すみません。ちょっと集中します」

晃はそう言いながらＰＣの電源を入れた。

「アッキー。どうしたの？そのＰＣは？」
「美紀、察しなさいよ」
「へ？」

結衣は美紀に言った。

「どう考えても【呼び出し（コール）】したに決まっている」

真が言った。

晃はその会話を聞きつつＰＣに先ほどのＵＳＢをさした。
ＰＣの画面が次々に変わっていく。
これはウイルスに感染してしまった。
だが晃は冷静に【ギア】を取り出した。

晃が持っている【ギア・一００－ＳＡＲＡＯ《ダブルオー－ソラオール》】は科学都市で作られた携帯の進化版だ。
詳しくは第７話で。

晃はギアをあるコードに接続した後、ＰＣにもそのコードを接続させた。
そのとき、また画面が変わった。

そのあと、晃はキーボードをものすごい速さで打っていった。
画面を見ればどんどん情報が処理されていくのが分かる。

「アキ君。早い」
「晃さん」

事情を知っているささらはいまは願っていた。
それから5分後。

「分かりました！！放課後、そこに向かいましょう」

※

晃はささらと一緒にある場所に来た。

「ここですね」

晃たちが来たのは古い廃墟ビルだ。
晃は躊躇なく入っていった。
ささらはそれを追いかける。

「くっそ、だったらこれでどうだ」

体が太い男がＰＣの画面を見ながらつぶやいた。

「何がですか？」
「あん、ここのセキュリティー硬いんだよ……って、誰？」

男の後ろには銃を構えている晃がいた

「【団殺者（ディスター）】です。あなたを捕まえに来ました」

こうして簡単に事件は解決した。

「あ、ありがとうございます。晃さん」

ささらは頭を下げた。

「そんな。いいですよ。おかげで影響も少なく済んだので」

晃はささらに言った。

「そんあことないですよ。今度お礼させてください」

「いいですよ。気持ちのみで」

「そんな、私がゆるせません」

そう言ってささらは考え始めた。

晃は行きますよといった後、ささらは何かをいい案を考えたようだ。

「晃さん」

「ん？」

そのとき、ささらの唇が晃のほっぺに当たった。

「さ、ささらさん？」

「男の子はこれがうれしいと聞きました」

「は、はあ」

「これで私は決めました」

「何をですか」

晃は聞いた。

このとき、夕日でささらが顔が赤いことには気づいていない。

「私まけませんから！！」

第７８話　恋を呼ぶウイルス（後書き）

後書きトークコーナ

鈴「とうとうささらも晃に取り付かれたか」

ささら「と、取り付かれたってなんですか？」

鈴「でも、晃のことを好きになってしまったのは確かだろう」

ささら（ボン！！）

鈴「ありゃ、図星か」

ささら「ひどいです。鈴さん」

晃「あと、ここでお知らせです。人気投票ですが、まったく票が来ないということで締め切りを延ばそうと決めました」

ささら「そういうことで、８月１３日までに延ばします」

鈴「切り替えはや！！」

晃「投票方法は今までとは変わりありません。詳しくはｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｉＩ２Ｎｗ７ｐまでです」

第７９話　料理部（前書き）

前回のあらすじ

ささら、本格ヒロイン入り！！

ささら「そ、そんな恥ずかしいこといわないでくださいよ！！」

第７９話　料理部

放課後。
晃、美紀、結衣、舞、泉は一緒に帰ろうと廊下を歩いていた。

「あ、ソラさんにみなさん」
「こんにちは渚ちゃん」

そこでばったりと渚とであった。

「渚ちゃんは今から帰りですか？」
「はい。少しこっちに用があって。あ、でももう終わりましたよ」
「そうですかこっちも同じみたいなものです」

ついさっきまで静音に呼び出されて、プリントの整理を手伝わされていた。
人数が多かったのですぐに終わったのはいいが、あの人のドジは何とかならないのか。
ちなみに真と今宵は部活。透は別の人と帰った。

「よかったら一緒に帰りませんか」

晃は渚に言った。

「え！？いいのですか」

渚は微笑みながら言った。

「ええ。いいで……」

晃が最後まで言葉を言う前にいきなり消えた。
いや、ちょうど隣にあった教室に引きずり込まれたのだ。

「ちょっと？アキ君？」

６人は急いでその教室のドアを開けた。
そこには何かを晃にお願いしている女子生徒が何名かいた。

「あ、アッキー？」
「あ、みなさん。どうやらこの人たちがお話があるようでして」
晃はとりあえず話を聞くことにした。

※

今、晃たちがいるところは家庭科室。
２年生の教室の手前にある。
そして、この人たちは料理部の人たちだ。

「で、なんでアキ君を連れ込もうとしたの？」

泉が聞き出した。

「実は、優輝さんに料理を教えてほしいのです」

一番前にいた女子生徒が言った。

「料理って、ここ料理部では？」
「はい。ですが、今年の文化祭で私たちはある事件が発生しました」

舞の質問にその女子生徒は答えた。

「事件？」

晃はあいづちをした。

「はい。実はまったく、私たち、料理部の料理が売れなくなってしまいました」

そのとき、晃たちは動揺した。

多分ではなく、完全にあのとき、ほとんどの客が1年1組と4組の合同喫茶店で満足していってしまったのだ。

「そこで、考えました。もしかしたら私たちの料理の腕がまだまだダメだから客が来なかったのだと」

その女子生徒は拳を強く握った。

「そこで考えました。優輝さん」

「は、はい」

「あなたは以前、家庭科の調理実習の授業でありえないほどの料理の腕前を見せて、何人かの女子の自信を喪失させたことを」

そう。前のお話で晃はクラスの女子を料理で自信を喪失させたことがある。

しかも、前にそこのことがさらにもう一回あった。

「そこで、私たちはその優輝晃さんに料理を教えてほしいのですが」

「いいですよ」

晃はあっさり言った。

「あ、アキ君！？」

「驚くことはないでしょう。前の文化祭だってどうやら話のよると、僕たちのせいでこうなったしまったのらしいのですから、少しのお詫びですよ」

「あ、ありがとうございます！！」

『ありがとうございます！！』

こうして晃は料理部にクリスマスパーティまで料理を教えることになった。

※

次の日。

晃と、なぜか渚は料理部にいた。

「お願いします。優輝先生！！」

一番前にいる女子生徒、この料理部の部長である2年1組の熊谷祥子（くまがいしょうこ）だ。

3年は文化祭後、引退している。

「で、なぜに渚ちゃんも？」

「あ、私がお願いしたのです」

もう一人の女子が手を上げてきた。

名前は伊蛹真帆（いさなぎまほ）。渚と同じ1年6組である。

「そうなのですか。と、言うことは渚ちゃんも料理は上手なのですか」
「はい。もう弁当のご飯なんて神の領域です！！」
「か、神ですか」
張り切る女子を前に晃と渚の料理教室が始まった。
日がないのでとりあえずはクリスマスに出すメニューを決めて作り出すことに決めた。
「優輝くん。私たちはケーキだったわよね」
晃と同じクラスの藤直子（ふじなおこ）が話しかけてきた。
「そうですね。部長さん。予定ではなにを？」
「とりあえずはミニローストチキンかな」
祥子は思い出しながら言った。
「そ、それは高値ですね」
晃は大丈夫か？と思いながら言った。
「そうね。後はポテトフライかな？」
直子が言ってきた。
「よし、フライドポテトは決定です！！」
晃は速攻でそういった。

「やっぱ優輝くん。噂どおりフライドポテト好きみたいね」
「それ、どういう噂ですか」
晃は呆れながら言った。
しかし、フライドポテトに目がないのは確かだ。
とりあえずはフライドポテト以外にも豚汁を作ろうと決めた。
「では、これを基本に作っていきましょうか。部員は確か12人ですよね」
ここの料理部は意外と部員が多い。
「仕方ないですね。渚ちゃん。ここは半分で面倒見ましょうか」
「は、はい」
渚はいきなり声をかけられて驚いていた。

※

帰り道。
とりあえずはなかなかの指導ができた。
「さて、こんな時間ですね」
晃は時計を見た。
実際、こんなに残ったのは文化祭以来だ。
「渚ちゃん。家まで送りますね」

晃は渚に声をかけた。

「そ、そんな、め、迷惑では？」

「大丈夫です。買い物は済ませているのでちょっとぐらい遅れても」

実際、腹ペコ大王の真がよくないのだが、晃はここは女の子を一人では帰らせたら危ないと思う気持ちのほうが上だった。

大体、今は冬なので日の暮れも遅い。

もうすぐ暗くなり始めている。

「そ、それではお言葉に甘えさせてもらいます」

「了解です」

いまだに渚は迷惑そうにしていた。

第７９話　料理部（後書き）

後書きトークコーナ

人気投票開催中＝ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｉＩ２Ｎｗ７ｐ

渚「晃さん。今回は発表があるそうですね」

晃「そうなのですよ渚ちゃん。実はこの小説が作戦参謀さんが書く、【魔法少女に会っちゃった場合】とのコラボが次回載せます！！」

渚「作戦参謀さん。本当にありがとうございます」

晃「それでは次回、楽しみにしていてくださいね」

渚「【魔法少女に会っちゃった場合】でも、作戦参謀さんがコラボ小説を書いてくれましたので、そちらも必見です」

＊魔法少女に合っちゃった場合＝ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ０７０２ｕ／

第８０話　Ｍａｇｉｃｉａｎｇｉｒ／Ｓｔｏｒｙ・前編（前書き）

今回は作戦参謀さん作の『魔法少女に合っちゃった場合』とのコラボです。

『魔法少女に合っちゃった場合』の本編とは関係ありません。

後書きでちょっとしたコラボコーナーをします。

作戦参謀さん。本当にありがとうございました！！

第８０話　Ｍａｇｉｃｉａｎｇｉｒ／Ｓｔｏｒｙ　・前編

晃たちは写真部でのお願いで写真撮影に来ていた。
場所は春には満開で有名な観光地だ。
いまは１２月だが、川にはたくさんの鳥が来ているということで自然もありすぎるほどと言えるほどのものだ。

とりあえずはいつのも幼馴染ズや、生徒会の面々、クラスメイトの大吾と伊織、さらには花火と渚も来ている。

「いや～写真撮影なんて懐かしいですな～」

美紀は猫のような口をして言った。

「いや、美紀。別に君を撮るわけではないのですが」

晃は突っ込んだ。

「ねえアキ君。あの人たち先客かな？」

結衣が指を刺していってきた。

「でも、ここって有名な観光地ですよね」

渚が不思議そうに言った。

「確かにそうですが、やっぱり季節と言うものがありますからここはこの季節はさすがにひとはすくないのですよ」

静音が説明した。
自然は多いことにここは埼玉でも千葉でも有名だ。
だが、自然だけでとくに冬に来るひとなど相当な物好きでしかいない。

「でも、結構人数多いですね」
「アキ、私話しかけてくるね」
「え!?ちょっと、泉?」

そう言って泉はその人たちに話しかけて行った。

「すみませ~ん。なに撮っているのですか」

泉は近くにいる少年に話しかけた。

「え?お、おう」

さすがにこれには驚いた少年は表情を隠せない。

「どうしたのですか?けーすけ様」

もう一人、小柄な少女がきた。

「あ、圭介。あんたまたナンパしてるの?」

さらにもう一人の少女が言いながらきた。

「違うから!!俺はナンパなんかしてねえし、話しかけられただけだ!!」

「すみません。僕の連れが迷惑をかけてしまって」
男が少女の言葉に突っ込みをいれたとき、晃が話しに入ってきた。
そのあと、美紀たちが後を追ってきた。
「お、おう。べつにいいだけど」
「あ、お兄ちゃん。なんかたくさんの女の子と話している」
また小柄な少女が現れた。
「なになに、お、しかもみんなかわいい！！」
「ほほう。藤島くんもとうとうナンパも始めたか」
男2人がいきなり現れて言って来た。
「いや、してねえから！！でなんであんたらはここにいるんだ」
「あははは。どうもはじめまして。僕は優輝晃といいます。いまは学校の生徒会の用でここにきました」
晃は愛想笑いをしてから丁寧に自己紹介をした。
「お、おう。俺の名は藤島圭介（ふじしまけいすけ）だ。よろしく」
圭介と言う名の男も挨拶した。
「しかし、なあ。全員生徒会なのか？」
「いいえ。生徒会の人は数名だけですよ、。ほとんどが手伝いに来てくれました」
「そ、すごい。同じ主人公なのにあの会話」
「はい。優輝さんのほうが賢そうに見えます」

圭介の同行人の国宗伊吹（くにむねいぶき）と木下暮葉（きのしたくれは）がごにょごにょいった。

「おまえら！！いくらなんでもそれはねえだろ！！」
「そういえば、藤島さんたちはどうしてここへ？」
「うん。私たちは写真部の活動に来たの」

体が小さい少女が晃たちの会話に入ってきた。

「えっと。君は？」
「はい。私はお兄ちゃん一筋の藤島葵（ひじしまあおい）といいます！！」
「そうですか。よろしくお願いします」
「それよりもそれよりも」

一人の男がこっちに来た。

「女の子たちの名前を知りたいな」

何名かに殴られた。

※

このあと、みんな自己紹介をした。
さっき、殴られたのが長宗我部大吾（ちょうそがべだいご）、もう一人の男は重原広敏（しげはらひろとし）。そして背が高いのが浅間秀樹（あさまひでき）あとは割愛して馬鹿3人組だ。実際、その3人は姿が見えない。
女子はさっきの3人と他には冷静そうな顔をしているのが明智凪紗（あけちなぎさ）、ふがいない兄（秀樹）を残念そうに見ているあかり、おとなしそうにしているの青山千早（あおやまちはや）、みんなの反応を楽しんでいる小阪亜紀（こさかあき）

「ねえ、妹キャラの恋って報われないよね。私がそんなことタイムスリップしてでもやりとげる」

なにをだ。と、ツッコみたいが、どうやら真と葵が仲良く話している。内容に問題が無ければいいが。

「そうね。でも、私たち義理の兄妹だから」

「え!?そうなのうらやましい!!でもでも、やっぱりエロ本は妹ものじゃないとゆるせないよね!?」

「あきにい。あるの？」

真はにらみながら晃に聞いた。

「あるわけ無いでしょう」

「じゃあ、他のエロほ…」

「それもありません」

晃は動揺せず言った。

「む～」

「なんかものすごく心が綺麗な人ですね」

そのやり取りを見ていた暮葉が言った。

「そのことば、なんだか俺が引っかかるんだが」

「気にしないでください。けーすけ様☆」

「できるか!!」

「で、優輝さんたちは何を撮るのですか？」

わくわくしている目で千早が晃に言った。

「そうですね。なんだか、できるだけ本当に自然にできた現象のものを撮りたいですね」
「たとえが鳥がものすごくでかい虫を食べているところとか？」
今宵がそのシーンを描いた絵を晃たちに見せた。
「今宵。そんなもの撮りませんし、怖いですその絵」
晃は見慣れているので冷静に突っ込んだ。
千早は驚きで混乱しておる。
「ん？渚ちゃん。あの鳥知ってますか？」
晃は渚を呼んだ。
「なんだ。いきなり下の名前で呼んでなれなれしいやつだな」
凪紗がそう言ってきた。
だがざんねん。晃が呼んでいるのは凪紗では無く渚だ。
「いえ。明智さんではなく、藤森渚ちゃんを僕は呼んだのですが」
漢字は違うがやっぱり名前の読みが一緒はやりにくい。
「それで、晃さん。なんですか？」
そう言って渚は話題を戻した。
「ねえ。君、すこし話でもど…ぐあはっ！！」

静音に話しかけた秀樹は一瞬で鈴に顔面を蹴られた。
だが、なぜかうれしそうに秀樹は倒れた。

「なにやっているのバカ兄貴」

あかりは頭を抱えながらつぶやいた。

「あっちのおにいさんは残念そうな人ですね」

同情しながら花火は言った。

「もうちょっと晃さんを見習ってほしいよ」
「そうですね。あきにいさんは最高のお兄さんですですから」

微笑みながら花火は言った。

第８０話　Ｍａｇｉｃｉａｎｇｉｒ／Ｓｔｏｒｙ・前編（後書き）

今回は『魔法少女に合っちゃった場合』でやっていたイメージＣＶを『Ｆｒｅｅｄｏｍ／Ｓｔｏｒｙ』バージョンで公開します！！感想、否定あったらどうぞ言ってください。

優輝晃：代永翼（おおきく振りかぶって：三橋廉）（テイルズオブエクシリア：ジュード・マティス）

優輝真：釘宮理恵（灼眼のシャナ：シャナ）（銀魂：神楽）（緋弾のアリア：神崎・Ｈ・アリア）

一之瀬美紀：井口裕香（とある魔術の禁書目録：インデックス）（まよチキ！：近衛スバル）

羽衣結衣：堀江由衣（化物語：羽川翼）（ぬらりひょんの孫：雪女（氷麗））

朧今宵：伊藤静（Ｄ．Ｇｒａｙ－ｍａｎ：リナリー・リー）（ハヤテのごとく！：桂ヒナギク）

水戸透：櫻井孝宏（Ｄ．Ｇｒａｙ－ｍａｎ：神田ユウ）（テイルズオブグレイセス：アスベル・ラント）

神下舞：茅原実里（涼宮ハルヒの憂鬱：長門有希）（みなみけ：南千秋）

源泉：沢城みゆき（化物語：神原駿河）（テイルズオブエクシリア（ミラ＝マクスウェル）

小方伊織：くまいもとこ（ＭＡＪＯＲ　１ｓｔ　ｓｅａｓｏｎ：本田吾郎）（Ｍ？Ｒ－メルヘヴン－（虎水ギンタ（初代））

小松大吾：関智一（機動武闘伝Ｇガンダム：ドモン・カッシュ）（キャプテン翼（３作目）：大空翼〈青年期〉）

柊静音：能登麻美子（乃木坂春香の秘密：乃木坂春香）（花咲くいろは：輪島巴）

福本泰子：日高里菜（とある魔術の禁書目録：打ち止め（ラストオーダ））（ロウきゅーぶ！：香椎愛莉）

波木ささら；植田佳奈（ハヤテのごとく！：愛沢咲夜）（魔人探偵脳噛ネウロ：桂木弥子）

夏色花火：ゆかな（我が家のお稲荷さま。：天狐空幻（女））（テイルズオブジアビス：ティア・グランツ）

藤森渚：小倉唯（神様のメモ帳：アリス）（ロウきゅーぶ！：袴田ひなた）

白河柚子＝白石涼子（ハヤテのごとく！：綾崎ハヤテ）（ＳＫＥＴ　ＤＡＮＣＥ：鬼塚一愛　／　ヒメコ）

白河百合＝花澤香菜（化物語：千石撫子）（こばと。：花戸小鳩）（テイルズ　オブ　グレイセス：ソフィ）

水瀬瑞希＝大亀あすか（鋼殻のレギオス（メイシェン・トリンデン）（電波女と青春男：藤和エリオ）

人気投票開催中＝ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｉＩ２Ｎｗ７ｐ

第81話　Magicianger／Story・中編（前書き）

前回のあらすじ

自己紹介、大変だった。

晃「それは書いた作者のコメントですよね」

第81話　Magiciangir／Story・中編

晃はとりあえず綺麗といえる写真を撮っていた。

「よう、優輝。どうだ調子は？」

恭介が話しかけてきた。

「ええ。まずまずですね。そういってもいつも写真を撮っているわけではありませんけど」

そういったとき、綺麗な鳥が飛んでいく姿を晃は一瞬でみつけてシャッターをおした。

「な、なんかとったのか？」

「ええ。いま飛んでいった鳥を撮りました」

そういって晃はカメラを恭介に渡した。
隣にいた千早もカメラを除いた。

「お前、これ本当に撮ったのか？」

「なにがですか？」

「さっき撮った写真ものすごく写りがいいです」

千早が感心した写真はさっき鳥が飛んでいくところである。
晃はまったくブレをなくそれを写真に収めていた。

「晃君の起用さ。最初みたら驚きますよね」

舞が話しかけてきた。

「これは器用とどうこう言えるレベルじゃあ」

「でも実際、それぐらいしか理屈が無いんだよね。アキの場合」

泉が反面よろこびながら言った。

「す、すごいですね。こんなすごい写真を器用のみで撮れるなんて」

千早は感心しながら言った。

「ねえ、アッキーあそこなんてどうかな?」

泰子が晃に進めてきた。

「どこですか?」

「あそこでよ。僕が指差しているちょうど先」

泰子が指差したのはまだ色を残している葉っぱを残した木を指差した。

「よく12月まで耐えてきましたね。言って見ましょう」

晃たちがそこに言ったらそこにはある人物がある本を読んでいた。

姓は重原、名前は広敏というやつがどうどうと木の下でエロ本を読んでいた。

そのとき、晃に何か切れる音がした。

同時にあかりがこっちに走ってくる。

「なにやってる変態兄貴！！」
「変態消滅！！」

あかりは顔面、晃のは腹に広敏に思いっきり蹴りを入れた。
こいつはまた幸せな顔をして倒れた。

晃は即座にエロ本を燃やし始めた。

「まったくなにやってるんだが、あの変態兄貴は！！優輝さん協力ありがとう！！」
「へ！？なんのことですか？」

晃は何か分からず言った。
晃の変態破壊能力、それは変態を見ると破壊対象になって即座に撃退させてしまう、変態にとっては悪魔のモードである。

「アッキーおそるべしね」

泰子が笑いながら言った。

「それで、みなさんはどんな写真を撮ったのですか？」

切り替え早く、晃はみんなに聞いた。

実はさっきからみんなそれぞれ2人組みのペアになって写真を撮っていった。
ちなみに晃は圭介はペアを組んでいない。
と、言うか、女子のみペアになっている。

てなわけで、まず、美紀、暮葉ペア。

「けーすけ様、見てください」
「まともな作品になったよアッキー」
そういわれて晃と圭介は渡されたカメラを見る。
「おい、暮葉。おまえなんかやったか？」
「へ！？」
「ものすごく不自然です」
カメラに移っていたのは木がものすごく傾いている写真だ。
「でも、わたしが見たときはもうすでにこうなっていたよ。風がすごかったけど」
「暮葉！！！」
美紀がめずらしく丁寧に説明した。
そのあと、圭介は暮葉を怒鳴った。
「ご、ごめんなさいですけーすけ様」
さて、次は結衣、伊吹ペアである。
ここは見る価値がるペアだなと2人とも思っていた。
「なんだ、撮ったのはほとんど猫じゃねえか」
圭介がカメラを見ながら言った。
「うるさい。かわいいからいいじゃない」
「それはそうだけど、おい、優輝」

圭介は晃のほうに声をかけた。
だが、そこには目を光らせている晃がいた。

「ゆ、優輝？」
「アキ君？」
「あ、す、すみません」

晃は我に帰った。
だが、それは一瞬のみだった。

「アキ君。猫好きなの？」
「あ、あははは。やっぱり男だと変ですかね」

晃が照れながら言った。

「ううん。そんなことないよ」

結衣は首を振りながら言った。

「本当に同じヒロインか？」
「本当に同じ主人公なの？」

圭介と伊吹の言葉が重なった。

「ちょっと。それどうゆう意味？」
「お前と同じ意味だ。あっちの方にはツッパリがいないからな！！」
「それはただそういうキャラがこの小説の作者が書くのがニガテなだけよ」

なんか言い合いになってしまった2人はほっといて、目を輝かせている晃をうっとりみている結衣だった。
あと、ツンデレ系書けなくってスミマセンでした。

次は真、葵の妹ペアだ。

「なんか、ものすごく心配なんだが」

圭介が言った。

「なんか君の妹、ものすごく君の事に大切に見ているように見えます」

さすがの晃でも、そこまでは見えるが、やはり、好意の部分は見えない。

「はい、これねあきにい」

真は晃にカメラを渡した。
晃はそのカメラを見たとたん、圭介を呼んだ。

「なんだ?って、おい!!葵!!」

圭介は葵を呼んだ。
それもそのはず、写真に写っていたのは公衆トイレで要を足している圭介が写っていた。

「いい作品でしょ」
「それはお前のみだ!!」

そういって葵は逃げ出した。圭介はその後を追った。

「真、この写真、見ましたか？」

「ううん。見てないよ」

「そうですか。それはよかったです」

さすがにこんな写真をみたらこんなに平常心になるものではないと晃は自分で言い聞かせた。

第81話　Magiciangir／Story・中編（後書き）

後書きスペシャルトークコーナ

圭介「いいよな、妹キャラ」

葵「ちょっと、葵のこと忘れている？」

圭介「いやいや、俺が言っているのは義理の妹キャラだ！！真ちゃんみたいな！！わかるか？」

晃「いや、分かりませんが」

圭介「いいか、義理の妹となれば肉親ではないために、デレとツンが分かりやすい。本当の妹ならそんなことはどうでもいい」

晃「いや、だからわかりませって」

広敏「いや、肉親の妹もいいものだぞ！！」

晃「あなたは出てこなくっていいです！！。てか、この小説でその内容はやめてください」

圭介「なに！？これはじっくり話し合いましょう部長！！」

広敏「のぞむところだ！！」

晃「話しあわないでください！！」

伊吹「すごい、あの二人の会話で突っ込みができてる」

結衣「アキ君がいないとこのコーナー回らないからね」

第82話　Magiciangir／Story・後編（前書き）

前回のあらすじ

なんか撮影大会開幕？

晃「なんかふざけているだけな気がします」

第82話　Magiciangir／Story・後編

次は今宵と凪紗ペアだ。

「このペアはいろんな意味で心配です」
「なんでだ？明智はまじめなやつだから大丈夫だろ」

圭介は完全に変なのはこっちのせいだと思っている。
しかし、晃の考えはそうではなかった。

「いや、僕は明智さんはいいとして、今宵が心配なんですよ」

そう言って晃はカメラを見た。
そこにはさっき今宵が描いた絵が写っていた。

「せめて、もうすこし愉快な絵を描けよ！！」

圭介が晃より早く突っ込んだ。

「そっちも違いますよね。てか、いい加減怖い絵のネタやめてください！！」

晃は訂正しつつ突っ込んだ。

「じゃあ、これはどうだ？」

今宵はそう言って違う絵を見せた。
その絵は有名な桜の木に誰かが首吊りされている絵だった。

「て、こっちも十分怖いです！！」
「この前、実はピノ○ノは首吊りで死んで終わったと聞いて、なんか描きたくなった」
今宵は平常心の真顔で答えた。
「描かなくっていいです。あと、リアルすぎてこわいです！！」
晃が今宵に突っ込み倒ししているとき、凪紗は無言だった。
「あいつ、良くあそこまで突っ込めるな」
なんか感心している圭介だった。
次は花火、伊織、あかりペアだ。
「ここはこっちの人数の関係で3人なんだな」
納得した圭介は言った。
「はい、あきにいさん」
花火は晃にカメラを見せた。
「お、いい出来ではありませんか」
「本当だな」
カメラの映像を見た二人は言った。
「そうかな?ちょっとぶれちゃったけど」

伊織が申し訳なさそうに言った。
確かに写っているのは桜の木と犬の2ショットだ。
さりげなく今宵が写っているのはスルーする。

「いやいや、さっきまでの作品と比べたら何倍もましです。なんだか暖かさが感じられます」
「本当だな」

晃と圭介はしみじみと言った。

「あんたに暖かさが分かるの？」

あかりが圭介に向かっていった。

「うるさい！！」

圭介はそれだけ突っ込んだ。

最後は真打誕生、渚と千早ペアだ。

「これはすごいできですね」

写真を見た晃は言った。

「さすが、青山さんだ」

圭介もほめた。
しかし、本当にすごい、言葉で表しづらいのでとりあえずすごいとだけは伝えておこう。

※

圭介は気まぐれで暮葉と伊吹と一緒にぶらぶら歩いていた。

「しかしな、ここは意外といいところだな」
「ですね。気に入りました」
「そうね。また来ましょうか」
「そうだな」

そんな会話をしているとき、見知らぬ男が5人ほど現れた。

「こいつらあの【自由者(フリーダム)】の友人か」
「キヒヒヒ。こいつらもかわいくねえ」
「黙れロリコン」
「萌え」
「あんたらねえ、私もいるの忘れている？」

ちなみに最後の人も男である。

「なんだ、お前ら」
「ああん。おめえらには関係ない。さっさと俺らにつかまれ。てか、人質になれ」
「なんでだよ、てか、関係なくねえよ。バカかお前らは」

圭介は反抗する。

「ち、うるせえやろうだな」

そう言って一人男が拳を振った。

だが、圭介はその攻撃を避けて、カンウンターを当てた。

「ぐはっ！！」

「貴様！！」

だが、もう一人の攻撃には反応できずに殴られた。

「ちぃ」

「５人相手に勝てるのかしらねえ」

５人、もとい４人は圭介に迫った。

「なにやってるのですか？藤島さん」

そのとき、晃が声をかけた。

「見つけたぞ、【自由者（フリーダム）】」

「誰ですか？」

晃は無神経にそういった。

「おい、体が細いお前じゃあ相手にならねえ。今すぐ逃げろ！！」

圭介が叫んだときにはもう遅い。４人は晃に向かって殴ろうとしていた。

対して晃は肩にかけている鞄に両手を入れた。

「【呼び出し（コール）】」

そうつぶやいた。

そのあと、両手に銃を持ち、構えたあと、撃った。
空気弾は見事に４人の頭にヒットした。
そのまま４人は倒れた。
圭介たち３人は驚きで声が出せなかった。
「【団殺者（ディスター）】です。観念してください」
そのあと、５人は警察に捕まった。

※

「じゃあな、俺たちは帰るわ」
圭介は名残惜しいそうに言った。
「ええ。また合えるといいですね」
「そのときはもうちょっと突っ込み鍛えないとね」
「うるせえ」
伊吹の指摘に圭介は突っ込んだ。
「では、私たちは行きましょうけーすけ様」
「ああそうだな」
そう言って圭介たちは歩き始めたとき、あることに気づいた。
「そういえば、３バカはどこに行った？」

あの3バカを忘れていた圭介は皆に聞いた。

「え？秋葉原に行ったって言っていたわよ」

「ですが、ここから秋葉原まで相当時間がかかりますよ」

「マジで、だったらほっといて帰るか」

圭介は開き直った。

「そうですね。もうお腹ペコペコです」

暮葉はお腹をさすりながら言った。

「じゃあな」

「ええ」

そう言って圭介たちは帰っていった。

※

「そういえばあきにい。なんか忘れているような気が」

真は気になって言った。

「なんでしょうかね」

晃も思い出せなかった。

実はずっと広敏は吊るされていたことを誰も気づかれなかった。

第８２話　Ｍａｇｉｃｉａｎｇｉｒ／Ｓｔｏｒｙ・後編（後書き）

後書きスペシャルトークコーナ

人気投票開催中＝ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｉＩ２Ｎｗ７ｐ

晃「どうでしたか？『魔法少女と出会っちゃった場合』とのコラボは？」

結衣「とりあえずは女性人はほとんど出番があったわね」

伊吹「そうね。男性人は名前だけでセリフが無かった人がいるわね」

圭介「それはな、名前が一緒だから作者が面倒臭かっただけらしい」

美紀「まあ、そうでなくっても出番は本当に無いけどね」

暮葉「たしかに、否定要素がありません」

晃「すごい言われようですね」

今宵「とりあえずはあの変態が出番が多かったのは無視して」

圭介「コラボでも散々な扱いだな部長」

真「あ、ああいうキャラってなんだかんだでオチを任せられるからね」

晃「いや、どうですかな？」

泉「どっち道使ったよね」

全員「……うん」

第８３話　クリスマスパーティの前日（前書き）

前回のあらすじ

作戦参謀さん、本当にありがとうございました！！

第８３話　クリスマスパーティの前日

「みんな、前日準備、ご苦労様！！」

伊織の一言でみんな一休みを始めた声が聞こえた。

「ご苦労様です。伊織」

晃は伊織にジュースを渡した。

「お、ありがとね。さすが晃君」

そう言って伊織はジュースを受け取る。

「だいたい、そういう晃君だって準備手伝ってくれたじゃん。科学都市の技術を使ってね」

指差しながら伊織は言ってくる。

そのあと、ジュースのふたを開けた。

「あははは。なんか他のクラスに申し訳ないような気がします」

「いいじゃん。使ったほうが勝ちだよ」

「勝ちって、なんですか？」

「冗談だよ、冗談」

伊織はあははは と笑った。

そのあと、結衣がこっちに来た。

「ずいぶん仲がよろしいことね」

しかし、言葉には棘があった。

「あ、結衣。ご苦労様です」

「あ、うん。なんだか冬なのに汗かいちゃった」

さっきまで結衣はダンボールを使って作業をしていた。

「のども渇いてるでしょう。これ、飲みますか？」

そう言って晃は自分が飲んでいたジュースを渡した。

その行動に結衣が一番驚いていた。

「え！？いいの？」

「なにか問題でも？」

晃は意味が分からず聞き返した。

結衣はこれを飲んでいいと感づいた。まあ、晃にとっては初めから飲んで言いといっていたが。

結衣は言葉に甘えてそのジュースを飲んだ。

だが、そこには面白いもの大好きな子、小方伊織がいたことをすっかり忘れていた。

「お、結衣ちゃん。間接キス？」

伊織の一言で結衣の顔が思いっきり赤くなった。

ちなみに晃は頭上には？マークが浮かび上がっている。

「そ、そんなんじゃないからね！！」

「にふふふ。晃君は本当に鈍感だね」

結衣の反応を見て伊織は微笑みながら言った。
晃はまったく言っている意味が分からなかった。

※

「へえ。晃の家でも学校のほうが終わったらクリスマスパティやるんだな」

帰り道、話を聞いた大吾が言った。

「ええ。良かったらみなさんどうですか？」

晃はみんなを誘った。

「え！？私たちも行っていいのですか？」

花火は驚きながら行った。

「ええ。もちろんですね」

晃は微笑みながら言った。

「他にも生徒会や、渚ちゃんにも話はしときました」
「おうよ、楽しいクリスマスになりそうだな！！」

大吾がそう言ったとき、女子たちの目が変わった。
それはまるで獲物を狙う目つきだった。

（アッキーはわたしとその日の夜を過すんだよ！！）

（今年のクリスマスでアキ君と、むふふふ）
（あきにいとクリスマスパーティ×2）
（今度こそ、晃に私の料理を、そしてできれば）
（晃君と2人っきりでクリスマスを）
（アキの相棒はこのあたしだから2人で一緒に）
（残念だけど、今回は本気で晃君を狙うからね）
（あきにいさんと絶対2人でクリスマスを過したいです！！）

美紀、結衣、真、今宵、舞、泉、伊織、花火の8人はすこし、いや、まったく内容は同じ欲望を抱いていた。
ここで分かるのは完全に大吾が邪魔だと言うことだ。

「いや～美女たちとクリスマス過せるなんてラッキーだ」

その邪魔な大吾がそう言ったとき、伊織が大吾のほうに向いた。

「大吾」
「ん？なんだ？」
「当日来るな！！邪魔」
「え～～～～！！」

伊織はあっさり言ってしまった。
邪魔な大吾は悲しみで思いっきり泣いている。

「晃～、伊織があんなこと言ってくる～」

大吾は晃に飛びついた。

「え～い。泣くなわめくな、鼻をかむな！！」

晃は一生懸命大吾を離そうとした。

「うわ～ん羽衣さん」

「きゃーーーー」

次は結衣に飛びついた大吾だが、逆にビンタされてしまった。

「ちくしょう、こうなったら明日、柊会長に慰めてもらう！！」

「その前に鈴さんに殴られますよね」

全員、晃の言葉にうなずいた。

※

晃はその日の夜、ギアを使って電話した。

『あ、先輩。先輩から電話なんて久しぶりですね』

この声は瑞希のものだった。

晃は前の日にみんなの分の招待券を渡した。

「ええ。やっぱりみんなに久しぶりに会うのは楽しみですから」

『先輩にもそんなところがあるのですね』

電話越しでも瑞希が笑っているのがわかる。

「瑞希も僕の幼馴染と会うの楽しみでしょう」

『はい。それはもう楽しみモフモフですよ』

「モフモフって、ははは。本当に楽しみみたいですね」

晃もつられて笑った。

だが、いやな気分ではなかった。

『先輩のクラスは何をするのですか？』

「僕らのクラスはケーキと紅茶を販売します。僕も手伝いますよ」

『て、ことは！！先輩のケーキが食べられるわけですね』

「まあ、そうなりますね」

どうやら瑞希は晃のケーキが大好きらしい。

それとも全体の料理なのかは分からない。

『もう楽しみで気持ちがパフパフですよ！！』

「うれしいのですが、さっきからそのモフモフとか、パフパフはなんですか？」

晃はさっきから気になっていたことを聞いた。

『ええ。これは私にとっての感情表現です！！』

「そ、そうですか」

なんでこんな風になったのかは晃は聞かなかった。

理由はそんなこと聞いたら何分いや、何時間かけてでも説明されるからだ。

「まあ、明日は本当にみんなに会えるのですね。柚子と百合は元気にやってますよね」

『なんで決定文？』

瑞希は聞いた。

「それぐらい信用しているのですよ。君のことも」

『せ、先輩！！は、恥ずかしいことさらっと言わないでください』

「ん？」

絶対いま瑞希の顔は赤くなっている。

言った張本人の晃はあいからわず意味が分かっていない。

第８３話　クリスマスパーティの前日（後書き）

後書きトークコーナ

人気投票開催中＝ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｉＩ２Ｎｗ７ｐ

大吾「さあ、とうとうクリスマスパーティ編が始まるな！！」

晃「ええ。今回はなんと科学都市メンバーがこっちに来ますからね」

伊織「長いお話になりそうね。ふふふ」

晃「実際、作者はこのお話を書くのを楽しみにしていたらしいですよ」

伊織「そうね。人気投票もあるし、ここでアピールしないとね」

第８４話　ＸｍａｓＰａｒｔｙ！？（前書き）

前回のあらすじ

クリスマスの準備完了！！

晃「今回からクリスマススタートです！！」

第８４話　ＸｍａｓＰａｒｔｙ―？

１２月２４日。
クリスマスイブ。
この日、東の丘学園は終業式であり、今年最後の一代行事のクリスマスパーティがある。
２学期は終業式はせずに、この行事が終業式そのものである。
そして、１年１組でも、その準備を終わらせようとしていた。

「いいねえ。晃君」

伊織がカメラを持ちながら言う。

「ほら、アキ君。早く出てきてよ。始まっちゃう」

結衣も同じく携帯を持っている。
そして２人ともカメラモードにしている。

「僕の場合、人生が終わろうとしています」

着替え場のカーテンの中から晃の声が聞こえた。

「大丈夫でしょ、何回目なのよその姿になるのは？」
「それでもいやです～」

晃は意地でもそこを動こうとはしない。

「いいからでてこい！！」

そう言って大吾がカーテンを開ける。

「あ～ダメです！！」

そこには美少女。いや、晃がいた。
格好は前髪を髪留めしており、服装はミニスカサンタの格好である。
ミニスカートからは黒いスットキングが見える。
ノースリーブではなく、半そでなのは晃が嫌がるからだ。
いや、この格好も本人は超嫌がっている。
化粧をまったくしていないくこの完成度である。

「がはっ！！」

大吾が鼻血を出した。

「なんで鼻血を出すのですか！！」

晃はしゃがみながら自分の肩を抱く。

「がはっ！！」
「だからなんで！？」

その姿を見て、さらに3人鼻血を出した。

「なんでお前は男に生まれたんだよ！！」

大吾は鼻血をたらしながら言った。

「意味が分かりませんが、失礼としか言いようがありませんよね」

ちなみに結衣はあまりにもかわいすぎて硬直している。

「晃君。いや、アキちゃん。裏声使って立ってお辞儀をしながら「お帰りなさいませご主人様」と言って。もちろん言った後は笑顔ね」

伊織が完全の面白がって言った。

「いやです!!絶対にいやです!!」

晃は首を振りながら言った。

「出なきゃ、この写真をインターネットに公開するよ」

悪魔だ、悪魔がいる。

晃はその言葉に硬直した。

「そ、それだけはいやです」

そう言って晃は立った。そのままお辞儀をした。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

そういった後晃は言われたとおり笑顔になった。

『がはっ!!』

クラスの大半の男子が鼻血を出した。

「いいね。アキちゃん」

親指を突きたてながら伊織は言った。

「なんで朝の7時からこんなことしているのですか」

そう。晃が言った通り、今の時間は7時過ぎである。
朝の準備でほとんどの生徒が集まった。

ちなみに始まる時間は9時である。
これぐらいの時間に来なければ朝の準備が間に合わない。

「さて、アキちゃんは午前中は男子とばれないようにしてね」

伊織は笑顔で言った。

「つまり、僕の担当の時間は9時から10時までですから」
「あと、3時間近くこの格好だね」

伊織が晃の言葉を続けた。

「脱いではいけないのですか!?」

晃は意外な事実に驚いた。

「あたりまえよ、せっかく着替えたんだからね」

伊織が当たり前のように言った。

「そんな～こまります～」

晃は腕を振りながら言った。
伊織はその光景を写真に収めた。

「あきにいいる？」
「あきにいさん。失礼します」

こんなときに、真と花火が入ってきた。

「「！！」」

晃のその姿を見た瞬間、２人とも携帯をだした。

「あきにい。なんて格好しているの？」
「あきにいさん。本当に男ですか？」
「そう言って写真撮らないでください！！」

写真を撮ってくる２人に晃は突っ込んだ。

「で、なんですか？２人とも」

晃はとりあえず話を聞くことにした。

「うん。実はね」

ちなみに２人とも携帯を地面に置かれて正座していた。
真は携帯を取ろうとしたら晃にさえぎられた。

「４組の最後の準備をあきらにいさん。いや、あきねえさんに手伝ってほしいのです」
「おねがいあきねえ」

２人とも、晃にお願いした。

「うん。分かりましたから言い方変えないでください」

そう言って晃は４組に向かった。

４組の教室に入った瞬間、男子生徒が騒ぎ始めた。

「なんだ、あのかわいい子」

「この学校にいたのか？」

「しかもミニスカサンタ。最高だね」

男子生徒はそう言って女装晃、アキちゃんを見た。

「あきねえさん。ここのプログラムです」

そう言って花火はパソコンを見せる。

「はい。あとその呼び名はやめてください」

晃は見ながら静かに突っ込んだ。

「えっと。ここですね」

そう言ってキーボードを打ち始めた。

だが、近くの生徒がひそひそ言っているのは気にしないでいよう。

晃はそう心の中で思った。

「これでもう大丈夫です」

「ありがとう、あきねえ」

真は笑顔でお礼を言った。

「うん。その呼び名はやめてください」

朝からひどいめに合った晃であった。

第８４話　ＸｍａｓＰａｒｔｙ－？（後書き）

後書きトークコーナ

人気投票開催中＝ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｉＩ２Ｎｗ７ｐ

晃「とうとう、クリスマスパーティ始まりましたね」

結衣「アキ君。朝から災難ね」

晃「そうですね。そう思うならせめて止めてください」

真「ゆーちゃん。あきねえの呼び名を考えた」

結衣「じゃあ、アキちゃんでいいや」

晃「聞いてください。次回は絶対にあんな格好はしません！！」

真「あきにい。次回もあきねえの姿だって」

晃「まじですか？」

結衣「まじだよ」

第85話　XmasPartyー？（前書き）

前回のあらすじ

アキちゃん、再登場！！

晃「いや、あれは僕ですからね！！」

第85話　XmasPartyー？

そして、とうとう9時になった。

ある男子生徒が、1年1組の教室を見てドアをあけた。

「「いらっしゃいませ！！ケーキショップ、ケーキ×サンタです！！」」

結衣と伊織が笑顔で出迎えた。

男子生徒は美女2人に出迎えてもらって驚きとうれしさを感じていた。

しかも、2人ともいや、クラスの全員がミニスカサンタであった。

「では、お客様、席へご案内いたします」

そう言って結衣は2人を席まで案内した。

「いや～はやくも盛況、盛況！！」

伊織はでこを拭きながら言った。

「委員長。次ぎ来たよ！！」

クラスの男子が伊織に伝えた。

「じゃあ行くよ！！アキちゃん」

「は～い」

元気な伊織とは対照的に、アキちゃんこと、晃はテンションが低かった。

「こらこら、アキちゃんそんなテンションではお客様を満足できないよ」

伊織は手を腰に当てていった。

「分かっていますが、やっぱり」

「言い訳はいいから早く行くよ!!」

そう言って伊織は晃の背中を押した。

「「いらっしゃいませ、ケーキシャップ、ケーキ×サンタへ!!」」

晃はやけくそで裏声で言った。

「おお、この子かわいくねえ」

「おお。特にあの白髪の子俺好み!!」

来た男子の言葉に晃はなんか不愉快になった。

「大人気だね。アキちゃん」

伊織は晃の肩を叩いた。

「なんか屈辱的です」

晃はその言葉を小さい声で言った。

※

9時50分頃、晃の女装終わり時間まであと10分のとき、来てはほしくない人が来た。

「おじゃましまーす!!」

「へえ。綺麗じゃない。まあ、晃がいればこのぐらいはね」

「アキ君。本当にすごいからね」

聞き覚えがある声に晃は反応して振り向いた。振り向いてしまった。

「あ、アキ君!?」

晃の科学都市の幼馴染の双子の妹の白河百合が声を上げた。

「え!?どこですか?」

晃の科学都市の幼馴染の後輩、水瀬瑞希は晃の姿を探していた。

「む~見つかりません。全員女の子です」

「でも、百合の晃レーダーは確実なのに」

晃の科学都市の幼馴染の双子の姉の白河柚子は百合をからかいながら言った。

2人が探しているうちに晃はその場から離れようとした。

「あ、アキちゃん。なに逃げようとしてるの!?」

伊織が逃げようとしている晃を見つけて言った。

晃は黙ってくださいのジャスチャーをしたが、もう遅い。

「あ、晃、な、なにその格好！！」

その言葉に反応したのは伊織だった。

「ちょっとお客様ちょっと来てください」

そう言って3人を別室に連れて行こうとした。

「あ、アキちゃんも一緒にね」

晃のやな予感は続く。

※

結果。

事情を話すこととなった。

「ぎゃはははは！！」

柚子は予想通り、大笑いしている。

「せ、先輩も大変ですね」

「うん。本当に」

「そう思うならまず、携帯のカメラを止めてください」

2人はさっきからカメラで晃の姿を撮っている。

「ちょっと待ってくださいね。今から着替えますので」

「ああ、じゃあ私たちは例の待ち合わせの場所に行っているよ」

なぜ、その待ち合わせの時間前にこっちに来たかというと、晃の仕事ぶりが見たかったらしい。っと、さっき柚子が証言した。
晃はため息をついた。
そのまま制服に着替えた。

※

晃は待ち合わせ場所に着いた。
ちなみに今は晃と関係がある静音と花火が一緒だ。
花火がいるのは晃には聞かされていないがどうやら静音が知っている。
だが、大体晃にも予想できていた。

「お、来たな」

翔太が晃の姿を見て言った。

「みんな、お久しぶりです！！」

晃はその場にいた全員にいた。

今回のメンバーは、科学都市の幼馴染の３人と、【団殺者（ディスター）】のフルメンバーの４人だ。

「よ、久しぶりだな晃、花火」

この背の高い人は夏色ミズヒキ、通称ミズで、苗字で分かるように花火の兄だ。

「にいさん、久しぶりです」

花火はお辞儀をした。

「お兄様！！」

この背の小さい女の子は星平沙奈（ほしひらさな）だ。

「沙奈ちゃん。久しぶりですね」

「はい！！」

沙奈は晃の体にほっぺたをすりすりする。

「本当に晃がいないときにこいつの暴走は大変だぜ」

「あははは。ご苦労様です」

ミズが言ったことは、簡単に言えば、彼女は晃以外の人には心を開いていないのだ。

晃以外の人の言葉などは聞かない。（晃がそういろといわない限り）ちなみに彼女とはちょくちょく連絡を取っている。

他は翔太、希がいる。

実際、【団殺者（ディスター）】のメンバーが全員集まることはおかしくは無い。中もいいし、（佐奈のみ晃しか聞かない）全員心優しい。

「しかし、花火、ミズさんとはそんなに中がよろしい風には見えないような気がしますが」

晃は気になっていたことを花火に聞いた。

「そう?別に普通ですし、まあ、何年ぶりに会うのでなんかそう思われｔるのですよね」
「まあ、花火ちゃんにとってお兄さんはアキ君のことだろうけど」
静音がくすくす笑いながら言った。
「ちょっと、あきにいさん。えっとそういうことではなくて、えっと」
顔を赤くしながら花火は否定した。
しかし、花火の言うとおり、この2人にはなんにも無いのはたしかだ。

第85話　XmasPartyー？（後書き）

後書きトークコーナ

瑞希「後書きトークコーナ、初登場です」

晃「まあ、本編でのまともな登場は今回が初ですしね」

瑞希「ここでは、私と先輩のラブラブトークが繰り広げます！！」

晃「さらっと嘘を言わないでください。何回このコーナしていると思っているのですか？」

瑞希「次回、リニューアル！！」

晃「必殺技を悪用しないでください！！」

＊リニューアルはしません。

第８６話　ＸｍａｓＰａｒｔｙ―？（前書き）

前回のあらすじ

とうとう科学都市メンバーそろう！！

第８６話　ＸｍａｓＰａｒｔｙ―？

晃たちはとりあえず校内を歩くことになった。

「そういえば、皆さん、この後の予定は？」

静音は科学都市のメンバーに聞いた。
ちなみに彼らは１２月２２日に終業式を終えている。
つまり、あちらは完全に冬休みに入っているのだ。

「晃に頼まれてここで泊まることになりました」

柚子が質問に答えた。

「そうなのですか？で、お泊りはどちらでするのですか？」
「ｄまあ、僕の幼馴染に泊まれるように手配しておきました」

晃は言った。

「そうですか」
「でも、こいつは誰の家にも泊められんと思うが」

ミズは沙奈の頭の上に手を乗っけた。
だが、一瞬で叩かれてしまった。
沙奈の顔は同時にムスッとなっていた。

「な、こうなろうだろ」
「仕方ないので沙奈ちゃんは僕の家に泊めさせます」

晃は頭をかきながらいった。
同時に沙奈は笑顔になった。

「え～私も先輩と同じ家に泊まりたいです」

瑞希が一瞬で嫉妬が入った文句を言ってきた。

「では、沙奈ちゃんは僕の部屋で、瑞希は真の部屋と言うのはどうでしょう。ま、詳しくは夜にでも話しましょう」

ちなみに年下で瑞希のみ、ちゃん付けで呼んでいないのは簡単に言うと慣れである。
実際、晃が始めて年下と話をしたのは瑞希が初めてだ。
そのまま幼馴染になったので瑞希のみそう呼んでいない。

「で、晃。今からどこに行くの？」

柚子が行き場所を晃に聞いてきた。

「そうですね。時間的に食事はまだ早いですし」

晃は考え出した。
実際、みんなが行きたいところに行くつもりだったのでそんなことは考えていなかったのだ。

「じゃあ、先輩の知り合いがいる場所に行きましょうよ」

瑞希が提案してきた。
しかし、目が少し笑っていないようだった。

「あ、晃君」

2組の近くに来たら舞と今宵に出会った。

「晃、彼女らが科学都市の知り合いか？」

今宵は晃に後ろにいるメンバーのことを聞いてきた。

「ええ。そうですよ」

そう言って晃はみんなに自己紹介させた。

「へえ～同じ日に転校してきた仲なのね」

柚子が納得したように言った。

ちなみに舞と今宵は用事があるといってどこか行ってしまった。

まあ、十中八九クラスの用事だろうが。

「あきにいさん。そろそろ別のところへ行きましょう」

そういわれて歩き出したとき、1組の近くに小学生みたいな身長の少女と出会った。

「渚ちゃん。なにやっているのですか？」

「は、はひ！！」

いきなり声をかけられた渚はものすごく驚いていた。

「ご、ごめんなさい。いきなり声をかけてしまって」

晃はあわてて言い換える。

「い、いいえ。私が勝手に驚いたのです」

「先輩。その人も知り合いですか？」

瑞希が晃に渚の紹介を望んできた。

「ええ。友達ですよ」

晃は笑顔で言った。

「アキ君。さっきから女の子の知り合いしか見ないね」

百合が晃に言ってきた。

「まあ、ほとんどの友達や話す人は女子ですね」

晃は平然に言った。

「な、なんでですか？」

百合は驚きながら言った。

しかし、晃は何でそんなに驚くのだろうと思っている。

「まあ、男子にはなんか怖い目で見られている気がするので話しにくいので」

晃は美女と平然と話しているので男子の恨みを買っていることは気づくはずも無い。逆になぜにらむとしか思っていない。

「まあ、晃のことだからなんとなく想像はできるわ」

柚子は遠い目で言った。
完全に晃の日常を把握したみたいだ。
実際、科学都市にいたときも同じ光景が何度もあった。

「アキ君はここでもそのままなんですね」

百合は安心と不安が交じり合ったため息を付いた。
ちなみにそのままとはもちろん晃の鈍感ということだ。

「先輩は鈍感すぎます」

瑞希がバシッと指摘した。
だが、その場には晃の姿はなかった。

「アキ！あそこでストラックアウトしているから見に行こう」
「いや、今はやっていく時間がないのですが」

晃はいつの間に泉に捕まっていた。
そのとき、背中に違和感が走った。
振り向いてみるとそこには笑顔で立っている恋する乙女たちがいた。
しかし、その笑顔は晃が恐怖を感じるほど怖い。

「な、なんか怒ってませんか？」
「ソナコトナイデスヨ」

晃は絶対嘘だと感じた。まあ、その通りだが。
このあと、ちゃんと事情は話した。
晃は実際、悪くは無い。

※

晃たちは料理部へやってきた。
渚も一緒だ。

「あ、優輝師匠。来たんだ」

洋子が入ってきた晃たちを出迎えた。

「晃。師匠って？」

希が聞いてきた。

「僕と渚は料理部に頼まれて料理を教えていたのですよ」

晃の言葉に渚はうなずく。

「へえ。アキ君、料理上手だからね」
「料理と言うか、手先が器用すぎるのよ、まあ、手先以外にもいろいろ器用だけどね」

実際、その器用さで歌がうまかったりすると言うのはありえないことだが、晃はそのことでしか理由が見当たらないのだ。

「とりあえず、食べましょうか」

ちなみに時刻はあんなにグダグダしていたわけで１１時近くだ。
１２時になったら晃はクラスの仕事をしなければならない。

「じゃあ、食べた後、私たちも晃のクラスに行こうか」
「柚子たちはさっき来ましたよね」
まあ、いいですけどと晃は言葉をつなげた。

第８６話　ＸｍａｓＰａｒｔｙ－？（後書き）

後書きトークコーナ

人気投票開催中＝ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｉＩ２Ｎｗ７ｐ

柚子「いや～晃はここにいても変わらないことが分かったわね」

百合「そうだねお姉ちゃん」

晃「それはどういう意味ですか？」

柚子「晃は知らなくっていいの」

百合「アキ君は、アキ君ですしね」

晃「さらに意味が分からないのですか」

柚子「で、晃は次回も女装するの？」

晃「しません！！」

百合「もうちょっと撮りたかったです」

晃「百合、なんか不吉な言葉が聞こえましたが」

百合「き、気のせいです！！」

第87話　XmasPartyー？（前書き）

前回のあらすじ

料理部、ちゃんと商売していた。

晃「そういう意味ではないと思いますが……」

第87話　XmasParty―？

晃たちは教室に戻った。

「あ、アキ君。早く厨房手伝ってもらっていいかな？」

晃を見た結衣は早速手伝いを願ってきた。

「分かりました。すぐに行きます」

そう言って晃は手伝いに行こうとしたとき、

「アキ君。そこに引っ付いているのは何？」

結衣は指を刺した。

晃はそこを見たとき、そこには思い切り太もも近くに引っ付いている沙奈がいた。

「ちょっと、あなた離れなさいよ！！」

結衣は何を感づいたのか、沙奈に思いっきり言った。

「やだ。お兄様と一緒にいる」

首を振って沙奈は嫌がる。

「だめ！！仕事の邪魔だから！！アキ君もなんか言ってよ」

結衣に言われて一回ため息を付いたあと、晃は沙奈に言い始めた。

「沙奈ちゃん。今から僕はクラスの仕事に戻ります。なので沙奈ちゃんがそんなところに引っ付いていたら動きにくいので少しの間、みんなのところにいてください」

晃は笑顔で伝えた。

「お兄様がそう言うなら」

そう言って沙奈は晃から離れた。

晃のみに聞き分けがいい子であった。

そのまま沙奈は百合たちのいるところへ行った。

「アキ君。今の子は？」

結衣は怖い笑顔で晃に問い詰めてきた。

髪の毛が少し浮かんでいるため、怒りのオーラが少し見える。

晃は振り向いたとたん、すこし驚いていた。

「ゆ、結衣？」

「アキ君。今の子は一体なに？」

「沙奈のことですか？科学都市の友達です。あと、あれでも【団殺者（ディスター）】の一員ですよ」

晃はあわてて沙奈の紹介をした。

「そう。なら良かった」

「そうですか。では僕は手伝いに行きますね」

「あ、うん」

晃はそういってすぐに向かった。

※

「晃君！！もうケーキは出来た？」

そう言って伊織は厨房に入ってきた。

「ええ。大丈夫ですよ」

そこにはしっかりケーキのクリームを作っている晃がいた。

「て、まだ作ってるじゃん」

「ああ。これですか。これは2セット目を作っています」

晃はそう言って冷蔵庫を指差した。

「あの中にあるの？一セット何個作ったの？」

「え～と、たしか」

そう晃が言う前に伊織は冷蔵庫を開けた。

「ざっと２０個ですかね」

晃は笑顔で答えた。

たしかに冷蔵庫の中には大量のホールケーキが入っていた。

「みなさんに手伝ってもらったので早めに作れました」

晃はまたもや笑顔でいう。

「ねえ。一体なにが起きたの？」

伊織は一人の女子のクラスメイトに聞いた。

「それがね。普通に作っていただけなのにすぐにクリームが出来たりしてるの」

その女子生徒は見たのに不思議そうに言った。

いや、見たから不思議がっているのか。

「よし、クリームで来ました」

「はや！！」

さっきまではもう入れたばかっりのクリームがすぐに出来上がっていた。

「晃君。一体なにしたの？」

伊織はあわてて晃に言った。

「なにって、普通に作ってるだけですが」

「ちょっと、見せてくれる。作っているところ」

「別にいいですが」

晃は不思議そうな顔をしていた。

実際、不思議そうな顔をしたいのは伊織のほうだ。

晃は必要なものを全部ボールの中に入れた。

「で、混ぜます」

そう言って晃は１０回かき混ぜた。
そしたらいきなりクリームが変化した。

「はや！！」

伊織は意外な速さに突っ込んだ。

「ちゃっと、晃君何したの？」
「なにって、普通にかき混ぜているだけですが」

晃はそういいつつクリームをかき混ぜる。
そのあいだ、どんどんクリームが出来上がっていく。

「どれだけ器用！！」

伊織はこれは超器用な晃にしかなせない技ということがわかった。

「では伊織、出来たケーキは持っていっていいですよ」
「あ、う、うん」

そういって伊織は何個かケーキを持っていった。

「結衣ちゃん」
「ん？なに？」

伊織は結衣に話しかけた。

「晃君の器用さが怖い」

「ああ。なんか分かるかも」
「アッキーは次元を超えた器用さだからね」
そこまでなのか？

※

厨房のほうが落ち着いたので晃はウェイターの手伝いをする事となった。
ちなみに晃はあれからさらに２０個ケーキを作りました。

「で、結局この服は着るのですね」
晃はただいま燕尾服を着ている。
「女装とどっちがいいの？アッキー」
美紀は笑顔で言う。
しかし、その笑顔は悪魔のようだった。
てか、黒い羽が見える。
「文句無くやらせてもらいます」
女装だけはいやな晃は速攻で答えた。
「さあ、早く行くよ」
美紀は笑顔で言った。
「はいはい」

晃も美紀についていった。

第87話　ＸｍａｓＰａｒｔｙ－？（後書き）

人気投票開催中＝ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｉＩ２Ｎｗ７ｐ

キャラ紹介

白河柚子（しらかわゆず）
学校：私立星道高校１年
年齢：１５歳　性別：女　第一人称「私」
身長：１６１　胸ランクＤ　誕生日：1月2日
髪：黒で、左右を軽く結んでいるロングストレートヘアー。小さいころも髪の長さと形は変えていない。
ジョブ：双子の科学都市の幼馴染の姉
好きなもの：クッキー、バイク
嫌いなもの：毛虫
記：晃の科学都市での幼馴染で百合とは双子の姉。
黄緑の色宝石を持っている。
性格は学校では男も泣いて謝らすほどの喧嘩が強く、いつでも真っ向正面からぶつかるタイプ。
その性格のため、判断力が強く、晃もその判断力には助かっているときがあるらしい。
晃のことは実は好きなのだが、本心にそのことが表せない、妹の百合のことは晃のことでときどきいじっているが大切に思っている。

第88話　ＸｍａｓＰａｒｔｙ―？（前書き）

前回のあらすじ

晃、恐怖の器用さ。

伊織「あれはド器用で表していいのかしら？」

第88話　XmasPartyー？

晃は燕尾服を着て、店の手伝いをした。

「あ、アキ君。こっちこっち」

いきなり百合が晃を呼んだ。

「みなさん。やっぱり来たのですね」

晃は笑顔で出迎えた。

「お前のケーキが食べられると聞いてな」

翔太がここに来た理由らしく物を言った。

「と、言ってもさっき僕が言いましたよね」

晃は自分の言葉を忘れずに言った。

「まあ、注文おねがいするね」

柚子がみんなの分をまとめて注文した。

晃は「わかりました」と言って別のところへ言った。

「あ、アッキー！！お願いがあるんだけど」

美紀が晃に話しかけてきた。

なんだが急ぎの用らしい。

「なんですか？」
「うん。あそこの飾りなおしてくれるかな？」
美紀が指差した場所に晃は目を向けた。
「分かりました。今直しますね」
そう言って晃はその場所に行って壊れた飾りに手を伸ばした。
「はい。これで終わりました」
晃は指で少しいじっただけで一瞬で治してしまった。
「アッキー」
「何ですか？」
「なんかその手が怖くなってきた」
「恐ろしいこと言わないでください」
そう言って晃はさっき頼まれた注文の品を取りにいった。

※

午後2時。
晃のクラスの当番は続いていた。
「こっち、お願いしま～す」
「はい！！」
女子生徒に呼ばれて晃はその場所に向かう。

その光景を科学都市の幼馴染は見ていた。

「ねえ。百合先輩」
「ん、なに？」

瑞希はいきなり百合に話しかけた。

「さっきから先輩に注文をお願いするのが女子生徒ばっかりではないのでしょうか」
「う～ん。そういわれると」
「ですよね。なんか先輩、もしかしたらモテテたりして」

瑞希は何かに気づいたらしく言った。

「まあ、晃は誰にも優しいからね。気づかないうちに女の子を落としているのもありえなくはないわね」

柚子が言った。

「アキ君。次はあっちお願い」
「あの先輩も結構男子生徒ばっかり注文お願いされていますね」
「それにアキ君と仲がいい」

瑞希と百合が言っているのは結衣のことだ。

「あれじゃないのですか、ほら、アキ君が言っていたここでの幼馴染」
「多分、それですよね。先輩の彼女なわけないですよね」
「む、お兄様は沙奈のもの」

瑞希と百合の話に沙奈が入ってきた。

「む、先輩は君のものでもありませんよ！！」

「違わない」

沙奈は本当に晃以外、人の話を聞かない。

「てか、前にここに来たとき、あいつは彼女なんていないと言っていたぞ。てか、あの鈍感なやろうが恋愛に興味を持つと思うか？」

翔太が前に話したことを伝えた。

希はその言葉を聴いて、（鈍感なのはあんたもでしょうが！！）っと、思っていた。

「しかし、ここは本当に平和な場所だな」

ミズはフォークをくわえながら言った。

「まあ、晃がほとんど成敗しているからでしょうからね」

柚子は納得して言った。

「で、君たちはこれからどうするのですか？」

晃はいきなり離しかけてきた。

「アキ君はこれからどうするの？」

「僕はまだここにいます」

「あら、人気ものは大変ね」

柚子は笑いながら言った。

「で、どうするのですか？」

晃はみごとに柚子を無視して話の続かせた。

そのときだった。

「おい、聴いたか？とある高校の不良が迫ってきたぞ！！」

クラスの男子が声をかけてきた。

「それって。どういうこと？」

伊織は驚いて聞いた。

「その話良く聞かせてください」

ソラは聞いた。

「ああ、なんか、前にこの学校の生徒がその学校の不良と取っ組み合いになったそうだ」

「なんか迷惑な話ですね」

「実はその犯人は風紀委員だと」

「本当に迷惑な話になりましたね」

晃は頭をかきながら言った。

「僕が【団殺者（ディスター）】として止めに張ります。

そう言って晃は走り出した。

「おい、晃！！俺たちも行くぜ！！」

ミズが晃の進行を止めた。
晃は無言でうなずいた。
こうして【団殺者（ディスター）】の5人は集まっているいう校門前に向かって走り出した。

「しかし、晃。その格好は走りにくいのじゃないの？」

希が聞いてきた。

「たしかにそうですね」
「俺たちが先に行くからお前は着替えて来い！！」
「え！？でも……」
「俺たちがやられるわけ無いだろ。お前はいいタイミングで出て来い」

そう言って翔太たちは先に歩いていった。
だが、沙奈のみ晃の元に残っていた。

「分かりました。沙奈ちゃんもみんなと一緒に行ってください」
「わかった。お兄様」

沙奈はうなずいて走りに行った。

「僕もさっさと準備しましょう」

晃はこのとき、自分がやるべきことを考えていた。

第８８話　ＸｍａｓＰａｒｔｙ－？（後書き）

人気投票開催中＝ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｉＩ２Ｎｗ７ｐ

キャラ紹介

白河百合（しらかわゆり）
学校：私立星道高校１年
年齢：１５歳　性別：女　第一人称「私」
身長：１５７　胸ランクＣ　誕生日：１月２日
髪：髪はすこし紫かかった黒で、柚子よりは短いストレートヘアー。小さいころは髪は短かった。
ジョブ：双子の科学都市の幼馴染の妹
好きなもの：猫、本
嫌いなもの：お化け幽霊全般、男
記：晃の科学都市での幼馴染で柚子とは双子の妹。
水色の色宝石を持っている。
性格は内気で、特に男子とはまったく話さない。男子でゆういつまともに話せるのは晃のみ。
だが、姉以上にモテルらしい。だが、晃にはずっと片思い中。だが、彼女のこの性格で気持ちをまだ伝えてはいない。
本が大好き。運動は苦手。だが、料理は得意。意外と器用。
非常に怖がりでもある。
姉の柚子のことは頼りになる姉だと思っている。

第89話　Ｘｍａｓ Ｐａｒｔｙ―？（前書き）

前回のあらすじ

事件発生！！

第89話　XmasParty？

翔太たちは校門前にやってきた。

「うおっ！！」

翔太は不良たちを見て一気に驚いた。

「全員ハゲ！！」

『だまれ！！』

翔太の失礼な一言に全員突っ込んだ。

しかし、翔太はこの突っ込みには怯まなかった。

「ま、いっか。さっさと終わらせようぜ」

そう言って翔太はウエストポーチに手をかけた。

「いくぜ！！」

その中から針を取り出した。

「【団殺者（ディスター）】、【魔法使い（マジシャン）】。行くぜ！！」

そう言って翔太はハゲたちの中に入って行った。

その光景を美紀たちは見ていた。

「みなさん」

晃は走りながら美紀たちのところへ来た。

「あ、アッキー」

「アキ君は今回は戦わないの？」

結衣が聞いてきた。

「今回はどうやら彼たちがやってくれるそうです」

「まあ、晃はこの前の怪我もあるからな」

透が納得して言った。

「まあ、本当の理由は君たちに彼らの能力の解説をしてほしいらしいです」

晃は頭をかきながら言った。

「はあああ！！」

翔太は針を一気に投げつけた。

「そんなのに当たるかよ！！」

一人のハゲが避けた。

「勘違いするなよ。今投げたのは攻撃じゃねえ。仕込だ」

「仕込って？」

その時、そのハゲはいきなり眼には見えないものに縛られた。

「なっ！！」
「俺の攻撃はこれが目的な」
翔太は指差しながら言った。
「【団殺者（ディスター）】は全員特別な特殊能力を持っているのですよ」
晃は解説した。
「それで、翔太の能力は瞬時算能力と言って、名前の通り、瞬時に計算を行い、さまざまな有効なトラップを作り出すのですよ。なぜか日常生活には発動できないらしいですが」
翔太の武器は針とそれについているワイヤーである。
この武器と翔太の能力の組み合わせは最高のマッチングである。
翔太が捕まえたハゲをミズが一気に殴り飛ばした。
そのあと、ハゲたちが乗っていたのだろうバイクを持ち上げた投げ飛ばした。
「ミズさんの能力は筋力増加能力。一定時間自らの筋肉の力を増加させます」
ちなみに、ミズには武器は無い。
そのあいだ希は鞄の中に入っていた。折り曲がっている棒を取り出し、合体させた。
完成したのは輪そのものだった。
希はそれを一気にハゲたちに投げた。
見事にその輪は一回投げただけなのに5人のハゲたちに当たった。

「希の能力はコントローラ。１００メートルの針に糸を通せるほどのコントロールを持っています」

だが、彼女の能力の正体はこれ以上の力をもつ。

「おい、こいつらは【団殺者（ディスター）】だぞ！！さっきあいつ自分で【魔法使い（マジシャン）】と言っていたぞ！！」

一人のハゲが叫んだ。

「ねえ。前から思ったのだけど、異名ってなに？」

真が晃に聞いた。

「僕らは最初はそんなものは無かったのですが、名をいつの間にか広まっていく中、勝手につけらたものです」

晃は説明した。

翔太はあの武器でさまざまのトラップを作るために【魔法使い（マジシャン）】と呼ばれていて、ミズは完全にあんな能力なので【筋肉者（マッスル）】と呼ばれており。希は【華麗（スプレンダー）】と呼ばれている。

「僕は自由に武器を使うことで【自由者（フリーダム）】と呼ばれました」

その時、一人のハゲが、沙奈の背中を取り、身柄を拘束した。

「おい、お前ら、こいつもお前らの仲間だろうが。これ以上動くならこいつの命はねえ！！」

ハゲは沙奈の首にナイフを当てた。
晃はため息をついた。

「あなたは完全に捕らえる相手を間違ってます」

晃がそう言ったとき。腹に何かぶつけたような顔になった。
いや、実際沙奈がハゲの腹にひじを当てていた。
そのあと、思いっきり顔面に蹴りを入れた。

「だから言いましたのに」
「あ、アキ君。これは一体」

結衣は聞いた。

「沙奈のみこの中で特殊能力が無いのですが、代わりにこの中で一番の運動神経と戦闘能力を持っています」

晃が頭をかきながら説明した。

「実際、その並外れた運動神経が彼女の能力かもしれません」

晃はそのあと、手を上げた。
沙奈はうなずき、トンファーを取り出した。

「そして、名づけられた名は【戦士（セイバー）】です」

沙奈はかわいい顔をしているのでどうしても皆彼女のことをなめてしまうが。彼女は一番の危険人物だ。

しかも、言うことは晃の言葉しか聴かないと言うのだからさらに面倒だ。

「こ、こいつらだ、あの女を捕らえろ！！」

ハゲたちは次に美紀たちを狙おうとした。

だが、向かってきた男たちは全員、晃に銃に撃たれた。

「僕の幼馴染に手を出すと言うことは、僕に倒されると思ってください。あ、でも大丈夫ですよ。この弾で死ぬことはありませんよ」

晃は微笑みながら言った。

「まさか、あいつは【自由者（フリーダム）】か！？」

「な、なんで【団殺者（ディスター）】が全員そろってんだよ！！にげろ！！」

ハゲたちは一斉に逃げていった。

何名か転んでいたのは突っ込まないでおこう。

「ま、これで一見落着だな」

翔太は気軽に言った。

「先生たちには話はつけておきました」

晃は言った。

「お、さすがだな晃」

「助かったわ」

「沙奈ちゃんも良くやりましたね」

晃は沙奈の頭を撫でる。

「うん」

沙奈はうれしそうに言った。

「さて、クラスの仕事に戻りますよ。美紀、結衣！！」

「了解！！」

「うん」

晃たちは校舎に向かった。

第８９話　ＸｍａｓＰａｒｔｙ－？（後書き）

人気投票開催中＝ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｉＩ２Ｎｗ７ｐ

キャラ紹介

水瀬瑞希（みなせみずき）
学校：星邦中学３年
年齢：１５歳　性別：女　第一人称「私」
身長：１４８　胸ランクＢ　誕生日：１２月６日
髪：髪は桃色のショートのポニーテール。
ジョブ：科学都市の元気な幼馴染の後輩
好きなもの：猫、犬、デザート全般
嫌いなもの：お化け、蛇
記：晃とは中学からの知り合いで信頼とともに好意を持っている。
晃のことは「先輩」と呼んでいる。
桃色の色宝石を所持している。
晃の信頼度は計り知れないほどで、敬語で話すのも晃が関係している。
料理の腕は上手で、昔から家があまり裕福でないために節約生活が実にしみている。
料理もうまいが、なぜか作ったときの材料の値段が半端なく安い。
一体、彼女はどんな生活を送ってきたのかは後日談。

第９０話　ＸｍａｓＰａｒｔｙ―？（前書き）

前回のあらすじ

簡単、解決！！

第９０話　ＸｍａｓＰａｒｔｙ―？

晃たちは自分のクラスに戻り、仕事を続けた。

「さあ、晃君。アキちゃんの出番だよ」

にこにこと微笑みながら伊織は言ってきた。

晃は完全に無言になった。

そのあと、

「すみません！！」

そう言って行きよい良く教室を出た。

「「逃がしはしないよ！！」」

伊織と結衣は同時に晃を捕まえた。

「ちょっと。美紀、助けください！！」

晃は美紀に助けを求めようした。

「ごめんね。アッキー」

美紀はカメラを持ちながら謝った。

「え！？ちょっと、美紀さん！？」

「さあ、晃君。さっさと着替え場所に行きましょうね」

「思う存分着替えさせてあげるね」

伊織と結衣は晃は引っ張りながら言った。

「いやです！！いやです！！あと結衣の場合日本語変ですよ！！」

否定する晃だが、これは完全にあきらめたほうがいい。

※

結局晃はさっきのミニスカサンタに着替えさせられた。

「またこんな格好しなければならないのですか」

「あ、科学都市のお客さんには話はしておいたからもうバレル心配は無いよ」

伊織は微笑みながら言っている、

だが、明らかに伊織と結衣の手にはカメラが合った。

「行ってきます」

晃は涙目で行った。

「お、きたぞ！！」

女装晃、アキちゃんの登場に男子生徒は喜んだ。

晃はそのことを無視して科学都市メンバーの席を見た。

そこには携帯を構えている、柚子、百合、瑞希、沙奈の姿があった。

さらには別の席に真、花火の姿が見える。カメラを持って。

晃はため息をついた。

「晃、いや、アキちゃんあんたも大変ね」

柚子がカメラを撮りながら言った。

「そう思うならカメラを撮るのはやめてください。あと、その呼び名もやめてください」

晃はケーキを私ながら行った。

「アキちゃん、アキちゃん!!あ～んして!!」

一人の男子が晃に言ってきた。

「そういうサービスは行っていません!!」

晃は腕で大きく罰マークを作って断った。

※

5時ごろ、晃はようやく普通の姿に戻った。
そして、この時間は全体でおこなう夜のパーティだ。
全生徒は校庭に集まった。
さらに、ここでは生徒会の出し物がある。
そのことで晃は生徒会室に来た。

「失礼します」

そう言ってドアを開けたらそこには着替え中の生徒会メンバーがい

た。

「あの、ここで着替えるのやめてくれませんか?あと、せめて鍵ぐらいは閉めてください」

晃は呆れながら言った。

「はい、これアッキーの分ね」

晃の話を無視して泰子は下着姿で晃にある服を渡す。

晃は別にどうも思わずに素直に受け取った。

「アキ君もここで着替えますか?」

下着姿の静音は聞いてきた。

「僕は男子更衣室で着替えてきます」

晃はそう言って生徒会室に出ようとした。

「いいじゃないですか、別にここで着替えても」

ささらは笑顔で言った。

この笑顔を見てしまって晃は断れなかった。

「仕方ないですね」

そう言って晃は渡された服を腰についている十字架のキーホルダーに近づけた。

「【記録（ログ）】」

そう言ったとき、晃が持っていた服が消えた。
そのあと、晃は自分のズボンに手をつけた。

「【呼び代え（チェンジ）】」

その瞬間、晃の服が早くもさっきのズボンになった。

「Yシャツはそのままでいいですね。みなさん、早く着替えてくださいね」

晃は微笑みながら言った。

「じゃあ、アキ君。後ろのファスナー止めてくれるかな」

静音が晃にお願いしてきた。
格好は純白のドレスだ。
だが、背中が思いっきり開いていた。
背中で分かるようにブラはしていない。

「分かりました」

鈍感男の晃は普通にファスナーを止め始めた。

「あ、アッキー。私のブラ、私のロッカーの中に入れてくれない」

泰子はブラを指差しながら言った。

「分かりました」

晃はそう言ってブラを持った。
顔は完全に平常心だ。

「泰子さん。よくそんなこと頼めますね」

ささらは感心しながら言った。

「ま、アッキーは下心本気でないからラクに頼めるものだよね」

泰子は笑いながら言った。

「あ、だったら私のこの花を頭につけてくれませんか？」
「ええ」

ささらに頼まれて晃はささらの後ろに立つ。

「あの、晃さん」
「ん？なんですか？」

声をかけられて晃は返事を出す。

「な、なんでもないです」

ささらは顔を赤くしておった。

「そうですか。はい。出来ましたよ」
「あ、ありがとうございます」

そう言ってささらは立った。

「では、行きますか」

静音の一言で全員生徒会室を出た。

第９０話　ＸｍａｓＰａｒｔｙ－？（後書き）

人気投票開催中＝ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｉＩ２Ｎｗ７ｐ

キャラ紹介

柊翔太（ひいらぎしょうた）
学校：私立星道高校１年
年齢：１５歳　性別：男　第一人称「俺」
身長：１７３　誕生日：１月１８日
ジョブ：科学都市の大親友
好きなもの：運動、肉
嫌いなもの：カニ
記：晃の科学都市での親友。
黄銅の色宝石を所持している。
星道高校に入っているわけで頭はいいがバカ。
希は幼馴染で好意を持っている。が、晃ほどではないが彼も鈍感で希と両想いのことも鈴が好意を持っていることも気づいていない。
晃とはコンビネーションが良く、話も合う。

団殺者
能力は瞬時計算。だが、その能力はなぜか戦闘中しか使えない。
武器は針とワイヤーを使い、トリッキーな戦法で戦う。
団殺者の異名は『魔法使い《マジシャン》』。この戦法のせいでこの異名がついた。
技：針を地面に刺してワイヤーの壁を作る『切り裂きの壁（スラッシュ・ウォール）』

針を放ち、ワイヤーを自分で持って囲んだところへワイヤーを離し、蜂の巣にする『蜂の巣の罠（キラービー・トラップ）』

第９１話　ＸｍａｓＰａｒｔｙ―？（前書き）

前回のあらすじ

生徒会、本格的にパーティに参加！！

第９１話　ＸｍａｓＰａｒｔｙ―？

冬なので暗くなる時間も早い。
外には大型の暖房器具が置かれているため、ブレザーを着ていない生徒もいる。
そのとき、マイクの音が聞こえ出した。

「え～みなさん、聞こえますか！？」

静音の声が聞こえたので、全校生徒は多き作られたステージを見る。
東の丘学園では、外からのお客さんがたくさん集まる行事が多い。
そのために、校庭にも大型のステージをセットしているのだ。
みんながステージに目を向けたとき、ステージが一気に光だした。
ステージ上にいるのは生徒会のメンバーだった。
だが、格好は制服ではなく、全員ドレス姿だった。
晃も、正装に着替えている。
男子生徒の叫びが聞こえた。

「いまから、生徒会主催の後夜祭を開催します！！」

静音は手を挙げながら言った。
全校生徒全員歓声を上げた。

「では、詳しい説明を生徒会補佐、アキ君。お願いします」
「静音さん。そこは本名でお願いします」

晃は静音の言葉に突っ込んだ。

「あんたね。そんなこと言っちゃうと」

鈴が大体予想していった。

同時に晃が中央に立ったとき、男子生徒がいきなり声を上げてきた。

「おまえ、ふざけんな！！なに会長にあだ名で呼ばれていやがる！！」

「俺と補佐代わってくれ～」

「なんでお前が補佐なんだよ！！」

「このモテスリムやろう！！」

ちなみに最後の言葉は大吾のセリフである。

「ほら、こうなった」

鈴が呆れながら言った。

「みなさん、アキ君に生徒会補佐を頼んだのは私からですので、そんなにアキ君を攻めないでください！！」

「ちょっと、バカ！！」

静音はまた知らずに爆弾を投下した。

「な、会長からのじきじきのお願いだと！！」

「もう、死ね！！」

「この世からいなくなれ！！」

「このハーレムやろう！！」

「死ねといなくなるは一緒ですし、ちょっと黙ってください！！あと大吾、意味が分かりません！！」

晃は一気に突っ込んだ。
ちなみに最後の言葉も大吾によるものだ。

※

後夜祭と言っても、やることは簡単だ。
今から皇帝の中心に火か上がり、その周りで楽しく踊ると言うものだ。
簡単に言えば、キャンプファイヤーである。

しかし、時間がある限り、誰とでも踊ってもいいし、ステージに上がって踊ってもいい。
誰でも楽しめそうと思い静音が提案したものだ。

もう火は放たれ、大いに燃えている。
すでに踊っている生徒もいる。

「一つ思ったのだが、これってクリスマスイブにやることか？」

不思議そうに鈴が言った。

「まあ、いいのではありませんか。みんなが楽しめば」

晃は微笑みながら言った。

「そうだな。静音はそんなやつだ」
「ええ」

「あれ?鈴にアキ君。何はなしているのですか?」
静音が晃と鈴の近くに寄ってきた。
「何でもありません。それで、どうかしたのですか?静音さん」
「え、ええ。とかったら、その……」
静音はいきなり黙り込んだ。
鈴は何かを察したのか、いきなり晃の背中を押し出した。
「ほら、晃。あんたは静音と踊ってきな」
「え!?」
いきなりのできごとで晃は驚いた。
「い、いいのですか?静音さん」
「え、あ、はい。お、お願いします」
静音は顔を赤くしていった。
「そうですか。では、行きましょう」
晃は静音の手をとった。
「はい!!」
静音は微笑みながら答えた。
※

静音との踊りは男子の怒りの目線を浴びながらでも踊った。
晃はここでも器用なために始めて踊ったのに一回も失敗が無かった。

「あ、アキ君」

踊りが終わり、結衣が晃を呼んだ。

「みなさん。ようやく見つけました」
「アッキー、早速踊ろう♪」
「あ、ダメよ、私が先に踊るのだから！！」
「あきにい。おどろ♪」
「残念だが、私がさきに踊らせてもらおう」
「私も晃君と踊りたいです」
「アキ、私はアキの相棒だから先に踊るよ」
「あきにいさん、みなさんのことは後にして先に行きましょ」
「いいえ。私も先に踊りたい。いいでしょ、晃君」
「わ、私だって晃さんと踊りたいです」
「アッキーさっき静音さんと一緒に踊ったのだから、次は僕と」
「だめです、私が晃さんと踊るのです！！」

女性人は一斉に声を上げた。
同時にコングがなる音が聞こえた。
女性軍は輪になって一斉に言い争いが始まった。

「では、先輩、私と踊りましょうか」

そのとき、瑞希がいきなり晃の腕を組み始めた。
そのことに反応した、百合と沙奈が進路を塞ぐ。

「だめです。わ、私がアキ君と踊りたいです！！」

「お兄様と、踊りたい」

ここでもコングが鳴った音がした。
晃は顔を引きずりながら追い祖笑いをした。
同時に数名の男子の怒りを買っていた。

「みなさん、喧嘩は良くないですよ」

晃はみんなの忠清に入った。

『晃（くん、さん）が鈍感だから悪いんでしょ！！』

みんな同時に晃に言った。

「す、すみません」

晃はなんとなく謝った。

「てなわけで、ジャンケンで決まったので、私と踊りましょう。先輩♪」

何で決まったのかを説明しながら瑞希は晃の腕を取る。
本当にジャンケンで決まったらしく、他の女子は悔しそうな顔をしていた。

いろいろあったが、晃にとって今年のクリスマスイブは最高のものとなった。
だが、本当のクリスマスはここからだ。

第９１話　ＸｍａｓＰａｒｔｙ－？（後書き）

人気投票開催中＝ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｉＩ２Ｎｗ７ｐ

キャラ紹介

加納希（かのうのぞみ）
学校：都立星光高校１年
年齢：１６歳　性別：女　第一人称「私」
身長：１６１　胸ランクＣ　誕生日：１２月８日
髪：水色のショートヘアーで頭に髪飾りをつけている。
ジョブ：夢見る恋に生きる団殺者
好きなもの：恋話、ケーキ
嫌いなもの：勉強
記：翔太の科学都市での幼馴染。
頭はそれと言うほどよくはない。運動は得意。
幼馴染の翔太にバカと言っているが好意を持っている。
恋話は好きだが、自分のことを言われると混乱する。
意外と本人は鈍感で翔太が両思いにも気づいていない。
晃の鈍感さにも呆れている。

団殺者
能力は『コントローラ』糸を遠くでも針に通せるほどの集中力とコントロールをもつ。
武器は折りたたみ式の輪っか。２つ持っている。
普段はいつも持っている鞄に入っている。
異名は華麗に戦う団殺者で『華麗（スプレンダー）』と呼ばれている。

第９２話　優輝家のＸｍａｓ・前編（前書き）

前回のあらすじ

学園のクリスマス、終了！！

第９２話　優輝家のＸｍａｓ・前編

その日の夜。
科学都市のメンバーはとりあえず自由荘に来ていた。

「で、俺たちはどこにとまればいい？」

翔太が晃に聞く。

「そうですね。とりあえずは翔太は透の部屋に行ってください」

晃は翔太に言った。
ちなみにミズは花火と一緒に家に帰った。

翔太は実は親からは静音とは兄妹だが、親が離婚して、ともに再婚。
そのために今は別々に暮らしている。

静音を引き取った、親はあまり翔太はいいものだと見てはいない。
だが、逆に翔太を引き取った親は静音のことは大切に思っている。

ミズの場合、ミズ自らが科学都市にとどまりたいと断言。
そのため、ミズは科学都市で一人ぐらしだが、親には愛されているのは間違いない。
どっち道、兄妹の仲はいいみたいだ。

「あれ？それだと、晃の部屋には誰も行かないのか？」

翔太は疑問に思い聞く。

「僕の部屋には沙奈ちゃんが来ます」
その言葉に女子全体が反応した。
「ちょっと、なんでアキ君の部屋にこの子が泊まるの！？」
「そうだよあきにい！！」
だが、科学都市のメンバーはなんか察したようで、そのあと希がみんなに言った。
「ああ、ダメだよ。晃と一緒にいなきゃ、あの子、この家破壊しそうだから」
晃の考えは当たっていたらしく、うなずいていた。
「あははは。なるほどね」
美紀が分かったように言った。
「まあ、あきにいなら１００％安全だしね」
真も安心して言った。
「あとは、女子たちで決めてください。あ、真は僕の妹ですからこの家ですよ」
その言葉に百合、柚子、瑞希が反応した。
晃の言葉により、真の部屋＝晃と同じ屋根の下で寝ることになると瞬時に分析した。
お互い目を合わせた。

「「「最初はグー！！ジャンケン！！」」」

早くも女子3人によるジャンケン大会が始まった。

「「「ポン！！」」」

勝者、瑞希。

「瑞希、ジャンケン強いですね」

「ふふ、いろいろこれで繰りぬけてきたことがありますから！！」

瑞希の家は結構科学都市の中では結構貧乏なほうだ。

そのせいで、瑞希は節約生活に慣れており、さらには昔、晃に弁当を作ってきたとき、その材料の値段が半端なく安かったのだ。

「そ、それはすごいですね」

「エッヘンです」

瑞希は鼻を高くしていった。

その後の結果は美紀の部屋は柚子が、結衣の部屋は百合が、今宵の部屋は希が泊まることになった。

「ここがお兄様の部屋ですか」

晃の部屋を入った沙奈は言った。

「そうですか。沙奈は布団で寝ますか？それともベットで寝ますか？」

晃は聞いた。

「布団で構いません。ベットで寝ると、お兄様のにおいのせいで眠れなくなります」

「それって臭いという意味ですか？」

「いいえ。いいにおいすぎて、夜中ずっと匂ってしまいそうで」

「分かりました。布団で寝てください」

晃は嫌な予感がしたのでこれ以上の言葉は求めなかった。

そのころ、真の部屋では。

「私、先輩の部屋に寝るのは初めてです」

瑞希は真に言った。

「そういえば、そのしゃべり方って憧れてその口調になったんだよね？」

「はい。本当なら第一人称も僕にしたかったですが。それだと女に見慣れないと思いまして」

「そうなの？でも、それならあきにいは絶対に気にしないと思うな」

「そ、そうですかね！？」

瑞希は驚きながら聞いた。

「あきにい。性別が女なら気にしないのじゃないのかな。いや、絶対にそうだよね」

「ふむふむ、ライバルさんの言葉は役に立ちますね」

瑞希はメモりながら言った。

「ライバル？」

「はい。義理の妹ですから、付き合うことも可能です。つまり、これは完全にライバル当然です！！」

２人とも、同時に笑って、布団の中に入った。

※

昼ごろ。

晃は出かける準備していた。

「あれ、先輩どこか行くのですか？」

「ええ。今日の買い物です。一緒に行きたいならいいですよ」

晃の言葉に女子全員反応した。（希以外）

こうして全員で買い物に行くことになった。

「アキ君。これならどうかな？」

百合がいい材料を持ってきてくれた。

「ええ、いいですね。はやり百合はつれてきて正解ですね」

「そんな、アキ君から教わったことをやっているだけですよ」

百合も晃と同じ、家事を担当している。

ぶっちゃけ、姉の柚子は家事がニガテである。

2人が楽しく話しているのを他の女子は不愉快に思った。

「晃、この肉はどうだ！？」

翔太が目を光らせながら晃に言った。

「こ、これは」

しかも、何を指しているかというと、クリスマスに良く食べる例にお肉様だ。

「け、結構高いですね」

「バカ翔太。これじゃあ晃たちの生活がやばくなるじゃない」

「希、それほどでもないと思いますが」

晃は急いで望みの言葉を訂正した。

「先輩、これならどうですか？」

瑞希が持ってきたのはそれらしき、形にやすものの肉だ。

「瑞希、良く見つけましたね」

「先輩、僕の安物レーダーをなめないでください」

そう言って瑞希の頭の毛が一本立っていた。

「妖怪アンテナですか、それは？」

「いいえ、これは安物アンテナです」

瑞希が自信満々に言った。

「ま、これで買うものは買いましたね。では帰りましょうか」
「アッキー、あとは今日の夜の準備だね！！」
「ええ」

みんな楽しみな気持ちで自由荘に戻った。

第９２話　優輝家のＸｍａｓ・前編（後書き）

人気投票開催中＝ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｉＩ２Ｎｗ７ｐ

キャラ紹介

夏色ミズヒキ（なついろみずひき）
学校：都立星光高校３年
年齢：１７歳　性別：男　第一人称「俺」
身長：１８４　誕生日：５月６日
ジョブ：団殺者の良き兄貴分
好きなもの：恋話、ケーキ
嫌いなもの：勉強
記：晃の先輩で心が広く、みんなの兄貴。みんなには「ミズ」と呼ばれている。
勉強は聞いてほしくないらしいが運動神経は良く、力は一番ある。
筋肉はものすごく硬い。
実はこの中で恋愛のことで蚊屋の外のことを気にしている。
好きなもの、筋トレ、肉
嫌いなもの、餡子

団殺者
能力は『筋力化』。一時的に自分の筋力を上げる。
武器は拳でドストレートな戦い方をする。
異名は『筋肉（マッスル）者』

第９３話　優輝家のＸｍａｓ・後編（前書き）

前回のあらすじ

とうとう、クリスマスもラスト！！

晃「たのしいクリスマスになりそうですね！！」

第９３話　優輝家のＸｍａｓ・後編

『メリークリスマス！！』

夜になり、全員集まったところで一斉にみんな声を上げた。

「では、早速いただきます！！」

そのあと、泰子がいきなり、お肉にがぶりついた。

「ちょっと、泰子さん。早すぎます！！」

ささらがそれを見て、泰子に注意する。

「だって、アッキーのちゃんとした料理食べるの初めてだから」

「まあ、気持ちは分かりますけど」

ささらも、実は早く晃が作った料理を食べたくってうずうずしていた。

「みなさん、どんどん食べてくださいね」

「おかわりたくさんあります」

晃と百合がみんなに声をかける。

料理作っているのは晃、百合の担当になっている。

ゆういつ、晃の味に近いのが百合ただ一人なのだ。

「先輩、とてもおいしいです！！」

瑞希がポテトフライを食べながら言う。

「それ、僕ではなく、百合が作ったものですが」

「はにゃ！！し、失礼しました。ですが、とってもおいしかったです」

瑞希は訂正しながら言った。

「そんな、とてもうれしいです」

百合は微笑みながら言った。

「アキ君。よく2人でこんな量の料理作れましたね」

静音が関心しながら言ってきた。

「まあ、仕込みは夕方からしていましたし」

「まあ、アッキーの場合、その魔法の手があるからね」

美紀が晃を指差しながら言った。

「ああ。そうよね。ケーキを作っていたときは、本当に驚いたわ」

伊織もうなずいた。

しかし、美紀たちが言っていることはまったくもって合っているのだ。

「アキ君の器用さは【団殺者（ディスター）】になれるほどですからね」

百合は微笑みながら言った。

「まったく、どうなたらこんなに器用に慣れるのからね」
「でも、あきにいがこんなに器用になったのは、科学都市にいたときだよね」

柚子の言葉の後、真が気になっていたことを聞いてきた。

「そこのところは教えできません」

晃はフライパンをもちながら言った。

「はい、チャーハンで来ましたよ」
「はや！！」

晃の言葉に柚子はツッコンだ。
そのあと、やっと晃たちもご飯にありつけた。

「あ、本当にこのフライドポテトおいしいです！！」

ちなみに晃の大好物はそのポテトである。

「本当！！うれしい！！」

顔を赤く染めながら百合は言う。

「アキ君。今度私がポテト作ってあげるね」

負けないと思い、結衣が晃に言う。

「それは、楽しみですね」
晃は違和感を感実に言った。
「さて、そろそろプレゼントでもいきますか！！」
泰子が元気よく言った。
「「「「おー！！」」」」
晃以外の男子が大声で返事をした。
「あの人たちは酔っているのですか？」
ちなみに、ここは未成年しかいないので、お酒は置いていない。
完全に気分だけで酔っている。
「さ～て、プレゼント交換はおなじみの音楽タイプのやつでやるよ！！」
泰子がそう言ったとき、晃はリモコンで音楽を鳴らした。
同時にみんなプレゼントを回し始めた。
しかし、ここでも女の戦いがあった。
それは、晃のプレゼントだ。
音楽は5分程度なり続いた。
そのあと、いきなり止まり始めた。
「はい、しゅうりょーう！！」

泰子が元気よく言う。

「しかし、5分はいく並んでも長すぎます」

晃は呆れながら言った。

「さて、僕のプレゼントは何でしょうかね」

晃はわくわくしながら言った。
そして、そこには綺麗な写真を飾るための額縁があった。
青と、赤のガラスの線が交差し合ってとても芸術系が高い。

「あ、それ私のです」

晃があけたのをみてささらが名乗りを上げた。

「ど、どうですかね。私は綺麗だと思うのですが」
「僕も綺麗だと思います。ありがとうございます、ささら！！」

晃は微笑みながら言った。
その言葉にささらは顔を赤くした。

そして、晃のプレゼントを手にしたのは花火だった。
それはネックレスで単純に白い石が綺麗に輝いていた。

「あ、花火。それは僕のです」
「と、とっても綺麗です。大切にしますね」
「ありがとうございます」

花火の笑顔に対して晃も笑顔で答える。

そのとき、いきなりインターフォンが鳴り出した。

晃は家のドアを空ける。

「ヤッホー、メリークリスマス晃君」

「由佳さんに、町長さんに、縞島さんたちまで」

そこには晃たちに世話になったり、されたりした大人たちがいた。

「私もいるよ」

「吹雪ちゃんまで。みなさんいらっしゃいです」

晃は笑顔で出迎えた。

「みなさん。更なるお客さんが来ましたよ！！」

「ヨッ待ってました！！」

晃の言葉に大吾が乗りよく言った。

「オッシャー大人がいるんだ、今日は深夜まで騒ぐぜ！！」

「ご近所さんに迷惑にならないようにしてくださいね」

呆れながらも、晃は笑顔で言った。

今年のクリスマスはとてもにぎやかに終わり、晃もとてもうれしく感じていた。

第９３話　優輝家のＸｍａｓ・後編（後書き）

人気投票開催中＝ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｉＩ２Ｎｗ７ｐ

キャラ紹介

星平沙奈（ほしひらさな）
学校：星邦中学３年
年齢：１５歳　性別：女　第一人称「私」
身長：１４８　胸ランクＡ　誕生日：４月２１日
髪：金髪のツインテール。
ジョブ：文武両道天才少女
好きなもの：晃、運動、勉強
嫌いなもの：恋路の邪魔な相手
記：晃たちの後輩で団殺者の中で一番の後輩。
運動神経は中で一番である。頭もいい。
晃と競える文武両道の持ち主。だが、ずっとみんなにいじめられてきてそのことを救ってくれた晃のみ心を開いているがそれ以外の人には無口。
運動神経は昔からの良かった。
礼儀も良く、晃のことは「お兄様」と呼んでいる。
晃に好意を持っている。
瑞希とは犬猿の仲である。（特に晃の取り合いの）

団殺者
特殊能力はない。
武器は改造トンファー。
このトンファーからはさまざまな仕組みがほろ越されている。

・チェーン：先端部分が鎖につながって遠距離攻撃ができる。
・ナイフ：短いところからナイフの刃を出す。
・スピア：ナイフのところを換装して針を出す。
・ニードル：トンファーからとげを出して硬いものを破壊する。

異名は『戦士（セイバー）』と言われている。

第９４話　大掃除（前書き）

前回のあらすじ

クリスマス、終了！！

第９４話　大掃除

今年も終わりが近づき、晃たちは自由荘の大掃除を始めようとしていた。
翔太たちはもう科学都市に帰って行った。

冬休みに入り、そろそろ大晦日に近づく中、やっぱり新年には綺麗な部屋のまま迎えたいので晃の一言で、一気に大掃除が始まろうとしていた。

「それでは、役割分担を行います」

晃は気合を入れながら行った。
だが、帰ってきた言葉は、家事がニガテな幼馴染ズの言葉だった。

「なにやる気の無い言葉をだしているのですか？」

晃は肩の力が抜き、理由を聞いた。

「だって、この中でまともに掃除が出来るのはアッキーだけジャン」

美紀が見事にやる気が無い言葉で言う。

「そんなこと言うと、嫁のもらいどころがなくなりますよ」

その言葉に女子たちは一斉に反応した。

「だったらアッキーが私をもらってよ」
「掃除が出来ないなら答えはノーです」

晃は美紀に手をあてながら言った。

「アキ君、私の分担はどこ！？」

いきなり結衣が聞いてきたので晃は驚いた。

「あきにい、私も教えて！！」

真もそうだ。

「おお、やる気があるのはいいことです。ではまず、自分の部屋からはじめてください！！」

ソラはやる気があるのを分かって言った。

だが、みんなのやる気の理由と、晃が思った理由はまったく違うものだ。

「後は、結衣は1階の荘の廊下、今宵が2階です。透は僕の家のトイレ、美紀と真は物入れをお願いします！！」

晃は次々にみんなに指示を伝える。

「おい、俺トイレはいやだぞ！！あと、晃の担当はどこだよ！！」

透がいやな顔をして言ってきた。

「僕の担当場所は、まず自分お部屋と、リビングとかの部屋とか、空きがある部屋2つの掃除です」

透は言葉を失った。
完全に晃の担当場所のほうが2倍以上多い。
しかも、空きの部屋とは。自由荘の部屋の数は6。
つまり、5号室と、6号室が開いている。

それはつまり、みんなの部屋と同じ大きさを2回行うのだ。
これは言葉を見失う。

「それでは、はじめてください」

晃は手を上げていった。

※

とりあえずは、みんな自分の部屋を先に掃除を始めた。
1時間後、今宵が晃が掃除していると言っていた5号室に来た。

「晃、ちょっとした緋もがほしいのだが」

今宵は部屋をのぞいた。
だが、そこにはものすごく綺麗になっていた部屋があった。
今宵は言葉を失った。

「あれ？今宵。どうかしましたか？」

今宵がいることに気づいた晃は問う。

「あ、晃なんだこの部屋は？」

今宵は紐の前にこのことを聞いてしまった。

「え、ああ。ここはもう終わりましたので、次の部屋に移ろうと思っていたところです」

晃は笑顔で言った。

完全に1時間で追わせた程度の綺麗ではない。

今宵が一日かけて掃除をしても、この綺麗さには追いつかない。

「それで、今宵は何かようですか？」

「あ、そうだ。紐がほしいのだが」

「紐ですか。分かりました」

今宵は思った。

晃が一家に一人いれば、何の不自由もなくなると。

※

さらに2時間後。

晃は6号室の終わり、リビングを掃除していた。

もうすでに床が輝いている。

「アキ君。一体何をしたらこうなるの？」

その状況を見た結衣は驚きながら聞いた。

「ん？結衣、なにかようですか？」

晃は振り向いて聞いた。

なんだか、肌がつるつるしているのが見える。

「アキ君。いい執事さんになれるね」
「それは、ほめ言葉として受け取ってもらいます。それで、結衣はなにしにきたのですか？」
「あ、うん。実はね」
晃は結衣につられて1号室。
つまり美紀の部屋に来た。
「あ、アッキー！！」
美紀に呼ばれて晃は部屋に入った。
「アッキー。これどうしたらいい？」
そう言って差し出したのは完璧に腐っている焼きそばパンだった。
「なんでこんなものがあるのですか？」
「さあ、わかんない」
美紀の言葉に晃はため息をついた。
「とりあえずは、袋にいれて捨ててきてください」
晃は指差して言った。
「美紀ったら本当に何やってるんだが」
結衣もため息をついた。

※

さらに2時間後。
晃はもう自分の部屋を終わらせようとしていた。
実際、晃はこの部屋で自分の担当は終わる。
晃の部屋は下から2週間ごとに掃除しているので、大掃除をする場所は逆に見当たらない。

「さて、これで終わりですね」

そう言って晃はみんなの担当場所を回りだした。
みんなはもう自分の部屋は終わり、他の担当場所を回っていた。
透にいたっては、晃がすでに自分の部屋に相当な時間をかけると思ったので一番簡単なトイレにまわした。

その予想が当たったのか、透のみ、自分の部屋の掃除をいまだにやっている。

そんなことはともかく、晃は一番心配な物置についた。

「あ、アキ君」
「晃」

そこにはもうすでに自分の担当場所を全て終わらせた結衣と今宵がいた。
この2人は意外と家事のセンスはある。
今宵は料理を抜いてだが。

この物置は運動系の2人に頼んでおいた。
結衣と今宵も晃と同様、心配になってきたので見に来たらしい。

「どうですか？」

晃はそう言って物置の中を見る。

そこにはものすごい状態で休んでいる美紀と真がいた。

「あ、アッキー。ここに一体何入れていたの？」

美紀が疲れながら言った。

「いや、実際、僕は一切そこを戻ってからあけていません」

晃の口から衝撃的発言が飛び出した。

あのあと透のみ、さらに1時間かかったのは別の話。

第９４話　大掃除（後書き）

帰ってきました！！
後書きトークコーナ！

人気投票開催中＝ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｉＩ２Ｎｗ７ｐ

透「やっと掃除終わった」

晃「ごくろうさまです」

結衣「でも、なんであんなに掃除に時間かかったの？」

透「ヴッ！！」

今宵「エロ本の整理に手間取ったんじゃないの？」

透「そんなことないぞ」

結衣「あ、アキ君がダッシュして透の部屋に行った」

透「しまった、燃やされる！！」

今宵「あいからわず、変態には手厳しいな晃は」

結衣「まあ、私たちには被害がないからいいじゃない」

透「俺のロマンが、夢が！！」

一同「アホか」

第９５話　大晦日の夜（前書き）

前回のあらすじ

晃、掃除マジック！！

第９５話　大晦日の夜

１２月３１日。
晃たちはいつものメンバーで大晦日の夜に神社に来ていた。
そして、女子全員浴衣だった。

「おお、全員女子浴衣、最高っす！！」

興奮しながら大吾は言った。

「私たちは帯が結びにくいのあきにいに頼みました」
「え？晃君できるの？」
「ええ。一様は」

伊織は驚きながら聞いた。

「私もあきにいさんに頼めばよかったです」

花火ががっかりしながら言った。

「ちなみに、やったのはこっちの女子全員だぜ」

透が皆に言った。
こっちと言うのは幼馴染のメンバーのことだ。

「ぬあーにぃ！！貴様、結衣ちゃんの帯も結んだのか！！」

そのとき、その言葉に反応したのは大吾ではないく、初めて聞く声

の人だ。
そのあと、一気に晃に迫ってきた。
「あんた、ここまで来たの!?」
結衣は驚きながら言った。どうやら言っている人のようだ。
「うっす!!俺は羽衣結衣ちゃん一筋なので、結衣ちゃんに近づくふしだらな男子をしばくために来ました」
「そうね。あんたが一番邪魔で要らないのだけど」
結衣は呆れながら言った。
「あ、あなたは一体だれですか?」
晃は聞いた。
「俺の名は長谷川道重(はせがわみちしげ)だ!!俺はお前のような男を結衣ちゃんに近づけさせないために生まれた!!てなわけでお前は帰れ帰れ!!」
その言葉を言ったとき、結衣から何が切れた音がした。
だが、その後が聞こえたのは結衣からではなかった。
『帰るならあんたが帰れ!!』
「ひっ!!」
女子全員に言われて脱兎のごとく、道重は帰っていった。
「な、なんですかね。あの人は」

ソラは呆れながら言った。

「ともかく、今日は大晦日なんだし、パーと楽しんじゃおうよ！！」

「それもそうですね」

伊織の言葉にみんな賛成した。

※

時刻は１１時３０分。

あと３０分で新年だ。

みんないろんな屋台に回って食べたり遊んだりしている。

「やった、また当たった！！」

射的をしている美紀が楽しそうにに言った。

みんなその光景を見ている。

「お、ボクも当たったよ！！」

泰子もどうやら景品を当てたそうだ。

だが、その隣に悪戦苦闘している人物が一人いた。

「どうですか？静音さん」

「しゃ、射的って難しいですね」

静音はすこし残念そうに言った。

「静音さん、打つときに銃身がづれているらしいのですよ」

「え！？」

そう言って、晃は静音の後ろから静音の手を持って銃を構えだした。
静音は出来事だったのでしょうしょう驚いている。
後ろの女子もそうだ。

「こうやって、そうそう。撃ってください」

静音がどきどきしているのにも関わらず、晃は耳元で指示を出す。

「は、はい」

静音の玉は見事にぬいぐるみに当たった。

「あ、取れました。ありがとです、アキ君」

静音の笑顔に晃は笑顔で返す。
後ろの女子はものすごくうらやましがっている。

※

そして、時刻は12時。
とうとう新年が明けた。

「あ、おみくじどうでしたか？」

あの後、みんな定番のおみくじを引いた。

「ついでに私は大吉です」

花火は笑顔で言う。

「あ、私は吉です」

ささらは笑顔で言う。
それ以外のメンバーも中吉か、吉だった。

「晃君はどう？」

伊織は晃に問う。
晃はそのまんま伊織に見せた。

「小吉ってこれまた地味だね」
「これで、毎年小吉です」

そう。実は晃がおみくじを引くと完全に決まって小吉が出てくるのだ。

「一回でも、別のおみくじの結果を引きたいです」
「ご、ご愁傷さま」

伊織は同情しながら言った。

「あ、ゆーちゃんはどうだった？」

美紀が結衣に聞く。

「だ、大凶」

結衣は残念そうに言った。

「恋愛運、最悪。ライバルが増えるでしょって」

（ライバルって、もう何十人も増えてるって、しかもこれ以上増えるってなんなに）

結衣からは怒りのオーラで久しぶりに裏モードが出ていた。

「ねえ、アッキー、模りしてきてよ！！」

泰子が楽しそうに晃に言った。

「いいですよ」

結果。１０秒以内にしゅうりょーう。もちろん成功で。

「晃。お前の手、本当になんか怖いぞ」

今宵が晃に言った。

「あきにい。この店のおじさん、なんかものすごく悔しがっていたよ」

「それって、僕のせいですか？」

『多分』

「みんなで一斉に言わないでください！！」

こんなことで新年が明けた。

第９５話　大晦日の夜（後書き）

後書きトークコーナ！

人気投票開催中＝ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｉＩ２Ｎｗ７ｐ

美紀「いや～新年明けましたね！！」

晃「なんか僕、いきなりショック受けましたよ」

結衣「おみくじの結果ね。本当に不思議よね」

真「それが、地味主人公のあきにいの定め」

今宵「なんかすごいいいようだな」

晃「それよりも、なんか新キャラがでてきましたけど、コメントは？」

美紀「なしで」

真「言う意味ない」

今宵「時間の邪魔」

結衣「存在自体邪魔」

美紀「ゆーちゃん、裏モード出てる」

第９６話　元旦の昼（前書き）

前回のあらすじ

とうとう新年明ける

第９６話　元旦の昼

元旦の昼。
みんな自由荘へ来ていた。

「それでは、今年もよろしくお願いします」

晃は近所の人と新年の挨拶に行っていた。
その頃、家の中ではというと。

「負けないよ！！たーちゃん！！」
「ボクだって負けないよ！！ミッキー！！」

美紀と泰子が格闘ゲームで対戦していた。

「あの～新年からいきなりゲームですか」
「一体なに考えているのですか」

途中、晃に会った静音と帰ってきた晃が言った。

「いいじゃん。皆が楽しければ」

美紀が愉快に言った。

「そこで暗く体育座りしている人物が一名いるのですが」

晃が言ったのは部屋の隅っこで文字通り体育座りしている結衣がいた。
多分、また全敗したのだろう。

「よしゃー。勝った！！」
「む～ミッキー強い」
「じゃあ、次は私とやるわよ」

次は伊織が美紀に挑んできた。
晃はため息をしながらその光景を見ていた。

「まあ、いいでしょ。こっちは料理の準備でもしましょうか。結衣、手伝ってくれますか？」

晃は結衣に声をかけた。

「うん。する！！」

結衣は一発で元気になり晃の近くに来た。
晃のこととなると一瞬で元気になった。

※

全員集まったところで、さっそくみんなで晃が作った御節を食べる。
みんな仲良く、取り合いながら食べている。

「みなさん、すごい食べっぷりですね」

晃はうれしそうに言った。

「そういえば、晃さんは科学都市に行くのですか？」

ささらは聞いてきた。

「いいえ。行きません。ここで過しますね」
晃は食べながら答えた。
「僕はずっと、ここで暮らすのですから」
「あ、だったらお願いがあるのですが」
改めてささらはお願いしてきた。
「なんですか？」
「実はこれなのですが」
ささらは晃に一枚の紙を渡した。
内容はなんと、温泉旅行の内容だった。
「実は、私たち、生徒会のメンバーで行くのですが、さすがに男子がいないといろいろ危険ですし、晃さんは役員ではないのですが、補佐ですので一様お願いしようということなのですよ」
ささらは丁寧に説明した。
「そうですか。僕はいいのですが」
その時、晃だけでは無く、ささらもある殺気に感じた。
「幼馴染たちの、特に真の世話があるので」
晃はやっぱりその殺気を感じながら言った。

「じゃあ、あきにいさん。私がその間、真ちゃんの世話しときます」
そのとき、花火が名乗りを上げた。
「え、本当ですか？」
「はい」
「私はペット」
なんか不自由を感じた真はボソッと言った。
「それではお願いします。ささら、僕も行きます！！」
「あ、ありがとうございます」
ささらは笑顔で言った。
「そのかわり、今度デートしてください」
そのとき、花火は顔を赤くしていった。
「ええ。いいですよ」
晃はサラッと笑顔で言った。
花火はその言葉を聞いたとき、顔は赤いがものすごい笑顔になった。
変わりに周りの女子はなんか不機嫌な顔をしていた。
だが、晃にとっては真を世話してくれたお礼なのだから、それ以外の理由は無い。
花火はそのことを忘れて浮かれ始めた。
生徒会のメンバーも晃と旅行ができてうれしがっているのでそんな

ことはどうでもよかった。

「しかし、話題は変わるけど、結構家の中綺麗になっているね」

伊織は言った。

「え!?そうなのですか?」

晃は自分で掃除したのに驚いている。

「ああ、言い方違ったね。正確には晃君が来る前と違うってことだよ」

「伊織は前にも来ていたのですか」

晃は意外な事実を知った。

「まあね、一様中学からの付き合いからだからね。花火もそうでしょ」

「はい」

どうやら、伊織と花火は中学から幼馴染メンバーの友達だったらしい。

そして、花火と真は中学から一緒に部活動を続けてきたと考えれる。

「実際、アキ君、大掃除のとき、私たちが自分の部屋を掃除している間に、ここを終わらせてしまったからね。それでこの綺麗さ」

だが、正確にはここことあと、5，6号室も掃除している。

「あきにいさんが一家に一人いればなんの不自由もありませんね」

花火は前に言ったような言葉を言った。

「確かにな、いつかロボットでも作られるのではないか？」

「結構です」

晃はお茶をすすりながら鈴にツッコンだ。

「アキ君。そろそろお餅を焼きましょうか」

そう言って静音は立ち上がった。

「ええ。そうしましょうか」

同時に晃も立ち上がる。

「おお、そうしていると、なんか夫婦だね」

鈴がみんなをあおるような言い方をした。

「そ、そんな。ふ、夫婦なんて」

「なに冗談言っているのですか」

静音は今のセリフを小声で顔を赤くしながら繰り返し言っており、
晃は呆れた顔で言った。
そしてほかの女子たちはさっきと同じ殺気を放っていた。

「ふ、夫婦ってこ、こんな感じなのでしょうか」

静音はモジモジしながら言った後、いきなり晃の二の腕に捕まった。

『あーーーー！！』

女子たちは一斉に大声を出した。

これは、新年明けてからいきなり忙しそうになりそうだ。

晃はそう思った。

第９６話　元旦の昼（後書き）

後書きトークコーナ！

人気投票開催中です！！＝ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｉＩ２Ｎｗ７ｐ

晃「ついに新年として始まりましたね」

真「でも実際、この話が投稿されるのは夏」

結衣「思いっきり季節はずれなのよね」

晃「ちなみに作者はそのことはどうでも言いといってました」

今宵「早く２年生編に突入させたいんだな」

伊織「まあ、気持ちは分かるけど、まだ３学期もあるわけだよね」

花火「まだまだ時間がかかりますね」

第９７話　温泉合宿（前書き）

前回のあらすじ

とりあえずは、あけおめ！！

第97話　温泉合宿

今日は生徒会役員全員集まった温泉で合宿することになった。
朝、8時に学校前に全員集まった。
校門の前には一台の大型の車が止まっていた。
「よっ、来たか」
その運転席から一人のショートヘアーの女性が声をかけてきた。
「静音さん。不審者発見しました」
晃は真顔で隣にいる静音に声をかけた。
「あらあら。ここは学校側に連絡ですかね。それとも警察に連絡したほうがいいのですかね」
「おいおい、地味にリアルな方向に進んでいるぞ」
顔を引きずりながら女性は言った。
「冗談です。お約束かと思いましたので」
「なんだよ、お約束って」
彼女は生徒会顧問の清水薫（しみずかおる）先生。
学園内では先生のお荷物と呼ばれる人だ。
つまり、それぐらいどうでもいい先生であり、生徒会がしっかりしているために本当にどうでもいい先生を顧問にしたらしい。

趣味は男に逆ナンすること。
つまり、大人としてもダメな人なのである。

「お、アッキー分かっているね」
「やっぱり合ったらそれぐらいのお約束ですよね」

泰子とささらが言った。

「へいへい。どうせ私はお荷物先生ですよ」

（（（（（自覚あったんだ）））））

「自覚あるんだ」
「声出てます」

泰子の言葉に晃はツッコンだ。
実際、薫は泣きそうになっている。

冗談はさておき、生徒会一同は温泉に向かって行った。

※

とりあえずは旅館に着いた。

「そういえば、僕一人で一部屋使うのですか？」

生徒会のメンバーで男子は晃ただ一人である。
そのために晃は自分がどんな部屋になるのかが分からなかった。

「アキ君は私たちと同じ部屋になります」
「……へ！？」

晃は聞き返した。

「アキ君なら心配もありませんし、わざわざ一人に一部屋というのも旅館の人に迷惑ですし、アキ君もさっそく来たのに一人なのはかわいそうです」

静音は笑顔で言った。

「そうでしたか、心遣いありがとうございます」

完全に下心が無い晃には女子と同じ部屋になるのはどうも考えていないのだ。
だからこそ、女子たちも同じ部屋でも大丈夫だと思うのだろう。
警戒心が人一倍に強い鈴も何も言わなかった。

「結構広い部屋ですね」

部屋の中に入り、ささらが言った。

「では、さっそく浴衣に着替えましょうか。アキ君は浴衣に着替えますか？」
「いいえ。僕は動きにくいのはニガテでなので着ません」

静音の質問に晃は丁寧に答えた。
晃は結構、服装にこだわりが無く、本当に動きやすければいいというものである。
ただ、ノースリーブだけはどうしてもニガテらしい。

「そうですか。では私たちは先に着替えますね」
「ちょっとまって！！」

そう言って静音が脱ごうとしたとき、鈴がいきなり大声を放った。

「どうしたのですか？鈴ちゃん」
「あんた、ここで着替えている最中、晃はどうする気」
「別に私はなんとも感じませんが」

静音はあっさり言った。
晃は何のことを言っているのかが意味がまったく分かっていなかった。

「あの～僕はどうなるのですか？」
「ちょっと黙ってて」
「はい」

晃は鈴に言われてすこし黙ることにした。

「とにかく、晃はしばらく、ここには入ってないさい！！」

そう言って鈴は押入れを空けた。

「は、はあ」

晃は意味が分からないまま入った。

「いい、のぞかないでよ」
「ええ。分かってます」

晃はようやく意味が分かったようだった。

※

温泉に入った後、晃たちは夜店を回っていた。

「いろんな店がありますね」
「そうですね。まあ、大晦日でほとんどやっちゃいましたけど」
「アッキー、ここの射的してよ！！」

泰子に言われて晃は射的に行った。

「お、次は兄ちゃんが朝鮮するのかな？」
「アッキー、ここの店はね、すこし高いけど、全部玉を撃って景品を落としたらさらに好きな商品をもらえるんだって」
「それで、僕に挑戦しろと」
「うん。そういうこと」

泰子は笑いながら言った。
とりあえずは、人のお願いなので、とりあえずは挑戦しようとした。
とりあえずは、みんなのお土産のために当てとくと言う考えである。
玉は８発。
完全に全部当てさせないように考えている玉数である。

ただ、忘れていないだろう。
晃は銃を扱う【団殺者（ディスター）】である。

結果、百発百中。
見事に全部当たった。

「あれ？おわりですか？」

店のおじさんはものすごく驚いていた。

「さすがアッキー、ボクが見込んだことはあるね」

泰子が笑いながら言う。

「い、いいのですかね」

とりあえずは、好きな商品は本気でもらった。

夜は普通に女子の中に晃も寝ることになった。

「あ、アキ君は真ん中でお願いします」

静音に言われて晃は真ん中の布団に手をかけた。

「はぁい。いらっしゃーい」

その布団の中に薫がいた。

とりあえず、晃は先生だろうが、変態破壊モードが発動し、思いっきり蹴り飛ばした。

※

冬休みは少ないことなので、とりあえず1泊2日で帰ることとなった。

「あ、おはようございます」
「／／／！！」

晃が普通に起きたら、なぜか、ささらが着替えている事件以外、何も変わらず帰ることになった。

「晃さん。まさかこんな時間に起きるのですか？」

車の中でささらは晃に聞いた。

「ええ。とりあえずは」
「もうちょっと大人っぽい下着着ればよかった」

ささらは小声でそうつぶやいた。

第97話　温泉合宿（後書き）

後書きトークコーナ

泰子「情報によると、冬休みは次回の話で終わりらしいよ」

静音「本当にあっという間ですね」

鈴「まあ、冬休みなんてそれ以外に話題が無いからね」

晃「一つ思ったのですが、実際、3学期もほとんど話しのネタが無いらしいですね」

静音「まあ、たしかに行事はたしかに一つは残ってますけど」

鈴「そこすぐに終わりそうだからね。2年生編はすぐに始まりそうね」

ささら「大人っぽい下着着ればよかった」

泰子「ささ、まだ言っている」

第９８話　デート・グレープ屋（前書き）

前回のあらすじ

合宿しました。

晃「顧問の先生ものすごく登場遅かったですね」

いままで入れる隙ありませんでした。

第９８話　デート・グレープ屋

今日は花火とのお出かけの日だ。
晃はとりあえず待ち合わせの場所に来た。
だが、そこにはすでに花火の姿があった。

「あ、花火。もう来たのですね」
「あ、あきにいさん」

晃が来たことを気づいた花火は笑顔で言った。

「すみません。待たせちゃって」
「いいのですよ。待ち合わせの時間はまだあるのですから」

晃の言葉にあわてて花火は言い合わせる。

「すこし早いですが、行きましょうか」
「はい」

晃の言葉に花火は笑顔で返した。
だが、その時、その光景を見ていた人がいた。

いや、確かにここはいまたくさん人がいるのでたくさんの人には見られる。
だが、もっと違う目で見ていた人たちがいた。

ビルの角で晃たちには見えない方向で、結衣、真、伊織がいたのだ。
格好はものすごい地味な格好であった。
しかも、結衣の手には双眼鏡があり、伊織の手にはカメラがある。

「いやいや～花火ちゃん。早くもデレてるね～」

微笑みながら言った伊織だが明らかに嫉妬の棘がセリフにはあった。

「あきにいはまったくデレていない。いつもの調子」

真は安心したように言った。

「アキ君とデート、アキ君とデート」

のろいの言葉のように結衣は言った。

完全に裏モードがオンになっている。

「あ、移動した」

真が晃たちの移動を知らせた。

「早く行こうか」

「ゆーちゃんはもう行っている」

「はや！！」

結衣は光の速さのごとく、もう移動していた。

「本当に結衣ちゃんの裏モードってある意味怖いね」

「うん」

伊織の言葉に真はうなずいた。

※花火

「それで、あきにいさんはどこに行きたいですか？」

私はまず、あきにいさんにどこに行きたいか聞いた。
だけど、もう返ってくる言葉は分かっていた。

「いいえ。花火に任せます」

やっぱり、あきにいさんは笑顔でそういった。
予想は的中した。

「じゃあ、私グレープ食べたいのですがいいですか？あの子に人気のグレープ店があるのですよ」

私は指差しながら聞いた。

「もちろん構いません」

あきにいさんはやはり笑顔で返した。

とりあえずは私たちはそのグレープ店に来ました。
なんか込んでいたみたいですが、すぐに座ることが出来ました。

「お、アッキーと花火じゃん」
「あれ？泰子？」

しかし、席に座った後、注文をとりに来たのは泰子さんがいた。
さらに格好的に完全にここのウェトレスだ。

「まさか泰子さんはここで」

「うん。見たとおり、ここはボクの家の店だよ」

泰子さんは笑顔で言った。
まさかの誤算でした。
確かにここの店は名は福本グレープという安易な名前でしたけど、
本気で泰子さんの実家なんて考えていませんでした。
私は心の中で肩を落とした。

「あ、でも安くはしないよ」
「しませんよそんなこと」

あきにいさんは呆れながら言った。

「しっかしね。なんか今から混みそうなんだよ」
「そうなのですか？てか、なんでわかるのですか？」
「うん？感」

あっさり泰子さんは言った。

「「感！？」」

私とあきにいさんは同じタイミングでツッコンだ。
なんか息が合っているみたいでうれしい。

「あ、そうだ早速だからちょっと協力してくれない？」
「「へ！？」」

私はいやな予感がした。
てか、このデートがなくなるような予感がした。
どうやらやな予感はあきにいさんもしたらしい。

「ついでにあそこでストーキングしている3人も」

その時、完全に私たちの側の窓からギクッという音が聞こえた。
そこからしぶいぶ、結衣ちゃん、まこちゃん、伊織ちゃんが出てきた。
まさか3人とも、さっきから着いてきていたの？
格好もものすごく地味ですし、カメラと双眼鏡まで持っています。
あきにいさんは思いっきりため息をついた。
私もつきたい。

※

結果、晃たちは泰子の店の手伝いをすることになった。

「で、なんでまた僕はまたこんな格好をしなければならないのですか？」

晃はまたもや女装されていた。

「なははははボクの店、女の子しか働けないからこれしか方法が無いの」

晃はガクッと地面に手をつけた。

「じゃあ、他のみんなもがんばってね。バイト代はボクからお父さんに言っとくから」
「「「は～い」」」
「はい」
「……」

結衣、真、伊織は笑顔で返事をして、デートがつぶされた花火は静かに返事をして、晃はいまだにショックを受けていた。

「とりあえずはやることはやらないと」

花火はため息をつきながら言った。

「すみません花火。このことは違う日にでも埋め合わせします」

晃は花火の横で詫びた。

「わっ！！早い」

しかし、花火は晃の復活の早さに驚いていた。

「まあ、さすがに何回もされていれば開き直ります。それよりも、今度本当に埋め合わせしますね」

「あ、は、はい」

花火はこのとき、晃がまじめな性格でよかったと思っていた。

「では、早く働きましょう」

今度またデートできると思って花火は笑顔になっていった。

実際、あの待ち合わせ場所であったときの喜びをもう一回感じられると思ったからだ。

ちなみにこの会話は結衣たちには聞こえていない。

「僕はなんかやる気は下がりますよ」

しかし、やはり晃はこの格好をまだ慣れていない。早くなったのは立ち直るだけである。

このとき、晃の女装こと、アキちゃんはこの店の一番人気を獲得したのは言うまでもない。

第９８話　デート・グレープ屋（後書き）

後書きトークコーナ！

人気投票開催中＝ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｉＩ２Ｎｗ７ｐ

泰子「とうとう冬休みも終わったね」

晃「まさか、女装で終わるとは」

花火「さっそくのデート」

ささら「なんかお二人さんまだ落ち込んでいますね」

泰子「あらら」

ささら「あなたのせいですけど」

泰子「まあ、実際本当に混んだんだし、ゆーちゃんたちはものすごい笑顔でやっていたし」

ささら「あんたはもうちょっと人の心を勉強しなさい」

第９９話　３学期（前書き）

前回のあらすじ

冬休み、女装で終了！！

晃「ぎゃあぁぁぁぁぁ！！」

第９９話　３学期

今日から冬休みも終わり、３学期が始まる。
終業式はあんな風に終わったが、始業式はいたって普通だ。
校長先生の長い話を聞いて、あとは生活指導の先生の連絡とか、表彰とかで始業式は終わった。

１年１組の教室ではあいかわらずの会話が広がっていた。

「いや～とうとう一番短い学期の３学期がはじまったね～」

和みながら伊織が晃に言った。

「そういえば、３学期はなんか行事ってあるのですか？この学園は意外と行事が多いと聞きました」
「うん。あるよ」

結衣が話を聞いていたらしく答えた。

「３学期は一般生徒にはほとんど関係ないけど、特待生には大事な学期だからね」

伊織が晃の隣で和みながら言っている。

「うん。特待生学習公開があるの。３学期は。だからこの学期はほとんどの特待生はおそくまで学園に残ることが増えるわね」
「あ、そうだったのですか」

結衣もいれて、美紀、真、今宵、透は特待生である。

「自由荘で特待生じゃないのはアッキーだけだからね」
美紀も話に入ってきて言ってきた。
「まあ、僕は転校生ですしね」
おのとき、いきなり晃のギアにメールが届いた。
「静音さんからです」
メールに合った内容はさっきも会話にあった特待生学習公開についてだった。
どうやら生徒会はそのことで全面的に協力するらしい。
「そういえば、当日は一般性とはどうするのですか？」
晃は伊織に聞いた。
「ん？一般性とは出入り自由だよ」
「そうですか」
「あ、アキ君まさか来ない気！？」
何かを察したのか、結衣が言ってきた。
「いいえ。僕は強制に行かなければなりません。生徒会の用事で」
晃は結衣の機嫌を悪くさせないように言った。
「そうか。生徒会はこのイベントのためにいろいろやるんだね」

伊織が納得したように言った。

「僕も、みんながちゃんと授業の成果を見たいですし、美紀と結衣にいたってはステージでの発表でしょう。これは見に行かないと」

そう。美紀と結衣は音楽科のためにステージでの発表になる。
そのことを聞いた結衣は顔を赤くして、美紀は自信があるように胸を張った。

「期待していいからね。アッキー！！」
「アキ君。私がんばるから！！」

2人とも自信満々に言った。

「てか、晃君。このときは心配はしないのね」

伊織は晃に言ってきた。
晃の性格的に大抵はここで心配する。

「みんな好きなことをするわけ分けですから、心配するほうが変ですよ」
「まあ、ごもっともな意見だね」

にやけながら伊織は言った。

「じゃあ、晃君。当日私と見て回ろうよ」

そのままにやけながら伊織は言葉を続けた。
その言葉に美紀と結衣が反応した。

「まあ、生徒会の用が終わればいいですよ」
晃はそのことに気づかずに言った。
「伊織は変な約束してるの!?」
結衣は大きい声を出しながら言った。
「変じゃないよ。ちゃんとした約束だよ」
「む～」
頬を膨らましながら結衣は伊織を見る。
逆に伊織は得意げな顔をしていた。
そのとき、担任の先生が教室に入ってきた。

※

今日は始業式なので午前中で終わる。
特待生は集まりがあるので晃は一人で帰ろうとしていた。
「あ、あきにいさん。いまから帰るのですか?」
廊下を歩いていたら花火が話しかけてきた。
「ええ。そうですよ」
「それだったら私もご一緒でいいですか?」
花火は顔を赤くしながら言った。

「別にいいですよ」

晃がそう言ったとき、後ろからいきなり声をかけられた。

「そ、それだったら私もいいですか」

ものすごい体が小さい少女、渚が同じ話題を振ってきた。

「な、渚ちゃん」

「あら、藤森さん。先に私が声をかけたのですが」

微笑みながら花火は渚に言う。

「私は夏色さんとも一緒に帰ろうと言ったのですが」

渚も笑顔で言い返す。

このとき、２人の目と目の間に電気が走ったように見えた。

「ふ、２人とも？」

晃はなにがなにやらわからないまま聞きなおした。

「あきにいさん、帰りましょう！！」

「晃さん、帰りましょう！！」

「は、はい」

２人同じタイミングで言ってきた。

晃は本当に意味が分かっていなかった。

校門に向かって歩いているが、晃の両側にいる女子はお互い見詰め合っていた。
ただ、ものすごく怖いのは晃でも感じていた。

「ふ、2人はこんなに仲が悪かったでしたっけ?」

「「いいえ。たまたまです」」

また同じタイミングで晃に言った。
本当はものすごく息が合うのではないかと晃は思っていた。
だが、声には出さなかった。
なんか怖いから。

「晃さんはこれから時間ありますか?」

渚は晃の聞いてきた。

「別にありますが」
「でしたら一緒に本屋さんにいきませんか?ちょうど見たい本があるので」
「別にいいですよ」

もじもじしながら言ってくる渚に晃は笑顔で答えた。

「あきにいさん。私も一緒で構いませんか?」

花火がやばいと思い、いきなり聞いてきた。

「僕は別にいいですよ」
「私も」

「ありがとうございます」

このとき、また2人の間に電気が走った。

第９９話　３学期（後書き）

後書きトークコーナ！

人気投票開催中です！！＝ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｉＩ２Ｎｗ７ｐ

晃「さて、３学期とうとう始まりましたね」

美紀「でも、雰囲気的にもうすぐに終わりそうだね」

晃「それは言ってはダメだと思いますが」

琴実「実際、作者もその気」

一同「！！」

晃「琴実さんが久しぶりにしゃべった」

ささら「そういえば、合宿の日もまったくセリフもありませんでした！！」

琴実「いたけど、入る隙間がなかった」

晃「そういうことですか」

第１００話　のほほん（前書き）

前回のあらすじ

３学期始まりました。

第１００話　のほほん

とりあえずは渚と花火と共に本屋さんに行くことになった晃。
しかし、晃も新しい本が実はほしかったりする。
本屋さんに着き、おのおのほしい本を探す。

「やっぱりここは品そろえがいいですね」

ここの本屋さんは町の中でも意外と品そろえがいい。
まあ、たしかに科学都市の本屋さんには負けるが、これこそ下町と言えるべきだろう。

「晃さんは普段どんな本を読むのですか？」

渚は晃に聞いてきた。

「僕は推理小説をよく読みますね。この前真に一冊貸したら読み終わった感想が怖いでしたが」

苦笑いをしながら晃は言った。

「推理小説は意外とホラーな部分もありますからね」

渚は笑いながら言った。

「渚ちゃんはどんな本を読むのですか？」
「私ですか？私は特にと言われたら恋愛小説ですかね」
「はやり女の子ですからね」

晃は納得して言った。

「晃さんは恋愛小説は読みますか？」

「それが、ほとんど読んだことがありません」

苦い顔をしながら明は言った。

もしかしたら晃の鈍感は恋愛小説を読めば直るかもしれないと渚は思った。

（でも、なんか共感しないまま終わりそう）

渚は逆になりそうと思い断念した。

実際、渚は恋愛小説を晃に貸したことがある。

つまり、晃はそれ以外は読んでいないと予想する。

渚はそのことに気づき、心の中でため息を漏らす。

「あの～そろそろ本を探さなくっていいのですか？」

つまらない声を出して花火は聞いた。

さっきから花火は晃と渚の話を不快にもおって聞いていた。

「そうですね。さっさと見つけましょうか」

「はい」

晃は花火の言葉に納得して渚に言った。

「あ」

「どうかしましたか渚ちゃん」

渚の声を聞いて晃が聞いてきた。

「すみません。あそこの本が届かなかったので」

どうやら、渚がほしい本が本棚の上のほうにあるらしい。
しかし、渚の身長どころか、晃の身長でもギリギリ届かない。
そして、そのための踏み台もない。

「仕方ないですね。渚ちゃん、僕が持ち上げますからそのまま本を取ってください」
「え？」
「え！？」

前者の渚はいきなり顔を赤くして聞き返して、後者の花火は驚きながら聞き返した。

「い、いいのですか！？」

渚は顔を赤くしながら改めて問う。

「なにか問題でも？」

晃はなにがいいのかわからなかった。

「で、ではお願いします」
「はい」

そう言って晃は渚の横腹を持って渚を持ち上げた。
見ているようだと兄と妹だ。

「と、取れました」
「では、下げますね」

そう言って晃は渚を下ろした。
そのまま3人はおのおの好きな本を買って本屋を出た。

「そういえば、あきにいさんたちは昼ごはんはどうします？」

花火は気を取り直して聞いてきた。

「僕は真が学校で弁当なので家で食べるか、外食のどちらかにします」
「私は別に考えていません」
「では、早速なのでみなさんで食事しませんか？」

花火は聞いた後、提案してきた。

「そうですね」
「はい」

こうして引き続き、3人で食事をすることになった。

※

来たのはおなじみの喫茶店ｐｏｉｎｔだ。
晃たちは店の中に入った。

「あら、晃君いらっしゃい」

入ったら由佳が晃たちを出迎えてくれた。

「席空いてますか？由佳さん」
「ええ。３人よね。空いているわよ」

由佳の案内で晃たちは席に着いた。
３人はこのまま軽い昼食を取った。

食事も大体おわり、３人は食後のおしゃべりに入った。

「そういえば、あきにいさんは生徒会で特待生学習発表に行くのですよね」
「ええ。まあ、こういうのは前日のほうが当日よりも忙しいパターンですね」

実際、生徒会が何をするか晃は見当がつかなかった。

「あ、晃君。今度いつバイトは入れる？そのことでまこちゃんたちがずいぶん入れなくなってきたの」

そんな話をしているとき、由佳が晃に聞いてきた。

「そうですね。後日連絡します」
「そう。いまからメイド服着てやってもいいよ」
「選択肢がおかしくありませんか？」

晃は呆れながら聞いた。

※

夜。

静音からメールが届いた。
内容は特待生学習発表のことについてだ。
どうやら生徒会は分かれてそれぞれの学科のお手伝いをすることになった。

静音は音楽学科、ささらは家庭学科、琴実は美術学科、泰子は技術学科である。
鈴は技術学科の体育科の特待生であるために今回は生徒会の仕事はなしだ。
晃は会長補佐と言うことなので静音とおなじ音楽科にいくことになった。

実際、音楽学科はステージの発表なので家庭学科と合同作業になることがある。
特に衣服の衣服のことでは一番忙しくなりそうである。

そう考えては晃の存在、てか器用さは必要となる。

ぶっちゃけて晃の存在はどこの学科もほしがっているのだ。

「あきにいならどこの学科も速攻では入れるね」

夕食のとき、真が晃に言った。

「いや、さすがに体育科は難しいでしょ」
「【団殺者(ディスター)】の人がよく言えるね」

真がお茶を飲みながら呆れながら言う。

「真。【団殺者(ディスター)】は運動が出来るから入れるわけではありません。

簡単に言えば並みの人とは違うまったく新しい能力を持っている人がスカウトされたのですから」
「あきにいに特別の能力って？」
「この十字架のキーホルダーもそうですが腕輪の色宝石もその一つですね」
晃は腕輪を見ながら言った。
「でも、それ以外は入れるよね」
「まあ、そうですがあまり特別待遇は好きではないので」
そう。特待生は入学時から決まるものであり、それ以降は入ることも抜けることも出来ないのだ。
つまり、そうなると晃はこのまま先生の好意で入ってしまうと特別待遇と言うことになる。
晃はそういうのがニガテだ。
「まあ、僕にはやりたいことは今はありませんから」
晃はそうつぶやいた。

第１００話　のほほん（後書き）

後書きトークコーナー！

人気投票、今日の昼１２時に締め切ります＝ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｉＩ２Ｎｗ７ｐ

静音「とうとうこの小説のＰＶが１０万突破しました！！」

晃「これも読者の皆様のおかげです」

ささら「それで、１０万突破記念になんかやるのですか？」

晃「作者曰く、まったく決まっていません！！」

泰子「実際、５万記念でやった人気投票も今日で終わっちゃうわけだし」

静音「あらあら、ずいぶん早くＰＶが集まりましたね」

晃「静音さん。関心するところ違うと思いますが」

ささら「でも、人気投票したらまったくやることがないですよね」

晃「作者もそのことで悩んでいます」

第１０１話　特待生学習発表前日（前書き）

前回のあらすじ

そういえば、バイトのシーン最近ない。

晃「作者本人がそれを言ってどうするのですか」

第１０１話　特待生学習発表前日

放課後。
晃は静音と共に音楽学科の発表の手伝いをしにきた

「お、アッキーだ」

晃を見つけて美紀が呼ぶ。

「美紀。練習ちゃんとやってますか？」
「もちろんだよ」
「結衣も好調ですね」
「うん」あ

晃に声をかけられて結衣はうれしそうに声を上げる。

音楽学科の発表場所は体育館で行う。
しかし、この時間は音楽学科の生徒が集まる教室である。
まずはいろいろ企画をたててから、後ほど体育館で準備をするのだ。
基本、生徒会の２人の仕事は体育館で本格的になる。

「アキ君。私は先生と話してきます。アキ君は生徒さんのお手伝いでもしてください」
「分かりました」

静音はそう晃に言い伝えてから先生のところへ行った。

「じゃあ、アッキー。早速だけど練習付き合って」
「あ、美紀ずるいわよ。私もお願いね」

「どっちもしますから言い争わないでください」

そう美紀と結衣のやり取りを見ていたのか、他の女子生徒も晃に手伝ってくれとお願いしてきた。
次々に私も、私もと言ってくる生徒が増えてくる。
晃はあせりながら対応する。

「ありゃりゃ。アッキー人気者だな」

顔は笑っていたが、美紀のこの言葉はなんか暗さが混じっていた。

「アキ君、私も私も！！」

ちなみに結衣はあの女子の大群の中に紛れ込んでいる。

「じゃあ、私も！！」

そう言って美紀も大群の中に入って行った。
その光景を見て、男子生徒はものすごくにらんでみていた。
もうほとんどの女子生徒が晃の元へ来ている。

「いいから皆さん練習してください」

晃はあせりながら言った。

結果、先生の一言で全員ようやく練習に入った。

「助かりました」
「ふふ。晃君。人気なのですね」

音楽学科の顧問の１人の若い女性の先生が言った。
名は河本怜奈（こうもとれな）先生。年齢は２４歳でこの学園で一番若く綺麗な先生で生徒からの信頼も厚く、さらには男子生徒からは好意を持っている人も、しかも教師の男性からも好意を持っている人もいる。

「あれ？ですが先生は僕とは初対面ですよね。何で僕の名前を？」
「由佳から聞いてます。晃君の話は」

そう。実は由佳と怜奈は親友らしい。ってことは由佳も年齢は２４歳となる。

「由佳さんがですか。僕のほうは河本先生の話は聞いたことありませんが」
「フフ。晃君も私のことは怜奈でかまいません」

怜奈は微笑みながら言った。

「では、そうさせてもらいますね」

お人よしの晃はすぐにそのお願いを引き受けた。
ちなみに音楽学科の先生はあと２人いる。
一人はいま静音と話している４０歳ぐらいの女性の先生だ。

「あ、何アッキーはせーちゃんと仲良く話しているの！？」

その光景を見た美紀が言った。
ちなみにその言葉のせいでさらに男子生徒が晃をにらんだ。

「アキ君☆」

そのとき、結衣がいきなり晃の腕をつかんだ。

「アキ君。ピアノの練習ちょっと付き合って☆」

上目遣いで結衣は晃にお願いする。
まるで捨てられた猫みたいにかわいい。

「ええいいですよ」

だが、晃はその上目遣いなど関係なしに了承した。
そのやり取りによりさらに男子共の殺気が上がった。
もちろん、晃はなぜみんなが殺気立てているのかは分かっていない。

「ねえ。晃君はピアノ弾けるの？」

怜奈が晃に聞いてきた。

「アキ君。弾いてみてよ」

目を輝かせながら結衣もお願いしてきた。

「分かりました。一回弾いてみます」

晃はその輝きに負けてピアノを弾くことのなった。
実際、晃にはピアノは弾いたことはない。
あるのはただ知識だけである。

しかし、ここは器用な晃。
一発でスラスラとピアノを弾いた。

「アキ君。すごい」
「なんで晃君音楽学科に入らないの？」
「いや、僕は転校生ですし」

ピアノが弾き終わった瞬間、結衣と怜奈はそう言ってきた。

「実際、ピアノの中身と楽譜の読み方しか僕は知らないのですか」
「ん？なんでアキ君は楽譜の読み方分かるの？」

晃の言葉に結衣が反応した。
なんか裏モードになりかけだ。

「科学都市で、一回バンドをやったことがあるのですよ。それで全ての楽器の楽譜の読み方を勉強しました」
「なんでアキ君がバンドやることになったの？」

だんだん結衣の声が怖くなってきた。

「百合たちにカラオケ行ったときに、そのなかでロックバンド部の部員がいまして、それで歌ったらそのことでお願いされたので、いまはギター、ベース、ドラムは出来ますよ」

晃はアッサリ言った。

「なんだ、それは良かったわ」

そう言って結衣は殺気を放つのをやめた。
晃は何のことなのかまったくわかっていない。

※

数日後、晃たちは最終準備の体育館に来ていた。

「アキ君。あそこお願いします」
「はい！！」
「晃君。あそこもお願いね」
「はい！！」
「優輝、あっちも頼む」
「はい！！」

ただいま、晃ダッシュ中。
完全に使い走りにされていた。

「あ、アキ君。緊急事態です」

静音がまた晃を呼んだ。

「どうかしましたか？」
「このスピーカー壊れてしまったらしく、直せますか？」
「やってみましょう」

そう言って晃は修理道具セットを【呼び出し（コール）】した。
そして、１０分もしないで晃は静音を呼んだ。

「一様終わりましたよ」

晃はアッサリ言った。

「お疲れ様です」

そう言って静音は晃にジュースを渡して横に座った。

「これで、明日はちゃんと開けますね」

「ええ」

明日はとうとう晃にとって1年間の最後の行事だ。

第１０１話　特待生学習発表前日（後書き）

後書きトークコーナー！

静音「そういえば、前回言ってませんが、この小説もとうとう１００話目ですね」

晃「この１００話いろいろありましたね」

真「そういえば、レギュラーの中で一番出番がなかったのは誰だろう」

一同「琴実（さん）」

結衣「ちなみに次に少ないのは透か鈴さんかもしれないって」

透「まじで！！」

今宵「幼馴染なのに」

晃「真相はみなさんで確かめてください」

第１０２話　特待生学習発表（前書き）

前回のあらすじ

とうとう最後の行事へ

第１０２話　特待生学習発表

今日は特待生学習発表の日だ。
この日は普段特待生の学習の評価を示すために設けられる日なのだ。
実際、これで就職先が決まった人も何人かいる。
そのため、大手の会社も来ることもある。

音楽学科以外の学科は科によって教室が違う。
また、体育科は校庭で実行されているらしい。

音楽学科では全部体育館とであり、急ピッチに発表が行われている。
終わる時間は特別６時と決められており、それぐらいの時間でないと全員発表が出来ないのだ。
発表は全て個人である。そっちのほうが評価をつける人もつけやすいからだ。
それを１年から３年までまわすのだ。
順番は１年が最初で３年が最後である。

そして、その音楽学科の発表の順番は演奏科、吹奏科、声音科の順番である。

こうして時間も経って公開の時間になった。
演奏科のトップバッターであり、さらには音楽学科のトップバッターはわれら学園のアイドルの羽衣結衣だ。

初めの時間だと言うのに観客席は人でいっぱいにあふれていた。
学園のアイドルと言うのは伊達ではない。

その噂を聞きつけた大手の会社の人もいる。

「アキ君。私大丈夫だよね」

舞台裏で結衣は晃に聞いた。

格好は純白のドレスである。

このドレスは科学都市から送られたものであり、晃もすこし手を加えたものである。

結衣はいま晃に髪を結ってもらっている。

「大丈夫ですよ。なんの意味もないと思いますが、僕は保障します」

晃は微笑みながら言った。

「うん。アキ君の保障なんて最高の保障よ」

「ありがとうございます。さあ、行きましょうか」

「うん」

そう言って結衣は立ち上がった瞬間、結衣は晃に手を伸ばした。

「結衣？」

「て、手。つないでくれる？」

結衣は顔を赤くしながら言った。

「いいですよ」

晃は微笑みながら言った。

結衣の赤い顔は暗さで見えなかった。

いや、結衣はわざとそうしたのだろう。

「ありがとう、アキ君」
「いいえ」

そして、舞台に入るときに晃は手を離した。

「がんばってください」
「うん」

結衣は笑顔で行った。

そして、結衣の演奏が始まった。
とても綺麗な音色で、ドレスとうまくマッチングしていた。
演奏時間は5分。

演奏が終わったとき、盛大な拍手が結衣を包み込んだ。
結衣はそのまま礼をして舞台裏に戻った。

「ご苦労様です」

戻ってきた結衣の手をやさしく晃はつなぐ。

「ありがとう。アキ君」
「どうもです」

笑顔で行った結衣に晃も笑顔で答えた。
2人は手をつないだまま戻った。
結衣は恋心を持ち、晃は幼馴染として、親友として。
その光景を見て、静音はすこし心の痛みを感じた。

このあと、晃は男子の拷問を受けたのは言うまでもない。

※

美紀の発表時間までまだ時間がある。
とりあえずは晃は他の人のサポートをしていた。

「アキ君。どうですか調子は？」

晃が休憩を入れているとき、静音は聞いてきた。

「いいのではないのでしょうか。実際、僕がやっていることは小さいことです」
「それでも、発表者にとっては大きなことなのですよ」
「そう、ですよね」

小さい会話をした後、静音はソラの隣に座った。
そのまま晃の肩に顔をつけた。

「静音さん？」
「アキ君。さっき羽衣さんと手をつないでいましたよね」

静音はさっき自分が感じたことを確かめるために聞いた。

「ああ、あれですか。結衣がお願いしてきたので。断る理由もないので」

さすが鈍感主人公。なにも感実にアッサリこたえた。

「そ、そんなんですか？」
「はい」

少し驚いている静音に晃は笑顔で答えた。

「そうですか。良かったです」

「静音さん？」

その時、静音はハッと思い、顔をいきなり赤くした。

そして、直すために顔を思いっきり横に振った。

「し、静音さん！？」

「だ、大丈夫です」

静音はいまだに顔が赤を治っていない。

「さて、仕事に戻りましょうか」

「は、はい」

そう言われて晃も立ち上がった。

静音はこのとき、自分の恋心に気づいていた。

※

時間はとうとう美紀の発表の時間になった。

「よし、私がんばるね。アッキー！！」

オレンジのドレスを着た美紀は立ち上がりながら言った。

もちろん、このドレスも科学都市から送られたものだ。

「ええ。がんばってください」

晃にそう言われてうれしそうに美紀は舞台に立った。
ものすごく癒しの歌声。
誰もがそう感じていた。
晃もついつい聞き入れてしまった。

5分後、発表が終わり、美紀が戻ってきた。

「どうだった？アッキー！？」

帰ってきた美紀はいきなり晃に聞いた。

「ええ。とても良かったですよ」
「良かった」

美紀は安心して言った。

※

6時ごろ、ようやく全部の発表が終わり、晃たちが帰れた時間は7時である。
校門の近くに行くと、そこにはいつもの幼馴染のメンバーがいた。

「帰ろうぜ、晃」
「アッキー、行こう」
「あきにい。おなか減った」
「晃、今日はお前の家で鍋パーティだ」
「アキ君、一緒に帰ろ☆」

幼馴染ズは一斉に言ってきた。

晃はそのことで、口がうれしそうに笑った。

「ええ。帰りましょう！！」

晃は微笑みながら言った。

これで1年生の大きい行事は全て終わったが、晃たちの学校生活は始まったばかりだ。

第１０２話　特待生学習発表（後書き）

後書きトークコーナ！

美紀「いや～。とうとう最後の学校行事が終わっちゃったね」

結衣「私は楽しかったから良かったわ」

真「でも、なんか最後が最終回みたいなにおいがした」

今宵「まさか、作者の関係でいきなり連載終了!?」

透「まじかよ!!」

晃「いやいやいやいや。最終回ではありませんから。まだまだ続きますからね。まあ、確かに作者が新しい小説を書きたいと思っているのは確かです」

美紀「おお。思いがけない暴露」

結衣「でも、それっていつになるか分からないのじゃないの？」

真「実際、２作品同時に書いているからこれ以上は無理」

今宵「って、ことはどちらかの作品が終わるしかない」

晃「作者はこの小説はまだ終わらせる気は無いといってましたよ」

一同「それは良かった」

晃「でも、本当にいつにいつになるかは分かりませんが」

第１０３話　バレンタイン？（前書き）

前回のあらすじ

学校行事全て終了！！

第１０３話　バレンタイン？

今回はバレンタインのお話で、一人一人のバレンタインをお届けします。
ちなみに日にちは１３日は日曜日、１４日は月曜日になっています。
ヒロインたちの奮闘劇をどうか見守ってあげてください。

・真の場合

真は雑誌を見て考えていた。
明日はバレンタイン。
やはり真は晃に手作りチョコを作る気でいる。

「ふう。やっぱりあきにいは普通のチョコを作ろうかな」

ちなみに真が見ている雑誌は『サルでも作れる簡単チョコの作り方』である。

「よし、そうしよう！！」

そう言って真はいきなり立ち上がった。
そして、いきなりリビングの扉に男子立ち入り禁止の張り紙を貼り付けた。
ちなみにこの張り紙を作ったのはなぜか今宵である。

晃は飲み物を飲もうかとリビングに向かったらドアにある張り紙が目に付いた。
それは男子立ち入り禁止の張り紙であるが、問題は模様が血の模様であった。

「ま、真になにが？」

晃は呆れながらつぶやいた。

そして次の日。

真は晃にチョコを渡した。

晃は家に帰ってあけた。

「！！」

しかし、そこにはモザイクしかかかっていないものしかない。

あいからわず料理の上は皆無の真であった。

・美紀の場合

美紀は店の中で悩んでいた。

それは晃に渡すチョコを手作りにするか、それとも普通に買うか。

ちなみに透の分はもうすでに買っている。（激安）

「アッキーにはいつもお世話になっているからね。そ、それ以外のり、理由はないから」

自分で言いながら美紀は首を横に振った。

店員さんがそんな美紀の姿を呆れながら見ていた。

「でも、手作りだとアッキーにもし下手だと笑われちゃうかも。でも、普通に買うとそれはそれで」

そのとき、美紀は自分の顔が赤いことに気づいた。

「いやいや。アッキーのことをそう思っているわけじゃなくって」
美紀はまた自分の首を横に振った。
「そうだ。そうだよ。アッキーはそんなこと思わないし、この市販のチョコを溶かして作ればどっちともいえるよね」
美紀はそう言って板チョコを買った。
しかし、美紀は何からチョコを作る気であったのだろうか。
次の日、形は少し悪いが、美紀はちゃんと晃にチョコを渡すことが出来た。
「いや～。市販のチョコを溶かして作ったんだよ。それは」
「あの～、美紀は一体何からチョコを作る気で？」
「ん？カカオから」
「まさかのそこからですか！！」
本気で美紀は恐ろしい子だった。
・結衣の場合
２月１４日。
今日という日は男子がものすごく熱が入る日である。
だが、それは女子も同じであり、その中でも学園のアイドルにとっても大切な日だ。
結衣は登校してから異様に男子の目線が強いことに気づく。
学園のアイドル的存在である結衣のチョコは男子にとってもっとも

ほしいものだ。
だが、結衣の手にはたった一人分のチョコしかない。
もちろんこれは晃に渡すものだ。
結衣は昨日ずっと家に閉じこもってこのチョコを作っていた。
形、味。どれも自信がある。
だが、一番問題なのは晃の鈍感さである。
結衣がチョコを渡してもまったく恋心が伝わる可能性はいまのところは0パーである。
これはおっそろしい数値である。
そして、もう一つの問題はライバルたちである。
他の女子がしかもいままで関わっていない女子までも晃はチョコをもらっている可能性はものすごい高い。
これが天然の女殺しの晃の問題である。
「あ、アキ君ちょっといいかな?」
結衣は昼休み、どこかへ行っていた晃を引き止めて屋上へ呼び込んだ。
そして、今ここが屋上である。
晃は約束どおり来てくれた。
「あ、アキ君。これ!!受け取ってくれる?」
結衣が渡したのはハート型のチョコである。

「あ、ありがとうございます」
晃は微笑みながらお礼を言った。
「じゃ、じゃあ私は先に行くから」
恥ずかしくなって結衣は走り出した。
「どうしたのでしょうか結衣は？」
結論。晃はただ幼馴染として渡してくれたと思っていたことはその日の夜判明した。（みきの影響で）

・今宵の場合

バレンタイン。
これは今宵にとって今までの料理の特訓の成果を見せるためにちょうどいい日である。
そう、今宵は自分に言い聞かせていた。
（そうだ。それ以外の理由などない！！）
「ねえ。こよちゃん。例のものできた？」
そのとき、いきなり真が部屋に入ってきた。
いきなりだったので今宵は珍しく驚いていた。
「こ、こよちゃん！？」
「ま、真か。れ、例のものはできているぞ」

そう言って今宵は真に男子立ち入り禁止とかかれた紙を渡した。

「こよちゃんもあきにいにチョコ渡すの？」
「あ、ああ。日ごろ料理を教えてくれるからな。そのお礼だ」
「でも、めずらしいね。こよちゃんがあそこまで驚くなんて」
「わ、私も人間だからな」
「そうか。じゃあ私は戻るね」
「ああ」

そう言って真は部屋を出た。

（では、取り掛かってみるか！！」

今宵は気合を入れた。

次の日の夜。
晃は闇魔大王に舌を抜かれる夢を見た。

・透の場合

透はいままで書かれていなかったが、意外ともてている。
それも晃とは比べ物にならないぐらいだ。
だが実際、透がものすごい美女だと思っている人は全て晃に好意を持ってしまった。

「それで、俺のがこんなんってどういうことだ」

透は晃以外の幼馴染ズに聞いた。
完全に晃とチョコの量やいろいろ違うのだ。
特に一番違うのは愛情と値段だ。

この幼馴染こそ、透が美人といえる集団の一つだが、完全に全員晃と透のチョコの差がありすぎだ。

てか、全員晃には手作りで、透のは市販のやつだ。

「僕はそれでもうれしいですが」

鈍感主人公の晃は無視して、透は全員に聞く。

聞いてしまった。

帰ってきた言葉は完全に無常のものだ。

「「「「だって、透のはまったく世話になっていないもん」」」」

晃のようなスキルがほしいと思った透であった。

第１０３話　バレンタイン？（後書き）

後書きトークコーナー！

透「なあ、俺の扱いひどくね？」

美紀「そんなことをいってもなあ～」

結衣「透にはなにも感じない」

真「扱いをまともにしてほしいの？」

今宵「だったらエロ本全て燃やせ」

透「おい、そんなこと今言っちゃだめ！！」

真「あきにい。走って透の部屋に向かった」

透「ぎゃあああ！！俺のロマン！！」

結衣「最悪のロマンね」

第１０４話　バレンタイン？（前書き）

前回のあらすじ

美紀のカカオから作るアイディア

第１０４話　バレンタイン？

・静音の場合

静音は悩んでいた。
それはバレンタインのことだ。
しかし、チョコのほうはもう出来ている。
問題なのは渡し方だった。

なにせ静音は男子にもらい物はするが、あげたことはない。
しかも、この前自分の恋心を知ってしまったためにこれは完全に失敗は出来ないことになってしまっている。

そしてたどり着いた解決策は、とりあえず、鈴に電話しようだった。

「あんたね」

そのことを聞いた鈴は呆れていた。

「だ、だって。初めてですもの、男子に送りするのも、ましてや好きな人に」
「私はあんたに恋心がついたとこに驚いたわ」

鈴はため息をついた。

「さっき、ささらからも連絡があってね。同じことを聞いてきた」
「ささらさんもですか？」
「もう、この際。一緒に生徒会であげないよ。どうせ晃のほうはまったく気づかないし、絶対にライバル多いし」

「う、うん。わかりました」

そう言って静音は決意を固めた。

・ささらの場合

ささらは悩んでいた。

バレンタインて、チョコを渡すとき、なにを言えばいいのだろうか。

そして、どこでどうやって渡せばいいのか。

しかし、このときのお助け役の晃は絶対に役に立たない。

しかも、渡す相手に聞くバカはいない。

「やっぱりここは鈴さんですね」

ささらはそうつぶやいて鈴を電話で呼んだ。

「そうねえ。まあ、普通に生徒会室でいいのじゃないの？そこが人目が一番少ないところだからね。」

「で、では言葉のほうは？」

「普通に日ごろのお礼ですって言えばあいつ普通に納得しそうね」

完全に何かを呼んでいる鈴の回答であった。

「そ、そうですね。相談してよかったです」

そう言ってささらは携帯の電源を切った。

「では、調理にとりかかりますか！！」

まだ作っていなかったささらであった。

・泰子の場合

泰子の家は大人気のクレープ屋だ。
いかし、料理が得意な親とは裏腹に泰子は真と同レベルなほど料理がニガテである。
別名モザイクレベル。

親には「市販のチョコでいいのじゃないか」と言われたので買ってきた。
だが、泰子はもう一つ何かが足りないと思った。

「そうだ。これを溶かしてオリジナルに固めよう」

まさかの美紀と同じ考えにいってしまった。

「えへへ。ボクって頭いい」

ちなみに泰子はテストの点数は結構いいほうである。
超天然の泰子であった。

・生徒会の場合

生徒会室に晃を呼んで、3人はチョコを渡そうとした。
しかし、生徒会の仕事で集まってもらったので琴実と、鈴もいる。
しかし、この3人にとって、そのことはかかし程度だ。

「あ、アキ君、これ受け取ってください」
「晃さん、日ごろのお礼です」

「アッキー、ボクのもあげる」
3人一斉に渡した。
「あ、ありがとうございます」
晃は3人分受け取った。
「ねえ。アッキー早速だからここであけて食べてみてよ」
「いいのですかね」
泰子に言われた晃だが、さすがに本人の了承なしでここで空けるのはいけない。
「私はいいですよ」
「わ、私も」
「じゃあ決まり。まずはボクのからあけてみて」
晃は言われたとおり、袋を丁寧にあけた。
晃は内心、店の娘だから大丈夫だと思っていた。
しかし、合ったのは完全にモザイク料理でした。
「た、泰子。一体なにをしたのですか？」
晃はおそるおそる聞いた。
「うん？溶かして改めて形を変えたの」
「何でそれだけでモザイク化になるのですかね」

晃は呆れながら言った。

「で、泰子は初めは何でチョコを作る気だったのでしょうか？」

「ん？カカオから」

「君も原料からですか！？」

本当に頭がいいのか分からない泰子であった。

「さて、ささらのを空けましょうか」

晃はモザイクチョコを無視して次のチョコに向かった。

「ささら。なんですか？これは」

「はい。ポテトフライ型のチョコです」

晃が空けたらそこには何本かのチョコになっていた。

「形だけですか？」

「はい。中は普通ですよ」

晃は心の中で安心の息を吐いた。

「それではいただきます」

晃はチョコを口の中に入れた。

「あ、とてもおいしいですよ」

晃は笑顔で言った。

完全にお世辞ではない。

「あ、ありがとうございます！！」

ささらは喜びながら御礼を言った。

「では、静音さんのを空けましょうか」

そう言ってあけたものの中からはさっきと同じものが入っていた。

「静音さんも同じものですか？」

「いいえ。私のをポテトフライにチョコを縫って固めました」

――はい？

晃はリアル顔になり頭の中でこの言葉をリピートした。

鈴が後ろで笑っている。

気持ちは分かるがもうちょっと耐えてもいいだろう。

「さあ、どうぞアキ君」

静音は笑顔で晃に差し出した。

晃はその笑顔に負けて食べた。

完全にその形は「あ～ん」だが、そんなことは通常状態でも晃にとってはどうでもいい。

「！！」

晃は一気に崩れ落ちた。

結果、クソまずい。

「アッキーボクのも食べて！！」

さらにとどめの品物が晃の口に入った。

晃は1時間ぐらい、生死の境を彷徨った。

第１０４話　バレンタイン？（後書き）

後書きトークコーナ

静音「アキ君どうかしたのでしょうか」

鈴「あんた、いくらなんでもあれはないよね」

ささら「チョコだけはおいしいですが」

泰子「ささ、手作りチョコの作り方今度教えて」

ささら「いや、これであっては……いませんね」

泰子「ささ。今失礼なこと考えたでしょ」

琴実「一様、私みんなの分作ってきた」

一同「わーい」

鈴「あ、晃復活した」

（この中で晃を抜けば琴実が一番料理上手です）

第１０５話　バレンタイン？（前書き）

前回のあらすじ

静音は本当に天然

第１０５話　バレンタイン？

・舞の場合

舞は晃の教室に入ろうとしていた。
バレンタインのチョコを渡したいのだ。
だが、どんな言葉をかければいいのか分からなかった。

周りの男子はそんな舞を見て誰に渡すのだろうとどきどきしていた。
しかし残念ながらこいつらはまったく関係ない。

（う～ここはやっぱり勢いで任せるしかないわね）

そう言って舞は教室のドアを開けた。
しかし、そこには晃の姿はなかった。
舞は近くにいた美紀に話しかけた。

「あの～晃君は？」
「アッキー？さっき生徒会室に行くとか言っていたけど」

そう。ただいま晃は例のチョコを食べて気絶中。
なんともかわいそうな人だ。

「そうですか。出直してきます」

そうして舞は教室を出た。

・泉の場合

泉も舞と同じく晃にチョコを渡そうとして教室に行った。

「あれ？まーちゃん？」

教室のドアの近くに舞がいたので話しかけた。

「あ、泉ちゃんも晃君にチョコ渡すの？」

「うん。あたしはアキの相棒だからね」

「そうなの。でも晃君。生徒会室にいるんだって」

舞はさっきあった出来事を泉に伝えた。

「そうなんだ」

泉はしょんぼりした顔に一瞬なったが、そあと、何かいい案を思いついたらしい。

「ねえ。生徒会室に待ち伏せすればアキに合えるのじゃないの？」

「そうか。その手があったわね」

こうして2人は生徒会室に向かった。

・花火の場合

「や。やっと出来た」

13日。花火はやっと晃に渡すチョコを完成した。

「中学からずっと思ってきましたし、やっと渡せるのですね」

花火はわくわくしながら言った。

「お姉ちゃん。気合入っているね」

「きゃあぁぁぁぁ！！ひ、ひまわり！！」

そこには先ほどの浮かれている花火を見ていた妹のひまわりがいた。

ただいま中学1年生だ。

「科学都市であったあのお兄さんにやっとチョコを渡すのね」

「うん。でもあのあきにいさんだからな」

花火はため息をついた。

「がんばってお姉ちゃん」

「うん。がんばる！！」

そして次の日。

晃は生徒会室に行こうとして教室を出た。

そのとき、花火が晃を待ち伏せしていた。

「こんにちはあきにいさん」

「花火。どかしたのですか？」

「はい。実はこれを渡しに来ました」

そう言って花火は晃にチョコを差し出す。

「あ、ありがとうございます」

そう言って晃は生徒会室に向かった。

「やっぱり。一番の強敵はあきにいさん自身ですね」

花火はそうつぶやいた。

・渚の場合

渚は晃が登校するのを待っていた。

てか、ずっと校門前に３０分前にいるのだ。

渚の身長的に回りは飛びの生徒かといわれているが、この学園には飛び級の制度はない。

（晃さん。食べてくれるかな）

渚は小さな手で大きなチョコを持った。

その時晃が幼馴染たちと来た。

「あ、晃さん。おはようございます」

「渚ちゃん。おはようございます」

渚の言葉に晃は笑顔で答えた。

「あ、あの。これ受け取ってください」

そう言って渚は晃にチョコを渡した。

「ありがとうございます」

晃は笑顔で答えたが、後ろには微笑みながら殺気を出している人がいることは誰も気づかなかった。

晃の言葉に渚も笑顔になって笑った。
そのことにより、次は周りの男子からも殺気を発生させていたが、晃たちは気づかない。

・舞、泉の場合

舞と泉は生徒会室の前に待っていた。
そして、晃が出てきたとき、いっきに寄り添った。

「あれ？2人ともどうしたのですか？」
「あの、これ受け取ってください。わ、笑わないでください」

しかし、舞が渡したのは一通の封筒だった。
晃はそれを空けた。
だが、そこにあったのは晃の女装写真だった。

――どうやったら笑えるのでしょうか。

「あ、間違えました。こっちです」

次は間違えずに晃にチョコを渡した。

「あたしからもはい」

泉も晃にチョコを渡した。
だが、そのチョコからは異様なオーラを放っていた。

「よかたら食べてもいいよ」

泉は笑顔で言ってきた。

晃はこのオーラがいいものなどではないと分かっている。

「い、家でじっくり食べますね」

しかし、泉は笑顔のままだ。
晃はその笑顔に負けた。
そして、あけて食べた。

「あ、味は普通です」

晃は言った。

「わ、私のは家で食べてください。い、いま食べられるとこ、心がもたないというか、なんというか」

モジモジしながら舞は言った。

「わかってます」

その晩。晃は急激に腹痛を起こした。
犯人は言うまでもない。

第１０５話　バレンタイン？（後書き）

後書きトークコーナー！

花火「なんか、舞ちゃんと泉ちゃんのだけ長くありません？」

泉「まあ、あたしはアキの相棒だからね」

舞「作者はこの２人は結構な重要キャラなのに、事件以外に最近活躍がないのでそれでこうしてくれたそうです」

渚「たしかに、いろいろ活躍がすくなくなってきている」

花火「最近、結衣ちゃん、静音さんやささらさん、さらに渚ちゃんまでいいとこもってかれていますからね」

渚「ふぇ、私、いいとこもっていってないよね」

舞「私は花火ちゃんに賛成します」

泉「感想にもそう書かれていたしね」

渚「そ、そんなこと、ないとおもいます」

第１０６話　キャラ人気投票結果発表（前書き）

前回のあらすじ

いろんな人のバレンタイン

第１０６話　キャラ人気投票結果発表

「さあ～始まりました、キャラクター人気投票結果発表！！司会は私岩口啓（いわぎちけい）が担当させてもらいます！！」

どこかの社長みたいな口調の人がヘリコプターに乗ってきた。

晃たちは今全員校庭にいる。

「人気投票の結果なのに新キャラだしたらだめでしょう！！」

晃は抜け目無くツッコンだ。

「え～作者曰く、登場のタイミングが無かったとか」

さらにここで暴露までしてきた。

「てか、もともと解説の人が登場できる回は無いですよね」

晃は呆れながら言った。

「さて、改めまして、第一回人気投票で１位に輝く人は誰か！！」

「このわたしだぁーー！！」

その言葉と共に清水先生が叫んだ。

「確か清水先生は登場が遅く、てか、今回の人気投票は星とキャラのみの投票ですよ」

晃は記憶を思い出しながら言った。

「まじで！！」
「はい。そんなわけで私も0表という訳でして」
「いや、あなたは今回で初登場ですから！！」
「チッ！！」
「舌打ちしないでください！！」

次々のボケに晃は一人でツッコンだ。
完全に晃がいなければ暴走状態になってしまうところだろう。

「今回の人気投票は1人3票にも関わらず、投票してくれた人が少ないと言うことで0票が多かったです」

実際、作者は1人1票で正解だと思ってます。

「ではまず1票のみ獲得された方です。ここで名前が挙げられなかった人は0か、上位と言うことです。では、発表します」

そう言って啓はヘリコプターから降りた。
乗っていた意味があったのか。

「え～、一之瀬美紀、朧今宵、水戸透（プッ）、神下舞、波木ささら、福本泰子、夏色花火、加納希です」
「おい、なんで俺のところだけ笑った！！」

一瞬変なことがあったところを透はツッコンだ。
だが、そんなこと関係なく啓は話を進める。

「え～完全に一番登場の数が多い幼馴染3人と舞が1票だけとなってしまいました。しかし、一番登場回数が少ない希は大健闘と言え

るでしょう。ちなみに他の科学都市のメンバーは0票です」

みんなの拍手に希はテレながら答えた。

「む～アッキーは呼ばれなかったね」

「まさかの0票か！？」

「まあ、気にはしませんが」

美紀と透が名前が呼ばれなかった晃の元に来た。

「さて、続いては第3位の発表ですが、なんと3人います。では、発表します。羽衣結衣、柊静音、藤森渚！！」

「おー」という声が回りに響いた。

すごい盛り上がりだ。

「やったよ、アキ君！！」

「アキ君。私やりました」

「うれしいです。晃さん」

3人とも一斉に晃のところへ寄ってきた。

そして一気に3人で晃を押し倒した。

完全にラブホールが出来上がってしまった。

周りの男子はものすごくうらやましがっている。

てか、晃を恨んでいる。

「この3人の中、幼馴染のなかで結衣は上位へ、さらには生徒会長の静音はさすがの人気、学校のアイドルの名は伊達ではありませんでした。しかし、ここで大健闘したのは渚です。科学都市メンバーをのぞけば一番登場するのが遅かった彼女ですがなんと第3位です

した！！」

司会者本人が一番盛り上がってきた。

「渚ちゃん。本当に良くがんばりました」

晃は渚の頭を撫でる。

「あ、アキ君。私も私も！！」

「私にもお願いしますアキ君！！」

「お、お二人さん？」

頬を膨らましながら2人は言ってくる。

渚はものすごくうれしがっている。

「さて、ハーレム野郎の晃はほっといて、続いて第2位に参りましょう」

「なんか、いいましたか？」

晃は何か嫌な言葉が聞こえたので聞き返したが無視された。

「第2位は優輝真！！」

歓声とおもに真はものすごく驚いた顔になっている。

「あきにい、やったよー！！」

真はいきなり晃に抱きついてきた。

晃は真の頭を撫でる。

「やはり妹キャラは強かったのか、堂々の2位です！！」

真はいまだに晃に抱きついている。

男子の眼がさらに怖くなる。

「さてさて、ではとうとう第1位の発表となります！！」

そのとき、なぜかドラムロールが流れ出した。

「栄光の第1位は」

みんな同時につばをのんだ。

「我らが主人公、優輝晃！！」

「へ？」

啓がそう叫んだとき、晃は目を丸くした。

「アキ君、まさかの1位」

「アッキーすごい！！」

女子メンバーはものすごく感心しながら驚いている。

「ハーレムラブコメディでの主人公は大抵低順位ですが、なんとこの小説では見事第1位！！、今までに無いまじめ系が売りだったのか、それとも地味なのが売りだったのか、だがもうそんなことはどうでのいい、優輝晃堂々の1位、それでは歌ってもらいましょう！！」

「いや、歌いませんから！！」

だんだん、演歌の前振りになってきたのを感じた晃はツッコンだ。
そのとき、男子生徒からの怒りの視線のやっと気づいた。

「てなわけで、今回名前が呼ばれなかった人は0票となります！！」

その言葉が最終スイッチだったのか、男子一斉に晃に襲い掛かってきた。

「そんなことで、こんど晃目線の短編を作者が命を削って書いてくれます。そのときはまたご精読よろしくお願いします」

晃が追われているのを無視して啓は話を進めた。

「また、第2回があるかもしれません、そのときはまたの投票お願いいたします。それでは今回は短めですが、ここでおわりにします。ありがとうございました！！」

第１０６話　キャラ人気投票結果発表（後書き）

後書きトークコーナー！

晃「まさか、新キャラの人が閉めるとは思ってもみませんでした」

真「あきにい、今回は新しい企画やるんでしょ？」

晃「そうでした、ＰＶ１０万、１００話突破記念として、これから皆さんに自分の小説とコラボしてほしい、この話をやってほしいと言うのを募集します。
場所は感想か、作者の活動報告に記入してください」

真「書いてくれえたことは作者が命を削って必ず書き上げます」

晃「作者、今回はよく命を削られますね」

真「たくさんのご応募を待ってます。以上人気１，２位の優輝兄妹でした」

晃「作者は多分、長生きしませんね」

第１０７話　Ｍｉｋｉ／Ｐａｓｔ／Ｓｔｏｒｙ（前書き）

前回のあらすじ

晃、１位おめでとう

第107話　Miki／Past／Story

美紀は自分の部屋の中で料理をしていた。
この自由荘でうまく料理ができるのは晃を除いて美紀、結衣だ。
だが2人ともあまり自分の料理に自身も持てない。

「そういえば、もう12年経つのか」

美紀はボソッと言った。
そのまま自分が作った味噌汁の味見をしてみる。

これは美紀の過去の記憶である。

※

12年前、つまり晃、美紀は4歳。
美紀が生まれた場所は千葉県。
今の美紀には親の記憶などまったくない。

しかし、美紀の親は突然美紀は東京にいる優輝夫妻に美紀を預けた。
それが美紀と、その親との最期だった。

「それでは、美紀のことお願いね」
「いいのよ。こっちにはもう2人も子供いるし、2人も3人も変わらないわよ」

美紀母の言葉に自信満々に晃の母、優輝心（ゆうきこころ）はそう答えた。
もう真は優輝家にいる。

美紀母の足から美紀は自由荘を見た。

このときの自由荘はできたばっかりで住人はいない。

「ほら、晃君も美紀ちゃんに挨拶して」

「美紀ちゃんも」

そう言って2人の母は同時に2人を前に出した。

「……僕、優輝晃」

「……一之瀬美紀」

このときの美紀は物静かな少女だった。

だが、そんなこととは違い、さすがに同い年のことはさすがに人見知りはする。

「では、美紀ちゃんは預からせてもらいます」

心は笑顔でそういった。

挨拶が終わり、美紀の両親は姿を消した。

そして美紀は一号室に連れてこられた。

「ここが美紀ちゃんの部屋よ。掃除とかは私がするし、ご飯もうちにきたら食べられるから遠慮はいらないわよ」

「……はい」

美紀は静かにそういった。

※

美紀は晃と真が通っている幼稚園に通った。
だが、晃、真と一緒に遊ぼうとせずにずっと一人でいた。

「遊ぼう」

教室でボーとしていた美紀に晃が遊びに誘った。

「いい」
「そういわずに」

そう言って晃は無理やり美紀の腕を引っ張った。

「僕は母さんに頼まれた。そうじゃなくとも一緒に遊びたい」

そんなことを言ってくれた晃に美紀派少し笑顔になった。

美紀はそれから晃と遊びだした。
だがあいからわず口数は少ない。
話も心、晃、真しか聞かない。
しかし、そんな彼女をよく思っていない人もいる。
しかも幼稚園児なので動くのが早かった。

「おい、一之瀬。ちょっと来い」

クラスの男の子が美紀に話しかけてきた。
だが美紀は見事に無視した。

「おい、こっちに来い」
「いやだ」

男の子は美紀の腕を思いっきり引っ張った。

「いや、離して!!」

美紀は急いで抵抗する。
だが、この声は誰も聞いてはいない。
晃と真は今ここにはいない。
そのため、今ここには美紀の見方などいない

「おまえ、いつもむかつくんだよ。いつも無視ばっかりしやがって」

男の子は完全にガキ大将張りに声を張った。
そして美紀を大きなガラスドア側に向けて思いっきり押し倒した。

そこはあいており、段差の部分で美紀はこけた。

ひじとひざから血が出てきた。
目からは涙があふれてきた。
男の子はその場から離れた。
完全に理不尽だ。
美紀はその場で泣き出した。
その声で晃と真が急いで向かってきた。

「美紀!!」
「美紀ちゃん!!」

晃と真は美紀を慰めようとした。

※

この日の夜。
晃は美紀のいる部屋に味噌汁が入ったなべを持って入ってきた。
美紀はまだ泣いていた。

「……美紀」
「あ、晃君。わ、私何かしたかな？」

晃が来たのを気づいた美紀は泣きながら訪ねた。

「美紀はただ、えっと、人見知りが激しいだけなのに」

晃は考えた。
そして、何かいい案を思いついた。

「美紀、だったらみんなに元気良く話せよ！！」
「み、みんなにげ、元気良く？」
「そう。これだったら美紀はもういじめられない」
「ほ、本当！？」

美紀は一気に笑顔になった。

「うん。きっとね」
「わ、私がんばるよ。アッキー！！」
「あ、アッキー？」
「うん。いつかこう呼びたかったの。晃君のことはアッキー、真ちゃんはまこちゃんって。これが私を変える最初のやり方」
「いいじゃないですか」

晃は笑顔で答えた。

「うん。アッキー！！」

美紀も今までより一番いい笑顔を見せた。
美紀は安心しながら晃の作った味噌汁を食べた。

※

「思えば、これが今のわたしのなったんだよね」

美紀は思い出しながらつぶやいた。
あのときの味噌汁の味は今でも覚えている。

「これもアッキーのおかげ」

そのとき、美紀は自分の顔が赤いことに気づいた。

「そ、そんなんじゃな、ないから」

美紀は頭を横に振りながら拒否した。
だが、顔が赤いのは直らない。

（やっぱり、わたしアッキーのことが……）

美紀はそう思いながら火を止めた。

「ま、それならそれでしょうがない」

そう言って味噌汁が入ったなべを持った。

「早くアッキーのところへいこ」

そのまま美紀は部屋を出た。

第１０７話　Ｍｉｋｉ／Ｐａｓｔ／Ｓｔｏｒｙ（後書き）

後書きトークコーナ！

晃「以上、美紀の過去編でした」

美紀「あれ？これだけ！？」

晃「作者曰く、美紀はあんまり重い話は似合っていないらしいです」

結衣「まあ、分かるわ」

真「美紀ちゃんは重すぎる話は確かに似合わない。元気が一番だし」

晃「もし、誰かの過去編をやってほしかったら感想に書いてください。極力早く作成します」

美紀「あれ？わたしのってサンプル」

晃「違いますから」

第１０８話　幼馴染のお留守番（前書き）

前回のあらすじ

美紀の過去編。

第１０８話　幼馴染のお留守番

「それでは行ってきます」

金曜日。
晃は少し大きな荷物を持って真に言った。

「うん。行ってらっしゃい」

晃は一旦科学都市に戻ることになった。
春休みに行けばいいのだが、残念ながら【壇殺者（ディスター）】の仕事のために戻らなければならない。
それぐらい大きな仕事なのだ。

真に挨拶をしてから晃は家を出た。

※

そして次の日。
優輝家に幼馴染ズが集まった。

「これは一線一隅のチャンス、わたしたちが家事ができることをアッキーにアピールするよ！！」

美紀が行き良いよく言った。

「そうね。アキ君にアピールするためには私も手を抜かないわよ」
「そ、そうだな。花嫁修業だ」
「こよちゃん。その言い方は少し古い」

今宵の言葉に真はツッコンだ。

「じゃあ、俺も」

「「「あんたは帰って！！」」」

透が何か言おうとして立ち上がった瞬間、女子たち全員拒否された。

透は体が反省するように小さくなった。

「まずは当番だね。どうする？」

「やることは料理、掃除、洗濯、食器の洗い物」

美紀に言われて今からやるべきことを真は口にした。

晃が帰ってくるのは明日の朝だ。

「そうね。料理以外はくじで決めましょう」

「結衣ちゃん。その言葉には少し悪意が感じる」

結衣の言葉に真は返した。

今宵も同じことを言いそうにしていた。

「いいじゃん。４人でくじをして決めよう！！」

「あれ？俺は？」

「透は強制掃除だ」

「ひでー！！」

完全に女子たちにとって透は要らないものだった。

てか、それを予想しないで来た透も透だ。

そして全員、いや、女子たちはくじをひいた。

結果はそれは残酷なものだった。

「あ、料理は私だ」

真がサラッと悪魔の言葉を発した。
みんなその言葉に驚愕していた。

それもそのはず、今日は一日中あのモザイク料理を口にしなければならない。

「みんなも一緒に食べるよね」

真のかわいい笑顔にみんななにも言えなかった。

「ほかの当番はどうだ？」
「わたし掃除だ」

美紀が残念そうに言った。
ちなみに今宵は食器の荒いものだ。
って、ことは消去法で完全に結衣が洗濯となる。

「まあ、いいわ。２人暮らしだから少ないはずだから」

そう言って結衣は洗濯機を開けた。
だが、なぜかその中は思ったほど以上に量がある。

「あれ？これって何人分か入ってる？」
「あ、それは私もお願いしてるから」

美紀が顔を出しながら答えた。

そう実は美紀は一回一回、晃に洗濯をお願いしているのだ。

「お前もか。あ、俺の持ってく」
「持ってこなくっていいわよ！！」

自分の洗濯を取りに行きそうになった透を結衣は空になったかごを頭部にぶつけてとめた。
透は地面に倒れた。

「結衣。手伝うか？」

美紀の頭の上からまるでだんごのように今宵が覗き込んだ。

「ええ。そういてもらわ」

そう言おうとしたとき、結衣はあるものを握り締めた。
見てみるとそれは晃の下着だった。

「ゆーちゃん？」
「な、なんでもないわよ」

美紀の声をかけられて結衣は晃の下着を隠しながら答える。

「結衣ちゃん。何してるの？」

そのとき、いきなりドアから真が入ってきて言った。

「な、何って」
「あきにいの下着を握り締めて何しているの？」

真は冷静に聞く。
なんか怖い。

「握り締めていません」

そう言って結衣は持っていた晃の下着を真の前に出す。
そのとき、真が反対方向から晃の下着を握った。

「結衣ちゃん。今日は私が洗濯をする」
「あれ？まこちゃんは料理でしょ？」
「だったら結衣ちゃんに変わる」

一瞬で晃の下着争奪になってしまった。
しかもツッコム人は今日は不在である。

「あ、面白そう。わたしもやる」
「洗濯も花嫁修業だ！！」

そのとき、違う方向から美紀と今宵が晃の下着を握りだした。

「ちゃっと。３人とも洗濯の担当は私よ」

結衣は裏モードになって微笑みながらいった。
一気にその場が５度ぐらい気温が下がった。

「お前ら、なに俺のパンツ握ってるんだよ」

そのとき、起きた透がそう言ってきた。
同時にみんなの頭から、

―ブチッ！！

と、いう音がした。

「いや～忘れていた。昨日晃に頼んでいたのを」

頭をかきながら透は笑いながら言った。

だが、そのあと、４人の殺気を感じた。

「ぎゃあああああ！！」

透の叫び声が優輝家全体に響き渡った。

このあと、結果的に全員真の料理を食べるなりかけたのだが、そのことで透が全部食べることになった。

３人は逃げたが。

いや、あのモザイク料理は逃げたくなる。

※

「ただいまです」

次の日。晃は帰ってきた。

だが、そこには完全死体状態の透がそこにいた。

「……ご愁傷様です」

晃は何も気にしないで自分の部屋に戻った。

いや、何が起こったのかわかったからスルーしたのであった。

第１０８話　幼馴染のお留守番（後書き）

後書きトークコーナー！

結衣「次回はついに終業式よね」

晃「ええ。ですが、春休みはそう簡単には終わらないといってましたよ」

結衣「え!?何で」

晃「やりたかったお話があるみたいです」

結衣「新学期までまだまだなのね」

第１０９話　１年生の終わり（前書き）

前回のあらすじ

晃がいないと自由荘はめちゃくちゃ。

第１０９話　１年生の終わり

今日は第3学期の終業式である。
ただいま体育館で全校生徒は学園長の長い話を聞いていた。
それは３０分後それは終わった。

生徒は次々に自分の教室に戻る。

「いやいや～とうとう終わったね1年生も」

美紀が教室に入ってきたとき、晃の席に来て話をしにきた。

「でもなんだかこれでこのクラスが終わっちゃうってなんだか悲しいわね」
「そうですね。僕は2学期の中盤に来ましたが」

だが結衣が言っている残念は晃と同じクラスになれることだった・・・

（こうなったら絶ッッ対に2年生でも同じクラスになって見せる！！）

結衣は心の中で誓った。
だが、完全にこれは運である。

「まあ、次のクラスで幼馴染が全員集まるのは確立とは低すぎるわね」

伊織が晃の隣の席から話しかけてきた。
今の言葉の意味は美紀たちが特待生だから言えることである。

特待生は各クラス平均的に分けられる。
特待生は1学年30人。
これでは結構な確立である。

「まあ、このクラス全員違うクラスになるかもな……ガオス!!」

大吾が笑いながらそういったとき、美紀と結衣のダブルパンチをくらった。
伊織と晃は呆れていた。

「晃君は春休みはどうするの？」
「僕はここにいますよ」

伊織の質問に晃は平然に答えた。

「まあ、バイトとかですかね」
「由佳姉ちゃんの？」
「ええ」

晃以外、由佳のことをみんなお姉ちゃんと呼んでいる。
なんでも晃がいなかったときに良くみんなの世話をしてくれたみたいだ。

「まあ、わたしたちもそんな風になるよね」

美紀がのほほんと言った。

「HR始めるぞ!!」

そのとき、担任が教室に入ってきた。

※

放課後。
みんな1組に集まっていた。

「アッキー。成績どうだった」
「美紀。聞かないほうがいいわよ」

美紀の言葉に結衣がわかりきったように言った。
まあ、実際。予想通りだったわけだった。

「渚さんは保健体育以外好成績ですね」

ささらが渚に言った。
渚の成績は晃の次によいといってもいい。
実際、3学期の学期末テストでも学年成績は渚は2位だった。（1位は晃）
しかし、渚の身長でこの成績だとどう見ても飛び級生徒しか見れない。

「しっかし。よくここまでお前は勉強できたな」

感心しながら大吾は言った。
頬が少しはれているのはあえてツッコまない。

「まあ、あそこにいたとき、ほとんど家事と勉強以外やることがなかったので」

晃は微笑みながらサラッとかわいそうなことを言った。
完全に大吾は自虐になってしまうことを聞いてしまった。

「大吾」
「なんだよ」

伊織が大吾に声をかけた。

「何か一発ギャグやってよ」
「何でだよ!!」

伊織の言葉に大吾は大声を出した。

「あんたのせいでこんな空気になったんでしょうが!!」
「だからなんで俺が!?」
「理由はさっきの通りだし、砕けてもどうでもいいから」
「砕ける前提!?」
「大吾の場合、当たって砕けろではなく、当たり砕けるですね」

晃が2人の会話を聞いてサラッとこんなことを言った。

「あきにいさん。うまいです」
「いや、うまくねえよ!!」
「いや、小松の場合、この言葉があっている」

花火と真もこの言葉に納得した。
大吾はなんか悲しい気持ちになった。

※

晃たちは自由荘へ帰ってきた。

「さて、お昼ご飯にしましょうか」

「うん」

晃の言葉に真は元気良く答えた。

キッチンで料理をしているとき、いきなりインターフォンが鳴った。

晃がそこに向かってドアを開けると、そこにはフードとマントをつけた人がいた。

「た、助けてください」

そして、その顔と声は完全に少女だった。

第１０９話　１年生の終わり（後書き）

後書きトークコーナ！

真「なんか今回短くない？」

晃「作者が終業式でいつもの長さは持たないと言ってましたよ」

美紀「まあ、確かに盛り上がる要素無いからね」

結衣「これが限界なのね」

今宵「全キャラ出せないほど会話のネタが無いわけか」

透「でもあれだ

美紀「でもあれだとなんか大事件に巻き込まれそうなにおいがすね」

晃「さあ、それは次回までのお楽しみです」

今宵「見事に無視されたな」

第１１０話　アレクサン号（前書き）

前回のあらすじ

１年生終了。

てか、誰か倒れている！？

第１１０話　アレクサン号

家にいきなり助けを求めてきた少女はただいま優輝家で。

「ごちちそうさま」

ご飯を食べ終わっていた。
しかし、結構な量を彼女はすぐに食べてしまった。

「す、すごいですね」

晃は驚きながら言った。
隣にいる真は何もいえなかった。

「本当に感謝します。私の名は響京（ひびきょう）といいます。よろしくです」
「ゆ、優輝晃です。こっちは妹の真です」

晃に紹介されて真は静かにうなずいた。

「それで、すこし質問があります。ここら辺に【団殺者（ディスター）】が住んでいると聞いてやってきました。なんか知っていますか？」
「ああ。それは僕ですよ」

……。

一旦無言。
京は驚いた顔になっている。

「ええっ！！私もっと筋肉質の人がやっていたのかと思ったのです

が、こんなに筋肉がなさそうな人でしたの？」

その言葉を聴いてソラは隅っこで体育座りをしてしまった。
自分でもわかっているらしいが、完全に筋肉などあるようにはみえない。

「あれ？探しているってことはなんかようがあるのですか？」

晃は改めて京に聞いた。
京はそのことを思い出したのかあたふたした。

「そうでした。はい。実は用がありまして」

京は話をした。

※

2日後。
晃たち幼馴染たちは大型の船の前に来ていた。
ほかにも舞、泉。
さらには伊織、花火、渚、大吾がいる。

あのときの今日の話によると。
この船、アレクサン号は歴代でも大きな船である。
その船を奪うとどこかの科学者からの脅迫状が届いたらしい。

京はこの船の持ち主の娘である。
そのためにここから一番近い【団殺者（ディスター）】の晃に警備の依頼をしたのだ。

ちなみにこのメンバーはお礼ということで何人か連れてきていいと言われたからだ。

「そういえば、この船はどこに向かうのですか？」

「今回は適当に船を出すだけです。脅迫状が来ているのにほかの人がいると迷惑になりますから」

京は晃の質問に答えた。

「そうですか。まあ、お金持ちがのる船ですからね。こうもしないとなかなか乗れませんよね」

話に花火が入ってきて楽しそうに言った。

「花火。この船のことよく知っているのですか？」

「はい」

花火は笑顔になりながら晃に言った。

「そうですか。では花火は今日は僕のパートナーですね」

「ぱぱぱ、パートナー？」

花火は顔を赤くしながら晃が言った言葉を繰り返した。

「ええ。【団殺者（ディスター）】は基本、誰かをパートーナーを決めて任務をするのですが、今回はこの船に詳しそうな花火を選びました」

晃は笑顔でそう返した。

その言葉を聞いていたかはわからないがまだ顔を赤くしている。

「え!?それって本当!?」

そのとき、話を聞いていたのか女子全員から驚かれていた。
そして、後ろには嫉妬のオーラが出ていた。

「そんなことなら私も調べておくべきでした」

嫉妬のオーラを出していない渚がボソッとそう言った。

「アッキー。パートナーなら少しは戦えたほうがいいよ!!」
「それならあたしが一番いいよアキ」

美紀と泉が一気に迫ってきた。

「それもそうですが。【団殺者(ディスター)】は戦うものですから、そのパートナーは戦闘よりも別のことで援助してほしいですので。依頼人はこんなこと頼めませんし」

晃の言葉を聴いた2人は頬を脹らませた。
ほかにも聞いて声が出ない人もいた。

「さて、とりあえずはこの船の見回りですね。行きますよ。舞、泉、花火。それに渚ちゃん」
「あれ?私たちも一緒ですか?」

舞が驚いたように言った。
泉のおんなじことを言いたそうだった。

「まあ、2人はもうすでに【団殺者(ディスター)】のサポーターになってますから。今回は花火が必要だからです。あと渚ちゃんも」

「そういえば、あきにいさんが渚ちゃんを呼んだのですよね」
実は渚は晃がわざわざ一緒に行かないかと誘ったのだ。
ちなみにほかの3人は美紀たちが呼んだ。
「ええ。ですのでその4人は付いて来てください。ほかのみんなは京さんの案内に従ってください」
女子たちはみんな「え～」っと言っていたが晃はきれいに無視をした。
そのまま晃たちは船の中の捜索をした。
「とりあえずは、大広場に行きましょうか」
「はい」
※
晃たちは船の大広場に来た。
中はものすごく綺麗で完全に貴族が踊りあう場所に見える。
「すごいですね。踊らないとはいえ、僕たちがここに立っているのはとっても不思議です」
「アキ。それはあちこち隅っこまで見ている人が言う？」
「てか、いつの間にあそこまで」
泉と花火がそういった理由は。
ただいま晃は上の見物場を見回っている。
ここも一つ一つ個室になっている。
「晃君もうあんなところまで」

舞が感心していった。

「とりあえずは怪しいものは今のところはありませんね。花火。次ぎ行きましょう」

「は、はい」

晃に言われて花火は答えた。

あれからはいろんな場所に行ったが、部屋が多いのでまったく部屋全体を見廻れない。

「ますます格好の獲物ですねこれは」

「どういうことですか？」

晃のつぶやきに舞は聞いた。

「このぐらい広いと、掃除や見回りに隙ができます」

「でも、警備もたくさんいるんじゃないの？」

晃の答えに泉が口出しした。

だが、晃は冷静に首を横に振った。

「逆に、それだと人は安心感を持ってしまいます。そのせいで油断も一緒に隙ができてしまいます」

人がいるからこれは自分は見ないでいい。

あそこは自分の担当ではないから見ない。

人が多いとその考えが働いてしまうものである。

それが人間の脳が安心感を持ってしまうからだ。

「あ」
「どうかしたのですか?渚ちゃん」

渚の声に晃は聞いた。

「本」
「この船の図書室ですか。何かあるかもしれません。入りましょうか」

そういうことで晃たちは図書室に入った。
この船の図書室もさすがに広く、2階まである。

「あきにいさん。本なんて読んでいる暇があるのでしょうか?」

花火は晃に聞いた。

「僕は1つ疑問に思ったことがあります」
「疑問?」
「なぜ科学者がこの船を狙うかです」

第１１０話　アレクサン号（後書き）

後書きトークコーナ！

泉「またこれは長編のにおいがする」

晃「あれ？泉はこのコーナでは結構登場少ないですね」

舞「晃君。それはいま泉ちゃんがとても気にしている。本編でも出番はないし、人気投票、晃君の相棒なのに０だったことを気にしているらしいわよ」

泉「気にしてはいない！！」

晃「してますね」

泉「してない！！」

舞「でも、こっちに目線を合わせないから」

泉「ウッ！！」

晃「泉の癖ですね」

第１１１話　Ｓｈｉｐ／Ｂａｔｔｌｅ－？（前書き）

前回のあらすじ

豪華な船に乗りました。

第111話　Ship／Battle―？

美紀たちは京についていってあるひとつの部屋に来た。

「みなさんはここを使ってください」

その部屋はものすごく綺麗で、この部屋の中にもさらに部屋があった。

「すごい。ものすごき綺麗」

結衣が感心しながら言った。

中に入れば完全に全員お嬢様だ。

「おい。俺はどこだよ？」

「あ、そういえば男性はあなたもいましたね」

笑顔で京はひどいことを大吾に言った。

てか、さっきから大吾はほとんどしゃべっていなかった。

ちなみに透もいることも忘れられている。

「そうですね。男子もここを使わせてもらいます」

「「マジか！！」」

『え～』

一斉に女子の不況の声が響いた。

だが、それもそうだ。

男子と一緒に寝るなんて普通にいやだ。

一名を除いて。

※

晃たちはいろんな本を見ていた。
だが、泉はなんだかつまんなそうだった。

「ねえ、はなちゃん。ちょっとほかの場所に行こうよ」

泉は花火に聞いた。
ちなみおの花火は晃の手伝いをしていた。

「まあ、泉にとって居心地がいい場所ではないでしょう。迷わないように花火は泉について行ってください。僕たちはしばらくはここにいます」
「は、はい。あきにいさんがそういうなら」

晃に言われて花火は泉についていった。
晃がこういったのは泉の性格をよく知っているからである。
このまま彼女を放置していたらどっか行ってしまうので探すのに時間がかかってしまうからだ。

「晃さん。この船の構図がある本がありました」

上の階から渚の声が聞こえた。

「構図が載っている本ですか？」
「構図といっても紙が数枚あるだけですが」

渚がそれを持って下に下りてきた。

「渚ちゃん。良くこれを見つけましたね」
「実は学園でもあるカウンターのところを探していたら見つけました」

図書委員の渚にとって大切なものがあるところを知り尽くしている。
そのためにこんなに早く見つけられたのだ。

「僕もいいのを見つけましたよ」

そう言って晃は一枚の紙を渚に見せる。
それは何かの計算が書かれているものだ。

「晃さん。これって」
「ものすごい式ですね。残念ですがこれは解けないでしょう」

さすがの晃でも習っていない計算式は解けるはずも無い。
だが、問題はそこには無い。

「なんでこんなところにこんな計算式が書いてあるものがあるのでしょうか」
「見た感じ、ものすごき大切なものに見えますね」
「なんでこんなものがこんなに簡単なところにあるのでしょうか」

晃は考え始めた。
だが、いくら考えても答えは出てこない。

「晃さん。この船のことを書いた紙ですが」
「そうですね。考えてもしょうがないですね。舞、花火を呼んでください！！」
「はい」

晃の言葉に舞は答えた。

晃は考えた。
この紙もそうだ。
渚のが見つけたのもそう考えればすぐに見つかってしまうものだ。
まるでこれを見て下さいと言っているみたいな。
謎は深まるばかりだ。

「一様、これは考えをまとめるべきですね」

晃の言葉に渚はうなずいた。

※

晃たちがみんなのところに向かっているとき、別の部屋から音が聞こえた。
泉と花火も戻ってきたのでこの2人ではない。

この船に乗っているのは知り合いだけ。
晃は躊躇無くそこの扉を開けた。

だが、そこには変な男が一人いただけだ。
格好は結構涼しそうな格好をしていて中太りしている。
そしてなぜか、なんか食べ物を食べていた。

「なんだお前ら」
「それはこっちのせりふです！！」

晃はすぐに拳銃を【呼び出し（コール）】して構えた。

だが、同時に中太りの男も棒の先が2つに三角のように分かれている棒を持って晃の首に近づけた。

「誰か知らんが、不法侵入なら訴えられるぞ」

「それも、こっちのせりふです」

晃はすぐに銃を持っていない左手に刀を【呼び出し(コール)】し、そのまま振り上げた。

中太りの男は後ろに下がって逃げた。

「くらえ!!」

そこで後ろから泉が棒を持って先制攻撃を仕掛けた。

だが、いきなり現れた細い体の男に棒で止められた。

「いきなりの攻撃は美しい女性がやることではないのだよ」

言動でキザ野郎なのがわかる。

「2人ですか」

「いや、3人だ」

そして中太り男がいたところから背の低い男が出てきた。

高さは舞ぐらいだ。

「キャラ濃いですね」

「渚ちゃん。なに言っているのですか?」

晃も渚と同じことを思ったがここはツッコンだ。

「しかし、3人相手ははっきり言ってきついですね。あの太い人。意外とすばやかったですし」
「戦術的撤退する？」
「そう簡単には無理でしょう」

いかに3人ともやる意気がある。
このままでは逃げることは難しい。

「晃君」

そのとき、舞の胸元が光りだした。
その光は銀色に光りだして、同時に晃の白の腕輪も光出した。
これは色宝石の光だ。

以前は髪留めにしていたが、それだと効率が悪いので晃がネックレスに改造したのだ。
舞の色宝石は銀色。つまり風である。

晃の左腕に風が集まってそのまま刀のところまできた。

「ちょうどいいです！！」

晃はこのチャンスを見逃さない。

「舞え！！風よ！！」

思いっきり刀を振って風を大きく巻き起こした。
相手がひるんでいるうちに晃たちは逃げ出した。

さっき泉が言っていた戦術的撤退だ。

（忘れていました。考えてみればすぐにわかることです）

晃はものすごい大切なことを忘れていた。

そのまま晃たちはみんながいるところに走った。

第１１１話　Ｓｈｉｐ／Ｂａｔｔｌｅ－？（後書き）

後書きトークコーナ！

舞「久しぶりに色宝石出ましたね」

晃「まあ、戦闘は無かったわけですし」

泉「これで舞ちゃんの色宝石の謎が解明されるかもね」

晃「それは作者の気分によると思います」

舞「そ、そんな～」

晃「てか、泉はなんだか張りきってませんか？」

泉「うん。久しぶりのあたしの出番だからね！！」

晃・舞（そういえばそうですね）

第112話　Ｓｈｉｐ／Ｂａｔｔｌｅ－？（前書き）

前回のあらすじ

この３人テキトー

晃「たぶん、やられキャラですね（笑）」

第112話　Ship／Battle―？

晃は早速みんなを集めた。
場所は机がおいてある広い部屋である。
椅子もみんなの分がある。

「どうやら、相手は【反逆者（レジスタンス）】を呼んだみたいですね。しかも、結構有望な実力者でした。バカでもありましたが」

晃は半分呆れながら言った。
しかし、あの中で食料調達するのはバカに等しい。

「もしかしたら新人かもしれませんが」
「で、ですがこちらには【団殺者（ディスター）】のあきにいさんがいます」

花火は晃のネガティブな発想を消すために言い出した。
だが、晃は黙って首を横に振った。

「問題なのは僕ではありません。皆さんの安全です。問題なのは」
「安全の問題？」

結衣は聞き返した。
しかし、晃はまた不安そうな顔をした。

「この中で【団殺者（ディスター）】は僕だけです。しかし、僕だけだとバラバラに行動したり、ましてや僕一人ではあの実力で3人も抑えられるかもわかりません」

しかも、あの3人だけが今回用意された人物だとは考えられないの

だ。
そうなれば、晃一人ではなにもできない。

「この中で戦いの経験があるのは泉のみですか。これは結構きついですね」

その言葉を聴いて泉は胸を張る。
だが晃は悩み中。

「ここは短期戦に持ち込んだほうが良いですね」

考えた結果、一番手っ取りはやい方法がこれになった。
晃はとりあえず、情報収集を始めたいと思っていた。

※

全員で図書室に来ていた。
だが、幼馴染の何人かは本を読もうとはしなかった。
晃と渚はものすごい速さで情報がありそうな本を探す。
渚をつれてきたのはこの情報収集のためだと思っていたのだからだ。

「この船はそんなに歴史がありませんね」

そう。いままで調べたことでわかったことはここはそんなに歴史が無いことだ。
理由は船の綺麗さもそうだが、何しろこの船には歴史を示すものが一切無いからだ。
これではなんで科学者がこの船を狙う理由がわからない。

「考えても本当にわかりませんね。実際、この船に用があるのは確

かなこととだ思うのですが」
「……船のあれを」
「京さん？」
京がつぶやいているのを晃は聞き逃さなかった。
「な、なんでもないわよ」
「ん？」
だが、明らかに何かを知っているように見える。
晃はこれ以上の検索は逆効果だと思うい、あれ以上聞かなかった。
「とりあえずは、みんな一緒に行動することを心がけましょう」
「それはそうだな」
そのとき、晃の後ろから見知らぬ声が聞こえた。
晃が振り向いた瞬間、いきなり頭を思いっきり叩かれた。
晃はその場で倒れこんだ。
だが、運がよく気絶はしてはいない。
しかし、その場にいたのは京、本人である。
晃は少し驚いた表情になった。
「な、何であなたが」
だが、晃はまるで正体がわかっているように言った。
京はいきなり自分の顔の皮をむき出した。
いや、自分の本当の姿を露にした。

そこには顔が長いハゲのおっさんがいた。
しかし、服装は完全に女物なので（しかもスカート）見た目は完全に変態である。
その姿が晃に火をつけた。

晃はその場から立ち上がった。
同時に美紀の色宝石が光りだした。

「燃えてください！！変態！！」

晃は速攻で刀を【呼び出し（コール）】して思いっきり上へ振り上げた。
そして言葉通りに炎の柱がハゲのおっさんを包みこんだ。

「ぐあああああ！！」

おっさんの声が響く。
あいからわず変態には容赦が無い晃であった。

「それで、本物の京さんはどこにいるのですか？」

晃はおっさんの胸倉をつかんで聞いた。
刀からはまだ炎が出ている。

「こ、この船の一番上のデッキにいる」
「そうですか。ありがとうございます」

そう言って晃はおっさんを縛り付けた。

「さて、行きましょう。たぶんそこに例の科学者がいますよ」

晃はみんなに言った。
だが、ここで美紀の色宝石を使ってしまうのは正直言ってやばい。
最近わかったことだが、一種類の色宝石は一日一回しか発動ができない。
つまり、美紀と舞の赤と銀の力は今日はもう使えない。
それと一度使ったことがあるのは自分の石で発動しやすくなってくる。
まあ、持ち主が近くにいないと発動ができないのはいままで通りだ。
晃たちは京がいると思われる場所に移動した。

「そういえばアキ君」

何かを疑問に思ったのか、結衣が晃に聞いてきた。

「なんですか？」
「そういえば昨日の京さんは本物？偽者？」

確かに、あれだけの変装では昨日の京も怪しく見える。

「昨日の京さんはあの変態野郎ではなく、本物ですよ。出なければ僕に助けてくれとお願いに来ません」
「そ、そう」

変態野郎の部分がものすごく強く示されていたのは本当に嫌いなんだと結衣は察してこれ以上聞かなかった。

「晃さん。一つわかったのですが」
「なんですか？」

渚に声をかけられて晃は答える。
どうやらこれは本当に必要となる情報だと見える。

「この船の鉄部分の材料は実はダイヤディズということがわかりました」
「そういうことですか！！」

渚の話を聞いて晃は納得をした。
ほかの面子は何のことかわかっていない。

ダイヤディズ。
それはダイヤモンドよりも硬く、軽い鉄のようなものであり、科学都市で見つかった超高級なものである。

「花火さんの話と本の情報を照り合わせたらこういう結果となりました」
「そうですか。花火、この船のデッキまでの道を教えてください」
「はい！！」

※

晃たちはデッキのほうへ来た。
そこには縄で縛られている本物の京と、さっきであった【反逆者（レジスタンス）】と真ん中には例の科学者がいた。

「あなたですが。この船のダイヤディズを取ろうとしている人は」
「ほう。よくわかっているじゃないか【自由者（フリーダム）】」

その言葉を言い終わらせたとき、さっきの【反逆者（レジスタンス）】の3人が晃の

前に立った。

「その前に、この3人と遊んでもらおうか」

「やっぱりそうなりますか」

晃は右手に銃を、左手には刀を【呼び出し(コール)】した。

晃は躊躇無く、引き金を引いた。

だが、狙ったのは細いからだの人だったので簡単に避けられてしまった。

「残念。俺には銃は聞かない!!」

「そしてそのままアタック!!」

中太りの男が剣を持って晃に襲ってきた。

晃も刀を使って対抗する。

「ほら、後ろががら空きだ!!」

そのとき、いきなり後ろから遅いからだの男が剣を持って後ろから攻撃した。

「そうはさせないわ」

だがそのとき、京がいきなり剣を持って男に対抗してきた。

第112話　Ｓｈｉｐ／Ｂａｔｔｌｅ－？（後書き）

後書きトークコーナ！

花火「とうとう戦いになって来ました」

渚「これからの戦いが楽しみですね」

晃「それにしてはテンションが低くありませんか？」

花火「それはそうですよ。戦いになると私たちの出番はものすごく低くなります」

渚「完全に幼馴染の活躍の場になります」

花火「あと、舞ちゃんと泉ちゃんも」

晃「すごいネガティブな発想ですね（汗）」

第113話　Ｓｈｉｐ／Ｂａｔｔｌｅ－？（前書き）

前回のあらすじ

京、緊急参戦。

第113話　Ship／Battle―？

いきなりの京の参戦に相手の3人どころか、晃も驚いていた。
しかも京は短剣を使って細いからだの男の剣を防いでいるのだ。

「京さん。あなたは一体？」
「ちょっとね。それは後で説明するわね」
「そうですね。そのほうが僕にとっても助かります」

短い会話をしてから2人はお互い違う場所に走った。
とりあえずは協力する気である。
お互いうなずいてから晃は中太りと細い男の所に行き、京は体が小さい男のところへいった。

「さあ、勝負です」
「威勢がいいな。【自由者（フリーダム）】」
「だが、2対1なら俺らの有利だ」

2人ともそういって両手に剣を持ち直した。
晃は左手に剣を再び構えた。

「僕は、一人ではありません」

そう言ったとき、晃の色宝石が光りだした。
同時に、真の色宝石も光りだした。

「自由に行きましょうか」

晃の左手から電気が伝わり、刀に帯びた。

そして、その刀を思いっきり縦に振り落とした。
刀から電気が地面に伝わり、男たちに襲い掛かっていく。
このことに男2人は驚いている。

「やるじゃねえか。餓鬼が」

そう言って中太りの男が一歩前に出た。
そのまんま男は長袖を腕まくりした。
その手首には機械的腕輪が着けられていた。
男がにやけたとき、腕輪から透明の壁が出てきて晃の電気の衝撃波を防ぎ始めた。

「そういうことですか」

晃はそれを見て、刀を突き刺すようにもって、まるで槍を突き出すかのように男に向かって突いた。
その刀からさらに電気の槍が出てきた。
男の壁にさらに晃の攻撃が上乗せられた。
攻撃力が上がり、男はだんだん後ろに下がっていく。

「お、おい」
「ああ。任せろ!!」

中太りの男がそういったとき、細いからだの男が上に飛び上がって、腰のところから槍を組み立てて出してきた。
そのまま上空から晃の電気にめがけて一気に突いた。

電気はそのことで拡散されて攻撃力を大幅に減らしてしまった。
それを見て中太りの男はそのまんま盾を地面に押さえつけて攻撃を排除した。

「そんなぬるい攻撃は俺たちの敵ではない」

男は同時にどや顔で晃を見た。
その顔に晃は少し怒りが込みあがった。
だが、現状的にはこれはピンチである。

晃の一回発動した色宝石はすべて今日はもう使い切ってしまった。
それだけではなく、相手はなにやら意味深な武器まで使ってきた。
あれは多分、科学都市で作られたものだろう。
性能の良さを見ればすぐに晃はわかった。

（さて、どうしましょうか）

※

そのころ京もすこし苦戦していた。
理由は簡単。
あの小さい男にも科学都市の武器を持っているのだ。

「はあああ！！」

京は短剣を振り回すが小さい男はそれを高くジャンプして避ける。

「なははは。この俺、小代大司（しょだいだいじ）に、避けられない攻撃などない！！」

大司は手を腰に当てて自慢げに言った。

だが、大司の武器を見てみればあながちうそではないことがわかる。
大司の武器は足元の靴である。
あの靴には強力なばねが仕込んでおり、あらゆる攻撃を避けているのだ。

だが、苦戦の理由はもう一つある。
それは京の武器だ。

相手はすばやさを武器にしている。
そのためにリーチが短い短剣では当たりにくいのだ。

一回は晃を救ったが、この武器は少し作戦ミスだろう。

「さあ、どうする女。【自由者(フリーダム)】にでも応援に来てもらうか？」
「それは、できない相談ね」

大司の言葉を京は完全に降り避けた。
ただでさえ、晃には2人相手してもらっている身、それをたった1人を相手に応援に来てもらうのはさすがにやりたくない行為である。

だが現状は現実。
完全に大司はいまの京には完全に不利な相手である。

「だけど、私は負けられない。この船をあんたたちになんか渡せません！！」
「そのとおりです」

京の叫びを聞いた晃は答えた。
そのとき、いきなり京の元に鞘に入っている刀が振ってきた。

この刀は晃があのとき、学園で手に入れた刀だ。

「その刀、自由に使ってくれてかまいません！！」

晃の言葉に京はうなずいた。
そのまま刀を鞘から抜き出した。

「これなら、戦える」

そう言って京は刀を振り回した。
その後、刀を竹刀を持つように両手で握った。

「そんな刀一本で何ができる」

そう言って大司も刀を鞘から抜き取った。

「それはどうですかね」

※

刀を京に渡してからも、晃のピンチは続いていた。
何とかさっきまでは何とか細い体の男しか来ないのでなんとか相手できているが、自分が刀で攻撃すると避けられるか受け流される。
また銃で撃ってもさっきの中太りの男が防いでくるのだ。

晃は拳銃を４個【呼（コール）び出し】した。

「４丁拳銃」

晃は次々に銃を持ち替えながら連射した。

だが、やはり防御されてしまう。

「無駄だ。お前はここで死ぬんだよ」

男たちは笑いながらいった。

「ふざけないでください。僕は今ここにいるみんなを家に送り返さなければなりません。そして、みんなを守れるのは僕だと言うなら、僕はここでは死ぬわけにはいきません」

晃は力強く言い張った。

「そうか。ならその言葉、無駄にしてやる」

細男はさらに槍で突き攻撃をしてくる。
晃は刀で攻撃を防ぐ。

そのとき、男が少しにやけた。

そのとき、いきなり太男がいきなり上から大きな鉄の槌を振り下げてきた。
同時に晃の刀がくだくだに砕けた。

「これで、お前は死んだ！！」

そう言って細男が晃に向かって槍を突いてきた。

「晃、しっかりしろ！！」

透がいつもと違い大声で叫んできた。

「お前はこんなやつらに負けねえだろ！！」

その言葉を言い終わったとき、透の色宝石が茶色に光りだした。

同時に、晃の色宝石が光りだした。

「これは、透の力」

そう言って晃は銃を2個【呼び出し（コール）】した。

第113話　Ｓｈｉｐ／Ｂａｔｔｌｅ－？（後書き）

後書きトークコーナ！

京「さて、始まりました。いつものこのコーナー」

晃「あれ？今回は京さんが担当ですか」

真「む～。今回は私とあきにいだけかと思ったのに」

晃「あれ？真。どうかしたのですか？」

真「なんでもないよ！！」

晃「？？」

京「なるほどね」

晃「何ですか？」

京「いや～なんでもないですよ」

晃「？？」

第１１４話　Ｓｈｉｐ／Ｂａｔｔｌｅ－？（前書き）

前回のあらすじ

ついに透が長編で活躍？

透「なぜ疑問系」

第１１４話　Ｓｈｉｐ／Ｂａｔｔｌｅ－？

透の色宝石が茶色に光、晃の色宝石は白色に光った。
そのことを確認した晃は銃を構えなおした。

「撃ちます！！」

晃は狙いを定めて一気に左手に持った銃の引き金を引いた。
銃口から出てきたのは晃ぐらいの大きさの岩だ。

見ていた仲間と敵も驚いていたが、撃った本人の晃もこのことには驚いていた。
だが、敵も驚いてくれたので隙が生まれた。

「しまった」

中太りの男は腕輪の透明な盾を発動した。
だが、岩の重さには勝てずに、一気に盾は割れてしまった。
中太り男はかろうじて避けることはできたようだ。

どうやら透の色宝石の色、つまり茶色の色宝石の力は岩の力らしい。

「な、なにやっている！！」
「何だよ。あの岩は！？」

細男も中太り男と一緒に叫んだ。
たしかに、意味不明な力なのは認める。
だが、晃は考えを与える時間など与えない。

「つぶせ！！」

次は両方の銃から一気に撃ちはなった。
両方の銃口からさっきと同じ大きさの岩が放たれた。

完全に油断している2人は完全に防ぐ手段がないので見事に岩の下敷きになってしまった。

「京さん」

晃は確実にしとめたのを確認した後、京がいる方向を向いた。
だが、もう色宝石の力はなくなってしまった。
しかし、晃は常に冷静だった。

「ひっ！！」

そして、背外低い男は晃に狙われたことを知って声を上げた。
だが、すぐにさっきの光がないことに気づく。

「へんだ！！さっきの力がないお前に俺がやられるかよ」
「そうですか。ですが、僕と京さんだけに狙いを向けていいのですか？」

そう晃が言ったとき、何かの気配に気づいた男は後ろを向いた。
だが、もう振り向いた瞬間は遅く、その場には泉がすでに棒を振ろうとしていたのだ。

「貴様、いつの間に！！」
「おりゃ！！」

泉は男の話を聞かずに思いっきり棒を男の腹に当てた。
中に何かを着ていたのか、少しは無事のようだ。
だが、晃の狙いはそれだけではなかった。

晃はすでにもう2つ拳銃を【呼び出し(コール)】していた。

「4丁拳銃、狙い打て【連続の狙い撃ち(ラッシュ・ライフル)】」

一列になった銃弾は男に向かって放たれた。
隙をつかれた男は避けることはできずに見事に当たってしまった。

「はあああ!!」
「うぉりゃあああああ!!!」

その間に京と泉が男のそばについた。
そしてすでに刀と棒を振ろうとしている瞬間だった。

「ま、まままま待ってれ!!」

男は完全に鼻水と涎まみれになって命乞いをしてきた。
だが、この2人にはそんな話は通じはしない。

京は親の船をあらされて、泉はもう、完全に暴走状態である。
そんな2人が手加減などするはずもない。

男は思いっきり両方から一気に挟み撃ちを食らった。
京の刀はみねうちだったので怪我の心配はない。
男はその場で倒れた。

「ち、使えないやつらだ。だったらこのマシンが相手をしようぞ!

！」

そう言ってこの船を狙った張本人といえる人物は何かしら古そうなボタンを押した。
その姿に晃たちは少し呆れていた。

だが、呆れていたのはつかの間、いきなり上空から無駄にでかいマシンが降ってきた。

そのマシンはまるで虫型のように8本の足があり、なんか虫の触覚みたいなのが大量についている。
しかし、見た目装甲は厚そうだ。

「やれ、わがマシンよ！！」

名前決まってないのかい！！っと、言うツッコミはさておいて。
そのマシンはものすごい速さで晃に迫ってくる。

「うお！！なんか気持ち悪いです！！」

晃はそう言って銃を放つ。
だが、無駄に早く、なかなか当たらない。

「なんか本気で気持ち悪いです」

晃は本気で半泣きで銃を撃つ。
だが、当たらない。

これはある意味ピンチである。

「なんか、センスの悪いマシンだな」

そのとき、今宵がサラッと本音を言い出した。
そのことに全員驚いていた。

「いま、何を言った小娘」
「いや、だからセンスが悪すぎるマシンだと」
「何だと！！」

いきなりのっている本人がキレだした。
そして、目標をいきなり晃から今宵に向けだした。

「危ないです！！」

晃は即時に今宵を抱きかかえて回避した。

「危ないですね。今宵。いきなりどうしたのですか？」
「いや、なんか絵を描いているものとしてあのデザインは許せないと思ってな」
「思うだけにしてください！！」

そう言っている間に次にまた狙ってきた。
晃は逃げ続ける。

「これでは埒が明きませんね。どうにかしないと」
「なら、色宝石の力を使えばいいのではないか」
「それができれば苦労しませんよ」

今宵の言葉に晃は呆れながら答えた。
だが、今宵はどうやら本気で言っているらしい。

「できるさ。私と晃なら」
「そう言われましても」

晃がそう言ったとき、いきなり今宵の色宝石が緑色に光りだした。
晃はその光に驚いた。

「今宵。これは一体」
「いまだ。晃」

同時に晃の色宝石も光りだした。

「わ、わかりました」

晃はそう言って今宵をその場に戻した。
そして再び銃を構える。

「撃ちます」

晃はそう言って銃の引き金を引いた。
だが、当たったのは晃の近くの地面だ。
これでは意味が無い。

「どうした?優輝晃!!」

そう言ってマシンに乗りながら科学者が晃に迫った。
だが、晃はいたって冷静だった。

「引っかかりましたね」

そのとき、いきなりマシンの下から大きな木の根っこが出てきてマシンの動きを封じた、

「これで、動きは封じることはできました」

第１１４話　Ｓｈｉｐ／Ｂａｔｔｌｅ－？（後書き）

後書きトークコーナー！

京「今回も張り切って行きましょう！！」

結衣「なんで京さんはあんなに張り切っているの？」

晃「今回の長編でのキーキャラクターなのにまったく今回は出番が無かったので空元気みたいなものらしいです」

京「なんか言いましたか？」

晃「な、何でもありません」

結衣「しかし、今宵には驚いたわね」

京「話題をそらさないでください（ニコニコ）」

結衣「は、はい」

第１１５話　Ｓｈｉｐ／Ｂａｔｔｌｅ－？（前書き）

前回のあらすじ

また新たなる力。

第115話　Ship／Battle－？

「な、なんだこれは！？」

マシンに乗った科学者はいきなりの出来事に叫びだした。
それもそのはず、いきなりどこから現れた木の根っこに誰もが驚いていた。

マシンは完全に身動きが取れなくなっている。
晃はそのことを確認した後、銃をさらに４つを【呼び出し（コール）】した。
だが、その前にマシンに乗っていた科学者はもうすでに手を打っていた。

「ふふふ。【自由者（フリーダム）】よ。わしをなめるなよ」

そのとき、マシンから煙が出てきた。
晃はその煙が何を示しているのかがわかった。

「まさか、自爆ですか！！」

晃の言葉に科学者はニヤリと笑った。

「爆破しろ！！」
「やめろ！！」

晃は爆破する前にマシンに向かった。

（爆破する前に破壊を！！）

このままの自爆ではみんなに被害が出てしまう。
そうならないために晃はマシンを破壊することで爆破を防ごうとした。
だが、この完全にそれは普通の人間では不可能だ。

――!!

そのとき、晃の脳にある記憶が浮かび上がった。

その記憶は、晃がまだ髪が白くないとき、右手首が皮一枚でつながっている状態の記憶だ。
その記憶とともに恐怖が襲い掛かった。

「あ、あ、あ」

晃は歯をかみ合った。

（ダメです。このままではみんなが）

晃はその恐怖に耐えて、右腕を前に出した。

「これ以上、誰も苦しませたくは無い」

そのとき、晃の腕輪が光りだした。
その瞬間、なぜか粒子化されて晃の黒のリストバンドを包みこんだ。

粒子はリストバンドを包みこんだ後、見る見る粒子が消えていった。
そして、リストバンドは黒から白になり、赤い線が入っている。
さらに、中心には白の色宝石が付いている。

その姿に、晃は勇気が出てきた。

「爆破などさせません。【呼び出し（コール）】」

ロープを呼び出してマシンのところに結んでそのまま一気に移動した。

マシンの近くに来たとき、さらに晃の色宝石が白色に輝く。

その輝きはマシンさえも取り込んだ。

晃は何か感じたのか、その光から離れた。

「すべてを包み込み、保護しろ！！」

――……ドーーーン！！

マシンが一気に煙が全体にあふれて爆破した。

みんなその場に隠れて身の保護を最優先した。

だが、爆発どころが、煙すらも舞ってこない。

「こ、これって」

結衣は晃のところを見たらなんとマシンの周りには何か白いものに包まれていた。

「これが、僕の色宝石の第２の力」

晃は自分の色宝石が付いた白のリストバンドを見た。

「すべてを保護する力。名づけるなら【保護する光（プロテグ・ライト）】」

だが、すぐに【保護する光（プロテグ・ライト）】は消えてしまった。
どうやら時間制限があるらしい。

「わしはまだ負けておらん！！」

そう言ってなんと科学者か脱出用に乗っていた空中に浮遊しているマシンが変化した。
その姿は完全なる蟹である。

「もう。あなたは許せません！！」

晃は6個の銃を【呼び出し（コール）】した。
そのいままでない数にみんな驚いていた。

「あ、アッキー。あんなに銃扱えるの？」
「あきにい。大丈夫」
「アキ君」
「晃なら大丈夫だろ」

晃は4個の銃を空中に投げた。

「降り注げ！！6丁拳銃」

その今まで無い数にみんな無言で見守った。
だが、みんなが黙っていた理由はそれだけではない。
晃の集中力がものすごく離れていてもビリビリ感じているのだ。

そして、その緊張感の中、晃は引き金を引いた。

晃の下から放たれた弾は空中に上がった。
その刹那、さらに放たれた弾がさっき撃たれた弾と接触した。
前に放たれた弾はまるであとに撃たれた弾に押されたかのように、
さらに加速して科学者のマシンに落ちていった。

それが1秒に何回も繰り返されている。
晃の手はもうスピードで動かされている。

弾はものすごい数に落ちていき、それはまるで雨のようだった。

「【乱射撃(ガトリング・レイン)の雨】

マシンにどんどん加速した弾が当たっていき、パーツが破壊されていく。
もともと丈夫ではないらい。

「く、くそが！！」

完全に打つ手が無くなった科学者は困りながら言った。

「さあ、観念してください」

晃は科学者に迫った。
その時、科学者はいきなり手元に持っていたボタンを押した。

その瞬間、いきなり回りから人間型アンドロイドが大量に出てきた。

「こ、これって」

晃はこれは予想できていなかったらしい。

「あきにいさん！！」

花火の声に晃はうなずく。
同時に花火もうなずく。

「いけ、わがアンドロイド軍団！！」

その声とともに一斉に晃と京に襲い掛かってきた。

「この数に、銃だけでは難しいですね」

しかもアンドロイド軍団は、てにナイフを付いているのもいれば刀を持っているものもいた。
晃はその刀に眼を向けた。

「その刀。もらいます」

晃は狙いを定めたアンドロイドに近づいてものすごく近づいたとき、手元に銃を撃った。
手から離れた刀を晃は手に取った。

だが、キャッチしたとき、晃には隙があった。
その瞬間をアンドロイドが見逃すわけではない。

しかも囲まれている状態であるために完全なるピンチである。

「晃さん！！」

だがその時、アンドロイドの後ろから京が刀で切った。

「京さん！！」

晃はそれを見た瞬間、刀でナイフを受け止めて、違うアンドロイドに銃を撃って対抗した。

「さて、京さん。最期の悪あがきですね」

京はその言葉にうなずいた。

第115話　Ｓｈｉｐ／Ｂａｔｔｌｅ－？（後書き）

後書きトークコーナ！

結衣「とうとう今宵まで色宝石の力が発動したね」

真「結衣ちゃんは？」

結衣「まだよ。まったく作者は何をしたいのかしら」

美紀「でも、その分ゲーム的に強かったりして」

透「ゲームかよ」

今宵「……ありえるかも」

晃「いや、これはゲームではないのですが」

第116話　Ｓｈｉｐ／Ｂａｔｔｌｅ－？（前書き）

前回のあらすじ

とうとう今回で決着！！

第116話　Ship／Battle―？

「やれ！！わがアンドロイド軍団！！」

科学者の一言により、アンドロイドたちは一斉に晃と京に向かってきた。

晃と京はお互い背中を向き合った。

「いけますよね。京さん」

「そちらこそ」

そう短い会話をした後、2人は散らばった。

「【強化の腕輪（ドーピング・バンド）】、発動します！！」

晃はそういいながらさっきまで左手で持っていた刀を右に持ち直した。

そして、次々に向かってくるアンドロイドたちを切っていった。

このアンドロイドたちはアンドロイドシステムとはまったく関係ない。

理由は簡単だ。

アンドロイドシステムでは量産型は作れないのだ。

「皆さんは早く船から脱出してください」

晃がそう言ったとき、いきなりこの船の横から縦島さんたちが乗った小さい船が見えた。

小さいといってもここにいるもの全員は乗れる大きさだ。

「貴様、まさかわかったというのか!?」

科学者は晃の行動をみて聞いてきた。

「わかりますよ。あなたはこの船を沈ませようとしているのですよね。いえ、正確にはもすでに沈ませる準備は済ませていると言ってもいいでしょう」

晃の言葉に科学者はいきなり笑い出した。

みんなその姿を見ながら船に乗り移ろうとしていた。

「それがどうした。貴様らの大切な例の金属はなくなるのだぞ!!」

「なに言っているのですか」

晃は呆れながら言った。

その言葉に何か意味があるのがわかり、科学者は後ろを向いた。

そこには大きな袋を持った美紀、泉、花火、渚とついでに大吾の姿があった。

この5人は途中からこの場から離れていて例のものを採りに行っていたのだ。

「あの女どもを船に乗らすな!!」

「させません!!」

アンドロイドが5人に近づいたとき、晃はカバーに入って守った。

「泉。後は任せました」

「うん!!」

晃の言葉に泉はうなずいた。

「逃がすな！！」

科学者の言葉が天にまで響く。

こっち側に集中しているので晃のみではさすがにその場での移動が難しくなってしまった。

だが、あっちにもちゃんとした戦闘員はいる。

「はあぁぁぁ！！」

泉は自慢の棒を持ち、次々にアンドロイドたちに対抗している。

「くそっ！！そういうことか！！」

「ご理解ありがとうございます」

そんなことしている間に5人は何とか無事に船にたどり着いた。

「だったらお前らだけでも殺してやる！！」

科学者がそう言ったとき、いきなり船のスピードが速くなった。

「アキ君！！」

結衣のこの言葉もすぐに消えてしまった。

「やれ！！」

アンドロイドたちはまた晃たちに向かってきた。

「僕たちはここで死んではいられないのですよ!!」

晃の言葉に京もうなずいた。
2人とも構えなおした。

そして、次々に向かってきたアンドロイド軍団をなぎ払った。
相手は所詮ロボット。
動きが単純すぎるために2人は簡単に次々の攻撃を避け続ける。

「くそっ!!なんだあの餓鬼どもめ!!」

科学者は自分の拳を握った。
だが、さすがにタイムリミットが近づいてきた。

「聞こえますか?謎の科学者さん!!」

その時、晃の声が耳に入ってきた。

「次会ったときは」

晃がそう言ったとき、お互い刀を科学者に向けた。

「「あなたをブッタ切る!!」」

そう告知をした後、こっち船に追いついてきた結衣たちの船がやってきた。

「行きますよ!!【呼び出し(コール)】」

晃の言葉でロープが出てきた。

それを投げて美紀がキャッチした。

「京さん！！」
「はい！！」

晃はしっかり刀の鞘を持って船に縄を伝って乗り込んだ。
それはまさにグッとタイミングだったかのようにさっきまで乗っていた船が壊れだした。
晃たちはその船の結末を無言で見送った。

※

そして2日経った。
あのあと、京はダイヤディズを持っていかなかった。
晃が結局もらうことになった。

完全に珍しいものと見えるこのダイヤディズはほかの科学者にとって本当にのどから手を出るほどほしい代物だ。

「アキ君。腕輪はどうしたの？」

結衣は晃の腕を指差した。
晃の左手首にはいつもの腕輪がなくなっている。
変わりに晃がここに来るときまで持っていたリストバンドが形が変化していた。

そしてその色は晃の色宝石の色そのものだ。
完全にリストバンドと色宝石が融合している。
なぜ融合したのかは誰もわからない。

「でも、まあ結果オーライじゃねえか？俺たちの力も使えたわけだし」
「でも、私のだけ反応しない」
雄一、結衣の色宝石だけが色を輝かせていない。
結衣はわかりやすく肩を落とした。
「僕らはでも、この力はあまり使いたくありませんね」
晃は自分の右手首についている色宝石が付いたリストバンドを見た。
「この力は平和な世の中では使わないと思います」
「つまり、あきにいは使わないほど平和でいいと、言いたいんだね」
「ええ」
真はいきなり頭を撫でられてびっくりしたが次第に気持ちよくなっていく。
まるでその姿は猫か犬だ。
「あとで皆さんにもお詫びをいいに行きたいですね」
晃は窓を見た。
そのとき、いきなりインタンホーンが鳴った。
「はい。誰ですか」
晃はドアを開けた。
「こんにちは晃君」

そこにいたのは舞だった。

「どうしたのですか？舞」

「あの、これ渡してくれって言われて」

舞は一枚の封筒を晃に渡した。

そして一番に眼に入ってきた文字は住居願いの文字だった。

「こんな言葉使うのですかね」

とりあえず晃はそこをツッコンだ。

第116話　Ｓｈｉｐ／Ｂａｔｔｌｅ－？（後書き）

後書きトークコーナ！

晃「とうとう長編終わりました」

京「私の出番もここまでですね」

晃「では、そんな京さん。一言どうぞ」

京「そうですね。ほとんど捕まっていましたが、楽しかったです」

今宵「なんかこう聞くとＭ体質の人だと聞こえる」

晃「いや、違いますから」

京「では、たくさんの人を切れてよかった」

美紀「この人は天然だね」

第１１７話　新住居者（前書き）

前回のあらすじ

やっと１年生編の最期の長編終わりました。

第１１７話　新住居者

晃はその夜。
舞に渡された封筒を開けた。
見るからにどうやらこの【自由荘】に住みたいといっている人がいるらしく、詳しいことをそれに書かれていると舞に言われた。
舞もこれぐらいしか教えてもらっていないらしい。

晃は気を取り直して封筒の中身を見た。
真も向かい側で座って誰なのか楽しみにしている。

だが、晃は一瞬で真顔になった。

「ど、どうしたの？あきにい！？」

その顔をみた真が晃に問う。

「真。これ見てください」

そういわれて真は封筒の中に入っていた一枚のプリントを見た。
そこには新住居者となる人のプロフィールが書かれていた。
しかも、写真つきなのですぐにわかった。

「あきにい。私この人知っている」
「まあ、そりゃそうですよね」

―バーン！！

「なになに？見せて見せて！！」

そのとき、いきなり美紀が庭につながるドアからあけて入ってきた。

「お引き取りください」

晃は冷静にそう言ってドアを閉めようとした。

もちろん美紀も抵抗した。

結果、力の差で美紀が勝利した。

「しばらくこのパターンは無いと思ってました」

「ふふふ。甘いのだよアッキー」

美紀はどこから出したのかは知らない付け髭をつけていった。

「さて、真。どうします？いろんな意味で」

晃はすぐに真のほうに向いた。

「それってわたしも含まれている？てか無視しないでよ！！」

残念ながら晃のこの言葉は美紀のほうにも含まれていた。

「それで、どうしたの？」

「聞きたいのならまずその髭とってください」

「りょうかーい」

美紀は速攻で付け髭を取った。

「あ、これがさっき言っていた新住居人だねって」

「そうですよ。瑞希と沙奈です」

そう。そのプリントには瑞希と沙奈のプロフィールだった。
晃は一回ため息をついてから瑞希に電話した。

『はい。もしもし。先輩？どうかしたのですか？」

鴨が引っかかったようだ。
だが、晃は少し優しく追いかけた。

「瑞希。今日新住居人になるかもしれない人のプリントが来たのですよ」
『あ、ちゃんと来たのですね。良かったです』

完全に現行犯である。
ここで逮捕したいところだが、科学都市で何かあったかもしれない。
晃はさらに問いかけた。

「なにか問題でもあたのですか？」
『こっちには無いのですが、先輩になら問題はあります』
「どういうことですか？」

晃の声が少し真剣になった。

『聞いた情報だと、先輩はダイヤディズを手に入れたそうですね』
「ええ。偶然ですが」
『それを狙っている科学者さんがたくさんいて、これからもたくさんそちらにくると思うのですよ。元々、いま先輩がいる土地は電波関係でいいのですから』
「つまり、今回のこれは【団殺者（ディスター）】関連ということですか」
『さすが先輩です。そのとおりです』

晃はまともな事情だったので声を元に戻す。

「で、このメンバーはなんとなくすぐに決まった感じがするのですが」

『にゃはは。またまた察しがいいですね。たぶんそれは正解です。沙奈ちゃんがやはり先輩以外の言うことをあまり聞かなくってこれを機会に先輩のところに行かせることになりました。ボクは学校のことがありますのでサポートとしていきます』

「そうですか。わかりました。そういう事情なら引き受けます」

『はい。それではまた会いましょう♪』

そう言って瑞希は電話を切った。

「……ボク？」

ただ、晃には最期の瑞希の第一人称が気になっていた。

たしか前は私といっていたはずなのだが。

なにやらいやな予感がする。

「あきにい。どうやら事情は決まったようだね」

「そうですね。では明日みんなに集まってもらいます」

「「へ？」」

完全に二人はいやな予感がした。

※

次の日の朝。

全員3階の廊下にいた。

「そういうことなので、これから5号室と6号室の掃除を始めます。決して前回の2の舞にならないようにしてください。透」

晃の言葉と同時に全員の目線が透に集まる。

「ちょっとまて。なぜに名指し」

「いや、透しか2の舞になる人がいないから」

真が晃の変わりに説明した。

透は当たり前のことを言われて何もいえなかった。

「では、始めますよ。僕は5号室。真、美紀、結衣、今宵は6号室。透は庭の草むしりをお願いします」

「俺の掃除なのか!?」

みんながうなずく中、透のみ否定した。

だが、そんなことは時間的に無視してさっさと始めることにした。

ちなみに晃一人でやる理由は説明しなくってもいいだろう。

「今日こそアッキーに勝つぞ!!」

美紀は気合が入っていた。

実はもじ掃除が早く、しかも綺麗にできれば食い物をおごってくれる約束になっているからだ。

ちなみに晃にはなんの得はない。

「そうね。5人ならできるよね」

「さっさとやっちゃお!!」

「そうだな」

草むしりの透をほっといて女子たちは団結していた。
だが、この戦いは1時間で終わった。
勝者、晃。

そのことを聞かされた4人は一気に脱力した。
もちろん手を抜くどころかものすごく綺麗なのだ。

「相変わらず器用なやつだな」

今宵が驚きながら言った。

「お前らちゃんとしろよ」

透がいきなり声をかけてきた。

「透は終わったのですか？」
「いや、まだだけどいいだろ」
「晃。火の準備はできているぞ」
「ちょっと待て！！何を燃やす気だ！！」

いや、もう何を燃やすのかは決定している。

「でもよ。あんなのを一人でって」
「いや、機械ありますよ」
「早く言えよ！！」

機会好きの晃のことを考えればすぐにわかることであった。
こうして自由荘に新たなる住居人を出迎える準備はできた。

第１１７話　新住居者（後書き）

後書きトークコーナー！

晃「今回は久しぶりにコメディパートでしたね」

真「久しぶりにこの調子なので作者が麻痺気味」

結衣「まあ、わかるような気がするわ」

美紀「でも、とうとう１年生編も終わりだね」

今宵「これらも応援よろしく」

透「あれ？俺のセリフは？」

第１１８話　集まりました（前書き）

前回のあらすじ

新たな住人を向かいいれます。

第118話　集まりました

晃たちは東皆丘駅の元にいた。
今日は瑞希と沙奈がこっちに引っ越してくる日なのだ。
今いるメンバーは自由荘の住人だけ、つまり幼馴染ズだけだ。

しばらくしてから大きな荷物を持った女性2人が現れた。

「お久しぶりです。先輩♪」
「会いたかったです。お兄様」

元気良く、瑞希と沙奈は挨拶をしてきた。

「2人とも良く来てくれましたね」

晃たちは笑顔で歓迎した。
瑞希たちも笑顔で返してきた。
どうやら2人は元気があって本当に良い。

立ち話もなんなのでとりあえずは自由荘まで歩いていった。
晃と透の男子の2人は瑞希と沙奈の一番大きい荷物を持った。
悪意は無いのかあるのかわからないがなぜか透の荷物はものすごく重かったらしい。

自由荘に着いたらとりあえずは優輝家に2人を入れさせた。
つもる話もあるかと思うし、少しは休ませたいと晃は思ったのだ。

「とりあえずは瑞希と沙奈はどっちの部屋に住みますか？といっても5号室と6号室しか開いてませんが」

晃は申し訳なく言った。
だが、美紀がとりあえず決めるだけなのにいきなり火をつけるようなことを言い出した。

「ちなみに5号室はアッキーが掃除したんだよね」
「先輩が！？」
「お兄様が！？」

完全に2人に火が付いてしまった。
火をつけた当の本人はにこやかに笑っている。
これが天然というものだった。

「先輩！！ボクが5号室に住みます！！」
「お兄様。私が5号室に住みます」

2人の言葉が交差したとき、どこかしらコングの音がなったような気がした。

「瑞希。私の邪魔をしないでくれる？」
「それはボクのセリフだよ」

2人は完全にいがみ合ってしまった。

「美紀。なんでこうなったのか説明してもらいましょうか」
「あ、あれ～？」

完全に自分が墓穴を掘ったことを今知った美紀だった。

「はいはい。どちらも同じところがいいのならじゃんけんで決めて

ください」

晃が手を叩きながら言った。
だが、完全に眼は呆れている。

「は、はい」
「お兄様が言うなら」

だが、このじゃんけんはなんと２０分ぐらい続き、勝利したのは瑞希だった。

「やった勝ちました先輩！！」
「そうですか。ではまず部屋を案内しますね」
「スルーですか！？」

晃の行動に瑞希はツッコンだ。

「そういえば瑞希。おもったのですが」

だが、急に晃は瑞希に振り向いた。
しかし、瑞希はもうすでに晃の背中に抱きつこうとしたのだが、体ごと振り向いたので完全に腹に抱きついてしまった。

「み、瑞希！？」
「せ、先輩」

瑞希は上目づかいで何かを伝えようとしたとき、いきなり背中になにかの殺気を感じ取った。

「瑞希ちゃんだっけ。なにやっているのかしら」

瑞希の後ろには笑顔で立っている結衣がいた。
だが、晃にはわかっていないがものすごい殺気が瑞希を捕らえていた。

「離れてくれないかしら。荷物か運べないでしょ」
「は、はい」

瑞希はすぐに晃から離れた。
結衣は晃たちの横を通っていった。
もちろん、荷物はちゃんと運んでいる。

「そういえば先輩。なにか聞きたいことがあったのでは？」
「ええ。瑞希はまえ第一人称は「私」でしたよね。なんでいきなり「ボク」にしたのですか？」

晃はさっきまで疑問に思っていたことを聞いた。

「それは簡単な話です。ボクはさらに先輩に憧れたからです」
「はい？」
「それだけです」

そう言って瑞希は階段を上り始めた。
残った晃はいまいち意味がわからない顔をしていた。

※

晃は沙奈の部屋に行き、最後の荷物を部屋に置いた。

「これで終わりですね。みんなお疲れ様です。僕の家でお茶でも飲

みましょうか」

全員了解といってきた。
そしてその夜はみんな優輝家に集まった。

「しかし、このアパートにもとうとう全部屋が埋まる日がくるとわな」

今宵が冗談交じりに言った。
だが今宵の言うとおりである。
今までこのアパートには彼女ら以外住んだことは無いのだ。
前にも言ったとおり、この町は田舎町なので都会に行くものは多いが、こっちに住みにくる人などめったにいないのだ。
それなのにアパートを経営していたらさすがに人は集まらない。

「しかし、全員高校生しか住んでいないと、いつかニュースになるかもね」
「そんなニュースお断りだな」

真を透が笑いながら言った。

「ですが、そっちのほうがいいですよ。知らない人といるよりも、知っている人とほうが何倍もいいですよ」

晃は微笑みながら言った。

「さすがアッキー！！いいこと言った！！」

美紀ががしっと晃の肩を抱く。

「苦しいです美紀」

晃はそういって美紀の腕から逃げた。
そのあと、お茶を入れなおすために台所まで行った。

同時にそんな晃を見て結衣もついていった。

「手伝うわよ。アキ君」
「結衣。ありがとうございます」

晃はお礼を言ってお茶を入れ替え始める。
結衣は新しくお茶菓子を取り出す。

「アキ君。なんか楽しそうね」
「そ、そうですか？」

結衣に言われて晃は驚いた表情になった。
だが、結衣はものすごく笑顔だった。
どうやら理由が聞きたいらしい。

「やっと、全部の部屋に人が住めたことがうれしいのですよ」
「なんで？」
「両親のこのアパートを建てたときの夢だったのですよ」

お茶を入れながら晃は答える。
その顔はものすごくうれしそうな顔だった。
どんな人が見てもそう思う。

「そうだったの」
「そして、まだひとつの夢が続行中ですよ」

「もう一つの夢？」

結衣がそう聞いたとき、晃はいきなり結衣の頭に手をやさしく置いた。

最初は驚いた結衣だったが、途中そのうれしさと祝福に気づいた。

「君たちがここに残っていることです。大人になればみんなここを離れていくと思いますが、それでも今ここにいるのは変わらないのですし」

晃は微笑みながら言った。

結衣の顔は少し赤くなった。

（ああ。もうすこしこのままでいたい）

だが、結衣のその願いは一瞬で壊れた。

全員もうすでに壁に集まっていまの会話を覗き見していたのだ。

「あれ？どうしたのですか？みん――ごふ！！」

晃がそう聞こうとしたとき、いきなり腹に衝撃が走った。

「先輩！！ボクも頭をなでてください」

犯人は瑞希だった。

「あきにい。私も」

「お兄様！！」

たった一瞬の行動が自分の身を滅ぼした晃だった。

第118話　集まりました（後書き）

後書きトークコーナー！

瑞希「改めて自由荘の住人になりました。瑞希です」

沙奈「……」

晃「ほら、沙奈も挨拶してください」

沙奈「沙奈です。よろしくです」

瑞希「相変わらず先輩の言うことしか聞かないね」

沙奈「お兄様以外の言うことなんて聞きたくはない」

晃「何とかしたいですね。大人になったらそんなことになったら困りますし」

瑞希「先輩もいろいろと変わっていないですね」

第１１９話　新学年の準備（前書き）

前回のあらすじ

新住人さん。いらっしゃ～い。

晃「最期の最期にパクリですか」

第１１９話　新学年の準備

とうとう、明日は始業式になるその日。
晃たちは相変わらず家の中にいた。

結衣は自分の部屋で制服を着ていた。

大きさとか綺麗さとかの確認である。
結衣は鏡をみて確認する。

「うん。ＯＫね」

結衣はそう言って制服を脱ぎ出した。
スカートを脱ごうとしたとき、いきなり部屋のドアがいきなり開いた。

「結衣ちゃーん！！なんか科学都市から来たものがあるんだって！！だから一緒に行こう！！」

―パアァァァン！！

結衣は一瞬にしてハリセンで美紀の頭を叩いた。
怒りのせいでものすごいいい音が出た。

「痛いよ～結衣ちゃ～ん」
「痛いじゃない。なんでノックもしないで入ってくるの！？」

結衣は自分の体を腕で隠しながらツッコンだ。

「ごめんね。結衣ちゃん。でも科学都市からの届けものって聞いたらすぐに伝えたくなってね」

美紀は頭をかきながら言った。

結衣はそのとき、ため息をついた。

「で、なんで結衣ちゃんは裸なの？しかもそれ制服だし」

「制服チェックよ。明日から学校だし」

「あ、そうか」

「気づいていなかったの！？」

※

美紀と結衣が優輝家に着いたときにはもうすでに全員そろっていた。

晃は大きなダンボールを探っていた。

「アキ君。ずいぶん大きなダンボールね」

「ええ」

「さっきから面白いのとどいているよ」

真が晃の変わりに結衣に話しかけた。

美紀も真の話に耳を傾ける。

「たとえば新作の料理器具とか」

「すごい機能があったぞ」

「たとえば？」

結衣の言葉に真と今宵は腰に手を当ててさっき届いたフライパンを手に取った。

「なあんとこれは！！」

今宵が期待させるようにフライパンを持ちながら一回転した。

「伸びます」

……。

「それで？」

「それだけ」

そんなにすごい機能ではなかった。

それ何のなぜにこんなに自信満々に言えたのだろうか。

「さて、次のダンボールをあけましょうか」

「先輩。一体何箱届いたのでしょうか？」

「２箱です」

晃は瑞希の問いに答えた後、２つ目のダンボールを空けた。

そして、晃は不思議そうな顔をして一つの服に手をかけた。

それは東の丘学園の制服だった。

それだけ聞けばおかしくは無いが、なんとその服は女子の制服なのだ。

晃は感づいたのか瑞希と沙奈に目線を合わせた。

「これ、２人の制服ですよね」

ギクッという効果音が聞こえるみたいに２人は肩が動いた。

「せ、先輩。すみません。ボクたち実はいつ制服がくるのかわから

なくって」
「お兄様お許しください」
2人はそう言って晃に抱きついてきた。
「別にいいですが、って、いいから離れてください」
そう晃に言われて2人は離れた。
「でもなんで僕が手に取ったとき、なんか制服が届いたこと以外のことに売れしそうな顔をしていた気がしますが」
「き、気のせいです！！」
瑞希はあわてながら手を振る。
沙奈も否定するように首を振る。
「……。それならいいですが」
そう言って晃はさらにダンボールの中に手を入れる。
「あれ？そういえば沙奈の制服がありませんが？」
「私の制服も確かにその箱の中に入っているはずです。ですが、私のは東の丘学園の制服ではありません」
沙奈は丁寧に説明した。
晃はその言葉の意味がしっかりわかった。
「つまり、まさか沙奈制服って」
「はい。お兄様と同じ星道高校の制服です」

その言葉とともに晃は星道高校の女子制服を手に取る。

「まあ、意味はわかります。あ」

晃はそう言った後、もう一枚の服に手をとる。
それはまったく新しいデザインの男子の制服だ。
どうやら星道高校は制服のデザインを少し変えたらしい。

「ベストも新しいですね」
「そうだねアキ君」

こっちの会話に入ってきた結衣が言った。

「あれ？あきにい。これ」

ダンボールの中をのぞいた真が晃を呼ぶ。

「これ何？」

真が指差したのはなんか厳重に締まっている小さなケースだった。

「これはいったい」

晃がケースを持ち上げてみる。
あるのは一つの鍵穴だけだった。

「晃。この鍵持っているか？」

透が晃に聞いた。
だが、晃は首を横に振る。

「僕、家の鍵と、このアパートのマスターキーぐらいしか……」

そのとき、晃はなにかがわかったのか、いったんその場所を離れた。
そしてすぐに戻ってきた。
このアパートのマスターキーを持って。
晃はケースの鍵穴にそのマスターキーを入れた。
そして、開いた。

「やはり。この鍵穴はこのアパートと一緒の鍵穴でした」
「なるほどな」

今宵が感心しながら言った。
だが、そんなこと言っている間に美紀がケースのふたを開けた。

「ねえ。アッキーこれは何？」

美紀に言われて晃はケースの中を見る。
そこには、黒と赤の髪留め一つと、一つの赤のリボンが貴重に置かれてあった。

「これは一体」

晃一緒においてあった紙をとる。
しばらくして、晃は赤のリボンを手に取った。

そのとき、いきなりそのリボンが伸びだした。

「これは、電子を利用したリボンです。それを電子を使って伸び縮みするみたいです」

どうやらそのリボンには科学都市で作られた、電子を生活に利用するための試作品1号らしい。
使いよさを器用な晃に実験してほしいらしい。

「これは、結構いいものだと僕は思います」
「じゃあ、この髪留めは？」
「それもわかっています」

晃は少し笑った。
そんなことしている間にもう夕方になっていた。

第１１９話　新学年の準備（後書き）

後書きトークコーナー！

晃「ついに1年生編終了です！！」

美紀「オーイエー！！」

結衣「それで、今回を持ちまして「前回のあらすじ」は終了とします」

真「だけど、このコーナーは続くよね！！」

今宵「ああ。そして始まってしばらくしたらまた新しくキャラクター説明をするらしいぞ。いろんな設定ができたしな」

晃「これからも『Ｆｒｅｅｄｏｍ／Ｓｔｏｒｙ』をよろしくお願いします」

瑞希「2年生編もよろしく！！」

沙奈（こくこく）

第１２０話　２年への進学

桜が舞うこの季節。春がやってきた感があり、特に新入生にとっては大切な季節だ。しかし、この東の丘学園は今日は入学式ではない。だが、進級する学生にとってもこの季節は、今日は大切な日だ。

「ぬぬぬ」

始業式が始まる前、外に2，3年生のクラス分けが発表されていた。その発表されている板を結衣はガン見していた。

「ゆ、結衣？」
「な、何かなアキ君」

いきなり晃に呼ばれて結衣は驚きながら後ろを振り向いた。晃の制服は相変わらず星道高校の制服を着ている。だが、ベストは前とは違うものを着ている。これが科学都市から来た制服だという。さらに晃の左手首には赤のリボンと、前左髪には赤と黒の髪留めがつけていた。

「アッキー。結衣ちゃんとわたしと同じクラスだよ！！」

その時、美紀がいきなりクラス分けを言ってしまった。結衣の後ろに黒いオーラを立てていた。美紀はそのオーラに気づいて真っ青になっていた。もちろん晃は気づいていない。

「そうですか」
「うん。１組だよ」

そういわれて晃は1組の名簿をみる。そこには知っている名がたくさんあった。伊織、大吾はまた同じクラスだった。さらには泉と渚とささらとも同じクラスになった。

「なんだかにぎやかそうなクラスになりそうね」
「結衣。2組ほうもみてください」

晃にそういわれて結衣は2組の名簿を見た。そこには真、今宵、透。さらには舞と花火、泰子もそのクラスだった。

「まさかこれって」
「私たちの知り合いが全員1組と2組に集まっているね」

結衣の言葉を真がつなげた。どうやらそちらもクラス名簿を見終わっていた。

「そうですね。偶然ですかね」
「う～ん。しかも担任のせいでそう思えなくも無いのだけど」
「ん？」

改めてクラス名簿を見る。そこには川本玲奈の名があった。

「玲奈さんですが。確かにそう思いますね」

玲奈は音楽学科の顧問の一人である。ほかにも晃たちの知り合いの由佳の親友でもある。そのために晃以外のメンバーは面識も多い。

「なんか楽しそうなクラスになりそうですね」

※

始業式が終わり、みんな自分の新しいクラスに来ていた。

「お～す晃。今年もよろしくな」

教室に入ってきたら大吾がいきなり晃の肩をガシッと組んできた。

「よろしくね。晃君」

その横に伊織がいた。伊織はにこやかに笑っていたいたが一瞬にして大吾の横腹を蹴り飛ばした。大吾はそのまま壁にぶつかった。

「私も一緒です晃さん」

「これからもヨロシク～アキ！！」

ささらと泉も挨拶しに来た。その後、いきなり晃の背中に小さな衝撃が来た。

「あ、晃さん」

「あ、渚ちゃん」

突撃しに来たのは渚だった。渚はそのまま晃の背中にくっついたまま話を進めた。

「同じクラスでうれしいです。これからもよろしくお願いします」

「こちらこそ。渚ちゃん」

渚の笑顔の一言を晃も笑顔で返す。回りのメンバーはそのやり取りを不愉快に見ていた。

「晃さん。私ともっとお話してください」
「ダメッ!!アキ君は私ともっと話するの!!」

左にささら。右に結衣が腕にしがみついてきた。いきなりのことだったので晃は驚いている。

「あ、わたしもアッキー!!」
「あしもあたしも!!」

それを見た美紀と泉がいきなりこっちに来た。さらに背中にいる渚もさらに強く抱きしめる。晃はわかっていなかったが、ここには女の戦いがここにあった。

「あ〜き〜ら〜」

その時、後ろから大吾の声が聞こえた。晃はすぐに後ろに振りかえる。

「あ、大吾。助けてください!!」
「なに一人でいい思いしているんだよ!!!!!!!」
「ええ!!」

晃の言葉をかき消すように大吾で叫びだした。さらに回りの男子生徒がぞろぞろと来る。

「お前、なにこの学年の美少女たちに抱かれたりしているのに助けを求めている」
「そ、そう言われましても」

ものすごい勢いの大吾に晃の声は小さくなっている。

「俺たちの夢の中の夢だというのによ！！」

大吾はさらに大泣きで言う。回りの男子もうなずくものもいれば、怒りだしているものもいれば、ハンカチを口にくえているものもいる。てか、その悔しがり方は古い。

「ちょ、皆さん離れてください！！」

晃がそう言っても女同士の戦いに忙しいのでまったく声が聞こえていないようだ。

「ここか！！」

その時、いきなり大吾が誰かに殴られて吹っ飛んでいった。大吾はそのまま壁にぶつかる。

「いたな！！優輝晃」

そこには金髪のポニーテールの少女がいた。片手にはグローブをつけている。

「だ、誰ですか？」

「私の２年１組、星平沙羅（ほしひらさら）だ！！」

拳を晃に突きたてながら沙羅という少女は名乗った。回りの男子はいきなりその少女を見て驚くどころか怯えていた。

「お、鬼の風紀委員の金色の悪魔だ！！」

「き、金色の悪？」

男子生徒の叫びに晃は頭に?マークを浮かばせていた。

「いいから勝負だ優輝晃!!」

沙羅はいきなり拳を振ってきた。だが、今の晃は回りの少女たちのせいで身動きが取れない。

「いつまでみんなくっついているのですか!!」

晃はそう叫びながらその状況でできる行動に移った。

「【電脳子ノ帯状布(デジタル・リボン)】」

いきなり晃の左手首についているリボンが少し大きく、さらに伸びて晃の体を守った。

「やるな!!」

「いきなりなんですか」

始業式の日。いきなり謎の少女(?)に襲われた晃であった。

第１２０話　２年への進学（後書き）

後書きトークコーナ！！

晃「と、言うことで後書きトークコーナ！がさらに「！」が付いて新しくなりました」

美紀「でも、いきなり新キャラなんて驚いたよ」

結衣「それよりも、結構今までのキャラが同じクラスになっちゃたし」

真「それでもまたあきにいとクラス分かれちゃった」

今宵「まあ、それでも近いほうだな」

透「それよりも俺のセリフが」

作者「あ」

晃「作者も忘れていたそうです」

透「なんじゃそりゃ～！！」

第１２１話　クラス委員

沙羅はいきなり晃に殴りかかってきた。しかし、晃も手首についていたリボンで防いだ。

「は～い。ここまでよ沙羅」

その時、誰かが沙羅の頭にチョップした。その少女は髪が薄い紫のショートヘヤーで、落ち着いた印象だ。そして、晃もその少女のことを知っている。

「桜さん」

「どうも、優輝君」

その少女の名前は桜栞だ。彼女は風紀委員の一人だ。

「ちょっと、塩！！何をする！！」

「何するじゃないでしょ沙羅。いきなり勝負しようとして。あとその呼び方はやめて」

そんなことを言われて沙羅は頬を脹らませながら「うー」とうなっている。

「てなわけで、これから同じクラスとして沙羅ともどもよろしくね。優輝君」

「は、はあ」

そう言って栞は沙羅の襟首を持って教室から出て行った。晃の周りにいた女子たちは何が起こったのかわかっていなかった。晃はた

だため息をはくだけだった。

「い、今のは」

「有名な風紀委員のコンビよ」

伊織が晃の言葉に答えてきた。

「風紀委員コンビということは、星平さんも風紀委員ですか？」

「そういうことよ」

晃は確かの今の会話はなにか慣れているものだった。そして、晃にはそれ以外のことも謎に思っている。それは星平沙羅という名だ。

（すこし調べてみる価値はあるかもしれませんね）

そう考えていたとき、チャイムが鳴り響いた。そのあとすぐに玲奈が教室に入ってきた。後ろのドアからさっき出て行ったはずの栞と沙羅も教室に入ってきた。

※

黒板に張り出された席を頼りにみんな席に着いた。晃の苗字は優輝なので後ろのほうの席だ。まあ、番号で言うと最後な分けではあるが。晃の隣は波木ささらだ。

「よろしくです。晃さん」

「こちらこそです」

その時、何名かの視線を感じたが晃は無視した。

「と、いうことでこれでみんなの新しいクラスの担任になった。河本玲奈(こうもとれな)です。とりあえずは最初はクラス委員を決めたいのだけど。1年生と同じで小方さん。やってくれる？」

「はい。わかりました」

玲奈の言葉に伊織は嫌な声一つしないで許可した。だが、次の問題は男子のクラス委員だった。クラス委員は男女1名づつなので女子のみ決まっても意味は無い。ちなみにこの中で去年クラス委員をやった人はいない。

「う～ん。困ったわね」

そう言っていた玲奈だが晃の顔をみてパッと明るい顔になる。

「そうだ。晃君にやってもらうっていうのはどう？」

玲奈が笑顔で晃の名前を言った。その言葉とともに男子生徒の恨んだ睨みとともに晃に届いた。

「ねえ。お願いできるかしら晃君」

「そ、そんなこと言いましても僕は生徒会があるので」

「あ、そうかそれは残念」

本気でしょんぼりした玲奈にさらに男子生徒の怒りを買ってしまった。もちろん、鈍感な晃は気づいていない。

「じゃあ、俺がやる」

その時、一人の男子生徒が手を上げてきた。その生徒は結構有名な生徒だった。名は柄原健太郎(がらはらけんたろう)。晃が来るまでは男子生徒の中で一

番の秀才であり、運動神経もいいことで有名でしかもと並ぶイケメンでもある完全なる勝ち組といえる人間だ。

「そう！！じゃあ柄原君にお願いするね」

「はい」

「じゃあ、今日のこの時間のＨＲは終わりね。次の時間は各自の自己紹介だから考えておいてね」

そう言って玲奈は教室を出て行った。玲奈が教室から出て行って、いつものメンバーが晃の下に来た。

「あ、晃さん。いつの間に先生に下の名前で呼ばれる中で」

ささらが怖い目で晃に言ってくる。

「れ、玲奈さんとは」

「玲奈さん？」

なぜか渚も少しこわばった声で聞き返してくる。

「アキ君。そんな」

「なんで渚ちゃんもそんな風に言っているのですか？あと、結衣は知ってましたよね」

晃は早くも訂正に入った。その時、さっき話題に上がった少年が話しに入ってきた。

「君たち、十分仲良しだな」

その少年とは柄原健太郎が言ってきた。

「どうも、なんかご迷惑でしたか？」
「いや、にぎわっているな～。っと思ってな」
「そうですか」

健太郎は爽やかに言ってきた。それを晃は自然に爽やかに返事した。

「おやおや、自覚ありの爽やか人と天然ジゴロ爽やか人のお話かな」

美紀が楽しげに言ってきた。もちろん天然ジゴロが晃のほうである。

「いいよな～。柄原も晃もモテて」
「そ、そうか？」
「僕、そう感じたこと無いのですが」

自身気に言う健太郎と違い、晃は本気で自覚がまったく無かった。

「それでな、これからのことだし、小方さんに少しお話しとこと思って」
「あ、私か。そうね。まあぼちぼちやっとけばいいのじゃないの」
「あなたは経験者ですよね」
「まあね。深く考えたこと無いから。それに困ったら晃君に任せばいいし」
「ちょっとまってください。さりげなく僕に無茶振りしましたよね」

晃にそういわれて伊織は小悪魔のように「テヘッ」っと下を出し

ながら言った。完全にわざとである。

「ほお、君はそれぐらい信用されているのか」

「まあ、会長の補佐を任せられるほどだしね」

美紀はそう言って腰に手を当てて胸を張った。

「なんで美紀がいばるのですか？」

晃はその美紀に対して呆れながら言う。

「そういえば、晃さんは生徒会補佐なのでほかの委員会に入る権利はあるのですよね」

ささらが言うとおり、生徒会はほかの委員会に入れないが、補佐である晃はクラス委員以外ならばほかの委員会に入れる。

「そうですね。とりあえずは自分が好きなものがたくさんある場所がいいですね」

「っと、いうことは保健委員か」

大吾は手にあごを当てながら言う。

「大吾。僕はその言葉に悪意を感じるのですが。僕はいたって普通の図書委員に入ろうと思います」

「ほ、本当ですか？」

晃の言葉に渚が静かに驚いた。

「わ、私も図書委員になるつもりでした」

「一年のときもそうでしたからね」

渚に向かって晃は微笑みながら言う。

「じゃ、じゃあ私も図書委員に」

結衣は危機感を感じて手を上げる。

「確か特待生は委員会に入れなかったのでは」

「うっ！！」

晃の的確なツッコミに結衣は黙った。

第１２１話　クラス委員（後書き）

後書きトークコーナ！！

晃「今回は新キャラが続出でしたね」

渚「桜さんは前にも出ていましたが今回は本格的な登場でしたね」

ささら「そういえば、今回の２人はヒロイン候補だったりして」

晃「実際、桜さんは決まっていますよ」

渚「感想によって決まりますね」

ささら「もしかしたら、感想によってヒロインになるキャラもいるかもしれませんね」

晃「そうですね」

泉「敬語だらけの会話だな」

感想、本気でお待ちしています。ｂｙ作者。

第１２２話　新クラスの自己紹介

次の時間は自己紹介だった。だが、意外とこのクラスは一緒だった人が多く、生徒は自己紹介は必要ないと思っていたが、今回は新しい担任なのでそこは考慮した。

「それでは出席番号順でよろしくね」

つまり、この時点で晃の紹介が最後になった。

「晃さん。がんばってください」

「が、がんばります」

隣の席のささらは手でガッツポーズをして言った。晃はため息を静かに吐いた。

「じゃあ、次は2番の美紀ちゃん」

「は～い。一之瀬美紀です。みんなよろしくね。住んでいる場所はアッキーが大家として経営しているアパートです」

その言葉のあと、みんなざわついた。

「おい、アッキーってだれだ」

「俺、前も1組だったからわかるのだけど、優輝のことでそれにほぼアポートと実家はまっ隣だから」

「マジかよ」

美紀はものすごいわざつきを残して自分の席に戻った。その時から何名かの男子ににらまられた。それから次々に自己紹介が続く。

そして、晃とさっき話した少女の出番が来た。

「桜栞です。一様風紀委員に属しています。これからもよろしくお願いします」

栞は一礼してから自分の席に座った。見るだけでは風紀委員みたいなオーラはみえない。てか、ほかの風紀委員のキャラが濃すぎるのか、彼女が本当にまともに見える。いや、そうでもなくともまともに普通だ。

さらに時間は進み、結衣の出番が来た。

「羽衣結衣といいます。よろしくね」

結衣はにっこりして微笑んだ。それが男子生徒に火をつけた。

「やった!!羽衣さんと同じクラスだ!!」
「これは最大の祝福!!」
「俺なんて2年目だ!!」

男子生徒はそんなことで自分の幸せを感じていた。だが、結衣の自己紹介はそれでは終わらなかった。

「美紀と同じで私も同じアパートに住ませてもらってます。良かったら一回見てきてね」

美紀のお返しばかりと爆弾発言をしてから結衣は自分の席に戻った。男子の恨みの視線がさらに増えて＋増してさすがにこの重大差がわかった晃はだらだらと汗を流し始めた。

「な、なんで僕がこんな目に」

晃は少し泣きそうな気持ちになった。てか、大吾も一緒にこっちをにらんでいる。あんたは知っているでしょ。

次に結衣に続いて渚の自己紹介になった。

「ふ、藤森渚です。よ、よろしくです」

おどおどしながら渚は言った。男子生徒はお決まりのように声を上げた。

「藤森さんもこのクラス！！」
「これは神のみぞ知るいたずらか！！？」
「これはもう死んでもいい！！」

最後の人、命は大切にしましょう。この声のせいでさらに渚はおどおどしてしまった。そして、いつものように、てか、いまこれは自己紹介のことを忘れているのか、渚は晃の下に来た。

「あ、晃さん」

渚は少し泣きそうな顔で晃の後ろに隠れた。本当に晃以外に男子生徒とは話したことは無いようだ。それどころか渚は男子は苦手みたいだ。

「な、渚ちゃん！？」

その言葉と行動により男子生徒の目がものすごく光った。そして、大声をほとんど全員上げだした。

「このやろう!!貴様は藤森さんとファーストネームで呼び合う仲なのか!?」
「は、はい」
一番近くの男性とに聞かれてその迫力に負けたのか晃はうっかり返事してしまった。てか、目が血走って怖いです。
「あ、晃さん」
さらにその顔に怖がって渚は晃の腕に引っ付いて顔を隠そうとする。その行動にとある女子たちの火をつけたようだ。
「晃さ~ん。なにしているのですか?」
まずは隣の席のささらが。
「ア~キ~」
「アッキー。楽しそうだね」
「私だって私だって」
怖い言動をしながら泉、美紀、結衣がこっちに来る。ものすごく怖い。
「4人とも落ち着いてください」
「ふ、ふぇ!!」
さらにこの4人を見てしまって渚は晃の胸で顔を隠す。
「アキ君!!」

「僕、何もしていませんよね。てか、なに泉はさりげなく棒を取り出しているのですか？」
「いや、お仕置き♪」

晃の問いに泉は笑顔で答えた。

「笑顔で言わないでください」
「晃さ～ん」
「ささらはそれ以外になにか言えないのですか？」

男子生徒までこっちに来てしまってさらに自体が複雑になっていった。ここで回避できる魔法の言葉は果たしてあるのでしょうか。

「おーい。まだみんなの自己紹介が残っているよ」

その時、救世主のごとく玲奈がみんなに声をかけた。みんなさすがに特に女子は先生の話を無視するわけにもいかないので静まった。男子生徒も玲奈の言葉に反応してしぶしぶ自分の席に戻った。だがもちろん晃に対してのにらみは終わらない。

「さて、とりあえずは藤森さんはこれで終わりでいいわよね」

玲奈の言葉に渚はうなずく。

「じゃあ、次の人」

何とかこの騒動は終わった。そして、さらに1人はさんで晃とさっきかかわった人が自己紹介する。

「星平沙羅だ。風紀委員だ。私に勝負したいものはいつでも来い。

特に男子、さらには優輝晃なら大歓迎だぞ」

そう言って沙羅は自分の席に座った。てか、さりげなく最悪の言葉を残したことは気にしないことにしたい。さらに時は経ち、ささらの紹介だ。

「波木ささらです。生徒会会計です。同じ補佐の晃さんともどもよろしくお願いいたします」

そう言ってささらは戻ってきた。

（僕のことは言わなくっても）

晃はそう思ったが言葉には出さなかった。

「源泉だ。よろしく！！」

一つ開いて泉の紹介になった。めんどくさいのかこれ以上はなにも言わないで自分の席に戻った。そして時間が来てとうとう晃の出番だ。

「優輝晃です。分け合ってこの制服ですが、これからもよろしくお願いします」

晃はそう言って自分の席に戻る。男子生徒はにらみ続けて、女子生徒はもっと知りたそうな顔をしていた。とりあえずは、晃にとってこの時間は今日一番疲れたのであろう。

第１２２話　新クラスの自己紹介（後書き）

後書きトークコーナ！！

晃「この話は多分、ほとんどが僕に死におかけた話ですよね」

ささら「気のせいです」

晃「隣のあなたがさり気なく怖かった記憶があります」

渚「ごめんなさい。私のせいで晃さんをひどい目に」

晃「あ、別にいいですよ。仕方が無いですよ」

ささら「そのやさしさと態度が自分を危険に誘い込んでいるとわかっていないからずるいです」

晃「ん？何か言いましたか？」

ささら「な、何でもありません」

渚「晃さんはやさしい」

第123話　2種類の入学

そんなことで2年生になっての初日の放課後になった。晃はなぜかものすごくげっそりした顔になっている。理由は、前回を見ればわかる。

「な、なんで初日でこんなにならなければならないのですかね」
「アキ君。リアルで疲れているね」
「あきにい。本当に何が起きたの」

帰る前に2組の真たちと合流した。真はこんな晃を見て話を聞く。

「晃さん。本当にすみません」

ちなみにいまここには幼馴染ズ以外に渚、伊織、大吾、花火がいる。渚は相変わらず泣きそうな顔で謝っている。

「な、渚ちゃんが悪いのではありませんから大丈夫です」

そう言って晃は渚の頭を撫でる。しかし、晃は火に油という言葉を知っているのだろうか。

「晃君。君は本当に2年になっても変わらないのだね」
「へ！？」

伊織の言葉がまったく意味がわかっていない晃の後ろで何名か目を光らせていた。しかし、その光はものすごいどす黒い色だ。

「なにか、嫌な予感がしますので早く帰りましょう」

晃はさりげなく回避をした。みんなそのまま晃についていく。

「しかし、あきにい。生徒会に呼ばれないの？明日は入学式だけど」

真が教室に出たとき、いきなり話題を振ってきた。

「そうですね。まあ、まったく連絡が来ないので来なくてもいいのではありませんか？」

晃がにこやかにそう言ったとき、いきなりギアに着信音が聞こえた。もうすでにこの時点で誰か、何の内容かわかった。晃は一瞬でわかりましたといってみんなに向き直った。

「あ、あきにいさん？」

「ゴメンナサイ。みんな先に帰ってください。僕は生徒会です」

にこやかにそう言ってものすごい速さで晃は生徒会室に行く。女子はそのままため息を吐いた。

「まこちゃんがあんなこというからああなってしまいましたね」

「む、なんか私が悪いみたい」

花火の言葉で真は頬を脹らます。怒ってはいるがなんかかわいい。花火は冗談ですといってそのかわいい顔を堪能した。

「あれだね。うわさをすればなんとか」

「影ですね。晃さんといるとこういう現象が結構多いですね」

美紀の言葉に渚はにこやかに言う。まあ、そうしなければ小説は続かない。

「アキ君。明日からまた大変そうね」

「たしかに、あれだもんね新入生歓迎会があるからね」

この学園では新入生歓迎会というものがある。日は入学式から一週間後。生徒は3学期から始めるものもある。それに特待生からも発表者が出る。とくに音楽学科はこの日も大切なものだ。

「たしか、そっちは結衣ちゃんが2年代表でやるのだよね」

「それは美紀もでしょ」

結衣と美紀はセリフのとおり、2年の代表として発表する。音楽学科は科によって1学年2名を選んで発表するのだ。

「まあ、お互いガンバロ。結衣ちゃん」

「もちろんよ美紀」

2人はお互い笑い会った。

※

「とりあえずは晃はこの書類を頼む」

生徒会室にきた晃はいきなりプリントの山を机の上に置かれた。

「す、鈴さん。これは？」

「ん？それは新入生歓迎会の資料や報告書。基本会長と書記がやるものだけど、静音は資料に目を通すのが苦手でね。代わりに補佐

のあんたがやるの」

静音は完全な天才の会長であるが、どうやら資料とか報告書の整理は苦手みたいだ。

「晃さん。ともにがんばりましょう」

前で書記のささらがにこやかに言う。どうやら晃と同じ仕事ができることがうれしいらしい。

「では、私はお茶を入れますね」

静音はお茶の葉っぱが入ったケースを持ってわくわくしながら笑顔で言った。

「いや、それは本来僕の仕事では？」

完全に立場が逆である。だが、その行動を防ぐように鈴が静音に言う。

「コラコラ。私たちはこれから体育館で明日の入学式の準備でしょ」

そう言って鈴は静音の肩をつかむ。そのまま泰子と琴実とともに生徒会室をでた。

「え～私アキ君と一緒にいたい～」

「はいはい。終わってからね」

静音の嫌がる声とそれを阻む鈴の声とともに４人は体育館に向か

った。

「晃さんも大変ですね」
「いや、な、なんと言えばいいのですかね」
「ふふふ」

晃の言葉にささらは微笑む。

（やりました。これで晃さんと2人っきり）

しかし、ささらの心の中はフィーバーしていた。
しかし、鉄の感情で表には出さない。

「あ、あの～晃さん」

ささらが何かを聞こうとしたとき、生徒会室のドアがノックされた。

「はい」

晃は返事をしながらドアを開ける。そこには一人の女子生徒がいた。

「すみません。少し人手がほしくって誰か来てくれませんか？」

どうやら新入生歓迎会の準備のことだろう。

「わかりました。ささらさん。僕行って来ますね」
「あれ？でも資料とか」
「4分の1終わらせましたので大丈夫ですし、すぐに終わらせま

す」

そう言って晃はその女子生徒とともに生徒会室に出た。しかし、いままでの隙にいつの間に4分の1も終わらせたのだろうか。ささらはそれが不思議で仕方なかった。

※

しばらくして晃が生徒会に戻ってきた。晃は「ただいまです」といって自分の席に座って仕事をする。

「晃さん。あの～少し聞きたいことがありまして」

しばらく時間が経ってささらは改めて晃に問う。その時、晃が「なんですか？」という前に生徒会室にノックの音がした。

「あの～パソコン部ですが、優輝君がここにいると聞いたので」

次も女子生徒でしかも名指しだった。どうやら今日帰るメンバーの中での知り合いだろう。

「わかりました。半分以上終わらせたので僕は行って来ます」

「は、はい」

そう言って晃は再び生徒会室をでた。

※

晃はしばらくしてから生徒会室に戻ってきた。実際、一回帰ってきたが再びまた女子生徒からのお願いで出かけていた。

「ささら。なんか僕の資料増えていませんか？」
「知りません！！」
ささらはそう言って頬を脹らます。

第１２３話　２種類の入学（後書き）

後書きトークコーナ！！

瑞希「やっと次回でボクたちの出番だね」

沙奈「長かった」

晃「とりあえずは瑞希たちにとっては晴れ舞台ですからね」

沙奈「はい。お兄様はずっと私のことを見ててくださいね」

晃「えっと、その～」

瑞希「あ、沙奈ちゃんずるい。ボクだけを見てもいいですよ先輩♪」

晃「２人ともノーコメントで」

瑞希「まさかの一番の回避方法をされた！！」

沙奈「お兄様。ひどいです」

晃「次回は重大発表があります」

第１２４話　入学式

今日は入学式の日である。この学園の入学式は2年3年も全員出席することになる。特に、今回の入学式ではソラにとって特別な日でもある。それは科学都市にいた後輩とのまた同じ学園で通える日である。

場所は体育館。しばらくしてから新入生の入場になった。次々に新たな生徒が体育館に入場してくる。その中でも、沙奈の存在はでかかった。それもそのはずである。沙奈のYシャツのみ星道高校のものである。

しばらくしてからアナウンスが始めて生徒の名を呼ぶ。

「在校生代表、柊静音」

「はい」

先生に名を呼ばれて静音はステージに上がる。「

「新入生のみなさん――」

しばらくして静音の言葉が終わる。盛大な拍手が会場を包む。

「新入生代表、星平沙奈」

「はい」

先生の言葉に沙奈は静かに声を出す。実は沙奈は受験で一番の点数を誇った。そのことで新入生代表になった。

だが、沙奈は元々はやる気がなかったが、晃の一言により、沙奈はやる気を出した。そんなことがあり、沙奈はステージに上がる。

「今日私たちは――」

そして、言葉が終わり、また盛大な拍手で会場を包み込む。その後、順調に入学式は進んだ。

※

入学式は終わり、今日はこれで学校は終わる。明日から沙奈たちは自分たちの教室で学ぶのだ。

晃たちは体育館近くで待ち合わせしていた。

「あ、お兄様！！」

晃を見つけた沙奈は早速晃の体に抱きついた。

「あ、沙奈ちゃんずるいです。先輩、ボクもいいですか？」

「それよりも、２人はどうでした入学式」

「あ、綺麗なスルーです！！」

晃の行動に瑞希はツッコム。その後、生徒会メンバーが晃たちのところへ来た。

「お久しぶりです」

「あ、翔太さんのお姉さんです」

瑞希の言葉の後に沙奈は静かに頭を下げる。

「晃さん。また女の子ですか」

その時、昨日の事を気にしていたのかささらがぶっきらぼうに言った。結局、昨日増やされた資料はすべて晃が時間通りに終わらせた。しかし、ささらはまだ不機嫌だった。

「アキ君。またって何？」

結衣が笑顔で晃に迫る。

「いや、別に僕は頼まれたことを」

「晃さん、ずいぶん女性に人気ですね。昨日お願いしてきた人すべて女性でしたよ。あと、晃さんがいないときに園芸部からのも来ていましたよ」

そう、晃がいないとき、園芸部から願い事が来たのだ。内容はこの前のことでまた来てほしいということだった。このことでささらは怒ってしまった。否、嫉妬してしまったのだ。

「な、なんでこの状況でそのことを！？」

今のささらの一言によりみんな嫉妬の炎を燃やしてしまった。

「くそっ、なんでまた晃ばっかり！！」

大吾は相変わらず悔しがっている。

「あ、晃さん。ちょうど良かったです。すこし手伝ってくれませんか？」

その時、いきなり渚が晃のところへやってきた。そして同時に腕を組んできた。

「前期の図書委員で本の整理があるので晃さんに少し手伝ってほしくって」

「ええ。いいですよ」

晃は笑顔で了承した。お人よしなのか、ノーがいえない人間なのかまったくわからない状態だ。だが、鈍感なのはわかる。しかし、晃はいまこの状況をどうにかしたいところだった。晃と渚は急いで図書室に向かう。

「あれ？なんか体が」

少し体の重みを感じたのか晃は後ろを見た。そしてそこには沙奈が背中に引っ付いていたのだ。

「沙奈、いつの間に！！」

「あ、晃さん」

晃の声に渚は止まる。そしてその時、２人はあることを理解した。

「敵」

その時、沙奈はあっさり自分が思っていたことを言った。

「な、なんですか？いきなり」

「これじゃあ私のロリ系のポジションが」

「なんの話ですか？」

「だって私より背が低い」

普段ほとんどしゃべらない沙奈だが、晃のことになるとものすごく喋る。

「あ、晃さん。早く行きましょう」

「え、ちょっと渚ちゃん！！」

小さい体に引っ張られながら図書室の入り口に来たが、そこにはもうすでに静音が待っていた。

「し、静音さん？」

「来ましたね。アキ君」

「な、何で僕たちよりもあとに」

「私はここに来るまでの一番の近道してきましたから」

威張れることではないが生徒会長なら出来ることなのかわからなかった。

「静音さん」

「アキ君」

2人は静かに言葉を交わす。この時、晃を追っていたメンバー全員が集まった。

「仕事しますのでどいてください」

ここで晃の笑顔で呼びかける攻撃。果たして結果は。

「は、はい」

静音は顔を赤くして答えた。その瞬間、付いたメンバーはこけてしまった。ちなみに晃の今の笑顔は天然のものであるために意識はまったくしていない・だが、それだからこそたちが悪い。

「あ、優輝君発見!!」

その時、一人の少女が晃の名前を呼んだ。

「桜さん。どうしたのですか?」
「うん。実はねお願いがあるの?」
「おねがいですか?」
「うん」

栞は静かにうなずく。なにか深刻な問題なのか?

「実は沙羅と戦ってほしいの?」
「戦いって」

晃は少しそのことに手間取った。だが、少し考えたあと、一つの答えを出した。

「わかりました。星平さんのところへ案内してください」

晃はそう栞に言った。だが、晃には何か考えが合った。

「みんな、特に沙奈も来てください」

第１２４話　入学式（後書き）

後書きトークコーナ！！

晃「それでは重大発表をおこないます」

渚「はい。実はこの小説もついにお気に入り登録１００人を達成しました」

静音「さらにはＰＶももうすぐ２万を超えます」

ささら「これもみなさんの応援のおかげです」

舞「それで今回は人気投票をやります」

花火「ですが、今回投票はキャラでなく、今まで連載した話をの投票を行います」

瑞希「一人３話まで票を入れられます」

百合「締め切りは１０月３０日までです。票が集まらない場合はこの企画の破綻か締め切りを延ばすかもしれません。もちろん１位の話には話によって特別な話をします」

晃「皆さんのご投票をお待ちしてます」

一同「以上、敬語軍団でした」

晃「さりげなくそんな軍団が出来ていますね」（汗）

http://enq-maker.com/deWjOYx

第125話　星平

沙羅に呼ばれて晃たちは体育館の裏に来た。晃はみんなより一番前に来た。沙羅は腕を組みながらその場にいた。

「どうしたのですか？星平さん」

「簡単な話だ。勝負しろ」

完全に単刀直入だ。だが、晃たちそのことは予想していた。

「いいえ。僕は勝負する気などありません」

晃は首を横に振る。罪がないただの学生相手では晃は戦う気は無い。

「まあ、そうなると思ったよ」

そう言って晃のいままでの言葉を無視したかのように晃に飛びついてきた。しかも、手のグローブがなにやらグレードアップしている。ところどころに鉄製の金具が付いている。

「勝負だ！！」

「やめて！！」

その時、晃と沙羅の間にいきなり沙奈が入ってきた。しかも、あのグローブを改造トンファーで受け止めている。

「やめてください。沙羅従姉（さらねえ）さん」

沙奈がそう言った後2人は後ろに下がった。

「お、お姉さんですか！？」

今の沙奈の言葉に瑞希が声を出して驚いた。ほかのみんなも声は出していないが驚いていた。

「正確には従姉妹ですね。苗字が同じでしたし」

「あ、アキ君はわかっていたの？」

晃の言葉に結衣が驚きながら聞く。

「今本格的に知りましたが、話には聞いてました」

沙奈は晃にしか話はしない。もちろん家族関係もだ。なので瑞希が驚きのは無理は無い。

「やはりあんたね。何しに来たのよ」

「私はお兄様を守るだけです」

「ほほう。いいわよ！！」

そう言って沙羅が一気にダッシュして沙奈に近づく。沙奈は改造トンファーを構える。沙羅の連続パンチが繰り出す中、沙奈は身軽に避けたり受け止めたりしている。しかも沙奈はものすごく余裕な顔をしている。その瞬間、沙奈は思いっきり沙羅の腹にひじを当てた。沙羅はそのまま後ろに下がる。

「どうしたのですか？従姉さん」

「あ、あんたね」

沙奈の言葉に沙羅は腹を押さえながら答える。

「やめたほうがいいですよ」

沙奈には珍しく晃以外の人にしかも挑発的に話している。晃もこんな沙奈は始めて見る。

「従姉さんは」

「黙れ泥棒女の子供が！！」

沙羅のこの言葉はものすごく回りに響いた。みんあその声に驚いた。栞もおどおどしている。

（そういうことですか）

「あんた。あんたなんかに！！」

そう言って沙羅は沙奈に迫る。

「ストップです！！」

その時、沙羅と沙奈の間に赤い布がよごぎった。

「話はわかりました。ですが、君たちが殴りあう理由はないはずですよ」

その言葉を聴いて2人は拳を下ろす。そしてともに後ろを向く。

そのまま沙羅は帰っていく。

「あ、沙羅！！」

「あ、桜さん！！」
沙羅を追いかけようとする栞に晃は呼び止める。
「話。少しいいですか？」
「は、はあ」

※

みんなはもう帰らせて晃と栞は中庭の木の下で話していた。内容は沙羅のことだ。
「桜さんは知っているのですか？星平家のことを」
「うん。知っているよ」
栞は静かな声でいう。晃の考えは間違っていなかった。さっきの栞のリアクションはみなと違うものだ。そして、沙羅の言葉と考えればそんなにいい話ではないだろう。
「話してくれませんか？」
「で、でも」
「その話は僕のクラスメイトの星平さんのことだけではない。僕の大切な後輩の沙奈のことも関係している話です」
なかなか話してくれない栞に晃は最大の正論で向かい討つ。
「じゃあ、約束してくれる？」
「約束？」
口を開いた栞の言葉を晃は聴き返す。声はまだ暗いままだ。

「この話を聞いたら、沙羅のこの重みを外させてくれるって」
「……。約束しましょう」
晃の言葉に栞は少し明るい顔になった。晃はその顔をみて少しうれしくなった。
「しかも、約束も何も僕は始めからそうするつもりでした。それが礼儀だと思いますので」
「うん。わかった」
その言葉にうなづき、栞は話をする。

※晃

「沙羅はね。最初は科学都市に住んでいたの。小学生4年生まで。そして、こっちに来た理由は親子との関係なの。沙羅のお母さんは私は会ったことがあって、お父さんは武道家の人らしいの私もよくは知らなくって」
桜さんは顔を下に向けながら暗く言う。確かに良く知らないほうが当たり前のことになる。なんの問題もありません。
「それでね。実はお父さんのほうは不倫していたらしいの。多分その不倫相手は」
「沙奈の母親ですか」
僕は桜さんの言葉をつなげた。なるほどこれが始まりですか。
「沙羅のお母さんはお父さんのことを本当に愛していたの。でも、

沙羅が生まれると同時に離婚。しかもお父さんの強制で」

わかりました。すべてがつながりました。

「ありがとうございます。話してくれて」

「ううん。私は約束したし」

「後は、任せてください」

そう言って僕は立ち上がった。このままでは2人の関係は亀裂が入ったままだ。

「従姉妹でも同じ血を持っているのですから、仲良くしないと」

おせっかいかもしれませんが、それでも、2人が悲しむ姿は見たくありません。あの時2人は本当に悲しい顔をいていた。そして、沙奈が誰とも話してこなかったこともわかるかもしれません。

「桜さん。とりあえず星平さんの家の住所教えてください」

「う、うん」

団殺者、自由者（フリーダム）。今から単独任務に入ります！！

第１２５話　星平（後書き）

後書きトークコーナ！！

大吾「本編がシリアスなところに入っているところすまないが、一つ言わせてくれ」

晃「なんですか？」

大吾「いまさら思ったのだが、いまだにお前の短編できていないな」

晃「……」

大吾「黙秘！？」

真「仕方ないよ。作者今年受験生だし、毎日続けて書くのも無理になっているのだから」

大吾「そ、そうなのか？」

晃「作者曰く、もう書き終わりそうです」

大吾「あ、忘れていなかったのか」

晃「そういうことで、新たな人気投票。みなさんも参加してくださいね」

話人気投票＝ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｄｅＷｊＯＹｘ

第126話　2つの星の名ー？

晃はまず瑞希と舞と泉にメールをした。内容は星平家のことだ。
もし、協力してくれるなら学校近くの公園に来てほしいとのことだ。
晃はそのまま公園に来た。まだ、誰も来てはいない。

「あ、せんぱ～い！！」

瑞希の声が晃に届いた。

「瑞希。来てくれたのですね」
「もちろんです。沙奈ちゃんのことも気になりますし、それに先輩のお願いですから」

瑞希はものすごい笑顔で言ってくれた。その笑顔が晃を少し元気付けた。

「晃君」
「アキ」

その時、舞と泉も来てくれた。

「2人とも」
「晃君。お願いしてくれてありがとう」
「え？」

いきなり舞にお礼を言われた。晃はその意味がわかっていなかった。

「これであたしたちはちゃんと必要されているってわかったよ」
「はい」
笑っている泉に舞は微笑みながら返す。晃はその言葉で舞が言った言葉の意味がわかった。
「本当にありがとうございます。3人とも」
晃の言葉に3人ともうなずいた。自分についてきてくれる。晃にとってはそれはとってもうれしいことだった。
※
晃たちは沙羅が住んでいる星平家の前に来ていた。目的は沙羅と話すことだ。
「優輝君」
家の前まで来たとき、栞がドアの前に立っていた。制服姿なので多分学園から直行してきたのだろう。沙羅のことを心配して。
「桜さん。どうしたのですか？」
「優輝君。私も手伝わせてもらえないかな？親のほうも面識がある人がいたほうがいいと思って」
栞はすこしもじもじしながら言った。多分、彼女が真剣に考えて出した答えなんだろう。
「桜さん」
「は、はい」

「心強いです」

晃は笑顔で答えてくれた。友達が心配。それは人間として当たり前のことだ。

「じゃあ、私がインターフォン鳴らすね」

そう言って栞は星平家のインタンフォンを鳴らした。

『はい』

何秒後、女の声が聞こえた。多分沙羅の声だ。

「沙羅？私、栞」

『ん？何のよう』

「すこし、話を。大切なことだから実際に話したくって」

『……。そこに優輝たちがいる。けどいいわ。入って。鍵は開いているから』

「うん」

どうやら沙羅は晃たちがいるのが見えたのだろう。だが、姿を隠す気はまったく無いのでちょうどいい。了承を得たほうがあとあと楽だ。

「お邪魔します」

栞がドアを開けて言う。晃たちもそれについていく。そして沙羅が出てくるのを待つ。

「桜さん。途中までの会話はおまかせしてもらっていいですｋ？」

「うん」

晃の言葉に栞はうなずく。栞が来てくれたおかげで思っていたほどより楽にことが進みそうである。その会話の後、沙羅が玄関に来た。そのあと、無言で一つの部屋に入れてもらった。女の子らしさがあるので沙羅の部屋のだろう。

「それで、話って？」
「うん。お母さんとお父さんのこと」

その言葉を聴いて沙羅は晃をにらむ。晃はその目線を外そうとはしない。ごまかすことは一切しない。

「なるほど。優輝。あんたなんであいつと一緒にいるの？」

あいつというのは沙奈のことだろう。名前を知らないわけではないだろう。だが、言いたくはない。そういうことだろう。

「科学都市での職場仲間です」
「じゃあ、何でその職場仲間がここに来ているのよ」
「職場関係です」

団殺者（ディスター）の仕事として今回瑞希と沙奈がこちらに来た。それは疑うことなく真実だ。

「そのご様子ですと、星平さんは沙奈のこと、存在を認めていませんね」

晃のこの一言が空気を悪くする。聞かなければならない。沙羅にとって沙奈はどんな存在なのか。

「泥棒女の娘、それだけよ」
「そうですか」
晃にとってはこの一言で十分だった。
「それでは僕らは失礼します。また、くるかもしれませんが」
そう言って晃は立ち上がる。舞と泉と瑞希も同時に立ち上がる。
「優輝。こんなこと聞くのがあなたの仕事？」
「いえ、ただの好奇心です」
そう言って晃たちはこの家からでた。晃は本当になんで自分がこんなことをしているのかはわからない。だが、３人がわかっていた。それが晃のお人よしだからだ。
「とりあえずは沙奈の話も聞かなければなりませんね。すみません。３人とも来てもらったのになにも無くって」
「ううん。それはいいのだけど。晃君は何かわかったの？星平さんのあの一言で」
晃の問いにまいは首を振って自分の疑問を聞いた。ほかの２人も同じ気持ちだろう。その時、後ろのドアがあいた。
「その話。私にも」
出てきたのは栞だった。栞もそのことでなにか気になっていたのだろう。

「わかっています。星平さんは多分沙奈のことを見ていません。見ているのは沙奈の母親のみです」

つまり、沙羅は沙奈のことは眼中に無く、それどころか沙奈の母親に対してのことを沙奈にぶつけようとしていた。沙羅は沙奈の名前すらもわかっていないだろう。

「これは、子供ではなく親のほうで何とかしなければなりませんね」

「え？何で？」

晃の言葉に瑞希は聞いた。

「沙奈は従姉妹のことは眼中に無いのですよ」

沙奈にとっても沙羅どころかその沙羅の母親にさえも眼中にない。つまり、恨みなどなにもない。そう考えなければ晃以外の人に懐かない性格は無いほうがおかしい。ちなみに沙奈の母親はもうなくなっている。そして沙奈は父親さえも話を聞かない。

「多分、人の話を聞かないことが関係しそうですね」

晃は一つの答えを出した。

第１２６話　２つの星の名ー？（後書き）

後書きトークコーナ！！

真「速報！！なんとあきにいの短編がとうとう投稿されました！！」

渚「長い間待たせてすみませんでした」

静音「今行われている人気投票もよろしくお願いします」

結衣「短編はｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ６６７０ｘ／。投票はｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｄｅＷｊＯＹｘです」

一同「これからもＦｒｅｅｄｏｍ／Ｓｔｏｒｙをよろしくお願いします！！」

第127話　2つの星の名ー？

「沙奈。部屋に入っていいですか？」

晃は沙奈の部屋に来てノックして言った。

「お兄様？はい。もちろんです」

沙奈はあさり言ってくれた。晃にとってはうれしいことだが、いまはそのことで関係している。

「沙奈。星平のことで話があります」

「沙羅従姉さんのことですか？」

沙奈は少し不機嫌そうに言った。だが、ソラは首を横にする。

「いいえ。星平さんではなく星平家のことです。君が知っていることがあったら」

「……。なんでそんなことを？」

やはり、この返しがきた。

「僕にもわかりません。なんか好奇心みたいなものです。君対しての」

「私にですか？」

「僕の感ですが、君はこのことで苦しんでいると思うのですよ」

晃のこの言葉で沙奈は黙った。そしてしばらくしてから沙奈は決意したように言った。

「実は、お母様が死んだ理由がそのことなんですよ」

やはりか。晃は心の中でつぶやいた。

「君はこれからどうしたいですか？星平さんと」

「私はお兄様といれば」

やはり、沙奈は晃一筋にいってくる。だが、今の晃はそれはよしてほしいことだ。

「僕のことは今はどうでもいいです。君は従姉とどういう関係がほしいのですか？」

「わ、私は別に」

「そうですか。なら質問を変えます」

晃はさらに真剣な目になった。

「君のお母さん従姉妹としてどういう関係がのぞみだったのですか？」

この晃の言葉が沙奈に響く。晃は昔、沙奈の母親の話を聞いている。性格はドジでかわいらしい人だったとか。そして優しい人。やさしい人が最後に残す言葉など決まっている。

「明日。星平家に行きましょう」

「……。はい」

そう言って晃はこの部屋から出た。

※

次の日。
今日は休みだ。そのために晃は栞に連絡して沙羅の家に入れる許可をした。

メンバーは昨日のメンバーに加えて沙奈がいる。

昼ごろ、昨日集合した場所にみんな集まった。栞も一緒にいる。

「では、行きましょう」

晃の言葉にみんなうなずいた。そして、星平家についた。栞が言うにはもう入ってもいいそうだ。

栞がドアを開けたとき、そこには黒服の男性が何名かいた。

「ターゲット発見。捕らえろ!!」

いきなりその男たちは栞を避けて晃たちを捕らえにきた。

「な、なにこれ?」
「さあ、ですがこれは戦闘防衛はおりますよ」
「おう!!」

そう言って泉は棒を取り出して男たちをひっぱ叩いた。沙奈もトンファーを出して対抗する。

「舞、瑞希、桜さん。こっちです」

晃に言われて2人は安全な場所に連れてこられた。いや、誘導された。

「ターゲット発見」

そこにも黒服男性がいた。ここを空けていたのはこのためなのだ。

「捕獲する」

「そうはさせません」

晃はバックに手を入れた。栞の前では【呼び出し(コール)】は使えない。

バックから手を出したとき、晃の手には銃があった。

「どいてください！！」

晃はそう言って男の足元にギリギリ当たらない場所に撃った。そしてそのまま走る。

「あんた。やっぱり戦えたんじゃないの」

「星平さん」

その時、晃たちの目の前に出てきたのは沙羅だった。まさか、彼らを試したのか。

「残念ですね。これは威嚇ですよ。僕は戦うことは出来ません」

「いつまでそう言っている」

沙羅はグローブをはめて晃に襲い掛かってきた。一気に突かれる拳を晃はギリギリ避けた。そのとき、いきなり沙羅が殴った壁がへ

こみだした。これが、沙羅の本気なのか。

（あんなの一発も食らいたくはありませんね）

晃はそう思い、人がいなそうな場所に逃げた。

「コラ！逃げるのか？」

「仕方ないですね」

晃がそう言ったとき、晃の目線から沙羅の姿がなくなった。

「こっちだ」

沙羅の声が聞こえて晃は振り向く。そこには拳を振りかぶろうとしている沙羅がいた。今の体制では晃は避けられない。

「これで私の勝ちだ」

「そうはさせません！！【呼び出し（コール）】」

その刹那、晃の手元に刀が現れて拳を受け止めた。

「ど、どこからその刀は出てきた」

「その話は後です。瑞希！！」

「はいです」

晃がそう叫んだとき、瑞希が走ってこっちにきた。

「あれですね。わかりました」

そう言ったとき、瑞希の左手首が桃色に光りだした。これは色宝

石の光だ。瑞希も色宝石を持っていた。同時に晃の右手首も白く光りだす。

「舞え花よ！あのものを捕らえよ！！」

晃がそう言ったとき刀から花が出てきた。その刀を振ったとき、花が舞い、沙羅に引っ付いた。沙羅は拘束されてなかなか解けない。

「さて、話を聞きましょうか」

いきなりの戦いは安全に（？）終わった。

第１２７話　２つの星の名ー？（後書き）

後書きトークコーナ！！

花火「出番。最近ない」

晃「いきなりですね」

花火「だって最近生徒会と新キャラばっかりの出番ですもの」

晃「それ言ったら科学都市メンバーはどうなるのですかね」

百合「私たちも出番がほしいです」

柚子「晃。何とかならないの」

晃「いや、無理ですよ」

話人気投票＝ｈｔｔｐ：／／ｅｎｑ－ｍａｋｅｒ．ｃｏｍ／ｄｅＷｊＯＹｘ

第１２８話　２つの星の名ー？

結局あの後、何とか落ち着いてしゃべれるところまで進んだ。みんな落ち着いて今は座っている。

「なんた。また来たのね」
「ええ」

沙羅と晃はお互いにらみ合う。そして沈黙。

「今日はあなたの誤解を解きに来ました」
「誤解」

ちょっとした沈黙を破ったのは晃だった。沙羅は晃の言葉の意味がわかっていない。

「沙奈の、お母さんのことです」
「あんたね。あの泥棒猫の話を私が聞くとでも」
「それは百の承知です」

晃はそういわれるとあらかじめわかっていた。だったらほかの方法を使う。

「で、こうしましょう。僕とあなたが勝負して勝ったほうが言うことを聞くというのは」

その言葉に沙羅は反応して立ち上がった。効果ありだ。

「いいでしょ。それなら文句無いわ。私が負けるわけないから」

そう言って沙羅は隣の黒Tシャツの筋肉ムキムキの男から木刀を持って晃に渡した。これが晃の武器となる。沙羅もいつも問いは違うボクシングで使うグローブをはめた。

「勝負か簡単。どっちが体に一本入れたほうが勝ちね」

「わかりました」

そう言って晃も立ち上がった。晃が申し込んだこの試合。逃げるわけにはいかない。

「では、はじめ!!」

なぜか栞が審判に入って試合が始まった。

「はあぁぁぁ!!」

沙羅の勢いある拳に晃は木刀で防ぐ。だが。この瞬間、晃の不利な状況が作られた。

「ほらほらほら」

拳はリーチは短いが、相手の懐に入った瞬間、2つの手を使える沙羅のほうが有利になった。

晃は避けることしかできない。木刀で防ぐのは命取りだ。

「ねえ。どっちが強いと思う?」

「そりゃ運動神経はアキよりも星平のほうがいいだろ」

「え?なんで?優輝君運動神経いいって聞いたよ。まあ、確かに

沙羅もいいけど」

どうやら栞は誤った情報を聞いたらしい。みんなため息をつく。

「お兄様はただ器用なだけで運動神経は普通です」

「先輩は足は少し速いだけで器用なことをしていてそれで運動神経が良く見えるのですよ」

「そうなんだ」

そんなこと言っている間に試合はとうとう最終段階に入った。

「ほらほら、どうした」

「そう、あせらないほうがいいですよ」

晃は一歩後ろに下がった。いや、やっと下がれたのだ。

「下がっただけでは私には」

「わかっていますよ」

晃は落ち着いていった。沙羅が襲い掛かってくる前に晃はある動作をして。

――運動神経で負けているなら。

晃はそっと横に避けて沙羅が向かっているところに木刀を置くように横に持った。

――そこに置くだけです。

沙羅はそのまま突進して晃の木刀に突っ込んだ。その刹那、あま

りにも勢いがあったので少し衝撃が強かったみたいだ。

「星平さん」

倒れる沙羅を晃はしっかり支えた。

「私は、負けた？」

「はい。お兄様の勝ちです」

「そうか」

沙羅は本気で悔しい顔になった。

※

「で、話って？」

「ある人からの言葉です」

お互い落ち着いて座ったところで話が戻った。晃は落ち着いて言った。

「そのことは本気で申し訳ない。だが、これは知ってほしい。２人とも死ぬときは従姉妹同士仲良くやってくれと。自分勝手だと思うが、親友同士の願い。どうか聞いてほしい。と、星平泰三（たいぞう）さんのお言葉です？」

晃はそう言ってからお茶をすすった。全員、いきなりの言葉で驚いていた。しかし、これで真実はわかった。沙羅と沙奈の母親は親友同士だったのだ。最後は２人ともそのことを理解して死んでいったのだ。

「お母様」
「お母さんがそんなことこ」
2人とも小さな声で言った。
「星平さんがそう考えるのもわかります。ですが、人間はそれ以外にも違う答えがあることを知ってほしいです」
「う、うん」
泣きそうになって沙羅は後ろを向く。その時、沙羅はあることに気づく。それはみんな知りたがっていたことだった。
「な、なんであんたが父さんの言葉を!?」
「ああ。僕と泰三さんは意外と話が合うもので」
「今は先輩とメル友です。沙奈ちゃんとの会話が成り立たないので先輩を使って」
沙奈がうなずく中、全員唖然していた。まさかの伏兵が現れた感じだ。
とりあえず、すべては沙羅の誤解ということになった。
「しかし、よくまあ本当にめんどくさいことを」
「人は、間違いや誤解を自分では解決しようとする人はそう多くありません」
晃は多々いあがりながらい言った。その顔はすこし清々しい。
「でも、違う人ならその間違いや誤解を解決してくれる人がいます」

「それが先輩です」

晃の言葉に瑞希が続けた。

「僕は苦しむ人の姿は見たくないので。みんな。いきましょうか」

そう言って晃たちは玄関に向かう。

「ちょっと待て」

玄関に着いたとき、いきなり沙羅が晃を呼び止めた。

「あんた。人を苦しませたくないというなら、さっきあの木刀で私は苦しんだんだけど」

「それで？」

「私の軽い言うこと一つ聞きなさい」

「かまいません」

「じゃあ」

そう言って沙羅は考える。

「私のこと沙羅って呼んで」

「はあ」

その言葉に全員反応した。正確には栞以外すこし殺意がある。

「いいですよ」

晃は少し笑顔になって言った。

「べ、別にそ、そっちのほうが言いやすいからよ。変な期待はしないでね」

「変って、どういうきたいですか」

そう言って晃たちは出て行った。その時の沙羅の顔は少し赤かった。

第１２８話　２つの星の名ー？（後書き）

後書きトークコーナ！！

大吾「ぬぉぉぉぉぉぉ！！ツンデレキターーーーーー！！」

晃「な、なんですかいきなり」

大吾「この小説始まって１２８話目。ようやくツンデレキャラキタ！」

晃「それがどうしたのですか？」

大吾「なに言っている以外とツンデレキャラはラブコメだと必要キャラだぞそれが今までいなかったんだぞ。そしてついにそんな子も俺のハーレムのなか――」

沙羅「黙れーーーー！！！」

殴）

大吾「Ｃ３初アニメ放送！！」

沙羅「なに？あいつ」

晃「さらっとなにか宣伝した気が」

第１２９話　１年生とツンデレ？

そして、月曜日。今日は初めての瑞希たちが東の丘学園の授業を受ける日である。入学式で終わった人は違い、友達を作ることもしなければならない。

とにかく沙奈は心配要素は多いが、そこは信じてみようと思っている晃だった。

「へぇ～。水瀬さんと星平さんって科学都市から来たんだ」
「はい」
「でも、なんでここに来たの？」

やはり、ここでもそんな質問をさせられる。やはり科学都市から来る人はめずらいしいのだ。

「簡単な話です。先輩を追ってきました」
「先輩！？」
「追ってきた！？」

この言葉には回りの男子も食いついた。やはり瑞希と沙羅は科学都市でもかわいいほうだ。

「そりゃボクと先輩は」

その時、いきなり瑞希の頭にチョップが落ちてきた。チョップしてきたのはいうまでも無く沙奈だった。

「いた～い。なにするの沙奈ちゃん」

「お兄様は私のものです」

瑞希と沙奈が火花を散らしたとき、さらにクラスは騒がしくなった。特に女子がだ。そして、さっきの女子が瑞希たちに聞いてきた。

「ねえ。やっぱりその先輩ってあの制服が違う2年生の？」

「はあ、はい。その先輩です」

瑞希が双答えたとき、女子たちが騒ぎ出した。

「やっぱり、あの先輩よ」

「あの人、結構かっこいいよね」

なんかみんな晃のことを知っているようだ。それもそのはず。科学都市からの転校生でここら辺は有名になった。さらには学園の事件も解決してくれたと高評価をもらっている。もちろん、当の本人はその人気を知らない。

「お兄様。すごい人気です」

「さすがボクの先輩」

―カーン！！

どこからかコングの音が鳴り響いた。ちなみに男子は何人かショックか、何かに対しての怒りを上げていた。

※

晃は昼休み。幼馴染とサポータと伊織、大吾、花火、渚で瑞希に呼ばれて一年の教室近くに来た。１年の教室は自分たちが何日もい

ない間なのになんだか懐かしく思えた。こう思うとなんなだせつない気持ちになる。

「先輩。おはようです」

瑞希が手を振りながらこっちに来る。あちらも何人か新しい友達を連れてきたようだ。

「おはようって、朝にも会いましたよね」

「えへへ。そうでした」

瑞希はかわいらしく笑う。その無邪気さが晃をあきらめさせる。

「それで、どうしたのですか？いきなり呼んで」

「実はですね。先輩に会ってみたいって言う人がいてそれで否定できなくって」

「なんで否定できないのですか？」

晃はそこに疑問を持っていったが瑞希は話を進める。

「まったく。ボクの先輩は見世物ではないのですよ」

「うん。それも間違っていますが、君のものになった覚えも無いのですが」

次はさりげなく静かにツッコンだ。だが、言葉のほうが聴いたのか、瑞希は頬を膨らませる。

「そうです。お兄様は私のものです」

「それも違います」

いつもまに隣にいた沙奈にも冷静にツッコム。

「でも、これがアッキーにあってみたいって人たち？」

「たくさんいるわね」

ほとんどの瑞希のクラスの女子が全員集まったのだろうか。結構な数だ。

「どうする。晃」

そう言って今宵は晃がいる方向に向く。

「あ、晃？」

しかし、そこには晃の姿は無かった。

「あ、あっちです」

舞がみんなにわかるように指を指して伝える。確かにいきなり女子生徒たちが消えている。瑞希と沙奈もここにいるので2人の仕業ではない。もうこの時点で嫌な予感しかしない。

女子たち（＋2人）は急いで追った。もちろん瑞希たちも一緒に追っている。

そして、瑞希たちのクラス、1年5組について教室を空けた。

「あきにい！？」

「あきにいさん！？」

しかし、そこには机を並べられて引きずっている顔の晃がみんなに囲まれて椅子に座っている。

「アキ君。これて」

「さあ、僕にもなにかなにやら」

晃もわかっていない状況だ。しかし、クラスのみんなはなんだかニコニコしている。

「とりあえず、そろそろ時間なので僕たちは自分たちの教室に戻ります」

まずはこの場から逃げることを優先した。さすがにこれを言われてはみんな邪魔は出来ない。実際、もう１０分前になっている。

※

とりあえずは晃たちは2年の教室側に付いた。ほんのちょっとのことなのになんだか疲れた。

「だいじょうぶですか?晃さん」

「ええ。渚ちゃん。だいじょ」

その時、晃は何かの危険な気配を察知した。

「あ、いたな晃!!」

「さ、沙羅」

晃たちが向かう先にいきなり沙羅が晃に向かって走ってきた。ちなみに、手は拳を握っている。

「勝負だ！！」
「タイミングがおかしいですよ！！」
いきなりの宣戦布告に晃はツッコンでからなんとか沙羅の拳を避けた。
「やるな。晃」
「沙羅。僕は勝負などする気はありませんって」
「いいから勝負勝負」
完全に子供がおもちゃをほしがっているようにしか見えない。
「よくないから」
その時、栞が沙羅の頭にチョップを入れた。
「ごめんね。優輝君。後でしかっておくから」
「は、はあ」
そう言って栞は沙羅を引きずって下がっていった。しかし、晃の災難はまだ続く。
「あきにいさん。今の人とファーストネームで呼び合っていましたよね」
「しかも、金曜日はなんか変な空気だったのに。いつの間に仲良くなったの？」
「せ～ん～ぱ～い」
いきなり花火、結衣、瑞希のヤンデレ攻撃だ。

「いや、それはですね。てか、瑞希は知ってますよね」

ますますにぎやかな学校生活の始まりだった。

第１２９話　１年生とツンデレ？（後書き）

後書きトークコーナ！！

晃「何とか急な展開の後に普通の日常に戻せましたね」

今宵「どうも、最近出番が少ない今宵だ」

晃「いや、僕の話し聞いてましたか？」

今宵「次回からキャラの設定進級バージョンとして公開します」

晃「まあ、いいですか。なので、少しこのコーナはお休みです」

沙羅「新キャラもよろしく」

大吾「そんな、俺の出番が！！」

沙羅「無くっていい！！」

殴）

大吾「夏目４期おめでとー」

晃「デジャヴ？」

第１３０話　当日の生徒会室

今日は新入生歓迎会の日である。

―ゴソゴソ

晃の部屋から何やら怪しげな物音がする。ちなみに時間はあと数秒で６時だ。

「せ～ん～ぱ～い」

いきなり晃が寝ているベットに瑞希が近づく。完全に危険なにおいしかしない。

「せんぱ～い」

そう言って瑞希は晃の顔に自分の顔を近づける。その時、６時になった。

―ガバッ！

―バキッ！！

それと同時に晃は一気に起き上がった。そのまた同時になにか鈍い音がした。

「ん？なにか頭に」

晃は頭をさすりながらベットの横を見る。

「瑞希。なにやっているのですか？」

そこにはあごを痛そうに押さえる瑞希がいた。寝起きがいい晃はさっそく聞いてみた。

「なにやっているのですか？」
「えっと。朝這いです」
「朝這い？」

晃は言っている意味がまったくわかっていない。

「この時間で夜這いというのはおかしいので朝這いということです」

晃にとっては何を言っているのかはまったくわからなかった。だが、出てくる言葉はすぐにわかった。

「とりあえず、僕は着替えるので」
「はやく出てけーーーー！！」

後者の言葉は晃ではなく、いつのまにか部屋に入ってきた真の言葉だった。晃はものすごく呆れた顔をした。

※

とりあえず、晃が着替えたらあと、真と瑞希はリビングに座っていた。

「しかし、珍しいですね。瑞希と真がこんな時間に起きるのは」
「「うッ」」

2人は何かを感づかれたように頭をビクンと動かした。

（どうしましょう。今日のことで楽しみで早起きしちゃったなんていえませんし）

（う～。あきにいの危険を悟って起きてきたなんてはずかしいし）

この瞬間、2人は眼で同盟を結び合った。うそのことを言えばものすごく出来ている話ではない限り晃をだますのは難しい。なら、2人で一緒に言ったらどうなるだろうか。

「いいよ」

「おしえますよ」

そう言った後、2人は同時にさっきの理由を言った。これならば晃に悟られないと思ったのだ。

「そうですか。瑞希は今日の新入生歓迎会が楽しみで早起きして、真は僕の身の危険ですか」

しかし、晃の聴力を見くびっていた。完全に晃は2人の言葉を分けて聞いていた。2人はこのことに唖然している。

「まさか、本気で聞き分けるなんて」

「本当にあきにいの人生になにがおこったの？」

しかし、晃は内容にはまったく触れてこなかった。このことには2人は安心したような残念なような気がした。

※

東の丘学園。
今日は新入生歓迎会ということなのでたくさんの人が朝早くから登校している。晃、美紀、結衣も例外ではない。晃は生徒会。美紀と結衣は特待生として早く学園に登校した。

「じゃあね。アキ君」
「わたしたちの発表見に来てね」
「ええ。時間が空きましたらかならず」

晃たちはそう言って構内で別れた。

そのまま晃は生徒会室のドアを開けた。そして、そこには着替え中の泰子がいた。

「あ、アッキー!?」
「泰子。着替えるなら更衣室でお願いします」

顔を赤くしている泰子に対して晃は呆れた眼で言ってくる。その言葉の後、まるで泰子の体は岩みたいに硬くなった。相変わらずこのことに対しては振り向きもしない晃であった。

「アッキー。そんなにボクの体に魅力が無いのかな?」
「ん?」

なきそうな泰子に対して晃は頭の上に?マークを浮かばせている。

「おはようございますってなにやっているのですか泰子さん?」
「あ、ささ!!」

いきなりささらも入ってきて晃と同じような眼をする。

「おはようございますささら」

「おはようございます。泰子さんは早く着替えてくださいね」

そう言ってささらは自分の席に座る。

「そういえば静音さんたちは？鞄はあるようですが」

「うん。先に仕事。ちなみにボクはちょっと動く仕事をね。ちなみにアッキーの仕事は決まっているよ」

「は、はあ」

新入生歓迎会も生徒会はほかのところの手伝いである。あとは警備も担当しているが、実質なんとかできるのは晃と鈴のみだろう。

「で、どこなの？晃さんの仕事場所は？」

「音楽科の手伝いだって」

その言葉にささらが一番反応した。

「と、言うことは結衣たちのところですか」

「ま、またですか？」

「まあ、先生の要望ですから」

その時、静音と鈴が生徒会室に入ってきた。同時に泰子の着替えが終わる。

「先生の要望ですか？」

「そう。河本先生の要望よ」

鈴が変わりに説明してきた。なんか久しぶりのセリフだ。

「ああ。玲奈さんからですか。わかりました」

「そういえば、晃さんはなんで河本先生を下の名で呼んでいるのですか？」

ささらはそれがものすごく不愉快だった。

「そういえばアキ君のこともファーストネームのほうで呼んでいましたね。本当にどういうことですか？」

さらに静音もものすごく聞きたそうな顔をする。だが、晃はなにも隠すことではないと思い、すぐに話す。

「バイトの店主の人の親友で、以前から僕のことを知っていたみたいです」

「そ、そうですか」

「あ、バイトですか」

なんで安心したのか晃にはわからなかった。

「さて、余談はここまで。さっさと仕事開始して」

鈴の一言に全員返事して生徒会室を出た。

第１３０話　当日の生徒会室（後書き）

キャラ紹介

Ｎｏ００１

優輝晃（ゆうきあきら）【自由者（フリーダム）】

クラス学年：２年１組　生徒会会長補佐

年齢：１７歳　性別：男　第一人称「僕」

身長：１７３　誕生日：４月２日

髪：白髪で、肩に後ろ髪が当たるまで伸びている。赤目

ジョブ：秀才ド器用主人公。幼馴染カラーは白

好きなもの：フライドポテト、読書

嫌いなもの：変態（オカマの類）、レバー肉

記：アパート「自由荘」の大家でもあり、みんなの親的の存在。

さらには科学都市の学生警察の【団殺者（ディスター）】のメンバーの一人。

去年の１０月までは科学都市にいた。

制服のみ彼は星道高校の制服を着用している。理由は防弾制服であるから。

右手首には白の色宝石が着いたリストバンドを、左手首には赤いリボン、【電脳子ノ帯状布（デジタル・リボン）】を付けている。

なんでも器用にこなすため、何でもできると周りから思い込まれている。

運動は普通だが、器用なため、何でもやることが出来る。

恋愛には非常に鈍感でもある。

武器は基本は刀と銃。

銃は今公開されていて６個まで操れる。

謎のアクセサリーの能力、【呼び出し（コール）】を持つ。

いまだに謎も多い主人公。

第１３１話　新入生歓迎会

新入生歓迎会。
今まで聞いていれば特待生や部活が今の自分の力を見せるところだ。確かにそれは間違いではない。だが、それだけの真面目な歓迎会ではない。

「そういうわけで、生徒会主催！！生徒見比べ選挙！！」

静音がかわいい帽子をかぶってマイクを使って大声で叫びながら登場した。ちなみに隣で晃が呆れた顔をしていた。

この東の丘学園の新入生歓迎会は、新入生のみならず、在校生も体育館にいる。特待生、部活、生徒会の順に発表が行われる。そして、今は生徒会の発表になっている。

「どうも～生徒会会長の柊静音です」

なんかテンションが高い静音が自己紹介した。体育館が「わーーー！！」という歓声で包まれる。

「そしてお隣は？」
「せ、生徒会会長補佐の優輝晃です」

晃は完全に静音の謎のテンションについていけていなかった。その時、連絡用のミニ通信機（晃作成）から鈴の声が聞こえた。

『実はね、静音はマイクを持つとハイテンションになっちゃうの。なぜかわからないけど』

（ほ、本気ですか？）

声は出せないので晃は心の中のツッコミをした。しかし、そんな微妙なスキルが静音にあるとは誰も思ってはいなかった。ちなみに舞台裏にいる2年も驚いた顔をしていた。

「だからあの子にMCはさせたくなかったのよね」

鈴が呆れながら言った。どうやら鈴は前に惨状にあったようだ。

「だから私たちのときは鈴さんでしたのですか」

「ええ。だけど今回は仕方が無いわね」

「クジでしたからね」

今回のMC決めはクジで行われた。結果この2人になった。晃はともかく、鈴は静音がとても心配だった。

「では、ルールの説明をします！！」

テンションが高い静音。略してハイテンション静音がルールの説明をする。しかもかわいいので下にいる男子は大きく歓声を上げる。晃は完全に置いてけぼりだ。

「それではアキ君！！お願いします！！」

「は、はい」

完全に晃は少しテンションが低くなっている。しかも、ニックネームで呼ばれているので同時に男子の怒りを買っていた。

「え～。ルールはまず、ここに出てくる生徒ですか、その生徒の性格を僕たち生徒会が説明します。それをうそか本当か見抜いてください」

「なお、商品はもちろんのこと出ませ～ん」

いつもと違う静音の言葉にみんな笑った。だが、晃は嫌な予感しかしない。

そういうことでゲームが始まった。それと同時に晃の精神のＨＰがどんどん減っていく。やはり静音のテンションについていけないのだ。

「では、始めのグループ。来てください」

「は～い。次は2年1組の生徒たちです」

さっきのルールに言うのを忘れたが、一クラスから3名が選ばれてくる。出てきたメンバーは大吾、結衣、沙羅だ。

「それでは、自己紹介を兼ねてゲームは始めてみましょう。ではまず男子の方から」

そう言って晃はもう一個のマイクを大吾に渡した。ちなみに晃は公平の立場にいるので友達ということは内緒にする。

「おう。俺は小松大吾だ」

「では、静音さん。問題の性格を」

「はい。では問題です。小松大吾さんはモテ男である」

この言葉を聴いて大吾はものすごくだらしない顔をしそうだったので、晃は持っていたメモが書いてる板を大吾顔面を隠すように叩

いた。しかも晃の顔はものすごく呆れた顔をしている。ちなみに、鈴のお願いでほとんど晃が進行している。

「では、皆さん。この性格が本当だと思う人は手を挙げてください」

はたして結果は。

―シ～ン。

「おい！！」

結果。誰も手を上げなかった。そのことに対して大吾は大声を出す。

「え～。正解です。では次の人」
「無視かよ！！」
「時間の無駄なので」
「うぉい！！」

さて、本気で大吾を無視して次の生徒、結衣にマイクを渡す。

「では、名前をお願いします」
「うん。羽衣結衣です。アキ君共々よろしくね」

結衣のこの一言により男子の目線がさらに強くなる。そんな結衣に静音は近づく。

「アキ君。司会を進めましょうか。２人で」
「え、あ、はい」

なんだか強く2人でというところが強調されたように聞こえたが、晃は気にしないで進める。

「アキ君は一人で司会できるでしょ。早く進めてほしいな」

結衣のこの言葉は晃ではなく、静音に向けたような気がする一言だった。しかも、そのことを静音はわかっているみたいで。2人の眼でのにらみ合いを見てさらに男子の目線が強くなる。ここに鎌があったら確実に首を取られる。

「そ、それでは問題です。彼女の性格は裏表がある性格である」

「これが本当だと思う人は手を挙げてください」

手が上がったのはほとんどが女子だった。しかし、男子からの手はものすごくどころかまったく無い。

「では、うそだと思う人」

次は男子が多かった。ここはくっきり分かれると思う。

「正解はうそです」

晃は発表した。だが、本当の姿はあっているのだが晃は知らない。結衣の問題は晃が担当した。

「では、最後にお願いします」

「ええ。星平沙羅よ」

「では、問題です。彼女の性格は天真爛漫で3度のご飯よりも戦いが大好きな戦闘少女である」

晃はこの言葉を早口言葉のように言った。

「ちょっと、なんか変じゃない！？」

「では、本当だと思う人は手を挙げてください」

一瞬で手が上がった。しかも見るからに全員といえるほどだ。

「え～。正解です。見事な大吾現象でした」

「なんだよその現象は？」

「こいつと同じは嫌よ！！」

晃に文句を言う大吾だが、違う人からメンタル的ダメージを負った。

そして、次々にゲームは消化された。

※

終わった後の生徒会室では。

「……」

「し、静音さん？」

ここに戻ってから静音は思いっきり燃え尽きていた。

「そのあとで働かないから嫌なのよね」

「そ、そうですか」

新たな静音の特徴を知った晃であった。

第１３１話　新入生歓迎会（後書き）

キャラ紹介
Ｎｏ００２
優輝真（ゆうきまこと）
クラス学年：２年２組。技術科の体育学科特待生
年齢：１５　性別：女　第一人称「私」
身長：１５４　胸ランクＡ　誕生日：３月３０日
髪：金髪のふわふわロング。目の色は水色
ジョブ：素直になれない義妹。幼馴染カラーは黄色
好きなもの：ご飯、卓球
嫌いなもの：勉強
記：晃の義妹。晃には懐いており、時々素直になれないときがあるが、晃には好意を持っている。部活に卓球部に入っているが、人数は５人のだけだという。だが、運動神経はいいので東の丘学園卓球部エースとも言われている。
中学の頃も部長を務め、その実力を買われて今に至る。
外見が幼くかわいいので、同姓に良く好かれている。
勉強は相変わらずやる気が無い。
晃のことを「あきにい」と呼んでいる。
最近、晃の女友達が増えてきて困っている。
ちなみに作品中、胸おろか背も成長していない。

第１３２話　Ｍと縛り

朝。

晃たちは相変わらずみんなで登校している。しかし、学園の校門前に着くとみんな売れっ子アイドルのようにたくさんの人に話しかけられる。さすがは特待生である。晃、瑞希、沙奈は先に下駄箱に向かう。

その時、晃は何かの殺気を感じ取った。

「お～晃！！」

沙羅が飛び蹴りで晃に向かってきた。だが、晃はそのことをあらかじめわかっていたように避けた。沙羅はそのまま壁にぶつかる。もしデフォルメ化していたら壁にひびが入っているだろう。

「な、なぜに避ける」

「逆にあれを避けない人がこの世にいるのですか？」

「いる！Ｍとか！！」

「それはごく一部の人のみの対象です」

沙羅は拳を握って自信満々に言う。てか、壁にぶつかったダメージは無いのか。

「しかし従姉さんは最近お兄様になれなれしいですね」

ものすごく棘がある言葉を沙奈は沙羅に言った。

「お兄様は私のものですよ」

「いつ君のものに僕はなったのですか？」

晃は勘違いさせないようにツッコンだ。

「べ、別にその、じ、自分のものにしたいって言うか」

しかし、ものすごく変な意味で沙羅は受け止めてしまったらしい。完全に顔が赤い。

「さ、沙羅？どうかしましたか？」

「ち、近づくな！！」

晃が沙羅に近づいたとき、沙羅は瞬間的に拳をこっちに振ってくる。晃は何とか避けることができた。

「わ、私は先に教室に行く」

「だ、立ったら一緒に」

晃がそう言った瞬間、また拳が振られてきた。もちろん晃は姿勢を低くして避ける。

「だ、誰かあんたと一緒に行くか！？」

「お、同じクラスですが」

「それでもダメだ！！」

そう言って沙羅は先に下駄箱に向かう。晃は頭をかきながら瑞希たちの方向へ顔を向ける。だが、なぜか瑞希はなんだかもじもじしていた。

「瑞希。どうかしたのですか？」

「せ、先輩ってMなんですか？」
「さっきの会話にそ話は無かったはずですが」
勘違いをしている瑞希に晃は呆れながらツッコむ。ちなみに晃はどちらにも属してはいない。

※

瑞希たちと別れて晃は自分の教室に来た。
「あ、おはようございます晃さん」
教室に入るとちょうど近くにいた渚が挨拶してきた。
「おはようございます渚ちゃん」
「はい。晃さんは最近なんか新しい本を読みましたか？」
「ええ。最近は仕事の合間しか時間がありませんが」
「そうですか。良かったら今度の休みに本屋にでも行きませんか？品揃えがいい本がたくさんあるのですが」
「そうですね。別にいいですよ」
渚に誘われて晃は笑顔で答える。そのとき、いきなり教室のドアが開いた。同時に渚は少し怖い顔をした。そんな渚の顔を見て晃は振り返る。
「あれ？結衣？」
「アキ君はまたほかの女の子とデート？」
結衣は笑顔で晃に言った。しかし、完全に結衣の額には怒りマークがついていた。

「今の結衣、名にか怒っていませんでしたか？」
「そ、そうですね」

実は結衣は廊下で晃と渚の話を聞いており、そして入ってきたときは裏モードで入っきたのでそのオーラを渚は感じ取って怯えていたのだ。相変わらず晃は結衣の裏モードを知らない。

「では、今週の土曜日にでも」
「は、はい」

渚がものすごい笑顔で答えたとき、教室のドアがまた開く。

「あきにいさん！！」

その刹那、花火がいきなり晃に抱きついてきた。正確にはタックル同然なんだが。

「は、花火？」
「あきにいさん。お久しぶりです」
「花火。少し離れてくれませんか？」

花火はものすごい力で晃に抱きつく。しかし、女の子を振り落とすことは晃にはできない。てか、少し腕が腹辺りにあるので少し苦しい。だが、花火は一切離そうとはしない。

「あきにいさんに最近あっていないのですからこれぐらいのことは」
「さ、最近ってこの前あった気がしますが」
「それでもあきにいさんと一緒にいることはまったく無かったの

で」

いくら説得しても花火は離そうとはしない。実際、花火は自分の登場が少ない中、ライバルが増えてきてあせっているのだ。クラスも違うし、今はこうするしかないのだ。だが、晃には大迷惑だ。しかも、男どもの見ている眼がどんどんきつくなる。

「アキ君。何しているの？」

その中、結衣が晃に話しかけてきた。だが、いまだに怒りマークは消えるどころかさらに増えていた。

「あら、羽衣さん。おはようございます」

「そうね。夏色さん」

2人は挨拶をしながら完全にいがみ合っていた。晃はなぜ仲良く出来ないと思っている最中だ。ちなみに命がなくなりそうなので口には出さない。だが、とりあえずはこの場を何とか離れたい。

「あの～すみませんが僕は今渚ちゃんと話していたのですが」

だが、この言葉を今一番言ってはいけない言葉だった。晃には2人の眼が光って見えた。渚にも見えたらしく少し怯えている。

「あきにいさん。私と話しましょう」

「いたたたた」

晃に抱きついている花火はさらに力を入れる。

「アキ君。ちょっとこっちに」

「いたたたた」

結衣は晃の左腕を持って引っ張り出した。これもものすごく痛い。

「あ、晃さん。土曜日はどこに待ち合わせますか？」

……。

いきなり2人が黙りだしたので晃は怖くなった。

「あきにいさん」

「アキ君」

「は、はい」

「「私も土曜日一緒に行く（行きます）！！」」

第１３２話　Ｍと縛り（後書き）

後書きトークコーナ！！

大吾「ぎぃやぁぁぁぁぁぁぁ！！」

晃「だ、大吾。何でいきなり叫びだしたのですか？」

大吾「お前、何だ今回の話は！？」

晃「あれは痛い目にあいました」

大吾「なにが痛い目だよ。何だよのハーレムパラダイス」

晃「いや、違うと思うのですが」

大吾「俺だって、俺だって」

沙羅「泣きながら言ってもお前にはそんな機会は一回もな～い」

殴）

大吾「ぎぃやぁぁぁぁぁぁぁほぉい！！」

沙羅「いま、喜んでいたわね」

晃「彼が一番のＭですよね」

第１３３話　初都会前編

土曜日の朝。
今日はある３人とって勝負の日だ。渚は自分の部屋で新しいワンピースを出した。白いそのワンピースはとても渚には似合っていた。さらには白いレースを防寒対策も出来た。だが、目的はあくまでも本屋さん。しかし、あることにデートな感じになってしまった。問題はついてくる２人のライバルだった。だが、そんな２人を弾き飛ばすことは渚は勇気も力も無かった。

（でしたら、２人以上にがんばって晃さんに）

渚は両手で拳を作ってがんばるぞのポーズを作る。その光景はとてもほほえましかった。

※

同時刻。花火も服装に力が入っていた。何回も鏡の前でくるくる回り、ミニスカートをなびかせていた。並みの人間ならすぐに恋に落とせるほどのかわいさである。だが、今回はライバルが、それに一番の強敵は晃、恋する相手本人だ。

「お、おかしくは無いですよね。大丈夫ですよね」

もうこのセリフも何回目なのか、花火はそのことはお構いなしに独り言をつぶやく。鏡の前で回るのも何十回めだろうか。恋する乙女は細かい数など数えない。……多分。

「この勝負に勝てば、もしかしてこのまま」

花火の回りに花畑が広がる。少々妄想気味になっている花火であった。

※

「フフ～ン」

結衣は元気良く鼻歌を歌いながら髪を整える。この勝負、結衣にとっては有利なことばっかりだ。

まず、待ち合わせ場所は駅前。もうその時点で晃と2人っきりである。

結衣はそのことを考えると楽しみでしょうがない。しかもこのことはみんなには黙っている。

「アキ君と2人っきり♪」

早くその時間が来ないかと待ち遠しくしている結衣。だが、晃がほかのみんなに話したことは考えてもいない。

「結衣。そろそろ行きますよ」

「うん！！」

この時間を待っていた結衣はすぐに元気良く家を出る。だが、ドアを開けた瞬間嫌な光景が眼に見えた。そこには外に出かける格好をしている幼馴染軍団がいた。

「あ、アキ君。これって」

「ええ。実はですね、今日みんなを連れて行きたい場所がありま

してそれで早速なのでみんなを」

晃は笑顔で言った。結衣は嫌な現実がぶつかってため息を吐いた。

（もう、アキ君たら、私が2人っきりで歩くことがどんなに楽しみだったのかわからないのかな）

結衣は完全に裏モードになり、怒りを晃にぶつけている。

（ん？アキ君が行きたい場所？）

結衣はその時、晃が言ったセリフを思い出した。今考えてみれば出かけるときは晃は主張が小さく、みんなに任せる感じだった。それが自分（花火と渚）と出かけるために主張してくるなんて、そのことで結衣は少しうれしくなった。

「遠くなるので、それでこの時間で」

そう言って晃たちは歩き始めた。

※

そして時間は経ってみんな集合して電車に乗っていた。朝が早いが、何せ田舎近いところなので車内はガランとしている。

「アキ君。それでどこに行くの？」

「ええ。少し遠くへ」

「確かに切符は晃さんにとってもらったのでわかりませんが、せめて行き先を」

渚にそういわれて晃は人差し指を自分の口に運んだ。

「それは、着くまでのお楽しみです」

そう言って晃は微笑む。結衣たちは今切符を持っているが、買ってきたのは晃で、そして行き先はまったくわからないところだった。

そしてさらにしばらくして、人がにぎやかな場所に来た。人がものすごく多いことに結衣たちは驚いていた。だが、これは東京にとっては少ないほうだ。

「皆さん。ここで乗り換えです」

そういわれてまた電車に乗る。だが、ここでも結衣たちにとっては始めての体験がまだ残っていた。

「あ、アッキー。ホームでもこんなに人が多いの？」
「そうですね。まあ、有名な電車ですし」
「あ、あきにい。なんかこの電車緑色だよ」
「ひ、人も多いな」

幼馴染の3人は本気で驚いている。電車の中はほとんど座れずにいた。

そして、しばらくして目的地に着いた。

「ひ、人がいっぱい」

真が驚きながら言った。

「しかも、駅がものすごく広いし、お店があるよ」

美紀も驚く。なんだかかわいい2人だ。

「あ、晃さん。ここは一体？」

「科学都市ではないみたいですね」

おどおどしながら来た渚と反面、都会慣れしている花火が聞いてきた。

「そうですね。科学都市はいくらなんでも遠かったので、一番近くってたくさん遊べる場所を選びました」

晃は笑顔で言う。透もものすごく無邪気にあっちこっちの店を見る。彼女たちにとっては駅内の店は本当に珍しい。ここの人にとってはま逆なのだが。

「さて、いろいろ見たいのはわかりますが、そろそろ行きますよ」

そう言って晃はあるところへ連れてきた。そこは地価に入り口がある有名な店だ。家具や電気商品がたくさんそろっているお得な場所だ。

「あ、晃さん」

「あきにい」

その時、渚と真がいきなり晃の手を握ってきた。回りの女子たちはうらやましそうに見ていた。だが、2人の肩の震えをみて反論するのをやめる。

「そうですね。人が多いと不安になりますよね」

晃は2人の手を優しく握る。初めての都会だ。
不安な気持ちは誰にもある。そう思い、晃たちは店の中に入る。

「皆さん、はぐれないで着いてきてくださいね」

しばらく歩いてから晃は後ろを向いた。いつも一人で着ていたのでこのことを伝えるのを忘れていたのだろう

「あれ?」

だが、時はすでに遅し。そこには晃の手を握っている真と渚と後ろにいる花火以外誰もいなかった。

「早っ!!」

早くも迷子が発生しました。

第１３３話　初都会前編（後書き）

キャラ紹介
Ｎｏ００３
一之瀬（いちのせ）美紀（みき）
クラス学年：２年１組。音楽科の声音学科特待生
年齢：１６　性別：女　第一人称「わたし」
身長：１５７　胸ランクＢ　誕生日：５月５日
髪：赤髪の少し短めのツインテール。目の色は青
ジョブ：お調子者の幼馴染の第１ムードメーカー。幼馴染カラーは赤
好きなもの：人、クッキー、歌
嫌いなもの：勉強、歌が嫌いな人
記：晃が会った最初の幼馴染。
お調子者だが、彼女を嫌っている人はほとんどおらず、大人気。
「自由荘」の１号室に住んでいる。
小柄だが、力は男子にも勝るほどの力持ち。（多分幼馴染の仲では１番）
晃のことは「アッキー」と呼んでおり、そのほかにもたくさんの人をあだ名で呼んでいる。（本人の了承は受けてはいない）
歌が大好きで暇ありゃ自分のオリジナルの歌を歌っている。実力は確かなもので成績はものすごくいい。
勉強は苦手。
最近になって晃に好意を持っていたことに気づく（第１０７話　Ｍｉｋｉ／Ｐａｓｔ／Ｓｔｏｒｙにて）

第１３４話　初都会後編

晃が後ろを向いたときにはすでに幼馴染ズが消えていた。完全に晃から汗が出てきた。

「早すぎませんか？この展開」

渚と真は晃の腕にくっついていて、花火はその場に晃についてきていた。

「仕方が無いですね。まずは」

そう言って晃はギアを取り出す。まずは電話をする。

「……。出ませんね」

全員電話してみたが、誰も出てこない。

「つまり、出れないほど集中しているか、電源が切れているか、ただ気づかないだけですね」

それを見て花火が言ってくる。これではメールも通じそうにもない。

「さて、まずは結衣から探しましょうか」

そう言って晃は歩き出す。隣の２人は黙って着いてくる。どうやらこの中でものすごく緊張しているらしい。

真は昔から緊張すると黙るが、どうやら渚も同じみたいだ。

「晃さん。なんで羽衣さんからなのですか？一之瀬さんのほうが見つけやすそうなのですのに」

「逆です。むしろ美紀は天真爛漫すぎるのでむしろ探すところが多いので結衣を探すのとついでに出会ったらいい感じです」

晃は歩きながら説明する。つまり、結衣の居場所は特定できている感じだ。

「では、一番わかりやすいから羽衣さんを」

「いえ」

だが、晃の考えは違ったみたいだ。

「で、では」

「結衣は自ら僕のところへ行きますので、大丈夫です。確かに特定はしやすいですがはぐれれば自分から来ます。なぜかはわかりませんが」

晃のことの言葉で3人は怒りと安心感を持つ。怒りは結衣に晃センサーがあることで、安心感は晃が鈍感っということである。まあ、その鈍感は自分にも降り注ぐものでもあるが。

「あ、来ました」

「はやっ！！」

少しおしゃれなところにくると、結衣がこっちに向かってきた。

「アキ君！！」

「やっと見つけました」

そう言ってきた結衣は走って晃に近づいて晃に抱きつこうとした。

「ムギュ！！」

「ご、ごめんなさい」

「あきにいには抱きつきはさせない」

だが、現実はそんなに甘くは無い。見事と言えるべきの真と渚が結衣の顔を手でふさいで抱きつこうとしたのをとめた。渚は顔を下を向けちゃまま申し訳なさそうにして、真まるで野獣を狙おうとしている野獣そのものだった。

「とりあえずは結衣と透は見つけましたね」

「あれ？水戸さんはではどこに」

「あそこにいるわよ」

結衣は指を指した先には香水のコーナーで透の姿があった。晃と結衣以外それを見つけて呆れた顔になった。ちなみに晃は速攻で見つけてました。とりあえずは透は引きずってでも回収した。

「さて、次は問題の2人ですね」

「美紀と今宵ね」

美紀はさっき言ったとおりだが、今宵はなにを考えているのがまったくわからない。そのせいで特定が出来なくなっている。

「あ、メールです」

そう言って晃はギアを見た。メールの発送人は今宵だった。

「どうやら今宵は2階にいるようです」
「ある意味、一番簡単に見つけられましたね」
晃はさらに続いている文を見た。
「えっと、ＰＳ・美紀は上の階に向かったぞ」
晃のこの言葉により全員急いでエスカレータに乗った。どうやら美紀の天真爛漫をなめてはいけないことであるらしい。
「はや、早すぎませんか？」
「いつの間にあの瞬間に上まで」
「本当にだな」
なぜかいつの間に今宵は晃たちと一緒にいた。
「それは今宵にもいえるのですが」
「そ、そうか」
晃は冷静にツッコンだあと、急いで美紀を探し始めた。
「あれ？みんな何しているの？」
４階に着いたとき、エスカレータ近くに美紀がお菓子を食べながら近くのベンチに座っていた。
「な、何そこでゆっくりしているのですか？」
あの瞬間、足を滑らせた晃が聞く。

「ん。おなか減ったからお菓子が売っているところに来たの」
「お菓子。私も食べる」

美紀の言葉により真は元気に美紀のところに言ってお菓子をもらう。晃は思った。帰ったら幼馴染ズには説教が必要かと。

「しかし、本当にたくさん人がいるね」
「そうですね。ここは東皆丘と違って都会ですから」
「品揃えもいいみたいだしな」

みんな一斉に目を輝かせる。まるで無邪気な子供そのものだ。

「さて、僕はここで少し買い物がありますので」
「なに買うの？」
「必要な機会の部品でも」

そう言って晃はさらに上に上がる。

「しかし、夏色はずいぶん都会に馴れているようだな」

透が疑問に思い、花火に聞く。

「ええ。私昔都会に住んでいましたから」
「そうなのか」

意外と思い透は言う。花火はその時、顔を少し赤く染めた。まるでその時の過去にあることが起きたみたいに。

※

一通りの買い物が済んでみんなで屋上に出た。

「なんか新鮮だね～」

美紀が空を見上げながらつぶやいた。この建物の屋上はものすごく高い。渚は少し怖いらしく晃の裾を子供のように握っている。

「結衣にとってはこの高い場所は少し苦手なのでは」

晃はあることを思い出して結衣に言った。

「ううん。大丈夫よ。だって」

そう言って晃には見えない方向に結衣は顔を向けた。そして小さい声でつぶやいた。

「アキ君に恋したのだから」

その声はみんなには聞こえなかった。

第１３４話　初都会後編（後書き）

羽衣結衣（はごろもゆい）
クラス学年：２年１組　音楽科の演奏学科特待生
年齢：１６歳　性別：女　第一人称「私」
身長：１５９　胸ランクＣ　誕生日：２月９日
髪：水色のロングで左側に髪留めをしている。紫色の目
ジョブ：裏表あり学園のアイドル幼馴染。幼馴染カラーは青
好きなもの：ケーキ、ピアノ
嫌いなもの：お化け、ゴーヤ
記：晃の第２幼馴染。
晃には小さい頃から片思いしている。だが、未だに告白はしていない。
むしろ、ライバルが増えてあわてて逆に空回りしてしまう。
優しい性格だが、晃のこととなると、裏モードが発動する。このモードは自分の恋路が邪魔されたり、晃によって来る女のみに発動する。幼馴染の中で晃のみこのモードのことは知らない。
顔、スタイル、性格もいいので、男子にとっては学園のアイドルというべき存在。
沢山の男子から告白を受けているものの、本命は晃なので全てにおいて断っている。
ただいま料理を勉強中。勉強はそこそこ苦手。
晃のことを「アキ君」と呼んでいる。
ヤンデレの要素も最近入っているが作者曰く何とか押さえたいらしい。

ちなみに次回は彼女の過去編である。

第135話　Yui／Past／Story

最初は捨てられたと思った。私、羽衣結衣が5歳の頃。自由荘へ親に連れてこられた。

私は両親に言われて部屋を見てこいと言われた。言われたので私はなにも考えずに今の私の部屋、2号室のドアを開いた。そこにはある男の子の姿があった。

「まあ、傷は無いな」

その男の子の背は少し私と少し高いぐらいだ。多分年齢は私と一緒だ。

「お、お前がこの部屋に住むものか？」

男の子はぶっきらぼうな言葉を吐いて私に言った。まったく礼儀が出来ていない。

「う、うん。そうみたいだね」

私も仕返しのようにぶっきらぼうに答えた。だが、男の子は気にしていないようだ。

「お前の親はどうした？外にいるのか？」

「うん。大家さんという人と話している」

それを聞いて男の子は自分の頭をかいた。そして数日後、私は知った。この部屋に住むのは私だけだと言うことを。

※

この自由荘に住んでいるのは私のほかに一之瀬美紀っという子が住んでいた。私と同じ理由で一人で住んでいる。元気な子で意外と話しかけやすい。

そして大家さんが住んでいる大きい一軒や。そこには優輝心さんと進さんと、この前あった男の子、晃君と妹の真ちゃんがいる。

みんなお母さんの言うとおりに仲良くしている。仲良く幼稚園に通っているしいじめられることは無い。

だけどいまだにわからなかった。なんで私がここに一人で住まなければならなかったんだと。

「晃くん。何でだと思う」

「さあな、俺がわかるわけ無いだろ」

幼稚園の庭の鉄棒のところで私は晃くんに聞いた。思ったとおりの答えが返ってきた。やっぱりぶっきらぼうだ。

「ゆーちゃん。でもわたしと同じだよ。でも理由は知っているけどそれはゆーちゃんも同じだと思うよ」

美紀のその言葉は私にはぴんと来なかった。それでも、私を置いて行くなんて無いと思っていたから。だけど、現実はそう甘くは無かった。

※

数日後。
親から連絡がやっとついたのだ。だけど、親から出てくる言葉は私にとっては残酷なことばっかりだった。

「ほ、北海道？」
『うん。だからもうしばらくは帰ってこない。優輝さんの迷惑をかけないようにね』

そう言って親は電話を切った。その時の私はその親には絶望した。結局は私は一緒にはいられないということだった。

「結衣ちゃん。そこにいたの」

その時、心さんが私に話しかけてきてくれた。

「さあ、デパートに行きましょう」

その日。私たちはデパートに行く約束だった。しかもそこは遠くって人が多い場所で迷子になりそうだった。

「きゃっ！！」

人の波に飲まれそうなとき、一つの手が私の手をつかんだ。

「大丈夫か？」
「晃くん」

その時、晃くんはずっと私の手を握ってくれていた。このときわかったのはぶっきらぼうだけど面倒見のいいことはわかった。

※

時間は経って私たちは休憩といって屋上へ来た。その時間は特別な体験とかショーとかがあった。この時はピアノが弾ける体験だった。

「ゆーちゃんも弾きなよ」

まったくピアノが弾けなかった美紀が言ってきた。ちなみに真もまったく弾けなくって晃くんは別のところへ言っている。

「でも、私はきっと下手だと思うよ」

「いいからいいから」

そう言って私は無理やりピアノを弾くことになった。その時は無理だと思った。だけどなぜか指か動いてピアノが引き続ける。私にはうまいのか下手なのかわからなかった。

「すごいな。結衣!!」

その時、違うところに言っていた晃くんが私のところに言って言ってくれた。

「似合っているし、ものすごくうまいし、綺麗だ」

その瞬間、私は射抜かれた感じがした。晃くんは笑顔で言ってくるので本心なのかはわからない。だけど私は彼に恋をしたのは確かなことだろう。

この時から、私はピアノを始めた。晃くん、アキ君にもっとほめられるようにと思って。

そして数日後。

親は普通に休みを取ってきてくれた、このときやっとわかった。親は私を捨ててはいなかったことを。でも、それでも私は親には感心している。私に恋というものを教えてくれた。そしていつか、アキ君を私が落としてあげるから。

※

そして今。私はまたこの場所に来ています。アキ君は覚えているのかな。

「しかし、この場所は本当に懐かしいですね」

「う、うん」

「そういえばここが始めて結衣がピアノを弾いた場所でしたよね」

うん。

え、いまなんていったのかしら。ものすごくうれしい声が聞こえたけど。

「僕はべつのところへ行ってましたけど」

もう、そこまで覚えているなら聞いちゃっていいよね。我慢できない。

「あ、アキ君はあの時ここで言ったことって本心だったの？」

「あの時って、僕がピアノをほめたことですか」

「う、うん」

うわ～。なんかいまそう聞かれると恥ずかしいよ。

「ええ。そうですね」

私がそう思っていたときアキ君は笑顔で答えてくれた。その瞬間私は自分の顔が暑くなるのを感じて後ろをむく。

「結衣？」

だけどアキ君は気づいてくれない。でも、そんなアキ君だからこそ私は。

好きなんだから。

第１３５話　Ｙｕｉ／Ｐａｓｔ／Ｓｔｏｒｙ（後書き）

キャラ紹介
Ｎｏ００５
朧今宵（おぼろこよい）
クラス学年：２年２組　芸術家の美術学科特待生。
年齢：１６歳　性別：女　第一人称「私」
身長：１６３　胸ランクＤ　誕生日：１月１１日
髪：紫の髪でポニーテールにしている。黄目。
ジョブ：男勝りなお絵かき幼馴染。幼馴染カラーは緑
好きなもの：煮物、絵
嫌いなもの：犬、怪談
記：晃の３人目の幼馴染。
すこし男勝で学校では無口。大和撫子みたいな美貌の持ち主だが、男子には近寄りがたいらしい。女子生徒には人気で特に中学生にはものすごい人気を誇っている。
時々女子中学生に告白されるがもちろん断っている。
幼馴染の中では晃に次ぐ常識人で透を良く鞭打っている。
最近、晃のことがさらに気になっているらしい。
絵はものすごく上手く晃とも互角の絵の実力者である。
特待生でもあり、美術部にも所属している。勉強はまあまあ。
ただいま晃に料理を教わっているがモザイク料理にならないぐらいにはなった。

第１３６話　説教と集合

家に帰ってきたのはいい。だが家の中には頬を不機嫌に脹らましている瑞希と沙奈がいた。

「で、なんで先輩たちはボクたちを放置して、しかも都会に遊びに行ったのですか？」

瑞希の言葉に沙奈もうなずく。しかも笑顔で言っている分さらに怖い。

「いや、瑞希と沙奈は遊びに行くって前に知ってましたので」

「先輩と出かけるならドタキャンも心無くやります」

瑞希は笑顔で拳を握っていった。

「いや、ダメでしょう」

さすがに前まで約束していたことをしれっとドタキャンするのはダメである。だがそれを瑞希と沙奈しかねないと思いあえて言わなかった。その結果がこれである。

「まあ、お土産がありますのでそれで許してください」

「先輩の熱いキスならいいですよ」

「なに言っているのですか」

瑞希の言葉に晃は冷静にツッコム。沙奈は何かを想像してういるのかものすごくうっとりしている顔になっている。真は晃の後ろで違う意味で頬をふくらませていた。

「真さんはどう思いますか？」

天然なのかわかってやっているのかはわからないが瑞希は真に聞いた。晃も真のほうに振り向く。

「べ、別にあきにいがキスしたいならいいのじゃないの？」

「いや、しませんから」

真の言葉に晃は呆れながら言う。どうやらまだ夜は長くなりそうだ。

※

次の日。

朝のＨＲが始まるまで晃の席には沙羅が話しに来ていた。

「しかし、前見て思ったのだが、晃の剣術はどこで学んだんだ？」

沙羅が前に見て思ったことを言ってきた。確かに晃の剣術は特殊でもない分どこの剣術なのかわからない。

「それ、わたしも知りたい！！」

美紀が沙羅の前にいきなり現れた。最近美紀はどこから出てくるのかがわからない。

「独学ですよ。ただ単に刀を振っているだけです」

「まあ、特殊なこととしても無いからな。そんなことだと思ったわ」

沙羅が呆れながら言った。

「あれあれ？これは新しいツンデレパターン」

その時、大吾が沙羅の耳元にいきなり話しかけてきた。

「なっ！！」

沙羅は速攻で振り向き拳を握る。

「うるさい、黙れ、殴るぞ！！」

そして何も答えさせないように大吾の顔面を殴った。

「も、もう殴られてますよ」

晃の言葉はもうさらには通じない。沙羅の拳は大吾を殴り続ける。だが、だれもとめようとはしない。

「あ、晃さん。おはようございます」

ささらが教室に入ってきて晃の隣の席に座る。ちなみにさっきまでは沙羅が座っていたが今は大吾を死刑中なので席を立っている。まあ、正確にこの席はささらの席なのでどうでもいいが。

「さっき会長に会って今日の放課後生徒会でものすごく大切な話があるそうですよ」

「そうですか。わかりました」

そう言って晃は結衣のほうに顔を向ける。

「と言うわけで結衣。すみませんが今日は」
「うん。分かったわアキ君」
「すみません。また後日必ず」
「明日じゃないの？」
「なんか明日もだめな気がするのです」
「そうなの。うん分かったわ」
「本当にすみません」
「あの～何の話ですか？」

さっきまでの晃と結衣の会話が気になってささらは聞いてきた。

「ええ。実は今日は一緒に行く場所があったのですが、さすがに生徒会の仕事ではいけなくなってしまって」
「つまり、デートですか？」
「いや、そういうのではないのですが」
「そうですか、では何で羽衣さんはものすごく楽しみそうな顔をしているのですかね」
「いや、僕に聞かれましても」

確かに結衣は今は自分の席に座っているがなんかものすごくうっとりしている。だが晃はもちろんと言うほど何も気にしてはいない。

※

そして放課後。
全員生徒会室に座っていた。

「実は今日集まったのはほかでもないわ。学園長と話をしたところ生徒会役員を増やすことになりました」

なるほどと晃は思った。普通の生徒会でも5人だけのところは少ない。だが、少しでも増えれば負担も少なくなる。さらには1年も入れることも出来る。

「それでですね。増やすのは副会長、書紀、会計、庶務を1人ずつ増やすことになりました」

「っと、言うことは会長以外全部ですか」

「それでアキ君に相談だけど、このまま補佐じゃなくってこのまま副会長もしてほしいのです」

「ぼ、僕ですか！？」

晃以外にほかのメンバーも驚いていた。

「ちなみにこれは会長と学園長の推薦です」

「って、ことは断ることは出来そうにもありませんね」

「うん。さすがアキ君。理解が早いですね」

「分かりました。これから副会長としてがんばります」

晃はそう言って頭を下げた。回りからは歓迎の拍手がなり響いた。もうここには晃を拒むものはいない。

「っと、いうことは後は1年か2年から新しく募集しないといけないわけか」

鈴が理解していった。

「とりあえず、学園長にお願いしてポスターは貼れます」

「後は来る人どころですか」

「問題は静音目的にした心を持って入ろうとするものだな」

「それが一番問題ですよね」

鈴とささらは同時にため息を吐く。

「全員がアッキーだったらいいのに」

「それは無理がありますから」

泰子の言葉に晃はツッコム。

「とりあえずはポスターに仕事内容を書いておけばそんな心もなくなる気がしますが」

「ええ。まずはポスター作成ですね」

そう言って静音は紙とペンを取り出そうとした。

「とりあえずはレイアウトはこれでいいですか？」

「はやっ！！」

晃はレイアウトを書いた紙をみせた。作業スピードが上がっていると晃以外全員感じた。

第１３６話　説教と集合（後書き）

キャラ紹介
Ｎｏ００６
水戸透（みとおる）
クラス学年：２年２組　家庭科の衣服学科特待生
年齢：１６歳　性別：男　第一人称「俺」
身長：１７７　誕生日：１１月２２日
髪：金髪。目の色は緑
ジョブ：女子大好きハーレム幼馴染。幼馴染カラーは茶色
好きなもの：服、トマト
嫌いなもの：むさくるしい男、唐辛子
記：晃の第４幼馴染。
晃とは違い女子にものすごく興味があり、顔もイケメンなので、嫌う女子はいない。
だが、むさくるしい男子とは話すらもしようとは思っていないが、幼馴染の晃と、意外と興味が一緒だった大吾とは仲が良いい。
女子にも平気にエロ画像を見せようとする。そのたびに晃、結衣、今宵にはいつも殴られている。
最近回りが晃ハーレムばっかりで、彼がモテル要素が亡くなっている。
ちなみに第２コラボ回から扱いがひどくなっている。
服のデザイナーに将来はなりたいため、がんばって勉強中。だが、それ以外の勉強はだめだめ。

第137話　集め中

その日の夜。
晃はとりあえず瑞希と沙奈に話をすることになった。

「そうですか。わかりましたがなぜにボクに相談することが探すのを手伝ってほしいって言うのはおかしいのではありませんか？」

晃が話したあと、瑞希が不機嫌に答える。もちろん不機嫌な理由は今のセリフでわかることだ。

「お兄様。なぜに私たちに入ってくれと頼まないのですか？」
「それが無理なのですよ」

だが、瑞希が不機嫌な理由は沙奈の一言により解消する。もちろん晃だって誘いたかった。だが、これには理由がある。

「瑞希たちが生徒会に入るとおかしくなるのですよ。僕たちは肩書きは科学都市の人間です。この学園はこの町にいる人にまかしたほうがいいのですよ。それに僕と沙奈が一緒にいたら同じ制服の人が2人もいるのはおかしいからです」

つまり、これ以上科学都市の人間はあまり中心点にいてはならないのだ。しかもいつまでも瑞希たちがここにいる理由もわからない。たださえ瑞希たちは学園町の好意により学園にこれているわけなのでこれ以上の乱しは許されないのだ。それがどんな形であろうかとも。

「そういうことなので1年生のほうはよろしくです。僕も放課後

になったら何とかそっちに行きます」

ちなみに生徒会が今回集めたいメンバーは2年1人、1年2人だ。その中でも1年を集めるのは難しそうだ。

「はい。わかりました」

「お兄様のためですから。何とか男子と」

「え～ボク男子さんと話したくないです！！」

瑞希は意外と男子としゃべるのが苦手なのだ。だがなれた相手は特に晃にはベッタリだ。

「で、ではお願いします」

※

次の日の放課後。

晃はまず生徒会室に向かう。そしてその生徒会室の前では悲惨な現状だった。

「な、なんで男子生徒がこんなに。いや、理由はなんとなくわかりますが」

晃がいっているとおり、こんなに男子生徒が集まる理由はひとつしかない。それは静音狙いだ。

「まさかあのポスターを見ても怯まないとは」

ちなみにポスターはほとんど晃の手によって完成した。本当に器用な男だ。

「皆さん。とりあえずどいてくだ」
『あん！？』
「……さい」

晃が声をかけたら一気に男子生徒の目が人を殺せるような視線で晃をにらんできた。その目線はさすがの晃も引いてしまう。

「おい、こいつ生徒会の雄一の男だぞ」
「そうだな」
「とりあえず、殺そうぜ」

――相談ならもっとその標的に聞こえない声でしてくださいよ。

男たちは標的の晃に見事に聞こえる声で相談し始めた。晃はそのことに心の中でツッコンだ。

「まあ、いい。早速」

そう言って男子生徒は晃に近づく。だが、晃もここでボコボコにされる気はない。

「死ね！！」

そう言ってなんかガタイがいい男が晃にこぶしを振ってきた。だが、晃はすぐに首を少し横にして避ける。

「な、こいつ！！」
「とりあえずは戦闘防衛ですね」

そう言って晃はリボンに手を乗せた。そしていきなりリボンの先が伸び始めた。

『ひっ！！』

「安心してください。怪我はしませんから」

晃はにっこりと笑顔で言った。だが、男子にとってそれは悪魔の笑みだった。

※

「あ、アキ君。なんか音が聞こえましたけど」

「あ、こんにちはです。静音さん」

なにやら音がしていたので静音が生徒会室から顔を覗いた。晃はそれを笑顔で迎える。

「あ、アキ君それは」

「安心してください。戦闘防衛ですので」

晃は笑顔で言い続けた。晃の後ろにはぐるぐるに縛られた男子生徒が大量にいた。

「まあ、何が起こったのかは分かったわ」

「どうも」

鈴が頭をかきながらいった。だがそう言っている鈴も気持ちよかったりする。

「たっく。こんな連中ばっかり来るから困ったわ」

「本当に助かりました」
「それはいいのですが、本当に今は人が来ていない様子ですね」
たしかに今ここには晃と静音と鈴しかいない。これはつまりあたらいい生徒会役員は決まっていないらしい。
「どうします？一様僕の後輩がなんとか聞いてくれているのですが全く当たりはありませんでした」
晃がそういったとき、ギアの着信音がなった。相手は瑞希だ。晃は少し楽しみにして電話に出た。
「はい」
『先輩。見つけました』
「本当ですか！！」
どうやら本当に嬉しい情報だったらしい。
「では今すぐに行きます。場所はどこですか？」
『では、ボクの教室に来てください』
「1年5組ですね。わかりました」
そう言って晃は電話を切った。そして静音たちの方へ顔を向ける。
「やりましたよ。勧誘成功です」
「やりました」
「もちろん私たちも同行させてもらうわよ」
「はい」
鈴の言葉に晃は頷いた。

※

そのとき、生徒会室近くの廊下ではひとつの男の影があった。

「あれが生徒会」

男は少し不敵に笑った。

「俺が乗っ取ってやる」

その不敵な笑いに晃たちは待ったく。

「何やっているのですか？」
「い、いや。なにも」
「その不謹慎な本は没収する」

晃たちはそのころエロ本を読んでいるところを見つけた。

「危なかった」

結局晃たちはこの影に気づくことはなかった。

第１３７話　集め中（後書き）

キャラ紹介
Ｎｏ００７
水瀬瑞希（みなせみずき）
クラス学年：１年５組
年齢：１５歳　性別：女　第一人称「ボク」
身長：１４８　胸ランクＢ　誕生日：１２月６日
髪：髪は桃色のショートのポニーテール。
ジョブ：科学都市の元気な幼馴染の後輩
好きなもの：猫、犬、デザート全般
嫌いなもの：お化け、蛇
記：晃とは中学からの知り合いで信頼とともに好意を持っている。
晃のことは「先輩」と呼んでいる。
桃色の色宝石を所持している。
晃の信頼度は計り知れないほどで、敬語で話すのも晃が関係している。最近第一人称もかえたのもその影響である。
料理の腕は上手で、昔から家があまり裕福でないために節約生活が実にしみている。
料理もうまいが、なぜか作ったときの材料の値段が半端なく安い。
一体、彼女はどんな生活を送ってきたのかは後日談。
晃に好意をもっている人とは結構張り合う。

第１３８話　生徒会候補

「あ、先輩」
「瑞希に沙奈。ご苦労様です」

晃が来ているに気づいた瑞希教室の中からは呼んだ。晃は静音と鈴を連れて１年５組の教室に入った。そこには瑞希と沙奈と一人の女子生徒がいた。その少女は髪は赤髪で長い紐で結んでいる長いポニーテールで灰色の眼鏡をかけている

「ですが、なんで廊下の見えないところで呼んだのですか？」

だが、瑞希が晃の名を呼んだときは晃は階段を下りたすぐそこであった。そこからでは教室から姿は見えないはずだ。
ちなみに晃は瑞希の声に反応しただけで実際には瑞希の姿は見てはいない。

「それはですね。ボクの先輩レーダが反応したのですよ」
「なんですか？そのレーダーは？」

晃は呆れながら聞く。

「半円約２００メートルの中にいる先輩をすぐに見つけられます。ちなみに超高性能のどんな電波も効きませんし、さらにはこの髪の毛が逆立てばさらに１００メートル範囲が追加されます」

瑞希は自分の一本の髪を伸ばしながら言う。

「いや、それは妖怪レーダでは？てか、無駄すぎませんかすの能

力。むしろ僕的には迷惑なんですか」
「いいえ、先輩レーダーですし、無駄ではありません。プライバシーは守ります」
「いや、知っている時点で守っていませんから」
「先輩が生徒会室に行く前にたくさんの女子に話しかけられたこととかは絶対に喋りませんし、それが４人とだということも絶対に喋りません」

晃は気づいた。だんだん瑞希の背中から黒いオーラが見えたことを。ってことは完全に瑞希はいま静音と沙奈がいることを分かっていて喋っている。
晃は嫌な予感しかしなかった。そしてその予感が当たったのか晃の肩に何かの手の触感を感じた。そして同時に回りには黒いオーラに包まれたことも分かった。

「アキ君。どういうことですか？詳しい話を聞きたいのですが」
「い、いや。僕は話しかけられただけなので。それに無視するのはさすがに失礼ですので」
「ちなみに昼休みにはボクの教室に来てくれたのですが、話し終わったとき５人ぐらいの１年生の女子に話しかけられました。それで、先輩は何をしたのですか？」
「瑞希さん？声のトーンが変わっていますよ！？」

完全に瑞希は自分で自分の火に油を注いでいる。そのせいか最後の言葉になるにつれてだんだん怖いトーンに代わっていく。
ちなみに同時に回りの黒いオーラがさらに増して強くなっていく。さらには晃の肩をつかんでいる静音の手の力はさらに増し、沙奈の方からはなにかを取り出した音がした。

「あの～。静音さん痛いですし、沙奈はなぜ改造トンファーを？」

「あ、あの。すみません」

その時、その場から聞いたことのない声が近くに聞こえた。そしてその声は完全に晃を救うものとなっている。

「あ、そうでした。さっさと紹介しないといけませんね」
「そうですね。早くしましょうか。ですよねアキ君」
「そ、そうですね」

完全に2人の言葉には早くする言葉が強調されている。どうやら今の晃はこの紹介が終わっても命があるようには見えない。
しかし、彼女にも回りの黒きオーラを感じているらしくなかなか話そうとはしない。しかし、それを分かったのか静音は黒いオーラを消した。

「では、紹介お願いします」
「はいです」

静音に続けて瑞希は黒いオーラを消す。沙奈はオーラを消すのと同じときに改造トンファーをしまう。ちなみにこのトンファーは沙奈の専用鞄にしまっている。ちなみについている缶バッチには『開けたら殺します♪』っと、書かれている。

やっと話せる雰囲気になったのか少女は安心した表情になった。そしてゆっくり息を吸ったり吐いたりしている。どうやら緊張しているらしい。

「は、始めまして。鳶木宮（とどろきみや）と申します」

少女はもじもじしながら言った。だが、晃たちはその少女の、宮の苗字は晃たちは知っている。

皆さんは覚えているだろうか。勝手に生徒会を適ししている風紀委員のことを。そしてその中で晃たちと対峙した少女、驫木刑のことを。ちなみに彼女は軽く１００話以上出てきてはいない（作者の記憶が正しければ）。

「どうも、３年生徒会会長の柊静音です」
「同じく3年、副会長の荒井鈴だ」
「２年の副会長の優輝晃です」

全員で挨拶をした。だが、なにか宮は不思議そうに晃を見つめていた。見つめられている本人の晃もその視線を感じた。

「な、。何か付いていますか・」
「いえ、あの～もしかして会長と付き合っている人ですか？」

「「「「はあ！？」」」」

今の言葉により、晃を含めた鈴、瑞希。そして無口な沙奈も驚いていた。逆に静音は「キャ」っと言って顔を赤くして頬をもっててれていた。

「ど、どういうことですか。先輩！？」
「お兄さま！！」
「あんたら、いつのまに」
「とりあえず、僕の話聞いてください」

みんなの言葉に晃は冷静に止めた。もちろん晃は静音とは付き合

ってなどいない。むしろ誰とも付き合っていない。

「静音さんもなんとか言ってくださいよ」

「私と、アキ君が、付き合っている、恋人、アキ君が私とウフフフフフ」

「完全に自分の世界に入っているわね」

晃は静音に助けてもらおうとしたがそれは今は無理だった。ただいま静音は自分の世界に入っているからだ。これでは話ができない。

「驫木さん。その話はどこから?」

「私のクラスで噂になっています」

「どういう噂ですか」

晃は疲れたように肩を落とした。

その時、晃のギアが鳴った。どうやら誰から電話が来たらしい。

「はい」

『あ、晃さん』

この声はささらだ。声のトーン的にいいことがあったのだろう。

「どうかしたのですか?」

『2年生のほうで生徒会に入りたいという人を見つけました。今から生徒会室に連れて行きたいのですがどうします?』

どうやら本気で言いにニュースだった。2年生から入ってくれればあとは1年を見つけるだけだ。だがとりあえずこちらもなんとかしたい。

「わかりました。こちらも1年の方から見つけましたので連れて行きます」

『はい。わかりました。それでは』

そう言ってささらは電話を切った。これで少し楽しみが増えた。

「さあ、行きますよ」

静音を引きずって晃たちは生徒会室に向かった。

第１３８話　生徒会候補（後書き）

キャラ紹介
Ｎｏ００８
星平沙奈（ほしひらさな）
クラス学年：１年５組
年齢：１５歳　性別：女　第一人称「私」
身長：１４８　胸ランクＡ　誕生日：４月２１日
髪：金髪のツインテール。
ジョブ：文武両道天才少女
好きなもの：晃、運動、勉強
嫌いなもの：恋路の邪魔な相手
記：晃たちの後輩で団殺者の中で一番の後輩。
運動神経は中で一番である。頭もいい。
晃と競える文武両道の持ち主。だが、ずっとみんなにいじめられてきてそのことを救ってくれた晃のみ心を開いているがそれ以外の人には無口。
運動神経は昔からの良かった。
礼儀も良く、晃のことは「お兄様」と呼んでいる。
晃に好意を持っている。
瑞希とは犬猿の仲である。（特に晃の取り合いの）
晃と一緒に団殺者の仕事で東の丘学園入学。
制服はＹシャツのみ星道学園のものである。

団殺者
特殊能力はない。
武器は改造トンファー。
このトンファーからはさまざまな仕組みがほろ越されている。
・チェーン：先端部分が鎖につながって遠距離攻撃ができる。

・ナイフ：短いところからナイフの刃を出す。
・スピア：ナイフのところを換装して針を出す。
・ニードル：トンファーからとげを出して硬いものを破壊する。
異名は『戦士（セイバー）』と言われている。

第１３９話　メガネ＝性格

晃たちは生徒会室に戻った。ちなみに瑞希と沙奈は家に帰ると伝えておいたのでこの場にはいない。生徒会室には人気がするのでもすでに花火たちが戻ってきてるのだろう。

「ただいま戻りました」

そう言って晃は生徒会室を開けた。そしてそこには知っていた人物がいた。

「あきにい」

「ま、真。一体君がどうして」

「まこちゃんが生徒会に入りたいと言ってきたのです」

驚いた晃に花火が説明を始める。しかし、真を含めた幼馴染たちにはこの生徒会のことは伝えていなかったはずだが。晃がそう思った時、真がある一枚の紙を晃に渡した。

「あ、そうでしたね」

犯人は晃が書いたポスターだ。真もこの学園の生徒。このことを知らないのはおかしい。だが、そうだとしたらほかの幼馴染、特に結衣が真っ先に来そうなのだが。もちろん晃もそのことを分かっている。鈍感の癖に勘だけはいい。

「結衣たちはいないのですか？」

「みんなとじゃんけんして勝ったから私が来たの。悪い？」

「悪くは内のですが、それは手間を取らせましたね」

「いいの。勝ったから」
「ん？なんか言いましたか？」
「！！。な、なんでもない」

小さい言葉で言った最後のセリフは晃には届かなかった。さらには晃に聞き返されてしまったので赤くなった顔を左右に振りながら晃の近づいてきた顔を抑える。

その光景を静音たちは暖かく……見守ってはいなかった。むしろ嫉妬をしていた。鈍感でよかったのか、悪かったのかよく分からない気持ちであった。

「これでとりあえずは二人集まりましたね」

結果、真も生徒会の役員に決まった。だが役所はさすがにあと１人来るまでは決められない。そのため今は肩書きだけであるが真は書紀、宮は会計となった。

「しかし、初めての後輩か。いい気分だよ」
「ですわね」

泰子の言葉にささらが微笑みながら返す。宮もなんか照れているみたいだ。

「あれ？メガネ曇っているよ」
「そ、そうですか？」

宮のメガネが知らぬ間に曇ってしまった。あれか、緊張してしまったら曇ってしまうみたいな感じの。その時、泰子が宮のメガネを手に取った。

「ほら、取ってあげる」
「あ、そんなの悪いです」
「いいって、いいって」

そう言って泰子は宮のメガネを顔から外した。外してしまった。

その瞬間、宮の目つきがいきなり変わった。

「うっし、やっと出てこれた！！」

そして発した言葉はまるでさっきまでの宮とは違ったものだった。明らかに何かがおかしい。晃は一瞬考えた後、泰子が持っている宮のメガネをみた。

（まさか）

晃は呆れながら確信した。

「驫木さんはまさかメガネを取って性格が変わってしまったのではないのでしょうか？」
「なに！？その漫画みたいなパターン！！」

晃の言葉に泰子がツッコム。だが、今はそれぐらいしか考えられない。

「とりあえず、驫木さんにメガネを返さなければなりませんね。あれではうまく話し合いが出来ないでしょう」
「そうだな。晃、私たちで止めるぞ！！」
「はい」

そう言って晃と鈴は前線にでた。宮は対抗するように拳を鳴らす。やる気はあるようだ。

「では、私が相手だ」

そう言って鈴が宮に向かって飛び掛る。だが、宮は高く天井ギリギリにジャンプした。鈴は壁にそのまま激突する。しかし、なんていう身のこなしだ。

「どうしたどうした?俺を捕まえるんじゃないのか?」

「だ、第一人称まで代わってます」

「このやろ~。私をなめるなよ!!」

そう言って再度鈴は宮に飛び掛る。だが、軽い身のこなしでまた避けられて次はテーブルに突っ込む。しあkし、鈴もそこではやられないと思い、すぐに起き上がる。

「まだまだ!!」

「俺の敵では……」

そう言って宮はうまくよけて鈴の後ろを取る。そしてそのまま腹を腹を回して確保する。さらに鈴をその状態で持ち上げる。

「無い!!」

思いっきり鈴を地面に叩きつける。鈴は完全にKOされた。だが、その瞬間を晃は見逃さなかった。一瞬にして宮に近づいて銃を顔に向ける。

「そこまでです。鷹木さん」
「お前、何言ってやがる」

そう言って宮は晃の銃を持っている腕を捕まえ、そのまま後ろに放り投げる。

「うわぁぁぁぁぁ！！」

晃は叫びながら壁に激突。なんていう力だ。

「いいでしょう。僕も本気であなたを止めます」
「ほう、それは楽しみだ」

晃は立ち上がりながらドアの前に立ち上がる、そして。

「瑞希、行きますよ」

そう言って思いっきりドアをあける。そしてそこには瑞希と沙奈の姿が。どうやら二人とも着いてきたらしい。やはり新しい生徒会の人が気になるのだろう。特にそれが女子だと。

「せ、先輩はいつから気づいて」
「尾行からです」

晃はサラッとすばやく答えた。

「せめてもっと遅く気づいてください！！」
「それよりも瑞希、色宝石」
「え、あ、ハイ！！」

そう言って瑞希は手首にある自分の色宝石を桃色に輝かせる。同時に晃のリストバンドから白い光が輝きだす。そしてまた銃を宮に向ける。

「行きます」

そう言って晃は銃を放った。だが球はなんと花びらの束になっている。その花びらの束は宮の体を拘束する。これでもう動けないはずだ。

「これで終わりです」

そう言って晃は宮のメガネを宮の顔にかける。そして宮の雰囲気は落ち着いたようになった。どうやら予想は当たったらしい。

「ご、ゴメンナサイ」

気がついたのか、宮はすぐにみんなに頭を下げた。

第１３９話　メガネ＝性格（後書き）

キャラ紹介
Ｎｏ００９
神下舞（かみしもまい）
クラス学年：２年２組
年齢：１６歳　性別：女　第一人称「私」
身長：１５９　胸ランクＣ　誕生日：１１月１１日
髪：黒髪でのロングで後ろ髪をリボンで軽く結んでいる
ジョブ：おとしやか癒し系美少女
好きなもの：ドーナツ、動物
嫌いなもの：男（晃は例外）お絵かき
記：晃と同じ日に転校してきた少女。
非常におとしやかで多少のことでは怒らない。
実は東皆丘の町長の孫娘である。
晃には好意を持っている。そのため、男子で晃のみ彼女と話すことが出来る。
今でも透とも一度も話したことが無い。
簡単に言えば男性恐怖症でもあるかもしれない。（身内も例外）
晃の秘密を知ったのでこれから協力していきたいと思っている。
運動は苦手だが、頭は良い。
ほかに霊感が強いらしい。絵は壊滅的。悪いほうで。
不思議な笛を持っており、その音色は聞いたものは癒されて痛みを感じなくなる。

第１４０話　謎は疑問のあとで

とりあえず、宮の暴走はメガネをかけなおした瞬間に直った。しかし、今のは明らかに今までの宮ではないことは確かだ。

「話して、くれますか？」

晃は宮の顔まで腰を下げて優しく微笑みながら聞いてきた。怒ってはいない。多分、彼女も頭を抱えていることだと分かっているからだ。

「せ、先輩。はい」

晃を、生徒会のみんなを信用してくれたのか、宮は話しを始めた。

「今の私は、どうやらメガネやゴーグルをつけることで今の私が出てきます。ですが、それが外されると第二の私、まったく性格が違う私が出てきてしまいます」

「確かに、おとなしいと思ったのにいきなり私を倒せるほど活発になっているものねえ」

「お恥ずかしい限りです」

確かにだが、運動神経がいい鈴や団殺者（ディスター）の晃を吹っ飛ばすのは活発どころではない気もする。

「そのせいで、お姉ちゃんは強制的にあの姿で風紀委員にしようとしているのです。確かに人の役には経ちたいですが、力だけではだめな気がしまして、なら、生徒会がいいと思いって、それで水瀬さんたちに話をかけられて完全に決心したのです」

やはり、あの姿は本人にとってはコンプレックスだったようだ。
多分、この学校生活の中でずっと隠して起きたかったと思う。晃はそっと宮の肩に手を置く。

「大丈夫です。ここならみんなそんなこと気にしないでくれます。ここは風紀委員とは違うのですから。もし、ほかに悩みがあったらぜひ言ってください」

「は、はい。先輩！！」

宮は喜びながらお礼を言った。これで何とか宮の問題も解決できたようだ。だが、違う問題がまだ残っている。それは、最後の一人の生徒会役員を探すことだ。目標は1年生。そして晃的には男子が入ってきてほしい。

（なんかますます僕が肩が狭くなってきますね）

だが、考えは真面目な男子高校生だ。

「では、今日はここまでと言うことですのでまた明日探しましょうか」

『はい』

そういうことで今日の生徒会は終わった。

※

夜。料理を作りながら晃は近くにいる真に声をかけた。

「しかし、真が入ってくるなんて驚きました。部活は大丈夫なの

ですか？」
「うん。そのことは話をつけてきた」
「なにか条件をつけたのですか？」
普通、この時は何かの条件をつけて了解してもらったのだろう。
晃は兄として知りたかった。
「うん。私がいないときはあきにいを利用してくださいって言っておいたよ」
「え！？」
さすがにその言葉は晃は聞き逃せなかった。それは完全に自分が関係していることだったので当たり前だ。
「何ですか？その無茶振りは」
「あは☆」
真は速攻でものすごく無邪気な笑顔になった。だが、晃にはその笑顔は効かない。完全に晃は笑顔で聞いていたが後頭部に小さく怒りマークが出ていた。
「真のご飯は少し少なめでいいですかね？」
そう言って晃は台所へ戻る。その言葉を真を見逃さなかった。あわてて台所へ向う。ご飯のことになると相変わらずである。
「あ、あきにい！！」
「冗談ですよ。ですがそれは一度本人に連絡して了承を取ってください。僕はいいですが、これからの世の中ではそれはやめたほうがいいですよ」

晃は笑顔で言ってご飯を作る。その顔で本気で冗談と言うのが分かる。だが、確かに真がやったことは許されることではない。

「ゴメンナサイ。あきにい」

「反省しているならいいですよ。さあ、ご飯で来ますので皆さんを呼んでください」

「うん」

そう言って真は台所を出る。その時に真はあることを思った。

（どうやってあの怒りマークを出したのだろう）

一種の不思議である。

※

次の日の昼休み。晃たちは1年のフロアに来て生徒会役員にやってくれる人を探していた。だが、一向に現れない。

「見つかりませんね。晃さん」

「そうですね」

「そんなことより、あきにいから離れろ!!」

真が晃の腕にくっついていたささらの体を引き剥がす。ささらはいきなりのことで驚いていたが、晃は平然な顔をしていた。

「なんですか？真さん」

「なに普通にあきにいにくっついているの？」

「べ、別にいいのではありませんか」

二人は顔を近づけてにらみ合う。ちなみに晃はさっさと前に進んでいる。

「お、おい。そこの2年生!!」

その時、後ろから声が聞こえた。呼んでいるのは完全に晃のことである。晃は普通に振り向く。そこには背がものすごく低い女の子がいた。

「お主、確か生徒会のやつだよな」
「それがどうかしたのですか？」
「この私が、入ってやる!!」

なにか嫌な予感がした晃であった。

第１４０話　謎は疑問のあとで（後書き）

キャラ紹介
Ｎｏ００１０
源泉（みなもといずみ）
クラス学年：２年１組
年齢：１６歳　性別：女　第一人称「あたし」
身長：１６０　胸ランクＢ　誕生日：６月２５日
髪：栗色のショートカット。右前髪に髪留めをしている。
ジョブ：好奇心盛りだくさん第２ムードメーカー
好きなもの：運動、ゲーム
嫌いなもの：炭酸、お化け
記：晃の自称相棒。
お調子者で美紀に続くムードメーカーである。
勉強は苦手だが、テスト前日は全部一夜漬け。
逆に運動は大得意。晃達の中では動く担当。
棒術に自信があり、持っている棒も電脳式の棒を使用している。
ゲームは美紀に全勝できるほどの実力を持っている。
炭酸はなんかトラウマがあるみたいで飲めない。
最近、出番が少なくって悩んでいるらしい。
ちなみに出番が多かったのに人気投票で０票だった。

第１４１話　ハーフ&キャッチ

晃の前には腕組をしながら体の小さい少女が独りいた。そして言ってきた言葉で晃はどう返答したらいいのかわからなかった。

理由は一つ。なぜに小学生がここにいるのかだった。確かに渚みたいな子もいるが、その渚よりも背が低いのだ。多分、１４０も届いてないのだろう。髪型は金髪でさらにはツインテールだ。そしていかにも顔の形は外人だ。

「えっと。迷子ですか？それに対しては思い切ったことを言いますね」

晃はとりあえずしゃがんだ後、微笑みながら話をした。言葉は完全に混乱しているのは間違いない。

「む、お主、この私を子供扱いしているな！？」

「……。何歳ですか？」

晃はとりあえず、年齢を聞くことにした。だが、この質問は逆効果だったらしい。

「お主、レディに年齢を聞くとは何事か！！」

（いやいや、ここにいる時点でその答えは無いですよ！！）

とりあえず、晃は心の中でツッコンだ。だが、これではきりが無い。

「あれ？お兄様？」

「さ、沙奈。いいところにきました」

その時、晃にとっては救世主とも言える声が聞こえた。振り向いてみるとそこには沙奈がいた。一年生である沙奈はこの子のことを何か知っているはずだろう。多分。晃はとりあえず、その1%に賭けてみた。

「この子のこと、何か知ってますか？」

「私はお兄様以外に興味ありません」

見事に思っていた答えが返ってきた。沙奈は晃と関係あるものしか覚えようとしない。たとえば晃が覚えたことや、晃の友だちとかをそれ以外はおぼえようとはしない。記憶力はいいのにもったいない。

「先輩。どうかしたのですか」

「瑞希。ちょうどよかったです。この子のこと、何か知ってますか？」

「ああ。知ってます。1組のハルカ・奈良・グリフィンドールさんです」

「そ、そこの女。なぜに私の名前を」

瑞希の言葉にハルカは一段早く反応した。だが、お構いなしに瑞希はアリアの説明を続ける。

「留学生で1年生の中では有名人ですが、その様子だと2年生はまだ見たいですね」

「やはり、ハーフですか」

「な、なぜに分かった！！」

晃の呟きをハルカが聞き返す。だが、これは別に驚くことではない。名前に感じが混ざっているならそういう考えが出来る。ただ、ハルカにはそういう考えは無かったみたいだ。

「背は低いですが、確か１６歳ですよ」

「な、何でその情報を！！」

また瑞希の言葉にハルカは聞いてきた。だが、晃はわかっていた。どうせ自己紹介で年齢を言ったのだろう。それもちゃんとした高校生と表すために。しかし、ハルカはそのことを忘れているみたいだ。

「まあ、高校生と言うのは分かりました。では、着いてきてください」

「お、どこに行く？」

いきなり歩き出した晃にハルカは止めに入った。

「生徒会室ですよ。生徒会に入りたいのですよね」

「あ、おお。そうだった」

そう言ってハルカは晃についていった。

※

生徒会室の鍵は会長と副会長と顧問が持っている。なので今の晃にもここの部屋を開ける権利があると言うことだ。

「とりあえず、この紙に名前、出席番号を書いてください。君以外に候補がいなかったらそのまま決まりますから明日の放課後に必ずここに来てください」

「わ、分かった」

とりあえず、決まることは決められた。これで生徒会は全員集まった。

※

夜。優輝家でみんなで晩御飯を食べていた。献立は餃子である。

その時結衣はずっと自分の色宝石を見ていた。

「も～らい」

「え、あ、ああ！！」

その瞬間、美紀が結衣の餃子を一つつまんだ。すぐには反応できずに結衣が叫んでいるうちにその餃子は美紀の口の中に。

「何やっているのですか？」

美紀の行動に晃は呆れながらいう。結衣はなんか悲しい眼をしている。まるで主人を求めている子猫だ。

「だってずっと腕輪を見ているから」

「そういえばそうですよね。どうかしたのですか？」

「ううん。なんでもない」

そう言っているのは嘘だ。実際には今まで晃の色宝石に結衣のみ反応してはいない。そのことを結衣はとっても気にしている。

「はあ」

「ゆーちゃん。そんなに餃子で悩むなんて」
「いや、違うと思いますよ」

美紀の勘違いを鈍感王がツッコム。何気にこういうことは理解が早い。やはり幼馴染だからこそ分かりやすい。

「そんなんじゃないと思いますが、これ食べて少しは元気になってください」
「アキ君」

晃はそう言って結衣の皿の上に自分の餃子を乗せる。そのことに対して結衣はとってもやさしさを感じた。

（あ、アキ君の箸で取った餃子、アキ君の皿にあった餃子）

その瞬間、結衣は悩んでいたことを忘れて一気に妄想に入ってしまった。そして食事を再開する。

「よかったです。元気が出て」

そう言って晃は自分の食事を再開する。この男は今でも鈍感王だ。だが、問題はまだ終わっていない。

「先輩！！何で結衣さんだけに先輩の餃子を渡すのですか！！」

もちろん回りの今の行動を見ていないはずは無い。瑞希が断固講義する。そして先輩という部分を強調して喋る。隣にいる沙奈もうなずく。

「いや、別に意味は。てか、瑞希は取られていませんよね」

「水戸先輩。これどうぞ」

そう言って瑞希が見せたものはもはや餃子が無い皿のみだった。
沙奈も同じ状態の皿を見せる。

「無いよね。俺に何をしろと、、なめろっていうことじゃあるまいし！！」

「なめるって、水戸先輩は変態？」

透の言葉に瑞希と沙奈は完全に引く。今夜は以外にもにぎやかな夜だった。

第１４１話　ハーフ&キャッチ（後書き）

キャラ紹介
Ｎｏ０１１
藤森渚（ふじもりなぎさ）
クラス学年：２年１組
年齢　１６歳　性別：女　第一人称「私」
身長：１４６　誕生日：３月２５日　胸ランクＡ
ジョブ：ちいさいがんばりや図書委員
髪：黒髪でショートカットで右側におおきい丸型の髪留めをしている
好きなもの：本、かわいいもの
嫌いなもの：お化け、ゴキブリ
記：口数が少ない図書委員の美少女。
基本誰とも話さないので友達がいない。だが、男子には非常な人気を持っているがまったく気づかない。
だが、恋愛はそんなに鈍感ではないため、自分の初恋をすぐに認めた。
一目惚れで晃に好意を持っている。
無口だが、非常に頑張り屋で何事にもチャレンジ精神を持っている。
運動はニガテでだが、本が好きなため、頭は晃の次に良い。
かわいいのもが好きで目がない。その状態は本当の小学生そのものだ。
人気投票が一番登場が遅かったにもかかわらず上位に来たので最近出番が増えてきた。作者が結構気に入っているキャラでもある。

第１４２話　生徒会集結

次の日の放課後。

とうとう生徒会が全員そろった。まずはみんなの自己紹介から始まる。最初は会長である静音からだ。

「柊静音です。会長としてがんばります」

静音は一礼した。同時に全員から盛大な拍手をもらう。次は副会長であり、３年の鈴だ。

「荒井鈴よ。副会長よ。よろしくね」

静音と同じく盛大な拍手をもらう。次は生徒会でなんやかんやで男子一人だけになってしまった晃である。

「副会長の優輝晃です。男子一人だけですがよろしくお願いします」

「ちなみに私の補佐役です」

一礼する晃の横で静音が微笑みながら言ってきた。だが、その言葉を聞き逃がすものはいなかった。真とさららと泰子が同時に立ち上がる。

「静音さん。あきにいが補佐なのは去年までですよね！！」

「か、会長、私は晃さんの補佐をします！！」

「ボクはアッキーを奴隷にしたいです！！」

「泰子のはおかしいですよね！！」

静音に言ってくる女子3人。まあ、最後のは確かにおかしいが。
そこのところは晃は聞き逃さなかった。1年生の2人はポカーンとしている。

「ささら。次の紹介お願いします」
「は、はい」

晃の一言でなんとかささらは元に戻った。てか、さっきの言葉は晃はツッコまないのか。ささらは改めてコホンと技とらしくせきをした後、自己紹介を始めた。

「書紀の波木ささらです。よろしくお願いします。また、晃さんの補佐を担当します」
「え、補佐って」
「アキ君。そこは後で話します」

ささらの言葉に疑問をもった晃は話しかけようとしたが静音に止められた。どうやら静音が分かっているみたいなので晃はこれ以上何も言わなかった。

「生徒会会計の瓜生琴美。よろしく」

次に紹介したのは琴美で静かにそう言った後、席に座った。だが、この時またある疑問が出来た。だが、それを感じたのは真だった。

「あの、去年は波木先輩が会計で瓜生先輩が書紀でしたよね」
「それはですね、ささらは次期会長になるのでそのために今より仕事が多い書紀になったのです」
「あれ?でも普通は副会長のあきにいが次期会長に」

確かに、その言い分だと次期会長は晃と言うのもたとえられるはずだ。だが、これにも明白な理由がある。

「残念ながら僕は仕事上のことで会長はなれないのですよ」

「あ、そういうこと」

晃が言う仕事とはもちろん団殺者《ディスター》のことだ。いつ仕事が入るか分からないのであまり大きすぎる役所にはつけないのだ。だが、逆に生徒会だとコネが効くために入って損はないはずである。

「そういうことです。あ、そういうことですか」

晃はなにかわかったような顔をした。真はその理由は分かっていない。

「じゃ、次はボクだね。学園唯一のボクっ娘の福本泰子だよ」

「自分で言いますか？」

「それに瑞希ちゃんもボクっ娘になってますよ」

「ま、マジで！？」

そういえば泰子とこっちに来たときの瑞希とはまだ会っていないのだ。だが、まずそのことを自分で言うほうがおかしい。

「では、次は新しい生徒会に入った人たちですね。まずは真ちゃんからお願いね」

「は、はい。新しく書紀になった優輝真です。一様あきにいの妹です」

真は一礼をした。しかし、真の敬語はなんだか新鮮だ。

「じゃあ、次は会計の人」

「はい。新しく会計になった驫木宮です。少しおかしいですがよろしくお願いします」

「？」

宮のことの言葉は誰もツッコまなかった。まあ、実際あれを見てしまったわけなので。ハルカは完全になんのことなのか分かっていない。まあ、宮は普通は真面目な女の子なのでメガネさえ外さなければ大丈夫である。

「じゃあ、次は私だな。庶務のハルカ・奈良・グリフィンドールだ。よろしく」

これで全員の自己紹介が終わった。終わった後、静音が立ち上がった。

「それでは、この生徒会のルールを発表します」

「ルールですか？」

「ええ。新しい生徒会になったから新しい規則を考えました」

ささらに聞かれて静音は眼を輝かせながら言ってくる。そしてホワイトボードに何かを書き出した。

「まずは、生徒会役員は下の名で呼びあうことです。あ、ニックネームはありです」

「はあ、それって距離を近くに感じるためですね」

晃は納得していった。実際、団殺者（ディスター）はそういう決まりで下の名で

呼び合っていた。今はみんな自然に呼び合っている。

「そういうことですから新メンバーも下の名で呼んでくださいね」

「宮ちゃんの場合はこうしたほうが分かりやすいですしね。僕と真の場合でも」

晃は早速なじんでいる。さすがいろいろ器用な男だ。

「は、はい。よろしくお願いします晃先輩」

宮はいきなり名前を呼ばれて驚いているのか顔を赤くしている。

「しょうがないな。この私のことも名前を呼ぶことを許そう」

「いや、ハルカちゃんの場合は苗字は長いので呼びたくは無いです」

たしかにグリフィンドールと呼ぶのは少し長すぎる。だが、ここで真はある疑問を思い出す。

「そういえばあきにいさっきなにか分かったような顔をしていたよね。どうしたの」

「ええ。実はさっきの疑問が分かったからですよ」

確か晃の疑問はなぜにささらが晃の補佐になるということである。副会長である晃に補佐などいらないはずだ。

「実際は補佐ではなく、一緒に行動するためのパートナーっと言うわけです。生徒会での活動中はあらかじめ決められたパートナーと一緒に行動してもらいます。それに状況に合わせるために1人2人決めさせてもらいます」

つまり、仕事によってパートナーを切り替える必要がある。そのために一人ひとり違う仕事をあらかじめ決めておく必要もある。

「たとえばアキ君の場合、雑務のときはささらちゃんと、重要な仕事のときは私と行動してもらいます。実際アキ君によって1人一人のパートナーが代わります」

「ちょっと待ってください。なんか僕が重要な立ち位置に来ているような」

「まあ、晃がほとんどの仕事をこなすからな。それでいいだろう」

「いいなぁ～ささ」

泰子はうらやましそうにささらに言う。ささらにとっては晃のパートナーっというのは喜ばしいことだ。真も言葉こそ出してないがうらやましがっている。

こうしてさらににぎやかになった生徒会だった。

第１４２話　生徒会集結（後書き）

キャラ紹介
Ｎｏ００１２
星平沙羅（ほしひらさら）
クラス学年：２年１組
年齢　１６歳　性別：女　第一人称「私」
身長：１５７　誕生日：７月１日　胸ランクＣ
ジョブ：風紀委員一のやんちゃ戦闘娘
髪：金髪のポニーテール。
好きなもの：喧嘩、楽しいこと
嫌いなもの：面白くないこと
記：風紀委員の第４班の班長である。
喧嘩が好きでそのため身体能力は強い。頭もいい。
聞き分けはいいが、話すまでが大変である。
鷺木とは違って、上から目線ではないため人望は厚い。
晃にはある事件で好意を持つようになり、この作品初のツンデレキャラとなったが作者がツンデレを書くのが苦手なためすこし変な時がある。

第143話　Ｒｅｖｅｒｓｅスランプ

「晃、すごいのも見つけたぞ！！」
「ど、どうかしたのですか？沙羅」

教室の中、沙羅が晃のもとにきてある雑誌を見せる。そのページには一人のキンニクボディーの男が載っていた。

「さ、沙羅。これを僕に見せて何を」
「あ、晃はこんな風に鍛えようとはしないのか？」

目をキラキラ輝かせている沙羅に対して晃はため息を吐いた。

「なるわけ無いですか」
「え～。なったらいいのに」
「絶対に嫌です」

晃はキッパリと言った。もともと晃は力を利用するものではなく器用さを利用するものである。つまり、豪よりも柔である。

「もうちょっと私の好みになってもいいのじゃないの」
「ん？なんか言いましたか？」
「だ、黙れ！！」
「何でですか！？」

小さい声で言った沙羅にその言葉を聞き取れなかった晃は聞いてきたが、すぐに拳が飛んできて晃は首を高速のように避けた。

「な、なんですか？いきなり？」

「うるさいうるさい！！聞きたかったらこのような筋肉になれ！！」

「絶っっ対に嫌です」

ビシッとさっきの雑誌を見せた沙羅。だが、その雑誌はさっき沙羅が持っていたものではない。それを見せた瞬間、晃の頭から怒りマークが出てきた。沙羅の後ろでは一人の生徒があたふたしている。

「どうした晃？」

「さら、それをよく見てください」

「ん？」

沙羅は見せた雑誌の表紙を見る。そこには一人の女性がものすごくエロイ滑降をしている。完全にこれはエロ本である。

「な、なんだこれは！？」

「てか、ここでそんなものを読まないでください！！」

この雑誌を持っていた男子生徒は沙羅と晃のダブルツッコミをもらった。もちろんあの本は先生に没収されました。

※

晃は先生に呼ばれて仕事を手伝った後、買い物をしようと思いながらバックを教室に取りに来て帰ろうとした。だが、その教室には一人の少女が席に座りながら悩んだ顔でいる。

「桜さん？」

「ゆ、優輝君」

そこにいたのは栞だった。振り替えた栞は晃が目の前にいるのか不安な顔を隠そうとして微笑んだがなんか無理をしている感じは晃もわかった。

「桜さん。どうかしたのですか？」
「う、ううん。なんでもないよ。心配しないで」
「そうですか」

下手に突っ込むと嫌な人に見えてしまうために晃はこれ以上の詮索をやめて自分の机の上にあるかばんを持った。

「それでは、僕はこれで」
「うん。じゃあね」
「お、いたいた。優輝！！」

晃が栞に挨拶してから教室から出ようとした時、一人の少年が野球のユニホームをきてこっちに来た。この人は前に会ったことがある人だ。

「五十嵐先輩。お久しぶりです」

3年の五十嵐斗馬は以前、生徒会にスランプを相談しに来た野球部の先輩である。ちなみにD〇スランプとはかかわりは無い。

話しに聞くところによると野球はただいま絶好調みたいだ。だが、それならなぜに晃のところに来たのか。

「優輝。実はお願いがあるんだ」
「話しに聞きますとまたスランプではないみたいですが」
「実は、次は野球部全体の問題なんだ」

「え！？」

晃はとりあえず話しは聞くことにした。この時、晃たちの話を栞はずっとこっちを見て聞いていた。

※

次の日の放課後。晃は体育着を着せられてグラウンドへ来ていた。

「ほ、本気でやるのですか？」

「頼むぜ優輝！！」

斗馬は晃に向って叫ぶ。対して晃は小さくため息を吐く。

こうなった理由は実は野球部はただいま絶賛スランプ中らしい。大丈夫なのは斗馬のみである。それでスランプを治すために晃にお願いしてきたのだ。さらにはそれだけではなく、そのスランプ人の相手を晃にしてほしいのだ。

「仕方ないですね」

晃はとりあえずはピッチャーの人のスランプ担当である。とりあえずは何が悪いのか実際自らバッターボックスに立ってバットを構える。

「遠慮しないで投げてきてください」

「お、おう」

そう言って一人目のピッチャーが晃に向かって振りかぶって投げ

た。その投げた球はものすごく遅く、なぜかリバンしないほうが驚くほどのものだ。もちろん晃は遠慮しないでかっ飛ばした。筋力が無いが、そのまま行けばスリーベースはかくてしている距離だ。

「しょ、初心者に打たれた」

「いや、あれを打てないほうが、問題だと思いますよ」

晃は呆れながら言った。

「次の人お願いします」

この後もこの部のピッチャー2人の球を晃は容赦無く打ちまくった。これは果たしてスランプどころなのか。

「質問します。最近試合をしましたか？」

「ああ。3月に入った時に一度な」

「相手はどこですか？」

「身体障害者の野球部と試合をした」

なるほどと晃は思った。身体障害者といっても目が見えなかったり耳が聞こえなかったりする人がほとんどだ。彼らは多分声を出し合ってチームワークを作っている。それさえ出来れば強豪のチームとも試合が出来るほどにもなるはずである。

「つまり、思いっきり敗れてスランプしたと言えるのですね」

晃は声に二人はうなずく。

「優輝君。ボールだけど」

その時、後ろから体育着を着た栞が晃に声をかけてきた。彼女はどうやら球拾いをしてくれたようだ。

「ありがとうございます」

今ここに栞がいるわけだが、栞は野球部のマネージャーではない。晃と同じ時期だけマネージャーをするといってきたのだ。そして、晃はいまここ2つのも依頼をこなしている最中なのだ。

第１４３話　Ｒｅｖｅｒｓｅスランプ（後書き）

キャラ紹介
Ｎｏ０１３
桜栞（さくらしおり）
クラス学年：２年１組
年齢　１６歳　性別：女　第一人称「私」
身長：１５８　誕生日：４月２２日　胸ランクＤ
ジョブ：常識人の風紀委員権新クラスメイト
髪：薄い紫のショートヘヤー。
好きなもの：ウサギ、アイスクリーム
嫌いなもの：喧嘩
記：風紀委員の第４班だが、やさしく、聞き分けが聞く少女。
学園では『戦いの救世主（バトルメシア）』と言われてみんなには風紀委員なのに嫌われていない。むしろ、人気上昇中。
今回の物語での鍵を握っている。

第１４４話　野球部仮入部

時は戻り昨日の放課後。五十嵐が晃と話して場所を移動した後、いきなり栞が晃の下に来た。その顔はまるでチャンスをつかんだようなような表情だ。

「優輝君。お願いがあります」
「は、はあ」

いきなりのことで晃は手間取っている。それをみて栞は早速用件を伝えた。

「私と、五十嵐先輩を、な、なんていうかその、くっつけてほしいの」
「ん？」

今の表現ではまったく晃はわからない顔をした。このくっつけては完全に恋愛のことだと思うが、如何せん晃はそのことに鈍すぎるのだ。

「すみません。意味が」
「だ、だから。私は五十嵐先輩のことが好きなの」
「そ、それで？」

完全にダメである。この男は鈍すぎる。栞は思いっきりため息を吐いた。

「だ、だからね。先輩も私のことを」
「好きにさせる。両思いにさせればいいのですね。そして出来れ

ば恋人関係にしたいと言うことですね」

晃の言葉の瞬間、栞の胸に何かが刺さった音がした。あそこまで意味が分からなかったくせに尾意味さえ分かればその後の察知も早い晃であった。だが、スパッと言われた栞もなんか恥ずかしさが込みあがってくる。

「な、なにか間違っていましたか？」

「いや、そうストレートに言われるとその、恥ずかしい」

「？そういうものですか？」

「鈍感男」

「？？」

だが、これで晃は野球部のスランプ救出と、栞の恋の応援という2つの指名をもってここに来ていたのだ。なにせ、このスランプ脱出もうまくいくのか分からない上にさらには恋愛関係の事になると荷が重過ぎる。

※

晃は休憩をするためにベンチに座った。現状はただいま変わらずぼてぼてである。これでは何日かかるか分からない。

「はい。優輝君」

「あ、ありがとうございます」

栞が晃に飲み物を持ってきた。しかし、こうなるとまず栞のほうを終わらす必要がある。野球部のほうが終わったら晃はここから離れる。つまり、もう栞の恋愛に協力ができなくなるのだ。

「しかし、なんで僕なんですか？ほかにも野球部の人たちにも頼めるのでは」
「やっぱり優輝君のほうがなんというかその、安心できるの。沙羅が認めた人だし」
「そうですか」
そしてしばらく時間が経って斗馬が晃を見つけてこっちに来た。汗をかいているのをみて休憩だと見える。
「お疲れ様です」
「おうよ。しかし、お前一人入れただけでマネージャーが一時的に入るとはな。さすがあの優輝晃だ」
「なんかその言葉に引っかかるのですが」
晃のその言葉を聴いた斗馬はいきなり笑い出した。
「なははは。学園の生徒はほとんどお前と美女はセットみたいなものだと言われているぜ」
「僕はなにもしていないのですが」
「しかし、生徒会で唯一の男でさらに柊に気に入りられているからな。さらには有名特待生と幼馴染だしな。まあ、俺もお世話になったしな」
笑って言っているがどんどん背中からどす黒いオーラが出てくる。晃はそのオーラをすぐに感じ取ってすぐに立ち上がった。この場にいると何されるか分かったものではないと悟ったのであろう。
「僕はそろそろ」
そう言った瞬間、いきなり肩をつかまれる。晃が振り向いた瞬間、

そこにはものすごく怖い顔で笑っている斗馬が。いや、後ろにはほかの野球部のメンバーがいる。斗馬は晃を捕らえた瞬間、逃がさないように肩を組む。

「ちょっと誰か紹介してくれよ。俺たち全然モテネーんだよ」

「知りませんよ。僕はそういうのは興味ありません」

斗馬の言葉を晃はキッパリと言い返す。

「それよりも桜さん、マネージャーを口説けばいいじゃないのですか」

「お、おお。そうか！！」

晃がそう言った瞬間、斗馬はすぐに栞のほうに迫る。晃は安心の息を吐いた。これで栞は斗馬と話せる口実が出来た。まあ、本当の理由は厄介払いだろうが。

「では、ピッチャーの二人は休憩を終えて練習を始めますよ」

「「え～！！」」

「やりますよ」

晃の言葉を思いっきり二人は否定した。だがその瞬間、晃の後ろから斗馬とは違う黒いオーラがでてきた。顔は笑っているが声がすごく怖い

「「は、はい」」

二人はすぐに立ち上がって晃についていった。ちなみに、一人は先輩である。そして晃は悪魔の微笑を覚えた。

※

今日の練習が終わり、早速なので晃と栞は一緒に帰っていた。斗馬は逆方向なので残念ながらいない。

「良かったですね。五十嵐さんと話せて」
「う、うん。ありがとね。口実作ってくれて」
「いいですよ。おかげでこっちは厄介払いが出来ましたので」
「ゆ、優輝君に黒い羽が」

晃はまた黒い微笑をした。さすがに栞は驚く。

「そっちはどう？」
「難しいです」
「ずいぶんあっさりだね」
「真実です」

そういう会話をしていたとき、一つの十字路に着いた。

「じゃあ、私はこっちだから。じゃあね、優輝君」
「ええ。また明日です」

どうやら栞は違う方向らしく、ここで分かれることになった。そういえば沙羅も栞と同じ方向だ。

「また明日も忙しそうですね」

第１４４話　野球部仮入部（後書き）

キャラ紹介
Ｎｏ０１４
夏色花火（なついろはなび）
クラス学年：２年２組
年齢：１６　性別：女　第一人称「私」
身長：１５８　胸ランクＥ　誕生日：１２月４日
髪：茶色のポニーテール
ジョブ：２組学級委員長権真お世話係
好きなもの：卓球、チョコ
嫌いなもの：ゴキブリ
記：２組の学級委員長で伊織と親友。
真とはクラスメイトで同じ卓球部で仲がいい。
ちなみに卓球部の１年は彼女ら２人だけらしい。
やさしくお世話が好きな人で人望は厚い。
晃のことを「あきにいさん」と呼び、まるで自分の兄として接してくる。
ゴキブリは本当に苦手で見ただけで気絶する。
ちなみに２年でも学級委員は続けている。
いまだに晃との正確な出会いは記されてはいない。
あと、胸がでかいことが最近忘れられている。てか、ネタにされていない。（作者も最近思い出した）。

第145話　協力の片思い

あれから2日後。相変わらず野球部に通っていた。成果はどっちもまったくと言うほど出ていない。野球部のほうは少し球が速くなったぐらいでそれ以外は変わらない。栞のほうは本人がギクシャクして今って発展なし。

「いつになったら終わるのでしょうか」

休憩の時間、晃はそうつぶやいた。実際、この野球部通いは結構きついのだ。たださえ晃はいろんな用事がある。学園では生徒会や、ほかの部活の手助け。家では家事全般。ぶっちゃけて体力的にはきついのである。しかも、野球部の人たちがほとんどやる気が無い。これではただ時間を無駄にするだけである。

「優輝君。調子はどう？」

「まったくです。そちらはどうですか？」

栞が晃に近づいて問いかいけてきた。だが逆に問い返された栞はそのまま顔を赤くして首を横に振った。どうやらそちらもまだまだらしい。

「それでね、一つお願いがあるのだけど」

「はい。なんですか？」

「五十嵐先輩に好きな人がいるか聞いてほしいの。女子の私じゃ聞けないから。男子ならそういう話題軽く作れるかなって思って」

「分かりました」

そう言って晃は腰を上げた。問い方はすぐに頭の中で作ったので

すぐに実行できた。斗馬はちょっと遠めに地面に座って休んでいる。晃はその場所に向かった。

「調子はどうですか？」

「おお、優輝か。こっちはダメだ」

「こちらもです」

晃の今の言葉はいろいろな意味が込められている。だが、斗馬はそのことに気づいていない。

「先輩。この前モテないっと言ってましたが、もしかして好きな人でもいるのですか？」

「ぶーーーー！！」

斗馬は晃の質問を聞いて飲みかけのドリンクを口から吐いた。そしてすぐに晃のほうに振り向いた。そのおどおどしている顔を見ればすぐにいるということが晃でも分かった。

「な、なんで分かった」

「推理、好きですから」

「変な推理するなよ」

「もし、教えてくれたら協力しますよ」

「ま、マジでか」

晃のことの一言により斗馬はものすごく瞳を輝かせてきた。どうやら晃の作戦に見事に引っかかったらしい。恋するものはこういう言葉に弱いかもしれない。

「じゃ、教えるぞ。実はな」

「ええ」

「ひ、柊だ」

斗馬の口から晃にとって聞き覚えがある苗字が聞こえた。それも聞き間違いではない。

「ひ、柊静音だ」

「静音さんですか。なんとなく分かります」

確かにあの人は生徒会長だけではなく、あの美貌と性格。だれもが好意を持ってしまうのも当たり前に見える。

「お前、柊と仲いいよな。お願いだこっちから協力をお願いする」

「は、はあ」

晃は思った。なんか更にややこしいことになっていることを。まあ、とりあえずは任務終了。次は栞に報告だけだ。

「僕、ちょっと桜さんに呼ばれているのでもう行きますね」

「あ、ああ。分かった」

そして晃は栞の本に帰ってさっきの会話を説明する。こんな強力なライバルがいるとなるとさすがに栞も落ち込んでしまうだろう。

「そ、それ本当!?」

「え、ええ」

「やった。チャンスありね」

だが逆に喜びだした。理由は簡単だ。いまほとんどの女子は静音は晃に好意を持っているのに気づいているからだ。ちなみに男子は認めようとしてないのでしる人はほとんどいない。まあ、ほとんど

の彼女の行動でわかるのだが。晃はもちろんそのことに気づいていない。

「ですが、静音さんは強敵だと思うのですが」

「もう、優輝君は本当に鈍感ね」

まったく分かっていない晃に栞は微笑んでいう。その光景は清々しいものだ。

※

更に2日後。野球部のピッチャーは何とか調子を戻してきた。ちなみにどうやってこの2日で戻したのかは、恐ろしくってお伝えできません。

栞のほうは何とか話すことはうまくいっているようだ。彼女もすぐに斗馬の顔を見て緊張したり、顔を赤くしないようになった。これはいい調子である。

「どっちも調子がいいですね。特に野球部のほうは今日で終わりですし」

晃と栞は野球部の部室に向かいながら話していた。どうやら今日が晃が野球部の面倒を見る日の最後の日らしい。

「うん。私もね、決めたの」

「何をですが？」

「あした。私は告白します」

「そうですか。がんばってください。応援してます」

栞の言葉を聴いて晃は笑顔でこたえる。

「ずいぶんあっさりね。でも、本当にありがとうね」

「お礼は実ってからにしてください。実際、僕はなにもしてはいませんし」

「ううん。優輝君がいてくれてありがとう。とても助かったわ。私、優輝君がいなかったら何も出来なかったかも」

「そういわれると、うれしいです」

そういわれて晃はうれしくなり、自然に微笑んだ。だがその瞬間、栞の頬が少し薄く赤くなった。そして栞はそのことにすぐに気づいて自分の頬を手で隠す。

「あれ？今私」

「どうかしたのですか？」

「ううん。なんでもない。私先に行っているね」

そう言って栞は先に部室に向かって走り去ってしまった。その光景を一つの人影が見ていたことに2人は気づいていなかった。

第１４５話　協力の片思い（後書き）

キャラ紹介
Ｎｏ０１５
柊静音（ひいらぎしずね）
クラス学年：３年６組
年齢　１８歳　性別：女　第一人称「私」
身長：１６５　胸ランクＤ　誕生日：４月１７日
髪：銀髪で、ふわふわロングでカチューシャをしている、赤目
ジョブ：やさしくお茶目な生徒会長
好きなもの：お茶、かわいいもの
嫌いなもの：友達を悪く言う人、球技
記：東の丘学園生徒会会長
普段から落ち着いておりやさしい性格。だが、時々悪ふざけもする。
生徒会の仕事では集中力をよく切らしがち。
頭はいいが運動は平均。
晃のことを気に入っており、彼のことを「アキ君」と言い、生徒会会長補佐に指名した。
晃の秘密も知っている。
この性格で生徒会長のために学園中の人に信頼されているアイドル的な存在でもある。
晃と一緒にいて恋心が芽生えて今は彼に片思い中である。同時にほかの晃に対して好意を持っている女子に嫉妬を持つような新しい一面が出来た。

第１４６話　片思いの協力の答え

次の日。天気は曇りだが、午後には雨が降るといわれている。晃は傘を【呼び出し（コール）】に記録（ログ）しているので傘を持たずに学園にいる。

そして放課後。晃は別に用は無いのでそのまま帰ろうとした。だがその時だった。

「すみません晃さん。少しお願いがあるのですが」

「なんですか？渚ちゃん」

話しかけてきたのは渚だった。渚はもじもじしてなかなか本題を話さない。だが、数秒後、決心したのか話を続けた。

「あの、もしお暇でしたら、図書館の仕事を手伝ってほしいのですが、最近本が増えて整理が大変で」

「分かりました。手伝います」

渚のお願いに晃はやさしく了解した。その時、栞はさっそく自分がやるべきことを実行しようとしていた。

※

栞は斗馬をこの学園の有名な告白スポット、この学園にたった一本しか生えていない桜の木の下に呼んだ。ここなら告白する栞に、きっと力になってくれるだろうお。

（き、緊張する）

すでに栞の胸の鼓動は爆発寸前。今この状態で斗馬に合ったらどうなってしまうのやら。それを分かっているのか栞は深呼吸をする。だが、胸の高鳴りは消えはしない。それぐらい緊張しているのだ。

「あ、いたいた」

その時、斗馬が栞の目の前に現れた。その瞬間、一瞬だけ栞は心臓が止まったのを感じた。もう胸はどくどくと血が流れている感触もわかる。

「せ、先輩。もう早速言わせてもらいます！！」

栞は目を閉じて大声で叫んだ。これで胸の高鳴りはもちろん収まることはなかったが少しは楽な感覚になった。

「おう」

「せ、先輩。ずっと、ずっと好きでした。付き合ってください」

栞はそう言って右手を差し出した。もう頭の中は真っ白の状態だ。もうやることはやった。後は斗馬の判断のみだ。栞はギュッと目を閉じている。

「いや、違うだろ」

「え！？」

その時、斗馬が言った言葉は栞が思ってもいなかった言葉だった。驚きで栞は顔を上げる。斗馬はものすごく真剣な目をしていた。

「先輩？」

「桜。お前が好きなのは本当に俺なのか？」

「え、えっと」

「俺はそういう風には見えない。なぜなら恋する少女なら、今ここで好きな人の顔を見ると速攻で顔が赤くなるもんだからな、だが、お前は一切顔が赤くない」

その言葉に栞は理解した。確かに彼女は胸とかはものすごくドキドキしていた。だが、顔には熱くなったりしない。

「思い出してみろ、本当にお前が好きな人を、お前の一番そばにいた男子を」

そう言って斗馬はそこから立ち去った。同時に雲から一気に雨が降ってくる。だが、そのことを気づいていないのか栞はその場に立っていた。

「私の一番そばにいた人」

その言葉を復唱した瞬間、一人の少年の顔が浮かび上がった。その少年はどんなにお願いしても優しく答えてくれて、誰にも気を回してくれる、ものすごくやさしい少年だ。

「優輝、晃くん」

その時栞は分かった、自分が本当に好きな引きな人を。あの野球部にいたとき、彼にすべて持っていかれていたのだろう。それは近くにありすぎて気づいてはいなかった。彼はただのクラスメイトでしか思っていなかった。

「そうか。私は」

栞は雨の中、かばんを持って校門に向かって歩き出した。傘など今はない。

「変わりやすい女だな」

だが、これで分かった。私は優輝晃くんのことが。

「好きなんだ」

その言葉を言った瞬間、いきなり雨が彼女の上から降らなくなった。

「女の子が雨にかかるものではありませんよ」

「ゆ、優輝君」

傘を差してくれたのは後ろから来た晃であった。

「な、なんでここに」

「少しお手伝いを。頼まれまして終わったところです」

ちなみに渚は図書委員の集まりなので晃は先に帰ってほしいと逆に頼まれたのだ。ちなみに晃は保険委員にじゃんけんに負けてなってしまった。（半分は男子の殺気に負けて）。

「そうなんだ。ありがとうね」

「その感じだと」

晃は察したのかそれ以上言わなかった。だが、そのことは今の栞にとってどうでもいいことだ。

「いいの。私分かったから」
「そうですか。あなたが良かったならいいです」

晃は微笑む。栞も一緒に微笑んでしまう。

「ねえ、少しいいかな？」
「はい」
「メアド、交換しようよ」
「いいですよ」

そう言って一つの傘中でメアドの交換を始めた。終わったあと、二人はしばらく黙って歩いていた。いや、栞の場合、緊張して話の話題が作れなかったのである。そのまま別れの地点まできてしまう。同時に雨はやみだした。

「雨も止みましたし、僕はこれで」
「ゆ、優輝君！！」
「はい」

帰ろうとした晃を栞は名前を呼んで呼び止める。

「また明日ね。晃くん」
「また明日です、栞」

※

栞は家に帰り、風呂から上がったあと、自分の部屋のベットの布団にもぐりこんだ。その瞬間、思いっきり顔が赤くなる。実際、この状態になるまで何も考えていなかった。

「私、本当に晃くんのこと、好きになっちゃったんだ」

栞はそっと自分の唇に手を当てる。

「晃くん。私も、好きになっちゃったから」

栞は携帯の晃のメアドをみてそうつぶやいた。

第１４６話　片思いの協力の答え（後書き）

キャラ紹介
Ｎｏ０１６
荒井鈴（あらいすず）
クラス学年：３年６組
年齢　１７歳　性別：女　第一人称「私」
身長：１７１　胸ランクＡ　誕生日：６月７日
ジョブ：ツンデレ会副会長
好きなもの：どら焼き
嫌いなもの：でれでれしている男
記：静音の親友で、小学校からいつも一緒にいる。
性格はいつもツンツンしており、晃をキツイ目で見ているが彼のことは認めているらしい。
翔太に好意を持っている。だが、翔太が希に好意を持っていることには気づいていないどころか。翔太と希が両思いなのも気づいていない。
頭よりも運動神経がよく、生徒会の中でゆういつの運動系である。
頭も結構いい。
ちなみに彼女は晃側のヒロインではない。

第147話　メイド、再び

次の日。晃、美紀、結衣は2年1組の教室に入った。相変わらず教室の中はにぎやかだ。そんな中、晃たちの登校に気づいた少女たちが何人かいた。

「お、晃。おはよう！！」
「おはようございます」

晃のそばに来て沙羅は元気よくそう言った。隣では栞も一緒にいる。なんか顔が少し赤くなっているがその顔に誰も気づいてはいなかった。

「なぁ、晃は今日は暇か！？」
「まあ、別に用事はありませんが」

晃が沙羅の質問に答えたとき、いきなり結衣が晃の腕を取った。そして、その目線は沙羅に思いっきり向けていた。

「アキ君は今日は私と一緒にバイトに行くのですよ」
「え、でも連絡が」
「私が昨日伝えるって言ったの。だからね」
「そうですか。まあ、最近行ってませんですしね。沙羅、すみませんが」

晃は少し考えた後、沙羅に申し訳なく伝える。確かに最近行ってないのならいろいろ迷惑をかけてしまうだろう。一回顔を出してきたほうがいいだろう。まあ、晃はもちろん仕事をする気でもあるが。

「じゃあ、わたしも行こうっと」
美紀も楽しそうに言う。
「あ、晃くん。ちょっといいかな」
「ん？なんですか栞」
『晃くん？栞？』
栞が晃に声をかけたとき、回りの女子ズがお互いの呼び名を復唱した。そして同時に殺気がでてくる。
「いつからアキ君は桜さんと仲良くなったのかな？」
「アッキー、野球部にいたときになんかあったのかな？」
「晃さん。少しお話があります」
「あき、ちょっといいかな？」
「ちょっとサンドバックになってもらってもいい？」
「晃さん。そんな」
黒いオーラが教室の一部を包んだ。だが、晃はまったく理由はわからなかった。まあ、命の危機であるのは分かっていたが。
※
晃は久しぶりに喫茶店、【Ｐｏｉｎｔ】へやってきた。後ろには結衣と美紀もいる。あの後、やっとのことで説得できた。しかし、晃はいまだにみんなが怒っていた理由をわかっていなかった。
「あ、ひさしぶりね。晃くん」
「すみません。多く休んでしまって」
「まあね。その分働いてくれたらいいわよ」

由佳は笑って晃の背中を押す。晃は急いで更衣室に行く。

「あ、晃くん。晃くんが来ると聞いて、今君が一番必要な服を用意しといたわよ。しっかり着て、しっかり働いてね」

「はあ」

晃はこの時、嫌な予感しかしなかった。恐る恐ると晃は「晃くん専用制服」と書いてある張り紙があるロッカーを開ける。

「やっぱり」

そうつぶやいてその制服を持って晃は更衣室から出て由佳を招いた。

「由佳さん。これは一体なんですか？」

「いいでしょ。そのメイド服」

由佳がにこやかに言ってくる反面、晃はそのメイド服を持って体を震わせる。

「とにかく晃くんが来るって聞いたから全員メイド服なのに」

「それなのになぜにその看板は僕の顔しかないのはなんでですか？」

そう言ってきた由佳の手には女装した晃の顔の写真が張ってあるこの店のＰＲ用の看板を見せる。その看板を見て晃は速攻でツッコム。

「勝手にやめてください」

「え～！！」
「え～。ではありません」
「でも、晃くんいままでバイト来なかったし」
「うっ」

そういわれると弱くなってしまう。さすがにそのことには反論できない。これでは仕方が無い。晃も降伏したようだ。

「分かりました。今日だけですよ」
「よし、美紀ちゃん宣伝！！」
「イエッサー！！」

晃がそう言ったとき、由佳は速攻でメイド服に着替えた美紀に指示。美紀はそのＰＲ用の看板を持って外にでる。動きと反応が早すぎて晃はツッコムことが出来なかった。いや、もうツッコムのも無駄だろうと分かった。それは自分が降伏したときに分かったことだ。

「……分かりました」

晃はしぶしぶと更衣室に入っていった。

※

（うわぁ）

晃が黒と赤のメイド服を着てフロアに来た瞬間、嫌な言葉が声に出かけた。それもそのはず、なぜか店には男性客が大量にいるのだ。さっき店に来るまではそんなに人数はいなかったはずなのだが。

「あ、アッキー。たくさん人が集まったよ！！」

美紀が水が置かれたお盆を片手に晃のところににこやかにやってきた。もうこれで宣伝が効いてしまったと分かってしまう。

「しかし、ここまでとは」

晃がそうつぶやいたが、今はそんなことを行っている暇は無い。晃は呼ばれてすぐに仕事に入った。ちなみに呼び方は「アキちゃん」だったがそこはツッコムことはしなかった。

※

仕事はなんとか一段落して、少し休憩をしようとして了解を得るために晃は由佳を探していた。

「あ、結衣。由佳さん知りませんか？」

「さあ、まあ多分あそこだと思うけど」

そう言って結衣はある部屋に晃を連れてきた。そしてその部屋のドアを少しだけ開けて除くように中をみた。そしてそこには机の上でパソコンの前にいる由佳の姿があった。

「結衣。由佳さんは一体何を？」

「店の宣伝よ。由佳ねーちゃんは実は腐女子なのよ」

「腐った女ですか？」

「まあ、オタクというものね。でもおかげでこの店のＰＲがうまく出来ているのよ」

「今は僕にとっては嫌な予感しかしませんが」

今の晃にとってなるべくお客は来てほしくないのだ。理由はただ

一つ。それはあまりこの姿を見せたくないのだ。

「で、何をしているのですか？」

「ミニブログらしいわよ。それで店をＰＲしているらしいわよ」

「へ？」

晃はその言葉を聴いて嫌な予感がした。晃もミニブログはある知識としてしっている。だから逆に嫌な予感がするのだ。

「アキ君。どうしたの？」

「嫌な予感がしました」

「あ、ああ。そういうことね」

結衣もどうやら理解してくれたようだ。晃と結衣の考えはただ一つ。それはミニブログを使って晃の。正確には晃の女装のことを流している確率が高いのだ。

「ねえ、アッキー、結衣ちゃん。早く来て！！」

美紀の声が聞こえて晃たちは急いでフロアに向かう。そしてそこにはたくさんの男性客がいた。

「なんか嫌な予感が一気に的中しましたね」

由佳、恐るべし。今はそれしか言えなかった。

第１４７話　メイド、再び（後書き）

キャラ紹介
Ｎｏ０１７
波木ささら《なみきささら》
クラス学年：２年１組
年齢：１６歳　性別：女　第一人称「私」
身長：１７２　胸ランクＤ　誕生日：１２月６日
ジョブ：お嬢様生徒会書紀
好きなもの：本、刺身
嫌いなもの：お化け
記：物静かな性格で、なんだか静音と似ている。
家は大金持ちで生徒会の予算は彼女が出している。
２年になって晴れて書紀になった。
実は背が高いこと気にしている。だが、胸が大きくなったことは素直にうれしいらしい。
晃に対して彼の働きと優しさによって好意を抱いた。今でも彼のことで一生懸命である。
一緒のクラスになり、さらに出番が増えた。実はヤンデレ要素もあるとか、嫉妬強い。

第１４８話　ドッペルゲンガー

ささらは生徒会の仕事で夜遅くなった道を通っていた。道はもう暗くって遠くの人が良く見えない。

「あれ？」

その時、ささらはある人のシルエットをみた。そんなに遠くないので姿だけは見える。少し歩くと次ははっきりと誰かがわかる。

「え。あれって」

そしてささらが見たものは白髪の少年だった。こんな髪の毛をしている少年はささらの記憶で一人だけしかいない。しかも珍しい色なので、その少年以外は見たことがない。

「晃さん」

ささらは問うようにボソッと言った。だが、少年はすぐにその場からたち去った。それも一言もしゃべらずにだ。ささらはしばらくその場に立ち尽くしていた。

※

次の日。晃は教室に入ってきたとき、いきなり隣の席にいるささらが顔を近づけてきた。いきなりのことで晃は驚く。

「む～～～～」

「さ、ささら？どうかしたのですか？」

ささらは晃にも聞かれたのにかかわらず、ずっと晃を見つめた。晃はなんなのかまったくわかっていない。

「ささら！！」

「あ、すみません」

少し声を大きくして呼ぶとささらははっとして顔を遠ざけた。なんか少し様子がおかしい。

「どうかしたのですか？」

「えっと、それはですね」

一瞬隠そうと思ったささらだが、悩みはそのままにしておくのは良くないと思い、単刀直入に聞く。

「晃さん。昨日、私の帰り道に会いましたか？時間は８時ぐらいだと思いますが」

「その時間は皿洗いをしていました。その後にお風呂に入りました。そのまえに６時以降は家から出ていませんね」

晃は思い出しながら言った。確かに家の家事を担当している晃はその時間になると家から出る時間が少なくなる。約束してなければ家事をせっせとこなしているはずだ。

「そうですか。すみません」

「別にいいのですが、なんでそんなことをきいたのですか？まさか僕に似た人物がささらの帰り道に現れたのですか？」

その言葉でささらは言葉を見失う。完全に当たってしまったので

仕方が無い。恋心は鈍いくせにこういうことはすぐに推理していく。なんだか悔しい。

「なんでそういうことは当たるのですいか」

「？ですがおかしいですね。僕が言うのもなんですか、こんな髪の色をしている人は早々いないですよ」

「表情とかは残念ながら暗くって見えませんでした」

「ドッペルゲンガーですかね」

晃はあごに手を置いて考えた。

ドッペルゲンガーとは生きている人間の霊的な生き写しという意味で、その人と同じ姿と容姿をしているのだ。このドッペルゲンガーは　　ドッペルゲンガーの人物は周囲の人間と会話をしない。本人に関係のある場所に出現する。と言われており、前者のほうは本人の見分けと見てもいいのだろう。

「ですが、僕は確かささらの家には行ったことが無いのですよ。ささらの家の場所はどこですか？」

「はい」

晃に言われてささらは携帯で自分の家までの地図を見せる。晃はそれを見て確信した。

「残念ですが、僕はこの道を通ったことはありませんね」

実を言うと晃とささらの通学路は学園の校門から出て左右分かれてしまう。晃はこっちのほうには行く理由が無いので行ったことが無いのだ。そう考えるとドッペルゲンガーの法則が満たなくなってしまう。

「じゃあ、あれは一体」
「僕に似ていた人ですね」
なんか不気味な感じがした晃たちだった。

※

放課後。晃は結衣と共に買い物に来ていた。そしてついでに結衣の従姉の笛の元にやってきた。

「では、これとこれ。もらいますね」
「はいは～い」

用はもちろん薬局でのかいものである。それと、結衣がなにか取りに来たことでもある。

「あ、アキ君買い終わった？」
「ええ。ちょうどです。それで何を取りに来たのですか？」
「ふふ。秘密よ」

そう言って結衣は晃の隣に来る。その光景を笛はほほえましく見ていた。まあ、実際表情はニヤニヤしていたのだが。

「結衣。うまくやれてるんじゃないの？」
「お、従姉ちゃん！！」

笛の言葉に結衣はあせりながら答える。晃は意味がわからず？マークがでてくる。その姿に笛は今の状況がどうなっているのかがわかった。

※

その後、晃たちは家に向かって歩いていた。そのときだった。回りの空気がいきなり冷たくなったように感じた。季節は春。それなのにいきなりこんなに冷えるはずはない。

「さ、寒い」
「何ですかこれは」

結衣は自分の体を丸めて寒さに耐える。晃は周りをキョロキョロと見渡す。周りには人はいない。だが、確かにこっちに向かってきている足音がコツコツと聞こえた。

「白髪の男か。やっと見つけたぞ」
「あなたは一体」

晃の目の前に現れたのは晃と同じ、白髪の男だった。

「少し、面かせよ」

その男から、さらに空気が冷たくなった。

第１４８話　ドッペルゲンガー（後書き）

キャラ紹介
Ｎｏ００１８
福本泰子（ふくもとたいこ）
クラス学年：２年２組
年齢：１６歳　性別：女　第一人称「ボク」
身長：１６８　胸ランクＡ　誕生日：１１月８日
ジョブ：おちゃめな生徒会庶務
好きなもの：面白いこと
嫌いなもの：機械
記：僕っ子少女。
元気な人だが、実は頭はよく、運動神経はそこそこ。
不器用で機械を使い方知らない。
晃のことを「アッキー」と呼ぶ。
実は晃に好意を持っているのだが、自分では気づいてはいない。
ヒロインのはずだが、なかなか出番が増えなくって作者も正直困っている。
まあ、いつかは彼女のエピソードもやりたいと思ってます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1960s/

Freedom/Story

2011年12月18日06時54分発行